

# 東京ラビリンス

Phantom the phantom thief



## 0. 光の魔神

---

「お兄ちゃん、早く！」

「はしゃぎすぎだよ、美咲」

橘 大地（たちばな だいち）は、振り返って手招きする美咲（みさき）に目を細めながら、大きめのスポーツバッグを肩にかけてタラップを進んでいった。微かな潮風を頬に受けると、歩調を緩め、雲ひとつない青空を見上げて微笑む。

「お兄ちゃんってば！」

少しも急ごうとしない大地に、美咲は不服そうに口をとがらせた。タタタ、と軽い足どりでタラップを駆け戻ると、待ちきれないとばかりに手を引いて急かす。そのとき――。

「きゃあっ！」

後ろ向きに歩こうとしてバランスを崩したのか、彼女の体はぐらりと大きく傾いた。漆黒の髪がふわりと舞う。しかし、すんでのところでは大地が抱き止め、自分の胸に引き寄せた。こわごわと顔を上げた彼女の頭に、大地はぽんと手をのせて言う。

「ほら、だからはしゃぎすぎだって」

「う、うん……」

気恥ずかしさからか、美咲は頬をほんのり染めながら、少々きまり悪そうに頷いた。しかし、すぐにニコッと笑顔を見せると、大地の隣に回り込んで手を繋ぎ、今度は二人並んで出航間近のフェリーへと歩き始めた。

美咲が橘の家に引き取られてから、一年が過ぎていた。

初めの頃はよそよそしく遠慮がちで、笑顔を見せることも少なかったが、今ではすっかり橘の家族として馴染んでいる。特に大地にはよく懐いており、まるで年の離れた兄妹のように仲良くなっていた。

今回の船旅は、二人にとって初めての旅行である。

夏休みを利用してのんびりしようと、学生である大地と美咲の二人だけで、二週間ほど小笠原へ行くことにしたのだ。当初は、橘家が所有している軽井沢の別荘を予定していたが、海がいいという美咲の要望もあり、一度行ってみたいと思っていた小笠原に変更したのだった。

「わあ、すごい！ 船なのにホテルみたい！！」

美咲は船室に入るなり感嘆の声を上げた。白いワンピースをひらめかせて中央に駆けていき、小躍りしながらくるりと振り返る。

「絨毯の上でみんなと雑魚寝だって友達が言ってたけど、全然違ってびっくり」

「この船でも2等はそうかな」

大地としては、この特等船室でも不満があった。手前に小さめのテーブルと椅子、奥にベッドが二つ、あとはユニットバスがあるくらいで、さして広くもなければ、内装もごくありきたりなものである。ルームサービスすらないという。美咲はホテルのようだと言ったが、せいぜいがビ

ビジネスホテルのツインルームといったところだろう。しかし、美咲が喜んでくれたことでひとまず安堵し、部屋の隅にスポーツバッグを下ろした。

「ちょっと、お兄ちゃん！ どうして寝ちゃうの?!」

さっそくベッドに潜り込もうとした大地に、美咲は思いきり抗議の声を上げた。シーツを引っ張りながら、ぷくっと膨れ面を見せる。そのあまりにも可愛らしい怒り顔に、大地は思わずくすくすと笑ってしまう。

「美咲も寝ておかないと体力が持たないよ。旅はまだ始まったばかりなのに、こんなところで疲れちゃったらもったいないだろう？」

「うん……でも……」

美咲は一応は素直に頷きつつも、もぞもぞと反論したような様子を見せていた。大地はそのことに気づいていたが、あえて無視して言葉を繋ぐ。

「それに、今晚はお楽しみもあるしね」

「お楽しみって？」

「それはまだ秘密」

美咲は口をとがらせた。

「じゃあ、船内を探検して、それからお昼寝じゃダメ？」

おねだりするようにそう言うと、漆黒の瞳をまっすぐに向けて、ちょこんと首を傾げて見せる。こんな顔をされては降伏せざるをえない。敵わないな、と大地は胸の内で密かに苦笑した。

「わかったよ」

「お兄ちゃん、ありがとう！」

美咲はパッと顔を輝かせると、ベッドに寝そべる大地に飛び込んで抱きついた。幸せな重みを感じながら、大地は彼女と目を見合わせ、絹糸のようななめらかな黒髪を指に絡めて慈しむ。

外では大きく汽笛が鳴り、ゆっくりと船が動き出した。

結局、船内探検に時間を費やしすぎて、昼寝の時間はほとんど取れなかった。

大地は部屋に戻ってから一時間ほど眠ったが、美咲は興奮のためか一睡もできなかったらしい。それでもまだ元気いっぱい、おなかが空いたから何か食べに行こう、と起き抜けの大地に容赦なくせがむ。

これだけはしゃいでいたら、島に着く頃には疲れ切っているかな――。

足どり軽く船内レストランへ向かう美咲の後ろ姿を見ながら、大地は苦笑しつつも優しく目を細めた。

「んー……眠くなってきた……」

予想どおりだった。

遅めの夕食を終えてから部屋に戻ると、美咲は目をトロンとさせ、吸い寄せられるようにベッドに倒れ込もうとする。しかし、大地は背後から抱き止めて、シーツに触れる寸前でそれを阻んだ。

「まだ寝ちゃダメだよ」

「どうして？」

「お楽しみがあるって言ったの忘れた？」

眠くて不機嫌になっている美咲は、口をとがらせて非難するように大地を睨んだ。今の彼女にとって、眠らせてくれない相手は誰であろうと敵である。しかし、大地はそんなことなどお構いなしに、「おいで」と言って彼女の手を引くと、半ば無理やり部屋の外へと連れ出した。

「どうです？ なかなかのものでしょうか、溝端さん」

「これは……妻と息子にも見せてやりたいですな」

扉を開けて外に出たところで、男性二人が夜空を仰ぎ見ながら会話していた。まだそれほど遅い時間でもないためか、甲板には他にもちらほらと人の姿が見える。おそらく、その多くが同じ目的で来ているのだろう。

大地は手すりに両手を掛けた。

夜の大海は空よりも暗くて黒く、まるで深い闇が広がっているかのようだった。じっと見ていると引きずり込まれそうな、そんな恐ろしささえ感じる。しかし、その上空には――。

「見てごらん」

眠い目をこする美咲の頭にぽんと手を置き、大地はもう一方の手で空を指し示した。言われるまま、美咲はその指を追ってぼんやりと顔を上げる。しかし、その表情はみるみるうちに輝いていった。

「わあ……」

彼女の大きな漆黒の瞳には、たくさんの目映い輝きが映っていた。

「すごい、こんなに星があるなんて……」

「本土と違って空気がきれいだし、まわりに光もほとんどないからね」

どこまでも続く紺色の空に、無数の星が散りばめられている。数えることなどとてもできない。それは、まるでおとぎ話に出てくる天の川そのものである。隣に視線を移すと、小さな口を半開きにした美咲が、ただただじっとその星空を見つめていた。

「美咲は覚えてる？ 僕たちが初めて出会った日のことを」

「うん、ここまでじゃないけど、星のきれいな夜だった」

美咲は空に目を向けたまま返事をした。

大地はふっと表情を緩め、美咲を柔らかく懐へ引き入れた。そのまま何も言わず、二人でゆったりと同じ星空を仰ぎ見る。まるで、広大な濃紺色のキャンバスに煌めく星々を、余すことなく目に焼き付けようとするかのよう――。

それから、どれくらいの時間が過ぎただろう。

大地たちのまわりから人影がなくなった。声もしなくなった。耳に届くのは、船のエンジン音と波を掻き分ける音くらいである。この広い世界にたった二人きり、そんなありえない幻想さえ抱きそうになる。

大地は小さく呼吸をしてから口を開いた。

「美咲、僕はね、君を一目見たときから決めていたんだ」

そう静かに語りかける大地の胸に、美咲はふらりと背中からもたれかかった。空を映した漆黒の瞳がそっと閉じられる。彼女の耳に届いているかわからないが、それでも大地は優しく抱きしめ語りかけていく。やがて、話の終わらないうちに、彼女は大地の腕の中で小さく寝息を立て始めた。

「美咲、そろそろ起きない？」

部屋には、カーテンの隙間から目映い光が射し込んでいた。

大地は自分の胸元で眠る少女にそう囁くと、柔らかい頬にそっと指を滑らせた。彼女は「ん……」と小さな声を漏らし、ぼんやりとベッドから体を起こすものの、深くうつむいたまま固まったようにじっとしている。大地は少し不安になり、起き上がって美咲を覗き込んだ。

「もしかして酔った？」

「ううん、平気、眠いだけ」

美咲は小さく頭を横に振り、顔を上げてにっこりと答えた。大地はその笑顔にほっとし、彼女の頭にぽんと手を置くと、ベッドから降りてカーテンを開いた。シャッ、という軽い音とともに、白い光が溢れ込む。美咲はパァッと顔を輝かせると、素足のまま弾むように窓際に駆けつけた。

「すごい、東京じゃないみたい！」

ガラス窓に張り付いて海を眺める美咲の横顔を、大地は目を細めて見つめた。星空を映した瞳もいいが、キラキラと光る海面を映した瞳もきれいだと思う。

美咲はガラスに手をついたまま振り向いた。

「ね、甲板に出よう？」

「あとでね」

「今すぐ行きたい！」

「それは無理だよ。まずは、顔を洗って服を着替えないと」

「じゃあ、お兄ちゃんも急いで！」

美咲は待ちきれない様子でそう言うと、さらさらの黒髪をなびかせてユニットバスへと駆け込んでいった。

「あ、甲板の前に朝食だからね」

「ええっ?!」

服を脱ぎかけた美咲が、素っ頓狂な声を上げて顔を覗かせる。しかし、不満そうな表情を見せただけで、何も言わずユニットバスへ戻り、いっそう大急ぎで着替えの続きを始めた。

大地たちは、船内レストランでトーストとベーコンエッグを注文した。

窓際に席を取り、二人で向かい合って座る。テーブルも椅子も何もかもが安っぽく、レストランというより食堂といった方が相応しく思えるが、それでも清々しい陽光と微かな潮風を感じながらの食事は格別である。ひどく空腹だったこともあり、美咲と喋りながらだったが、大地はあ

っというまに平らげてしまった。

「じゃあお兄ちゃん、外へ行こう？」

大地のプレートが空になったことに気がつくのと、美咲は急かすように促して立ち上がった。気持ちはすっかり外に向かっているようだ。しかし、彼女のプレートには、トーストもベーコンエッグもまだ半分ほど残っていた。大地は腰を上げることなく、穏やかな口調で美咲を窘める。

「ダメだよ、美咲、全部食べないと」

「もういい、早く行きたいんだもん」

美咲はテーブルに両手をついたまま、焦れったそうに言う。

「ちゃんと食べないと成長できないよ」

「そんなに大きくならなくてもいいの」

「身長だけじゃなくて、いろんなところがだよ」

「……お兄ちゃんのエッチ」

美咲は非難するようにじとりと睨み、口をとがらせた。頬はほんのりと桜色に染まっている。その様子から、彼女があらぬ誤解をしていることを悟り、大地は思わず肩を竦めて苦笑する。

「真面目に言ってるんだけどね」

「いいもん……子供のままで……」

美咲は急に声を暗く沈めると、斜め下に視線を落とす。その様子は、拗ねているというよりも、何か深く思いつめているように見えた。大地は理由がわからず当惑したが、それでも彼女を安心させるべく優しく微笑む。

「そんな悲しいこと言わないでよ」

「待ってるんだから——。」

心の中でそう言葉を繋ぐと、うつむいた美咲の頬に手を伸ばした。

「わーっ！ 気持ちいい！！」

美咲が朝食をきっちり食べ終わってから、二人は甲板に出た。

まだ早い時間のためか、ちらほらとしか人がいない。美咲は麦わら帽子のつばを両手で掴み、白いワンピースをひらめかせながら、弾むように軽やかに甲板を駆けていく。

「あんまりはしゃぐとパンツが見えるよ」

「お兄ちゃんのエッチ！」

先ほどと同じ言葉を、今度は屈託なく笑いながら言う。ステップを踏むように振り返ると、腰より少し短い黒髪がさらりと潮風に舞い、白いワンピースが大きく風をはらんだ。

立ち止まった美咲に歩み寄って、大地は口を開く。

「そろそろ島が見えてくる頃かな」

「えっ、どこ？」

「あっちの方だよ」

手すりから身を乗り出した美咲の背後から、大地は大きく手を伸ばし、船の進行方向を指さした。しかし、そこには海と空が広がるばかりで、目を凝らしても島らしきものはどこにも見え

ない。

「お兄ちゃん、見える？」

「うーん、まだみたいだね」

大地はきまりが悪くなって苦笑した。腕時計に目を落として時間を確認すると、確かに少し早かったようである。船は白い波しぶきを上げながら着実に進んでいる。焦る必要は何もない。大地は小さく息をついて、絵に描いたような鮮やかな青空を見上げた。

美咲は手すりに置いた腕に頭をのせると、寂しげにぼつりと言う。

「お兄ちゃんとの旅行、これが最初で最後かな」

「まだ着いてもいないのに何を落ち込んでるの」

「だって……」

何か理由を言いかけて、彼女は口をつぐんだ。帽子のつばに隠れて見えないが、おそらく朝食のときに見せたような、暗く沈んだ表情をしているのだろう。大地は不思議に思って首を傾げた。

「美咲、きのうの夜のこと覚えてる？」

「えっ？一緒に甲板で星を見たこと？」

「そう、そこで僕は美咲に話したよね」

「……何を？」

美咲はきょとんと顔を上げて尋ねる。とぼけているわけではなさそうだ。話の途中で眠ってしまったことは承知していたが、冒頭の少くくは聞いていたと思っていた。聞いてはいたが、忘れてしまったのかもしれない。

「じゃあ、美咲、あらためて聞いてくれる？」

「やめて、今はこの旅行を楽しみたいから……」

美咲は逃げるように視線を外すと、再び手すりに置いた腕に顔を埋めた。

先刻からどうも様子がおかしい。まるで、二人で過ごす時間は、これが最後であるかのような物言いを続けている。思い返してみれば、この数日の間にも何度か似たようなことがあった。

まさか——。

ふと頭をよぎったその考えに、大地は眉をひそめる。

先日、伯母が大地に持ってきた縁談を、父は「すでに婚約者は決まっている」と一蹴したのだ。大地自身もそれに同調している。しかし、婚約者が誰であるかについては、二人とも頑なに口を閉ざしていた。もし、美咲がどこかでこの話を耳に挟んだとしたら——。

大地は美咲の隣に並び、手すりに両手を置いて顔を上げた。

彼方まで澄み渡った青空を仰ぎながら、優しくも力強さを感じさせる口調で言う。

「花は大地に根ざして美しく咲き誇り、大地は美しい花によって潤いと彩りを与えられる」

前置きもなく発せられた詩のような一節に、美咲は怪訝に振り向き、瞬きもせず大地を見つめた。そして、真面目な顔で小首を傾げると、薄紅色の愛らしい唇を開く。

「それって“美咲”と“大地”は離れられないってこと？」

「よくわかったね」

大地は満面の笑みで答えた。

美咲は顔を隠すように深くうつむくと、身を翻しながら、軽く跳ねるように後ろに下がった。泣きそうなのをこらえるような、笑おうとして失敗したような、何ともいえない微妙な表情を浮かべて、後ろで手を組み合わせる。

「ずっと一緒にいてくれるの？」

「ずっと一緒にいるよ」

それでも美咲の表情は晴れなかった。瞳を揺らしてさらに問いかける。

「私を置いていなくなる？」

「美咲をひとりにはしないよ」

「もし私がいなくなったら？」

「あれ？美咲は忘れてるのかな？もう引退したとはいえ、これでも僕は元怪盗だよ」

大地は腰に手を当て、大きく抑揚をつけながらおどけるように言った。

まわりに人はいなかったが、たとえ誰かが聞いていたとしても本気にはしないだろう。年の離れた妹と遊んでいる微笑ましい光景としか映らないはずだ。その荒唐無稽な話が真実だと知っているのは、この船ではただひとり美咲だけである。

「でも、お兄ちゃんがそう思っている……」

そのとき、不意に突風が吹いた。

麦わら帽子が空に攫われ、慌てて美咲はすらりとした手を伸ばす。

瞬間――。

ドン！！

耳をつんざくような轟音とともに、硬いはずの甲板が激しく波打った。

大地の体は弾かれるように宙を舞い、視界は大きくぶれ、天も地もわからなくなった。反射的に鉄の柵のようなものを掴んでぶら下がったが、それも今にも外れそうになっている。体に容赦なくしぶきが叩きつけられた。

「美咲――っ！！」

何ひとつ状況の掴めないまま、どこにいるかわからない彼女の無事確かめるべく、あたりを見まわしながら必死に名前を叫んだ。しかし、返答はなく、姿も見当たらない。聞こえてくるのは船の悲鳴と荒れ狂う波の音だけである。

「うわっ！！」

大地の体が大きく旋回すると、とうとう掴んでいた鉄柵が外れ、遠心力で勢いよく弾き飛ばされた。叩きつけられるように海に落ちる。その痛みであやうく失神しかけたが、何とか意識を保ち、海流のうねりに揉まれながら海面に浮上して顔を出した。

そのとき、少し離れたところに白い布が浮かんでいるのが見えた。

大地はそれが美咲だと確信した。

海水を吸った服が重たく纏わりつき、思ったように体が動かさず、焦る気持ちとは裏腹になか

なか進まない。それでも、何とか彼女のもとまで泳ぎ着くと、背後から小さな体を抱きかかえて起こす。

「美咲っ！」

「ゲホッ」

美咲はむせながら水を吐くと、苦しげに荒い息をしながら振り返り、うつろな目でぼんやりと大地を見た。潤んだ漆黒の瞳は、不安と恐怖に彩られている。それでも、彼女が生きていたことに、辛うじて意識があることに、大地は全身の力が抜けそうなほど安堵した。冷たい海に浮かんだまま、彼女の体をぎゅっと抱きしめる。

しかし安心できる状況ではない。

いつまでも、海の中に浮かんでいるわけにはいかないのだ。どこか陸のあるところまで泳いでいか、通りがかりの船に助けをもらうしかない。けれども、まわりには水平線が広がるばかりで、目印になるものなど何もない。自分たちの乗ってきたあの船以外には――。

おそろおそろ、轟音の鳴りやまないその方に目を向ける。

そこあったのは、海を割り天を貫く巨大な光柱により、おもちゃのようにあっけなく真っ二つに割られた船だった。片方は船首を上に向けて沈みかけ、もう片方は強烈な光によってバラバラに崩されていく。破片や人がゴミのように落ちていくのが見える。穏やかな青空と海の中で、そこだけが異空間のように地獄絵図が映し出されていた。

現実とは思えない光景。けれど、紛れもない現実。

今まで何が起こったのかさえ理解できずにいたが、離れたところから状況を見ても、やはりわからないままだった。常識では処理しきれないことが目の前で起きているのだ。大地の瞳には、光の魔神が雄叫びを上げ、怒りまかせに暴れ狂っているかのように映った。

腕の中の美咲がぶるりと震えた。

その感覚で大地ははっと我にかえる。とりあえず、出来るだけ船から離れなければならない。あの光がいつ自分たちの方に襲い来るかわからないし、そうでなくとも沈没時の渦に巻き込まれる危険もある。大地は凄惨な現場に背を向けると、美咲を抱えて必死に泳ぎ出した。

ドォン――。

縦になっていた船体が爆発し、炎と黒煙を上げながら海面に倒れ込んだ。真っ白な水しぶきとともに大きな波が起こる。それは生き物のようにならぬうちに、大地たちに襲いかかった。

「美咲っ！」

大地は高波に背を向けて、美咲を庇うように頭から抱き込む。しかし、それはほとんど意味をなさないことだった。高波はいとも簡単に二人をまるごと飲み込んでしまう。激しい水流に揉まれて引き裂かれそうになった。それでも、美咲と離ればなれにならないよう、彼女を抱く腕に死にもものぐるいで力を込めた。

1975年7月26日 午前8時すぎ

小笠原沖にて旅客フェリー・おがさわら号 沈没

死者 162名

行方不明者 481名  
生存者 2名——。

## 1. 怪盗ファントム

---

「遥、滯、おまえたちは今日で17歳だな。おめでとう」

「ありがとうございます、おじいさま。このドレスも」

橘 滯（たちばな れい）は、正面に座る祖父に笑顔で応えると、身に付けている薄いベージュのパーティドレスを軽くつまんで見せる。それを見た祖父の剛三（ごうぞう）は、満足げに頷きながら、広い執務机の上で両手を組み合わせた。

「二人ともよく似合っておるぞ」

「こんな服、どこで着ればいいわけ？」

滯の双子の兄である遥（はるか）も、祖父からの誕生日プレゼントを身に付けていた。滯のパーティドレスと対をなすダークスーツである。しかし、滯とは違ってあまり嬉しそうにはしていない。もっとも、遥はいつもこんな調子であり、剛三はまるで気にすることなく答える。

「心配せずとも機会ならいくらでもあるぞ。おまえたちも、そろそろ私の同伴でパーティに連れて行こうかと思っておるのだよ」

パーティといっても、いわゆるホームパーティの類ではない。会社関係やその付き合いで呼ばれるレセプションのことである。詳しいことは滯も知らないが、取り立てて楽しいものでないことは想像がつく。少し気が重くなったものの、それを口には出さずに愛想笑いを浮かべた。しかし、遥の方は無遠慮に言葉を吐き出す。

「興味ないけど。むしろ面倒くさい」

「そう言うな。いい社会勉強になるだろう。特に、おまえは橘の後継者なのだからな」

これという議論がなされたわけではないが、暗黙の了解で、男である遥が橘家の後継者として扱われていた。おそらく古い人間である剛三の一存なのだろう。

だが、それで揉めたことは一度もない。

いささか無愛想ではあるものの、聡明で思慮深く、冷静に物事を見通す力がある——そんな遥を後継者とすることに、異を唱えるものは誰もいなかった。もちろん滯とて例外ではない。遥の方が相応しいということには納得していたし、それ以前に、橘家を継ぐことなどに何の興味も持っていないのだ。押しつけられなくて良かったと喜んでいるくらいである。

「社会勉強、頑張ってね」

「滯は気楽で羨ましいよ」

にこにこしながら発破をかける滯に、遥は溜息まじりで恨み言を口にする。実のところ、彼も後継者など乗り気でないらしいのだが、だからといって反発することはなく、仕方がないと観念しているようである。

「17歳か……」

剛三は肘掛けに両腕を置き、革張りの椅子に体重を預けると、遠くを見やりながら感慨深げに呟いた。そして、後ろに控えていた秘書の楠 悠人（くすのき ゆうと）に振り向いて口もとを上げる。

「とうとうこの日が来たな」

「ええ、準備は万端です」

そんな意味ありげな会話を交わすと、剛三はすぐさま滯たちに向き直った。怖いくらい真剣な眼差しで見据えながら、静かに重々しく切り出す。

「他言無用の大切な話だ。心して聞いてほしい」

16歳の誕生日のときには、似たような前置きのあとで、株式投資を始めろという話をされた。今回も、社会人としての勉強になる何かを始めさせるつもりなのだろう。やっかいなことでなければいいけれど——滯は心の中で願った。

しかし、続く剛三の言葉によって、その願いは儚くも打ち碎かれる。

「今日からおまえたちは怪盗になるのだ！」

「……かいとう？」

滯と遥はきょとんとして顔を見合わせた。いきなりこんな突拍子もないことを言われて、驚かない人間などそうはいないだろう。普段はあまり感情を表に出さない遥でさえも、困惑したような複雑な表情を見せている。

「それって演劇の話？ それとも仮装パーティ？」

「いやいや、仮装などではなく本物の怪盗だよ」

剛三は軽く笑いながら答えた。

「おまえたちは知らんだろうが、我が橘家が代々やってきたことなのだ」

「うそ……」

啞然とした滯の口から小さな言葉がこぼれ落ちた。その反応を愉しむかのように、剛三はニコニコとしながら、執務机で両手を組み合わせて説明を続ける。

「盗むといっても利益を得るためではないぞ。我々がターゲットとするのは、そこに籠められている思いを踏みじられた不遇の絵画のみ。つまりは絵の尊厳を守ることだな」

「もしかして、怪盗ファントム？」

遥は顎に手を添え、ぼつりと言う。

それを聞いた剛三は、満面の笑みを浮かべて、誇らしげに大きく頷いた。

「よくわかったな。さすがは遥」

「何、そのファントムって？」

滯は瞬きをしながら、隣の遥に振り向いて尋ねる。

「もう20年以上前かな。絵画専門の怪盗がいたんだよ。鮮やかな身のこなしで、幻影のように消えたり現れたりすることから、ファントムって名前がつけられたらしいね」

「おまえたちは、その怪盗ファントムの二代目というわけだな」

遥の端的な説明のあとに、剛三は嬉々として言い添えた。

しかし、滯の理解は追いつかない。

「私たちが二代目……？ 初代って誰だったんですか？」

「先ほど言っただろう、橘家が代々やっておるのだと」

「……もしかして、お父さま？」

これまでの話の流れからすると、また剛三の口ぶりからしても、その答え以外には考えられ

ない。それでも滯は半信半疑だった。父親はどちらかといえばインドア派であり、鮮やかな身のこなしで夜を駆け巡る怪盗とは、あまりにもイメージがかけ離れている。想像がつかないのだ。

しかし、剛三は当然のように頷いて話を続ける。

「さよう、ファントムと名付けたのはどこぞのマスコミだったが、大地がえらく気に入ったようで、そのうち自らファントムと名乗って大々的に予告状を出すようになったのだ。私はそこまでするつもりはなかったのだがな」

そのときの状況が目に浮かぶようで、滯は妙に納得してしまい、思わず小さく肩を竦めて苦笑した。確かに父親には調子に乗りやすいところがある。大人になった今でもそうなのだから、若かりし頃であればなおのことだろう。

「美咲とも、怪盗ファントムの活動が縁で出会ったのだぞ」

「そういえば、お母さまの亡くなった父親は画家って……」

「そう、その相沢修平が亡くなったとき、未発表の遺作である娘の肖像画を、悪質な美術ブローカーが騙し取ってな。それをワシらが取り返してやったのだ。おまえたちも知っているだろう、大階段に飾ってあるあの絵だよ」

剛三の言う大階段の絵は、この家の人間ならば誰しも日常的に目にしているものである。描かれているのが美咲の少女時代であることも周知の事実だった。しかし、そのような劇的な逸話があったことは、少なくとも滯はこれまで知らなかった。

「ファントム、つまり大地が、美咲のところへその絵を返しに行ったのが、二人の最初の出会いでな。月下の淡い光に包まれながらベランダに降り立った大地は、驚く美咲に絵を手渡すと、黒のマントを大きく翻し夜空に舞い戻っていったのだ。その後、ファントムを追ってきた刑事が美咲に言った。ヤツはとんでもないものを盗んでいきました、それはあなたの心です！」

剛三はこぶしをグッと握りしめ、前のめりになって熱く語った。しかし滯は、どこかで耳にしたようなその話を聞きながら、醒めた目を向けて胡散臭そうに言う。

「おじいさま、話を作ってません？」

「だいたい合っとるわい」

剛三はぶっきらぼうに答える。

その後ろで、秘書の悠人は声を立てず控えめに笑っていた。そこからは、何もかも知っているかのような、それを楽しんでいるかのような、そんな余裕が感じられる。

「師匠はご存知だったのですか？」

「僕はファントムの影武者だよ」

「えっ?!」

突然なされた衝撃の告白に、滯は素っ頓狂な声を上げた。

だが、言われてみれば、十分に考えられる話である。大地と悠人は同じ年齢で、背格好もよく似ており、そして、何より悠人は様々な武術を修得している。ファントムの影武者にこれほどの適任はいないだろう。

隣で、遥は呆れたように溜息をついた。

「代々ってことは、じいさんもやってたんだね」

「無論だ。もっとも私は怪盗ではなくただの泥棒だったがな。そもそも私が始めたことなのだよ。おまえたちは怪盗ファントムとしては二代目だが、絵画泥棒としては三代目ということになるな」

結局のところ、すべては剛三の独断だったようだ。ほとんど趣味といってもいいかもしれない。強引ではあるものの行動力と決断力がある、というのが世間での評判だが、ありすぎるのも困りものである。

「それくらいじゃ、代々っていうほどでもないと思うけど」

「これから脈々と受け継がれていく予定になっておる。おまえたちが歴史と伝統を作っていくのだよ。どうだ、わくわくするだろう？」

冷やかな遥とは対照的に、剛三は子供のように浮かれていた。

「おまえたちの任期は20歳までの3年。獲物の選定や作戦の立案はこちらで行う。おまえたちは指示に従って作戦を遂行するのが役目だ。良いな？」

「いいわけありません！ おじいさま、窃盗は犯罪です！！」

危うく流されそうになっていた澁は、ハッと身を乗り出して力説する。いくら祖父の命令とはいえ、犯罪に手を染めるわけにはいかない。祖父の間違った考えを改めさせなければならない。

「相変わらず澁は堅いのう」

「いくら不遇の絵画を救い出すためといっても、窃盗が許されるはずはありません。正当な手段で救い出すべきだわ。おじいさまなら、そのくらいのことが出来ないはずは……」

「面白そうじゃん、僕はやるよ」

必死になって説得する澁をよそに、遥はさらりと軽く了承した。

「はっ、遥?!」

「遥ならそう言ってくれると信じておったぞ」

剛三はほくほく顔でそう言いながら、何度も満足げに頷いていた。

澁は慌ててふたりの間に割って入る。

「遥、落ち着いてよく考えて。怪盗なんてやったら犯罪者になっちゃうのよ？ 映画や漫画とは違うのよ？ ヒーローでも正義の味方でもないんだから」

「わかってるよ。警察に通報する？」

その突き放したような物言いに、一瞬、澁はたじろいで小さく息を呑んだ。

「違うの、そういうことじゃなくて」

「澁はいいよ、僕ひとりでやるから」

「遥だけに押しつけて知らん顔なんて、そんなこと出来ないよ……」

消えゆくようにそう言うと、表情を沈ませて目を伏せた。遥が何を考えているかわからず、泣きたいような気持ちになる。だが、ここで諦めるわけにはいかない。

「おじいさま、怪盗なんて馬鹿げたこと、本当にやめませんか？」

「遥ひとりでは何かと危険なのだがのう」

剛三は、澁の言葉に耳を貸すどころか、とぼけた口調でそんなことを言う。そうやって澁の弱点をつくことで、ファントムに引き入れようとしていることは明らかだった。

「二人であれば使える様々なトリックも、一人では不可能だからな」

「怪盗ファントムをやめてしまえば、万事解決するじゃないですか」

その声には露骨に苛立ちが滲んだ。

剛三はわざとらしく大きく溜息をつき、遥に目を向ける。

「すまんな遥、聞き分けのない薄情な妹を持ったと諦めて、大変だろうが一人で頑張ってくれぬか。濡さえ協力してくれば、遥の負担も減るのだがのう。いや、実に残念だ。濡はせめて遥の無事を祈っていてくれないか」

「わ、わかったわよ……私もやる……」

不本意ながら、濡は迫いつめられてしまい、そう答えるしかなくなっていた。せめてもの抵抗とばかりに、じとりと横目を向けて祖父を睨む。しかし、彼は少しも動じることなく、わははと豪快な笑い声を響かせた。

「よし、怪盗ファントム再始動だな！」

剛三は執務机にバンと両手をついて勢いよく立ち上がる。そして、修羅場をかいくぐってきたことを窺わせるような凄みのある顔で、不敵にニッと白い歯を見せた。

剛三の書斎を後にした濡と遥は、並んで長い廊下を歩いていく。濡はまだ気持ちの整理がつかず、浮かない面持ちで考え込んでいたが、遥はふと何かを思い出したようにくすっと笑った。

「濡が昔よく言ってたこと、当たらずとも遠からずだね」

「え？ 何だっけ？」

「私たち雑伎団に売られるよ、って」

小さな子供の頃から強制的に様々な武術や体術を習わされ、しかし何の大会に出ることも許されず、濡はそのことに大きな不信感を抱いていた。そして、子供なりに考えた結論が「雑伎団に売られる」だったのだ。ことあるごとに遥にそう言っていたが、当時は全く取り合ってくれず、いつも軽く聞き流されていた。もっとも、濡の方も、成長するにつれてそんな考えは消えていき、今となってはすっかり忘れていたくらいである。

「別に雑伎団に売られるわけじゃないでしょう？」

「下心があったって意味では似たようなものだよ」

確かに、武術を習わせていた目的が、怪盗ファントムにあることは間違いないだろう。ふたりの師匠はその影武者をやっていた悠人なのだ。最初から二代目育成という計画に基づいて進めてきたと考えるのが自然である。

「怪盗かあ……いろいろ驚きすぎちゃって、まだちっとも現実感がないよ。自分にはまったく縁のない世界だと思っていたのに、おじいさまはともかく、お父さまや師匠までそんなことをしていただなんて」

「じいさんは言い出したら聞かないから、父さんたちも仕方なくやることになったんじゃないかな。さっきの濡みたいだね」

歩みを止めることなく、遥は淡々と語った。その声からはほとんど感情が窺えない。濡は長い黒髪をさらりと揺らして覗き込むと、小さく首を傾げて尋ねる。

「遥はどうだったの？ 嫌じゃなかったの？」

遥はちらりと視線を流し、僅かに口もとを綻ばせた。

「ここだけの話、僕はちょっと怪盗ファントムに憧れてたんだよ。活躍してたのは生まれる前のことだから、もちろんリアルタイムでは知らないけど、昔の新聞や本でそのときのことを読んでね」

めずらしく嬉しそうに語るその姿を見て、滯は乾いた笑いを浮かべて脱力した。聡明な彼が怪盗になることを了承したのは、もしかしたら何か深い考えがあつてのことではないか——と勘ぐっていたのだが、実際は呆れるくらい子供っぽい理由だったのだ。

「でも、怪盗ファントムって名前は間抜けだよな」

遥はそう言いながら、赤絨毯の引かれた大階段を降り始める。

「どうして？ 私はそんなに悪くないと思うけど」

「英語だと Phantom the phantom thief だよ」

「え、そうなの？」

滯は思わず聞き返した。

父や祖父はこのことを知っていたのだろうか。気にはなつたが、下手をするとややこしいことになりかねないので、二人には、特に剛三には黙っておいた方がいいだろうと思う。

「ねえ、遥、おじいさまにはその話……」

「わかってるよ。面倒は御免だからね」

遥も同意見だったのか、当然とばかりに軽く流した。そして、広い踊り場に降り立つと、その中央で足を止め、壁側に向き直って視線を上げる。

「この絵だよな、父さんが取り返した母さんの肖像画」

「うん……」

滯もその隣に並んで立ち、同じく肖像画を見上げて頷いた。

そこには10歳くらいの少女が描かれていた。可愛らしく上品な白のドレスを身に纏い、正面を見据え、破れたテディベアを抱えて椅子に座っている。肌は透き通るように白く、腰まである髪は艶やかな漆黒で、同じく漆黒の瞳には、子供とは思えないほどの鋭く理知的な光が宿っている。

「知ってる？ 少女の無垢な狂気が描かれているって評論があつたこと」

「モデルの子供が実在してるのに、狂気っていうのもひどい話だよな」

肖像画を仰ぎ見たまま、遥は小さく笑いを含んだ声で言う。滯もつられるようにくすつと笑うと、後ろで手を組み、大きく息を吸い込みながら背筋を伸ばした。

「でも、何となくわかるなあ。絵じゃなくて、お母さまの狂気ね」

「どういうこと？」

遥はきょとんと振り向いて尋ねる。

「16になってすぐに結婚して、高校を休学することなく私たち双子を産んで、それから日本最高峰の大学に現役合格。そして今はノーベル賞に一番近い日本人といわれる研究者。何だか凄すぎて狂ってると思えない、なんてね」

最後におどけた口調でそう付け加え、漣は肩を竦めて見せた。

遥もふっと表情を緩めて言う。

「高校の方は学校側の特別な配慮があったんだろうけど、母さんが凄いのは間違いないよね。狂ってるっていうのはさすがに言い過ぎだと思うけど」

不意に、漣のポケットの中で携帯電話が震えた。

パールホワイトのそれを取り出し、背面のディスプレイを確認すると、漣はパッと大きく顔を輝かせた。折り畳まれた本体を急いで開き、通話ボタンを押して耳にあてがう。

「もしもし、誠一？」

『ああ……漣、いま家にいるのか？』

「うん、いるけどどうしたの？」

『今から少しだけ会えないか？』

「いいよ、どこへ行けばいいの？」

『今、漣の家の前まで来てる』

「ホント？じゃあ今から行くね。待ってて」

漣は逸る気持ちを胸にそう声を弾ませると、携帯電話を切った。二つ折りにしてポケットに戻しながら、遥に向き直り、すぐ下の玄関ホールを小さく指さす。

「誠一が来てるから行ってくるね」

「その格好で？」

二人ともまだ祖父のプレゼントを身に付けたままだった。つまり、漣はパーティドレスを着ているのである。しかし、そのことを忘れていたわけではなかった。

「家の前で会うだけだから平気よ。せっかくだから誠一にも見せたいんだもん」

えへへと笑って、その場でくるりと一回転する。レースをあしらったアンシンメトリーの裾が、風をはらんでふわりと華やかに舞った。しかし、そんな上機嫌な漣に、遥は無表情で冷や水を浴びせかける。

「別れた方がいいんじゃない？」

「えっ？」

「刑事なんだよね？」

遥の言いたいことはわかった。怪盗である漣と、刑事である誠一——つまり、敵対する立場の二人が付き合うのは、何かと問題があるということだろう。

「んー……でも、殺人事件の担当みたいだから、怪盗の捜査はしないんじゃないかな」

多少の不安を感じないでもなかったが、漣は心配ないとばかりに努めて明るく答えた。誠一と別れるなど考えられない。それほど軽い気持ちで付き合っているわけではないのだ。

「ね、遥はまだ好きな子いないの？」

「いないよ」

遥の答えは、いつもと変わらない淡泊なものだった。はっきりとは言わないものの、彼がこの手の質問を快く思っていないことはわかっている。それでも、今日の漣は引き下がらなかった。

「じゃあ、富田とかどうかな？」

「……なに言ってんの？」

遥は思いきり訝しげに眉をひそめた。その反応ももつともである。なぜなら、富田は遥と同性の男なのだ。

「だってほら、アイツいつも言ってるじゃない？ 同じ顔なら私より遥の方がいいって」

「そんなこと真に受けてるの滯だけだよ」

人差し指を立てて明るく言う滯に、遥は呆れた目を向けた。しかし、滯はふざけているわけでも、冗談のつもりでもなかった。今度は、慎重に考えながら言葉を繋いでいく。

「別に富田と恋愛しろってわけじゃなくてね……親友とか、自分にとって頼りになる存在がいた方がいいんじゃないかなって。富田とは幼なじみで友達だけど、親友ってほど心を許してないでしょう？ まあ、富田でなくてもいいんだけど、誰かひとりくらいはそういう人がいた方がいいよ」

「余計なお世話。誠一、待たせてるんじゃない？」

「あっ！」

滯は口もとに手を当てて声を上げた。そして、慌ただしくじゃあねと手を振ると、母親譲りのしなやかな黒髪をなびかせながら、一段とぼしで大階段を駆け下りていった。

「誠一！」

滯は屋敷横の細道に回り込むと、弾けんばかりの笑顔を見せながら、煉瓦塀にもたれかかる誠一に駆け寄った。名を呼ばれて振り向いた誠一は、滯の姿を瞳に映すなり、驚いたようにその目を大きく見開く。

「滯、どうしたんだその格好……」

「おじいさまからのプレゼント。どうかな？」

滯はドレスの裾を軽く持ち上げ、踊るようにくるりとまわった。それと同時に、橘家の敷地内からせり出している大きな木が、頭上でさわさわと音を立てた。誠一は目を細めて微笑み、ジャケットの内側に手を入れながら言う。

「よく似合ってるよ。ちょうど良かった」

「えっ？ ちょうど良かったって、何が？」

「滯、お誕生日おめでとう」

懐から出された手には、プレゼント用にラッピングされた細長い箱が握られていた。薄いピンク色を基調とした包装紙に、白のリボンが掛けられている。滯の顔はパァッと輝いた。

「わあ、ありがとう！ 開けてもいい？！」

「もちろん」

誠一は小さく笑ってそう答えた。

滯は胸を高鳴らせながら、出来るだけ丁寧にリボンを外し、包装紙を剥がし、横開きの箱をそっと開いた。そこには、淡いピンク色の上品な輝きがあった。シンプルで控えめな、それでいて上質な存在感を放つペンダントである。

「あ、かわいい！ ピンクダイヤ？」

「よくわかったな」

誠一は感心したように言った。

しかし、滯が言い当てたのは偶然のようなものである。母親が似たようなピンクダイヤのペンダントを持っていたので、そうではないかと思っただけで、特に宝石に詳しいというわけではないのだ。それでも、ピンクダイヤが安いものでないことくらいは知っている。

「無理したんじゃない？」

「そういうことは聞くなよ」

きまり悪そうに苦笑する誠一を見て、滯は肩を竦めてペロッと舌を出した。

「貸して、つけてあげる」

誠一は箱からペンダントを取り出すと、滯の首に手をまわして留め、胸元のピンクダイヤの位置を直した。そのまま置いた手を引くことなく、ペンダントを、それから漆黒の瞳をじっと見つめる。

「よく似合ってる……滯……」

熱のこもった囁きを落とし、ゆっくりと滯に顔を近づけていく。

しかし、滯は立てた人差し指を彼の唇に当て、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「外ではダメって言ったでしょう？」

「そう、だったな」

誠一は傍目にもわかるくらい意気消沈し、ごまかし笑いを浮かべた。その様子が、滯には何かとても可愛らしく感じられた。くすっと笑うと、踵を上げて頬に軽く触れるだけのキスを落とす。それから、ゆっくりと彼の肩に額をつけて寄りかかり、小声でそっと甘えるように尋ねた。

「今度、いつゆっくり会える？」

「近いうちに……必ず」

誠一は力をこめて最後の一言を付け加えた。そして、目を細めてふっと微笑むと、少し冷えてきた滯の肩を、あたたかい手で優しく包み込むように抱いた。

「……………」

少し空気が冷たくなってきた夏の終わり。微かな風が吹き、豊かな緑の葉がさわさわと揺れる。

その緑に姿を隠しながら、遙は大木の枝の上に立っていた。すぐ下で繰り広げられている双子の妹と恋人の一部始終を、無表情でじっと見つめている。妹と同じ漆黒の瞳を細めながら――。

## 2. 不条理な要求

---

「南野誠一サン」

聞き込みを終えて警視庁へ戻ろうとしていた誠一は、背後から名を呼ばれ、隣の岩松警部補とともに振り返った。街中でフルネームを呼ばれるなど、そうそうあることではない。事件の関係者だろうかと思ったが、そこに立っていたのは、ブレザーの制服を正しく着こなし、学校指定のスクールバッグを肩に掛けている、見知った高校生の少年だった。

「遥くん、どうしたんだ？」

誠一は少し目を大きくして尋ねた。彼は、付き合っている恋人の兄であり、何度か挨拶を交わしたことはあるが、個人的に話したことは一度もない。なのに、いきなり何の用だというのだろうか。彼の自宅や学校から離れていることから考えても、偶然ではなく、待ち伏せしていた可能性が高いと思われる。

しかし、遥が答えるより先に、岩松警部補がひょっこりと横から割り込んできた。厳つい大きな体を屈め、愛嬌のある笑顔で人なつこく尋ねる。

「確か、キミは滯ちゃんの弟だったかな」

「兄です」

遥は無表情のまま訂正を入れた。そして、ペコリと頭を下げ続ける。

「その節は妹がお世話になりました」

「いやいや、お世話になったのはこっちの方さ。あそこにいたのが滯ちゃんじゃなかったらと思うとゾツとするよ。俺たちにとっちゃ、いくら感謝してもしきれない恩人だ。おかげでこいつの首も繋がったしな」

岩松警部補は白い歯をこぼしながら、節くれ立った手で誠一の頭を鷲掴みにし、ガシガシと乱暴に撫でまわした。硬めの黒髪が逆立ちボサボサになっていく。誠一は自分の失態を蒸し返された居たたまれなさに、為すがまま、ただぎこちなく苦笑するしかなかった。

それは、今から一年半ほど前のことである。

誠一と岩松警部補は、職務で聞き込みにまわっているときに、別の殺人容疑で指名手配されている男を見つけ、二人だけで彼を追いつめて手錠を掛けた。犯人を見つけられたのは、誠一の記憶力と観察力があったからこそで、このことに関しては大手柄といって差し支えないだろう。

問題はその後だった。

岩松警部補が本部に連絡を入れている間に、あろうことか気の緩んだ隙を突かれ、誠一は犯人に殴り倒された挙げ句に逃げられてしまったのだ。暴走した犯人は、手錠で両手首を繋がれたまま、隠し持っていたナイフを振りかざし、たまたま通りかかった当時中学生の滯に襲いかかる。が、滯は逆にその男を投げ飛ばし、地面にねじ伏せ、鮮やかな手並みで取り押さえたのだった。

それが、滯との最初の出会いである。

彼女のおかげで、一人の怪我人も出さずに事なきを得た。が、岩松警部補の言うように、そこ

にいたのが武術の心得のない人間だったら、最悪の事態になっていたかもしれない。そうなれば、誠一も刑事ではいられなかっただろう。つまり、誠一にとって滯は、恋人であると同時に恩人でもあるのだ。

「それで、遥くん、南野に何か用なのか？」

岩松警部補が覗き込んで尋ねると、遥は誠一を小さく指さしながら言う。

「少し相談したいことがあるので、お借りしてもいいですか？」

「ああ、構わんぞ。だが、遅くならないうちに返してくれよ」

「ちょっと、勝手に決めないでください！」

おおらかに笑って答える先輩に、誠一は抗議の声を上げた。借りるだの返すだの、物扱いされていることも気に入らない。しかし彼は宥めるように、それにしては少し乱暴に、誠一の頭をボンボンとゴムまりのように叩く。

「職務じゃないとか堅いこと言わずに、話くらい聞いてやってもいいだろう。あの橘財閥のご子息なんだぞ？ おまえの首くらいなら軽く飛ばせるかもしれん。粗末に扱ってあとでどうなっても知らんからな」

冗談めかした口調でそう言うと、カラリと笑顔を見せて右手を上げた。

「じゃあな、俺は先に戻ってる」

「自分もすぐに戻ります！」

立ち去っていく広い背中に、誠一は慌てて声を張り上げる。

「ゆっくりしてきていいぞー」

岩松警部補は左手をポケットに突っ込んだまま、振り返ることなく、もういちど右手を上げてひらひらと振った。頼りになるはずの背中は、無情にも誠一を置き去りにして遠ざかっていった。

「会いに来てくれるのは嬉しいけど、できれば非番のときにしてくれるかな」

誠一は密かに溜息をついてから、角が立たないようにやんわりとそう言った。何を考えているのかわからない彼のことは少し苦手であったが、付き合っている彼女の兄だから無下にはできない。しかし、遥はといえば、相変わらず愛想のかけらもない態度を見せている。

「非番の日も連絡先も知らない」

「君の妹に聞けばわかるだろう」

「滯には内緒だから」

誠一はその言葉に引っかかるものを感じた。滯に内緒の話など見当もつかないが、遥の態度からすると、あまり良い内容であるとは思えない。ごくりと唾を呑み込み、緊張しながらも核心を尋ねようとした、そのとき――。

遥はパッと車道に振り向いた。

つられて、誠一も何気なくその視線を辿る。5、6メートル先の道路脇にいたのは、エンジンをかけたままの大型バイクにまたがり、フルフェイスのシールドを上げて、じっとこちらを凝視し

ている長身の男だった。彼の双眸は、誠一ではなく遥を捉えているようである。

「知り合いか？」

「僕は知らない」

観察するような目をその男に向けたまま、遥は答える。

「もしかしたら、誘拐しようとして狙ってるのかも」

「誘拐?!」

あまりにも飛躍した話に驚いて、誠一は素っ頓狂な声で聞き返した。

「もしかしたら、だよ。子供の頃に誘拐されかけたことがあるから、ありえなくはないと思って」

言われてみれば、彼はあの橘財閥の一人息子である。誘拐を企てられてもおかしくない立場といえるだろう。彼を見つめるバイクの男が、堅気とは思えない鋭い眼光をしているのも気になるところだ。

念のため話を聞いた方がいいかもしれないと思い、誠一はその男へと足を踏み出した。それとほぼ同時に、男は素早くシールドを下げて地面を蹴り、四輪車の間を軽快に縫いながら、鼠色のアスファルトを滑るように疾走していく。その姿は、あっというまに見えなくなった。

「行っちゃったね」

遥は他人事のように言った。

これだけで誘拐かどうかの判断はつかないが、男の不審な行動には何らかの意味があるような気がして、誠一は心配になってきた。当の本人に危機感が窺えないのも問題である。

「気をつけるんだぞ」

「わかってる」

遥はそう答えると、漆黒の瞳を細めてふっと微笑んだ。

瞬間、誠一は息を呑む。普段の無表情ではあまり思わないが、微かに綻んだその顔は、滯と重なって見えるほどよく似ていた。顔立ちや表情だけでなく、身長も体格もほとんど変わらないため、なおさらそう感じるのかもしれない。

「……何？」

「え? いや、えっと……」

遥に訝しげに眉をひそめて尋ねられ、誠一は狼狽して口ごもった。まさか本当のことを言うわけにはいかないだろう。彼にはもちろん、滯にも、誰にも、そんな誤解を招きそうなことは知られたくない。

「そうだ、何か話があったんじゃないのか？」

「ああ、うん、滯と別れてもらおうと思って」

一瞬にして、誠一の愛想笑いは凍り付いた。あまりにも軽い口調だったので、何かの冗談ではないかと思ったが、彼は少しも笑っていなかった。それどころか、静かに挑むような目を向けている。

「……随分はつきりと言ってくれるな」

「まわりくどいのは好きじゃないから」

「とりあえず、理由を聞かせてもらおうか」

誠一は出来る限り冷静に尋ねた。本人に内緒で別れさせようとするなど、随分と卑劣な行為であるが、感情的になるのは大人としての態度ではない。彼が間違っただけの行動をとっているのなら、自分が諭さねばならないだろう。そう思っていたのだが――。

「29歳のオトナが、17歳のコドモと付き合っているわけ？」

「うっ……」

言葉を詰まらせた誠一に、遥は冷ややかな顔をして畳み掛ける。

「付き合い始めたのは、16になりたての頃だったよね？」

「あ、ああ……まあ……」

「マズいんじゃないの？」

濡とそっくりの白くきれいな顔立ちで、蔑むような冷たい目を向けられて、誠一の全身から冷や汗が噴き出した。額から頬へと伝い落ちていく。それでも引き下がることなく、強気に視線を返して胸を張った。

「いや、俺たちは真剣に付き合っている。何の問題もないはずだ」

「そう……」

遥は顔色ひとつ変えず無感情に相槌を打つと、突然、ボクシングのレフェリーが勝者にするように、その場で誠一の手首を取って高々と掲げた。

「遥くん、何を……？」

「皆さん、こちらに注目――」

彼がどこか気怠そうに声を張り上げると、まわりに行く多くの人たちが振り向いた。わざわざ足を止めた人もいる。彼が何をしようとしているのか見当もつかず、また、いきなり視線を集めたこの状況に当惑して、誠一は手を掲げられたまま慌てふためいた。

「ちょっ……」

「皆さん、刑事って見たことありますか？ ドラマや映画などではよく見ますが、意外と刑事に会う機会はないですよ。でもなんとこの人、本物の、しかも本庁捜査一課の刑事さんなんです」

興味深そうに目を輝かせる人、つまらなさそうに去っていく人、横目を流して微妙に気にしている人、胡散臭そうに眉をひそめる人――向けられた反応はさまざまだった。誠一はうつむき、耳元を赤らめながら目をつむる。今すぐにでもここから逃げ出したい気分だった。

しかし、遥は容赦なく続ける。

「その優秀な本庁の刑事さんが、なんと、17歳のじょ……」

「わ――っ！！！」

ようやく遥のやろうとしていることを理解した誠一は、それを掻き消すように全力で叫び声を上げた。掴まれた手を振りほどき、大慌てで彼の口をふさぐ。そして、まわりからの不審な目にごまかし笑い浮かべながら、遥を背後から抱え込んで後ずさると、人通りのない細い裏路地へ半ば強引に連れ込んだ。

「問題ないんじゃないかったの？」

膝に両手をついて大きく肩で息をする誠一を、遥は冷ややかに見下ろして言った。やることなすことがいちいち小憎たらしい。誠一は腹立たしく思いながら、大きく溜息をついて体を起こす。

「公務員は何かと風当たりが強いんだよ。だいたい、真剣に付き合っていると行ったところで、この年の差では、そう簡単に信用してもらえないものでもないし……」

「へえ、誠一の実心ってその程度なんだ」

その一瞬、誠一は心底から彼を憎いと思った。外見は滯と瓜二つといっても差し支えないが、内面はまるで違うようで、随分とえげつないことをしてくれる。遣る方ない怒りが胸に渦巻き、奥歯をギリと強く噛みしめた。

「こんなところで立ち話もなんだから、どこか喫茶店でも入らない？」

「……店の中でさっきみたいなことはやめてくれよ。本当に頼むから」

眉をひそめて切実に懇願するものの、遥は何も答えてはくれなかった。ただ、逃がさないとはばかりに誠一の手首を掴み、迷う様子もなくどこかへ向かって歩き出した。

「これ、喫茶店じゃなくて、アイスクリーム屋……」

遥に連れてこられたのは、ショッピングビルの一角にある小さな店だった。カウンターには様々なフレーバーのアイスクリームが並んでいる。どう見てもアイスクリーム屋としか言いようがない。一応、イトインもあるにはあるが、テーブルも椅子も簡素なもので、喫茶店ほど落ち着ける場所ではなさそうに思えた。

「僕はストロベリーパフェ。誠一は？」

「いや、俺はいい……」

もはや何も言い返す気になれず、誠一は右手を挙げて溜息まじりに答えた。

「そう、じゃあ、僕は席を取っておくから」

「……俺が奢るのか？」

さっさと奥のイトインへ向かう遥の背中に、誠一はぽつりと疑問を投げかけた。遥は足を止める。そして、もったいつけるようにゆっくりと振り返ると、氷のような冷たい視線を流して小さな口を開く。

「女子高生」

「わかった、わかったよ」

誠一は顔をしかめながらそう言い、開いた両手を顔の横に挙げて、投げやりに降参のポーズを見せた。

どことなく嬉しそうにパフェを食べる遥の向かいで、誠一はむすっとしながら腕を組んで座っていた。目の前のパフェに夢中なのか、少しもこちらを見ようとしない彼に、じとりとした視線を送って尋ねる。

「美味いか？」

「誠一もひとくち食べてみる？」

遥はようやく顔を上げると、山盛りの生クリームとイチゴがのったスプーンを差し出し、真顔でそんなことを尋ね返してきた。からかっているのか、本気なのか、彼の様子からは判断がつかない。誠一は小さく溜息をついて、無言で首を横に振った。

「さっきから気になっていたんだが……」

そう前置きをして、続ける。

「誠一と呼び捨てにするのはやめてくれないか」

「濡はそう呼んでる」

遥はスプーンを持ったまま、悪びれることなく答えた。

「濡は付き合ってるから特別だ。君とは何度か挨拶した程度で、特に親しいわけでもない。こっちの方が10歳以上も年上なんだから『南野さん』と呼ぶのが常識だろう」

誠一が大人げなく切り返すと、遥はちらりと視線だけを寄こす。

「敬称って、敬ってもない人につけるものじゃないと思うけど」

「そんなことを言っていては、社会に出てからやっていけないぞ」

「その辺は抜かりないからご心配なく。今は、誠一に敬称をつけることにメリットを見いだせないだけ。そういう常識が求められる場なら、誠一のこともちろんと南野さんって呼ぶから」

「あ、そう……」

誠一は腕を組んだまま盛大に溜息をつき、そのままぐったりとうなだれた。彼と話をするだけで疲れて仕方がない。眉間に深く皺を刻みながら、ぶつくさと不満を独りごちる。

「何が楽しくて、アイス屋で男と二人きり……」

「へえ、相手が女だったら楽しいんだ？」

「まわりを見てみる。どう見ても俺たちは浮いているぞ」

狭い店内を見渡してみても、店員以外は若い女性しかいない。スーツと制服の男性二人が向かい合っている姿は、明らかに異質といえるだろう。しかし、遥はまわりを見ようともせず、パフェをすくいながら平然と言う。

「人の目なんて気にすることないんじゃない？ 悪いことしてるわけでもないんだし」

確かにそれは正論である。だが、好奇の視線を向けられれば、誰でも少しくらいは居心地の悪さを感じるものだ。しかしながら、遥の態度は堂々としたもので、見事なくらいに自己矛盾なく一貫していた。

「誠一は女なら誰でもいいんだね。濡に言っておく」

「えっ……」

誠一は絶句した。しかしすぐに首を左右に振ると、大慌てで否定する。

「いやいやいや、そうは言ってないぞ」

「似たようなことは言ってたけど」

思い返してみれば、確かにそう受け取られかねないことを口にしてはいた。だが、それは本意ではない。この店で男と二人きりという状況が恥ずかしかっただけである。慌てて、とっさに苦し紛れの言い訳が口をついた。

「こっ、言葉の綾というやつだ……」

「それ、失言をごまかすって意味？」

「うぐっ……」

遥の追及は容赦なかった。感情的ではなく理性的なのが尚更たちが悪い。的確にダメージを与え、反論の術を奪っていくのである。もはや何を言っても勝てる気がしなかった。

「誠一、次はチョコレートパフェが食べたい」

「……わかった」

誠一は半ば自棄になってそう答えると、テーブルに手をついて立ち上がった。そして、あまり多くはない財布の中身を確認しながら、鉛のような足を引きずってカウンターへ向かった。

「遥クン、君、橘財閥の御曹司なんだから、パフェくらい自分で買えばいいだろう」

買って来た二つ目のパフェを遥の前に置き、誠一は溜息まじりに文句を垂れた。そういう問題ではないとわかってはいたが、どうしても何か言わずにはいられなかった。しかし、遥は眉ひとつ動かさず、空になったグラスを脇に寄せると、新しいパフェのチョコレートアイスを手盛りすくった。

「確かに、家が裕福だっただけは認めるけど、僕たち子供はそんなに甘やかされてないよ。何でも買ってもらえるわけじゃないし、お小遣いだって常識的な金額だし、そういう面では普通の高校生と変わらない」

それは、本当のことなのだろうと誠一は思う。濡と接していてそう感じた。古くからの執事が仕えているとか、何部屋あるのかわからないとか、家の話については想像を超えるものがあるが、彼女自身はいたって普通で、一緒にいても財閥令嬢であることなどほとんど感じさせないのだ。

「だからって脅迫は良くない。立派な犯罪だぞ」

「17歳の子供と付き合うのも犯罪だと思うけど」

「真剣に付き合っていれば犯罪にならないんだよ」

今度は冷静に言い返した。

16歳になれば女の子は結婚できる——それが濡の言い分であり、誠一も一応は納得している。だからこそ濡と付き合っているのだが、本当に問題がないのかは今ひとつ確信が持てずにいた。どちらにしろ、一般的に理解してもらうのが困難だということはわかっている。遥には強硬な態度に出ているが、相手によってはこうもいかないだろう。だから、これまで二人の関係を誰にも漏らしたことはなかった。もっとも、濡の方はそうでもないようだが——。

「誠一ってロリコンなの？」

「なっ……違う違う、断じてそれは違うぞ！」

意表を突かれて、誠一は慌てて否定する。これまで同級生と付き合ったこともあり、年下でなければならぬとか、まして十代以下でなければ受け付けぬとか、そのようなことは決してない。断じてない。たまたま濡が一回りほど年下だっただけのことである。そう、あくまで偶然の結果なのだ。

「じゃあ、年相応の彼女を見つけるべきだよ」

「……君、誰かを好きになったことないの？」

「ないよ」

遥はパフェから目を離さず答えた。それを聞き、誠一は鼻先で笑って腕を組む。

「なるほどな」

「何？」

遥は顔を上げると、訝しむように眉をひそめた。

「君、人のことをロリコンだとか言うけど、本当は自分がシスコンなんじゃないか？ 他の子を誰も好きになれないくらいにな。可愛い妹を取られたのが悔しくて、こんな自分勝手なことを頼みに来たんだろう」

誠一は勝ち誇ったように言う。これで、ようやく遥より優位に立てると思った。だが――。

「浅ましいね」

「あさ……?!」

遥はぞっとするような軽蔑の眼差しを向けていた。

「確かに、滯のことは好きだし、大切に思ってる。でも、それは家族として当たり前のことだよ。それをシスコンだなんておかしくない？ そういう目でしか見られないの？ 浅ましいとしか言いようがないよ」

「……………」

返す言葉がなかった。

そう言われると、先ほどの自分の態度が本当に浅ましく思えてくる。遥の弱点を見つけたくて焦っていた、というのはあるだろう。けれど、あのような鬼の首を取ったような言い方はすべきでなかった。

「誠一ってさ……」

うつむいて考え込んでいると、遥は思いついたようにそう切り出す。

「どんな理由があっても犯罪は許せない？」

「……当然だろう。これでも俺は刑事だぞ」

「ふーん……」

遥は意味ありげにそんな相槌を打つと、再びパフェをすくいながら軽く言う。

「やっぱり滯と別れてよ」

「なんでそうなるんだよ」

誠一はわけがわからず眉をひそめた。犯罪が許せないから滯と別れるなど、もはやただの言いがかりとしか思えない。いや、言いがかりの体さえなしていない。しかし、わかっているのかいのか、遥は強気を崩すことなく続ける。

「詳しい理由は言えないけど、このまま誠一と付き合い続けていたら、滯はいずれ苦しむことになる。滯のために別れてって頼んでるんだよ」

その静かな迫力に圧倒され、誠一はうっすらと額に汗を滲ませた。組んだ腕の中で握りしめた手も、じわりと湿り気を帯びてくる。それでも、とってつけたような言い分に納得できるはずもなく、落ち着いた態度を装いながら反論する。

「俺が別れを切り出したら、滯は苦しむことになると思うが？」

「ずっと付き合っていた方が、結果的には苦しむことになるの」

遥は迷いなくきっぱりと言い切ると、大きな漆黒の瞳で、心の奥まで見透かすようにじっと見つめた。

「とにかく、滯のことを大切に思うなら別れてよ」

誠一は眉根を寄せる。

「遥……いったい、俺の何が気に入らないんだ？」

「誠一のこと好きだよ」

遥は上目遣いでそう言うと、悪戯っぽい妖艶な笑みをその唇にのせた。それは、一瞬、彼が男であることを忘れてしまうくらいのものであった。滯とそっくりなきれいな顔で、滯にはない色気をまとっている——不覚にも動揺してしまった誠一をよそに、遥はすぐに真顔に戻って続ける。

「滯にしてはまともな人を選んだと思ってる。できれば僕も反対なんてしたくなかった。上手く行ってほしいと願ってさえいた。ついこの前まではね。でも、状況が変わってしまったから仕方がないんだよ」

なぜここまで別れさせようとするのだろう——誠一は単純に疑問に思った。もしも今の遥の言葉が本心ならば、彼個人の感情が理由ではないということになる。年の差を問題視しているわけでもなさそうだ。滯と付き合い続ければ彼女が苦しむことになる、というのが本当だとしたら、それは一体どういうことなのだろうか。

「せめて、理由を教えてくれないか」

「理由は言えないって言ったはずだよ」

「そんな都合のいい話があるか！」

誠一はカッとしてテーブルに右手をついた。しかし、前のめりになる気持ちを必死に抑えると、その手をグッと握りしめて膝に下ろした。納得したわけではない。滯と別れるの一点張りで、その真意を話そうとしない彼に、苛立ちと不安は募る一方だった。

「忠告はしたから」

遥は突き放すようにそう言うと、空になったパフェグラスに放り投げるようにスプーンを戻した。カランカラン、と耳障りな音が二人の間に響く。

「ごちそうさま」

感情の窺えない義務的な声が、うつむいた誠一の耳に届いた。

遥は立ち上がって紺色のスクールバッグを肩に掛けると、座ったままの誠一を一瞥して店を出て行った。ただの一度も振り返らない。まるで、用件以外には興味がないと言わんばかりに——

テーブルには、二つの空になったグラスが残されていた。

誠一は眉を寄せてそれを見つめながら、先ほどの遥との会話を心の中で反芻する。肝心なことは避けているものの、彼の言葉は基本的に率直だった。少なくとも嘘を言っているようには思えない。

もしも、本当に自分と付き合うことが、滯を苦しめることになるとしたら――。

誠一はテーブルに肘をついて祈るように両手を組み合わせると、その上に額をのせ、細く息を吐きながらゆっくりと目を閉じた。

### 3. 互いの秘密

---

ピンポン——。

広くはないアパートの部屋に、電子的なチャイムの音が響き渡った。

「はい」

誠一は軽い調子で返事をする、読んでいた新聞を床に置き、はやる気持ちのまま足早に玄関へと向かう。その日は非番だったため、洗いざらしのシャツにジーンズというラフな格好ではあるが、清潔感を損なわないよう、それなりにこざっぱりと身なりは整えてあった。

それというのも、滯が来ることになっていたからである。

平日なので学校を終えてからになるが、ここ、誠一の部屋で一緒に過ごそうと約束していたのだ。もちろん夜までには帰さなければならず、いられるのはせいぜい一時間ほどである。それでも、互いの休日が重なることの少ない二人にとっては、切り捨てることのできない貴重な時間だった。

誠一は鍵を開けて、ドアノブに手を掛ける。他に尋ねて来る人間に心当たりもなく、ちょうど約束の時間だったこともあり、滯が来たのだと疑いもせず扉を押し開いた。が——。そこにいたのは、外見だけはよく似た別人だった。

「……遥？」

予想外のことに混乱して、誠一は目をぱちくりと瞬かせた。あたりを見まわしてみるものの、彼ひとりきりで、滯と一緒に来たわけでもないようだ。訝しげに眉を寄せると、遥はそれに答えるように口を開く。

「会いに来るなら非番のときにしろ、って言ってたから」

「それは、そうだが……どうしてここを知ってるんだ？」

「滯に聞けばわかるって言ったの、誠一だよ」

確かにその通りであるが、職務中に押しかけられると迷惑だと言いたかっただけで、家に来てほしいなどと思っていたわけではない。第一、あれからまだ二日しか経っておらず、来るにしても早すぎだと言わざるをえない。

「それで、何の用だ？ まだ話があるのか？」

「せっかく来たのに上げてくれないの？」

まるで小さな子供が何かをねだるように、遥は大きな瞳でじっと見つめて尋ねた。さっさと話を終わらせて帰ってもらつつもりだったが、やはり一筋縄ではいかないようである。誠一の顔に抑えきれない苛立ちが滲んだ。

「これから滯が来るんだよ」

「だから追い返すつもり？」

口では彼に敵わない。

他の住人の目もある玄関先で、いつまでも不毛な押し問答を続けるわけにもいかないだろう。

「……滯が来るまでだぞ」

誠一は投げやりにそう言うと、溜息をつき、入口を塞いでいた自分の身を退けた。

遥は何の遠慮もなく中へ進むと、スクールバッグを下ろして丸テーブルの前に座る。わかっているのかいないのか、いつも誠一が使っているクッションを、ちゃんとその下に敷いていた。

「僕はコーヒーでも紅茶でもどっちでもいいよ」

「……待っている」

完全に遥のペースである。

誠一は早くもぐったりとして深く溜息を落とした。彼の言いなりになるのは腹立たしいが、彼と言い合うだけの気力はすでにない。仕方なく傍らの流しへ向かい、ヤカンに水を入れてコンロにかけた。

「あらかじめ言っておくが、濡と別れるつもりはないからな」

誠一は棚からマグカップを取り出しながら、低い声でそう切り出した。

遥が今日ここへ来たのは、おそらくその話に決着をつけるためだろう。だから、先手を打って自分の意思を伝えておこうと考えたのだ。濡が苦しむことになると言われて、多少は悩んだが、濡本人に無断で別れを決めるなど出来るはずもない。そもそも、この話自体がハッキリである可能性も捨てきれないのだ。

「ねえ、誠一の趣味ってゲーム？」

「えっ？」

突然、それまでとはまったく別の話題を振られて、誠一はぼかんとし、インスタントコーヒーの瓶を持ったまま振り返った。いつのまにか、遥は自分のすぐそばに立っていた。そして、その手には――。

「うわああああっ！！！」

誠一は絶叫ともいえるくらいの悲鳴を上げると、すさまじい勢いで遥の持っていた箱を取り上げた。今さら手遅れであるが、とっさにそれを背中に隠す。熱湯と氷水を一気に頭からかぶせられたような、目まぐるしく混乱した感覚が誠一を襲った。

「どこから持ってきた？！」

「寝室の机の引き出し」

「勝手に漁るなっ！！」

それは、18歳未満が遊ぶことを禁じられている、いわゆる美少女ゲームと呼ばれるものである。パッケージにも、裏側に小さくではあるが、そういうイラストが掲載されている。当然ながら、これがどういうものであるか、遥にも察しがついたのだろう。

「濡はこのこと知ってるの？」

「……君と違って、彼女は無断で引き出しを開けたりしないからな。いや、別に隠しているわけじゃないが、あえて言うようなことでもないし、まだ17歳だから見せるわけにもいかないし……」

「ふーん」

その相槌は凍えるほど冷たかった。誠一は固唾を呑んで尋ねる。

「濡に、告げ口するのか？」

二人を別れさせたがっている遥である。こんな格好の材料を逃すはずはないだろう。もしかすると、何か弱みを探すために、強引に部屋に上がり込んだのかもしれない。そう考えると、無意識のうちに表情が険しくなっていく。

「俺たちは、そのくらいで壊れるような仲じゃない」

「そう、良かったね」

感情のない遥の言葉が、着実に誠一を追いつめる。これしきのことで愛想を尽かされはしないだろうが——そう信じているが、何かしら負の感情を持たれることは避けようがなく、そのことを思うと多少の恐怖感は禁じ得ない。

「……あの、やっぱり黙っててもらえるかな。パフェ奢るから」

「自信ないんだ？」

遥はそう言うと、冷ややかに蔑むような目を向けた。誠一は返す言葉もなく口を引き結ぶ。自分の不甲斐なさに、彼の卑怯なやり口に、徐々に苦々しさがこみ上げてきた。

ピンポン——。

本日、二回目のチャイムが鳴った。

無言で視線をぶつけ合っていた二人は、その音と同時に、どちらからともなく視線を逸らした。張り詰めていた空気が緩み、誠一もほっとしたように息をつく。

「君はもう帰れよ」

濡が来るまでという条件であり、短かったが、これで遥との時間は終わりである。持っていたゲームの箱を、扉のついた戸棚に押し込むと、彼をその場に残して玄関に向かった。

「いらっしゃい」

今度こそ、訪問者は濡だった。肩口の大きく開いたセーターに、短いプリーツスカートという、やや肌寒そうな格好ではあるが、茶色を基調としたコーディネイトは十分に秋らしく、また、スタイルの良い彼女にはとてもよく似合っていた。

ここに来るとき、濡はいつも私服である。そう言いつけてあるのだ。

さすがに、制服姿の女子高生に出入りされるのは、あまりに世間体が悪いと自覚している。どんな噂を立てられるかわからない。悪くすれば、通報されてしまうかもしれないのだ。私服であれば、はっきりとした年齢がわからない以上、少しくらい若く見えても、むやみに騒ぎ立てられることはないだろう——。

濡との交際に問題はないと主張しておきながら、これだけ気を遣っているという事実、誠一はあらためて胸の内ですら苦笑した。遥には絶対に秘密である。人の弱点をとことん衝いてくる彼に知られたら、どんな行動を起こされるかわかったものではない。

誠一は扉を大きく開けたまま、濡を中へと促した。

「お邪魔しまーす」

彼女ははしゃいだ声でそう言うと、軽い足取りで玄関に入って行く。そして、靴を脱ごうと視線を落としたとき、少し小さめの革靴に気づき、屈んだ姿勢のまま誠一を見上げた。

「誰か来てるの？」

誠一は右手を腰に当て、乾いた笑いを浮かべながら答える。

「君のお兄さんだよ」

「えっ、さっそく？」

滯は大きな漆黒の瞳をぱちくりさせた。その口ぶりからすると、彼女がこの場所を教えたことは間違いないようだ。さすがに少し文句を言いたい気持ちになったが、無邪気な彼女を見ていると何も言えず、誠一はただ胸の内で盛大に溜息をつくしかなかった。

「いらっしゃい、滯もコーヒーでいいよね？」

湯気の立つヤカンを片手に振り返り、遥は真顔でそんなことを言った。まるで主であるかのように振る舞っているが、彼がこの家に来たのは今日が初めてである。しかし、滯はこの状況を疑問にも思う様子もなく、笑顔で頷きながら答えを返していた。

「……君、何やってるの？」

誠一は低い声でそう言い、早く帰れと目で訴えた。それでも、遥はまるで意に介することなく、マグカップに熱湯を注ぎながら平然と答える。

「お湯が沸いたからコーヒー淹れようかと思って。マグカップ、二つしかないみたいだけど、誠一の分はどうすればいいの？」

「いいよ、なくて」

誠一はもう言い返す気にもなれなかった。しかし、滯は嬉しそうに笑顔で腕を絡めてくる。

「じゃあ、私たち一緒に飲むことにするね」

彼女の屈託のない明るさは、いつも誠一の救いとなっていた。疲れたときも、沈んだときも、彼女といるとあたたかい気持ちになれる。それは、付き合い始めの頃からずっと変わらない。誠一はふっと柔らかな笑みを浮かべた。

「あ、そうだ」

滯は思い出したように、肩にかけた鞆から茶色の紙袋を取り出した。

「これ差し入れ、櫻井さんのマフィン」

「ああ、ありがとう」

櫻井さんというのは、橘家の執事である。老人といっても差し支えないくらいの年配の男性で、滯が生まれるずっと前から、もう何十年にもわたって橘家に仕えているそうだ。お菓子作りが得意らしく、滯はときどき彼の手作りを持参していた。

「たくさんあるから、遥も食べてね」

滯はそんなことを言いながら、うきうきと紙袋からマフィンを取り出し始めた。こうなっては遥に帰れとは言い出しづらい。そもそも、彼女が嫌がっていないのならば、無理に帰すわけにもいかないだろう。誠一は肩を落として溜息をついた。

二つのマグカップから、香ばしい湯気が立ち上る。

三人は小さな丸テーブルを均等に囲んで座っていた。クッションは二つしかなかったので、漣と遥に使ってもらい、誠一はフローリングの床にそのまま腰を下ろしている。そのこと自体は構わない。しかし、せつかく漣と過ごせる貴重な時間なのに、いつまでも遥が無遠慮に居座っていることには、どうしても不満を感じずにはいられなかった。

「誠一、もう一つクッションとマグカップを買っておいてよ」

「ああ、そうだな」

誠一は投げやりに気のない答えを返した。まさかこれからも来るつもりなのだろうか、と不安が頭をもたげたが、藪蛇になるかもしれないと思い、あえてそのことは口に出さなかった。

そんな二人を眺めながら、漣は嬉しそうにニコニコと両手で頬杖をついていた。

「良かった、遥と誠一が仲良くなってくれて」

どこが！と全力で突っ込みたかったが、彼女を落胆させるのも気が進まず、その言葉をすんでのところで呑み込んだ。遥も気持ちは同じだったのか、肯定も否定もせず、うつむいたまま黙々とマフィンを楽しんでいた。

「誠一も食べて」

「ああ」

漣はいつもと変わらず明るかった。素直で屈託のない笑顔も、澆刺とした振る舞いも、華やかで凜とした声も、まったく普段どおりで少しもおかしなところはない。だが。

このまま誠一と付き合い続けていたら、漣はいずれ苦しむことになる――。

先日の遥の言葉が、抜けない棘となって、誠一の心に疼きを与えていた。いずれというのはいつなのか、何について苦しむのか、どうして苦しむのか、彼女の様子からは何一つとして見当がつかない。今日、このことを漣に聞いてみようと思っていたが、ただでさえ切り出しにくい話なのに、遥に同席されていてはなおさら困難である。

「どうしたの？ なに考え込んでるの？」

「いや……何か、変わったことはないか？」

「別に、ないけど……？」

漣はマグカップを両手で持ったまま、小首を傾げ、斜め上に視線を向けて考えを巡らせた。そして、独り言のように「そうだ」と小さく声を漏らすと、マグカップをテーブルに下ろして誠一に目を向ける。

「ここに来るときにんだけどね、バイクに乗った男の人が、じいっと私のことを見てたの。それだけんだけど……見とれてたって感じでもなかったし、何だかちょっと気になっちゃって」

えへへと照れ笑いする漣とは対照的に、誠一と遥の表情は途端に険しくなった。

「それ、どんな男だ？」

「えっ？ うん、えっと……」

思いがけず真剣な誠一の問いかけに、漣はいささか面食らったようだが、すぐに記憶を辿りながら言葉を紡いでいく。

「背が高くて、脚も長くて、けっこう鍛えられてそうな体格？ ヘルメットかぶってたから顔は半

分くらいしか見えなかったけど、目はきりっとして、鼻筋はすっと通って、色白で……整ったきれいな顔って印象かな。かなり格好良さそうな感じだったよ」

後半、滯の声は少し弾んでいた。そのことに自分でも気付いたのか、すぐにハッとして、慌ててふるふると顔の前で両手を振った。

「私が好きなのは誠一だけだから！ 外見で好きになったりしないから！！」

誠一は思わず苦笑を浮かべた。あまりフォローになっていない気もするが、ただ正直なだけで、彼女に悪気がないことはわかっている。実際、自分の容姿は十人並みなのだ。彼女が外見を重視するのなら、最初から他の男を選んでいただろう。

「こうなると、冗談抜きで誘拐かもね」

「それどういうこと？」

滯は腕をついて遥の方へ身を乗り出した。誘拐などと物騒な言葉を聞いたせいか、不安そうに眉がひそめられている。しかし、遥は顔色ひとつ変えることなく、落ち着いた声で淡々と答えていく。

「おととい、たぶん滯が見たその男だと思うけど、僕も同じようにじっと見られてたんだよ。僕だけでなく滯もとなると、橘家の何かが目撃ってことなんじゃないかな。だから、僕たちは気をつけないといけないって話」

「あの獲物を見定めるような目の鋭さは、堅気とは思えなかったしな」

誠一がそう言い添えると、滯は少し目を大きくする。

「もしかして、誠一も一緒だったの？」

「まあね、たまたま会ったんだよ」

遥は少しも動揺を見せずにさらりと嘘をついた。さすがに、あのような勝手きわまりない行動を、滯には知られたくないとみえる。誠一はしばらく考えたあと、目を伏せ、小さく息をついてから口を開いた。

「滯と別れろ——」

「えっ？」

「遥はそう言いに来たんだ」

一瞬、遥は刺すように誠一を睨んだが、すぐに無表情に戻り、何も言わずコーヒーを口に運んだ。反論も弁解もしない。それでも滯のことは気にしているようで、ちらちらと視線だけを隣に向けている。

「……………」

滯は、思いつめた顔でうつむいていた。

この反応からすると、何らかの心当たりがあることは間違いなさそうだ。誠一と別れなければ滯が苦しむことになる、という遥の主張は、ただのハッタリではなかったということか——嫌な胸騒ぎに、誠一は思わず目を細める。

「滯……」

「大丈夫、別れないから！」

滯はパッと勢いよく顔を上げて訴えた。しかし、その必死さが、逆に誠一の不安を煽り立てる

。  
「漣、もし何かあるのなら、俺にも話してくれないか？」

「……ごめんなさい、誰にも話せないことなの」

頼りなさげな声からも、伏し目がちな表情からも、彼女の苦悩が滲み出ているようだった。そして、一段と表情を曇らせると、薄紅色の唇を開いて付言する。

「家の、事情だから」

「そうか……」

誠一には、漣の言葉が嘘だとは思えなかった。少なくとも何かを口止めされているのは事実だろう。橘ほどの大きな財閥ともなれば、他言無用の事情があっても不思議ではない。それに加えて、恋愛に干渉するようなことといえば――。

ふと頭をよぎった可能性に、誠一は眉をひそめる。

もしかしたら、彼女に政略結婚まがいの話が出ているのではないだろうか。政略結婚というのは言い過ぎでも、家の事情で結婚相手を決めることは、ありえない話ではないように思う。それならば遥の忠告とも矛盾がない。

もしもそれが本当で、どうやっても逃れられないのだとしたら――。

まわりが見えないほど深く考え込んでいると、漣が隣から腕をまわして抱きついてきた。そのまま誠一の肩口に顔を埋める。胸元に当たる柔らかい感触と、首筋にかかるあたたかい吐息に、誠一の体は自然と熱くなっていく。

「漣、今は……お兄さんの前だぞ」

「僕のことはお構いなく」

遥は茶色の紙袋に手を突っ込みながら言った。どういうつもりかはわからないが、お構いなくなどと言われても、構わないわけにはいかないだろう。横目で困惑ぎみに睨みつけたが、彼はこちらに目を向けることなく、袋から取り出したマフィンを口に運んでいた。

「帰りたくない」

耳元に、ぽつりと落とされた言葉。

彼女がこんな我が儘を口にするのはめずらしい。それだけ参っているのかもしれない。できることなら、誠一もこのまま帰らせたくはなかった。ずっとここにいさせたかった。けれど――。

「あのな、漣」

「わかってる」

誠一の背中にまわされた細腕に、力がこもる。

「帰らないといけないんだよね。私がまだ高校生だから」

漣の声はとても落ち着いていたが、その中には、どこか寂しげな響きもあった。彼女は現実がわからないほど子供ではないが、簡単に割り切れるほど大人でもない。その頼りのない華奢な背中を、誠一は返事の代わりにそっと抱きしめた。

「……ごめんね」

漣は甘えるように顔を埋めたまま、少し笑ったような、それでいて今にも泣き出しそうな声で言う。

「なあ、漣」

「ん？」

漣の頭が少しだけ動いて、黒髪がさらりと流れた。その絹糸のような長い黒髪を梳くように、ゆるりと指を通してながら、誠一は遠くを見つめて目を細める。

「漣が高校を卒業したら、一緒に旅行でも行くか？」

漣は弾かれたようにパッと体を離すと、目を丸くして誠一を見た。

「うん、行きたい！行く！」

「まだ、だいぶ先の話だけどな」

すぐにでも準備を始めそうな漣の勢いに、誠一は苦笑して言い添えた。それでも、彼女はとびきりの笑顔を見せたままはしゃいでいる。

「じゃ、忘れないように約束ね」

そんな可愛らしい言葉を口にするのと、誠一の腿に手をついて身を乗り出し、そっと柔らかな口づけを落とした。誠一の鼓動はドクンと大きく脈打つ。触れ合ったのは一瞬だったが、その不意打ちの甘さに、昂ぶった興奮は鎮まらない。

「あまり身内のそういうトコ、見たくないよね」

不意に届いた溜息まじりの声。

誠一はギクリとして全身をこわばらせる。不覚にも、兄である遥の存在をすっかり忘れてしまっていた。こればかりは全面的に申し訳なく思い、あまりのきまり悪さに身を小さくする。しかし、漣は納得のいかない様子で、唇をとがらせた。

「お構いなくって言ったの、遥だよ？」

「だからって限度ってものがあるの」

遥は呆れたように言い返した。そして、軽く嘆息してから静かに切り出す。

「誠一、ひとつだけ約束してほしいんだけど」

「……何だ？」

彼の真面目な声につられ、誠一も真剣な顔になった。

「家の事情を詮索しないで。今度、漣に訊こうとしたら、問答無用で別れてもらうから。そして、もしそれを知ってしまって、受け入れられないと思ったら、何も言わずに漣の前から姿を消してほしい」

「……わかった。約束する」

遥の要求は今一つ腑に落ちないものだったが、これで自分たちを認めてもらえるのなら、とりあえずは呑むしかないだろうと思った。家の事情に対する不安は募る。しかし、大丈夫という漣の言葉を信じる以外、何ひとつとして今の自分に出来ることはなかった。

漣はテーブルに腕をついて、上機嫌でニコニコと微笑んだ。

「これで問題はなくなったね」

「そうでもないよ」

遥は軽く受け流すと、どこからか取り出した箱をポンと漣に手渡す。

「なに、これ……？」

「ちょっ、まっ、おいっっ！！」

それは、例の美少女ゲームだった。誠一は焦って取り上げようとしたが、滯はひょいと軽くそれをかわした。身のこなしでは滯に敵うはずもない。青ざめる誠一の前で、彼女はそのパッケージにじっくりと真剣に目を落としていた。

「じゃあ、僕はこれで」

「おいっ！ 遙っ！！！」

遙は素知らぬ顔で立ち上がり、スクールバッグを肩に掛けた。手を伸ばして必死に呼びとめる誠一を無視すると、振り返りもせず部屋を後にする。誠一は、手を伸ばして口を開けたまま、時間が止まったかのように硬直していた。冷や汗だけが、一筋、頬から伝い落ちる。

廊下の先で、玄関の扉がガチャンと重く冷たい響きを立てた。

## 4. 二人でひとり

---

「結局、誠一とは別れなかったの？」

「あれくらいで別れるわけないって」

赤絨毯の引かれた大階段を上っていた漣は、遥の質問を笑い飛ばし、軽やかに足を弾ませくると振り返った。黒髪が艶やかに流れ、高窓からの光を受けてきらりと輝く。

「別にあんなことで怒ったりしないもん。まあ少しは驚いたけど……でも、男の人ってそういうものでしょう？ みんなやらしい本とかビデオとか隠し持ってるんだって、綾乃もいつも言うるし」

「それは偏見。みんなってのは言い過ぎだから」

「そっか、隠さず堂々としてる人もいるもんね」

「そうじゃなくて……」

遥は眉を寄せて反論しかけたが、諦めたように言葉を切って溜息をついた。肩からずり落ちそうになったスクールバッグを掛け直し、漣に続いて大階段を上りながら、その歩調に合わせて淡々と畳みかける。

「修羅場になってないんだったら、どうしてあんなに帰るのが遅かったわけ？ ひとこと連絡くらい出来なかったの？ こっちからの電話をなんで無視したの？」

「それは、ちょっとね」

漣はごまかし笑いを浮かべて言葉を濁した。その表情だけで察したのか、それとも興味がなかったのか、遥は呆れたように溜息をつくだけで、それ以上追及しようとはしなかった。上目遣いでちらりと視線を送ると、立ち止まっている漣を追い越しながら忠告する。

「今回は僕にも責任があったからフォローしたけど、もうこれきりだからね」

「うん、ありがと」

漣は明るく笑って答え、先に行く背中を追いかけた。

昨晚、夕食の時間になっても帰らない漣を心配して、執事の櫻井が搜索願いを出そうとしたのを、遥がどうにか引き止めてくれたらしい。それに関しては、申し訳なかったと素直に反省していた。

「ねえ、遥」

「何？」

「もう別れさせようとしなないで？」

目を伏せたままの遥に、漣は小首を傾げてお願いする。

しかし、彼は振り向きもせず、面倒くさそうにズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「困るの？」

「えっ？」

「僕が何か言ったくらいでダメになるなら、その程度の仲ってことじゃない？」

「それは……」

「だったら、遅かれ早かれ別れることになると思うよ」

「そっか……そうだよね……」

滯はそう呟くと、ギュッと両手を握りしめて気合いを入れた。

「私、遥の妨害には負けないんだから！」

「ホント、滯はノーテンキだね」

遥は呆れたように横目を流しながら、溜息まじりに言う。

それでも、滯はニコッと笑い返した。なんだかんだ冷たいことを言いながらも、彼はいつもあたたかく見守ってくれている。それは、小さな頃からずっとそうだったし、これからもずっとそうだと信じていた。

二人は並んで階段を上る。

肖像画の掲げられた踊り場を通り過ぎ、二階へ足を進めると、突き当たりの大きな扉の前で立ち止まった。そこは剛三の書斎である。学校が終わったら来るようにと、彼に言いつけられていたのだ。

コンコン、と遥は強めに扉をノックした。

「入れ」

中から、剛三の迫力ある重低音が聞こえた。二人は扉を押し開けて入る。だが、いつもいるはずの正面の執務机に、彼の姿は見えなかった。

「こっちだ」

声のする方に振り向くと、先日まではなかった打ち合わせスペースらしきものが目に入った。机も椅子も小さな会議室で使用するような簡素なもので、この重厚な書斎には不釣り合いな、いかにも急ごしらえという安っぽい雰囲気漂っている。

その奥の席で、剛三は意気揚々と手招きをしていた。隣には、秘書の悠人が微笑を浮かべて座っている。

しかし、そこにいたのは、彼らだけではなかった。

二人の向かい側には、滯の見知らぬ若い男性が、妙に馴染んだ様子でパイプ椅子に腰掛けていた。会社関係の人間ではないだろう。シャツにジーンズというカジュアルな格好をしており、髪も栗色に染められ、少なくとも本社で勤務するにはありえない姿である。それに、外見からするとかなり若そうで、滯たちとそれほど年齢が違わないように見えた。

「あの……」

「遅かったな。何をやっておったのだ」

意図的ではなかったのだろうが、滯が切り出した言葉を遮るように、剛三はよく通る低音を響かせた。そこには、非難というほどでもないものの、はっきりとした不満の色が滲んでいた。

「学校で勉強だけど」

「今日は8時限まであったんです」

素っ気ない遥の返答に、滯は補足する。

だが、剛三の表情は変わらなかった。自分から訊いたにもかかわらず、興味なさそうに「まあ良い」と受け流し、空席を示しながら二人に座るよう促す。

先に遙が右端に座ったので、滯は中央の席に腰を下ろした。左隣に座っているのは例の見知らぬ男性で、頬杖をつきながら、滯たちを観察するように無遠慮な視線を送っている。滯は少しムツとして、左手で彼を指さしながら剛三に尋ねた。

「この人どなたです？」

「おまえは本当にせっかちな」

剛三は呆れたようにそう言うと、軽く咳払いをしてから続ける。

「それではさっそく紹介するとしよう。怪盗ファントムの一員として、我々を手伝ってくれることになった志賀篤史君だ。彼は大学生ながら経験豊富なハッカーでな、現在、日本で彼の右に出るものはいないと言われておるのだ」

聞き慣れない怪しげな単語に、滯の眉は反射的にしかめられた。

「ハッカーって、コンピュータで悪いことをする犯罪者？」

「それはクラッカー」

間髪入れず、篤史が訂正する。

「ハッカーっていうのはコンピュータやネットワーク技術に精通した人のことで、必ずしも犯罪者ってわけじゃない。まあ、俺の場合、多少ヤバいことをやってきたのも事実だけだな」

「……………」

臆面もなく悪事を告白する彼を、滯は浅ましげに睨んだ。

「おじいさま、こんな犯罪者まがいの人を仲間にしていいんですか？」

「そういうおまえだって、犯罪に足つっこもうとしてんだろ？」

「そっ、それは……」

篤史から思わぬ横やりを入れられ、滯は返す言葉もなく口ごもる。自身が望んでのことではないが、やがて同じ穴の貉となる以上、どんな反論も空疎な言い訳にしかなりえない。

剛三は豪快な笑いを響かせた。

「高度情報化社会の時代、こういう人材は必要不可欠でな。快く迎え入れてやってほしい」

今やセキュリティも書類もほとんどがコンピュータで管理されている。そういう方面に詳しい仲間がいれば、頼りになることは間違いないだろう。そのことはもちろん理解しているが、滯としてはやはり気が進まなかった。彼を信用することも、彼に好感を持つことも出来そうにない。せめてもう少し誠実そうな人なら良かったのに、と思うものの、今さらそんなことは聞き入れられそうもない。

「おじいさまがそう言うのでしたら」

渋々ながら滯が折れると、剛三は満足げに大きく頷く。

「おまえの心配もわからないではないが、彼を仲間にするには悠人も賛成しておる。十分に吟味して出した結論なのだ。腕の方は申し分ないし、人格的にも問題はない。それに、我々と同じファントムの名を持っていたのも何かの縁だろうからな」

「それどういう意味です？」

「彼のハッカー名が『phantom』なのだよ。そのことが、彼に目をつけた理由の一つでもある」

剛三はいつになく上機嫌で声を弾ませていた。まるで無邪気な子供のようなのである。彼にとっ

ては、新しいおもちゃを見つけたようなものなのだろう。漣は溜息を落として篤史に振り向いた。

「災難だったね」

「どうかな」

篤史は口もとに薄く笑みを乗せて言う。どういう意味なのか判然としない。わざわざ問い詰めようとは思わないが、その思わせぶりの物言いが腹立たしく、漣は片眉をしかめて唇をとがらせた。

「まずは、簡単な案件で感覚を掴んでもらおうと思う。いわば実地研修のようなものだな」

剛三は真面目な顔になり、机の上で両手を組み合わせた。

会社の新人教育みたいなことを言っているが、その内容は反社会的な怪盗としての仕事である。もう開き直ったつもりではいたが、現実として自分たちが犯罪者になるかと思うと、漣は否応なしに暗澹とした気持ちになった。

「悠人、写真を」

「はい」

剛三の指示を受けて、悠人は手元のファイルから一枚の写真を取り出した。少し頬のこけた細身の男性と、小学生くらいの女の子が、仲睦まじそうに笑顔を寄せて写っている。二人とも幸せそうに見えるが、背景から察するに病室のようだ。

「誰？ この人たち」

「先日、夭逝した洋画家の高塚修司と娘の春菜だ。この写真は亡くなる少し前のものだろう。妻は春菜を産んだときに亡くなっており、それ以来ずっと二人きりの家族だったそうだ」

「じゃあ、今は娘さん一人ぼっちなんですか？」

漣が心配そうに尋ねると、剛三は重々しく頷いた。

「親戚が引き取るか、施設に預けるか、まだ決まっていならしい。どうやら親戚とは疎遠だったらしく、誰も春菜とは会ったことがなかったそうだ。それに、高塚修司は天才画家といわれているが、寡作だったため、遺産と呼べるものはほとんどない状態でな。それも、皆が春菜を引き取りたがらない理由の一つなのだ」

「そんな……」

短い身の上話を聞いただけでもかかわらず、漣はすっかり春菜に同情していた。彼女の心境を想像すると、自分まで泣きたいような気持ちになってくる。それは、相手に面識があろうとなかろうと関係のないことだ。

「とりあえず本題に入ろう」

剛三は冷静に言葉を継いでいく。

「不治の病で先が短いことを知った高塚修司は、娘への最後のプレゼントとして、文字通り命を削って彼女の肖像画を描き上げたのだ。だが、自称親友で画商の浅沼がそれに目をつけてな。画商というよりブローカーと云った方が近いかもしれんが」

その吐き捨てるような語尾には、やるかたない忌々しさが滲んでいた。

「奴は金のためなら平気で悪辣なことをやる男で、今回も高塚修司が亡くなると、管理のために預かるなどと言いくるめて、その未発表の肖像画を持ち帰ったのだ。後日、春菜が返してくれるように頼んだが、そんなものは知らんと……要は騙して手に入れたということだな」

「ひどい！ 詐欺じゃない！」

滯はカッと頭に血をのぼらせる。正義感の強い滯には、とても冷静でいられる話ではなかった。

その隣で、遙は胡散臭そうな目をしていた。

「そんなのすぐにバレるんじゃないの？」

「そうでもないぞ。春菜が何を言っても証拠はないからな。逆に浅沼なら売買契約書の捏造くらいはやるだろう。おそらく何年か寝かせておいたのち、寡作の天才画家の遺作として大々的に発表し、最大限に価値の上があったところで売り払う寸法に違いない」

「ふーん……」

彼は無感情に相槌を打つと、滯に視線を移して言う。

「なんか似てるね、こないだ聞いた母さんの話と」

「あっ、言われてみれば」

先日聞いた母親の過去と、今日聞いた春菜の話は、細かいところは違うのだろうが、話の骨子はまったく同じといっても過言ではない。偶然とはいえ、ここまで立場や状況が重なることもめずらしいだろう。

「どうだ、力になってやりたいと思うだろう？」

「私、俄然やる気が出てきたわ！ その肖像画を取り返すのね？」

滯は身を乗り出して言う。もはや怪盗としての仕事であることなどすっかり忘れていた。

剛三は大きく頷く。

「そう、おまえたちにはこの肖像画を盗み返してもらおうのだ！」

舞台役者のように声を張りながら、芝居がかった所作で大きく右手を伸ばす。その先では、いつのまにか悠人が肖像画を掲げていた。描かれているのは、どこか気恥ずかしそうに微笑む愛らしい少女で、それが高塚の娘であることは一目でわかった。

「……えっと、どうしてその絵がここにあるんですか？」

「レプリカじゃない？ それと同じ絵を盗めってことだよ」

遙は当然だとばかりに言う。滯も素直に納得しかけた。しかし――。

「いや、これが本物だ」

「……どういうことですか？」

剛三の答えはいたって端的だが、その意味はまるで理解できない。滯は訝しげに眉をひそめて聞き返した。遙も同じく、口には出していないものの、追及するようにじっと祖父を見つめている。

ニヤリ、と剛三の口の端が上がった。

「先日、悠人と篤史がこっそりと浅沼邸から盗んできたのだ。代わりにこちらで用意した贋作を置いてきたから、あやつにはまだ気付かれておらんだろう。この案件についてはひと月以上も前

から準備を進めておってな。何度か正式な客として浅沼邸を訪問しながら、家の構造やセキュリティを密かに調査攻略し、今はもう自由に出入りできるようになっておる」

「そこまで大掛かりなことをする必要はあるの？」

「何ごととも慎重かつ大胆にやるのが、成功の秘訣だ」

半ば呆れたような口調の遙に、剛三は得意げに答えて胸を張る。

しかし、滯はいまだに釈然としなかった。

「もう盗んできたのなら、行く必要ないんじゃないか……」

「馬鹿者っ！！」

ダン、と勢いよく両手で机を叩きつけ、剛三は唾を飛ばしながら一喝した。

「ただ盗むだけではコソ泥でしかないだろう。我々は怪盗なのだぞ。派手に、華麗に、人々の記憶に残るように盗まねば意味がない！ 最高に素晴らしいパフォーマンスを皆に見せつけるのだ！！」

「はあ、そうですか……」

暑苦しく力説する剛三についていけず、しかし無下な態度をとることもできず、滯は当たり障りのない相槌を打った。その気持ちは表情にも滲み出ている。それでも、剛三はまるで意に介する様子もなく、コホンと咳払いして一方的に話を進めていく。

「二代目は美少女怪盗というコンセプトで行こうと思っておる」

そう言うと、悠人のファイルからイラストボードを取り出して皆に見せた。そこには、長い黒髪をなびかせた滯そっくりの少女が、東京の煌めく夜景を背にして、凛々しくビルの屋上に立っているイラストが描かれていた。高校の制服に似たジャケットとスカートだが、中は真紅のシャツと白のネクタイで、全体的にあまり制服っぽさは感じられない。さらに、黒のニーソックスと革靴、純白の手袋、赤のリボンが巻かれた黒のシルクハットというオプションが付き、地味なように見えて意外と目立つ格好になっている。

「どうだ？ なかなか良いだろう。初代以上の話題沸騰は間違いなしだ」

剛三は喜色満面で声を弾ませた。

「えーっと……この格好するのって、その……私？」

「おまえ、今さら何を言っておるのだ」

こわばった顔でおずおずと尋ねた滯に、剛三は呆れたような目で睨みをきかせる。そこには、拒否など決して許さないという、怖いぐらいの気迫が満ちていた。もはや、どう足掻いても回避できそうにない。

二人の会話を聞いていた遙は、つまらなさそうに頬杖をついた。

「じゃあ、僕は裏方ってことだね」

「裏でもあり、表でもある。そのあたりの詳細はこれから説明しよう」

剛三はイラストボードを机の中央に置くと、隣の悠人と目を合わせ、意味ありげに口もとを斜めにした。篤史は左腕を机につきながら、遙に視線を流してニヤニヤと厭らしく笑う。その場に流れる奇妙な空気に、自分に向けられる好奇の眼差しに、遙は困惑した様子で微妙に顔をしかめた。

「へえ、けっこういい家。画商って儲かるのかな」

「誠実でないほど儲かる職業なのかもね」

後部座席で呟いた漣の独り言に反応し、運転席の悠人はにこやかに皮肉を言った。

漣、悠人、篤史の三人は、乗用車で小高い丘の上にある浅沼の家に来ていた。といっても、訪問するわけではなく、ゆっくりと前を通り過ぎるだけである。悠人と篤史はすでに飽きるほど訪れているが、漣はまだ見たことがなかったため、先に軽く下見をすることになったのだ。

外はすっかり暗くなっていたが、家には煌々と灯りがついており、庭もところどころライトアップされている。おかげで、こちらから照らさずに観察することができた。敷地はかなり広いようだ。建物自体はそうでもないが、庭だけならば橘家よりも大きいだろう。しかし、そこには庭園のようなものはなく、ただひたすら芝生が続いているだけである。

「予告状は出したって言ってましたよね？」

「もちろん怪盗ファントムの署名入りでね」

「そのわりには静かじゃないですか」

あたりに人の気配はほとんどない。予告状を出したとなれば、警官や警備員が大挙して出動し、報道陣が押し寄せ、野次馬も集まっているような、騒がしく物々しい状況を予想していたが、現実はずっとの肩透かしである。

篤史は膝に載せたノートパソコンを操作して、システム画面や隠しカメラの映像を次々と映し出した。

「警察はいないけど、一応、警備員は二人呼んでるな。半信半疑ってところなんだろう」

「あれでも何十年も美術に携わってきた人間だから、怪盗ファントムを知らないことはないと思うけど、もうかれこれ20年以上も活動していなかったし、悪戯を疑うのは当然といえば当然だろうね」

ハンドルを切りながら、悠人は冷静に分析する。しかし、篤史は小馬鹿にするように鼻を鳴らすと、頭の後ろで手を組み、背筋を伸ばしてシートにもたれかかった。

「狙われているのが騙し取ったものだから、警察に通報しづらいつてもあったんだろう。そして警備員を雇うには金がかかる。何億もする名画ってわけじゃないし、来るか来ないかわからない怪盗のために、そんなに金はかけられない。あのケチなおっさんなら、そんなところだと思うぜ」

「そのあたりも見越して、これを実地研修に選んだんだよ」

悠人はそう言うと、後部座席にちらりと視線を向けて微笑む。

「派手なデビュー戦はちゃんと用意してあるからね」

「えっ？ いえ、そんなのはいらないです！」

漣は慌てて両手をぶるぶると振った。困るとわかっていて意地悪を言う悠人が恨めしく、ほんのりと頬を染めて口をとがらせる。

「贋作ってことはバレてないみたいだな」

膝上のノートパソコンに目を落とした篤史は、隠しカメラの映像を見てニヤリと笑った。そこ

には浅沼邸の一室が映し出されており、その中央に置かれた大きな透明ケースには、すり替えた肖像画の贋作が鎮座していた。

「なーんにも知らずに大事そうにしてるぜ」

「それでは、予定どおりプランAでいこう」

悠人は事務的な口調で決断を下した。身を乗り出していた滯は、シートに座り直しながら尋ねる。

「よくバレませんでしたね。画商なんでしょう？」

「彼に絵画の良し悪しを見るだけの眼力はないよ。良い値がつく絵を嗅ぎつける才能は持っているみたいだけど。絵は単なる儲けの道具でしかない、という考えだからね」

「つくづくサイテーな人ね。俄然やる気が出てきたわ！」

悠人の話を聞いて、滯は浅沼という人間にいつそう嫌悪感を募らせた。力強くこぶしを握りしめて気合いを入れると、耳に装着したイヤホンマイクを軽く押さえ、別の場所で待機する遙に電波を通して話しかける。

「頑張ろうね、遙！」

『ファーストだよ』

イヤホンから無愛想な返答が聞こえた。

「あ、そっか。コードネームで呼ばなきゃいけないんだっけ。遙はファースト、私がセカンド、ハッカーがサード、師匠が副司令、おじいさまが司令ね。なんかめんどくさいなあ。呼び方なんて、そんな急には変えられないよ」

滯が溜息まじりに不満を漏らすと、隣の篤史が咎めるような目を向ける。

「遊びじゃねえんだぞ。一応スクランブルは掛けてあるが、誰に聞かれるかわからないんだからな。本名で呼び合うなんて、捕まえてくださいって言ってるようなもんだぜ」

「わかってるよ、サードっ！」

すぐ隣にいるにもかかわらず、わざわざ嫌みたらしくイヤホンマイクに向かって言った。それでも腹立たしさはおさまらず、顔をしかめたまま、腕を組んでぶつくさと独りごちる。

「せめて、もう少しカッコいいのなら良かったのに」

「剛三さんの一存だから仕方ないよ」

悠人は軽く笑って受け流しながら、標的の家からほど近い駐車場に入った。その隅に車を停めてエンジンを切る。いくつかある残りの駐車スペースは空のようだ。一通りあたりを見まわして確認すると、イヤホンマイクを通して剛三に報告する。

「ポイントBに到着しました。問題はありません」

『よし、さっそく作戦開始だ。総員配置につけ！！』

「了解」

暑苦しいくらいテンションの高い剛三とは対照的に、車の三人はそろって淡泊な声で返事をした。悠人と篤史はどうだかわからないが、滯が呆れていることは、そのわかりやすい表情からも明らかだった。

滯は、屋敷の裏側に張り付いて待機していた。

外にはひとりも警備員が出ておらず、監視カメラも門と玄関だけのため、敷地内に侵入するのは容易だった。

すでに衣装替えは済んでいる。ほぼコンセプトイラストどおりだが、シルクハットだけは身に付けていない。逆に追加されたのは、顔全体を覆う白い仮面である。薄気味悪くて滯は気に入らなかったが、素顔を晒すわけにはいかず、文句を言いながらも受け入れるしかなかった。

『家の構造は頭に入ってるか？』

「もちろん」

『作戦の手順は？』

「大丈夫よ」

滯はイヤホンマイク越しに、篤史と短い会話を交わす。家の構造も作業の手順も、今日の打ち合わせで聞いたばかりだが、その場ですぐさま頭に叩き込んだ。遥ほどではないが、滯も記憶力はいい。この程度のことならば難なく覚えられるのだ。

『一応こちらで指示を出すけど、現場では想定外のことが起こる。そういうときは、自分の判断で臨機応変に対応しろ。捕まらないことが最優先だ』

「できるかなあ」

『今さらなに言ってんだよ。自信を持ってやれよ』

弱音を吐露した滯を、篤史はぶっきらぼうに叱咤する。滯は表情を引き締めてこくりと頷いた。

『そろそろ予告の時間だ。セカンド、ベランダの柵の上に立て』

そのベランダは二階にあるが、滯にとっては何の問題もない。少し下がって助走をつけると、凹凸を利用しながら外壁を駆け上がり、音を立てないようにベランダへと飛び移る。そして、その柵の上にすくっと立ち、背筋を伸ばして右手を腰に当てた。

「オッケーよ」

滯が声をひそめて報告すると、篤史は40からカウントダウンを始めた。滯はそのポーズを維持したままで、彼の声を聞きながらじっと待つ。カウントが10を切ったあたりから、次第に鼓動が速くなってきた。

『5、4、3、2、1、0』

その瞬間、敷地内の灯りがいっせいに落ちた。部屋の中から、浅沼と思われる男の動揺した叫び声が聞こえる。警備員にもヒステリックに怒鳴り散らしているようだ。

『ライトアップ』

篤史の冷静な声と同時に、滯は背後から強烈な光で照らされた。光源を直接見ているわけでもないのに、眩しくてまともに目を開けていられないほどである。

『いいぞ、セカンド、いいシルエットだ』

部屋の中に設置してある隠しカメラの映像で、カーテンに映るシルエットを見ているのだろう。先ほどまでとは違い、篤史の声は少し熱を帯びていた。

当然ながら、部屋の中の浅沼もシルエットには気がついていて、あたふたとその窓に駆け寄り

、乱暴にカーテンを開け放つ。そして柵に立つ濡の姿を視認すると、ギョロ目をいっそう大きく見開いて、半開きの口をカクカクと震わせた。

「お……女……?!」

驚愕と困惑の入り交じった表情で、浅沼はよろめきながら数歩後ずさった。警備員たちも後ろで呆然と立ちつくしている。

『セキュリティは切った。上の窓を開けろ』

浅沼が窓を開けた場合はそこから入ることになっていたが、いまだその気配がないため、準備してあった別手段を取るよう篤史が指示を送ってきた。

ちらりと右側に目を向けると、キラリと小さく輝く釣り糸が、柱に貼り付けられているのが見えた。濡はそれをさっと掴み、大きく振りかぶって引き下ろす。すると、仕掛けてあったからくりが動き、上部の窓がすうっと静かに開いた。おそらく浅沼たちからは、ファントムが手を振り下ろしただけで、触れることなく窓が開いていくように見えたのだろう。だらしなく口を開けてポカンとしている。

『飛び移れるか?』

篤史の声は少し心配そうだった。

その開いた窓はかなり高い位置にある。ガラスを割らずに飛び乗るのは至難の業だ。しかし、打ち合わせのときに、濡ならできると悠人は断言してくれた。師匠に信じられているのなら、難しかろうとやるしかない。

軽く柵を蹴ってベランダに降りると、その流れで助走をつけ、最適な位置を見極めて強く踏み切る。

ダンッ——。

長い漆黒の髪をなびかせて、濡の体は宙に舞った。

窓枠に掛けた両手にグッと力をこめ、体を引き寄せそこに飛び乗り、勢いを止めることなく再び大きく跳躍する。そして、浅沼と二人の警備員の頭上を越えると、くるりと宙返りをし、部屋の中央付近に軽やかに着地した。

すぐ隣に目的のものがあつた。

それは四角い透明ケースの中にあり、開けるためには電子錠を解除しなければならない。

『0141だ、急げ』

篤史が早口で指示を出した。言われなくても覚えていたのに、と濡は少しムツとしながら、素早く四桁の数字を入力して解除ボタンを押す。ピピッと電子音が鳴った。間髪入れずケースを跳ね上げると、中に鎮座していた肖像画を抱えて走り出した。

一連の大胆で鮮やかな手口に、浅沼も警備員たちもただ呆然と見入っていた。

「なっ、何をやっ取るかあっ！取り返せっ！！」

我にかえった浅沼は、顔を真っ赤にして二人の警備員に怒鳴り散らす。それで、彼らもようやく自分の仕事を思い出し、部屋を飛び出したファントムを追って駆け出していった。

『なかなか落ちていて良かったぜ』

「まだ終わったわけじゃないでしょっ」

漣は廊下を全力疾走しながら篤史に言い返す。今はまだ作戦続行中であり、喜ぶのは早いし、何よりそんな状況ではない。ちょっとした不手際が命取りになりかねないこの作戦を成功させるには、雑念は捨て去り、自分のすべきことに集中しなければならなかった。

やがて奥の突き当たりに行き着いた。振り返ると、二人の警備員が息を切らせて走ってくるのが見える。

「追いつめたぞ！！」

警備員の一人がそう言うと、もう一人とともに漣に飛びかかってきた。

漣は抱えていた肖像画をその場に投げ捨てると、身軽に一步下がり、つんのめった警備員の背中を踏み台にして上方に跳び上がった。そして、あらかじめ取り付けてあった天井の小さな手すりを掴むと、足を振り上げて点検口を蹴り飛ばし、そのまま足から天井裏に飛び込んでくるりと着地する。

警備員たちは啞然としていたが、ハッと我にかえり、傍らに置き去りにされていた肖像画を拾い上げた。その無事を確認すると、大きく安堵の息をつく。そして、重そうな体を揺らして追いかけてくる浅沼に、その肖像画を頭上に掲げて嬉しそうに報告する。

「取り返しました！」

「汚い手で触るな！」

その瞬間、ズサッという鈍い音とともに、肖像画に深々とナイフが突き刺さった。天井裏から漣が放ったものである。ナイフにはメッセージカードも刺してあった。

浅沼は声にならない悲鳴を上げた。

青ざめて凍り付く警備員を突き飛ばし、肖像画からナイフを抜いて黒いカードに目を落とす。

——本物はいただきました 怪盗ファントム

「おのれ、いつのまにっ……！」

浅沼は奥歯が削れそうなほどにギリギリと歯がみした。そのナイフで偽物をズタズタに切り裂くと、二人の警備員を睨みつけて濁声で叫ぶ。

「おまえら何をやっとる?! 追え!!」

「は、はいっ! 梯子は……」

「ファントムみたいに跳び上がれ!!」

「出来るならとっくにやっています！」

浅沼は頭をぐしゃぐしゃに搔きながら梯子を探しに走り、その間に警備員たちは肩車をして、一人だけでも天井裏に這い上がろうと奮闘していた。

漣は身を屈めながら、音を立てないように天井裏を進んでいく。まわりの空気は少し湿っていてカビ臭い。だが、思ったより埃っぽさはなく、普通に呼吸をしても咳き込むようなことはなかった。

『一応、軽く掃除しておいたからな。感謝しろよ』

「至れり尽くせりね」

他家の天井裏をこそこそ掃除する篤史たちを想像し、滯は肩を竦めて苦笑する。

『目的の場所はわかりそうか？』

「目印、ちゃんと見えてるよ」

天井裏はほとんど暗闇とっていい状態だったが、所々に蓄光テープが貼ってあり、滯の進むべき道をわかりやすく示してくれていた。そのテープを回収しながら進んでいくと、やがて、隅に隠すように置かれたスクールバッグを見つける。

「例の鞆、あったわ」

『よし、警備員のやつらは振り切ったか？』

「うん、やっと天井裏に登ったところかな」

肩越しに背後を確認してみるが、まだ姿は見えず、音も遠くに聞こえるだけである。目印はすべて回収済みなので、どこに怪盗ファントムがいるのか、この広い天井裏で見つけるのは困難だろう。

「じゃあ、そこから下に降りろ」

滯は足元の点検口を開き、先ほど見つけたスクールバッグを抱えて飛び降りた。そこは来客用のお手洗である。大きな屋敷に見合うだけの広さがあり、内装も立派で、当然のように隅々まできちんと清掃されていた。

「降りたよ」

『あとは打ち合わせどおりいけるな。おまえはそこで着替えて、見つからないようこっそり外に出る。そしてA3番から戻ってこい。仮面は敷地を出るときに外すこと。いいな？』

「うん……でも……」

『何か問題でもあるのか？』

歯切れの悪い返事を聞いて、篤史は怪訝に問いかけた。滯はぎゅっと鞆を抱えてあたりを見まわしたあと、少し言いにくそうに切り出す。

「もしかして、ここに隠しカメラついてたりしない？」

『はあ？』

裏返った素っ頓狂な声がイヤホンから聞こえた。

『アホな心配してないでさっさと着替えろ！』

「そうやって誤魔化すところが怪しいっ！！」

『おまえ、自意識過剰もいい加減にしろよ！』

『セカンド、そこにカメラはついていない。僕が保証する』

これまで黙っていた悠人が、ヒートアップした二人の言い合いに口を挟んだ。いつものように冷静な声である。その言葉が本当だという証拠は何もないが、彼がこんなくだらないことで嘘をつくとは考えられない。

「わかりました、師匠……じゃなくて、副司令」

滯は落ち着きを取り戻してそう答えると、個室のひとつに入って鍵をかけた。しつこくもあたりをきょろきょろと確認してから、白い仮面を取り、素早く怪盗ファントムの衣装を脱いで着替

え始めた。

『さ、出番だファースト』

『了解』

今度は遥の方に指示が出される。もう覚悟は決めているのだろうが、面白くはないらしく、あからさまに気乗りのしない声で返事をしている。怪盗ファントムをやると言ったことを後悔しているのかもしれない。

バリバリバリバリ——。

上空から轟音と強烈な光が降りそそいだ。その振動が屋敷にも伝わってくる。

「あっちだ！何をやっとる！追え！！」

その轟音の正体が何であるか、浅沼はすぐに理解したのだろう。必死に警備員たちに怒号を飛ばして急ぎ立てていた。しばらくして、濡の潜んでいるお手洗いの前を、いくつかの足音が通り過ぎる。計画どおり、彼らをもうひとりのファントムのもとへ誘導することに成功したようだ。

「頑張ってるね、ファースト」

ちょうど着替え終わった濡は、長い髪を後ろに流しながら、くすっと小さく笑ってそう言った。

「その女だ！！捕まえろ……っ！！」

浅沼は息を切らせてヨロヨロになりながら、前を走る警備員たちに命令する。

広大な庭の奥には、本物の肖像画を抱えた怪盗ファントムが、すぐ上でホバリングするヘリコプターの風を受けて、長い髪を舞い上がらせながら立っていた。左手に持っていた黒いシルクハットを被ると、ヘリコプターから下ろされた縄ばしごに足を掛ける。

「逃がすなっ！飛びつけっ！！」

実際に捕まえられそうなくらいまで、警備員たちは怪盗ファントムとの距離を詰めていた。浅沼に命じられるまま飛びかかろうとする。が、その瞬間——怪盗ファントムは、メッセージカードの刺してあるナイフを、まるでダーツの矢のように素早く投げ放った。サクッと草を切る音とともに、追っ手の足元付近に突き刺さる。

二人が怯んだ隙に、ヘリコプターは高く上昇していった。

警備員たちは啞然とし、浅沼は地団駄を踏む。そんな彼らに、怪盗ファントムは自らの姿を見せつけるように、縄ばしごにつかまったまま、印象的な長い黒髪をなびかせながら遠ざかっていった。

「ただいまー」

濡が剛三の書斎に戻ったとき、すでに打ち合わせスペースには篤史と遥が座っていた。二人とも先ほどまでと同じ格好をしている。つまり、遥はまだ怪盗ファントムの衣装を身に着けたままだった。

「大成功だったね」

濡はニコニコしながら、空いていた篤史の隣に腰を下ろす。席が決められているわけではな

いが、何となく、最初の打ち合わせのときと同じ場所になっていた。

「おまえ、もうちょっと真剣にやれよ」

「やってるよ！！」

滯はムツとして篤史に言い返すと、ひっそりと座っている遥に振り向いた。

「ねえ、遥、いつまでその格好でいるつもり？」

「じいさんが反省会が終わるまで着替えるなって」

遥は顔を上げることもなく、腕を組んだまま、むすっとふてくされて答えた。さすがに仮面とシルクハットは外しているが、ジャケットもスカートもニーソックスも、おまけに長髪のカツラまでそのままである。自分そっくりのその姿に、滯はどことなく落ち着かないものを感じた。

「カツラくらい取ってもいいんじゃない？」

「冗談じゃない。このままの方がまだマシだよ」

なぜカツラを取りたくないのかわからなかったが、めずらしく機嫌の悪い遥を刺激しないよう、滯は何も訊かずそっとしておくことにした。

「おお、滯も帰ってきたか」

肖像画を抱えた悠人を伴って、剛三はニコニコしながら書斎に入ってきた。打ち合わせスペースにどっしり座ると、篤史、滯、遥と順に視線を送り、誇らしげにゆっくりと大きく頷く。

「皆、ようやってくれた」

滑舌のいい聞き取りやすい声で、まずは労いの言葉を掛ける。それが心からの言葉であることは、彼の表情を見れば一目瞭然だった。

「怪盗ファントムはこのまま続けていけそうだな」

「はい、問題ないでしょう」

悠人が静かに同意すると、剛三は満足そうに口もとを上げた。

「なかなか良いアイデアだっただろう、美少女怪盗。滯と遥の見た目を最大限に活かして、人目を引くものになっておる。顔を隠さねばならんのが実に惜しい。二人ともきれいな顔でよく似ておるのに。むしろ脚の方が気になるくらいだ」

「……脚？」

その意味するところがわからず、滯は小首を傾げた。すると、剛三は不意に残念そうな面持ちになり、芝居がかった深い溜息を落とすと、机の上で両手を組み合わせながら答える。

「遥の方がな、少しだけ脚が細いのだよ」

「う、うそよ、そんなこと……っ！」

そう言いながらも、滯は縮こまって視線を落とした。そこへ篤史は容赦なく追い打ちをかける。

「胸も遥の方つめすぎなんじゃねーの？」

剛三と悠人はそろって滯と遥の胸を見比べようとする。滯は慌てて両腕で抱え込むように胸元を隠した。篤史を睨んで無言で非難するが、彼は悪びれることなく、頬杖をついて涼しい顔をしていた。

「悠人、あとで調整しておいてくれ」

「承知しました」

からかわれるのはもちろん嫌だが、真面目に議論されるのも困る。澤は頬を紅潮させたまま口をとがらせた。

「それより盗んだ絵はどうするんです？ 本来の持ち主に返すんでしょう？」

「無論だ。我々が利益を得るためにやっているわけではないのだからな」

堂々と力強く答える剛三の隣で、悠人は肖像画をあらためて机の上に置いた。すでに額装までされている。今日盗んだわけではないので、もう何度も目にしているはずだが、それでも剛三は心を奪われたようにその肖像画に見入った。

「見れば見るほどいい絵だな」

「ええ」

「いつもは鋭く深く迫力のある絵を描く高塚修司が、このような柔らかい絵を描くのはめずらしい。何かを感じ取った娘の不安な内面が繊細に描き出されているが、それを優しい愛情で包み込むように彩っており、それゆえこのような深みのある温かい絵になったのだろう」

熱っぽい視線を注ぎ、饒舌に語る剛三を見ていると、その絵に相当入れ込んでいる様子が伝わってくる。自らの意思で絵画泥棒を始めたくらいなので、当然ながら絵画は好きなのだろうが、だからこそ澤は少し心配になってきた。

「おじいさま……まさか、返すのが惜しくなったなんて言いませんよね？」

「ちゃんと返すわい。取り返してやったんだ、眺めるくらい良かろう」

剛三は面倒くさそうに言い返すと、無言で座っている遙に振り向いた。

「遥、今からおまえが返してこい」

「僕が？」

「異議は認めんぞ」

剛三にそう言われては、遙も観念せざるをえない。せめてもの自己主張なのか、大きく溜息をついてから立ち上がった。そして、うざったそうに長髪を後ろに流しながら尋ねる。

「この格好で行けばいいの？」

「いや、男性版の衣装も用意してあるので、それに着替えて行くが良かろう」

剛三はニコニコと満面の笑みを浮かべて言う。しかし、彼が笑顔を見せるときはろくなことがない。遙は疑惑と警戒の眼差しでじとりと祖父を見下ろした。

コンコン——。

ベッドで横になっていたものの、寝付けずにいた春菜は、不思議な物音を聞いて体を起こした。ガラス窓がノックされるような音だが、ここは一軒家の二階である。普通に考えればありえないことだ。気のせいかな風のせいだろう、そう自分を納得させて再び横になろうとしたのだが。

コンコンコン、と再びノックの音が聞こえた。

気のせいなどという言い訳はもう通用しない。怖いと思う気持ちはあったものの、確かめない限り、気になって眠ることはできそうもない。音を立てないようベッドから降りると、カーテンを少しだけ開き、おそろおそろ外のベランダを覗く。

そこには、白い仮面をつけた、黒スーツ姿の男性が立っていた。

春菜はビクリとして一步後ずさる。逃げようと思うものの、体が凍り付いたように動かない。薄く開いたカーテンの隙間から、表情のない白い仮面がじっとこちらを見ている。そのまま互いに身じろぎもせず向かい合っていたが、やがて、男はゆっくりとした動作で仮面を外した。露わになったその顔は、まだ少年だ。大きな漆黒の瞳がまっすぐに春菜を捉えている。

このひと、誰——？

その疑問に答えるかのように、彼の胸元に絵画らしきものが掲げられた。

春菜はハッとする。

「お父さんの絵！」

細い隙間からでは一部しか見えなかったが、それだけでも一瞬でわかった。亡くなった父親が唯一自分に遺してくれた絵だと。大切にしようと思っていたのに、浅沼に言葉巧みに騙し取られ、それ以来ずっと馬鹿な自分を責めていた。そして、これからも責め続けるのだろうと思っていた。なのに、その絵がなぜここに——。

彼は白手袋をはめた人差し指で、何かを指し示した。どうやら窓の鍵を開けると云っているらしい。冷静に考えれば危険なことである。だが、春菜は父の絵に会いたい一心で、考える間もなく、鍵を外してガラス窓とカーテンを開け放った。

冷たい夜風が静かに滑り込み、柔らかな頬を撫でる。

肩ほどの黒髪がささやかにそよぎ、綿のパジャマも微かに風をはらんだ。

「お父さんの絵……本当にお父さんの絵……」

春菜は一目見て本物であると確信した。この大切な絵を見間違えるはずはない。触れられるほどの距離で直に見ることは、もう二度と叶わないだろうと思っていただけに、胸に熱いものがこみ上げてきた。

ふと、その絵が目の前に差し出された。

戸惑いながら、春菜はおずおずと顔を上げて尋ねる。

「くれる、の……？」

「もう二度と離すなよ」

「……ありがとう！」

春菜は震える手で絵を受け取り、涙を滲ませながら顔を綻ばせた。

黒スーツの男性もつられるように小さく笑みを漏らすと、すぐに背を向け、軽々と舞うようにベランダの手すりに飛び乗った。すらりとした細身の体躯が、ほのかな月明かりに浮かび上がる。

「待って！ お兄さんは……誰……？」

春菜の問いかけに、彼は答えなかった。顔半分だけ振り返ると、立てた人差し指を唇に当てて見せる。内緒だ、ということなのだろうか。それでも春菜は諦めきれなかった。

「誰にも言わないから、名前だけでも教えて？」

「……怪盗ファントム」

少しの躊躇いを含んだ声で、彼はそう答えた。

ザワザワ、と木々の葉擦れが聞こえる。

瞬間、突風が吹き込んできて、春菜は思わず目をつむった。前髪が額に打ちつけられる。風が過ぎ去りそろりと目を開けると、もうそこに彼の姿はなかった。慌ててベランダに飛び出し、ぐるりとあたりを見まわす。しかし、どこにも彼を見つけることは出来なかった。

「怪盗ファントム……」

春菜は嘔みしめるようにそうつぶやくと、くすっと小さく笑い、大切な絵を抱えながら夜空を見上げる。柔らかな月明かりは、優しく包み込むように彼女を照らしていた。

## 5. 復活した幻

---

「おう、おはようお二人さん！」

「……何やってんの、サード」

朝のトレーニングを終えた滯と遙が、ジャージ姿のままダイニングに入ると、なぜか当たり前のように篤史がそこにいた。執事の櫻井が用意した洋風の朝食を、お世辞にも上品とはいえない食べ方で頼張っている。

「何って見りゃわかるだろう。あ、櫻井さんコーヒーおかわりね」

「かしこまりました」

橘家の人間でもない篤史に対して、背後に控えていた櫻井は恭しく一礼する。その様子を目の当たりにした滯は、少しムツとし、テーブルに両手をついて前のめりに身を乗り出した。

「櫻井さん、こんなやつ放っておけばいいんだからね。お客様でも何でもないんだから」

「いえ、お嬢様。篤史様も家族同様の扱いでお世話をするよう、剛三様より仰せつかっておりますので」

「そういうこと」

篤史は澄ました顔で目玉焼きを口に滑り込ませる。

滯はその勝ち誇ったような態度が癢に障った。両手を腰に当てて背筋を伸ばし、よりいっそう冷たい目になると、怒りのこもった低い声で切り出す。

「サード」

「コードネームは作戦遂行中のみだろ」

篤史にもっともな指摘をされ、滯はムツとしながらも言い直す。

「じゃあ、篤史」

「呼び捨てかよ……まあいいけど……」

失礼は承知の上である。篤史が自分より年上であることはわかっていたが、拭えない反発心のせいか、キャラクターのせいか、どうしても敬称をつけて呼ぶ気にはなれなかった。

「どうしてウチで朝食してるのか教えてくれる？」

「ああ、きのう夜遅くまでじいさんと悠人さんにこき使われて、アパートに帰るのも面倒だったから泊まらせてもらったんだよ。じいさんはいっそこに住めって言うし、俺もその方が楽し、厚意に甘えてそうしようかと思ってるところ」

「はああ?!」

あまりにも急転直下な展開に、滯は全力で素っ頓狂な声を上げた。

「得体の知れない男を一つ屋根の下に住ませるなんて、おじいさまってばどうかしてるわ! 若い娘がいるのよ? 襲われるかもしれないって考えなかったのかしら!」

「いや、それ無理。逆に殺されるだろ」

篤史は顔色一つ変えずに言い返す。その冷静さに、滯の腹立たしさはいや増した。

「そんなのわからないわよ。篤史はハッカーなんでしょう? 隠しカメラで恥ずかしい映像を撮るとか、それをネタに体を要求するとか、いくらでも姑息な手段があるじゃない」

「……おまえ、変なドラマの見過ぎだろう」

篤史は呆れ顔でテーブルに肘をつくと、フォークの先を滯に向ける。

「だいたいおまえは自意識過剰なんだよ。みんながみんな、おまえに興味あるわけじゃないんだぞ。まあ、客観的に見て、顔もスタイルもかなりいいってのはのは認めるけど」

「あ……ありがと……」

不意打ちのように褒められ、滯は当惑しつつも礼を述べた。

「でも、俺としては色気と知性がないと食指が動かないんだよなあ」

篤史はフォークを指でくるりと回してニッと笑う。

心なしか馬鹿にされているような気がして、滯は眉を寄せた。しかし、色気のなさについては自覚しており、悔しいが否定することはできない。唇をとがらせて強がるのが精一杯である。

「別に、篤史に気に入られなくたっていいし……ていうか、その篤史の好みに合う人って難しくない？ 知性と色気を兼ね備えた人なんて、そうそういるもんじゃないと思うけど。たとえば誰？」

「おまえにわかる人間でいうなら、橘美咲だな」

「お母さま？ でも色気なんて全然ないような……」

挙げられたのは予想外の名前だった。確かに知性には文句のつけようもないが、色気となると大いに疑問である。体は華奢で胸が大きいわけでもなく、顔も美人系というよりは可愛い系なのだ。

しかし、篤史はニヤリと笑みを浮かべて言う。

「お子様にはわからないんだろうなあ、あの滲み出る色気が」

「……………」

滯は言葉を失った。やがて険しい面持ちになり口を開く。

「やっぱりウチに住ませるのは危険ね。お母さまに色気を感じてるみたいだし、何もしないなんて言っても、そのうち欲望に負けちゃうかもしれないもの」

「おまえな……」

篤史は小さく溜息を落として、無造作にフォークを置いた。

「何でもかんでも勝手に先走って決めつけるなって」

「危機管理のために推測してるだけだもん」

遥には「おかしな心配ばかりしてる」とよく言われるが、滯としては、起こりうる危険について真面目に考えているだけである。

「別に篤史のことが嫌いだからじゃなくて、知り合ったばかりだし、いろいろ疑っちゃうのも仕方ないじゃない？ 本当はそんな人じゃないのかもしれないけど、そういうことはもっと長く一緒にいないとわからないし……」

篤史とは浅沼邸のときに初めて顔を合わせ、その後、次の仕事のために何度か打ち合わせをしたくらいである。それもあくまでチームとしてであり、個人的には言葉を交わしておらず、互いの人となりかわかるほどの付き合いはしていない。

しかし、何を勘違いしたのか、篤史は頬杖をついて辟易とした顔で言う。

「おまえ、そんなに俺と一緒にいたいのかよ」

「なんでそうなるわけ?! そっちこそ、知性も色気もないとか私のことバカにしてるけど、何だかんだいって本当は構ってほしいんじゃないの? だからわざとそんなこと言ってるんじゃない?」

あくまで強気に応酬する滯に、篤史は片手をひらひらと振って見せる。

「冗談。おまえみたいにギャンギャンうるさい女の相手する趣味はねえの。マジで付き合いたくないタイプだし。こう言っちゃなんだが、男とわかってても遥の方がよっぽどマシだぜ」

「なっ……」

滯は絶句した。顔を赤らめながら、体の横でこぶしを震わせる。

「篤史までそんなこと言うんだっ!!」

ありったけの声でそう叫んで感情を爆発させると、踵を返し、肩をいからせズンズンと扉に向かっていく。足を踏み出すたびに、腰近くまである黒髪が大きく左右に揺れた。

「おーい、朝食しに来たんじゃねえの?」

「先にシャワー浴びて頭を冷やしてくる!」

篤史の呑気な呼びかけに振り返ることなく、滯はドアノブに手を掛けながら答えた。後ろ髪を引かれつつ、朝食の匂いの立ちこめるダイニングをあとにする。根性の足りないおなかが、ぐう、と小さく音を立てた。

「他のヤツからも言われたのか?」

滯の足音が遠ざかって聞こえなくなると、篤史は二杯目のコーヒーに手を伸ばしながら、終始無言で立っていた遥にそう尋ねた。滯が口にした「篤史“まで”」という言葉に対する疑問なのだろう。遥は、彼の正面に腰を下ろして答える。

「学校で男子に言われてる」

「なるほどな」

ニヤニヤしながら頷く篤史に、遥はじとりとした視線を向ける。

「あんまり滯を苛めないでくれる?」

「なるべく努力はするけどな」

篤史は微塵も努力しなさそうな軽薄な笑顔で答えた。しかし、ふと何かを思い出したように真面目な顔になると、近くの折り畳まれた新聞に手を伸ばし、それをバサリと広げて遥の前に差し出す。

「これ見たか?」

彼が何について言ったのかは、一目でわかった。

「予告状?」

「らしいな」

先日、剛三が予告状の重要性について熱く語っていたことがあり、予想はしていたが、いきなりここまで大仰なことをやるとは思わなかった。あらためて紙面に目を落として黙読する。

本日、夜9時

高杉近代美術館の「湖畔」を戴きに参上します

——怪盗ファントム

その文章が、全国紙である毎朝新聞の中一面に大きく掲載されていた。どうやってこれを掲載したのかはわからない。まさか普通に広告掲載依頼を出したりはしないだろう。しかし、悠人が手配したのであれば抜かりはないはずだ。

ただ、別の意味で少し心配になった。

「慣れないうちから、こんなに派手にやって大丈夫かな」

「ま、準備は万全に整えてあるから大丈夫だろう」

篤史は背もたれに身を預けながら、涼しい顔でコーヒーを口に運んだ。

それでも遥の表情は曇ったままである。事前準備について疑っているわけではない。ただ、重要な役割を担うのが不慣れな漑である以上、想定外の事象に対処するのは難しく、そのことを考えるとやはり不安は拭いきれなかった。

「せっかくのお休みなのに、こんなにいいお天気なのに……なんでこんなところで打ち合わせなんかやらなきゃいけないのよ……しかも、犯罪のためだなんてありえない……」

安っぽい会議机に両手を投げ出して突っ伏したまま、漑は恨み言を口にした。薄いレースのカーテンの向こう側には、澄みわたった秋晴れが広がっている。外はさぞかし爽やかで気持ちいいことだろう。

「遊びに行きたいよう」

「グチグチうっせーぞ」

隣に座る篤史が、資料に目を落としながら冷やかに言った。

漑は口をとがらせる。

今日は漑と誠一の休日が重なる貴重な日である。本来であれば、ずっと誠一と一緒にいられるはずだった。久しぶりにどこかへ遊びに行きたいと思っていた。なのに、嫌々やらされている怪盗ファントムのために、その楽しみを潰されてしまっては、多少の文句をこぼしたくなるのも当然だろう。

もっとも、兄の遥以外、そんな事情を知るよしもないのだが——。

「待たせたな」

しばらくして、剛三がにこやかに右手を上げて書斎にやってきた。いつものように悠人を従えている。すでに集合時間を10分ほど過ぎていた。時間厳守を命じた張本人が遅れてきたことに、漑はムツとして眉を寄せたが、言っても無駄だろうとあえて抗議はしなかった。

「いよいよ今日が二代目ファントムのデビュー戦だ」

剛三は机の上で両手を組み合わせて言う。

厳密に言えば前回の浅沼邸がデビュー戦となるが、剛三としては、やはりあれは実地研修とい

う位置づけのようだ。浅沼も後ろめたさからか警察には届けなかったようで、世間的には事件は認知されておらず、そういう意味でも今回がデビュー戦といって間違いではないだろう。

「皆、準備はできておるな？」

「一応、特訓はしてきました」

濡は三日間の山ごもりについて控えめに答えた。しかし、指導役の悠人からすでに報告を受けていたのか、剛三は結果を尋ねることなく、ニコニコと満足げに頷きながら言う。

「やはり私の見込みに間違いはなかったようだ。濡、おまえならすぐに習得できると思っておったぞ。幸いにも、今日はちょうどよい天候らしいからな。さっそく成果を披露してもらおうしよう」

「あの、本当にやるんですか？」

何かの間違いであってほしいと願いつつ、濡はおずおずと尋ねる。

「おまえ、今さら何を言っておるのだ」

「でも、やっぱり目立ちすぎかなって……」

「目立たなければ怪盗の意味がないだろう」

剛三のこだわりについては承知しているものの、どうしても釈然とはせず、溜息とも相槌ともつかない曖昧な吐息を落とした。しかし、彼は少しも意に介することなく、今度は隣の遥へと視線を移して言う。

「遥には本当にすまないと思っておる。せっかくのデビュー戦にもかかわらず、おまえの見せ場を作ってやれなくて。いずれ、どんと派手なのを用意してやるから待っていてほしい」

「いや、むしろ要らないから」

剛三の独りよがりな心遣いを、遥は冷ややかに一蹴した。

「そう言うでない。みな楽しみにしておるのだからな」

「意味がわからないんだけど」

うざったそうに仏頂面で突き放しても、剛三たちは揃って笑顔を浮かべている。特に、篤史は思わせぶりにニヤニヤとしていた。遥の活躍を見たいというよりも、単に女装させたいだけなのかもしれない。濡は肩をすくめて苦笑し、そして少し同情した。

「それでは今回の標的について復習しておこう」

剛三がそう切り出すと、悠人はA3のクリアファイルを開いて机の中央に置いた。

「我々が狙うのはこの『湖畔』だ。有名な作品で教科書にも載っておるから、おまえたちもどこかで目にしたことがあるだろう。色彩の魔術師と呼ばれた故・天野俊郎の代表作でな。その大胆な色彩と細やかな筆致は、まるで音楽が聞こえてくるかのようだと言われている」

その話を聞きながら、濡はクリアファイルに挟まれたカラープリントに目を落とす。ただのプリントなので本来の色や迫力までは再現できていないだろうが、剛三の言うことはわかるような気がした。

「『湖畔』は娘である花さんの所有だったが、事業に失敗した彼女の息子が勝手に売り払ってしまったのだ。そのせいというわけでもないだろうが、花さんには認知症の症状が現れ始めてい

るという。なのに、厄介者扱いされるばかりで、まともに病院へも連れていってもらえない有り様だ」

この話を聞くのは今日が初めてではない。作戦内容と合わせて事前に説明を受けていた。だからといって慣れることはなく、何度聞いても気分の悪さは変わらない。漑は無言のまま僅かに眉を寄せた。

その瞬間、剛三はしたり顔で口の端を上げる。

「せめて、彼女の心の支えであった絵を、我々の手で取り戻してやろうではないか」

「そうよ、そうだわ……ええ、花さんのために頑張りましょう！！」

先ほどまであまり意欲のなかった漑が、いつのまにかやる気を漲らせ、両のこぶしを握りしめて気炎を上げる。前回この話を聞いたとまったく同じ流れである。おそらく剛三の目論見どおりなのだろう。そのあまりの単純さに、遥は呆れ顔で溜息をつき、篤史は声なく苦笑を浮かべた。

「もし『湖畔』が盗まれるようなことがあれば、『其の瞳に映るもの』は引き揚げさせてもらおうと思っておる」

洗練された品のよい応接室の中で、ひときわ存在感を放つ革張りのソファに、剛三はゆったりと腰掛けてそう言った。落ち着いた穏やかな口調ではあるものの、どこかしら相手を威圧する雰囲気漂わせている。隣には、いつものように秘書の悠人が付き添っていた。

二人がいるのは、高杉近代美術館である。

明日からここで天野俊郎展が開催されることになっているが、その天野俊郎の流れを汲む作品として、相沢修平の『其の瞳に映るもの』も展示されることになっていた。少女時代の美咲を描いたあの絵である。売買の話にはいっさい応じてこなかったものの、貸与は惜しまず、これまでも何度か全国の美術館に展示されてきたのだ。

「……仕方ありません」

館長の中川はうつむいて言葉を落とした。

「そのときは、この企画展自体を見直すことになるでしょうし」

今回の天野俊郎展は、高杉近代美術館が『湖畔』を購入したことで企画されたものであり、対外的にも名画『湖畔』が最大の呼び物となっている。それを盗まれたとなれば、この企画展の意義が失われるといっても過言ではない。

「しかし、そうはさせませんよ。我々は万全の警備体制を敷いております。怪盗ファントムかその名を騙るものかは知りませんが、必ずや『湖畔』を守ってご覧に入れましょう」

静かに闘志を燃やす中川を見て、剛三は唇に薄く笑みをのせた。

「それは頼もしいな」

「恐れ入ります」

中川は慇懃に頭を下げて応える。彼は一介の美術館館長であり、財閥会長の剛三と簡単に相まみえる立場にはない。それでも、必要以上にへりくだった態度を見せることなく、常に自己を保ちながら思慮深い振る舞いをしていた。

「一つ頼みがあるのだが、聞いてもらえるかな」

「何でしょうか」

端然と聞き返す中川に、剛三も目を逸らすことなく答える。

「犯行予告の時間に、我々も展示室に立ち合わせてはもらえんだろうか。君たちを信用していないわけではないが、そこには我々の絵も展示されているのでな。それに、怪盗ファントムを名乗る者には私も興味があつてな。このような機会は滅多にあるものでもないし、現場から見てみたい気持ちもあるのだよ」

「承知しました」

本来ならば、このような身勝手は許されるものではなく、不愉快に思ったとしても当然のことだろう。しかしながら相手が橘財閥会長となれば断るのは難しい。それがわかったうえで、あえて剛三はこの話を持ちかけたのである。今夜の計画の一部として――。

「怪盗ファントムの名を騙るものか、あるいはその名を継ぐものか……いずれにしても楽しみだな」

剛三はふっと鼻から息を漏らしてそう言うと、節くれだつた手を腹の上で組み合わせ、弾力性のある背もたれにゆったりと身を沈めていく。茶色の滑らかな革が、小さく濁った摩擦音を立てた。

夜の帷が降り、濃紺色の空には星がささやかに煌めいている。

滯は高杉近代美術館から少し離れたビルの屋上で待機していた。秋も深まってきたこの時季、夜ともなれば、だいぶ冷え込みが厳しくなってくる。怪盗ファントムの衣装だけでは肌寒い。しかし、それも行動を開始するまでの辛抱だろう。

双眼鏡を取り出し、美術館まわりの状況を窺う。

大勢の野次馬で人垣が出来ている――ということはなかった。それでも、予告時間を待っているともしき人たちは、多くはないがちらほらと点在している。カメラを抱えた報道関係者も、何人かは来ているようだ。

『セカンド、準備できてる？』

「問題なし、いつでもいけるよ」

今回、司令塔として指示を出すのは遥である。剛三も悠人も篤史もついておらず、すべて彼ひとりで判断することになる。これだけ重要な役割を彼に一任しているのは、その能力が信頼されているからに他ならない。

『サード、そっちの状況は？』

『潜入成功。警備員は事前情報どおり30人、それに加えて制服警官3人を視認した。おそらく近くの交番連中だろう。刑事は来てないみたいだな』

篤史の役割は、警備員に紛れて美術館内に潜入し、内部からさまざまな工作を行うことだった。警備体制などの情報は事前にハッキングして得ており、それを見た彼が、この計画で行けると最終決定を下したのである。

潜入のための制服や身分証はあらかじめ用意し、また、警備会社のデータベース情報も書き換えておくなど、事前の準備は万端である。しかし、実際に警備員になりすましての潜入など、た

だのハッカーである彼に出来るのだろうか——滯はそのことに懐疑的だったが、偶然か実力か、今のところは上手くいっているようだ。

『鍵は？』

遥は続けて篤史に質問する。

『もう外してある。だが、警備員がかなり頻繁に巡回してるし、いつ気付かれないとも限らない。ただのかけ忘れとってくれれば、まだいいんだけどな』

「鍵をかけられちゃったら、裏側の窓を割って入るのね？」

滯は事前に聞いた計画を再確認する。正面側の窓はどれも頑丈で簡単には割れないそうだが、裏側の事務室や応接室の窓は一般的なガラス窓であり、もしものときはそこを蹴破って侵入することになっていた。

『そう。そのときには、こちらから詳細な指示を出すよ』

『あんまり使いたくない手だけどな。スマートじゃないし』

冷静に答える遥に、篤史は溜息まじりに言い添える。

滯としてもできるなら使いたくない手段である。生身でガラスを蹴破るなど、破片で負傷しかねない危険なことだ。しかし、いくら剛三に猛抗議しても「避ける」の一言で却下されてしまう。さすがに腹立たしさを感じずにはいられなかった。

「おじいさま……じゃなくて、司令と副司令は上手くやってる？」

『予定どおり展示室に入り込んでるよ。今のところ問題なし』

コードネームが「司令」と「副司令」である二人だが、今回は実行部隊である。標的の中心地に堂々と乗り込んでの活動となるため、イヤホンマイクはつけていない。その代わり、悠人が小型で高性能の盗聴器をつけており、彼らの周辺の音は、実際の司令塔である遥に伝わるようになっているのだ。

「了解」

滯としてはもう少し詳しい状況を聞きたかったが、師匠ならば心配の必要もないだろうと思い、とりあえずは自分の役割に集中することにした。

「展示室の出入口は三箇所、窓は元よりありません。他、換気口や通風口など人間の出入り可能な穴は、すべて完全に塞いであります。三箇所の出入口さえ固めておけば、絶対に盗まれることはありません」

穏やかながらも自信を窺わせる口調で、中川館長は断言した。

三箇所の出入口には、それぞれ内と外に二人ずつ、計12人を配置している。しかも、頑強な扉には鍵が掛けてあり、その鍵は、複製も含めてすべて展示室内にいる中川館長が持っているのだ。

「なるほど。ダイナマイトで吹っ飛ばしでもしない限り、展示室に侵入することは出来そうもないな」

「はは……、恐ろしい冗談をおっしゃらないでくださいよ」

展示室を見回す剛三を眺めながら、中川館長はハンカチで冷や汗を拭う。出入口を固める屈強

な警備員たちも、それぞれ引きつった苦笑を浮かべていた。

「まもなく予告時間だな」

剛三は腕時計に目を落として言う。その口角は、僅かに吊り上がっていた。

『セカンド、そろそろ予告時間だから』

「うん、いつでも行けるよ」

『40秒前になったら合図するから飛んで』

「了解」

濡はやや緊張ぎみの硬い声で返事をする、白い仮面を被り、白いハンググライダーを持って柵の上に立った。少し冷たい風が、夜空よりも深い漆黒の髪をさらさらと揺らす。

『60、59、58——』

カウントダウンが始まった。

濡はハンググライダーをバサリと広げ、その手すりを掴む手に力をこめる。

『42、41、40 飛んで』

その合図と同時に、濡は柵を蹴って夜空に飛び出した。ハンググライダーで向かい風を切りながら、高層ビルを避け、緩やかな弧を描くようにすうっと美術館へ降りていく。

米粒大だった野次馬の人影が、次第に大きくなる。

濡はハンググライダーでその頭上を越え、警備員のいる正門を越え、美術館の真正面に滑り込むように降り立った。驚きと興奮の歓声が控えめに上がる。どこからか乾いたシャッター音も聞こえた。

背後から、正面から、警備員がこちらを目掛けて走り出す。

濡はハンググライダーをそこに捨て置き、正面の警備員たちに突撃するかのようには駆け出した。彼らの足が怯んで止まる。そのタイミングを見計らって強く地面を蹴り、低く前傾姿勢をとりながら二人の間を突っ切った。そして、先端に錘のついた縄を二階のベランダに投げて巻き付け、それを手繰り寄せつつ柱を駆け上がり、手すりを蹴って軽やかにそのベランダに着地する。

すぐに大きな両開きのガラス窓を引く。そこは篤史が鍵を外しておいたところで、何の問題もなく、濡を迎え入れるかのように開いていった。

「二階だ、急げ！！」

置き去りにしてきたハンググライダーの隣で、警備員の一人が大声で指示を飛ばした。呆然と見入っていた彼らは、一斉に我にかえって走り出す。館内からも、階段を上ってくる複数の足音が聞こえた。

濡は開いた窓から中に飛び込むと、彼らを引きつけるため、若干速度を落として回廊を駆けていく。幾度となく飛びかかれたりしたが、濡の身のこなしに敵うはずもなく、当然のようにすべて空振りに終わった。

「挟み打ちだ！」

前方の角から3人の警備員が姿を現した。しかし、濡はむしろ速度を上げて突進していく。同じ手を喰うかとはばかりに、警備員たちは横一列に並んで姿勢を低くした。しかし、濡とて同じ手を

使うつもりはない。床を蹴って跳び上がると、膝を抱えるように宙返りし、軽々と彼らを跳び越えて着地した。

「何をやっている、おまえたち！」

後ろから濡を追っていた警備員が怒声を上げる。しかし、彼らも捕まえられなかったのだから、似たり寄ったりである。挟み打ちにするつもりだったようだが、今はひとかたまりとなって後ろから追いかけてきていた。

よし、今だ——。

濡はポケットに手を入れて目的のものを掴むと、振り返りざまにそれを噴射した。

「うわあっ！！」

高い天井にいくつもの悲鳴が反響した。そして、すぐにそれは呻き声に変わる。警備員たちは目を押さえながら次々とその場に崩れ落ちた。立っている者はひとりもない。

濡の噴射したそれは、催涙スプレーだった。

人に向けて噴射したのはこれが初めてである。どうなるかは教えてもらっていたが、その効果は想像以上に絶大だった。あの様子では、しばらくまともに目を開けられないだろう。

ごめんなさい——！

濡は心の中で思いきり両手を合わせた。そして、その罪悪感を振り切るように身を翻すと、全力で目的地へ向かって駆け出していった。

『セカンド、振り切った？』

「うん……」

濡は展示室近くに身を潜めながら、歯切れの悪い答えを返す。

『どうしたの？ 気がかりなことでもあった？』

「ん……催涙スプレー、痛そうだなと思って」

『まあそうだね、痛くなければ意味がないよ』

遥の言葉は身も蓋もない淡泊なものだった。しかし、その口調からは濡への気遣いと優しさが感じられる。本来ならば、そんなことを気にしている場合ではないと怒られても仕方がないのに——。

『おまえ、そんなこと気にしてる場合かよ』

「言われなくてもわかってるよ！」

呆れたように口を挟んできた篤史に、濡は気色ばみ、小声ながらも強気な口調で言い返した。遥に言われたのなら素直に謝っただろうが、篤史ではどうしても腹立たしさが先に来ってしまうのだ。

しかし、遥はあくまでも粛々と作戦を進める。

『セカンド、サード、もう準備はいい？』

『オーケー』

「大丈夫よ」

先ほどとは打って変わり、二人とも真剣な声になって返事をした。今がどんな状況であるかは

理解しており、それを無視して口論を続けるほど愚かではない。この作戦を成功させたい気持ちは一致しているのだ。気を引き締めて待機する。

次にすべきことは頭に入っていた。

濡にしても、篤史にしても、それぞれの役割はさほど難しくない。失敗が許されないという重圧に負けさえしなければ、難なくやり遂げることができるだろう。それよりも、懸念すべきことは他にある。

『サード、落として』

遙の指示とほぼ同時に、館内の灯りがすべて落ちた。

もちろん、展示室内も例外ではなく――。

「うろたえるな！各自持ち場を死守しろ！！」

何も見えない真っ暗闇の展示室に、剛三の威厳に満ちた声が響き渡った。この美術館の主は中川館長であるが、我が物顔で指示を出す剛三に、警備員たちは誰ひとりとして疑問を挟まなかった。

「扉から離れるでないぞ」

「は、はいっ！！」

彼らはなかなか職務に忠実なようである。若干怯えている様子は窺えるものの、逃げようとする輩もパニックを起こす輩もいない。ここまでは計画通り――剛三は闇に紛れてほくそ笑んだ。

「非常用電源はまだか？！」

中川館長が誰にともなく苛ついた声を上げた。腰につけたトランシーバを手探りで掴み取ると、普段の紳士的な振る舞いは見る影もなく、すっかり余裕をなくした様子で命令を送る。

「Aチーム、電源を見てこい！」

しかし返事はない。ザーッという耳障りなノイズが聞こえるだけである。

「Aチーム！応答しろ！！」

『……もっ、申し訳ありません……怪盗ファントムらしき人物に、何かのスプレーを掛けられてしまい……目が痛くて……今しばらくは動けそうもありません……！』

「なんだとっ？！Bチーム、応答しろ！」

『彼らも、我々Aチームと同じ状況です』

「Cチーム！！」

『は、はいっ！』

「地下に降りて配電盤を見てこい！」

別システムの非常用も含めて、電源はすべて篤史によって落とされていた。配電盤を見たところでわかるものではないだろう。そちらの方は彼の得意分野であり、取り立てて心配はしていない。むしろこの作戦の鍵となるのは――。

悠人、おまえならやれると信じておるぞ。

余裕をなくした無線の応答がひっきりなしに響く中、剛三は後ろで手を組むと、不自然でない程度に足音を立てながら、暗闇の展示室をゆったりと行ったり来たりした。

灯りが消えてから3分が過ぎた。

コンコンコンコン——。

イヤホンから聞こえたノックのような五連音に、待機中の遥はハッと息を呑む。それは悠人からの合図だった。持っている盗聴器を爪で五回叩くことによって、作業の終了を知らせる取り決めになっていたのだ。

「サード、灯りをつけて」

遥は少し早口で指示を出す。

オーケー、と篤史が声をひそめて答えた瞬間、敷地内の照明がいっせいに元に戻った。一度闇に沈んだ建物は、まるでスポットライトを浴びたかのように、停電前よりもいっそう眩く輝いて見えた。

展示室に暖色のやわらかい光がともる。

中川館長はすぐさま三つの扉に視線を移した。どの扉にも元のまま警備員が張り付いており、鍵もかかったままで、開けられた様子はなさそうである。鍵束がずっと自分の懐にあったことも確認していた。

ようやく彼は安堵の息をついた。

そして、一難去った『湖畔』へと目を向けた——つもりだった。

「なっ……?!」

しかし、そこにあったのは額縁だけで、中の『湖畔』は忽然と消えていた。額縁に囲まれた壁の中央には、黒いメッセージカードが貼り付けられていた。中川館長は手にしていたトランシーバを滑り落とすと、全力で駆けていきメッセージカードを覗き込む。

『湖畔』は確かに戴きました

——怪盗ファントム

「まさか……どうやって……」

半ば放心状態で空の額縁を見つめながら、うわごとのように言葉をこぼした。壁についた左手の指先は、力を入れすぎて血の気が失せている。額からは一筋の汗がポタリと床に落ちた。

「ファントムだ!! 絵を抱えてるぞ!!!」

展示室のすぐ外の廊下で、篤史は大声を張り上げた。そして、近くで待機する濡に親指を立てて見せると、音を立てないようにそっと素早く走り去っていく。同時に、反対側からはいくつもの慌てふためいた足音が近づいてきた。

師匠が頑張ったんだから、今度は私が頑張らなきゃ——。

濡は気持ちを引き締めて、すっと背筋を伸ばした。黒い布に包まれたキャンバスを持つ手に力をこめる。正確にはキャンバスではない。コンパクトに折り畳めるステンレスの枠に薄布が張っ

であるだけのものだ。『湖畔』に見立てるために懐に忍ばせていたのである。黒い布が外れてしまえば、それが『湖畔』でないことも、キャンバスでさえないことも、一目で見抜かれてしまうだろう。それゆえ失敗は許されないのだ。

「いたぞ！『湖畔』を取り戻すことが最優先だ！」

角を曲がってきた警備員が、怪盗ファントムを目にするなり大声を上げた。そのあとから続くのは、催涙スプレーを浴びせられた警備員たちである。まだ目も鼻も赤い。痛さのためか、恨みのためか、皆一様に険しい顔をしている。

濡は黒い布に包まれたキャンバス——に見立てたもの——を脇に抱え、彼らに背を向けて走り出した。ガラス張りの回廊を駆け抜け、奥の扉を開け放つと、裏側のベランダへ飛び出していく。そして、片手にそれを抱えたまま、手すりやひさしに次々と飛び移りながら、あっというまに屋上へ駆け上がっていった。

そのタイミングを見計らって、待機していたヘリコプターが、縄ばしごを垂らして降下してきた。濡は助走をつけて跳び上がると、片手で縄ばしごを掴んで足を掛ける。長い黒髪がうねるように舞い上がった。

「ま、待てっ！！」

ようやく屋上へよじ登った警備員の一人が、息を切らしながらも、腹の底から大きく声を張り上げる。だからといって待つわけにはいかない。彼らをそこに残したまま、ヘリコプターはみるみるうちに空高く上昇していった。

「そうか、逃げられたか……」

報告を受けた中川館長は、大きく溜息をついて肩を落とした。随分と落ち着きは取り戻していたものの、憔悴していることは傍目にも明らかだった。しかし、剛三は同情する素振りも見せずに切り出す。

「中川館長、約束どおり『其の瞳に映るもの』は引き揚げさせてもらって構わんかな」

「どうぞ、お約束ですから」

中川館長は、力なく愛想笑いを浮かべて答えた。

「どうか悪く思わんでくれ。これは我々にとってかけがえのない大切な絵なのだ。また機会があれば声を掛けてほしい。中川館長とは、今後も末永く付き合いを続けたいと考えておる」

それは剛三の本音だった。彼についてはなかなかの好人物と評価している。絵画や美術についての造詣が深く、愛情もあり、これほど美術館館長に相応しい男はいない。今回のことは、本来なら彼には関わりのないことであり、いずれ何らかの形で埋め合わせをするつもりでいた。

「ありがとうございます」

中川館長は丁寧に礼を述べ、頭を下げた。

剛三は貫禄のある顔で頷くと、悠人に向き直って言う。

「悠人、行くぞ」

彼はちょうど『其の瞳に映るもの』を黒い布に包み終えたところだった。それを抱えて立ち上がったのを確認すると、彼とともに、展示室の正面入口からゆったりとした足どりで出ていく

。 展示室の外には、スーツに着替えて白手袋をはめた篤史が待ち構えていた。礼儀正しく深々と一礼して剛三を出迎える。彼らしかからぬ態度だが、これは会長付きの運転手という設定を演じているにすぎない。剛三は目配せして彼を従え、悠人とともに、三人で堂々と美術館をあとにした。

「本当に来たのか、怪盗ファントム……」

高杉近代美術館の前に到着した誠一は、残されたハンググライダーや遠ざかるヘリコプター、そして引き揚げる野次馬たちを眺めながら、誰にともなくそんな呟きを落とした。

今朝の朝刊を見て、誠一は飲みかけのコーヒーを嘔き出しそうになった。

怪盗ファントムを名乗る人物からの大胆な犯行予告——もちろん、そのようなものを信じたわけではない。おおかた人騒がせな宣伝か何かだろうと思った。それでも、予告時間が近づくとつれ居ても立ってもいられなくなり、ついにはアパートを飛び出してここまでやって来たのだ。仕事なら忘れられたのかもしれないが、非番だったため、なおさらそのことばかり考えてしまったのだろう。

だが、少し遅かったようで、到着したのはすべてが終わったあとだった。

「やっぱ美術館のプロモーションじゃない？」

「まさか、ここまで大掛かりなことやるかよ」

隣を通り過ぎていく若い男女が、醒めた口調でそんな話をしている。怪盗ファントムをリアルタイムで知らない世代なら、この馬鹿らしいくらい大胆な犯行を、にわかに信じられないのも無理はないだろう。

一方、正門前にいた年配の男性は、すっかり興奮しきっているようだ。

「怪盗ファントムの復活だ！」

固く握ったこぶしを振り上げて叫んでいる。

近くにいた大学生くらいの男女五人組は、胡散臭そうな眼差しでその光景を一瞥した。男から少し距離をとりつつ、そそくさと小さく寄り集まると、若干声をひそめて議論を始める。

「でも、怪盗ファントムって男でしょう？ さっきの女の子じゃん」

「そうそう、それもかなり若そうだったよな。20代前半くらい？」

「モデル並みにスタイル良かったよなあ…脚きれいだったよなあ……」

「まあ、怪盗ファントムの真似をしたニセモノってところだろうな」

「もしかすると後継者かもよ。ほら、弟子とか娘とかさ」

別人か——。

彼らの話には耳をそばだてていた誠一は、胸の内で小さく息をついた。

安堵なのか、落胆なのか、それは自分でもよくわからない。

まだ小さな子供だった頃、誠一は『怪盗』の意味もわからないまま、夜を駆け巡る怪盗ファントムに憧れていた。特撮ヒーローでも見るかのような気持ちで——いや、実際に区別がついてい

なかったのだろう——テレビにその姿が映るたびに釘付けになって目を輝かせていた。

大人になり刑事になった今なら、パフォーマンスに目を惹くものがあったとしても、結局のところはただの犯罪者であり、憧れる対象でないことは理解している。ただ、幼い頃に抱いていた純粋な感情を、完全に消し去るのは難しい。

「すみません」

誠一は若い制服警官を見つけると、警察手帳を見せて呼び止めた。その彼に事件の顛末を尋ねる。

やはり『湖畔』は怪盗ファントムを名乗る者に盗まれていた。警備に当たっていたのは、民間の警備員と所轄の警官だけで、警視庁の人間はいなかったらしい。しかし、すでに連絡は済ませてあるので、間もなく来るだろうとのことである。

警視庁も信じてはいなかったのだろう。

本当に怪盗ファントムが復活したのかはわからない。しかし、鮮やかな手口で絵画を盗む輩が現れたのは事実である。これから世間が騒がしくなるだろう。あの頃のように——誠一はそんな予感がしていた。

「篤史、車をまわしてこい」

その貫禄のある声に反応して、誠一は美術館の方に振り向いた。

そこには、声に違わぬ佇まいを見せる初老の男性がいた。スーツを身につけた男性二人を従えて、美術館から出てきたところらしい。篤史と呼ばれた運転手らしき男性は、黒革の鞆を携えて足早に正門を出ていく。もう一方の、誠一よりやや年上と思われる男性は、黒い布で包まれた大きくて平たい何かを、大事そうにしっかりと抱えていた。

——絵画……か？

誠一は無性にそれが気にかかった。職務中でなかったため少し迷ったが、意を決して、正門をくぐり彼らの方に向かっていく。相手がこちらに気付くと、軽く一礼し、ポケットから警察手帳を取り出して掲げた。

「警視庁捜査一課の南野と申しますが」

「一課？ 担当が違うのではないか？」

初老の男性は胡散臭そうに誠一の全身を見まわす。ジーンズにブルゾンという、刑事らしからぬ格好も訝しんでいるのだろう。一瞬、誠一は言葉に詰まったが、それでも引き下がりはしなかった。

「捜査権はあります。お手数をおかけしますが、中を確認させていただきませんか」

黒い布に包まれた物体を左手で示しながら、誠一は丁寧な口調で要請した。

しかし、男性は鋭い眼光で睨めつけて抵抗する。

「我々を疑っておるのか？」

「念のための確認です、ご協力を」

誠一は顔色ひとつ変えずに答えた。このくらいで怖じ気づいては刑事など務まらない。高圧的な視線から逃げることなく、しかし挑発的になることなく、あくまで平静と中立を保ったま

ま見つめ返す。

張り詰めた沈黙が続いた。

それを打ち破ったのは、青ざめながら美術館から飛び出してきた中年の男性だった。

「君っ！警察か？！」

「はい、あなたは……」

誠一は警察手帳を見せながら尋ねた。彼は少し息を整えてから答える。

「館長の中川だ。いいか、この方たちを疑うのはまったくのお門違いだ。その中身は先刻まで当方が借り受けていた絵画で、盗まれた『湖畔』ではない。私も包むところを見ている。第一、そのとき『湖畔』はすでに怪盗ファントムに持ち去られていたのだからな」

「念のための確認です、ご協力を」

融通のきかない堅物のように、誠一は先ほどと同じ言葉を繰り返した。自分の目で確認するまで納得してはならない。それが、先輩刑事の岩松から教わったことのひとつだ。

中川館長の顔は、ますます渋いものになった。

「君……この方は、橘財閥の会長なのだぞ」

それまで動じることのなかった誠一が、途端にハッとして大きく目を見開いた。肩書きに驚いたわけではない。さすがにこれほどの大物とは思わなかったが、名のある人物だということは察しがついていた。けれど。

この人が、濡の祖父——。

よりによって、このような状況で対面を果たすことになるとは思わなかった。そもそも会うこと自体が想像もつかなかった。彼女の祖父が橘財閥会長であることは知っていたが、だからといって容易に実感など持てるものではない。しかし、今は刑事としてここにいるので、濡のことは無関係だと自分に言い聞かせる。

「ご協力をお願いいたします」

「悠人、見せてやれ」

剛三はちらりと背後に目をやって言う。

悠人と呼ばれた男性は、口元に穏やかな微笑を浮かべたまま、黒い布を上部から丁寧にめくっていく。そこから姿を現したのは、立派な額縁に入った絵画だった。ただし、盗まれた『湖畔』ではなく——。

「『其の瞳に映るもの』、所有者は我が娘の橘美咲だ」

「……失礼いたしました」

誠一は深々と頭を下げた。その絵を見たのはこれが初めてだが、話は濡から聞いたことがあった。母方の祖父は有名な画家だったらしく、少女時代の母親を描いた絵が家に飾られているのだと。中川館長の話とも矛盾はない。『湖畔』が見つからなかったことは残念だが、それよりも安堵する気持ちの方が大きかった。

「行かせてもらうぞ」

剛三は威厳のある声でそう言うと、後ろで手を組み、正門に向かって悠々と歩き出した。そのあとを、絵画を包み直した悠人がついて歩く。誠一は深々と腰を折り、去りゆく二人の後ろ姿を

見送った。

「このことは、警視庁に抗議させてもらうからな」

残った中川館長が、苦々しげに顔をしかめて言い捨てる。

誠一は口をつぐんだまま再び大きく頭を下げた。間違っただけをしたつもりはないが、この場を収めるには何も言わない方がいいだろう。それでも、おそらく抗議については避けられない。その覚悟はしていた。

中川館長が美術館に戻ったのを見届けると、誠一はブルゾンのポケットに手を差し入れた。ふうと大きく息をつき、頭上に広がる濃紺色の空を仰ぎ見る。頬を掠める冷たい風が心地良く感じた。

滯とは会えないのに、その祖父に会ってしまうとはな——。

ふと、そんなことを考えて苦笑する。

今日は久しぶりに滯と休日重なったにもかかわらず、彼女の方に用事があったって会えなかったのだ。さっそく「家の事情」と言葉を濁していたので、詳しくは聞いていないが、家族とどこかに出かけるようなことを言っていた。

「……………」

誠一は目を細め、胸ポケットの携帯電話に手を伸ばした。

「あっ」

滯は短く声を上げて、内ポケットから震える携帯電話を取り出した。背面のディスプレイを確認すると、顔をパッと輝かせ、折り畳まれた本体を手早く開いて耳に当てる。

「もしもし、誠一？」

「ちょっと、滯！」

隣の遙がハッとして振り向き、咎めるように名前を呼んだ。眉を寄せて非難の眼差しを向ける。そのことに滯も気づきはしたが、もう電話に出てしまっていたため、とりあえず誠一との会話を優先することにした。

『滯？何かすごい音がしてるけど……』

「ごめん、いまちょっと移動中なの」

滯たちがいるのはヘリコプターの中である。エンジンやプロペラの回る音がうるさく、それが誠一の方にも届いているのだろう。滯も片耳を押さえないと誠一の声が聞き取れないくらいだ。

「遙も一緒にいるよ。替わろうか？」

『いや、それはいいよ……』

電話の向こうで誠一は苦笑していた。つられて滯も笑う。

「それで、どうしたの？」

『ああ……別に用はないんだけど、滯の声が聞きたくなくてな』

「え、そういうの初めてじゃない？私も誠一の声が聞けて嬉しいけど」

滯の顔は自然とほころんでいた。誠一と会えなくて気が滅入っていたが、声を聞けただけで、

そんな寂しさもどこかに吹き飛んでしまう。そして、何より、彼も同じ気持ちでいてくれたことが嬉しかった。

『今日はもう切るよ』

「うん、それじゃあね」

『ああ、またな』

濡はくすっと笑って携帯電話を切ると、それを折り畳んで内ポケットに戻した。このまましばらく余韻に浸っていたい気分だったが、隣の遙がじとりと睨みつけ、現実に戻すように重々しく切り出した。

「濡、ケータイ持ってきてたの？」

「作戦遂行中は電源切ってたよ」

「そういう問題じゃない」

彼はいつになく厳しい声でピシャリと言う。

「まず、現場に落としたらシャレにならないってのはわかるよね？ それに、ケータイは持っているだけで居場所の特定ができるから、それで正体がバレる危険性も少なからずあるんだよ。家を出てから帰るまでが作戦遂行中だから気を抜かないで。こんなところで電話に出るなんてもってのほか」

「うん……」

その説明はわかりやすく説得力があり、濡は素直に反省するしかなかった。

遙は窓枠に頬杖をついて外に目を向ける。

「じいさんには内緒にしとく」

「……ありがと、遙」

濡は身をすくませて小さく微笑むと、甘えるように遙の肩に寄りかかった。長い黒髪がさらりと揺れる。彼が振り向くことはなかったが、嫌がることもなく、そのままの姿勢で濡を受け止めていた。

ヘリコプターは夜空を切りながら、まっすぐに目的地へ向かって飛んでいった。

「上手くいったんですね？」

「少しヒヤリとしたけどね」

打ち合わせスペースで濡が身を乗り出して尋ねると、悠人は黒い布に包まれた絵画を机に置きながら、いつものように穏やかに笑って答えた。手を止めることなく丁寧に黒い布を外す。そこには、立派な額縁に入った美咲の肖像画があった。見たところ、大きな傷や汚れはついていないようだ。

「無事で良かった」

濡はほっと胸を撫で下ろした。この計画を聞いたとき、最も心配したのは肖像画のことだった。万が一、損傷するようなことがあれば、母親に申し訳が立たない。考え直すよう祖父にも進言したが、当然のように聞き入れられることはなかった。

悠人は額縁をひっくり返して裏板を外す。その中には、肖像画より一回り小さいもう一つの絵

画が入っていた。布で保護されたそれを取り出し、机の上に立てると、丁寧な手つきで包みをめくっていく。

現れたのは『湖畔』だった。

篤史が美術館の灯りを落とした間に、展示室内にいた悠人が、この額縁の中へ『湖畔』を移したのだ。その後、何食わぬ顔で、肖像画ごとそれを持ち出したのである。

「きれいな絵……」

滯は率直な感想を呟いた。本物の『湖畔』を見るのはこれが初めてであり、印刷や写真ではわからなかった力強さ、繊細さ、質感、そして色の鮮やかさに、思わず目を奪われてしまう。

そんな滯の様子を見て、剛三は満足げに頷いた。

「天野俊郎の風景画は青が特徴的でな。この透き通るような、それでいて深みのある青は、彼にしか出せんと云われておる。彼の作品はどれも人気が高いが、特にこの『湖畔』は、その題材や見た目の美しさから、絵画に詳しくない者にも受けが良く、病院や公共施設によくレプリカが飾られておるのだよ」

「おじいさま、今回はどうやって返しに行くんですか？」

今度は自分が行かされるかもしれないので、滯は気になって尋ねた。

しかし、返ってきたのは思いもよらない答えだった。

「今回は返さん」

「えっ……？」

「これは報酬として私がもらい受ける」

「そんな！話が違います！」

滯はバンと叩きつけるように両手をついて立ち上がり、剛三に強く抗議する。

「花さんのために取り返したはずですよ？！」

「そう目くじらを立てるな。悪いようにはせん」

剛三は真剣に取り合おうともせず、ただ愉快そうに笑いながら滯を宥める。しかし、そんな矛盾した言葉を信じられるはずがない。悪いようにしないというのは、彼自身にとってという意味でしかないように思えた。

それまで黙っていた遙が、小さく溜息をついて口を挟む。

「何か考えがあるのなら説明してくれない？」

「悠人、滯たちに説明してやってくれ」

剛三は含みのある笑顔でそう促すと、悠人は頷いてファイルを開く。

「滯、とりあえず座って」

穏やかだが有無を言わさぬ口調。

滯はひとまず指示どおり腰を下ろした。そして、疑いの拭いきれない眼差しを向けつつも、机の上で手を重ね、口を引き結んだまま悠人の説明に耳を傾けた。

「良かったですね、花さん。ここは優しい人ばかりよ」

白を基調とした清潔感のある小綺麗な部屋。その南側の大きく開いた窓からは、柔らかな日射

しが降りそそいでいる。少しひんやりした風が滑り込むと、レースのカーテンがふわりと丸みを帯びるように揺れた。

滯は、窓際の椅子に腰掛ける花に微笑みかける。

彼女は戸惑いがちに小さく微笑み返し、秋らしく色づいた外の風景に目を向けた。

ここは高齢者用の医療介護施設である。

それも、空気がきれいな落ち着ける環境のもと、明るく家庭的な雰囲気、質の良い介護が受けられるという施設だ。当然ながら相応に高額であり、誰でも気軽に入所できるわけではない。

花は、剛三の援助でここに入所することになった。

画家・天野俊郎の支持者として、その娘の治療を援助させてほしい——身分を隠したまま彼女の息子にそう申し入れると、そちらで全面的に面倒を見るなら好きにしてくれ、という突き放した返答があった。

厄介払いができて清々しているのだろう。

そのことを思うと腹立たしかったが、息子のことを考えても仕方がない。花が心安らかに過ごせることが第一である。彼女にとってはこれが最善なのだと、滯は自分にそう言い聞かせて納得しようとした。

「お願いしてあった絵の件ですが」

滯たちから離れたところに立っていた悠人は、隣のふくよかな介護士の女性にそう切り出した。彼女は人の良さそうな柔らかな笑みを浮かべ、わかりやすく頷きながら答える。

「ええ、この部屋に飾れるよう手配いたしますわ」

「それでは、よろしく願いいたします」

悠人は黒い布を丁寧に外し、額縁に入った『湖畔』を彼女に手渡した。

「あら、この絵……盗まれたって話題になっていたあの絵じゃ……」

彼女はまじまじと見つめながら呟く。

滯はドキリとして顔をこわばらせたが、悠人は少しも動じず、にっこりと完璧な微笑を浮かべて答える。

「レプリカですよ」

「ですよねえ」

ほほほと笑いながら彼女は応じる。たとえ本物だと言ったところで信じはしないだろう。世間的には盗まれて行方不明のままであり、こんなところにあるなど常識では考えられないのだ。

「花さんにとって思い出の絵だと聞いて用意しました。彼女の心の支えになればと思ひまして。さすがに本物というわけにはいきませんでした、忠実に再現したものですので……」

「お心遣い感謝いたします。花さんもきっとお喜びになると思ひますよ」

今の彼女にとって重要なのは、誰の所有かではなく、自分の手元にあるかどうかである。だから、彼女が活着ている間は、この絵を彼女に預けることにする——剛三はそう約束してくれた。確かに、絵を返しただけでは彼女の救いにならない。おそらくまた息子に売り払われてしまう

だけだろう。

「花さん、これからはずっとこの絵も一緒よ」

濡は、窓の外を眺める花に優しく声を掛けながら、絵を持った介護士を手招きして呼び寄せる。彼女は小走りで前に進み出ると、少し身を屈め、花が見やすいように絵を持ち直した。

花はぼんやりと振り向いた。

焦点の定まらない視線が彷徨う。しかし『湖畔』を目にした途端、彼女の瞳に強い光が宿った。みるみるうちに涙が溢れ、目尻からこぼれ落ちて頬を伝う。

「ああ……もう二度と会えないと思っていたのに……」

声を詰まらせてそう言いながら、おずおずと震える手を伸ばす。介護士が『湖畔』を差し出すと、花は目を細めてそれを受け取り、幸せそうに顔をほころばせて抱きしめた。

介護士は後ろへ下がってくすっと笑い、声をひそめて悠人に言う。

「本物と思っているようですね」

「そう思わせてあげてください」

「ええ、もちろんですわ」

しかし、それは決して思い違いなどではない。彼女には本物であることがわかったのだろう。子供の頃から、長い時間をともに過ごしてきた絵なのだから。そして、これからも彼女の命ある限りずっと――。

「良かったね、花さん」

帰りの車中、助手席の濡はニコニコしながら声を弾ませた。ペットボトルのミネラルウォーターに手を伸ばし、ひとくち流し込むと、運転席の悠人に振り向いて上機嫌で話を続ける。

「私ね、怪盗ファントムやって良かったって、ちょっと思っちゃった」

「怪盗なんてただの犯罪者だって、さんざん文句を言ってなかった？」

「うん、だからちょっとだけね」

濡はシートベルトを伸ばして身を乗り出し、親指と人差し指をほとんどくっつける仕草を見せた。悠人はちらりと横目を向けると、ハンドルを握ったまま、何か含みのありそうな笑みを浮かべる。

「えっ？ なんですか？」

「濡は本当に流されやすいなって」

「そんなことないと思うけど……」

濡は小首を傾げる。素直だと言われることはよくあるが、流されやすいというのはまた別だろう。

「その自覚のなさが余計に危険なんだよね。流されやすいというより、絆されやすいってのかな。ちょっと情に訴えてお願いすれば、何でも言うことを聞いてくれそうな感じだし」

「私、そこまで馬鹿じゃありません」

「そうだね。でも、キスくらいなら」

ゴトン――濡は動揺してペットボトルを滑り落とした。足元で転がって止まる。

彼の口からそんな言葉が出るとは思いもしなかった。もちろん、からかっているだけだということはすぐにわかる。その意味ありげな微笑にムツとして眉を寄せると、ペットボトルを拾い上げ、負けるもんかとばかりに挑戦的に切り返す。

「だったら、試してみてください」

「濡、寂しいからキスしていい？」

もはや馬鹿にされているとしか思えなかった。いくらなんでも、それで心を動かされる人間はいないだろう。ましてや、今さら濡にこんなことを言うなど、神経を逆なでするだけである。なぜなら――。

「……私をふったこと覚えてます？」

濡の初恋の相手は悠人だった。今となっては他に好きな人がいるので、彼に恋愛感情など持っていない。だが、当時は真剣に好きだったし、告白して断られたときは傷ついていたのだ。

しかし、悠人は無神経にもくすくすと笑い出す。

「さすがに8歳の子とは付き合えないからね」

「あ……」

言われてみれば、確かにあのときは8歳だった。自分が子供だという自覚もあまりなく、恋愛対象として見てもらえないことに深く落ち込んだが、今になって考えるなら至極当然といえるだろう。そう思うと、急に笑いがこみ上げてきた。

「そういえばそうですよね」

「ようやくわかってくれた？」

彼と恋愛に関する話をしたことは、これまでほとんどなかった。告白したあのときくらいである。しかし、今のこの雰囲気なら訊けるような気がして、ずっと疑問に思っていたことをぶつけてみる。

「師匠には彼女とかいないんですか？」

「学生の頃はいたけど、それ以降はいないよ」

不躰な質問にも動じることなく、悠人はハンドルを握ったまま淡々と答える。

「どうしてですか？」

「そんな暇、あると思う？」

悠人は橘家に住み込んでおり、公私の別なく剛三に仕えてきた。そのうえ、親同然に濡たちの面倒を見て、武術の稽古まで引き受けている。彼自身のプライベートな時間は、ほとんど皆無といってもいいだろう。剛三がそこまで彼を拘束していることに、自分もその一端を担っていることに、濡はこのときあらためて気付かされた。ペットボトルを両手で握りしめてうつむく。

「剛三さんは、僕と濡を結婚させたいみたいだね」

「……えっ?!」

濡は大きく目をパチクリさせて、運転席の悠人に振り向いた。しかし、その横顔からは思考も感情も読み取れない。いつものように薄い微笑を湛えたまま、優しく落ち着いた声で言葉を繋いでいく。

「濡の気持ちを無視してまで強引に結婚させる、ってことはないだろうから安心して。いくら剛

三さんでもそこまではしない。孫娘を不幸にしようだなんて思っていないはずだからね。嫌だったら断ればいいだけのことだよ」

「そんな勝手な話、師匠だって困りますよね」

滯は当惑しつつも、笑い飛ばすように極力明るくそう言った。

しかし、悠人はそれに同調しようともせず、前方を見つめたまま真剣な顔になると、誰もいない道路を走らせながら静かに答える。

「僕は、滯となら結婚してもいいと思ってるけどね」

「……………」

滯はとっさに何の反応もできなかった。ただただ啞然とするだけである。別に結婚すると決まったわけではないが、悠人がそう思っているというだけで、滯にとっては十分すぎるほど衝撃だった。

そんな様子を横目で見ながら、悠人は軽く冗談めかして言う。

「滯に断られたら、僕は一生独身かな」

「そ……そんなの……なん、で……」

滯の混乱した気持ちは言葉にならなかった。腹立たしいような、悔しいような、困惑したような、それでいて胸を締めつけられるような思いが、胸の中で大きくうねりながら渦巻いている。

「寂しいっていうのは本当だよ」

赤信号で車が止まる。

悠人はハンドルから手を離して振り向いた。無言で滯と視線を絡ませる。そして、おもむろに腕を上げると、助手席の背もたれに手を掛け、ゆっくりと滯に顔を近づけてきた。

頭の中は真っ白だった。

手からミネラルウォーターのペットボトルが滑り落ちる。現実から逃れるように、体をこわばらせて震える瞼をぎゅっと閉じる。それでも、すぐ近くまで悠人の顔が近づいてきたのがわかった。微かな吐息が鼻に掛かる。そして――。

「イタっ！」

額に軽い痛みが走った。反射的に額を押さえて目を開く。

「わかった？ 自分が流されやすいってこと」

いつのまにか、悠人はハンドルを握ってくすくすと笑っていた。

どうやら指で額を弾かれたらしい。今の今までずっとからかわれていたのだと、滯はそのときようやく気がついた。カッと頭に血を上らせたものの、強気に言い返すこともできず、横目で睨みながら口をとがらせる。

信号が青になり、車はゆっくりと滑り出す。

滯はパワーウィンドウを下げて頬杖をついた。稲が刈り取られたあとの田圃をぼんやりと眺める。少しひんやりとした秋風が、長い黒髪をさらさらと吹き流し、火照った頬からは熱を奪っていった。

単調な走行音を聞くうちに、次第に落ち着きを取り戻す。

この車中での話がすべて嘘だとは思っていない。途中までは普通に会話をしていたはずだ。とりあえず、滯の質問にすぐに答えてくれたことから、彼女がいないというのは信じていいたいだろう。だけど。

剛三が結婚させたがっている話は？

滯と結婚してもいいと言ったのは？

寂しいという気持ちは？

いくら考えてみたところで、どこまでが本当なのかはわかりようがない。だが、たとえすべて本当だとしても、まわりにどう言われようとも、今さら悠人に気持ちが移ることなどありえない。あってはならないのだ。

もう流されないんだから、絶対——。

滯はキュッと唇を引き結ぶと、急に存在感の増した過去の恋心を、強い決意で片隅に追いやった。

## 6. 白い研究所

---

「はっ！」

顔面に向けて繰り出された遥の拳を、滯は左の手のひらで防いだ。そこに感じる重量感に思わず顔をしかめる。先ほどから何度も受けているせいか、痛みというより、むしろ痺れの方が強くなっていた。

一瞬、遥の攻撃が途切れる。

その隙に、滯は素早く腰を落として足払いをした。だが、その攻撃は読まれていたようで、事も無げにかわされてしまう。それどころか逆に肩を蹴りつけられ、受け身も間に合わず、背中から地面に強く叩き付けられた。

滯はゲホッと咳き込む。

それでも遥は容赦なく滯の上に馬乗りになると、反撃しかけた滯の右手をねじ伏せ、力のこもった固い拳を大きく振りかざした。そして、滯に向かって躊躇なくそれを振り下ろす。

——ピッ！

薄青色の空を突き抜けるように、高らかに笛が鳴った。

「遥の一本」

縁側で二人を見ていた悠人は、銀の笛を片手に判定を下した。

滯の鼻先でピタリと止まった拳が引いていった。遥は先に立ち上がると、仰向けの滯に手を差し伸べる。蹴りつけられた肩に痛みを感じながらも、滯はその手を取り、軽く跳ねるようにして立ち上がった。

「1勝3敗1分けかぁ」

両手を腰に当て、悔しさを滲ませながら言う。

「最近、遥の拳や蹴りが強くなってきたみたい」

「男女の身体能力差が出てきたんだろうね。今まで大差なかったのが不思議なくらいだよ。悔しく思う気持ちはわかるけれど、その辺は仕方ないと割り切った方がいいんじゃないかな」

「わかってるけど……」

悠人の言うことはもっともだと思うが、今までずっと互角にやってきただけに、置いていかれた寂しさのようなものを感じる。頭ではわかっているけど、感情としては、すぐに受け入れることが出来ないのだ。

「差をつけられたくないんだったら、遥以上にトレーニングを頑張ること」

「ですよね……」

現実としてはそうするしかないだろう。もちろん遥も今までどおりトレーニングを続けるわけで、滯が少しばかり頑張ってみたところで、再び追いつくことは出来ないかもしれない。だからといって、努力しなければ置いていかれる一方である。

「師匠、久しぶりなんだから、アドバイスくらいしてくれない？」

ジャージの膝についた土を払いながら、遥はぶっきらぼうにそう切り出した。滯も同意して大きく頷く。怪盗ファントムを始めるようになってから、悠人はその準備に時間を取られてしまう

らしく、あまり濡たちの訓練に顔を出さなくなっていた。そして、昔のように自ら組み手をしてくれることもほとんどなくなっていた。だから、せめてアドバイスが欲しいと思うのは、弟子としては当然の心境だろう。

「そうだね……遥は劣勢になるとワンテンポ遅れることが多い。濡は攻撃がワンパターンになっている。つまり、遥は考えすぎ、濡は考えなさすぎてところかな。普段から数多くのパターンを訓練しておき、とっさに最適のものを選択できるようになれば理想だね」

「それ、このまえ言われたのと同じなんですけど」

濡はじとりとした視線を送って言い募った。一ヶ月ほど前にもらったアドバイスと、表現に違いはあるが、内容的にはまったく同じものだったのだ。適当にごまかそうとしているのか、忘れていたのかはわからないが、どちらにしても無責任なように思えた。しかし、彼は笑顔を崩すことなく反撃する。

「まずは指摘されたことを直してね」

「うっ……」

その至極もったもな正論には返す言葉もなく、濡は恨めしそうに口をとがらせて悠人を睨んだ。一方の遥は、両手を腰に当てて、諦めたように小さく溜息をついた。

昔からこういうことはよくあった。

悠人は、その穏やかな雰囲気とは裏腹に、本質をついた鋭いことを口にする。言われた二人は、カッと頭に血を上らせたり、悔しく思ったりしながらも、その感情をやる気へと昇華させるのだ。そうやって悠人が導いてくれたおかげで、種々の武術を身につけ、怪盗ファントムの動きをこなせるまでになったのである。

「二人とも今日の新聞を見た？」

悠人は思い出したようにそう言うと、後ろに置いてあった朝刊の一面を開いた。濡と遥は、それぞれ悠人の両隣に腰を下ろして覗き込む。そこには、ハンググライダーで目的地に向かう怪盗ファントムの写真が、カラーで大きく掲載されていた。

「わあ、今回はよく撮れてるね」

「また一面なんだ」

デビュー戦のあと、怪盗ファントムは立て続けに二つの案件を遂行した。両方とも一般的にはあまり知られていない絵画だったが、怪盗ファントムそのものが話題となり、大きくマスコミに取り上げられることとなったのである。ワイドショーでもコメンテーターたちがこぞって意見を述べていた。特に、過去の怪盗ファントムとの関係性は熱く論じられており、今のところ模倣犯と後継者で意見が二分しているようだった。

「ハンググライダーの操縦もすっかり板についてきたね」

「本当？ 師匠にそう言ってもらえると嬉しい」

濡はそう言って無邪気に笑った。しかし、反対側に座る遥はムッと仏頂面を見せる。

「僕もハンググライダーの特訓がしたかったのに、どうして濡だけだったわけ？」

「さあ、どうしてかな。剛三さんの指示だから仕方ないよ」

その思わせぶりな答えを聞いて、漑はどきりとした。

——剛三さんは、僕と漑を結婚させたがってるみたいだけどね。

先日の悠人の言葉が脳裏によみがえる。それが本当かどうかはわからないが、剛三の指示を受け、悠人と二人きりで行動することは確かに多い。三日間のハングライダー特訓も、花のところへ絵画を届けたのもそうである。他意はないのかもしれない。しかし、あんな話を聞いてしまったあとでは、どうしても疑念が湧き上がってしまう。

「まあ、バイクの練習も面白かったからいいけどね」

「そっちの方はどう？ もう乗れるようになったの？」

雑念を振り払うように、漑は意識的に明るく声を弾ませた。

漑がハングライダーの特訓をしていた三日間、遙は別の場所で大型バイクに乗る練習をしていたのだ。遙がハングライダー特訓をうらやましがったのと同様、漑もバイク特訓をうらやましく思っていた。

「普通に乗る分には問題なし。曲芸はまだ無理だけど」

「じゃあ、今度はバイクで怪盗ファントム登場だね！」

「そんな予定はないよ」

つれない素振りで受け流す遙に、悠人はぽんと大きな手をのせた。

「遙がやってみたいのなら、剛三さんに進言してみるよ」

「別に、僕はどっちでもいいけど……」

胸中を見透かされて戸惑ったのか、遙は視線を泳がせてぼそりと言った。普段は年上相手でも臆することなく応酬する遙だが、師匠の前では子供のままなのかもしれない。漑はくすりと笑みをこぼした。

「じゃあ、僕はそろそろ行くよ」

「え、もう？」

立ち上がった悠人を目で追いながら、漑は尋ねる。

「剛三さんが寂しがるからね」

悠人はそう答えてにっこりと微笑んだ。まさか剛三が寂しがり屋はしないだろうが、このところ悠人と自室で朝食をとることが多いので、今日も彼の戻りを待っているのかもしれない。

「二人ともストレッチを忘れずにやること」

「はい」

漑たちは軽く返事をして、芝生が短く刈りそろえられた庭に降りた。徐々にまぶしくなりつつある朝日を浴びながら、二人で運動後のストレッチを始める。その間、漑は奥に入っていく悠人を横目で捉え、見えなくなるまでずっとその背中を追っていた。

「いやー、憧れの美咲さんと初代ファントムにお会いできるなんて光栄っす！！」

「まあ、ありがとう」

ストレッチを終えた漑たちがジャージ姿のままダイニングへ入ると、そこには、これまでに見たことのないくらい調子のいい篤史がいた。漑たちの両親である美咲と大地を前に、ヘラヘラと

締まりのない顔をしている。

「篤史、お母さまに色目を使うのやめてくれる？」

滯は両手を腰に当てて冷やかに言った。篤史の言葉は大地にも向けられていたようだが、美咲のような女性が好みだと公言したこともあり、どうしてもそちらの方が気にかかってしまうのだ。あらためて母親の美咲を見てみると、化粧気のない顔でも十分すぎるほどきれいで、体つきは華奢な方だが女性らしく柔らかな丸みがあり、色気があるというのも何となく納得できる気がした。だからこそ、なおさら油断するわけにはいかないと思う。

篤史はうざったそうに一瞥を投げて反論する。

「色目じゃねえよ。純粹に科学者として尊敬してるだけだ」

「へえ、お母さまが何の研究してるのかも知らないくせに」

滯は喧嘩腰で切り返した。しかし、篤史は冷静に答える。

「『アトラス粒子衝突による生体高エネルギーの実現』だけなら一通り読んだぞ」

「えっ？ そうなの??」

美咲の研究はとても難しいと聞いている。実際、滯も論文を読もうとしたことはあったが、概要を眺めただけで読む気をなくしてしまっただけくらいだ。そのようなものを、まさか篤史が読んでいるとは思もしなかった。大学では工学を専攻しており、美咲の研究に関しては専門外のはずである。

「お母さまの気を引くためにそこまでやるなんて、意外と努力家なのね」

「おまえ、どういう目で俺を見てんだよ」

篤史は半ば呆れたように睨んだ。負けじと滯は嫌みたらしく言い返す。

「興味ないなんて言いつつ、お風呂を覗くムツツリでしょう？」

「入ってたのを知らずに開けただけだ。ちゃんと謝っただろう」

「謝ればいいってもんじゃないんだから！」

そのときのことを思い出すにつれ、滯の怒りは再燃してきた。

「だいたい『あ、ワリィ』って何?! どうってことないみたいに軽く言われたんじゃ、ちっとも謝られてる気がしないよ。土下座しろとまでは言わないけど、もっと心から申し訳なさそうに謝れないの? 動揺してたっていうのなら、まだ可愛げがあるけど.....」

「そんなたいしたもんじゃねえだろ」

「何ですって?!」

頬杖をついて飄々とあしらう篤史に、滯は顔を真っ赤にして噛み付いた。

しかし、そんな二人を眺めながら、両親はなぜか止めもせずニコニコと微笑んでいる。

「こういう賑やかなのも新鮮でいいわね」

「ああ、篤史君が来てくれて良かったよ」

「滯と遥のいい話し相手になってくれそうだよ」

「ちょっと、お父さま、お母さま?!」

滯はテーブルに手をつけて身を乗り出す。風呂を覗かれた件で言い合いしているのに、どうしてそういう展開になるのかわからない。剛三といい、両親といい、いったい篤史のどこが気に入

ったというのだろうか。これでは彼を追い出すことなど出来そうになく、滯の口からはもはや溜息しか出てこなかった。

「ねえ、篤史」

席について朝食を待つ間、遙はちらりと視線を送って呼びかけた。

「さっき怪盗ファントムに憧れてるとか言ってなかった？」

「ああ、おまえらには言ってなかったっけ。リアルタイムでは知らないんだけど、怪盗ファントムについて書かれた本とか読んでさ、俺、子供の頃からずっと憧れてたんだよな。だからハッカーやってるとき『phantom』を名乗ってたってわけ」

篤史はどこか得意げに答える。

そんな彼を、滯は頬杖をつきながら横目でじとりと睨んだ。自分からすれば、いくら格好良さそうに見えたからといって、実在の犯罪者に憧れるなどありえない。漫画やドラマとは違うのだ。もっとも、その正体が父親だったというのが複雑なところではあるのだが。

「だから怪盗ファントムの話を引き受けたってわけ？」

「ていうか、じいさんと悠人さんの勧誘が強引でさ」

篤史は思い出したように苦笑して答える。

「どこで俺のことを調べたのか知らねえけど、四畳半のアパートでカップラーメンすすってたら、じいさんと悠人さんがチェーンソーで扉をぶった切って乗り込んできたんだよ。啞然としてたら冷ややかに言いやがった。ハッカーのくせに自宅のセキュリティはなっとらんの、ってな。あんなイカレっぷりを目の当たりにしたら、断るなんて恐ろしくて出来ねえよ」

「……おじいさまに目を付けられたのが災難だったね」

滯は乾いた笑いを浮かべて同情的に言った。大地と美咲も申し訳なさそうに微笑んでいる。でっちあげかと思うほどに荒唐無稽な話だが、剛三ならこのくらい平然とやるだろうことは、近いものであればみな知っている。目的を達成するためなら手段を選ばないのだ。

「ま、結果としてそれなりに楽しくやってるし、美味しいメシも食わせてもらってるし、立派な部屋まで用意してくれたし、今のところまったく不満はないんだけどな」

篤史はそう言ってコーヒーカップを口に運ぶと、二人分はあろうかという朝食を平らげていく。

その豪快な食べっぷりに、美咲は目を細めてふふっと笑った。

「それなら良かったわ。無理やりじゃ申し訳ないもの」

「私は無理やりやらされてるんだけどっ」

滯が頬杖をついたまま口をとがらせると、篤史は涼しい顔でツッコミを入れる。

「とか言いつつノリノリじゃねえか」

「そんなことないもん！」

中途半端な態度では自身にも危険が及ぶだろうし、やるからにはきちんとやろうと思っているが、決して肯定的な気持ちで臨んでいるわけではない。怪盗などと格好良く言ってみたところで、結局は犯罪者でしかありえないのだから――。

「僕も最初は嫌々やっていたけど、次第に楽しくなっていったよ」

大地はむくれる滯を宥めるように言った。そして、美咲に視線を移して言い添える。

「おかげで美咲とも会えたしね」

「ああ、あの馴れ初め話……」

大地が怪盗ファントムとして絵画を返しに行き、そこでまだ少女だった美咲に出会った——滯はその話を思い出していた。美咲がそのとき怪盗ファントムに心を奪われ、怪盗ファントムを追って刑事がやってくる、といったような話である。

「お父さまから聞いたのね」

美咲は少し困ったようにそう言う。

「事実なんですか？」

「私も聞きたい！！」

篤史の単刀直入な質問に、滯も挙手して便乗した。美咲は苦笑を浮かべて答える。

「お父さまが気に入っている芝居があったあの話でしょう？ まったくの嘘ではないけれど、半分くらいはお父さまの作り話よ。大地が絵を返しに来たのは本当だけど、刑事なんて来てないし、心も盗まれてないし」

「美咲さんクール！」

篤史は白い歯を見せてパチンと指を鳴らした。

美咲はくすっと笑って付け加える。

「話題の怪盗さんがいきなり目の前に現れたんだもの。ただ驚くばかりだったわ」

「むしろ、心を盗まれたのは僕の方なんだよね」

大地ははにかみながら頭に手をやり、そう告白した。ちょっといい話のようにも思えるが、そのときの美咲はまだ小学生だったはずだ。デレデレと嬉しそうに話すようなことでもないだろう。

「だから母さんを橘の養子にしたの？」

「まあ、実は……」

どこか非難めいた遥の質問に、大地はきまり悪そうに答える。

「私は全く聞かされてなかったんだけど、大地とお父さまは最初からそのつもりだったらしいの。言い方は悪いけれど、罾に掛けられたようなものよね。分別ある大人のすることじゃないわ」

美咲は呆れたように小さく肩を竦めた。しかし、その表情はどこか優しく柔らかい。はなから息子と結婚させるつもりで養子にするなど、現代日本の価値観では異常なことかもしれないが、結果的に今が幸せであるからこそ隠さず笑って話せるのだろう。

「母さんが嫌がったらどうするつもりだったわけ？」

「そうならない自信はあったよ」

遥の手厳しい追及にも怯まず、大地は穏やかに答える。そして、隣的美咲と笑顔を交わして小指を立てた。

「赤い糸で結ばれてるって信じていたからね」

「素敵！」

滯は両手を組み合わせて目を輝かせた。二人が今でも仲が良いことは知っていたが、結婚に至る経緯を聞いたのは初めてである。二人が運命的なものを感じていたのだと思うと嬉しくなった。もっと詳しい話を聞きたいと身を乗り出すが、そうは思わない無粋な男たちに水を差されてしまう。

「今どき赤い糸なんて恥ずかしいこと言う人いるんだな……」

「赤い糸って、ただの身勝手な思い込みでしかないよね」

「もうっ！二人ともそういうこと言わないでよ！」

滯は思いきり眉をひそめて抗議する。せっかく両親の馴れ初め話に浸っていたのに台無しである。どうしてこの二人はこう捻くれているのだろうか、と腹立たしく思いながら、頬を膨らませてぶっきらぼうに頬杖をついた。

美咲はくすりと笑って立ち上がった。

「滯、遙、しゃべってばかりいないで、早く食事を済ませて準備しなさいね」

どことなく科学者を思わせる口調でそう言うと、肩より少し長い黒髪をなびかせ、颯爽とした足取りでダイニングをあとにする。大地もカップに残ったコーヒーを飲み干し、彼女の後を追うように小走りで出て行った。

篤史はコーヒーを口に運びながら尋ねる。

「おまえらどこか行くのか？」

「ちょっとした健康診断だよ」

遙の答えは幾分突き放したものだだったが、興味をひかれなかったのか、篤史がそれ以上の追及をすることはなかった。すぐに別の話題に切り替え、遙を巻き込んで盛り上がる。そんな二人の会話を耳にしながら、滯は曖昧に視線を落とすと、櫻井が運んできた洋風の朝食に無言で手を伸ばした。

「お母さま、これからもずっと忙しいの？」

「ええ、研究に終わりはないから」

遙とともに後部座席に乗り込んだ滯が、運転席の美咲に尋ねると、彼女はエンジンをかけながら他人事のように答えた。いささか対応が冷たく感じるのは、車に気を取られているからだろうか。ジャケットの袖口から伸びたすらりとした手でセレクトレバーを掴む。

「ごめんなさいね」

「えっ？」

ぽつりと落とされた謝罪を残したまま、四輪駆動車はゆっくりと滑り出した。地下の駐車場からスロープをのぼって外に出る。柔らかな光が溢れ込む中、美咲は振り返ることなく静かに言葉を継いだ。

「あなたたちには寂しい思いばかりさせてしまったわ」

「あっ、でも私には遙も師匠もいるから平気です！」

滯は心配させまいと慌てて答える。

美咲は前を向いてハンドルを握ったまま、くすりと笑った。

「悠人さんにはいくら感謝してもしきれないわね」

「うん……」

二人が中学生になるくらいまでは、毎日のように、悠人が宿題を見たり遊んでくれたりしていた。相談に乗ってもらったことも多々あった。秘書業をこなしつつ子供の面倒を見るのがどれだけ大変か、今の滯ならば少しは察することができる。

「滯、どうしたの？ そんなに暗い顔して」

「師匠、私たちの面倒ばかり見ていたせいで、恋愛も結婚も出来なかったのかなって」

先日の悠人の言葉が頭から離れず、自然と思考はそちらに向かう。しかし、事情を知らない遙には随分と唐突に感じられたのだろう。あからさまに訝るような視線を滯に向けた。一方、美咲は表情ひとつ変えることなく、ハンドルを切って大通りに合流する。

「だったら、責任を取ってあげれば？」

「えっ？」

「結婚すればいいのよ、悠人さんと」

「ちょ……！ なんでそうなるの?!」

滯は助手席のシートに手をかけてガバリと身を乗り出した。顔は湯気が立ちそうなほど熱くなっている。きっと傍目に見てもわかるくらい紅潮しているだろう。

美咲はくすくすと笑い出した。

「だってよく言ってたじゃない。師匠と結婚するとか、愛人にするとか」

「それ10年くらい前の話だし！」

母親に言ったかまでは覚えていないが、確かに、無邪気にそんなことを口にしていた。結婚はともかく愛人はどう考えてもおかしい。あの頃は、まだ言葉の意味をよく理解していなかったのだ。今となっては思い出だけでも恥ずかしく、出来れば触れてほしくないことである。

「悠人さんは満更でもないみたいよ」

「えっ……何、が……？」

「この前、大地が冗談半分に『滯と結婚するか？』って悠人さんに訊いたのよね。そしたら『滯さえ良ければ』って悠人さん……笑いながらだったけど、あれはけっこう本気だったんじゃないかなあ」

美咲は記憶を辿るように少し遠い目をして言う。その話を聞いていると、まるで滯自身の記憶であるかのように、悠人の表情や口調が鮮明に脳裏に浮かんできた。おそらく、先日の車中での姿と重なっているのだろう。滯はうつむきながら座席に腰を下ろした。その様子を、美咲が肩越しにちらりと一瞥する。

「あなた、他に好きな人がいるの？」

「……うん」

滯はそっと首元に手を当てて、布越しにピンクダイヤの存在を確認した。

「付き合っているの？ 相手はどういう人？」

「えーっと……今はまだ内緒にしたいんだけど……」

誠一のこととは、遥以外の誰にも言っていなかったが、美咲になら話してもいいと思っていた。

だが、それは17歳の誕生日までのことである。怪盗ファントムを引き受けた今となっては、彼氏が刑事だとはさすがに言いづらい。知られば反対されるだろうし、悪くすれば別れさせられるかもしれないのだ。

「そう言われると気になるわね。遥は知っているの？」

「悪い人じゃないよ。ちょっと頼りないけど」

どきりとして振り返った滯を無視し、遥は躊躇いもせずにさらりと言う。刑事であることに触れなかったのは、せめてもの配慮なのだろうか。本当はしらを切っただけなのに、第三者的立場で率直に言ってくれたことは、結果として強力な援護となったようだ。

「あなたたちを信じて、今は聞かないでおくわ」

美咲はそう言って車を止めた。同時に、信号が黄色から赤に変わる。

「この先、もしかしたら反対することもあるかもしれないけれど、自分が正しいと思うなら、簡単に諦めたりしないで全力で立ち向かいなさい。後悔のないように、選択を誤らないように」

その何か含みのありそうな言い方に、滯は漠然とした不安を感じた。上目遣いでバックミラーを見ながら尋ねる。

「お母さまは後悔しているの？」

「生きていれば誰でも多少の後悔はあるわよ。どんなに真剣に考えたつもりのことでもね。言っておくけれど、後悔しているのは大地との結婚のことではないのよ。だから、あなたがそんな顔をする必要はないの」

「う、うん……」

自分の気持ちをすべて見透かされていたようで、滯はきまり悪さに肩を竦めてうつむいた。

今度は遥が口を開く。

「母さんが研究に打ち込んでいるのは、後悔しないため？」

「……ええ、そうよ」

信号が青に変わった。美咲はゆっくりと車を発進させる。

「あなたたちにとって良い母親でないことはわかっているわ。でも、どうしても研究をやめるわけにはいかないの。子供より研究を優先だなんて、恨まれても仕方ないと思っているけど」

「これっぽっちも恨んでなんかないよ。むしろ、お母さまのこと誇りに思ってるから」

滯はこぶしを握りしめて静かに力説した。遥もきっと同じ気持ちだろう。寂しいと思うことはあっても、恨むなど絶対にありえない。一般的な母親像とは違うかもしれないが、自分にとっては自慢の母親なのだから――。

美咲は何も言わず、ただ薄く微笑むだけだった。

道を曲がるにつれて道路は狭くなり、それに比例して車通りも少なくなっていた。切り立った海沿いの坂道を上りきったところで、鬱蒼とした脇道に入り、その奥にある小さな駐車場に車を停める。さらにその奥の、森にひっそりと隠されたような白い建物が、滯たちの目的の場所だった。

財団法人 生体高エネルギー研究所――。

それは、美咲が所長を務める、美咲の研究のために作られた研究所である。橘財閥と橘剛三個人の財産抛出により設立されたと聞いている。その潤沢な原資のおかげで、存分に研究ができ、結果につながったという側面もあるようだ。

滯と遥は、ここで定期的に健康診断を受けている。

小さな子供の頃は、月に一度のペースで受診していた。今は三ヶ月に一度くらいだが、それでも一般的な基準と比べれば多い方だろう。なぜそれほどに頻繁に、なぜわざわざ研究所で——滯はこれまで何度も尋ねたが、納得のいく答えが返ってきたことはなかった。

美咲とともに、二人は研究所に向かって歩く。

ほとんど凹凸もなく窓らしい窓さえ見当たらない、ただ真っ白な箱のような外観は、人を寄せ付けない冷たい雰囲気醸し出していた。

実際、入口では厳重なセキュリティチェックが行われている。外につながる入口は二重扉となっており、外側の扉はIDと静脈認証、内側の扉は声紋認証で、そこを通過しなければ研究所内に入ることができない。もっとも同行者についてはこの限りでないが、事前に申請して許可を得なければならない、未申請の者がいると内側の扉が開かないらしいのだ。

「ここはファントムでも攻略するの難しそうだね」

「ファントムは絵画のないところには侵入しないよ」

「それはわかってるけど、もしもの話ね」

滯は背筋を伸ばして後ろで手を組み、隣の遥にニコッと笑いかけた。現実にはありえないことはわかっている。だが、怪盗ファントムならどうやってこの難関を突破するだろうか、悠人ならどんな思いがけない作戦を立てるだろうか、と考えることが楽しいのだ。

「やっぱり、さすがにここは無理かなあ？」

「きっと何か手段はあると思うよ。それを見つけられるか見つけられないかってだけのこと。完璧なセキュリティなんて存在しないって篤史も言ってたし。二人でここの実験データを盗む作戦でも考えてみる？」

「それ面白そう！」

悪戯っぽく口もとを上げて提案した遥に、滯はパッと顔を輝かせて答えた。

しかし、前を歩いていた美咲は、苦笑しながら二人を窘める。

「あなたたち、家の外でそういう不穏な会話はやめなさいね」

「あ、そっか」

滯はそう言って肩をすくめる。怪盗ファントムについては他言無用だとわかっているが、身内だけの安心感からか、誰かに聞かれる可能性も考慮しないで話題にのぼらせてしまったのだ。それに乗ってしまった遥も、少しばつが悪そうに笑みを浮かべていた。

三人は蛍光灯がともる無機質な廊下を進んでいく。

子供の頃、滯は今のように美咲に連れられていく途中、渋る遥を連れて逃げ出したことがあった。探険と称して勝手に研究所内を走り回り、あちらこちらの部屋を覗こうとしたのだ。もっとも、ほとんどは鍵がかかっていて開けられなかったのだが、美咲には随分こっぴどく叱られて

しまった。それ以来、無断で研究所内をうろついたことはない。だからといって美咲が案内してくれたこともなく、何度も訪れてはいるが、実際に研究しているところは一度も見ていないのである。

やがて、美咲は「医療室」のプレートが掲げられた部屋の前で足を止め、軽くノックして扉を開けた。

「お疲れさま、石川さん」

「お疲れさまです。いらっしゃい、濡ちゃん、遥くん」

美咲に続いて入った濡たちを、カルテを手にした白衣の男性がにこやかに迎える。彼はここの副所長であると同時に、美咲の共同研究者でもあると聞いている。そして、医師免許を持っているためか、濡たちの健康診断の担当でもあった。

「こんにちは、石川さん。今日はよろしくお願ひします」

濡が礼儀正しく挨拶をすると、遥も無言ながら軽く会釈した。

こちらこそよろしく、と石川は穏やかな笑顔で応じながら、仕切りの薄いカーテンを開く。いつものように準備はすでに整えられていた。手前には種々の測定器が所狭しと据え置かれ、奥には心電図検査用の機器とともにパイプベッドが二つ並んでいる。

健康診断の内容はごく一般的なものだ。

基本的な身体測定、血圧測定、尿検査、血液検査、心電図くらいである。胸部エックス線検査については、学校の健康診断で必要十分であるため、ここでは行わないと言っていた。あとは、石川が気になるところを対面で診察するくらいだ。

「それでは検診お願ひしますね」

「お任せください」

柔和ながらも頼もしく答える石川に、美咲は口もとに微笑をのせて目を細める。そして、肩より少し長い黒髪をさらりと揺らして踵を返すと、タイル張りの床にパンプスを響かせながら医療室を出て行った。

その日も健康診断は無事に終わった。

結果が後日になるものもあるが、判明している限りでは、どこにも異状はないということだ。三ヶ月前に異状なしと診断されたばかりで、そのあと自覚症状もないのだから当然だろう。

「次はまた三ヶ月後？」

立ったまま上着の袖に手を通しながら、遥はぶっきらぼうに問いかけた。面倒に感じていることは、その口調からありありと伝わってくる。石川は少し申し訳なさそうに「そうだね」と答えて、大きな背もたれのついた回転椅子にゆったりと腰を下ろした。

「ここは自宅から遠いし面倒だろうけど、こまめに検査するのは悪いことじゃないよ。病気は早期発見が肝だからね。それだけ君たちは大切に思われてるってことなんじゃないかな」

「石川さんもこまめに検査した方がいいんじゃない？ 血圧とか血糖値とか高そう」

「ちょっと、遥っ！！」

あまりにも失礼すぎる彼の物言いに、後ろの長椅子で待っていた濡は、思わず弾かれるように

立ち上がった。

しかし、気持ちは何となくわかる気がした。

彼もまた石川の説明には納得しておらず、だからこそ、あんなにも挑発的に切り返したのだろう。にもかかわらず、見た目そのままの温厚な性格である石川は、逆上することもなく、まいったなと頭に手をやり苦笑するだけだった。

「それじゃ、二人とも気をつけて帰ってね」

研究所を出たところで、美咲は軽く右手を上げてにこやかに見送る。帰るのは滯と遥の二人だけで、仕事がある美咲はここに残るのだ。ジャケットを白衣に着替え、黒髪を後ろで一つに束ね、すっかり研究者の姿になっている。

「お母さまも体には気をつけて」

「ええ、ありがとう」

休日もないくらい研究に没頭している母親のことが、滯は本当に心配だった。今のところ大きく体を壊したことはないらしいが、このまま無理を続けていけばどうなるかわからない。たまにはゆっくり休暇を取るように言っても、そうね、と気のない曖昧な相槌を返すだけである。研究のためには一分一秒も惜しいようなのだ。そんな彼女の傍らに、常に医師の石川がついていることがせめてもの救いである。

滯たちは美咲と別れて駐車場に降りていく。

その途中、遥は携帯電話でタクシーを呼ぼうとしたが、滯はそっと手を掛けてそれを制止した。

「今日は歩いて帰らない？」

「……家まで？」

少しの間のあと、遥は怪訝に眉をひそめて尋ね返した。滯は笑いながら答える。

「まさか。坂を下りたところにバス停があったよね。そこからバスと電車を乗り継いで帰れるかなって」

さすがに自宅まで徒歩だと今日一日つぶれてしまうだろう。歩いてとは言ったものの、そこまで無謀なことは考えていなかった。しかし、バス停まででも結構な距離があり、さらにそこから乗り継ぎつつ帰るとなると、軽く見積もっても二時間はかかりそうだ。

「なんでそんな面倒なことしたいわけ？」

「んー、何となくそういう気分。ダメ？」

「まあいいけど……」

今ひとつ納得のいかない様子ながらも、遥はとりあえず了承してくれたようだ。携帯電話を折り畳んでズボンのポケットにしまうと、木々の生い茂る細道を歩き始める。滯は小走りで隣に並んで歩調を合わせた。

「今さらだけど面倒だよね。三ヶ月ごとに健康診断なんて」

ほとんど車通りのない崖沿いの道路を、二人はゆったりと並んで歩いていた。大きく開けた海

側に目を向けると、荒れているというほどではないが、暗色の海面が不規則に波立っているのが見えた。対照的に、上方には優しい色の秋空が広がっている。そこにかかる薄い雲は、緩やかに形を変えながら流れていた。

遥は遠くを見つめて口を開く。

「小さい頃は毎月だったよね。健康診断だけじゃなくて、点滴を打ったり、薬を飲まされたり」「そうそう！あれ、いまだに何だったのかよくわからないんだけど、どこか悪かったのかなあ」

遥に言われて思い出したが、昔は健康診断だけでなく点滴も受けさせられていた。二人並んでパイプベッドに横たわり、オレンジ色の液体が一滴ずつ落ちていくのを、何時間も眺めていた遠い記憶がある。「元気になるおまじない」と母親が言っていたことから、何らかの治療であることは間違いないだろう。

遥は目を細めてくすっと笑う。

「濡、よく言ってたよね。私たちもうすぐ死んじゃうよ、とか」

「だってそう思うじゃない」

基本的には能天気なくらいに明るい濡だが、何か引っかかることがあると、突拍子もない極端な心配をする傾向がある。特に子供の頃はそれが顕著だった。

「死ぬような病気ではなかったにしても、毎月点滴を受けさせられてたんだから、多分どこかは悪かったんだろうね。僕たち二人ともってことは、遺伝性や生まれつきの何かかな。一応もう治ってはいるんだろうけど、今もそのことが心配で、こんなに頻繁に健康診断を受けさせてるんだと思うよ」

遥は論理的な推測を述べる。

しかし、濡は釈然としなかった。もしも本当に体のことを心配しているのなら、武術の訓練など、ましてや怪盗なんて危険なことをやらせはしないのではないか。矛盾というほどではないが、何かしっくりとこないのだ。

「私たちこんなに元気なのに、何が心配なんだろう？」

「さあ、母さんたちの取り越し苦労だといいいんだけど」

緩やかなカーブに差し掛かり、濡は引き寄せられるように道路の向かい側に渡った。いつも車中から視界に映していた崖沿いの風景を、あらためてじっくり見てみたかったのだ。長くまっすぐな黒髪をなびかせながら、大きく息を吸い込み、ガードレールに手を掛けて空を見つめる。あまりきれいとは言いがたい海から、ほのかな潮の匂いが風に乗って運ばれてきた。

「わあ、ここけっこう怖いよ。落ちたら助からないかも」

身を乗り出して真下を覗き込むと、岩肌が剥き出しの切り立った岸壁が見えた。波が叩き付けられるたび、弾けて白い泡が立っている。濡の後方で立ち止まっていた遥は、あからさまに嫌そうな顔で眉をひそめた。

「やめなよ、濡」

「大丈夫だって」

下を向いたまま、濡はあははと笑って答える。

「濡！！」

突然、遙は焦燥した鋭い声を上げると、驚くほどの力で濡の上腕を引いた。濡がよろめいて転びかけても手を離そうとせず、切羽詰まった様子で必死にあたりを見回している。

「ちょっと、どうしたの？」

「いいから来て！！」

遙は問答無用で濡を連れて道路を横切り、群生するすすきに飛び込んで身を潜める。

「な……」

なんなの？と言いかけた濡の口を、後ろから遙がふさいだ。その胸に寄りかかる格好になりながら、濡は背後の彼に疑問の眼差しを向ける。その答えの代わりに、静かに、という囁き声が耳元に落とされた。

遠くからバイクのエンジン音が聞こえた。

息をひそめて、黄金色のすすき越しに目を凝らす。バイクはあっというまに前を通り過ぎ、視界に入ったのは一瞬だったが、それだけで遙が何を警戒しているのか理解した。そのバイクに乗っていた人物は、以前、濡や遙をじっと観察していた男に違いない。フルフェイスのヘルメットで顔は見えなかったが、そのヘルメットもバイクも同じで、長身のすらりとした体型もそっくりなのだ。

とりあえず、気づかれなかったことに濡は安堵した。

遙はいまだに警戒を解いていないようで、険しい表情のままだったが、濡の口をふさいでいた手は外してくれた。ほっと息をついた濡に「待ってて」と耳打ちすると、慎重にすすきを掻き分けて顔を出し、バイクが走り去っていった方向を確認する。

「大丈夫だよな？」

濡は四つん這いになって彼の隣に進み、様子を窺おうと後ろから首を伸ばす。と、いきなり頭を強く押さえつけられて地面に崩れ落ちた。

「な、なにっ？」

「静かに！」

遙も、隣で顔をこわばらせて頭を低くしている。

ブロロロロ——。

坂の上方から先ほどと同じエンジン音が聞こえてきた。次第に大きくなる。どうやら、いったんは通り過ぎた例のバイクが戻ってきたようだ。二人は息を止めて、再び通り過ぎるのを待った。

しかし、そのバイクは濡たちの前で止まった。

男はエンジンをかけっぱなしでサイドスタンドを下ろし、フルフェイスのヘルメットを外した。20代くらいだろうか。どちらかというとき色白で、すっと通った鼻筋、薄い唇、理知的な鋭い眼差し——精悍というよりは、整ったきれいな顔という印象だ。長めの前髪をざっくりと掻き上げながら、ヘルメットを片手で掴み直すと、何かを探るような目つきでゆっくりと振り向く。まるで、そこに濡たちがいることを知っているかのように。

どうして——？

濡は地面に伏せたまま身震いした。遙が勇気づけるようにその肩を抱いたが、彼の手も心なし

か震えているように感じた。固唾を呑んで、二人は生い茂るすすきの隙間を凝視する。

男は目を細めると、濡たちの方へ足を踏み出した。

濡はごくりと唾を飲んで胸に手を当てた。心臓が壊れそうなほど強く打っている。何が起きているのか、どうすればいいのか、頭の中は真っ白で何も考えられない。そのとき、肩に置かれた手がトントンと小さく動き、呼ばれるまま息を詰めて振り向く。

遥は真剣な顔でバイクを指差していた。

それだけで、濡は言わんとすることを理解した。そう、あの男の思惑はいまだにわからないが、今やらなければならないのは自分たちの身を守ること。そのためには手段を選んでいられない。二人は目を見合わせて互いに頷き、音を立てないようにそろりと身構える。

とうとう男は道路脇までやって来た。茂みを掻き分けようと手を伸ばす。

その瞬間、二人は一斉に地面を蹴って飛び出した。濡は握っていた砂を男の顔面に投げつけ、怯んだ隙に、側頭部に全力で回し蹴りを放った。それは見事に直撃する。男はよろけながら小さな呻き声を上げ、崩れるように片膝をついた。フルフェイスのヘルメットが、アスファルトの道路に弾んで転がっていく。

「濡！！」

遥はサイドスタンドを跳ね上げて男のバイクにまたがり、急かすように名前を呼んだ。そして、濡が後部座席に飛び乗ったのを確認すると、いまだ目が開けられないその男を残し、丁寧にゆっくりとバイクを発進させる。

「待て、おまえらっ！」

男は片目をつむり顔をしかめたまま、よろよろと走り出す。

「追いかけてくるよ！」

「追いつけっこないよ」

遥の言うとおりの、心配する必要などなかった。こちらは大型バイクで、向こうは駆け足なのだ。当然のように、男との距離はみるみる開いていき、やがてカーブを過ぎて姿も見えなくなった。

遥は無言でバイクを走らせている。

彼の広くはない背中に頬を寄せ、濡は、その腰にまわした手にぎゅっと力を込めた。長い黒髪が風になびいて大きく舞い上がる。少し肌寒さを感じたものの、正面から風を切っている遥に比べれば、きっとだいぶましなのだろうと思う。

やがて、濡が向かおうとしていたバス停に着いた。遥はそこでバイクを止める。

「バイクはここまで」

「どうして？」

濡は首を傾げ、後ろから遥の横顔を窺う。

「ノーヘル、無免許、盗んだバイク。これで町を走るわけにはいかないよ」

「あ、そっか」

バイクの乗り方は教わった遥だが、まだ免許は取得していなかった。ヘルメットも被らず走っ

ていれば、間違いなく警察に止められ、無免許もバイク盗難も露見することになるだろう。漣はバイクの後部座席から降りると、腕時計を確認し、バス停のポールに掲示されている時刻表を覗き込む。

「良かった、あと五分くらいでバスが来るよ」

一時間に一本くらいしか来ないようだが、幸いそれほど待たずに済みそうだった。

遙はエンジンを切ってサイドスタンドを下ろし、漣の方へ足を進めると、今にも触れ合いそうな距離で肩を並べた。その表情は少し硬く見える。どうやら、まだ完全には気を緩めていないようだった。

冷たい風が二人の正面から吹き付ける。

大きく乱れる黒髪はそのままに、漣は視線を落として切り出した。

「あの、私たちを追ってあそこまで来たのかな」

「さあ、そういう感じには見えなかったけど」

男がやって来たのは漣たちが帰る頃である。後をつけてきたにしては遅すぎるだろう。今日の健康診断については家族と研究所の人間しか知らず、男がその情報を掴んでいたとも思えない。漣は小首を傾げて遙に振り向く。

「じゃあ、ただの偶然？」

「あの先に用があったのかもしれないね」

「あの先……それって、研究所のこと？」

「それはどうだかわからないけど」

漣と遙を付けまわしたうえ、研究所周辺までうろつくなど、いったい何が目的なのだろうか。まるで着々と包囲網を敷かれているようで、そのうち絡め取られてしまうのではないかと不安になる。

「大丈夫かな……」

思わず、そんなかぼそい独り言が口をついた。遙は無言のまま漣の頭をそっと引き寄せる。その手から伝わる心地よい温もりに、漣もただ黙って身を委ねていた。

薄汚れた路線バスが、急ブレーキをかけて漣たちの前で止まる。

折扉が開くと、乗客のいないガラとしたその中に、二人は手を取り合って駆け込んだ。すぐに、バスは荒っぽい運転で走り出す。揺れる視界の先で、置き去りにしたバイクが次第に小さくなるのを、二人は立ったまま並んで見送った。

## 7. 師匠の恋人

---

照明を心持ち落とした大広間で、ドレスアップした女性やスーツ姿の男性たちがあちらこちらに集まり、シャンパングラス片手に和やかに談笑している。壁にはいくつもの絵画が飾られており、それらを論評している人たちも多い。

漣は、多少の緊張を感じながらも、背筋をすっと伸ばして足を踏み入れた。淡いベージュのパーティドレスがふわりと揺れ、シャンパンゴールドのショールが華やかになびく。その後ろには、ダークスーツを着た悠人が付き従っていた。

「橘漣さんですね？」

入ってすぐ、盛装した中年の男性に声をかけられた。それがこの大きな屋敷の主であり、パーティの主催者でもある、画商の中堂徹（ちゅうどう とおる）であることはすぐにわかった。面識はなかったが、事前に彼のインタビュー記事を読んでおり、そこに掲載された写真も目にしてきたのだ。

「初めまして、橘漣です。本日はお招きいただきありがとうございます」

淀みなくそう答えると、漣は唇に微笑をのせてお辞儀をした。艶やかな長い黒髪がしなやかに揺れる。

「こちらこそ、橘財閥の方に、それもこのような美しいお嬢様にお越しいただけて光栄です」

中堂はオーバーな身振りと抑揚で歓迎の意を表した。いかにも商売人らしい低姿勢な振る舞いであるが、獰猛な獣のようなぎらついた眼差しだけは隠せていない。漣は僅かに目を細めて、話題を変える。

「祖父の都合がつかなくなってしまい、本当に申し訳ありませんでした」

「いえいえ、お忙しい方と存じておりますので」

中堂は恐縮して肩をすくめると、ふと媚びるような表情を覗かせる。

「また機会があれば是非に、と橘会長にお伝えください」

「はい、必ず申し伝えておきます」

漣は愛想良く答えた。たとえ相手が気に入らなくても、それを表に出すことは許されない。中堂に悪い印象を与えないよう振る舞うことが、今日の漣に与えられた役割のひとつである。橘家の人間としての、そして怪盗ファントムとしての――。

剛三が狙いを定めた絵画が中堂家にあるということで、ちょうど招待されていたパーティに出席し、漣と悠人が屋敷を下見してくるようになったのだ。定期的に行われているこのパーティは、絵画に関心のある富裕層に、将来有望な若手画家の作品を紹介するのが主目的で、すなわち画商の中堂にとってはビジネスの一環である。剛三にも幾度となく招待状が送られていたが、面識のない相手ということもあり、これまではことごとく無視してきたらしい。にもかかわらず、怪盗ファントムの下見に都合良く利用するなど、漣は心苦しさを感ぜずにはいられなかった。もっとも、そんな道徳的な抗議は、いつものごとく剛三に軽く流されてしまったのだが。

中堂はドリンクを運んでいたウェ이터を呼び止め、悠人にはシャンパンを、滯にはシンデレラという名のノンアルコールカクテルを持ってこさせた。ノンアルコールとはいえ、きちんとしたカクテルグラスに入っており、見た目は普通のカクテルと大差ない。その配慮が、未成年の滯には嬉しかった。味は上品なフルーツミックスジュースといった感じで、華やかな甘みの中に酸っぱさもあり、少しずつ口をつけるにはちょうど良さそうである。

「由衣、幹久、ちょっと来なさい」

少し離れたところで歓談中のグループに向かって、中堂がそう手招きをすると、すぐにその輪から二人が抜け出してこちらへやってきた。ひとは柔らかく上品な雰囲気的女性で、もうひとは若く活気にあふれた青年である。優美で端正な面差しが互いによく似ており、二人が血縁関係にあることは一目で察しがついた。

「紹介しよう、妻の由衣と、息子の幹久だ。こちらは橘財閥ご令嬢の滯さんと、会長秘書の楠悠人さん。今日は橘会長の代理でいらしてくださったのだよ」

「初めまして」

滯は明るくにこやかに挨拶をした。由衣も慎ましやかな笑顔で応える。

「初めまして、滯さん……お久しぶりです、悠人さん」

「高校卒業以来ですね」

これまで後ろで静かに控えていた悠人が、穏やかに口を開いた。滯は思わずドリンクをこぼしそうな勢いで振り返り、同じく寝耳に水だったらしい中堂も、あまり大きくはない目を丸くしている。

「お知り合いで？」

「ええ、由衣さんとは高校の同級生でした。二十数年ぶりの再会です」

悠人は驚いた様子もなく平然としているが、普段からあまり感情を見せる方ではないため、偶然に出会ったのか予め知っていたのか判別がつかない。しかし、どちらにしても仕事がやりにくいのでは、と滯は少し心配になる。

一方の中堂は、心から嬉しそうに目を輝かせていた。

「なんと奇遇ですな！ これも何かの御縁でしょうか」

現実として否定が許されないその問いかけに、悠人は言葉の代わりに笑顔で応じる。

「由衣と積もる話もあるでしょうし、どうぞごゆっくりなさってください。滯さんもどうぞ楽しんでってください。また後ほどゆっくりとお話しいたしましょう」

中堂はそう言って丁寧な所作で一礼すると、息子の幹久だけを連れて、他の招待客の挨拶まわりに向かった。由衣を置いていったのは、久方ぶりの再会を果たした二人への気遣いというよりも、何とかして橘財閥と繋がりを持ちたい彼自身の野望のように思えた。

「悠人さん、回廊を歩きながら少しお話ししません？」

由衣は少女のように愛らしく首を傾げて尋ねる。その声には、先ほどまでの落ち着いたものとは違う、緊張と期待の入り交じったような響きがあった。しかし、悠人は微笑を保ったまま事務的な答えを返す。

「いえ、私はお嬢様に付き添う義務がありますので」

「私は大丈夫よ。由衣さんとお話してきてちょうだい」

まるで自分が原因であるかのような断り方に、漣は多少の腹立たしさを覚えながらも、あくまで上品な態度を崩すことなく言う。その瞬間、彼の表情に微かな困惑が見えたような気がした。

「ですが……」

「行ってきて」

「承知しました」

反論を呑み込んだ悠人を見て、漣は密かにくすりと笑った。

普段は武術の師匠と弟子という関係だが、対外的には橘の孫娘と会長秘書であり、橘財閥の人間として表に出るときは、そう振る舞うよう言いつけられている。小さな子供の頃は呼び方を変えるだけで精一杯だったが、最近では役割を演じることを楽しむようになっていた。調子に乗りすぎて、あとで悠人から逆襲されることも間々あるのだが――。

「あなたが橘財閥の会長秘書をしていたなんて驚いたわ」

緩やかなカーブを描いている白い回廊は、片側が全面ガラス窓になっており、そこから目映い陽光が溢れ込んでいた。由衣はガラス窓にそっと左手を置き、隣の悠人を優しい眼差しで見上げている。しかし、悠人は彼女に目を向けることなく、気怠そうに腰から手すりにもたれかかっていた。

師匠じゃないみたい――。

こっそり二人の後をつけて覗き見ていた漣は、これまで目にしたことのない彼の姿にドキリとした。無表情か、真顔か、笑顔か……漣が知っているのはそのくらいで、今のような隙のある表情は見たことがなかった。立ち居振る舞いも、いつもきっちりしている彼とは別人のようである。こういう素に近い自分をさらけ出せるのは、昔を知る相手だからだろうか。それとも――高鳴りゆく鼓動を感じながら、漣は息を詰めて二人を注視する。

「こちらこそ、あなたが有名画商の妻に納まっていたなんて驚いた」

「美大在学中に中堂に見初められて結婚したの」

由衣は曖昧な笑みを浮かべた。ガラス窓に置かれたすらりとした左手を、ゆっくりと握りしめていく。薬指にはめられたプラチナの指輪が、窮屈そうに食い込んで見えた。

「画家になる夢は？」

「私にそこまでの才能はなかったみたい」

おどけるように肩をすくめてそう言うと、くるりと身を翻し、悠人と同じように背中から手すりにもたれかかった。そして、どこか遠いところを眺めながら、過去に思いを馳せるように、その気持ちをなぞるように、ゆったりとした柔らかな口調で続ける。

「結婚するまでは必死に努力していたのよ。なんとしても画家になりたかった。いつか、怪盗ファントムに盗んでもらえる絵を描けるようになりたかった。そうすれば、もう一度あなたに会えるような気がして……」

「僕は怪盗ファントムじゃない」

「引退なさったのよね」

由衣はまるで事情を知っているかのように言う。

「最近、また怪盗ファントムが活動を始めたでしょう？ あなたではないみたいだけれど、無関係とはとても思えなくて。だから、この絵画を狙ってくれることを密かに期待していたの。そうしたら、あなたにも会えるんじゃないかって」

「相変わらず意味のわからないことを言うんだな」

悠人は煩わしげに溜息をついた。それでも由衣は懲りずに続ける。

「今日は下見にいらしたの？」

「ええ、会長が気に入っている若手画家の作品をね」

噛み合わない問いと答え。由衣の意図をわかっているのだろうが、悠人はあくまでも表向きの話をした。そして、鬱陶しそうに前髪を掻き上げると、手すりから体を離して立ち去ろうとする。その後ろ姿に、由衣は縋りつくような目を向け、両手を重ねてそっと胸元に置いた。

「もしも怪盗ファントムがここに盗みに入るのなら、ついでに、私も……盗んでもらえないかしら？」

カツン——革靴を打ち鳴らして悠人の足が止まった。ゆっくりと振り返る。そして、にっこりと満面の笑みを浮かべると、その表情とは対照的な、ぞっとするほどの冷たい声で言う。

「あなたに名画ほどの価値があるとでも？」

力が抜けたように由衣の腕が降りていく。半開きの唇からは何の言葉も紡がれない。彼女は僅かに潤んだ目を細め、遠ざかる悠人の背中を、ただ寂しげにじっと見送るだけだった。

「楠サン、ちょっと」

「どうかしました？ お嬢様」

回廊の反対側から急いで大広間の前に戻り、仁王立ちで待ち構えていた漣は、悠人の腕を掴んで人通りのない通路に連れ込んだ。奥にある部屋はすべて物置か何かのようで、通り抜けることもできないため、パーティ時にわざわざここに来る人はいないだろう。

「師匠、あの態度はないんじゃないですか？」

「漣の方こそ、下手な覗き見は感心しないな」

両手を腰に当てて咎める漣に、悠人は悪びれることなく反撃する。どうやら漣が見ていたことは知っていたらしい。知っていてあんなことを言うなんて——漣はいっそう表情を険しくすると、眉間に縦皺を刻みながら、下から覗き込むようにして悠人を睨んだ。

「ねえ、由衣さんって師匠の元カノ？」

「よくわかったね」

悠人はにこやかな笑顔を保ったまま答える。その余裕の態度が、漣にはなおさら腹立たしく感じられた。

「彼女、まだ師匠のことが好きなのよ。なのにあんな冷たい言い方……」

「関係ないよ」

悠人の瞳に鈍い光が宿った。

「いい迷惑だね。二十数年ぶりに会って突然あんなことを言う彼女の方がどうかしてるだろう。もう二度とつきまとわれたくないんだよ。濡との結婚を邪魔されるようなことはごめんだ」

最後の言葉に、濡は大きく目を見開いた。

「師匠、あの……結婚って……？」

「ああ、口を滑らせてしまったな」

悠人は顔をしかめてそう言ったが、すぐに平静を取り戻して続ける。

「まあ、つまりそういうことだから、今さら由衣とどうこうなるつもりはないし、こんな大事な時期に現れて本当に迷惑しているんだ。濡ももう由衣のことなんか気にしなくていい。僕が結婚する相手は濡しかいないんだから」

「なんですかそれ……私、師匠と結婚なんて絶対にしませんから！！」

彼のあまりにも身勝手な言いように、濡はカッと頭に血を上らせて言い募った。顎を引いて上目遣いに睨みつけると、踵を返し、全力で走り去りながらギュッと目をつむる。

頭が混乱していた。

悠人の言った「そういうこと」とは、どういうことなのだろうか。二人を結婚させたがっている剛三が話を進めているのだろうか、それとも単に悠人がそうしたいと願っているだけなのだろうか。どちらしにしても、了承してもいないのに決定事項のように言うなんて、ましてやそれを言い訳として持ち出すなんて、濡には馬鹿にしているとしか思えなかった。そして何より、由衣の想いをあれほど容赦なく踏みにじったという事実が、とても信じられなく、とても許せなかった。

「きゃっ……！」

濡が細い通路から飛び出して曲がった直後、そこにいた人物と正面からぶつかった。慣れないハイヒールで足下がぐらつき、バランスを崩して廊下に倒れ込む——はずだったが、すんでのところで相手に抱き留められた。

「あ……ありがとうございます……」

「いいえ」

にっこりと紳士的に濡を立たせたその相手は、先ほど紹介された中堂家子息の幹久だった。その優しげな顔立ちとは裏腹に、意外と胸板が厚く、男らしく逞しい体つきをしている。なぜこんなところにいたのかも気になるが、それより問題は——。

「あの、もしかして、話……聞いてました？」

濡が上目遣いでおずおずと尋ねると、彼は少しきまり悪そうに肩をすくめた。

「すみません、聞くつもりはなかったんですが」

「えっと……どのあたりから……でしょうか？」

「シヨーと結婚なんてしない、というところだけですよ」

その答えを聞いて、濡は密かに安堵の息をついた。由衣が悠人の恋人だったとか、今でもまだ未練があるとか、彼女の息子には知られたくないし、知られてはならないことである。元の鞘に収まるのが期待できないのなら尚更だ。

「同じですね」

「えっ？」

「うちも、父が勝手に縁談を持って来るんです」

幹久は真面目な顔でそう言うと、光の溢れるガラス窓の方へ歩を進めた。母親譲りのすらりとした白い手を、木製の手すりに置き、薄い雲のかかった柔らかな青空を見上げて目を細める。

「僕はまだハタチになったばかりなのに……いいえ、年齢は関係ないですね。父には生意気だと言われるかもしれませんが、自分の伴侶は自分で見つけたいと、子供の頃からずっとそう思ってきました」

「私もです」

幹久も似たような境遇に置かれているのだと、そして同じような考えを持っているのだと知り、滯は急に親近感を覚えた。軽やかな足取りで彼の隣に進むと、顔を上げ、親しみを込めてニコリと微笑みかける。彼も、目を細めて優しく微笑み返した。

「僕は、どうやら見つけられたみたいです」

私も、見つけられたのかな——。

滯は胸元の小さなピンクダイヤに右手を重ね、そっと柔らかく目を閉じた。これからも誠一と過ごしていきたい、人生をともに歩んでいきたい——そう思う気持ちは、決して若気の至りなどではないと信じている。実現するには困難を伴うかもしれないが、それでも絶対に諦めるつもりはない。

「少し、歩きませんか？」

「ええ」

誘われるまま、滯は幹久と並んで光の溢れる回廊を歩き始める。そのとき、悠人が通路脇からこちらを見ていることに気づいたが、あえて素知らぬ顔をして、見せつけるように幹久と談笑しながら通り過ぎた。

「滯、まだ怒ってるの？」

「だってひどいんだもん」

ノートパソコンに向かう悠人を睨みながら、滯はベッドの上で胡座をかき、思いきりむくれて頬を膨らませていた。今日の出来事を思い返すだけで頭が沸騰しそうである。下見の報告書作りという用件さえなければ、こんなところ、すなわち悠人の部屋になど来たくもなかった。

「女心を踏みにじるなんて最低じゃない」

パーティ会場に戻ってからも、悠人の由衣に対する態度はひどいものだった。他の人がいるときは常識的に振る舞っているが、由衣と二人になると、途端に冷ややかな言葉を吐いて彼女をはねつける。いくら彼女の想いを受け入れる気がないとはいえ、いい大人のとる態度ではないだろう。

「そういう滯も、僕の男心を踏みにじったけどね」

「今は師匠の話をしているの！！」

前のめりになって語気を荒げると、そのまま、眉を寄せてじとりと彼の横顔を見つめる。

「どうしてそこまで由衣さんのこと邪険にするのかなあ？」

そう尋ねかけても、悠人はまるきり無視してキーボードを打ち続けている。まるで触れてほしくないと言わんばかりだ。二人の間には何か余程のことがあったのだろうか。漣は回廊でのやりとりを思い起こしながら、その場でごろんと横になった。老朽化したスプリングがギシギシと濁った音を立てる。

「漣、まだ髪が乾いてないんじゃないの？」

「わざとベッドを濡らしてるんだもん。この冷たいベッドで、冷たい態度を反省すればいいのよ」

悠人はちらりと漣に視線を流し、くすっと余裕の笑みを浮かべた。完全に子供扱いされてる——漣はムツとしたが、確かに幼稚な仕返しだという自覚はあったので何も言えなかった。寝転んだまま大きな枕を抱きしめ、報告書作りを続ける悠人をじっと見つめる。

「ねえ、由衣さんとはどうして別れたの？ 師匠がふったの？」

「……彼女、何かと思い込みが激しくてね」

少しの間のあと、悠人はキーボードを叩きながら静かに口を開く。

「漣も聞いていてわかっただろうけど、僕のことを怪盗ファントムだと思い込んでいて、何かにつけて決めつけたように探りを入れてきてさ」

「思い込みっていうか、それほとんど事実ですしね」

厳密に言えば怪盗ファントムは大地になるのだろうが、悠人はその影武者をやっていたのだから、彼女の推測はほぼ的を射ていることになる。とはいえ、それを認めるわけにいかないこともわかっていた。

「いくら違うと言ってもまるで聞く耳を持たなくてね。疑うのも確信するのも勝手にすればいいと思っていたけど、いちいち僕に言うのが鬱陶しくて仕方なかった。それでも僕なりに耐えていたよ。だけど、大学も別々になったし、いい機会だと思って高校卒業で彼女とも別れたんだ」

「由衣さんは打ち明けてほしかったのよ。きっとそれだけだったんだと思う」

秘密を守り続けねばならなかった悠人も、秘密を打ち明けてもらえなかった由衣も、互いにつらかったのだろう。怪盗ファントムさえなければ、恋人としての時間を楽しく過ごせていたかもしれない。もしかしたら結婚していた可能性だってあるのだ。そう考えると、漣にはとても他人事とは思えなかった。もしも、誠一に怪盗ファントムだと疑われたとしたら——。

「やけに彼女の肩を持つね」

「そういうわけじゃなくて……ねえ、やっぱり今からでも遅くないんじゃない？ やり直そうよ。師匠と結婚するなら怪盗ファントムのことを話してもいいんでしょう？ 由衣さんはもう子供だって成人してるんだし、離婚にそれほど支障があるわけでもないと思うの」

ベッドから体を起こして真剣に訴える。しかし、悠人には伝わらなかったようだ。

「漣、僕を厄介払いしようとしてない？」

「そんな……私は、師匠に幸せになってもらいたいだけ」

「どうかな」

マウスを操作しながらそう言うと、椅子をまわして濡に向き直った。

「一通り書いたから確認を頼むよ」

「あ、はい」

濡は抱きしめていた枕を戻してベッドから降り、椅子を譲ってもらってノートパソコンに向かう。そこには中堂家下見の報告書ファイルが表示されていた。怪盗ファントムの実行計画立案用である。それを作成するのは悠人の役目だが、念のため、同行した濡も内容を確認することになっていた。

「わあ、すごい。いつのまにこんなに調べてたんですか？」

報告書には、屋敷の間取りや窓の形状、錠の種類、天井の高さ、通風口の位置など、こと細かに書き記されていた。今日のパーティだけで調べたとは信じられないくらいである。

「下見に行ったんだから当然だよ」

悠人は事も無げにそう答え、隅の戸棚からドライヤーとブラシを取り出した。濡をノートパソコンに向き直らせると、まだ湿り気を帯びている少し乱れた髪を、手際よくブラシでとかしながら乾かしていく。濡はされるがままで画面を見つめながら、昔はよくこうしてもらったな、と幼いころの懐かしい思い出に浸っていた。

「ねえ師匠、ここ幹久さんの部屋よ」

ふとそのことに気付き、間取りの空白部分を指さしながら指摘する。

悠人はドライヤーを切った。

「……行ったの？」

「うん、英国風って感じのおしゃれな部屋だったよ。ベランダにはティーテーブルが置いてあって、そこで紅茶をごちそうになっちゃった。今の時期はそのベランダから月がきれいに見えるんだって。今度は月下の淡い光の下でお会いしましょう、なんて言ってたけど、さすがにちょっと格好つけすぎだよな」

濡はそう言ってクスクスと笑ったが、背後の悠人は無言のままだった。どうしたのかと不思議に思って振り返ると、彼は感情の窺えない表情で、ドライヤーを体の横に降ろして棒立ちになっていた。

「まさか、本当に彼と結婚する気じゃないだろうね？」

「えっ?!」

思わず、濡は素っ頓狂な声を上げた。

「どうしてそうなるんです？ 師匠だってあのとき聞いてたんじゃないんですか？ 幹久さん、結婚したい人がいるみたいなこと言ってましたよ？ そんな話を聞いて、あえて彼と結婚しようだなんて思いませんから。それも、今日会ったばかりの人なのに……」

「そう、だったね」

悠人はフッと薄く笑って目を伏せた。

「もしかして、やきもち？」

「かもね」

椅子の背もたれに腕をかけて悪戯っぽく尋ねた濡に、悠人は軽い口調で応じ、ドライヤーのプ

ラグを引き抜いて元の戸棚にしまおうとする。その広い背中を眺めながら、漣はあらためて彼のことについて考えてみた。

「師匠って、私と結婚したいみたいなこと言ってますけど、別に好きだとかそういうわけじゃないんですよね。寂しいから誰かにそばにいてほしいけど、今から探すのは面倒だし時間もないし、身近なところで手を打とうとしてるだけのことで。強いていうなら、昔からずっと一緒にいたから気楽だし、みたいな理由？ 私だったら怪盗ファントムのことも秘密にしなくていいですもんね」

「そんなふうにしてた？」

「当たってますよね？」

漣は背もたれに腕をかけたまま身を乗り出し、戻ってきた悠人に同意を求める。

「んー、半々ってところかな」

「どこが間違ってるんです？」

じっと見つめながら小首を傾げて尋ねると、悠人は小さく微笑んで漣の肩を抱き、腰をかがめてゆっくりと顔を近づけてきた。一瞬、漣はドキリとして身を引こうとしたが、先日の車中でのことを思い出し、心持ち視線を逸らしつつも強気に言い募る。

「二度も同じ手が通用すると思ってるんですか！ 私にだって、学習能力くらいありま……」

唐突に口が塞がれた。それも、手ではなく口で。

あまりのことに一瞬で思考は真っ白になった。ただ唇の温かく生々しい感触だけが強烈に知覚される。悠人は強引に舌を割り入れると、顔の角度を変えながら、漣の唇を、舌を、さらに深く貪り尽くそうとする。ようやく事態を把握して押しのけようとした手には、ほとんど力が入らなかった。

やがて、名残惜しげに唇が離れる。

漣は苦しげにハアッと空気を吸い込むと、痛いくらいの鼓動を感じながら、まぶたを震わせてそっと薄目を開いた。至近距離にある彼の顔。その瞳の奥には、まるで別人のような激しい情欲が燃えたぎっていた。熱い吐息が漣の濡れた唇に掛かる。

ゾクリ、と背筋に冷たいものが走った。

本能が警鐘を鳴らして無意識に身をこわばらせる。しかし、顔を隠すように大きくうなだれた彼が、ゆっくりと息をついて体を起こすと、そのときにはいつもの穏やかな表情に切り替わっていた。まるで何事もなかったかのように、にっこりと微笑んで言う。

「わかった？ どこが間違っているのか」

「私、師匠とは結婚しませんから！！」

漣はカッと顔を真っ赤にしてそう宣言すると、弾かれたように立ち上がり、濡れた口元をぞんざいに手の甲で拭った。

「どうして？」

背後から聞こえる、どこか寂しげな声。

漣の胸に罪悪感がよみがえる。彼は自分を犠牲にしてまで橘家に尽くし、漣たちの面倒も見てくれた。そのことについては言葉にならないくらい感謝しているが、だからといって、結婚を受

け入れることはどうしてもできない。理解してもらうには正直に話すしかないだろう——そう心を決めて、背を向けたまま慎重に言葉を落としていく。

「師匠のことは嫌いじゃないですけど……私、他に好きな人がいるんです」

「その人と、付き合ってるの？」

悠人の静かな問いかけに、漣は無言でこくりと頷いた。

「もしかして、ピンクダイヤの贈り主？」

「えっ?! どうしてわかったんですか？」

驚いて振り返ると、悠人は苦笑しながら肩をすくめていた。

「何となくね。小遣いで簡単に買える代物ではないし、それに、漣にととてもよく似合っていたからね」

ドレスを着てパーティに行くという話になったとき、用意されたネックレスを断り、あのピンクダイヤのペンダントを身につけたいと申し出たのだ。彼からの誕生日プレゼントなどとは言えないので、自分で買ったと嘘をついたが、やはり高校生にしては高価すぎて無理があったようだ。

「ごめんなさい……」

「じゃあ、もしその彼氏と別れたら、僕と結婚してくれるかな？」

漣が気弱な顔を見せたことで調子に乗ったのか、悠人はしたたかにもそんな提案をしてきた。強引にヒトの唇を奪っておいて謝りもしないで——さすがに漣はムツとして眉をひそめた。

「そんなの受ける必要はないですよね？」

「その人と添い遂げる自信ないんだ？」

「あります！」

間髪入れずに言い返す。挑発であることくらいわかっていたが、それでも構わない、いっそあえて乗ってやろうと思った。よく考えてみれば、漣に有利な賭けである。誠一との付き合いが続いている限り、悠人との結婚はない、ということになるのだから。

「わかりました。もし彼と別れたら師匠と結婚します。でも、絶対にそうはなりませんから」

挑むようにまっすぐ悠人を見据えて断言する。そして、硬い表情のまま一礼すると、乾きたての長い髪をなびかせ部屋をあとにした。自分の想いは誰にも邪魔させない——漣は唇を噛みしめながら、その決意を強く胸に刻みつけた。

## 8. シンデレラ

---

中堂幹久が見つめる先には、鉄鎖でがんじがらめになった長脚のアクリルケースが据え置かれていた。その中には「アンドロメダ」が丁重に収められており、神々をも嫉妬させたと言われる美しい肢体を、鉄鎖の隙間から覗かせている。

「やはり、アンドロメダには鎖がよく似合いますね」

不安そうに顔を曇らせる父親をよそに、幹久は悠然とそう言って口の端を上げた。

久世輝彦の「アンドロメダ」を戴きに参ります――。

先日、怪盗ファントムから中堂家にそんな予告状が届いた。

久世輝彦の「アンドロメダ」は、彼の代表作である星座シリーズの第13作で、アンドロメダ座の由来となったギリシア神話の一場面、つまり、生贄となった王女アンドロメダが岩場につながれているところを描いたものである。シリーズは全12作といわれてきたが、第13作のアンドロメダが存在するという噂は昔から根強くあり、そして幸運にもその実物を探し当てたのが中堂徹だったのだ。幻の絵画という話題性はもちろんのこと、その絵の素晴らしさもシリーズ随一であり、文化的・金銭的価値は計り知れない。怪盗ファントムが狙うにはふさわしい絵画といえるだろう。

だからといって、易々と盗まれるわけにはいかない。

それゆえ可能な限りの万全を期すべく、広いホールの中央に「アンドロメダ」を収めたアクリルケースを置き、それを鉄鎖で何重にも縛り付けたうえ、こうやって家族三人で取り囲んで見張っているのだ。他にも見知った警備員が四人、扉側と窓側に分かれてそれぞれ待機している。怪盗ファントム相手にしてはいささか心許ない体制だが、大人数ではかえって紛れ込む余地を与えかねないため、絵画付近は信頼のおける少人数で固めた方がいいという幹久の判断だった。

「幹久、これで本当に大丈夫なんだろうな？」

「どうでしょう、相手はあの怪盗ファントムですからね」

幹久は軽く笑いながら肩をすくめた。

その無責任な言いように、徹は少し気を悪くしたようだ。ムツとして口を真一文字に引き結び、後ろで手を組み、アクリルケース付近を落ち着きなく歩きまわる。

「やはり銀行の貸金庫に預けておいた方が良かったのではないかな？ 何も馬鹿正直にこんなところに置いておく必要もあるまい。これでは盗りに来いと言っているようなものだぞ」

「あまり無粋なことをしては、お得意様方にも呆れられますよ」

そう言って、幹久は鎖にそっと手を置く。

「古風な怪盗を迎えるには、それなりの作法があるのですから」

「作法？」

「相手はリスクを冒してまで予告をしてくれています。それに応じ、こちらも正々堂々と迎え討つ

べきでしょう。いわば真剣勝負ですよ。それに、今さらどうこうするわけにもいかないのでは？  
あと数分で予告時間を迎えるのですから」

徹はいまだに釈然としないようだが、もう何も言わなかった。ただ祈るようにアクリルケースの鎖を握りしめる。その向かい側で、由衣もほっそりした手を鎖の上に置いた。これも幹久の提案で、暗闇の中でも鎖を外されるのがわかるように、家族三人が鎖に手を掛けておくことにしたのだ。

外で歓声が上がった。

徹の眉間に深い縦皺が刻まれる。鎖を握りしめる手に力が入り、静寂のホールに濁った金属音が響いた。

「犯罪者のくせに随分と人気があるのだな」

「ええ、僕も彼女のことは好きですよ」

「何を言っておるのだ、おまえは……」

呆れるというより面食らったように徹が言った、そのとき――。

ふっと音もなく照明が消えた。

「どうした?!」

「怪盗ファントムの仕業でしょう。落ち着いてください」

幹久は少しも慌てることなくそう言うと、片方の手を鎖に載せたまま、内ポケットから小型の懐中電灯を取り出した。スイッチを入れてアクリルケースを上から照らす。

「アンドロメダは無事です」

徹も自らの目でそれを確認し、安堵の息をついた。

しかし、幹久は気を緩めることなく、懐中電灯を扉の方に向けて声を張る。

「そちらは問題ありませんか？」

「はい！扉は開けられていません！！」

光量が足りないので彼らの姿までは窺えないが、その声はよく知っている警備員のものに間違いない。怪盗ファントムやその仲間になりすまされていることはなさそうだ。幹久は続いて反対側に懐中電灯を向ける。

「そちらは異常ありませんか？」

「はい、窓からの侵入はありませんし、人影も見えません！」

こちらもよく知った声である。幹久はようやく少しほっとした。しかし、当然ながらまだ気を抜くわけにはいかない。小さな懐中電灯ではあまりよく見えないが、天井や床、他の壁などに光を向けていく。こちらからは見えなくとも、相手に対する牽制にはなるだろう。鎖はほとんど動いていない。三人が触れているので音が立つこともあるが、外れていないことだけは確信できる。

。   
 ジリリリリリ――。

突然、耳をつんざくほどの大音量で警報ベルが鳴り響いた。幹久は思わず顔をしかめて片耳を押さえたが、鎖に置いた手だけは決して離さなかった。

「とうとう屋敷内に入ったようですね?!」

「警報ベルはここまでうるさかったか?！」

叫ぶように声を張らないと、隣の父親ともまともに会話できない。昨日の点検ではもう少し常識的な音量だったはずだ。どういふことか確かめようにも、この状況で警備員に声を届かせるなど不可能である。今の自分に出来ることといえば——幹久は扉の方に懐中電灯を向け、息を詰めてじっと目を凝らす。

しばらくのち、ピタリと警報ベルが止んだ。同時に照明も戻る。

反射的に小さく安堵の息を漏らしつつも、急激な明るさの変化に目が追いつけず、手をかざしながら僅かに眉をしかめた。そして、何気なく下方のアクリルケースに視線を落とすと——。

「アンドロメダがない！」

鎖もアクリルケースもそのままだったが、中のアンドロメダだけが忽然と消えていた。にわかには信じられず、腰を屈めて横から覗き込んでみるものの、やはりどう見てもケースの中は空っぽである。

「ファントムだ!!」

警備員のその声に振り向くと、窓側の警備員と幹久たちのちょうど真ん中あたりに、アンドロメダを抱えた怪盗ファントムが立っていた。顔には白い仮面がつけられていたが、さらりと揺れる長く艶やかな黒髪、ピンと姿勢よく伸ばされた背筋、短いプリーツスカートから伸びるすらりとした脚、それらはまさしく——。

「捕まえろ!!」

怪盗ファントムに見とれていた幹久の隣で、ようやく事態を把握した父親が、標的を指さしながら迫力ある怒声を飛ばす。

警備員たちはハッとして一斉に駆け出すが、ファントムは鮮やかにかわしていくと、窓を開け放ってベランダに飛び出した。そして、軽やかに柵に飛び乗り、ひさしに飛び移り、あっという間に屋上へ上がってしまう。警備員たちは為すすべなくただ呆然と見送っていた。上空から舞い落ちてきたメッセージカードには「囚われの王女アンドロメダを救出いたしました」とだけ書いてあった。

「やられましたね」

幹久は肩をすくめて苦笑した。

しゃがんでアクリルケースを下から覗き込むと、頑丈なはずの鉄鎖が一部ちぎれていた。落ちている鎖のかけらは明らかに鉄とは違う素材である。どうやら一部だけ脆い素材に替えられていたようだ。そして、アクリルケースの底も簡単に抜けるよう細工が施されていた。いつどうやって準備がなされたのか見当もつかない。ここまでやられてしまっただけでは、もはや完敗としか言いようがないだろう。

「幹久、笑っている場合ではないだろう」

「保険は掛けてあったのでしょうか？」

「それは、そうだが……しかし……」

「いい話の種ができたじゃないですか。世間で話題の怪盗ファントムと直接対決なんて、誰でも経験できることではありません。きっとみなさん聞きたがると思いますよ」

こういう話の種があればパーティに人が集まりやすいし、商談に繋げていくこともできるだろう。予告どおりに盗まれてしまったとはいえ、相手が怪盗ファントムであれば、マイナス評価に繋がることはないはずだ。

「おまえ、前向きだな」

「嬉しいんですよ」

徹はその答えを聞いて訝しげに眉をひそめたが、幹久は気に留めることなく、怪盗ファントムの消えていった窓の方へ目をやった。そして、外から吹き込んでくる冷たい夜風を受けながら、もうそこにはいない彼女の姿を思い浮かべ、ふっと柔らかく微笑んだ。

「ご苦労だったな。今回もよく頑張ってくれた」

剛三は机の上で両手を組み合わせて、労いの言葉をかけた。

無事に「アンドロメダ」を手にして戻った怪盗ファントムの面々は、剛三の書斎に集まり、いつものように簡単な報告会を始めるところだった。まだこの絵を届ける仕事は残っているが、やっかいな盗みの方は完了し、程度の差はあれど各々安堵した表情を見せている。

「おじいさま、今回は誰がこれを返しに行くんですか？」

「おまえは本当にせっかちな。順に話すから待ちなさい」

「はい」

滯は肩をすくめて返事をした。盗みの方はどうしても罪の意識が拭えないため好きになれないが、本来の持ち主に届けるのは別で、それがあからこそ怪盗ファントムを続けていられるのかもしれない。相手が心から喜んでくれているのを見ると、そのときばかりは自分も素直に嬉しく思えるのだ。

剛三は、悠人に目配せして「アンドロメダ」を掲げさせた。

「噂に違わぬ素晴らしい絵だな……」

「申し訳ありません剛三さん、少々お待ちください」

悠人はふと何かに気づいたらしく、軽く右手を挙げ、講釈を始めようとした剛三を制止した。そして、目の前に「アンドロメダ」を立てかけたまま、裏側からその『何か』を慎重に引き剥がす。目隠しと思われるキャンバスと同色同地の布、そしてその下にあるものは――。

「まさか、罨だったり……？」

「発信機じゃないはずだけどな」

盗んだ絵画に発信機の類がつけられているかどうかは、家に持ち込む前に、専用の機械でくまなく調べることになっている。もちろん今回も例外ではない。それで探知されなかったということは、篤史の言うように発信機ではないのだろう。

悠人は剥がしたものを一瞥すると、皆に見えるように机の中央に置いた。

「メッセージカードと指輪？」

滯は身を乗り出して不思議そうに覗き込む。そこにあったのは、名刺より一回り大きなサイズのカードと、シンプルな金属製の指輪だった。最初、指輪はカードの上に載っているのかと思ったが、どうやら両面テープで貼り付けられているようだ。そして、カードの方には丁寧な手書き

文字で何かが記されている。

親愛なる怪盗ファントム様

今宵 11時50分、私の部屋へお越しく下さい。

窓を開けてお待ちしております。

——中堂幹久

「挑戦状かなあ？」

濡は書かれたメッセージを読み上げると、首を傾げて誰にともなくそう尋ねた。しかし返答はない。このメッセージの意図を量りかねているようで、皆一様に難しい顔をして考え込んでいた。

。

「挑戦状だとしたら、この指輪は何なんだ？」

「ちょっと勝手に取っちゃっていいわけ?!」

非難する濡を無視し、篤史は無造作にメッセージカードから指輪を引き剥がした。人差し指と親指でつまむように持ち上げると、電灯の光に掲げ、向きや角度を変えながらじっくりと観察する。

「これ本物のプラチナみたいだな。シンプルだけどけっこう高いんじゃないか？ こんなものを貼っつけるなんて、さすが金持ちはやるのが違うな……ん？ 内側に何か文字が彫ってあるぞ。名前かこれ？」

そう言いながら、手元に引き寄せてその刻印を読み上げる。

「MIKIHISA to REI」

「……えっ?!」

一瞬遅れて、濡は素っ頓狂な声を上げた。二人の名前が入ったプラチナの指輪など、まるで婚約指輪か結婚指輪のようだが、幹久からそんなものをもらう心当たりは微塵もない。だいたい彼とはこの前のパーティで一度会っただけである。

「どういうこと？ 濡」

「こっちが知りたいよ！」

遙に冷ややかな眼差しを向けられ、濡は思わずむきになって言い返す。

「幹久さんとは、付き合ってるわけでも何でもないんだからね!!」

「そうじゃなくて、問題は怪盗ファントムの正体がバレてることだよ」

「えっ……あ、そうか！」

カードの宛名は「怪盗ファントム」だが、指輪には「to REI」と彫られている。つまり、怪盗ファントムの正体が濡であると、幹久に知られているかもしれないということだ。

「でも、私、ファントムのことなんて何も話してないんだけど……」

「おまえ、誘導尋問に引っかかっても気づかなさそうだよなあ」

篤史は半ば呆れたように言う。

だが、濡には誘導尋問があったとはとても思えない。

「そもそもまだバレたと決まったわけじゃないでしょう？ 確かに指輪にはREIって書いてあるけど、漢字でもフルネームでもないし、私のことじゃないかもしれないもん」

「じゃあ誰なんだよ」

「そんなことまではわからないけど……あっ、そうだ、この前のパーティのときにね、幹久さん、結婚したい人がいるようなことを言ってたの。もしかしたらその相手の名前がREIなんじゃないかな。彼女のことを怪盗ファントムかもしれないと疑ってたところへ、ちょうど予告状が来たから、この機会に結婚も含めた諸々のことに決着をつけようとして呼び出した……とかね。それだったら指輪の辻褄も合うでしょう？」

「濡の話が正解だろうな」

それまで黙って聞いていた悠人が、腕を組みながらその仮説を認めた。

濡はパッと表情を明るくして身乗り出す。

「ね、そうですね！」

「ただ、ひとつだけ認識違いをしている」

悠人はそう言い添えると、もったいつけるように濡の双眸を見つめた。それからゆっくりと口を開く。

「幹久の結婚したい相手というのは、君だ」

「……は？」

濡はきょとんとした。

「君はわかっていなかったみたいだが、あのときの伴侶を見つけたという話は、君のことを指して言っていたんだよ。あいつはそれで求婚しているつもりだったんだらう。そして、そのときの君の笑顔を見て、了承を得たものと勘違いしているはずだ」

「……えっと、本当に？」

信じがたい気持ちで聞き返す。言われてみればそういう解釈も出来なくはないが、いくら何でも出会ったその日にというのは、あまりにも非常識でありえないことだと思う。ドラマでもここまで突飛な話はなかなか見ない。しかし、悠人はなぜかそう確信しているようだった。

「まあ、濡が鈍いというのもあるが、この場合は突っ走りすぎる幹久の方が問題だろうな」

「どうでもいいけど、結局、ファントムの正体がバレてるってことだよな？」

遥は頬杖をついて尋ねる。

「何の根拠もなく思い込んでいるだけだ。無視しても問題ない」

悠人は動じることなく断言した。しかし、それこそ根拠のない憶測に基づく暴論でしかないだろう。濡を安心させるためなのかもしれないが、とても素直に頷くことは出来なかった。

「本当に大丈夫なのかな……それに指輪……」

「明日は燃えないゴミの日だったな。ちょうど良かったよ」

何が気に障ったのか、彼は急に感情的になってそう吐き捨てた。口調にも表情にも隠しきれない苛立ちが窺える。いつも冷静な彼らしからぬその態度に、その場にいた皆が不思議そうな目を向けた。

「悠人、どうしたんだおまえ」

「……失礼いたしました」

剛三の声を耳にして、悠人は落ち着きを取り戻したようだ。小さく息をついて続ける。

「中堂幹久は、佐藤由衣の息子です」

「佐藤由衣？ ああ、あのサイコ女か」

「サ……サイコ……??」

滯は目をぱちくりさせて聞き返した。佐藤というのは由衣の旧姓と思われるが、それで通じるということは、剛三も昔の彼女を知っているのだろう。が、あまり良い印象は持っていないようだ。剛三は机の上で両手を組み合わせると、深い溜息を落として説明を始める。

「佐藤由衣は悠人が高校生のときに付き合っていた女でな。悠人が怪盗ファントムを始めるとすぐに、その正体が悠人ではないかと疑い始めて、それはもう悪魔のようなしつこさで追及し、悠人を精神崩壊寸前まで追いつめたのだ。それ以来、悠人は女嫌いになり、今も独身というわけだ」

なんか、ちょっと違うような――。

滯は難しい顔をして小首を傾げた。大まかな話は悠人から聞いたとおりだが、受ける印象は随分と違っている。精神崩壊とか、女嫌いとか、本当にそんなことがあったのだろうか。剛三には話を脚色する傾向があるようなので、今回も大袈裟に言っているだけかもしれないと思う。

「あのサイコ女の息子ならば、思い込みだけで暴走するのも頷ける。まあ、滯に惚れているうちは無闇矢鱈と騒ぎ立てることもあるまい。もし騒がれたところで何の証拠もないのだからな。悠人の言うように放っておけばよからう」

「でも、指輪は返したいな……なんか悪いし……」

自分のことを想って作ってくれたであろう指輪を、事情はどうあれ、燃えないゴミに捨てるなんてことはしたくなかった。それに、このまま指輪を返さなければ、求婚を受け入れたということにされかねない。思い込みの激しい人であればなおのことだ。

「警察はもう中堂家から引き上げてるみたいだし、中堂夫妻もそのあたりの話は知らないようだ。おそらくその幹久ってやつの独断なんだろう。今にして思えば納得のいく話なんだが、まんまと盗まれたってのに、あいつ何か嬉しそうにしてたんだよな」

篤史は怪盗ファントムが去ったあとの状況を簡単に説明する。仕掛けてあった盗聴器で知り得た情報だろう。それによって、幹久が個人的に話をしたがつているだけ、という推測が、幾分かは裏付けられたといってもいい。

「私、返すだけ返してこようかな」

「これが罫でないという確証はないし、どちらにしても危険であることに変わりはない。どうしても返したいのなら郵便で送り返せばすむだろう。何も一々あいつの言うとおりにすることはないんだ」

「でも……」

「滯を行かせるわけにはいかない」

悠人は強い意志を感じさせる口調できっぱりと断じる。もはや何を言っても無駄に思えた。滯は口を引き結んでうつむくと、膝の上に両手を重ね、机に置かれた指輪をそっと見つめて目を細

めた。

夜11時50分――。

指定されたその時間、怪盗ファントムはベランダの手すりに軽やかに降り立った。空気は身が引き締まるように冷たく、背後には神秘的な光を放つ満月が浮かんでいる。その月明かりを浴びながら、長い黒髪はさらさらと艶やかに煌めいた。

部屋の照明は消えていた。

不気味なほどひっそり静まりかえったそこには、誰かがいるようには思えなかったが、よく見ればひとつだけ微かにゆらめく人影があった。幹久である。彼は大きく開いたガラス窓からベランダに進み出ると、カクテルグラスを持ったまま窓枠にもたれかかり、手すりに立つファントムを仰ぎ見ながら柔らかく目を細める。

「思ったとおり、あなたには月下の淡い光がよく似合う。先ほどよりもずっと凛として美しい」

口元に小さく笑みをのせてそう言うと、まるで乾杯するかのよう、大仰に腕を上げてカクテルグラスを掲げた。その縁が、月の光を受けて鮮烈な輝きを放つ。そして、中に注がれているオレンジ色の液体も、細やかに波打つたび、夕暮れ時の水面のようにキラキラと煌めいた。

「さっきよりも美しいんだよ」

「篤史、笑いすぎっ！！」

くくっと体を揺すって笑う篤史の背中を、漣は握りこぶしで軽く叩いて抗議した。

中堂家付近の駐車場に停めた車の後部座席で、漣、篤史、悠人の三人は並んで座り、篤史の膝に載せられているノートパソコンの画面を覗き込んでいた。そこに表示されているものは、怪盗ファントムに取りつけたカメラから送られてくる映像で、今は微笑を浮かべてファントムを見上げる幹久の姿が映し出されている。

「まあ、確かに遥の方が品はあるよなあ」

「どうせ私には品なんてないですよっ」

漣はふてくされてシートにもたれかかり、思いきり口をとがらせた。

招待状に応じる形で指輪を返しに行くことに、悠人は強硬に反対していたのだが、漣の心中を汲み取ってくれたのか、幾分か譲歩して条件付きで許可してくれることになった。

その条件というのは、漣ではなく遥が怪盗ファントムに扮して行くことである。

どうせ指輪を返してくるだけであり、顔を見せることも会話をすることもないのだから、漣でも遥でも同じだというのが悠人の言い分だった。しかし、漣としてはやはり不誠実な気がして抵抗があった。漣には行かせられないと言いつつ、遥には行かせようとする、そんな悠人の差別的な態度にも納得がいかない。しかし問い詰めてみると、どうやら漣を危険な目に遭わせたくないというより、漣の流されやすい性格の方を懸念しているようだった。反論したい気持ちはあったが、何度も指摘された悠人の前では分が悪く、漣は不本意ながら何も言えなくなってしまった

。

そういうわけで、今、幹久の前に立っている怪盗ファントムは遥である。

遥は、最初こそ嫌そうな素振りを見せていたものの、意外にも拒否することなくすんなりと承知してくれた。不思議に思って聞いてみたところ、濡を行かせるのは不安だから仕方ない、というのが引き受けた理由らしい。信用されていないことについては複雑な気持ちもあるが、いつも濡を守ろうとしてくれることに対しては、素直に嬉しく思っていたし感謝もしていた。

けれど、まさか幹久にまで、遥の方がいいと言われることになるなんて――。

「気にするな、濡。あいつは適当に口説き文句を並べているだけだ」

「別にフォローしてもらわなくても大丈夫ですから！」

せっかく悠人が気遣ってくれたにもかかわらず、そのことがかえって気恥ずかしくて、濡は頬を紅潮させながら思わず強気に言い返してしまう。しかし、悠人は横目を流しつつ、くすりと余裕の笑みを浮かべるだけだった。

「ファースト、指輪だけ返したら、適当に切り上げて帰ってこいよ」

篤史はヘッドセットのマイクを通し、緊張感のない声で指示を出す。綿密な計画を立てるいつもの盗みとは違い、危険はないと判断したようで、随分と気楽にしている様子が見てとれた。剛三にいたっては、全面的に悠人に任せて家で寝ているくらいである。

しかし、濡はそこまで楽観的になれなかった。

当事者にとっては当然の心境かもしれない。大袈裟に言えば、自分の人生の一大事を遥に託したことになるのだ。ノートパソコンの画面を見つめながら、息を詰めて両手を組み合わせ、何事ありませんように――とひたすら心の中で祈り続けた。

「これは、僕があなたのために作ったものです。シンデレラ、あなたにお似合いのカクテルだ」

ノンアルコールだから未成年の濡にお似合いだ、という意味ではなく、童話のシンデレラになぞらえているだろうことは、聞いている誰もがすぐにわかった。そして、11時50分という時間指定のわけも――。

「そろそろ12時になりますね。魔法が解けて素顔のあなたに戻る時間です、僕のシンデレラ。それともアンドロメダの方がお好みでしょうか。ご希望とあらば、怪盗のしがらみに囚われたアンドロメダ姫を救い出すペルセウスとなりましょう」

幹久はカクテルグラスを白いティーテーブルに置くと、芝居がかった身振り手振りをつけて、聞いているだけで恥ずかしくなるようなセリフを次々と畳みかけた。

当然ながら、怪盗ファントムは無言のままである。

それでも、幹久はまったく意に介していないようだった。ふっと愛おしむように微笑むと、胸元に手を当て、今度は真面目な口調で語り始める。

「僕は、君が怪盗ファントムだと知りながら、それでも構わないと思って求婚しました。ただ、どうしてこんなことをしているのか、それを聞かせてほしいのです。何か理由があるのでしょうか。事情によってはこのまま続けることも許すつもりですし、必要であれば力をお貸しすることも

検討します。僕の本心としては、このような危険なことから足を洗っていただきたいのですが」

そう言って、軽く肩をすくめる。

「指輪は受け取っていただけましたか？」

それまで無反応を貫いていた遥だったが、その核心を突いた言葉にようやく動きを見せる。送りつけられた指輪をポケットから取り出すと、白手袋をはめた指でつまみ、幹久の方へ腕を伸ばしてそれを示した。月の光を浴びて、プラチナが柔らかな輝きを放つ。幹久は満足そうに目を細めて微笑むと、手のひらを上に向け、怪盗ファントムへすっとその手を伸ばした。

「僕がはめて差し上げましょう。さあ、こちらへ」

差し出されたそのすらりとした手の上に、遥は小さな指輪を置き、さらに自分の手を重ねると、短いスカートをひらめかせてベランダに降り立った。二人は手を取り合ったまま正面から向かい合う。微かな夜風がそよぎ、長い黒髪がさらさらと音を立てて揺れた。

「ちょっと、遥、どういうつもり?!」

滯は篤史を押しのけんばかりの勢いでノートパソコンを覗き込む。遥視点のその映像だけでも、どういう状況なのかは十分に察しがついた。指輪だけ渡してさっさと帰ってくればいいのに、なぜわざわざベランダに降りたのだろう、なぜ至近距離で幹久と向かい合っているのだろう——彼の考えが読めなくて苛立ちと不安が募る。

「面白くなってきたな」

篤史はニヤニヤしながら不謹慎なことを言う。

その向こう側の悠人は、腕を組んだまま眉ひとつ動かさず、幹久の映し出された画面をただじっと眺めていた。何も行動を起こさないのは、問題なしと判断してのことだろうか。しかし、滯には、このような危うい状況を看過できるだけの余裕はなかった。

「やだもう見てられない！ 篤史マイク貸して!!」

「バカ、今だと相手にも声が聞こえちまうだろう！」

滯は篤史のヘッドセットを奪い取ろうとするが、篤史は滯を押し返して必死に抵抗する。狭いところでもみくちゃになっている二人の隣で、悠人は顔色一つ変えず、篤史の膝から落ちそうになったノートパソコンを受け止めた。その画面から目を離すことなく静かに口を開く。

「滯、遥を信じてもうしばらく様子を見よう」

「……師匠がそう言うのでしたら」

滯は神妙に答え、元の場所に座り直した。

悠人に言われるまでもなく、遥のことは信頼しているつもりである。そう、冷静に考えてみれば、遥が何の意図もなく行動しているとは思えない。だから、今はただ信じて見守るだけ——滯は唇をきゅっと噛みしめながら、篤史の膝に置き直されたノートパソコンを再び覗き込んだ。

ポーン、ポーン、ポーン——。

暗い部屋の中から、レトロな柱時計の音が聞こえる。

幹久は怪盗ファントムと手を取り合ったまま、もう片方の手で白い首筋にそっと触れた。

「仮面のままであなたは十分に美しい。けれど、伴侶となる僕の前で仮面は要らない。もう12時を回りましたし、素顔に戻りましょう……橘滯さん」

まだ師匠の言うとおりで決まっていなかった、指輪のREIが自分以外の誰かであってほしい——滯がしつこくも抱き続けていた一縷の望みは、このとき完全に絶たれてしまった。ドクン、ドクン、と飛び出しそうなほど強く打つ鼓動を感じながら、顎を引き、ますます食い入るようにノートパソコンの映像を見つめる。

幹久は焦らして楽しむかのように、怪盗ファントムの首筋に置いた手を、ゆっくりと艶めかしく上方に滑らせていく。指先が顎をなぞる。そして、ついに仮面に手を掛けようとしたそのとき——。

「イタッ！！」

遙がその手首を素早く捻り上げた。繋がっていた二人の手は離れ、指輪はベランダの床に落ちて転がる。

「れっ、滯さん！怖がらなくても大丈夫です。ここには僕たちしかいません……だから、仮面を……いえ、この手を……っ！お願いします、僕を信じてください。あなたを愛しているのですから！」

肩や腕にかなりの痛みがあるのだろう。幹久は汗を滲ませながら懸命に訴える。時折、苦しげに声を詰まらせていたが、それでも辛うじて笑顔を崩していないのは、ある意味で賞賛に値するかもしれない。

遙はパッと拘束を解いた。

いきなりのことで幹久は大きくよろけるが、体勢を立て直して再び向かい合うと、安堵の息をついて満面の笑みを浮かべた。こんな仕打ちを受けたというのに少しも懲りていないようだ。再度ゆっくりと仮面に手を伸ばしながら、口を開いて何かを言おうとした——その瞬間。

ガツッ——。

幹久の顔面に黒い革靴がめり込んだ。遙が蹴りつけたその足を引くと、額から頬にかけて斜めに靴底の跡がついていた。もう意識をなくしているであろう彼は、鼻血を垂らしながら、スロームーションのようにゆっくりと仰向けに倒れていった。

「はる……じゃなくてファースト……あの、ちょっとやりすぎじゃないかな？」

篤史から借りたヘッドセットを装着した滯は、マイクを通しておずおずと遙に話しかける。

ノートパソコンには伸されて大の字になっている幹久が映し出されていた。自分の身を守るためにやむを得ない状況ならまだしも、こうも一方的に攻撃したのでは、さすがに幹久に申し訳なく思わざるをえない。

「ちゃんと加減してるから大丈夫。ただ気絶してるだけだよ」

「じゃなくて、何も顔面を蹴りつけることなかったんじゃ……」

「怪盗ファントムを呼びつけようなんて二度と思わせないためには、このくらいやらないと効き目ないんじゃないかなって。声が出せない状況だったから行動で示したんだけど、何か問題？」

遙はしれっと聞き返す。

ここはありがとうと答えるべきなのだろうか。しかし、やはり度が過ぎている気がするし、これで効き目があるかどうかも疑わしい。それどころか恨まれて逆襲される可能性もなくはないのだ。だけど遥は自分のためにやってくれたわけで——滯はぐるぐると思考を巡らせるが、結論にはたどり着けない。

「これでもう十分に目的は果たしただろう。帰ってくるんだ」

悠人は、滯が装着したヘッドセットのマイクを引き寄せて遥に告げる。

「了解」

ノートパソコンのスピーカーからぶっきらぼうな答えが返ってきた。どことなく物足りなさそうな口調に聞こえたが、さすがに師匠の命令に逆らうわけにはいかないだろう。

遥は疲れたように大きく溜息をつきながら、床に落ちた指輪を拾い上げ、それをカクテルグラスの中に投げ入れた。オレンジ色の液体の中を揺らぎながら沈んでいき、チン、と微かな音を立てて底に落ちる。そして、悠人に持たされたメッセージカードを内ポケットから取り出すと、そのカクテルグラスの傍らに無造作に投げ置いた。

宛先違いにより受取拒否——。

それは、怪盗ファントムから幹久への最後のメッセージだった。

与えられた役割をようやく果たした遥は、軽く飛び上がり、再びベランダの手すりにすくっと立った。そして、倒れたままの幹久を肩越しに一瞥すると、手すりを踏み切り、黒髪をなびかせて月影さやかな夜空へ飛び出した。

これですべての問題が片付いたわけではない。

そのことは滯も承知していたが、とりあえず一段落したことで胸を撫で下ろし、緊張の糸が切れたようにくったりとシートに身を預けた。途端に堪えきれないほどの眠気が押し寄せる。それに吞まれるように目蓋を閉じると、意識はすっと眠りの奥底へ沈んでいった。

その安らかな寝顔を、帰りの車中ずっと悠人が見守っていたことは、滯は知るよしもない——

。

## 9. 喪失

---

「まだ宿題終わらないの？」

「えっ？」

シャープペンシルを握ったまま考え込んでいた滯は、不意に声をかけられ、思わず目をぱちくりさせながら振り向いた。絹糸のように艶やかな黒髪がさらりと頬にかかる。

声を掛けてきた遥は、学習机に広げてあった教科書やプリント類を片付けにかかっていた。

「そろそろ寝たいんだけど」

「あ、うん……」

掛け時計の針は11時半を指していた。もうこんな時間だなんて——滯は寝そべっていたベッドから起き上がり、教科書とノートを閉じる。けれど、そこから降りようとはせず、軽く握った手を膝に置いてうつむいた。

二人がいるのは遥の部屋である。

滯は、宿題をするという名目で押しかけて、彼のシングルベッドを占領していた。さすがに毎日というわけではないが、わりとよくあることで、二人にとってはごく日常的な光景である。だが、これほど遅くまでいることはめずらしい。

宿題が終わっていないわけではなかった。

実はもうひとつ別の目的があって来たのだが、それを切り出せず悩んでいるうち、いつしかこんな時間になっていたのだ。どちらかというとな来の目的はそちらの方で、宿題はただの口実といっても過言ではない。だから、このまま帰るわけにはいかなかった。

滯はようやく決意を固めると、ベッドの上で正座して真剣に切り出した。

「あのね、遥、相談っていうか聞いてほしいことがあるの」

「そんなことだろうと思ったよ」

遥は事も無げにそう言うと、椅子を回して滯の方に体を向ける。

「で、何？」

「うん……ちょっと言いづらいんだけど……」

「そんな話、昔からさんざん聞かされてるよ」

何を今さらと言わんばかりの呆れ口調だが、確かにその反応ももつともである。両親や友人に言えないようなことでも、いつも遥にだけは話してきた。誠一を好きになったときも、悩みを聞いてもらったり、アドバイスを求めたりしていた。けれど、今回はその遥にも言いづらい。なぜなら、それは——。

「師匠のことなんだけどね」

二人にとって悠人は親同然の存在であり、その認識を崩しかねない話をするのは、さすがに申し訳なく感じざるを得ない。しかし、自分の胸の内だけにとどめておくのは苦しく、身勝手かもしれないが、誰かに話して少しでも楽になりたいと思ったのだ。そして、その「誰か」は遥しか

考えられなかった。

滯は、堰を切ったように話し出した。

天野俊郎の『湖畔』を娘のもとへ返却に行ったときのこと、中堂家のパーティでのこと、悠人の部屋で報告書を作成したときのこと、誠一と別れたら師匠と結婚すると約束したこと——滯自身の感情は挟まずに、できるだけ事実のみを述べていく。しかし、客観的に話せば話すほど、現実感が乏しくなっていくように感じられた。

「ふーん……師匠がね……」

ずっと真摯に聞いていた遥は、滯の話が終わると、吐息まじりにそうつぶやいた。反応に困るのも当然だろう。滯自身でさえ受け止めきれしていない話を、いきなり信じろという方が無理である。

「やっぱり信じられない？」

「にわかには信じがたい話だけど」

彼はそこでいったん言葉を切り、溜息をつきながら椅子の背もたれに身を預けた。

「滯がそんな嘘をつくとは思えないしね。それに、実はちょっと気になってたんだよ。こここのところ様子がおかしかったから、もしかしたら何かあったんじゃないかって。まさかそこまでとは思わなかったけど」

「おかしかったって、私が？」

滯はきょとんとして小首を傾げる。

「師匠と結婚すればって母さんが言ったときの反応は過剰だったよ。それに、たまに思い詰めた顔で師匠を見つめてるし。師匠の方も、滯と幹久の話になるとあからさまに機嫌が悪くなったりして、なんか嫉妬でもしてるみたいに見えたんだよね」

言われてみれば、確かに悠人のことを意識していたような気がする。ただ、彼の方はどうなのかよくわからない。遥が指摘したように嫉妬だったのだろうか。しかし、それしきのことで彼が感情的になるなど、滯にはとても信じられなかった。

「でも、それを言ったら遥だっておかしかったよ？ 幹久さんに指輪を返しに行ったとき普通じゃなかったもん。やっぱりどう考えても顔を蹴りつけるのはやりすぎだよ」

「結果的にはあれで良かったよね」

「それは……そうだけど……」

顔を蹴りつけられたことが利いたのか、幹久は怪盗ファントムと滯は別人という結論に達したようだった。数日後に橘家へやってきて、剛三と滯に勘違いしていたことを白状して詫び、そしてあらためて滯に結婚を申し込んできた。驚くべきことに、この短期間で新たに作り直したという指輪まで用意してきていた。が、剛三は認められないと一蹴し、滯も心苦しく思いながらもやんわりと断った。これで幹久が本当に諦めたのかはわからないが、とりあえず一段落ついたといえるだろう。

「師匠もずいぶん安心してたよ」

「そう……」

他に言葉が見つからず、滯は微妙な表情になって目を伏せた。

その様子を、遥は漆黒の瞳でじっと見つめて言う。

「師匠と結婚すればいいんじゃない？」

「ちょっと、遥、いきなり何?!」

滯は手をついて身を乗り出した。

「師匠だったらファントムのことを隠さなくていいし、じいさんも、父さんも、母さんもそのつもりなら何の問題もないよね。ちなみに僕も賛成。みんなが幸せになって、すべて丸く収まるんじゃない？」

「私の幸せは無視?!」

「何が不満なわけ？」

遥はじとりと睨んで尋ね返した。滯は当惑して顔を曇らせる。

「不満とかそういうことじゃなくて……師匠のことは好きだけど、それは家族みたいなものだし……。第一、私には誠一がいるんだもん。遥だってわかってるでしょう？」

恨めしげにそう訴えかけると、遥は真顔でじっと考え込んだ。

「誠一、ヤバいんじゃない？」

「……えっ？」

「誠一と別れたら師匠と結婚する、って約束したんだよね？ だったら誠一の方に圧力をかけるんじゃないかな。滯に別れるつもりがなくても、誠一が別れるって決めたらどうしようもないし。同じ高校生ならまだしも、大人相手なら容赦しないよね。ありとあらゆる手を使って潰しにかかると思うよ。ま、誠一ひとりくらい赤子の手をひねるようなものだろうけど」

滯は困惑ぎみに眉を寄せ、口をとがらせた。

「師匠はそんなことする人じゃないよ」

「師匠じゃなくてじいさんだよ。滯と師匠を結婚させたがってるって話だしさ」

それを聞いて、誠一に圧力を掛けるという推論が、急に現実味を帯びてきたように感じた。剛三ならば本当にやりかねない。顔面蒼白で弾かれるようにベッドから飛び降りると、教科書もノートも残したまま、短いスカートをひらめかせて一目散に部屋を飛び出した。

悠人の部屋からは細く光が漏れており、微かに物音も聞こえる。

滯は顔をこわばらせて唾を飲み、躊躇いがちにコンコンと小さく扉を叩いた。

「はい」

中から声が聞こえた。

ややあって、カチャリと扉が開き、そこから悠人が無防備な姿を現した。帰ったばかりで着替えようとしていたのか、シャツの胸元は大きくはだけており、顔には疲労が色濃く滲んでいた。滯と目が合うと、その目を大きく見開いて瞬きをする。

「夜這い？」

「違います」

滯はつまらない冗談を冷たく一蹴した。そして、少し顔を曇らせて切り出す。

「師匠にお話があって来たんですけど……」

疲れているようなのでまた後日にします——そう続けるつもりだったが、言い淀んだきり曖昧に目を伏せる。後日などと悠長なことを言っているうちに、剛三が行動を起こしてしまうかもしれない。そう思うと、遠慮している場合ではない気がしてきた。

「入って」

悠人はそう言って大きく扉を開いた。

まるで心中を察したかのような申し出に、滯は素直に甘え、促されるまま彼の部屋に入ろうとする。が、途中でその足を止めた。不思議そうにしている悠人を上目遣いで伺いながら、おずおずと念を押すように言う。

「あの、何もしないでくださいね？」

「何もしないよ」

悠人は軽く笑いながら答えた。扉を開けたまま部屋の中に戻り、シャツのボタンを下から留め始める。

「安心していい、僕の理性は鉄壁だ」

「……ずいぶん脆い鉄壁ですね」

滯はこれ以上ないくらいの低い声で嫌味を落とした。先日ここで強引に唇を奪ったばかりなのに、よく臆面もなくそんなことが言えるものだと思う。しかし、悠人はシャツの裾をズボンに入れると、顔だけ振り向けてくすりと笑った。

「この前のあれは、滯が地雷を踏んだからだよ」

「地雷って……由衣さんのこと？」

「もう二度とその話はするんじゃないぞ」

彼は疲れたようにどっかりと椅子に腰を下ろした。そして、ちらりと横目を流して言う。

「キス、初めてじゃなかったんだよね？」

その無遠慮な質問に、滯は頬を染めながら眉を寄せる。

「……だったら何ですか」

「罪悪感が少なくてすむよ」

「はあっ？」

思わず素っ頓狂な声が口をついた。両手を腰に当てると、少し前屈みになってしかめ面を見せつける。

「初めてじゃなければいいってもものじゃないです。ちゃんと反省してください。だいたい、あのときはまだ彼氏がいるなんて言ってなかったですよ？ もし初めてだったらどうしてくれたんですか」

「むしろその方が嬉しかったけど」

「罪悪感ドコいったんですかっ！」

カッとして責めるように言い募っても、悠人は悪びれもせずニコニコしている。滯の口から大きな溜息が漏れた。横柄に腕を組んで扉にもたれかかると、うさんくさそうな視線を彼に投げかける。

「鉄壁の理性なんて嘘八百ですよ」

「そんなことはないよ。ハングライダー特訓の山ごもりのときだって、濡が裸で出てきても平静を保っていたし、二晩一緒のベッドで寝ても何もしなかっただろう？ やたらと煽ってくるから大変だったけどね」

「あっ、煽ってなんかっ……！」

そのときはまだ悠人の気持ちなど知らず、随分と無防備に振る舞っていた記憶がある。裸で出てきたというのは語弊があり、シャワーを浴びたあとでバスタオルがないことに気づき、悠人に取りつけてもらっただけのことだ。一緒のベッドで寝たというのも事実ではあるが、彼のベッドがあまりにも粗末だったので、なぜかダブルベッドだった濡の方で一緒に寝ようと提案しただけのこと。今にして思えば、剛三の策略だったのかもしれないが……。

「入らないの？」

悠人の声で、濡は現実に戻された。戸口に立ったまま再び念押しする。

「本当に何もしないでくださいね。師匠に本気出されたら、私じゃ敵わないんですから」

「わかってるよ」

クスクスと笑う悠人を横目で睨みながら、濡はわざと足音を立てて中に入ると、荒っぽくベッドに腰を下ろして彼と向かい合った。そのとき自分の脚が露わになっていることに気づき、自意識過剰かもしれないが、こんなときに短いスカートをはいてきてしまったことを少し後悔した。

空調の静かな運転音が濡たちを包む。

おそらく帰ってきたばかりなのだろう。脚に触れるシーツはひんやりと冷たく、部屋の中もまだほとんど暖まっていない。窓に引かれた厚手のカーテンは中途半端なところで止まっている。

「それで、何の用かな？」

悠人は椅子に深く腰掛けたまま、軽くおどけるような口調で尋ねた。まるでこの状況を楽しんでいるかのようだ。しかし、濡の方にはそんな余裕など微塵もない。膝にのせた両手をグッと握りしめると、そこに視線を落として切り出す。

「このまえ約束した話なんですけど……」

「ああ、彼氏と別れたら僕と結婚するって話だな」

「そう、その話……やっぱり撤回させてください！」

緊張しつつも全力でそう言いきり、勢いよく頭を下げた。そのまま息を詰めて返答を待つ。

「駄目だよ」

耳に届いたのは感情のない声。

濡はそろりと顔を上げ、大きな漆黒の瞳で追い続けるように尋ねる。

「どうしても？」

「そうだなあ……」

悠人は思わせぶりに腕を組んだ。そして、斜め上に視線を流してぽつりと言う。

「条件次第では譲ってあげてもいいかな」

「本当ですか？ どんな条件ですか？！」

ようやく見えた一筋の光明に、濡はベッドから身を乗り出して必死に食らいついた。

悠人は組んだ腕をほどき、悪戯っぽい笑みを浮かべて見つめ返す。

「今すぐ僕と結婚すること」

「ふざけてるんですか！」

「だって真面目なつもりだけど」

沸騰したようにいきり立つ滯に、悠人は飄々と言葉を返した。

「僕の目的はそれだけなんだからね。誰がみすみすチャンスを手放すと思う？」

彼の瞳には強い意志が滾っていた。

ゾクリ、と背筋が震える。彼が本気でこの結婚を考えているのだと、そして彼の思うままに事態が進んでいるのだと、滯はあらためて強く思い知らされた。次第に速くなる胸の鼓動を鎮めるように、右手を胸に押し当てながらも、どうしても消せない不安に顔を曇らせる。

「彼氏と喧嘩でもしたのか？」

「そうじゃなくて……おじいさまが、彼にひどいことをするんじゃないかと思って……。おじいさまも私と師匠を結婚させたがってるんでしょう？ こんな約束をしてるなんて知ったら、きっと何がなんでも別れさせようとする。私のために、彼の人生をめちゃくちゃにしたくないの」

悠人に説明するというよりも、自らの気持ちを吐露するように言う。それによって情けをかけてほしいという下心もあったかもしれない。しかし、そう都合良くはいかなかった。

「だったら、そうなる前に別れてあげればいいんだよ」

悠人は涼しい顔で非情な発言をする。

「絶対に嫌です！」

「彼の人生を台無しにしてもいいのか？」

「そんな意地悪なこと言わないでっ……」

滯は追いつめられて泣きそうになった。それでも精一杯の気力を奮い起こし、潤んだ瞳で強気に見据えて言う。

「お願いします。私、師匠のことを嫌いになりたくありません。私のことを思ってくれるんだったら、約束を白紙に戻してくれませんか？」

「それはちょっと虫が良すぎるんじゃないかな」

自分でもそう思っていただけに返す言葉がない。けれど、今の自分には頼み込むしか術がなかった。これで駄目ならどうすればいいのだろう。部屋が暖まってきたせいか、焦りのせいか、額にじわり汗が滲んできた。空調の音にさえ追い立てられるような気持ちになる。

「滯の必死さに免じて妥協してあげるよ」

「えっ？」

悠人は唐突にそう言って立ち上がった。そして、滯の正面からベッドに片膝をのせると、細い肩を押して仰向けに倒し、無表情のまま覆い被さるように顔を近づける。ベッドがギシギシと耳障りに軋んだ。

「ちょっと師匠、何を……？！」

滯が狼狽した声を上げると、息が触れ合う寸前の距離で彼の動きが止まった。ベッドの上で押し倒されるような格好になっているが、滯には何がなんだかわからない。感情の読めない瞳が、

真上からまっすぐに濡を捉えている。

「約束を白紙に戻せば、僕が濡と結婚できる確率は低くなる。それならば、せめて今夜一晩だけでも手に入れたい——意味はわかるね？これが、僕にできる精一杯の譲歩だよ」

濡は息をのんだ。

「やっ、やめてください！！」

「心配しなくても同意なしには進めないし、無理強いもしない。選ぶのは濡だ。条件を飲んで約束を白紙に戻すか、条件を拒否して約束を続行するか……君の彼氏の命運もかかっている。じっくり考えるといい。タイムリミットは午前一時としておこうか」

そんな——。

条件を飲めば約束を取り消してもらえる。誠一とも付き合い続けられるし、彼をひどい目に遭わせることもない。けれど、それは同時に彼を裏切ることにはならない。やはり別れるしかないのだろうか。悠人と結婚するしか道はないのだろうか——視界が大きく歪む。瞬きもせず彼を見つめながら、目尻からすっと一筋の涙をこぼした。

「そこまで嫌がられると傷つくな」

ふっ、と悠人は曖昧な笑みを浮かべた。そして、親指でなぞるように涙の跡を拭くと、いったんベッドから降り、濡のすぐ隣に座り直した。大きく息を吐きながら背中を丸め、膝の間で両手を組み合わせる。

「泣いても約束は取り消さない」

濡は仰向けのまま白い天井を見つめ、その言葉を聞いていた。瞼は僅かに震えている。

「でも、心配はいらない」

「……えっ？」

一拍の間のあと、そう言って彼の方に視線を向ける。しかし、目に入るのは少しくたびれた広い背中だけで、表情を窺うことはできなかった。おそるおそる体を起こすと、隣に座している彼を覗き込む。うつむいた横顔は真剣そのもので、少なくともからかっているわけでないことだけはわかった。

「剛三さんには約束のことも彼氏のことも言っていないし、言うつもりもない。この約束は僕と濡だけのフェアな賭けだ。もちろん、わざわざ妨害するようなこともしない」

「本当？」

小首を傾げ、半信半疑で聞き返す。

悠人は優しく微笑んで振り向くと、濡の頭にぽんと大きな手を置いた。

「本当だよ。ただ……ひとつ言っておくと、剛三さんには僕らの約束なんて関係ない。邪魔なものはすべて排除するだけだからね。今はまだ彼氏のことを知らないだろうけど、いずれ知るところとなったとき、何かしらの行動を起こす可能性は大いにある」

つまり、約束を撤回しようがしまいが、大して事態は変わらないということになる。悠人はそれがわかっていながら、濡が気付いていないのをいいことに、半ば脅すようにあんな条件を持ちかけたということだ。

ほとんど詐欺じゃない——。

もし条件を飲むと言ったらどうするつもりだったのだろう。約束を撤回してもらったとしても、誠一はひどい目に遭い、別れさせられることになるのだとしたら。漣は眉間に深く縦皺を刻む。

その様子を見て、悠人は自嘲ぎみにふっと笑った。

「これでは嫌われる一方だな」

「嫌いには、なれませんか」

それは漣の率直な気持ちだった。彼の行為は腹立たしく思っているが、結局のところ、彼のことは嫌いになれそうもない。自分たちが共有した17年という時間の積み重ねは、それほど軽いものではないのだ。

「漣……僕は、君のことが好きだ」

今さらのような告白。

結婚の話は何度も聞かされたが、好きだと言われたのは初めてかもしれない。わかっていなかったわけではない。けれど、こんなにもまっすぐな言葉を向けられると、胸がギュッと締めつけられ息が詰まりそうになる。それを誤魔化すように、ぎこちなくも精一杯の笑顔を作ってみせた。

「そういうことは最初に言わないとダメですよ」

「どこで間違っただろうな」

悠人は遠くを見やり、静かに言葉を落とした。僅かに目を細めて続ける。

「いろいろと想定外のことが起こったせいで、こんなことになってしまったけれど、本当は漣が18になるまで待つつもりだったんだ。承諾してくれるものと当然のように思い込んでいたよ。僕以外の人を好きになるとは考えもしなかった。とんだ自惚れだったね」

そこで息を継ぎ、少し表情を険しくする。

「こんなことなら、もっと早くに僕の気持ちを伝えておくべきだった。婚約を取り付けておくんだ。そうすれば漣も素直に受け入れてくれたかもしれない。誰にも悲しい思いをさせることはなかったかもしれない……だろう？」

彼に同意を求められるが、漣には答えることが出来なかった。確かに、誠一と知り合う前だったら、悠人と結婚という選択肢もなかったとはいえない。けれど、そんな話は無意味である。どちらにしても過去に戻ってやり直すことなど不可能なのだから――。

悠人はそっと振り向き、漣を見つめた。

「漣、もしも心ならず僕と結婚することになっても、心を閉ざさないで今までと変わりなく接してほしい。身勝手なことばかりしておいて、こんなことを頼める立場ではないが、必ず君を大切にすると誓うから……」

真摯な言葉がずっしりと漣の心にのしかかる。茶化すことも笑い飛ばすこともできず、かといって頷くわけにもいかず、その重みに耐えるように、ただ固く口を結んでうつむいていた。無意識のうちに握りしめたスカートの裾は、跡がつきそうなほど強く皺になっていた。

カチャリ――。

滯は扉を開け、憔悴した足取りで部屋を出た。冷えきった廊下の空気が、火照った体には心地よく感じられる。ぼんやりとしていた頭も明瞭になってくるようだ。

どうしてこんなことに――。

やる方のない溜息を落とし、ドアノブからそっと手を離す。そのとき、すぐ隣に、腕組みした遥がいることに気がついた。思わず声を上げそうになったが、遥が人差し指を唇に当てたのを見て、すんでのところまでそれを呑み込んだ。

黙って歩き出した遥に並んで、滯も同じ速度で歩く。

「聞いてたの？」

「危なくなったら助けに入ろうと思って」

遥は足を止めることなく淡々と答えた。無表情の横顔からは、どういう気持ちでここへ来たのかはわからない。滯は大きく顔を上げると、窓越しに濃紺色の星空を眺めながら目を細めた。

「もし、私が条件を飲むって言ったら、止めに来てくれた？」

「師匠は反応を試してただけで、本気じゃなかったと思うけどね」

「そっか……」

滯は白い吐息を漏らした。澄んだ冬空に鏤められた小さな星々は、何かを語りかけてくるかのようにキラキラと瞬いている。見ているうちに目の奥がじわりと熱くなった。そっと瞳を閉じて小さく息を吸い込むと、パッと表情を晴らし、黒髪をなびかせながらくるりと遥の前に躍り出た。

「ね、今日は遥のところで寝させて？」

「いきなり何なの？」

そう言って怪訝に眉をひそめる遥に、滯は薄く微笑むと、再びくるりと身を翻して背を向けた。

「……だってさみしいんだもん。家族が一人、家族じゃなくなったみたいで」

こんなことくらいで自分たちの関係が壊れたりはいらない。けれど、無邪気だった頃とまったく同じというわけにはいかない。彼の想いを知ることでもなくしてしまったもの、変わってしまったものは、きっともう二度と元通りにはならないだろう。

不意に、左手が何かに包まれた。

それは遥の手だった。最初はひやりと冷たく感じたものの、触れ合ったところから熱が生まれ、次第にほんのりとあたたかくなっていく。女の子のようにほっそりとした彼の手が、このときばかりはやけに頼もしく感じられた。

「僕は、いつまでも滯の家族だから」

そっと落とされた言葉。

多分、それは今の自分が何よりも欲しかったもの――滯はうつむいて目頭を押さえると、小さく頷き、繋がれたままの彼の手をギュッと握り返す。堪えようとしても、熱くなった目からは涙があふれて止まらなかった。

## 10. 嘘

「知らなかったなあ、誠一が絵に興味あったなんて」

久しぶりに二人の休日が重なったとある日曜日、漣と誠一は、都立西洋美術館のイタリア・ルネサンス美術展に向かっていた。誠一の提案である。たまには美術館で絵画鑑賞するのもいいんじゃないかと言われ、漣も賛成したが、彼らしからぬその高尚な発言については少し驚きを感じていた。

「誠一が興味あるのってエッチなゲームくらいかと思ってたのに」

「それを蒸し返すなって……」

誠一は苦笑すると、ブルゾンのポケットに両手を突っ込んで空を仰いだ。

「実はそこまで絵に興味があるわけじゃないんだよな。今まで美術館なんて数えるほどしか行ったことないし。今回、ルネサンス展を見に行く気になったのは、たぶん怪盗ファントムの影響なんだろうなあ」

「えっ……?!」

唐突に出てきたその名前に、漣の心臓はドクンと跳ねた。

「漣も知ってるよな？ 世間を騒がせている絵画泥棒」

「うん、聞いたことはあるよ」

早鐘のようにドクドクと脈打つ鼓動を抱えつつ、なるべく冷静に答えようとしたが、その声は若干ぎこちないものになってしまった。だが、誠一に気付いた様子はなく、前を向いたまま淡々と話を続ける。

「そいつに関連して、最近テレビや雑誌でよく絵画の特集が組まれててな。あれこれ見ているうちに、何となく興味を惹かれるようになったんだよ。そういうのは俺だけじゃないみたいで、美術館の入場者数はどこも増加傾向らしい。だからといって、怪盗ファントムを容認するわけにはいかないけども」

怪盗ファントムを容認しない——警察の人間としては至極まっとうな発言である。彼がそう考えるだろうことはわかっていたし、覚悟もしていたつもりだったが、それでもはっきり口にされると居たたまれない気持ちになる。

「もし、美術館でファントムと鉢合わせしたらどうするの？」

「もちろん捕まえるさ」

誠一は力強く断言する。が、すぐに微笑んで振り向いた。

「といっても今日は来ないだろうし、心配しなくても、俺たちのデートが邪魔されることはないよ」

無論、漣が心配しているのはそういうことではない。だからといって訂正するわけにもいかず、うつむいたままハンドバッグを後ろに持ち直し、そうだといいんだけど……と曖昧に言葉を濁した。

「怪盗ファントムは予告なしに盗まないから大丈夫だよ。美術館が通報してない可能性もないとはいえないけど、少なくとも都立西洋美術館というのはありえないだろうな」

「え？ どういうこと？」

滯は瞬きをしながら顔を上げた。

「怪盗ファントムがこれまで盗んだ絵画は、すべて近代日本人作家の作品なんだよ。先代のときからずっとね。だから、西洋美術しか扱っていない都立西洋美術館には、怪盗ファントムの目当てとなるものはないはずなんだ」

「へえ……」

先代のことはよく知らないが、滯たちがこれまで盗んだものは、確かにすべて近代日本人作家の作品である。ただ、獲物を決めているのは祖父であり、滯はそのことに気付きもしなかった。

「もうひとつ豆知識」

滯の感嘆したような反応が嬉しかったのか、誠一は人差し指を立てて声を弾ませる。

「怪盗ファントムは東京都内でしか活動してないらしいよ。たぶん東京都民なんだろう。自分の土地勘のあるところだけに標的を絞っているという説が有力だ。やることは大胆なくせに、意外と慎重なところがあるんだよな……だから捕まらないんだらうけど」

またしても誠一から知らない話を聞かされる。核心に迫るような内容ではなく、ただの事実と分析でしかないが、滯の不安を煽るには十分だった。

「誠一、ファントム担当じゃないよね？」

「仕事は関係ないよ」

誠一は苦笑しながら答えた。それから、少し表情を和らげて続ける。

「刑事が言うのは問題かもしれないけど、実は俺、子供のころ怪盗ファントムに憧れてたんだよ。テレビのニュースとか食い入るように見ててな。もっとも、そのころはまだ怪盗の意味もよくわかってなかったし、単純に見た目やパフォーマンスが好きだったってだけの話だけだ」

「そ、そう……」

滯の顔が僅かに引きつった。よりによって最も親しい人のひとりが、子供の頃のこととはいえ、怪盗ファントムに憧れていたなんて——いや、子供の頃だけなら問題はなかった。さすがにもう憧れてはいないだろうが、今でも関心はあるらしく、怪盗ファントムの動向には注目しているようだ。これではちょっと下手をするだけで正体を疑われかねない。ただの雑談でも上手く対処できる自信がないのに、核心を突かれでもしたら、嘘をつくのが苦手な自分ではごまかしきれないだろう。

「もしかして、呆れてる？」

「えっ？」

誠一の声で現実に戻された。苦笑を浮かべる彼を目にすると、慌ててふるふると首を横に振る。

「そうじゃなくて……遥も同じようなこと言ってたから、ちょっとビックリしちゃうだけ」

「遥が？ そっちの方が意外だな」

これがきっかけとなり、話題は怪盗ファントムから遥へと移っていく。遥は何を考えているのかわかりづらいだけに、誠一もいろいろと気になってしまうのだろう。おかげでなんとかこの状況を乗り切れそうで、滯は密かに安堵するが、同時に小さく刺すような痛みが胸に走った。

「やっぱりけっこう人が来てるね」

美術館の正面は、小学生からお年寄りまで多くの人たちで賑わっていた。二つあるチケット売り場にも列が出来ている。誠一の言うように怪盗ファントムの影響もあるのかもしれないが、このイタリア・ルネサンス美術展には世界的に有名な作品が展示されており、絵画や美術に詳しくなくても興味を惹かれる人は多いのだろう。

誠一が前売り券を持っていたので、チケット売り場ではなく直接入口の方へ向かう。そこにも多少の列はできていたが、進みは早く、ほとんど待つことなく入れそうだった。二人はその最後尾に並び、ほどなくして受付まで来ると、誠一は係の女性に前売り券二枚を手渡した。

——瞬間。

濡たちの背後を何かが勢いよく通り抜けていった。つむじ風が起こり長い黒髪を舞い上げる。不思議に思いながら美術館内に振り向くと、その視線の先には——。

「怪盗ファントムだ！！」

館内にいた誰かが叫んだ。黒いジャケットとプリーツスカートを身につけた人物が、長い黒髪を大きくなびかせながら、啞然とする人々の間を、素早い身のこなしで縫うように突っ切っていく。

それを目にするやいなや、濡は我を忘れて駆け出した。

「おい、濡！」

呼び止める誠一の声も耳に入らない。脇目もふらず、黒い背中だけを追って全力疾走する。すぐに距離は縮まる。

後ろからジャケットの腕を掴んでうつぶせに引き倒すと、手首をねじり上げながら馬乗りになり、もう片方の手を背中側に押さえつけた。顔を覆っていた白い仮面は、床に倒れた衝撃で顔から外れ、カラカラと軽い音を立てながら滑るように転がっていく。

あっというまの出来事だった。まわりはみな怪訝な顔をしている。

「濡！大丈夫か？！」

少し遅れて誠一が走ってきた。その手には濡の白いハンドバッグが握られている。追いかけるときに思わず放り投げたのを、彼が拾ってきてくれたのだろう。

「うん、私は平気」

濡は拘束の手を緩めることなく、小さく微笑んで答える。

誠一はそれを目にしてほっと息をついた。両手を腰に当て、まじまじと二人の姿を見下ろして言う。

「しかし、まさか怪盗ファントムを捕まえるとはな」

「……えっ？」

濡はあらためて捕らえた人物に目を落とす。見事なくらいに怪盗ファントムそっくりの衣装を身につけているし、髪型もほぼ同じといってもいいくらいだが、自分でなく、遥でもなく、全くの見知らぬ女性である。

「違うの！この人はただのニセモノ……よね？」

「そうだけど悪い?! 放してよ! 痛いじゃない!!」

彼女は横目でキッと睨みつけながら、じたばたして拘束を振り払おうとするが、漑は逃さないようしっかりと握りしめる。先ほどの身のこなしからすると運動神経は悪くなさそうだし、女性にしては腕力もある方だと思うが、この体勢ではどう足掻いても漑から逃れることはできないだろう。

「だよなあ、ファントムにしちゃあ、脚が太いと思ったんだ」

漑たちを取り囲んでいた野次馬のひとりが、両手を腰に当てながらそう言って、ガハハと豪快に笑い声を響かせた。つられるように、あちらこちらで遠慮がちに失笑が起こる。

「脚だけじゃなく全体的に太めなんだよな」

「それに本物はもうちょっと背が高いだろ」

「そうそう、顔はもっと小さいよな」

今度は若い男性たちのグループが、口々にそんなことを言い始めた。

「悪かったわね!!」

偽ファントムは頭から湯気が立ちのぼりそうなくらい真っ赤になっていた。自業自得といえはそうなのかもしれないが、さすがに同じ女性として気の毒になり、漑は同情的な眼差しを彼女に送る。しかし――。

「どちらかっていうと、こっちの嬢ちゃんの方がファントムっぽいよな」

突然、野次馬の矛先は漑に向けられた。一瞬、漑は何を言われているのか理解できず、指をさされたままぼかんとするが、その意味に気付くと大きく息をのんで目を見開いた。

「私?! ちょっとそれ絶対に違いますから!」

「おいおい、そんなにムキになって否定することもないだろう。嬉しくないのか? 怪盗ファントムって、巷じゃスタイル抜群の美少女怪盗とか言われてるんだぞ?」

「嬉しいわけじゃないじゃない! は、犯罪者なんだからっ!!」

漑は顔を上気させて必死に反論したが、なぜか相手の男性は腰を屈めて嘔き出した。

「確かにそうだ、悪かった悪かった。にしても真面目な嬢ちゃんだなあ」

彼が陽気にそう言うと、まわりもつられて笑い出した。誠一も一緒になって笑っている。どうやら疑われているわけではないようだ。そのことについては胸を撫で下ろしたものの、些かムツとし、偽ファントムを掴む手に無意識に力が込もった。

「痛っ! いつまでこうしてるつもり?! いいかげん放しなさいよ!」

偽ファントムが再びじたばたと喚き始めた。

「もともと何も盗むつもりはなかったの! ただの大学サークルの余興よ! 怪盗ファントムの格好で美術館を一周してくることになって、私は先輩の命令で仕方なくやっただけなんだから」

「大学生にもなって、やっていいことと悪いことの区別もつかないのか」

誠一は説教じみた口調でそう言いながら、ブルゾンの内ポケットから携帯電話を取り出した。それを見た偽ファントムの顔がさっと青ざめる。

「ちょっとやめてよ! 何も盗んでないじゃない!!」

「でも君、入場料、払ってないよね?」

「は?!」

彼女は全力で目を丸くした。

「払うわよ、払えばいいんでしょう!」

やっぱちのように声を張り上げる彼女に、誠一は冷ややかな視線を投げかけた。再びブルゾンの内ポケットに手を差し入れると、黒い手帳を取り出して開き、床に倒された彼女の鼻先にそれを掲げる。

「警視庁捜査一課の南野だ」

偽ファントムはぎょっとして目を見開き、絶句した。野次馬たちからは「おおー」と感嘆の声が上がる。誠一は警察手帳をしまうと、手にしていた二つ折りの携帯電話を開いた。

「君が本物か偽物かもまだわからないからな」

「サークルの余興だって言ったでしょう?!」

「言いわけは取り調べのときにしてくれ」

そう言うと、素早くいくつかのボタンを押して携帯電話を耳に当てる。観念したのか、彼女はぐったりとうなだれ、もう暴れることも騒ぐこともなくなった。

「捜査一課の南野です」

おそらく警視庁のどこかに電話したのだろう。ここでの出来事や現在の状況などを的確に説明していく。普段はほとんど意識していないが、こういう一面を見ると、やはり誠一は刑事なのだ実感させられる。タイル張りの床に押しえつけられた偽ファントムの後ろ姿が、おぼろげに自身と重なり、滯はその手首を掴んだままきゅっと口を引き結んだ。

その後、何人もの刑事がやってきて、仰々しく容疑者を連行していった。

これでようやく誠一と美術館を見てまわれる——と思ったのだが、調書を作成する必要があるとのことで、誠一と滯も警視庁へ連れて行かれることになった。今日のデートはもうおしまいだろう。滯はやるせない溜息をつきながら、用意された車に乗り込んだ。隣の誠一も残念そうに苦笑していた。

調書の作成は十数分で終わった。

滯が調書をとられるのはこれで二度目である。一度目は誠一と出会うきっかけとなった事件だが、そのとき捜査一課の刑事たちと知り合いになり、一時期はよく差し入れを持って遊びに行っていた。ただ、今回は担当の課が違うらしく、見知った刑事はひとりもいなかった。

自宅まで車で送るといふ担当者の申し出を断り、滯は応接室で誠一を待たせてもらうことにした。彼は取り調べに立ち会っているので時間がかかると聞いたが、このまま一人さびしく帰ろうという気にはなれない。出されたお茶とお菓子に手を伸ばしながら、ぼんやりと今日の出来事を振り返っていた。

ふと、携帯電話がマナーモードのままだったことを思い出す。

確認するといくつかの着信履歴があった。自宅の固定電話と、悠人の携帯電話からだ。

まず自宅の方に電話をすると、執事の櫻井が大袈裟なくらいに心配していた。すでに警察の方から連絡がいていたようで、怪我もなく無事だということも、調書をとるだけということも聞

いていたが、それでも滯の元気な声を聞くまでは安心できなかったらしい。滯は明るく笑い飛ばすように無事を強調し、少し遅くなるかもしれないと伝えて電話を切った。

その後、すぐに悠人から電話がかかってきた。櫻井から伝え聞いたそうで、一連の事情は把握していた。さすがに落ち着いてはいたが、心配していることは伝わってくる。ただし、それは滯自身に対してというより、滯の置かれた状況に対してのようだ。偽者とはいえ怪盗ファントム関連の事案で、警察に関わっているとすれば、彼の不安もわからなくはない。

「でも、本当に今日の事件のことしか言ってませんか。信じてくれないんですか？」

『信じたいのは山々だけどね、滯は墓穴を掘っても気付かないところがあるからな』

「ちょっ、いくらなんでもそこまでひどくありません！」

思わずむきになって言い返すと、電話の向こうで悠人がくすくすと笑い出した。

『じゃあ、とりあえず信じることにするよ。まだ帰れないのか？』

「あ……うーん……もう少し、かな？」

誠一のことを話すわけにはいかず言葉を濁す。あとどのくらいかかるのか、滯には見当もつかない。

『今なら抜けられそうだから迎えに行くよ』

「えっ?!」

滯は素っ頓狂な声を上げて、ソファから飛び上がった。携帯電話を耳に当てたままあたふたする。

「あ、えっと、でも友達と一緒にだから……」

『もちろん友達も乗せて行ってあげるよ』

下手なごまかしのせいで、ますます難儀な展開になった。誠一と悠人を会わせるわけにはいかない。どうにかしてこの危機的状況を回避しなければならないが、焦れば焦るほど頭が混乱して考えがまとまらない。携帯電話を持つ手がじわりと汗ばんでくる。

『友達って、彼氏？』

沈黙を破ったのは悠人だった。

いきなり凶星を指されて心臓が止まりそうになったが、もう言い抜けられないと思い、滯はこくりと頷きながら小さく肯定の返事をする。受話器の向こうから微かな吐息が聞こえた。

『わかった。あまり遅くならないうちに帰ってこいよ』

悠人は怒ることも責めることもなく、それ以上の干渉をすることもなく、ただ保護者として最低限の言葉だけを返した。その静かな声に胸を衝かれ、滯は携帯電話を耳に押し当てたまま目を伏せる。

「ごめんなさい」

『別にデートを禁止した覚えはないよ』

「そうじゃなくて、嘘をついたから……」

『滯に嘘をつくことを強要している僕が、それを咎めるわけにはいかないだろう。どうせならもっと上手く嘘をついてくれ。ごまかし方が下手すぎて心配になってくるから』

悠人は冗談めかしてそう言った。

漣は今さらながら心苦しさを感じてうつむく。どうして信じられなかったのだろう、妨害しないと言ってくれた彼とその言葉を。彼がそんなことをする人ではないとわかっていたはずなのに。長い黒髪がさらさらと肩から落ち、カーテンのように視界を遮った。

『漣、好きだよ』

まるで心情を察したかのような不意打ちに、不覚にもドキリと心臓が跳ね上がる。こんなときにこんなことを言うなんて反則だ。耳元を赤く染めながらも、思いきり眉をひそめて口をとがらせる。

「……あの、少しは自重してください」

『かなり自重しているつもりだけどね』

悠人はしれっと答える。その悪びれない態度は腹立たしいが、冷静に考えてみれば、確かにそうかもしれないと思う。漣と二人きりのときにしか、そういう一面を見せないのだから。

「……もう、切りますよ」

『ああ、彼氏によろしくな』

「言いませんから！」

漣は思わずカッと声を荒げて言い返し、携帯電話を切った。ふうと細く息を吐きつつ折り畳む。

悠人はまったく諦めていない。

今後もこういうことが続くのだろうか。そして、いずれは彼の望むとおりにになってしまうのだろうか——静かに語られた真摯な想い、燃えたぎるような眼差し、重ねられた唇の感触が、その熱とともによみがえってくる。無意識に、人差し指が唇をなぞっていた。

「ひゃあ！」

ガチャリ、とすぐ後ろで扉が開き、漣は飛び上がりそうになった。バクバクと暴れる鼓動を抱えて振り返ると、そこには目をぱちくりさせている誠一が立っていた。

「どうしたんだ？」

「ううん、何でもない。ちょっと考えごとをしてたから」

漣は小さく肩をすくめて取り繕うと、携帯電話をそっとポケットにしまった。

「もう帰れるの？」

「ああ、長いこと待たせて悪かったな」

少し疲れた様子ながらも、誠一は笑顔を見せて答えた。

それだけで、もやもやした気持ちが晴れていくようだった。今はもう余計なことを考えたくない。漣はソファに置いたハンドバッグとコートを掴み取ると、戸口で待つ彼のもとへ一目散に駆けていった。

「どうやらサークルの余興というのは本当みたいだな」

二人並んで廊下を歩いていると、誠一は当然のように偽ファントムの話を持ち出した。漣としてはなるべく避けたかったのだが、急に話題を逸らすのも不自然だと思い、とりあえずおとなしく耳を傾けることにした。

「サークル仲間や友達からも証言をとったが、すべて偽ファントムの供述と一致している。本当に美術館を一周するだけのつもりだったんだろう。念のため、これから関係各所の家宅捜索をしてくるとは言っていたけど」

「へえ、そこまでするんだ……」

「怪盗ファントムの格好をしてたから一応な」

警察が慎重になるのも当然かもしれない。すでに幾度となく怪盗ファントムにしてやられており、警察の威信も失墜しかけている今の状況では、どんな些細な可能性でも無視できないのだろう。

「残念だったな」

「えっ？」

「本物だったら、また表彰してもらえたのに」

「ああ……そんなのは別にいいよ」

そのことだったのかと安堵して、滯は苦笑を浮かべる。誠一と出会うきっかけとなった事件、つまり逃走中の殺人犯を取り押さえたことで、滯は警視庁から感謝状を贈られていた。もし怪盗ファントムを捕まえたとなれば、再び感謝状を贈られることは間違いない。ただ、それは絶対にありえないことなのだが――。

「おう、南野じゃないか！」

通りかかった一室から出てきた体格のいい男性が、豪快な声を廊下に響かせた。誠一の先輩刑事の岩松である。滯とも顔見知りであるが、間に誠一を挟んでいるため気付いていないようだ。分厚いファイルを脇に抱え直しながら、不思議そうに誠一を見下ろして尋ねる。

「おまえ、こんなところで何やってんだ？今日は非番だろう？」

「そうなんですけど、美術館で偽ファントムを捕まえてしまって」

誠一は慌てもせずさらりと答えた。

「なんだ、あれを捕まえたのはおまえだったのか」

「あ、いえ、正確には自分ではなくて……」

「お久しぶりです、岩松さん！」

そう言いながら、滯は誠一の背後からひょっこり飛び出した。

岩松の顔にぱっと笑みが広がる。

「滯ちゃんじゃないか。久しぶりだなあ！ぱったり来なくなって寂しかったぞ」

もともと誠一に振り向いてほしいがゆえに通っていたので、目的を達成してその必要がなくなったわけだが、岩松を始めとする仲良くなった刑事たちに会いたい気持ちはあった。それでもあえて行かなかったのは、誠一と付き合っていることを隠しておける自信がなかったからである。当然ながらそんな理由を口にできるはずもなく、滯は曖昧にごまかし笑いを浮かべるしかなかった。

「もしかして滯ちゃんが捕まえたのか？」

「あ、はい、偶然出くわしちゃって」

そう答えると、岩松の顔がふと心配そうに曇った。滯の頭に大きな手を置いて覗き込む。

「あまり無茶するんじゃないぞ？」

「気をつけます」

滯は小さく肩をすくめる。その答えに満足したように、岩松はにっこり頷いて体を起こした。そして、やにわに不思議そうな顔になると、腰に手を当て、並んだ二人をあらためて交互に見ながら言う。

「それで、なんでおまえら一緒なんだ？」

「美術館で偶然会ったんですよ」

ギクリとした滯とは対照的に、誠一はいたって冷静に答える。それは、警視庁に来る前に二人で示し合わせたことで、偽ファントム担当の刑事たちにも同じ説明をしていた。彼らには特に疑われることはなかったが、岩松には引っかかるものがあったようだ。

「偶然？」

「本当に偶然です！」

滯は前のめりになって力説した。岩松は眉をひそめて考え込むと、ゆっくりと視線を戻す。

「もしかして、滯ちゃんの好きな人って南野だったのか？」

「ちっ、違いますよ！全然まったく違いますっ！！」

確かに「好きな人がいる」と岩松に言ったことはあったが、一年以上も前の話であり、そんなことをよく覚えているものだと思えば感心してしまう。しかし、いくら凶星でも認めるわけにはいかない。瞳の奥をじっと探るように見つめられ、ますます必死になって首を横に振る。

「本当に違うんですって！」

「滯、もういいよ」

誠一は溜息まじりにそう言うと、真剣な面持ちになって岩松に向き直る。

「すみません、自分たちは一年ほど前から付き合っています」

「ちょっと誠一……！」

二人の交際を隠していたのは、恥ずかしいとか、照れくさいとか、言い出しにくいとか、そういう心情的な理由ではない。滯の年齢が問題になりかねないからだ。それなのに自分から白状してしまうなんて——滯は奥歯を噛みしめ、体の横でこぶしをきつく握りしめる。

「で……でもっ……」

そう口を切りながらも、迷いを拭いきれず目を泳がせていたが、やがて意を決してパッと顔を上げる。

「私たちは清く正しいお付き合いだからっ！！」

人通りのない無機質な廊下に、滯の声が反響した。

二人の付き合いを認めてしまった以上、問題を大きくしないためには、こう言うより他にないと思った。全力で考えた結果である。だが、なぜか誠一は絶望的な表情で頭を抱え、岩松はフッと思わせぶりに口もとを緩めた。

「滯ちゃん、俺が刑事だってことは知ってるよな？」

「あ、はい……？」

当たり前のことを岩松に尋ねられ、滯は戸惑いぎみに返事をした。

「刑事の仕事は何だと思う？」

「犯罪者を逮捕すること、ですか？」

「そう、そうのためには何を？」

「……全力疾走？」

滯が首をひねりながら答えると、岩松はハハハと声を上げて笑った。

「まあそういうこともあるにはあるが、普段は地道に聞き込みをやってるんだ。居場所を掴まないことには捕まえられないからな。それが仕事の大半だといってもいいくらいさ」

滯は小首を傾げた。何の脈絡もなく語り出したわけではないだろうが、一向に話が見えず、もやもやしたものが胸にわだかまる。かといって、何が言いたいのか聞き出すような勇気もない。

岩松は静かに言葉を繋ぐ。

「だから、相手が嘘をついているか見分ける力が自ずとついてくる。逆にいえば、そうでなければ刑事は務まらない。俺は現場一筋20年だ。滯ちゃんが必死に南野を庇おうとしていることくらい、すっかりお見通しさ」

「あっ……」

返す言葉はなかった。今さら何を言ってもごまかしようがないだろう。滯は顔をこわばらせて睫毛を震わせる。しかし、事の重大さを理解しているのかいないのか、誠一に深刻な様子は窺えず、両手を腰に当てて溜息を落とすだけだった。

「刑事じゃなくてもわかりますよ」

「ま、今回の場合はそうだな」

岩松は白い歯を見せて笑った。滯を覗き込み、大きな手をぽんと頭にのせる。

「みんな滯ちゃんみたいに素直だと、俺たちも苦労しなくて済むんだがな」

「あの……誠一とのこと、ですけど……」

滯は上目遣いでおずおずと切り出す。

岩松は頭をかきながら、しょうがないと言わんばかりに鼻から息をついた。

「誰にも言わないでやるよ。バレても庇ってはやれないけどな」

「ありがとうございます！」

滯はぱっと表情を明るくすると、大きく弾むように頭を下げた。隣の誠一も深々と頭を下げている。ちらりと盗み見たその横顔には、隠しきれない安堵が滲んでいた。

岩松の目が優しく細められる。

「良かったよ、滯ちゃんが幸せそうで」

「はい！」

滯は屈託のない笑顔で答えた。

「また遊びに来てくれと言いたいところだが、滯ちゃんの場合はすぐにボロが出るからな。高校卒業するまでは来るんじゃないぞ」

岩松はそう言うと、左手を振りながら背を向けて歩き出した。その大きな背中に、ふたりは感謝をこめて深くお辞儀し、遠ざかる後ろ姿が見えなくなるまで見送った。

軽く息をつくだけで、白いもやがふわりと浮かび上がる。

まだ夕方を少し過ぎたくらいの時間だが、冬の日暮れは早く、外はもうすっかり夜の帳が下りていた。寒さもいっそう厳しさを増しているようだ。あっというまに顔から熱が奪われていくのがわかる。

「バレちゃったね」

並んで歩く誠一を見上げ、滯は後ろ手にハンドバッグを持ってエヘへと笑った。

誠一は疲れたように深く溜息を落とす。

「笑いごとじゃないんだぞ。岩松さんだから助かったけど、下手すればクビだからな？ まあ、滯と一緒に来たときから多少の覚悟はしてたけど。嘘をつくのが下手なうえに、墓穴を掘っても気付かないし」

「墓穴……」

滯はそう呟いたきり言葉を詰まらせた。先ほど悠人にも同じことを言われたばかりである。墓穴を掘っているという自覚はないのだが、まったく関係のない二人から言われてしまうのは、やはり自分にそういう部分があるからだろうか――。

「今度こういうことがあったら、頼むから黙っててくれないかな」

謙虚になろうとしていた滯も、この追い打ちにはさすがにムツとした。不満を露わに頬を膨らませる。しかし、誠一は横目を流してくすっと笑うと、宥めるように滯の頭に手を置き、濃紺の空を仰いで大きく息を吸い込んだ。

「ずっと滯と一緒にいたいんだよ。だからさ」

「うん……」

滯は小さく頷き、ギュッと彼の腕を抱え込んで寄りかかる。

「私も、ずっと誠一と一緒にいたい」

大っぴらにできない関係である以上、本来こういったことは控えねばならないが、今だけもう少しこのままでいさせてほしいと願う。誠一も同じ気持ちだったのだろう。無言のまま、優しい眼差しで肩に寄りかかる滯を見下ろしていた。

目の前を、白いものがふわりと落ちていく。

ふたりは同時に顔を上げた。上空からはらりはらりと舞い降りる雪を目にして、どちらともなく足を止める。

「積もるかな？」

「東京に積もるのは嘘だけだよ」

「嘘？ どういうこと？」

滯がぎょとんとして聞き返すと、誠一は白い息を吐いて笑った。

「青森にいる祖母の口癖。東京が嫌いみたいでさ」

彼の祖母が青森にいることさえ知らなかったが、その懐かしむような口調を聞いていると、何となく割り込むのを躊躇ってしまい、ただじっと彼に寄りかかりながらその横顔を見つめていた。

「嘘はまあともかくとして、確かに雪はほとんど積もらないよな。この雪も、積もるような降り

方じゃないし、積もったとしても多分すぐに融けるよ」

「そっか……」

嘘も雪みたいに融けてなくなってしまう方がいいのに——滯はふとそんなことを思う。けれど、それは叶わぬ願い。滯自身が望む望まないにかかわらず、言えないことは次から次へと増えていく。もしかすると、最も嘘をつきたくない相手に、最も多くの嘘をつかなければならないのかもしれない。

綿のような雪が頬に触れ、融けて水になった。

滯はその沁み入る冷たさに目を細めると、冷えた指先でそっとなぞるように拭った。

## 11. 純白騒動

---

『セカンド、10分前だ。そろそろ準備してくれ』

「了解」

濃紺色の空の下には、色とりどりの光が宝石のように眩く煌めいている。

滯は高層ビル屋上の隅にペタンと座ったまま、ヘッドセットから聞こえる悠人の指示に、寒さに身を震わせながら返事をした。それだけで白い息が浮かぶ。どうせなら早く始めてしまいたい——そんな投げやりなことを思いつつ、膝を抱えてそこに顔を埋めた。

今日はデビュー戦のときと同様、ハンググライダーで目的の美術館に降り立つ予定になっている。が、滯としてはあまり気が進まなかった。同じ方法を二度三度と繰り返して使えば、必然的に行動を読まれる危険性も高くなる——そう反論したのだが、剛三に押し切られてしまったのだ。迷惑この上ないが、徐々に派手な登場を演出できることが嬉しいらしく、いつも以上に鼻息を荒くして意気込んでいた。

すでに、怪盗ファントムの衣装を身につけ、ハンググライダーも組み立ててあった。あとは仮面をかぶってハーネスを装着するだけである。滯は溜息をつきながら、足もとの白く冷たい仮面を手を取った。そのとき——。

ガシャガシャン！！

ビル内部へと通じる扉が乱暴に開き、そこから男が飛び出してきた。滯は慌てて仮面をつけて息を潜める。屋上はかなりの広さがあり、そのうえ照明がほとんどないため、隅の物陰にいた滯には気付いていないようだ。

鍵をかけてあったのに、どうして——？

遠目であまりはっきりとは判別できないが、ブルゾンとジーンズというラフな格好で、少なくとも警察官や警備員の類には見えなかった。男はしきりにあたりを見回したあと、思い出したように扉を閉めに駆け戻る。しかし、ノブに手を掛けようとした瞬間、扉がすさまじい勢いで開き、頭を打ちつけて後方に吹っ飛ばされた。額を押さえつつ、コンクリートの上で体を丸めて苦悶の呻き声を上げる。

「もう逃げ場はないぞ！」

そう怒号を上げて、扉から飛び出してきた二人は——。

うそっ！！

滯は両手で口もとを押さえ、息を呑んだ。

それは、警視庁捜査一課の岩松と、あろうことか誠一だった。岩松は、往生際悪く這って逃げようとする男に飛び乗り、その両腕をコンクリートに押さえつけた。誠一はそこに素早く手錠をかける。そして、安堵したように大きく息をつく、額の汗を拭いながら体を起こした。

「南野、おまえは屋上を一通り調べてこい。ここへ逃げ込んだのには理由があるのかもしれない。鍵まで用意していたみたいだからな」

「わかりました」

岩松からの指示を受け、誠一はあたりを確認しながらゆっくりと駆け出した。滯のいる場所と

は反対側へ向かっている。しかし、そのうちこちらへも回ってくるだろうし、このままではいずれ見つかってしまう。滯は青ざめながら、声を潜めてヘッドセットに助けを求める。

「副司令、どうしよう。逃走犯を追って刑事が来たの」

『何だって?!』

さすがの悠人もこれには驚きを隠せなかった。しかし、落ち着きは失っていない。すぐさま畳みかけるように状況を尋ねていく。

『気付かれていないのか?』

「はい、でも時間の問題です」

『いま仮面は?』

「つけてます」

『ハンググライダーは?』

「準備してあります」

『刑事は何人?』

「二人。でも、一人は犯人を取り押さえてるから動けないと思う」

滯は出来る限り端的に答えていく。余裕のある状況でないことは、誰よりも滯が一番わかっていた。恐怖感に押しつぶされそうになりながらも、取り乱さずにいられるのは、悠人なら何とかしてくれると信じているからである。

『セカンド、予定より早いがすぐに飛ぶんだ』

「わかりました」

そう返事をする、すぐさま音を立てず立ち上がり、ハーネスの装着にかかる。誠一は徐々に近づいてきているが、まだ気付いてはいないようだ。しかし、静止しているときと比べて、動いている今は格段に目につきやすい。

『出来るだけ刑事とは関わらず逃げ切れ。もし飛び立つ前に気付かれたら、怪我を負わせない程度にダメージを与えて時間を稼ぐんだ。いざというときは催涙スプレーを使ってもいい』

滯自身も、出来れば何事もなく逃げ切りたいと思っている。誠一にひどいことなどしたくない。どうか気付かないで——そんな精一杯の願いも虚しく、誠一はこちらに顔を向けると、ピタリと動きを止めて目を見開いた。

「え? 怪盗ファントム……?」

呆然とうわごとのように言葉を落とす。しかし、すぐにハッと息を呑んで我にかえると、ファントムから目を離すことなく、全身に緊張を漲らせて声を張り上げる。

「岩松さん! 怪盗ファントムです!! 怪盗ファントムがいます!!!」

「何だと?!」

とはいえ、岩松は身動きがとれない。誠一は何の躊躇もなく一人で突進してきた。その迫力と勢いに圧倒され、滯は思わず後ずさりながら最後の金具をはめる。そして、大急ぎでハンググライダーごとビルの縁に乗り、飛び立つべく体を外に向けようとした。

その瞬間、強烈なビル風が下方から吹き上がった。

短いプリーツスカートは簡単に捲れ上がり、白い翼は大きく煽られてバランスを崩す。

「っ！！」

「危ない！！」

誠一の顔から血の気が引いた。ビルの外側に倒れていく怪盗ファントムに、懸命に手を伸ばす。

しかし、彼に助けられるわけにはいかない。

むき出しになった太ももに指先が届きかけた瞬間、漣はビルの縁を蹴って後ろ向きに空中へと飛び出した。同時に、視界の隅で何かが白く光った気がしたが、それが何なのかまでは確認できなかった。

「ファントム——っ！！！」

誠一が血相を変えて叫ぶ。

漣は乱気流に揉まれつつも何とか体勢を立て直し、ゆっくりと旋回すると、目的の美術館を見つけて進行方向を定めた。ビルから遠ざかりながら肩越しにチラリと振り返ると、誠一は縁に手をつけて身を乗り出したまま、いつまでも怪盗ファントムを目で追っていた。

「もうイヤ！」

部屋に入るやいなや、漣はきれいに整えられたシングルベッドに飛び込み、枕元にあった大きなクッションをぎゅっと抱え込んだ。泣きたいけれど泣いてはいない。ただ、無性に何かに縋りつきたくて、柔らかなそこに深く顔を埋める。まだ戸口にいた部屋の主である遥が、静かに扉を閉めながら、諦めたように溜息を落とすのが聞こえた。

ハングライダーで高層ビルから飛び立ったあと、予告時間より少し早かったことを除けば、何の問題もなく盗みを完遂することができた。それゆえ、あの危機一髪の状態は、先ほどの反省会においてほとんど笑い話になっていた。しかし、当事者としてはそう簡単に片付けられないし、片付けてほしくもない。

「本当に心臓が止まるかと思ったんだから！ 刑事が来ただけでも驚きなのに、それがよりによって誠一だなんて……手が届きそうなところまで追ってこられて、バレるんじゃないかと生きた心地がしなかった！！」

その刑事が恋人であることは遥にしか言っていない。それゆえ、やり場のない気持ちを受け止めてもらおうと思い、ここへ押しかけてきたのだが、彼の態度はまったく期待に添うものではなかった。

「でもパンツ見られたの誠一で良かったんじゃない？」

「そういう問題じゃないっ！！」

漣はベッドから跳ね起きて言い返した。身を乗り出すと、長い黒髪がさらりと揺れる。

「このままじゃ、いつか捕まっちゃうよ？」

「捕まらないようにするしかないよね」

まるで他人事のような答え。そんなに突き放した言い方をしなくてもいいのに——漣は椅子に腰掛けようとする彼を睥睨し、少し頬を膨らませると、クッションをぎゅっと抱きしめて目を伏せる。

「私、自信ない……」

それは、今に始まったことではない。これまで自信を持ったことなど一度もなく、いつも不安を抱きながら、ただ命じられるままにやってきたのである。けれど、今日のことでますます不安が募り、怪盗ファントムを続けることが怖いとさえ思い始めていた。

「ねえ、もうこんなことやめない？ やめようよ？」

「じいさんが聞き入れてくれるとは思えないけど」

むう、と滯はしかめ面で唇をとがらせる。言われるまでもなく、剛三の自己中心的な性格はよく知っている。確かに、いくら訴えたところで聞き入れられはしないだろう。そのくらいの優しさがあるのなら、そもそも怪盗などという犯罪行為を強要していないはずだ。

遥はふっと小さく笑った。

「滯は上手くやってるから自信を持っていいよ。今さらやめたいなんて言わないでさ、ハタチまでの期間限定なんだから、その間だけ頑張ってみようよ。喜んでくれる人もいることだしね」

「まあ、遥がそう言うのなら……」

納得のいかないまま、滯は低い声でぼそりと答える。滯をメインに据える今の怪盗ファントムは、彼の本意の形ではないはずだが、それでも続行を望んでいるのだろうか。割り切っているだけなのだろうか。彼の態度からは今ひとつよくわからない。

「じゃあ、僕はもう寝るから」

気がつけばとうに0時をまわっていた。

遥は立ち上がって部屋の灯りを消すと、滯を押しよけながらベッドに潜り込んだ。その枕元で、滯は膝を抱えて彼を見下ろし、不思議そうに小首を傾げる。

「帰れって言わないの？」

「好きにすれば？」

ともすれば冷たく聞こえる返答であるが、そうではなく、彼なりの優しさなのだろうと滯は解釈した。好きにすればいいということは、ここにいてもいいということである。なんだかんだ言っても、遥はいつだって滯のことを気にかけてくれて、誰よりも気持ちを察してくれる、一番の理解者であることは間違いない。

「……ありがと」

くすっと小さく笑ってそう言うと、遥の隣に潜り込み、クッションを枕にして横になった。肩が微かに触れ合う。二人が寝るには少し狭いベッドであるが、だからこそ、よりいっそう互いの温もりを感じられた。

「おはよー」

滯と遥は連れだって教室に入ると、窓際に集まる友人たちの方へ足を進めた。一人は男子で富田拓哉（とみだたくや）、二人は女子で鳴海綾乃（なるみあやの）と野並真子（のなみまこ）である。友人というより幼なじみといった方が近いかもしれない。初等部から高等部までずっと同じ学校、同じクラスであり、その気楽さゆえか、何となくこのメンバーで過ごすことが多いのだ

「なに見てるの？」

漣は、すぐ後ろの自席に座りながら尋ねる。

「これこれ」

富田は嬉々として振り返り、手にしていたものを漣の机に置いた。

それは三流スポーツ紙だった。

怪盗ファントムの活躍が、カラー写真入りで大きく報じられている。いや、報じるというのは言い過ぎかもしれない。大半は記者の下世話な興味と妄想を書き並べただけのものだ。いかにも三流スポーツ紙らしく、美少女怪盗、独占スクープ、などという言葉が下品に踊っている。

「きのうのファントムは久々に派手だったらしいぜ」

「へえ、そうなんだ……」

興奮して声を弾ませる富田から、漣は微妙に狼狽えながら目を逸らした。正体が知られそうになったわけでも、怪しまれたわけでもないが、この話題が出るだけでヒヤヒヤして寿命が縮みそうになる。

「やっぱ怪盗はこうでないと！」

「うん、見ててワクワクするよね」

真子はおっとりした丸顔をほころばせて同意する。

しかし、なぜか、富田はふっと表情を曇らせて首を捻った。

「でも、仲間が捕まったとかテレビで言ってたよなあ」

「あれは仲間の可能性があるってだけだよ？」

二人が話題にしているのは、きのう高層ビルの屋上に逃げてきた男のことである。コンビニのレジで強盗しようとして刃物を見せたが、偶然居合わせた刑事に気付いて逃げ出し、かつて勤務していたビルに逃げ込んで捕らえられた、というのが事の顛末らしい。

もちろん、その男は仲間でも何でもない。

しかし、偶然にも怪盗ファントムの待機場所に逃げ込んでしまったことで、その一味ではないかというあらぬ容疑を掛けられているのだ。ただ、逮捕事由は強盗未遂の件だけである。怪盗ファントムの件はこれから捜査されるのだろうが、いずれ無関係であることは証明されるだろう。

「怪盗ファントムがコンビニ強盗なんてするわけないし、私は仲間じゃないと思うな」

たいした根拠がないにもかかわらず、真子は確信したように声を弾ませる。その物言いは、単に面白がっているだけというより、まるで――。

「ねえ、もしかして、真子も怪盗ファントムのが好きなの？」

「うん、盗みは良くないっていうのはわかってるんだけどね」

彼女は小さくはにかんで肩をすくめた。白く柔らかな頬に、ほんのりと赤みが差している。おっとりした真子にしては意外な趣味だが、彼女が言うとなんだか可愛らしく感じる。しかし、綾乃はそう思わなかったようだ。

「ったく、真子は流されすぎ」

「綾乃ちゃんは興味ないの？」

そう尋ねられた途端、彼女の眉間に深い縦皺が刻まれた。むすっとして腕を組む。

「はっきりいって不快。美少女怪盗とか言われてるけど、顔なんてちっとも見えてないしさあ。こんなものを美少女とかいって持ち上げてるヤツの気が知れん。絶対、マスクをとったらガッカリってパターンだよ」

「ガッカリ……」

滯は斜め下に視線を落とし、ぼそりつつぶやいた。

「まっ、スタイルいいのは認めるけどね」

「そうそう、滯にそっくりなんだよな」

富田は腰を屈めて、滯の体を観察するように覗き込んできた。比較対象は机の上に広げられている。慌てて、滯は少し乱暴に彼の顔を向こうへ押しやった。

「じ、じろじろ見ないでよ！ やらしいっ！！」

「そうだぞ、そんな怪盗なんかと比べるなっ！」

綾乃も同調して責め立てる。

「比べるまでもなく、断然、滯の方が上だからね」

「怪盗ファントムも負けてないと思うけどなあ」

富田はニヤニヤして言い返すと、机の上のスポーツ紙を開いた。その中面には――。

「きゃあああっ！！！」

クラス中が振り返るほどの悲鳴を上げながら、滯は全力でスポーツ紙を掻き寄せ、くしゃくしゃになったそれを机の上で抱き込んだ。顔は、湯気が出そうなほど真っ赤に火照っている。

その紙面にデカデカと掲載されていたのは、スカートが捲れて、白いパンツが丸見えになった怪盗ファントムの姿だった。誠一の後ろ姿も一部だけ写っている。つまり、これはきのう高層ビルの屋上で撮られたものだろう。飛び立つ瞬間、強烈な白い光を見た記憶があるが、あれがフラッシュだったのかもしれない。

「どうしたの、滯。そんなにウブだっけ？」

綾乃は眉をひそめて不思議そうに尋ねた。両隣の富田も真子も驚いた顔をしている。理由がわかっている遙だけは、一步引いたところで、頭を押さえて溜息をついていた。冷やかな視線を滯に流して言う。

「自分ってわけじゃあるまいし、たかがパンツで過剰反応だよ」

「か、かわいそうじゃない！ 怪盗とはいえ女の子なんだから……」

彼の発言が助け船だったことは理解していた。素直に乗っかればよかったのだが、たかがパンツと言われたことで、滯は思わずカッとなり反論してしまう。その苦し紛れの主張に、綾乃たちの表情はますます訝しげに曇った。

「なんでそんな必死になってんの？」

「もしかして、それ、おまえなのか？」

「えっ？」

まさかの富田に凶星を指され、滯は大きく目を見開いて硬直した。否定しなければと焦るものの、頭の中が真っ白になってしまい、何ひとつ言葉が出てこない。

「財閥のご令嬢が怪盗なんてするわけないよー」

そんなとき、いつもと変わらない真子の声がふんわりと降ってきた。おかげで、張りつめていた濡の心は、幾分か落ち着きを取り戻す。しかし、まだこの窮地を脱したわけではない。富田は親指と人差し指を顎に添えながら、難しい顔で考え込んでいる。

「いや、怪盗の正体が金持ちだって話は、漫画とかでは結構あるぞ」

「もし濡がファントムだったら全力で応援するけどね」

綾乃はそう言って、軽く笑いながら左の手のひらを上に向けた。

しかし、濡は顔を真っ赤にして、くしゃくしゃのスポーツ紙を抱え込んだまま彼女を見上げる

。

「ちょっ、綾乃なに言ってるの、窃盗は犯罪なのよ?!」

「……………」

一拍の間の後、富田と綾乃は同じタイミングでははと豪快に笑い出した。富田は大きく顔を上げて声を響かせ、綾乃はおなかを押さえて前屈みで肩を震わせる。その隣では、つられるように真子も遠慮がちに笑っていた。

「ったく、これだもんなあ」

「やっぱり濡ってことはないな」

笑いすぎてうっすらと涙さえ浮かべながら、綾乃と富田は口々に言う。濡には何がそんなにおかしいのかさっぱりわからない。しかし、なぜか疑いが晴れたようなので、とりあえずは素直に胸を撫で下ろした。が――。

「遥ならやりかねないけどね」

綾乃のその一言にビクリとする。遥に矛先が向くとは思わなかっただけに驚きは大きい。しかも、半分ほど当たっているとすればなおのこと。おそろおそろ遥の様子を覗うが、彼はいつもどおり顔色ひとつ変えていなかった。

「僕が女装してやってるとでも？」

「そんなムキになるなって」

淡々と言い返した遥を、綾乃は軽く笑い飛ばす。

しかし、富田は妙に真剣な顔つきになると、遥の全身を嘗めるように見まわした。

「でも、遥ならやってやれないことはないよな。ファントムでも、普通の女装でも、かなりイケるんじゃないか？ 見た目は濡とそっくりだし……一卵性だっけ？」

「男と女なんだから一卵性はありません」

これまで数え切れないくらい受けてきた質問に、遥はうんざりしたように答えた。富田も何度か聞いているはずだが、忘れていたのだろう。「あ、そうか」と小さくつぶやくと、頭に手を当てながらへらっと笑って言う。

「ていうか、おまえ本当は女だったりして」

地雷を踏んだ。

はっきりと口にしたことはないものの、遥は女性的な外見を気にしており、そのことに言及されると機嫌が悪くなるのだ。案の定、あからさまにムツとした表情を見せた。が、すぐに小さく溜息をつくのと、じとりとした目を向けて問いかける。

「一緒にお風呂も入ったのに、そういうこと言う？」

「あ、そういえば……」

富田は記憶を辿るように斜め上に視線を流した。やがて、なぜか耳元がほんのりと色づいてくる。

「富田やらしい！ なにか赤くしてんだよ！！」

「べっ、別にそんなこと……！」

綾乃に勢いよく責め立てられ、あたふたと弁解にならない弁解をする。しかし、何を考えていたのかは、いくら問い詰めてられも白状しなかった。応酬を続ける二人を眺めながら、遥は面倒くさそうに声を上げる。

「で、僕の疑いは晴れたわけ？」

「あ、悪かった、悪かった」

富田はへらへら笑いながら答えた。

「別に本気で疑ってたわけじゃないんだ。そうだったら面白いなと思っただけで。おまえらがファントムやってるんだとしたら、親友の俺らには打ち明けてくれてるはずだしな」

「さあ、それはどうかな？」

綾乃は意味ありげに目を細め、口の端を上げる。

「こう見えて、濡はけっこう秘密主義だからね。彼氏のこと隠してるしさ」

「綾乃っ！！ どうしてそのこと……！」

濡はガタッと弾かれるように立ち上がった。付き合っている人がいるということは、綾乃たちには言っていない。この場で知っているのは遥だけだと思っていた。なのに、どうして——。

「あ、本当だったんだ」

「……えっ？」

きょとんとして聞き返すと、綾乃は人差し指を立てて得意げに話し始める。

「濡ってば高校に入ってから付き合い悪くなったし、それに、このまえの誕生日からネックレスするようになったでしょ？ 薄いピンクの宝石がついてるやつ。普段はシャツの下に隠してるけど、体育の着替えのときにいつも外してるんだよね。そのときの濡の顔がまたちょっと嬉しそうでさ。これはもしかしたらもしかして、ってピンときたわけ」

嬉しそうな顔をした自覚はないが、あとは彼女の言うとおりで。ここまで言い当てられては反論のしようもない。

「ホントよく見てるね……」

「そりゃあ目の保養だもん」

「もうっ」

ニカッと白い歯を見せる綾乃を、濡は軽く睨み、溜息をつきながら腰を下ろした。くしゃくしゃのスポーツ紙に八つ当たりするように、さらにくしゃくしゃに丸めていく。綾乃と真子は笑っていたが、富田は呆然とした表情のまま固まっていた。

「ほっ、本当なのか？ 彼氏って……」

「ん……まあ……」

今さら否定するわけにもいかず、漣は曖昧にそう答える。

富田は勢いよく机に両手をつく、目の色を変えて必死に追及してきた。

「誰？ 誰なんだよ？！ 俺……じゃないよな？」

「アホ！」

綾乃は彼の後頭部をスパンと叩いた。

漣は苦笑を浮かべ、顔の前で両手を合わせて肩をすくめる。

「ごめん、今はちょっと言えない。卒業したら話すから」

それを聞いた綾乃の眉がピクリと動いた。腕を組み、何かを確信したようにニッと漣を見下ろす。

「はは一ん、ふ一ん、なるほどね」

「な、何よ……」

「秘密にしてるのは、相手の立場を慮ってのことだな」

漣の心臓がドクンと跳ねた。

綾乃はさらに理詰めで追い込んでいく。

「卒業したら話すってことは、漣の年齢が問題なんだろうね。同じ高校生ならそんなこと気にするわけないし、相手は大人、それもかなりお堅い職業の人間なんじゃないかな。たとえば、常に品行方正なことが求められてる公務員とか」

「あ、綾乃……」

ここまでですべて正解である。今すぐにでも逃げ出したい心境だが、そうするわけにもいかず、漣は息を詰めてただ祈るしかなかった。その反応を楽しむように、綾乃は腕を組んだまま含み笑いでもったいつける。そして、十分すぎるほどの間をとったあと、人差し指を漣の鼻先に突きつけて言った。

「ズバリ！ この学校の先生でしょ！」

「……は？」

漣は口を半開きにして、ぱちくりと瞬きをした。

真子は心配そうに顔を曇らせて覗き込む。

「本当なの、漣ちゃん？」

「ちょっ、違う、それ絶対に違うから！」

漣は大きくぶんぶんと両手を振って、必死に全面否定のアピールをする。しかし、綾乃はまるで信じていないようだ。円陣を組むかのように富田と真子の肩を抱き込み、漣に顔を近づけると、自分たち以外には聞こえないよう声をひそめて言う。

「私は数学の鈴木が怪しいと思ってる」

「すず……！」

「声でかいっつーの！」

のけぞりながら大声を上げる富田の顔面を、綾乃は容赦なく平手でベチリと叩いた。他のクラスメイトに知られないための配慮だろうが、そもそも彼女の言っていることがまったくの的外れである。

「だから先生じゃないって！なんでそうなるわけ?!」

漣は身を乗り出して言い返す。それでも、綾乃は取り合おうとしない。

「鈴木って結構イケメンで優しくて、女にもてないわけじゃないのに、30代半ばでまだ独身でしょ？だから、もしかしたらホモなんじゃないかって噂されてたんだよね。まあ、噂を立てたのは私かもしれないんだけど」

「綾乃ちゃん、前もそんなこと言ってたよね」

真子は曖昧な苦笑を浮かべる。その話は、漣も何度か聞かされていた。実際はどうかはわからないが、根拠もなく噂を立てるのはひどい話だし、同情して庇うような発言をしたこともある。もっとも、綾乃は歯牙にも掛けなかったのだが。

「でさあ、一度、美術部メンバーで真相を確かめに、職員室へ押しかけたことがあるんだよね。そしたら、鈴木、おかしように笑いながら否定してさ、君らが卒業する頃に結婚するかもね、って」

「だから、何なの？」

漣は眉をひそめて小首を傾げた。しかし、綾乃は勝ち誇ったようにニヤリとし、顔を近づける。

「とぼけてもダメだぞ。つまり、鈴木はうちの同級生と卒業後に結婚するってことで、これまでの話を総合すると、その相手は漣としか考えられないじゃないか」

「それ何もかも飛躍しすぎ！」

漣は全力で言い返すと、くしゃくしゃのスポーツ紙に肘をついて頭を抱え込んだ。このまま違おうと否定し続けても、思い込みの激しい綾乃は信じてくれそうもない。こうなったら、もう本当のことを話すしか――。

「あの、ここだけの話にしてくれる？」

おずおずと懇願するようにそう尋ねると、顔を上げ、綾乃たち三人を順に見つめていく。遙にもチラリと視線を流すが、面倒そうに溜息をつくだけで、引き止めようとはしなかった。

「おっ、とうとう認めるか？」

「じゃなくて……」

ひやかす綾乃を制したあと、漣は顎を引き、そっと眉をひそめて言う。

「相手は刑事なの」

「けっ…！」

叫びそうになった綾乃の口を、遙が素早く背後から手で塞いだ。じたばた暴れても離そうとしない。綾乃のようなオーバーリアクションはとらなかったものの、真子も同様に驚いているようで、信じられないといった面持ちをしていた。

「遥くん、本当なの？」

「まあね」

遙は軽くそう答えると、ようやく綾乃を解放した。彼女は苦しげに大きく息を吸い込んで振り返り、涙目で遙を睨むが、彼はまるで意に介さず涼しい顔をしている。

「他言無用だから気をつけて」

「わかってるって！」

綾乃は腹立たしげにそう返事をした。真子もにっこりと頷いて同意する。しかし富田は——。

「俺は認めないぞ！！」

ダンッ、と濡の机に勢いよく両手をつき、怖いくらい真剣な眼差しで覗き込んできた。

「目を覚ませ、濡！ おまえ弄ばれてんだよ、その不良スケベオヤジに！！」

「ちょっと、知りもしないのに勝手なこと言わないでよ！」

濡はカッとして身を乗り出した。

「なんで不良って決めつけてるわけ？！ 富田よりよっぽど真面目だよ？！ それにオヤジって年じゃないもん！ まだギリギリ20代だし！ スケベ……じゃない……とは言えないけど……」

「うわあああああ！」

間もなく始業の時間だというのに、富田は錯乱したように奇声を発しながら教室を出て行った。綾乃は腹を抱えて大笑いし、真子も遠慮がちに笑っている。遥にいたっては、額を押さえて大きく溜息をついていた。だが、濡には何がなんだかさっぱりわからない。

「富田どうしたの？」

彼の消えていった方を指さして尋ねる。

「青春だよねえ」

「はあ？」

綾乃の答えに、濡はますます混乱して眉を寄せた。しかし、綾乃も真子も笑い続けるばかりで、濡の疑問には答えようともしてくれない。やがて始業のチャイムが鳴り、二人は小走りで自席に戻っていく。遥も、濡の頭をぽんと軽く叩くと、何も言わず後ろの自席に腰を下ろした。

「ねえ、富田まだ怒ってるの？」

「別に怒ってるわけじゃ……」

放課後になり、濡たち五人はそろって正門に向かって歩いていた。普段は部活の関係であまり一緒に帰れないが、今は定期試験前のため、部活は全校的に休みとなっているのだ。しかし、富田は今日一日ずっと生気のない顔をしており、今も濡を見ては溜息ばかりついている。おそらく今朝の一件が原因なのだろう。

「今まで秘密にしていたのは悪かったかもしれないけど、私にだって事情があるんだもん。富田のことは、もちろん綾乃も真子もだけど、みんなちゃんと友達だと思ってるよ？ 友達だと思ってるから彼氏のこと話したんだよ？」

「わかったから！ 友達友達いうな！」

富田は苛ついたように前髪をくしゃくしゃと搔いた。彼の態度が今ひとつ掴めない。わかったとは言っているが怒りはおさまらない、ということなのだろうか——濡は困惑して顔を曇らせる。そんな二人を横目で見ながら、綾乃は顎を上げてニヤニヤしていた。

「濡は罪作りだねえ」

「どういう意味？」

「ずっとそのままできてよ」

「何よそれ」

滯は唇をとがらせる。しかし、綾乃の思わせぶりで不可思議な発言は、何も今に始まったことではない。聞き返してもごまかされてしまうので、もうあまり気にしないようにしていた。

「許可を取ってからにしてください」

正門のところで、警備員が誰かと揉めているようだった。この学校では、部外者が敷地内に立ち入るには、事前に学校側の許可を得る決まりになっている。それは保護者も例外でないという厳しいものだ。そのため警備員と言い合いになっていることは時折あり、特にめずらしい光景でもなく、生徒たちはみなチラリと一瞥するだけで通り過ぎていく。

滯もつられるように正門に目を向けたが、警備員の陰になり、相手の姿はほとんど見えなかった。しかし、特に興味はなかったため、すぐに綾乃たちと取り留めのない話を再開して笑い合う。

「では呼び出してもらえませんか？」

「どういったご用件でしょうか」

「それ、は……」

「お帰りになってください」

「ちょっと待ってください！」

耳に飛び込んできた聞き覚えのある声に、滯はドキリとする。

まさか、この声って――。

「誠一?!」

半信半疑で振り向いた滯の視線の先には、警備員と揉み合いながら、そのトランシーバーに手を伸ばしている誠一がいた。通報を止めようとしていたのだろうか。大声を上げた滯に気付くと、ほっとして表情を緩ませる。

「滯、良かった」

そう言って警備員の脇をすり抜け、敷地内の滯に駆け寄ろうとした。が、警備員が素早く後ろから羽交い締めにする。誠一に悪気はなかったのだろうが、これでは完全に不審者であり、取り押さえられるのも無理はない。「もしかして滯の彼氏?!」などと綾乃たちが色めき立っているが、構っている場合でなく、滯は慌てて誠一のもとへ駆けていった。

「すみません! この人、私たちの知り合いなんです。少し慌てていただけで悪意はないと思いますし、すぐに出て行かせますから、今回だけはこのまま見逃してもらえませんか？」

「承知しました」

警備員も滯が橘財閥令嬢であることは知っており、それゆえ簡単に聞き入れてくれたのかもしれない。誠一の拘束を解くと、一步下がり、生徒であるはずの滯に恭しく一礼した。

「滯、本当に助かった、ありがとう」

誠一は大きく安堵の息をついた。滯は小首を傾げる。

「いったいどうしたの？」

「そうだ、滯！」

誠一はバツと勢いよく顔を上げると、漑の両手を包むように握りしめる。下校時で他の生徒たちが大勢いたこともあり、漑は当惑したが、彼の真剣な表情を見て何も言えなくなった。わざわざ学校にまで来たうえ、これだけ無茶をするということは、おそらく余程の緊急事態なのだろう。大きく不安を煽られ、ゴクリと唾を飲んだ、そのとき――。

「パンツ見せてくれっ！！」

鈍色の寒空に、誠一の必死な声が拡散した。

## 12. 師匠の腕の中

---

「何もいきなり殴ることはないだろう」

濡が怒りまかせにズンズン進んでいく後ろで、誠一は顔をしかめて側頭部をさすりながら、それでも遅れないように早足でついてきていた。その隣には仏頂面の遥も歩いている。だが、一緒に帰るはずだった綾乃たちの姿は見当たらない。事態がややこしくなるのを避けるため、ついて来ないよう遥が説得してくれたのだ。

「その鞆、やけに重量感あるけど何が入ってるんだ？」

「教科書に決まってるでしょう?!」

濡は思いきり肩をいからせ、振り返りもせず歩き続ける。その怒りは一目瞭然のはずだが、誠一は悪びれる様子もなく、原因となった話をさらりと蒸し返す。

「で、パンツなんだけど」

「さっきからパンツパンツって何なの?! 私にだけこっそり言うならまだしも、学校の前であんな大声で叫ぶなんて.....綾乃たちの中では、誠一のあだ名はパンツ男に決定よ!」

「まあ自業自得だな」

誠一は軽く肩をすくめながら答えた。が、濡からすれば的外れもいいところである。カッと頭に血を上らせると、勢いよく黒髪を舞わせてくるりと振り返り、彼の鼻先に人差し指を突きつけてズイッと詰め寄る。

「あのね、困るのは誠一じゃなくて私なの! 誠一は綾乃たちと会わないからいいだろうけど、私は、パンツ男は元気い? パンツ男はどうしてるう? とか、死ぬまでずっとからかわれ続けるのよ?!」

「死ぬまでって大袈裟だろう」

「もうっ! 少しは責任感じてよ!!」

濡は本気でその事態を懸念していたのだが、誠一は真剣に受け止めてくれなかった。まあまあ、とちょっと困ったように苦笑しながら、沸騰寸前の濡をひたすら宥めるだけである。

二人の隣で、遥が面倒くさそうに溜息をついた。

「誠一、まず事情を説明してくれない? 理由も言わずにパンツ見せてじゃ、ただの変態だよ」

「ああ、そうだな.....」

誠一は真面目な顔になって思案し始めた。その様子を見て、濡は急激に緊張が高まるのを感じた。彼がなぜこんなことを頼みに来たのか、だいたいのところは見当がついている。それは、おそらく――。

「きのうのことなんだが.....偶然、怪盗ファントムに遭遇してな」

「それってコンビニ強盗を捕まえたときの?」

遥は白々しくそんなことを尋ねる。

「ああ、ニュースでやってたから知ってるかもしれないが、そのコンビニ強盗犯が逃げ込んだビルの屋上に、待機中の怪盗ファントムがいてな。捕まえようとしたんだが、あと一歩というところで逃げられてしまったんだ」

冷静な声音に悔しさが滲んだ。しかし、誠一はすぐにパッと表情を晴らす。

「でもそのとき、ファントムのスカートが風でめくれて、パンツが丸見えになったんだよ。暗かったしハッキリとは見えなかったけど、そのパンツが濡の勝負パンツによく似ていたんだ」

「べ、別に勝負パンツじゃないし！」

濡はゆでだこのように顔を赤らめて否定した。同じものをたくさんまとめ買いしたので、それを穿いていることが多いだけである。誠一と会うから特別なものを選んでるわけではない。だから、きのうも偶々それを穿いていたのだが――。

誠一は軽く流して話を続ける。

「まあ、そのときは似てると思っただけなんだが、さっきこれを見て……」

そう言って、懐から小さく折りたたんだ新聞を取り出す。例のスポーツ紙だ。中面を外側にしただけで、広げるまでもなくパンツ写真が目飛び込んできた。

「きゃあっ！！」

濡は悲鳴を上げ、誠一の手からそれを奪い取った。

「広げてみればわかると思うけど、それ、濡じゃなくて怪盗ファントムだからな。でもこれ同じパンツだろ？ レースの形や付き方、股上の長さ、脚ぐりの角度、どれをとっても濡のとまったく一緒なんだよ」

「どれだけよく見てるのよ、ヒトのパンツ！」

もちろん見られていることはわかっていたが、ここまで詳細に観察されていたのかと思うと、あらためて何ともいえない恥ずかしさがこみ上げてきた。そして、こんなことまで覚えている彼の記憶力を恨めしく思う。

誠一は顔の前で両手を合わせた。

「頼む！ ファントムを捕まえるための貴重な手がかりなんだ」

「イヤよ！ そんな怪盗なんて、私にはどうでもいいもん！」

「冷静になれよ。どうしてそう嫌がるんだ？ 今さらだろ……」

「今さらって何よ！ 恥ずかしいものは恥ずかしいの！」

濡は頑として首を縦に振らなかった。恥ずかしいというのはもちろんそうだが、意地になっていた部分もあるのかもしれない。しかし、冷静に考えてみたところで、結論が変わることはないだろう。自分の正体を暴くための手がかりを、刑事である彼に提供するわけにはいかないのだから。

「濡のパンツが捜査にどう役立つわけ？」

遥が半ば呆れたようにじとりとした目を向け、懐疑的に尋ねる。

だが、誠一は曲がりなりにも捜査一課の刑事であり、さすがにそのあたりはきちんと考えてあった。

「怪盗ファントムが穿いていたパンツを確認したいんだ。濡に見せてもらって新聞の写真と照合する。同じものであれば、そのパンツを貸してもらって、ひとつひとつ販売店を聞き込みにまわろうかと」

「イヤー！ 絶対に嫌っ！！！」

滯は両手で頭を押さえて絶叫した。百歩譲って誠一だけに見せるのならまだしも、それを持って聞き込みにまわるなど冗談ではない。拷問にも等しい行為だ。しかし、誠一はそんな乙女心など理解しようともしない。

「捜査協力は国民の義務だぞ」

「国家権力の横暴だわ！」

滯は奪い取ったスポーツ紙を握りしめて反論する。よくある売り言葉に買い言葉だ。どちらも歩み寄ろうとしないので、いつまでたっても平行線を辿るだけである。そんな二人の応酬を眺めながら、遥はベッドに腰掛けたまま溜息を落とした。

「あのさ、それ本当に捜査なの？」

「えっ？」

「誠一は捜査一課だよな？ 怪盗ファントムの担当じゃないと思うんだけど」

「あー……えっと、それはその……」

誠一は急にしどろもどろになった。斜め上に視線を逃がしつつ、人差し指で頬を掻く。

遥は容赦なく畳みかけるように追及する。

「捜査二課に協力しているわけでもないよね。さっき学校の警備員と揉めてたとき、警察手帳を見せるどころか、刑事であることすら言わなかったし。それってやっぱり正式な捜査じゃないからでしょ？ 職務じゃなければ職権濫用になるからね」

「君は本当に鋭いな……」

誠一はぐったりと肩を落として呟く。

彼が怪盗ファントムの担当でないことは、滯も以前に本人の口から聞いていた。しかし、感情的になるあまり、すっかり失念してしまっていたのだ。もっとも、覚えていたとしても、遥のように上手くは追いつめられなかつただろう。

「そういうわけだから、誠一に協力することはないよ」

「そ、そうなんだ……」

いくらかの申し訳なさを感じながらも、滯はひとまず胸を撫で下ろした。

しかし、誠一も刑事の端くれである。手がかりを目の前にしながら、そう簡単に引き下がりはない。

「なあ、堅いこと言わずに協力してくれよ。刑事としてでなく俺個人として頼むよ。怪盗ファントムをギリギリのところで取り逃がして悔しいんだ。二課の連中にもさんざん嫌味を言われたし、できることなら、俺のこの手で捕まえて汚名返上したいんだよ」

「それは……気持ちはわかるけど……」

情に訴えられると滯は弱い。あれほど頑なに拒んでいたのに、ここへきて少し気持ちがぐらつき始めた。好きな人が汚名を着せられているのであれば、力になりたいとは思うが、だからといって捕まることはできないわけで――。

ビッ、ビーー。

クラクションが鳴り、一台の車がゆっくりと滯たちの隣に滑り込んで止まった。エンジンが緩

やかに唸り続ける中、助手席のパワーウィンドウがゆっくりと下り、そこからスーツ姿の男性が身を乗り出して顔を覗かせる。

「師匠！」

滯は大声を上げて目をぱちくりさせた。悠人はいつも大通りの方を走っており、この住宅街を通ることはほとんどなく、それゆえまさか彼だとは予想もしなかった。

「女の子が往来でパンツパンツ叫ぶものじゃないよ」

「あっ……すみません……」

まさか聞かれているとは思わなかった。一体いつから聞いていたのだろう——そんな疑問を感じながらも、滯は身を小さくして素直に謝る。その殊勝な態度を見て、悠人は満足げににっこりと微笑んだ。しかし、隣へ視線を移すと、あからさまに鋭く攻撃的な顔つきに変わる。

「警視庁捜査一課の南野誠一さん、でしたね」

「はい……」

誠一はつられるように表情を硬くして、緊張ぎみに頷いた。

「えっ、二人は知り合いなの??」

「一度、顔を合わせただけだよ」

目をぱちくりさせながら尋ねた滯に、悠人は事も無げにさらりと答える。どういう経緯で会ったのか、いったい何の用件だったのか、会ってどんな話をしたのか——滯としては気になることがいろいろあったが、それを言葉にする間もなく、悠人は誠一との会話に戻ってしまう。

「それで、ウチの滯と遙が何か？」

「いえ、滯さんに捜査協力をお願いしていたところで……」

誠一が少し言葉を詰まらせると、悠人はすかさず割り込んだ。

「南野さん、あなたもご存知だとは思いますが、滯は現在17歳で未成年です。そういったご用件でしたら、滯に直接尋ねるのではなく、私を通してにしていただけませんか？」

丁寧でありながら毅然とした口調。その威厳すら感じる凜とした雰囲気、誠一は完全に圧倒されていた。気を取り直すかのように、ごくりと唾を飲むと、おそるおそるといった様子で尋ねる。

「お父さま、ですか？」

「保護者代理といったところです。この子たちの両親はどちらも忙しいのでね」

一般的な話でないためピンと来なかったのだろう。誠一が怪訝な目をよこしたので、滯は無言のまま頷いてみせる。両親が忙しくてあまり一緒にいられないということは、誠一にも何度か話したことはあったが、保護者代理やそのあたりの事情までは説明していなかった。

「乗ってください、南野さん。滯と遙も」

「え……？」

「こんなところで立ち話も何ですから、続きは家でしましょう」

誠一は傍目にもわかるくらい緊張していた。その隣で、滯は困ったことになったと顔を曇らせる。何かと鋭い悠人のことだ。こうなってしまっただけは、誠一が彼氏だと気付くのも時間の問題だろう。もしかしたら、もうすでに察しているのかもしれない。

鉛色の空は、今にも雨粒が落ちてきそうなくらいに、どんよりと重く垂れ込めていた。

悠人は濃色のスーツを身につけたまま、革張りのソファに身を預け、悠然とした所作でコーヒーを口に運んだ。その向かいで、誠一は出されたコーヒーに口もつけず、背筋をピンと伸ばして座っている。ローテーブルの上には互いの名刺が置かれていた。

「南野さん」

「……はい」

カチャリ——コーヒーカップをソーサに戻す音が、やけに大きく応接間に響いた。悠人はゆっくりと膝の上で両手を組み、体を起こすと、正面から隙のない眼差しで誠一を見つめた。

「濡にどのような捜査協力をお求めでしょうか？」

「怪盗ファントムに関する事なんですが……」

誠一がそう切り出すと、悠人はふっと鼻先で笑った。

「また怪盗ファントムですか。担当でもないのに、随分と執着していらっしゃる」

「……………」

最初に悠人と顔を合わせたときも、誠一は担当外である怪盗ファントムの捜査をしていた。これでは不審がられても仕方がない。しかし、悠人は不審に思うというよりも、むしろ呆れているような感じだった。

「私の関知することではありませんがね。それで？」

「はい、その怪盗ファントムが穿いていたパ……下着と同じものを濡さんがお持ちだったので、確認させていただけないかと思ひまして……」

そう答えながら、誠一は懐からスポーツ紙を取り出し、半分ほど広げて机の上に置く。濡が乱暴に奪って握りしめたせいで、だいぶ紙面が皺になっているが、怪盗ファントムのパンツは問題なく確認できた。悠人は無表情でそれを一瞥すると、口を開く。

「なぜ、そのようなことをご存知で？」

「えっ？」

誠一は顔を上げた。悠人は彼を見つめたまま、補足しながら言い直す。

「なぜ、あなたが濡の持っている下着をご存知なのかと」

「あ……」

たちどころに誠一の顔から血の気が引いた。もちろん覗きや盗撮をしたわけではないのだが、本当のことなど言えるはずもなく、ただ口を引き結んでうつむくしかない。重苦しい沈黙が続く。前髪のかかった額にも、膝で握ったこぶしにも、じわじわと嫌な汗が滲んできた。

「まあいいでしょう」

対照的に、悠人は怖いくらいに冷静だった。

「それで、まさか濡を疑っているわけではないでしょうね」

「いえっ、そのようなことは決して……」

誠一は即座に否定すると、少し呼吸を整えてから続ける。

「ただ、間違いがないか確認させてもらって、同じであればその下着をお借りしたいと」

「滯は嫌がっているのでしょうか？」

「はい……しかし……」

「私も認めるわけにはいきません」

悠人は毅然と冷ややかに一蹴する。しかし、それだけでは終わらなかった。

「同じものかどうかは、滯にその新聞を見せて確認させます。同じであればメーカーをお教えします。あとはメーカーの方に問い合わせれば、捜査に必要な情報は揃うでしょう」

「は……はい……」

その的を射た提言に、誠一は萎縮して消え入りそうに返事をした。確かにこれなら滯に嫌な思いをさせずにすむ。今のところ正式な捜査ではないので、メーカーへの問い合わせを無意識的に避けていたが、二課に協力を仰ぐなど方法はいくらでもあるだろう。

「それでよろしいですね？」

「ありがとうございます」

悠人に念を押されると、誠一は慌てて礼を述べて頭を下げた。ここへ連れてこられて以降、顔にも体にもずっと無駄な力が入っていたが、ようやくほっと息をつくことができた。しかし、彼は最も懸念すべき大事なことを忘れていた。

「南野さん、最後に一つだけ言っておきます」

「はい……？」

やや間の抜けた声を返した誠一に、悠人はまっすぐ視線を向ける。

「あなたと滯のことを認めたわけではありませんから」

口調こそ穏やかに聞こえたものの、瞳は冷たく、反感を募らせていることは明白だった。それどころか、絶対に許さないという気迫さえ感じた気がした。まだ少し話をしただけの段階で、なぜそこまで——今の誠一に、その真意を察する術はなかった。

「じゃあ……はい、これあげる」

悠人の指示で、滯はスポーツ紙の写真を一通り確認したふりをすると、渋々ながらカタログを取り出して誠一に手渡した。有名女性タレントを使った可愛らしくスタイリッシュな表紙で、そうと知らなければ、下着のカタログということはわからないかもしれない。

「通販？」

「そう、お店でも売ってるみたいけど」

注文したものがどこに掲載されているかは、ページの隅を折り曲げてあるので、わざわざ教えずともすぐにわかるはずだ。怪盗ファントムの手がかりを与えることに不安はあったが、悠人によれば、決定的な証拠とはなりえないので心配いらぬらしい。それどころか捜査を攪乱できるとまで言っている。どういうことなのかはよくわからないが、悠人が言うのであれば間違いないだろう。何はともあれようやく決着がついた——滯は腰に手を当て、肩を上下させて深く溜息をついた。

「やだ！あとで見てよ！」

さっそく誠一はカタログをめくっていた。思わずカッと頬を赤らめて手を伸ばし、無理やり力

タログを閉じさせる。彼は悪かったと言いつつ苦笑していた。おそらく過剰反応だと思っているのだろう。そのデリカシーの欠片もない態度に、漣は唇をとがらせて腕を組んだ。

「誠一、師匠に何か言われた？」

漣のベッドに腰掛けていた遙は、立ったままの漣たちを眺めながら投げやりに尋ねる。その瞬間、思い当たることがあったのか、誠一の表情ははっきりとわかるくらいに凍りついた。

「何かって……？」

「バレたよね、漣と付き合ってること」

「あ、ああ……まあそうらしいが……」

そのことは漣も覚悟していたが、悠人を信じていたので心配はしていなかった。というより、信じたいので心配しないようにしていた。だが、誠一の態度があからさまにおかしいのを見て、急に不安の波が押し寄せる。

「何か、言われたの？」

「……認めてないって」

誠一は硬い声でぼそりと答えた。

しかし、漣からしてみれば、そのくらいとうにわかりきっていたことである。相手が誰であっても認めるとは言わないだろう。それだけかと安堵する気持ちもあるが、面と向かって彼に言ったのだと思うと、やはり胸のざわつきは止められない。誠一は理解していないだろうが、ある意味、宣戦布告のようなものだから――。

「当然だよ」

束の間の静寂を破り、遙は醒めた目を誠一に向けた。

「師匠からすれば、誠一なんてただの頼りない男にしか見えなかつただろうし、こんなのに漣を任せられない、漣は自分が幸せにするんだって、そんなふうに思ったんじゃないかな」

「ちょっと、遙！」

「それはどういう……」

何を言い出すのかと慌てる漣の隣で、誠一は怪訝に眉を寄せて尋ねかけた。

遙は気怠そうにベッドに手をつき、天井に顔を向ける。

「師匠は漣のことが好きで結婚したいと思ってて、ついでにいえば漣の初恋も師匠で、何となくウチの家では公認みたいになってるんだよね。つまり、正式に決まったわけじゃないけど、いわゆる婚約者みたいなものかな」

「いい加減なこと言わないで！」

たまらなくなつて、漣は感情的に言い募った。

「漣……遙の言ったことって……」

「婚約者なんかじゃないから！初恋だって小学生のときの話だし」

表情の曇った誠一を安心させようと、漣は精一杯の笑顔を作つて釈明する。しかし、さすがに嘘をつくわけにはいかず全否定まではできなかつた。そのせいか、誠一の眉はますます不安そうにひそめられる。

「でも、彼の方は漣のことを……」

「大丈夫、私、頑張るから！！」

「頑張るって……何を？」

その単純な問いかけに、漣は何も答えられなかった。半開きの口を閉じてうなだれる。悠人や剛三に認めてもらわなければならないが、具体的に何をどう頑張ればいいのかはわかっていない。意気込みだけが空回りしている状態である。

遥はじっと誠一を見つめた。

「それだけ漣と誠一が付き合うのは難しいってことだよ。漣がどういう家に生まれたのかわかってるよね？ 立ち向かう覚悟がないんだったら身を引いた方がいい。僕からの二度目の忠告」

誠一は何も言わずに表情をこわばらせた。凍りついたように微動だにしない。その顔からは次第に血の気が引いていく。彼が何を感じているのか、何を思っているのか、それを考えると漣の背筋はゾクリと震える。まさか、遥の忠告を聞こうとしているのでは――。

「あの、遥は大袈裟に言ってるだけだから……気にしないで、ね？」

「そう……か……」

漣がおずおずと覗き込んで小首を傾げると、誠一はぎこちなく曖昧に言葉を落とした。どういう結論を出したのかわからない。まだ悩んでいるのかもしれない。漣の不安は募る一方であるが、問い詰める勇気もなく、ただひたむきに信じるより他になかった。

「どうしてあんなこと言ったの？」

冷たい風が、コートを忘れた体から体温を奪っていく。

漣は門を出たところで誠一を見送ったが、その姿が見えなくなると、振り向くことなく隣の遥にぽつりと尋ねた。『あんなこと』としか言わなかったが、それが何を指しているのか、彼には考えるまでもなくわかるだろう。

「覚悟があるかどうか、これでわかったよね？」

「いきなり言われたら誰でもビックリするよ」

漣はカチンときて横目で遥を睨みつけた。しかし、彼の横顔は憎らしいくらい無感情だった。白い息を吐きながらズボンのポケットに両手を突っ込み、身を翻して歩き始める。

「逃げるようならそれだけの男ってこと」

「逃げたりなんか、しないよ……」

漣はアスファルトの先を見つめながら、もうそこにはない後ろ姿を思い浮かべ、消え入るように小さく言葉を落とした。信じているはずなのに強く言い返せなかった。そんな自分がどうしようもなく腹立たしくて、体の横で握りしめたこぶしを小さく震わせる。

遥は足を止め、顔だけ僅かに振り向いた。

「漣、もう戻ろうよ」

「……うん」

漣は小さくこくりと頷いた。そして、意識的に息を吸ってから口を引き結ぶと、門を開けようとしていた彼のもとに駆けていった。目の覚めるような冷たい風が頬を打つ。それは、まるで弱気になった漣を叱咤しているかのようだった。

「あの、師匠……？」

濡が声をかけても、悠人は微動だにせず窓の外を見つめていた。シャツの背中少し皺になっている。

すべてが済んだら応接間に来るように——悠人にあらかじめそう言われていたので、濡は誠一を見送ってここへ来たのだが、振り向くどころか返事さえしてくれなかった。当惑して戸口に立ち尽くしていると、彼は深く息をつき、背中を向けたまま静かに話し始める。

「悪い人ではなさそうだな。むしろ人が好すぎるくらいだ」

冷静すぎるくらいに誠一のことをそう評すると、再び息をつき、ゆっくりと振り向いて窓枠にもたれかかった。そして、ネクタイの結び目に指を掛けて緩めながら、薄く苦笑して付言する。

「でも、まさか刑事だったとはね」

「お願い、おじいさまには内緒にしてください！」

濡は長い黒髪をなびかせて悠人に駆け寄った。縋るように彼のシャツを掴み、切羽詰まった顔で見上げる。しかし、悠人はそっと視線を外して、どこか遠くを見やりながら考え込んだ。

「どうしたものかな……」

「約束したじゃないですか！」

「刑事とは知らなかったからね」

少し笑いながらそう言うと、宥めるように濡の頭に優しく手を置く。だが、これしきのことで今の濡はごまかされない。シャツを掴む手に力を込め、さらに詰め寄って必死に訴えかける。

「私、怪盗ファントムのことは絶対に言いませんし、知られないようにします！ だから……」

「嘘をつくのは苦手だろう？」

「出来ないわけじゃありません」

確かに嘘をつくのが得意とは言いがたいが、今までだって何とか騙し通してきたのだ。

しかし、悠人の顔にふと翳りが落ちた。

「彼は本気で怪盗ファントムを捕まえようとしている。それも職務ではなく自らの意志でだ。その彼と一緒にいて、笑い合って、嘘について……それで、君は楽しくいられるのか？ 苦しくはないのか？」

「苦しくても耐えてみせます」

怯むことなく強気に断言する濡を、悠人はじっと見つめ返す。

「……濡」

不意に悠人の顔が近づいてきて、濡は思わず後ずさりかけたが、彼はただそっと額を合わせただけだった。そこから彼の体温が伝わってくる。懐かしい感覚、優しい温度、安心する匂い——よくそうしてもらった幼い日々のことが脳裏によみがえり、胸が熱くなった。

「僕では駄目なのか？」

体の奥から絞り出すような声が、切なく響く。

「僕ならば、濡に苦しい思いをさせなくてすむ。何も秘密にすることはない。ありのままの濡でいてくれればいい。遥には負けるかもしれないが、それ以外の誰よりも濡のことを見てきたつも

りだ。だから、誰よりも君をわかっているし、誰よりも君を想っているし、誰よりも君を幸せにする自信がある」

悠人の言葉に嘘はないだろう。滯を大事にしてくれることは嬉しく、そして、ありがたく思っている。けれど——滯はそっと彼の胸元を押し、触れ合わせていた額を離してうつむく。

「私は、彼のことが好きなの……」

心苦しさを感しながらも、以前と変わらない返答を口にのせる。他にも伝えたい気持ちはあるのだが、胸の内でもだかまるばかりで言葉にならない。そのもどかしさにきゅっと唇を噛む。

「君たちの仲を引き裂くことは容易だが……」

頭上から降ってきたのは、先ほどまでとは別人のような冷たい声。

ビクリ、と滯の体がすくんだ。

「そうではなく、出来ることなら君の意志で僕を選んでもらいたい」

そう言って、悠人は滯の背中に手をまわし、包み込むように優しく抱きしめる。逃れようとするれば出来たはずなのに、滯は為すがまま、悠人の広く大きな胸に寄りかかった。あたたかい。このまま何も考えることなく、ただ子供のように甘えていたかった。幼かったあの頃のように——

。

「しばらく待つよ。春までには答えを出してほしい」

その声で現実には引き戻される。

滯に選択を委ねてはいるものの、行き着く先はひとつしかない。与えられたのは心の準備をする時間だけ。おそらく、どう足掻いてもこの腕の中からは逃れられない——そのことに、滯は薄々気づき始めていたが、きちんと向き合うだけの勇気はまだ持てずにいた。そっと目を閉じ、縋るように彼のシャツをぎゅっと掴んだ。

### 13. 行き詰まる二人

---

「やっぱ無理かなあ」

誠一は溜息まじりに弱気な独り言を漏らすと、蛍光ペンを持ったまま、背筋を反らして大きく伸びをした。凝り固まった体を感じる適度な刺激が心地良い。思わず欠伸も出そうになるが、自席ではまずいと思い、眉をしかめながら何とか嘔み殺した。

机の上には、下着メーカーから入手した通販購入者リストが広げられている。

怪盗ファントムに繋がる情報として、スポーツ紙の写真や下着のことを捜査二課に報告したが、彼らはあまり重要視していないようだった。容疑者に対する裏付けのひとつとしてなら有用だが、ここからファントムの正体を割り出すのはほぼ不可能に近い、ということである。その意見には誠一も同意する。だからといって、放置しておくのももどかしく、自分ひとりで捜査することにしたのだ。

まず、可能性がありそうな14歳から39歳までの女性を対象にしてみたが、9割方がこの範囲内であり、あまり絞り込むことは出来なかった。さらにそこから東京都内在住の者を選び出してみる。今はこの作業を進めているところであり、それなりに減りそうな手応えを感じているものの、数百人の単位では残りそうだった。

あとは一人ずつ回ってみるしかない。本人と会えば、体型等からもっと絞り込めるはずである。

だが、たとえある程度の目星を付けられたとしても、おそらく搜索令状は請求できず、ファントムに繋がる確実な証拠を得るのは難しいだろう。やはり決定力に欠けるのだ。おまけに、あまり考えたくはないが、通販以外に直営店での販売もあるというのだから――。

それでも絞り込んでおくことに意味はあるだろうと、折れそうな気持ちを立て直し、再び蛍光ペンを握り直して購入者リストに向かう。が、急に香ばしい匂いが漂ってきたかと思うと、飾り気のない白いマグカップを手にした岩松が、背後からひょっこりと首を伸ばして覗き込んできた。

「手伝ってやろうか？」

「いえ、黙認してもらえただけで有り難いです」

目の前でファントムを取り逃がした誠一に同情しているのか、岩松をはじめとする捜査一課の同僚たちは皆、この担当外の捜査を黙認してくれていた。もちろん、それは本来の職務が忙しくないときに限られる。

「あれ、これ濡ちゃんじゃないか？」

何気なくリストを眺めていた岩松が、そのひとつを指さして顔を近づける。そこには彼女の名前があった。下手に詮索されると立場が危うくなりかねないので、濡から情報を得たことは伏せていたが、当然ながら通販購入者である彼女の名前もリストには挙がっているのだ。

「そうみたいですね」

誠一は愛想笑いを浮かべて曖昧に答えた。

「濡ちゃんがファントムだったりしてな。ホントよく似てるしなあ」

「ちょっ、悪い冗談はやめてくださいよ」

思わずギョッとして振り向くと、岩松はニッと白い歯を見せる。

「そろそろ予告時間だぞ」

どことなく面白いようにそう言い、彼はそばにあったリモコンでテレビをつけた。リポーターの興奮した声がフロアに響く。その場にいた同僚たちも一斉に手を止めて振り向いた。まるで野次馬のように、みんなで談笑しながら怪盗ファントムの登場を待ち構えている。

テレビのデジタル時計が予告時刻ちょうどを告げた。

そのとき、ライトアップされた怪盗ファントムの姿が、ブラウン管の大きな画面に映し出された。凜とした佇まい、すらりと長い手足、風になびく軽やかな黒髪——顔は仮面で隠されているものの、確かに、濡によく似ていると認めざるを得ない。

誠一は小さく溜息をついた。嫌な思考を頭にこびりつかせたまま、音を立てないように立ち上がると、扉を開けて空調のない廊下に足を進めた。冷たい壁にもたれかかりながら、携帯電話を取り出して濡にかける。

トゥルルルル、トゥルルルル——。

何度か呼び出し音が鳴ったあと、留守番電話センターに繋がりと、感情のない女性の声が流れてきた。誠一はゆっくりと電話を切る。別に繋がらなくても不思議ではない。ただ、自分の欲した安心が手に入れられなかっただけのこと。そう思いながらも、指先には知らぬうちに力がこもっていた。

「事件だ、現場へ向かえ！」

扉越しに聞こえた、緊迫感の漲る声。

誠一はハッとして顔を上げる。ガラスの向こうでは、慌ただしく人が動き始めていた。岩松もすでに刑事の顔になっている。それを見てすっかり現実に引き戻されると、携帯電話を内ポケットにしまいながら、急いで捜査一課のフロアに駆け戻っていった。

「悪かったな、あまり電話もできなくて」

「ううん、お仕事だもん」

濡は屈託のない笑顔でそう応えると、普段どおり小さな丸テーブルの前に座った。誠一の家ではあるが、すでに何度も遊びに来ているので、まるで自分の家のようにくつろいでいる。誠一はそのまま台所へ向かうと、ガスコンロにヤカンをかけて、マグカップ二つの準備を始めた。

電話もできないほど忙しかったのは、この一週間、大事件の捜査にかかりきりだったからである。

テレビで怪盗ファントムを見ていたときに第一報があり、それからは、ほとんど家にも帰ることなく捜査に当たっていた。報道で初動捜査の遅れを大々的に指摘され、長期化するだろうと非難の声も上がっていたため、皆いつも以上に躍起になっていたように思う。その甲斐もあってか、きのう、一週間も経たずに容疑者を逮捕することができたのだ。

「あんなに早く犯人を捕まえちゃうなんてすごいね」

この逮捕にどれだけ自分が貢献できたかはわからないが、無邪気に感嘆されるとやはり悪い気

はしない。その相手が恋人であれば尚のことだ。無意識に頬が緩んでしまうが、同時に少しこそばゆくもあった。

「ファントムの方は全然だけどな」

照れ隠しにそう言うと、漣は何ともいえない表情を浮かべた。

「そっか、全然……なんだ……」

「すまない、無理を言ったのに」

「ううん、気にしないで」

彼女はパッと笑顔を作って声を明るくし、胸元で小さく両手を振った。せっかく情報を提供してもらったのだから、良い結果を聞かせてやりたいと思うが、あまりこちらに充てる時間もとれず、意気込んだところで簡単にいくものではない。彼女に気を遣わせてしまったことにも申し訳なく思う。

「やっぱり難しいよね」

「まあな……」

あれだけで怪盗ファントムを突き止められる可能性はかなり低い。限りなくゼロに近いくらいだ。諦めたわけではないが、それが捜査に当たってみての率直な感触だった。戸棚からティーツーバッグを取り出しながら、クッションを抱える漣にちらりと横目を流す。

「今のところ、怪しいのは漣なんだよな」

「……えっ？」

「購入者リストに名前が載ってて、怪盗ファントムに近い容姿、って云ったら、漣も十分に当てはまってるだろう？ 岩松さんも漣ちゃんじゃないかって言ってるし」

そう言うと、彼女は大きく息を呑んで凍りついた。てっきり口をとがらせて怒り出すと思っていたので、思いのほか重く受け止められたことに当惑を覚える。彼女を本気で困らせるつもりはなく、軽い気持ちで言ってみただけなのだが――。

「あの、冗談だぞ？」

「えっ……」

漣の表情が、驚きから怒りへと変化していく。

「もうっ！ ひどい！！」

感情のまま大声で喚き散らすと、膝にのせたクッションにこぶしを振り下ろした。可愛らしい口をきゅっと引き結び、うっすらと涙の溜まった瞳で、迫力があるとは言いがたい睨みをよこす。誠一はほっと息をついて安堵の笑みを浮かべた。

漣が、怪盗ファントムであるはずがない――。

久しぶりに彼女と会って、話して、あらためてそう確信した。この素直でまっすぐな子が、犯罪に手を染めるなど考えられない。何より、こうも騙されやすくては、刑事たちの目を欺いて盗みを働くなど、とても出来はしないだろう。疑う方がどうかしているのだ。

だが、それはあまりにも安易な結論である。個人的な感情で刑事としての目を曇らせ、ただ自分の信じたいものを信じただけの結果にすぎない。そのことに、このときの誠一はまだ気付いていなかった。

ヤカンがカタカタと揺れ、シューシューと白い煙を吐き始めた。

誠一はガスコンロの火を止めると、ティーバッグを入れたマグカップに熱湯を注ぐ。そのとき、居間の丸テーブル前で座っていた漣は、唸る携帯電話をハンドバッグから取り出し、ディスプレイで相手を確認してからその電話に出た。

「はい、師匠？」

師匠というのは、橘財閥会長秘書をしている楠悠人のことだ。漣たち兄妹にとっては、保護者代理であり、武術の師匠でもあるらしい。それだけでなく、漣のことが好きで結婚を望んでいるとも——誠一はヤカンを握りしめたまま、ティーバッグの沈んだ紅茶に視線を落とした。

「えっと、少しなら……」

漣は、誠一の方を気にしながらも、電話の向こうの彼にそう答えた。

「三者面談？ あ、はい……はい……私はいいですけど、師匠は忙しいのに……うん……」

三者面談というのは、教師、生徒、保護者の三者で行う進路関係の面談だろう。疑っていたわけではないが、このことで彼が保護者代理なのだとうやく実感する。誠一はヤカンをガスコンロに戻し、十分に役目を果たしたティーバッグを取り出して捨てた。そして、湯気の立ち上るマグカップを両手に持って、電話中の漣がいる丸テーブルへと向かう。

「少しは自重してください！」

漣はほんのりと頬を染めながら、口をとがらせていた。

誠一はテーブルにマグカップを置くと、彼女のすぐ隣にクッションを引いて腰を下ろす。彼女は少し動揺したようだが、戸惑いの目をよこしただけで、逃げようとも電話を切ろうともしなかった。

『今、どこ？』

受話器から相手の声が漏れ聞こえる。漣は困惑ぎみに眉を寄せた。

「友達の家です」

『友達、ね』

笑いを含んだ意味ありげな声音。答えが嘘であることは見透かされているようだ。しかし、漣は謝るところか、逆にムツとして反発心を露わにする。

「いけませんか」

『いけなくはないよ。春までは待つ約束だからね』

待つ？ いったい何を——誠一が疑問に思いつつ隣を窺うと、彼女は携帯電話を耳に当てたまま、暗く表情を沈ませていた。何かはわからないが無性に嫌な予感がする。平静を装って紅茶を口に運びつつ、聴覚に全神経を集中させた。

『あまり遅くならないうちに帰ってこいよ』

「わかっています」

いかにも保護者然とした悠人の発言に、漣はやや反抗的な声色で答えると、すぐに通話を切ってハンドバッグに押し込んだ。そのまま下を向いて固まっていた彼女の前に、誠一はもう一つのマグカップを差し出して尋ねる。

「楠さん？」

「うん……」

濡はマグカップに手を伸ばしながら、小さな声を落とす。

「一緒に住んでるのか？」

「そうだけど……」

「大丈夫なのか？」

彼女に気のある男が同じ屋根の下で暮らしているとなれば、心配するのは恋人として当然のことだろう。濡には武術の心得があるため、並みの男ならまだ懸念は少ないが、悪いことに相手はその武術の師匠なのだ。もし彼に変な気でも起こされたら、逃れるのは難しいのではないかと思う。しかし、濡は心底意外だとばかりに目をぱちくりさせ、慌てて両手をふるふると振りながら答える。

「一緒の家だけど部屋は別々だし、全然大丈夫だから！ 小さいときからずっと一緒に住んでるんだもん。今さらそんな……ていうか、無理やりどうこうする人じゃないよ……」

「ならいいんだけど」

今のところ危険な事態には至っていないようだが、今後もそうだという保証はどこにもない。彼女が彼のすべてを理解しているとは限らないのだ。だが、それを言ったところで聞き入れてもらえない気がした。もう一度、紅茶を口に運んで、遠くを見やりながら小さく息をつく。

「俺たち、結婚できるのかな」

ぽつりとそうつぶやくと、隣で紅茶を飲みかけていた濡は、大きく目を見開いてゲホッとむせた。気管に入ったらしく、肩を揺らしながら涙目で咳き込み続ける。誠一は背中をさすって覗き込んだ。

「大丈夫か？」

「う、うん……」

明らかに動揺した声。彼女はおずおずと上目遣いで誠一を窺う。

「でも、いきなりどうしたの？」

「いきなりでもないだろう。この前、濡のそういう話が出てたし」

この前というのは、誠一が初めて橘家に連れて行かれたときのことである。濡は何を言いたいのか察したらしく、きまりが悪そうな、困惑したような面持ちで目を伏せた。そんな彼女の頭に、誠一はぼんと軽く手を置いて言う。

「少し、話してもいいか？」

濡はこくと頷いた。

誠一は気持ちを落ち着けるように深く呼吸をし、マグカップに手を掛けると、細波が揺れる紅い水面に視線を落とした。緊張ゆえか気恥ずかしさゆえか、向かい合って話すのが何となく躊躇われ、そのまま彼女に目を向けることなく口を開く。

「濡には結婚なんてまだ現実味のない話だろうけど、俺はもうすぐ30だし、同級生や同期でも結婚した奴らがちらほら出てきてるんだ。親にも何度かそういう話題を振られたりしてな」

「うん……」

滯はそう相槌を打ちながら、崩していた膝をゆっくりと引き寄せて抱えた。短いプリーツスカートからすらりとした脚が伸びている。真面目な話をしている今の誠一には目の毒だ。無表情のままそっと視線を逃がすと、小さく呼吸をし、落ち着いた口調で慎重に語っていく。

「だから、結婚については否応なく意識させられる。もちろん俺には滯しかいないし、今すぐってわけじゃないけど、いつか滯と結婚できればって……漠然とそんなことを思っていた。けど、そのたびに絶望的な現実がちらつきもした。俺なんかじゃ、滯の家とは到底釣り合わないし、滯の家族に反対されるだろうってな」

滯は黙って聞いていた。その横顔は長い黒髪に隠されている。

「それが怖くて、最近はなるべく考えないようにしていた。滯はまだ若いからと自分に言い訳をして……要するに逃げてたんだな。滯の置かれた立場を聞かされて、身を引けと言われて、それであらためて気持ちを自覚したよ。俺は誰にも滯を渡したくないって」

だからといって、どう行動すべきかはまだわからない。ただ、目をそむけることだけはしたくない。

「滯は……どうなんだ？」

「どうって、何が？」

「楠さんでもいいのか？」

滯は迷うことなく首を横に振った。

「確かに師匠は小さいころの初恋の人だけど、今はそういうのじゃなくて、好きは好きでも家族みたいな感じで……実際ずっと家族みたいに過ごしてきたし……なのに、急にこんな話になって……私……」

溢れくる感情を押しとどめるように、彼女は声を詰まらせた。それから小さく息をつき言葉を繋ぐ。

「結婚とかまだよくわからないけど、私だって誠一と離れたくないし、ずっとずっと一緒にいたいよ……」

気持ちは同じだった。

誠一は左手を伸ばして滯を抱き寄せた。体ごと自分に寄りかからせ、そっと腕の中に閉じ込める。このぬくもりを失いたくない。けれど、彼女の家族が、本当に楠悠人との結婚を望んでいるのだとしたら――。

不意に、滯が首を伸ばして唇を重ねてきた。

あたたかく、柔らかく、それでいて存在を訴えかけるような確かな感触。それは彼女の心そのもののようで――誠一の思考は痺れ、次第に何も考えられなくなっていく。ほどなく名残惜しげに唇が離れる。それでも、彼女は息の触れ合う距離でとどまったまま、視線を上げ、濡れた漆黒の瞳をまっすぐ誠一に向けた。

ドクンと心臓が収縮し、体の芯が燃えたぎるように熱くなる。

今度は、誠一の方から彼女に唇を重ねていった。ただ触れ合わせるだけでなく、衝動の赴くまま、性急に熱い舌を絡め合う。まだあまり慣れていない彼女が、ぎこちなくも懸命に応えてくれるのが愛おしい。艶やかな黒髪に差し入れた手で、彼女の頭を引き寄せ、さらに口づけを深く

していく。反対の手は、プリーツスカートから覗く太腿を彷徨いだした。指先に感じる素肌にますます情欲を煽られる。しかし、このままなだれ込むわけには――。

「……っ、は……滞……」

「やめ……な、いで……」

誠一は時間を気にして体を離そうとしたが、彼女の吐息まじりの甘い声で、僅かに残っていた理性をすっかり崩壊させられた。彼女の華奢な体を勢いよくクッションに押し倒し、呼吸ごと唇を貪り、セーターの裾からなめらかな素肌に手を這わせ――そんな何の解決にもならない行為にただ呑み込まれていく。まるで、互いの存在を確かめ合うかのように、互いの不安を紛らわせるかのように。そして、行き詰まるこの状況を、一時でも忘れようとするかのように――。

## 14. 裏取引

---

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

学校から帰るとすぐに、漣と遥は剛三の書斎に呼び出された。いつもの怪盗ファントムの打ち合わせかと思ったが、扉を開けると、見知らぬ二人の男性が剛三の執務机の前に立っていた。二人とも折り目正しいスーツを身につけており、一人は剛三と同年代、もう一人は悠人と同じくらいの年頃に見える。漣が戸惑いの眼差しとともに軽く会釈をすると、年配の方の男性は、にっこりと人当たりの良い笑みを浮かべた。

「紹介しよう」

剛三はよく通る声でそう言い、すっと立ち上がった。

「こちらは警察庁長官の楠昭彦さん、そして、警察庁警備局公安課の溝端彰さんだ」

「けっ……?!」

大声を上げそうになり、漣は慌てて指先で口を押さえる。まさか正体を知られたのだろうか？逮捕しに来たのだろうか？橘家も会社も何もかもおしまいなのだろうか？絶望的な想像が、次から次へと脳裏を駆け巡っていく。

その横で、遥は冷静に首をひねった。

「楠って、もしかして……」

「そう、よく気付いたな。さすがは遥」

剛三は嬉しそうに顔をほころばせ、声を弾ませる。

「楠長官は、悠人の父君だ」

「えっ……ええ——?!」

漣は有らん限りの声を上げてのけぞった。

楠長官の顔をまじまじと観察してみると、確かに、目元や顔の輪郭などは似ている気がする。彼が見せている穏やかな微笑みも、悠人のそれと重なるものがあった。しかし、これまで悠人から父親の話を聞いたことはなく、それどころか実家に帰っている様子もなく、父親との仲はあまり良くないのかもしれない。

もしかすると——。

ふと頭をよぎった仮説に、漣はごくりと唾を飲む。

先代ファントムをやっていたことを父親に知られてしまい、そのせいで、折り合いが悪くなったのではないだろうか。警察庁長官の息子が怪盗の一味など許されるものではない。縁を切られるどころか逮捕されても仕方がない。やはり、部下を連れて訪ねてきたのは——最悪の懸念を顔に滲ませると、剛三は見透かしたかのように口の端を上げて言う。

「おまえたちには言ってなかったが、先代のときから取引しておってな。怪盗ファントムを黙認してもらおう代わりに、要請があれば公安の手助けをすると」

「……えっ？」

漣はとっさに話が呑み込めなかった。構わず剛三は続ける。

「黙認といっても、このことを知っているのは警察庁の上層部と公安の一部だけで、ファントム

を逮捕しようと躍起になっている刑事たちは、あくまでも本気でかかってくるからな。気を緩めるでないぞ」

「はあ……」

少しずつ理解が追いついてきたが、あまりにも信じがたい話で、滯は気の抜けた返事しかできなかった。警察が怪盗を黙認というのもありえないが、その怪盗に手助けを頼むなど、常軌を逸しているとしかいいようがない。遙も同じ気持ちだったのか、呆れたように大きく溜息をついていた。

「今日は仕事の依頼に来ました。よろしく頼みますよ、可愛らしいファントムさん」

楠長官は人なつこい笑みを向けて言う。

戸惑いつつも、滯は上目遣いでちょこんと頭を下げた。怪盗ファントムを黙認する代償だと言われては、いくら気乗りしなくても断ることは出来ない。それに——警察が怪盗にどのような仕事を頼むのか、ほんの少しだけ興味をひかれる気持ちもあった。

書斎脇の簡素な打ち合わせ机には、剛三をはじめとするいつもの面々に加え、楠長官と溝端の二人も席に着いていた。親子である悠人と楠長官は互いに素知らぬ顔をしている。溝端は懐から一枚の写真を取り出すと、すっと机の中央に差し出した。そこには、黒塗りの車から降りたところと思われる、濃紺色のスーツを着た初老の男性が写っていた。

「衆議院議員の長澤朗です」

「あ、テレビで見たことある」

滯は場にそぐわない能天気な声を上げた。隣の篤史に冷ややかな目を向けられると、慌てて口もとを押さえ、気まずい思いで小さく身を縮こまらせる。楠長官は、そんな滯を見守るように微笑むが、隣の溝端に目で促されて本題に入る。

「長澤議員は、総理よりも力があると云われる陰の権力者で、橘会長もご存知かとは思いますが、以前から数多くの不透明な金の流れが噂されています」

「別にめずらしい話でもなかろう。公安が介入するほどの件とは思えんが」

フン、と剛三は鼻を鳴らした。

楠長官は机の上で手を組み合わせる。

「癒着の相手が問題なのです。いくつもの過激派や宗教団体から不正に資金提供を受け、彼らの利益となるよう行動しており、今もある法案を通さないよう裏工作をしていると聞いています」

「なるほどな」

剛三は瞳に伶俐な光を宿し、挑発するように口の端を上げる。

「その法案とやらを通さなければ、警察庁として都合が悪いということか」

「否定はしませんが、我々がこの国を守るためにご理解いただきたい」

楠長官は顔色ひとつ変えずに答えた。

その次第に大きくなっていく話を聞きながら、滯は無意識のうちに眉をひそめていた。過激派とか宗教団体とか法案とか、馴染みのない物騒な単語が飛び交い、何か途方もない話だというのはわかるが、あまりにも自分のいる世界とは違いすぎて、今ひとつ現実味を感じることができ

ない。

「あの……そんなに深刻な問題なら、本職の人たちで捜査した方がいいと思いますけど」

「もちろん私たちも捜査を行ってきましたが、確たる証拠が手に入れないのです。相手が相手だけに、こちらも慎重にならざるを得ず、警察という枠の中では限界がありましてね」

楠長官は静かにそう言い、視線を上げた。

「そこで、盗みのプロであるあなた方に、ぜひともご協力を賜りたいと」

「プロって……私たちお金をもらってませんし、ボランティアです」

滯は反発心を露わに言い返す。もちろん、自分たちが罪を犯しているという事実は理解しているが、誰かを救うためという免罪符までは手放したくなかった。もっとも、楠長官に深い意図はなかったようで、にっこり微笑みながら優しく言いあらためる。

「それだけ凄いいということだよ、滯ちゃん」

それでも、滯のもよもやした気持ちは晴れなかった。彼に悪気はないのかもしれないが、言い方に何か引っかかるものを感じるのだ。それに、犯罪に関することで褒められても、素直に喜ぶわけにはいかないだろう。

「それで、何を盗めばいいの？」

それまで黙っていた遥が、じれったそうに淀んだ空気に切り込んだ。

溝端は涼しい顔でその疑問に答える。

「長澤議員が自宅として使っている成城の邸宅、その二階の書斎に、インターネットに接続していないスタンドアロンのパソコンがあります。そのハードディスクのデータを盗み出していきたい」

「そこに癒着の確たる証拠があるってこと？」

「可能性は高いと考えています」

溝端は細い眼鏡をクイツと押し上げた。その官僚的な口調も、感情のない表情も、隙のない仕草も、何もかもが冷徹なエリートという雰囲気醸し出している。対照的に、楠長官はどこまでも人当たりが柔らかく穏やかだった。

「どうでしょう、引き受けてもらえますかな？」

「良からう。ただし、方法はこちらに一任してもらおう」

剛三は威圧的な厳しい口調で答えるが、それでも楠長官の穏やかな笑顔は崩れない。

「もちろん、それで構いません。よろしくお願いします」

そう言って深々とお辞儀をする。隣の溝端も頭を下げた。まるで警察側が礼を尽くして頼んでいるかのように見えるが、それがただの体裁にすぎないことは、おそらくここにいる誰もが承知していた。

「大丈夫かなあ」

楠長官たちが訪問したその日から準備を始め、数日後のこの日、とうとう依頼を実行に移すことになった。しかし、そのやたらと面倒な方法を聞いた滯は、大きな不安を感じずにはいられなかった。

「普通に侵入した方が簡単ですよ？」

「まあ、剛三さんの一存だからね」

隣の悠人が軽く苦笑しながら答える。その常套句で片付けてしまうのもどうかと思うが、実際に剛三の意向には逆らえないのだから、そう答えるより他に仕方がないのかもしれない。

「ファースト、こちらの準備は完了した。実行開始だ」

『了解』

運転席に座る篤史がヘッドセットで指示を出すと、近くで待機している遥から短い応答があった。いかにも面倒くさそうな投げやりな声だが、公安に対する反発ではなく、自分の役回りを不満に思っていることだろう。計画についての打ち合わせをしたあとで、どうして自分だけこんな雑用なのか、もっと面白いことがしたかった、と口をとがらせてブツブツと不平をこぼしていたのだ。

それでも、きちんと役割を果たすのが遥である。

応答から間もなく、ガシャンと派手にガラスの割れる音がして、そこからモクモクと白煙が上がった。彼が二階の書斎に煙り玉を打ち込んだのだ。家政婦と思われる女性の悲鳴も聞こえる。もちろん煙は無害なものであるが、何も知らなければ、さぞや驚くだろうことは想像に難くない。

すぐに、濡の膝にのせたノートパソコンが緊急通報を受信した。本来はセキュリティ会社に送信されるものだが、長澤家のものだけここで受けるよう細工したのである。濡は画面を操作してヘッドセットで対応した。

「こちらはSKセキュリティサービスです」

「あのっ、煙が！窓が割られて……！！」

年配の女性が、パニックになって要領を得ない説明をする。

「はい、すぐに緊急対処員を向かわせますので、煙にも窓にも近づかないで、そのまま落ち着いてお待ちください。数分で到着予定です。警察の方にはこちらから通報しておきます」

「お願い、お願いだから早く来てっ！」

「今そちらに向かっていますので、どうかご安心ください」

濡は怯える女性を宥めてから通話を切った。ふう、と大きくゆっくりと肩を上下させる。上手く対処できたか自信はなかったが、隣の悠人に優しく微笑まれて、ようやく少し安堵することができた。

コホン、と篤史がわざとらしく咳払いした。

「何よ」

「別に」

彼は前を向いたまま澄まし顔で答える。いつもはっきりと言葉にしないので、何を知っているのかはわからないが、このところ悠人との仲を冷やかすような言動が多い。別に師匠とは何でもないんだから——濡は何度もそう言いかけたが、あえて自分から切り出すのも躊躇われて、いまだに口にはすることは出来ていない。

ガラガラガラ——。

ワゴン車の引き戸を開けて、遙がさっと後部座席に乗り込んできた。濡の隣に腰を下ろしながら覆面マスクを外し、仏頂面のまま、くしゃくしゃになった髪を無造作に掻き上げる。

「さて、行きますか」

篤史は振り返って遙の無事を確認すると、軽く意気込んでヘルメットをかぶった。すでに防護ベストや警棒などは装備しており、準備は万端に整えられている。悠人もほぼ同じ格好をしていた。しかし、濡だけは二人とまったく別の、黒色のパンツスーツを着て、黒髪を後ろでまとめるという、いささか地味な社会人風の出で立ちだ。三人は遙を残して車から降り、目的の長澤家へと徒歩で向かっていった。

「SKセキュリティから来ました」

「私は、通報を受けて警視庁から」

玄関口で対応した少しふくよかな家政婦に、三人は嘘の身分を告げた。念入りにも、濡は偽物の警察手帳を掲げている。そのポーズは意識的に誠一を真似ており、こんなときにもかかわらず、少しでも気持ちが浮き立っていた。しかし、家政婦はまだ動揺が治まっていないらしく、気もそぞろで、警察手帳などまるで気に留めていなかった。

「あ、あの、二階に何かが投げ込まれて、煙も出ていて……」

「状況を確認してきますので、一階でお待ちいただけますか」

「はい、どうかよろしくお願いします」

家政婦は大きな不安を顔に滲ませながら、緊急対応員を装った悠人たちに深々と頭を下げた。

「刑事さん、この家の方に話を聞くのでは？」

「え……あ、はい！お話を聞かせてくださいね」

他人事のようにぼんやりしていた濡は、悠人に促されると、ハッと我にかえって家政婦にそう言った。とっさに刑事らしからぬ口調になったが、怪しまれてはいないようだ。まだ怯える彼女を気遣いつつ中へと誘導する。悠人と篤史は一礼しながらその脇をすり抜け、そそくさと二階へ駆け上がっていった。

ダイニングキッチンで、濡と家政婦は向かい合って座っていた。

話を聞くといっても、すべて濡たちが計画を立てたので、何が起こったかは当然わかっている。長澤議員が仕事で不在なことも、奥さんが所用で出掛けていることも調査済みだ。さらに、この家からの電話発信と着信はジャックし、相手と繋がらないようにしていたので、まだ主と連絡が取れていないことも承知していた。

つまり、この聞き取りの目的は、家政婦をここに足止めすることだけである。

もちろん彼女がそんな事実を知るはずもなく、濡が質問すると、申し訳ないくらい真面目に答えてくれた。しかし、彼女の緊張が解けるにつれ、大いに話が脱線するようになる。濡もあれこれ質問を浴びせられて冷や汗をかいたが、今のところはなんとか切り抜けられていた。

「お嬢さんみたいな可愛らしい子が来てくれて良かったわあ。刑事なんてみんな目つきが悪くて、態度が悪くて、柄も悪い、いかめしい男ばかりと思っていたから、怒鳴られたりしないか不

安だったのよ」

そう言って、家政婦はホホホと笑った。漑は小さく肩をすくめる。

「刑事にも、いろいろな人がいますよ」

「お嬢さんはどうして刑事になったの？」

「えっ？」

不意打ちの質問に焦りつつ、必死に頭を巡らせて言葉を紡ぎ出す。

「えっと、世の中の役に立ちたくて……」

「まあ、若いのに本当に立派ねえ」

少しも疑うことなく素直に感嘆されてしまい、漑は申し訳なさに居たたまれなくなる。騙す相手が悪人ばかりであれば気が楽なのだが、必ずしもそうはいかないのがつらいところだ。

「それにしても遅いわねえ。何をやっているのかしら」

家政婦は思い出したようにそう言うと、頬に手を当てながら二階の方へ視線を向ける。

「あっ、あちらは危険ですし警備員に任せておきましょう」

「それもそうね。お嬢さんとお話しているのも楽しいし」

漑としてはそれも困る。これ以上、突っ込んだことを聞かれば、いつ綻びが出ないとも限らない。左耳のイヤホンで聞いた篤史たちの報告によると、該当のパソコンはすぐに見つかったが、パスワード解析とデータ移行に時間がかかっているようだ。どうか早く終わって、と心の中で懸命に祈りつつ笑顔を取り繕う。

すると――。

コンコン、とノックされて扉が開いた。

「遅くなってしまい申し訳ありません。確認調査が一通り終わりました。投げ入れられたものに毒性はなく、癩癧玉のようなものと思われます。おそらく近所の子供の悪戯ではないでしょうか」

「そうですか、安心しました」

悠人が説明すると、家政婦は胸に手を当ててホッと息をついた。

「投げ入れられたものや割れたガラスの破片など、とりあえず簡単に片付けておきましたが、まだ細かいものが残っているかもしれませんので、怪我などなさないようお気をつけください」

「ご丁寧にありがとうございます」

軽く一礼して出ていく悠人と篤史を、家政婦は玄関まで送りに行く。漑も慌ててガタリと立ち上がった。

「あっ、あの！私もこれで失礼します！！」

「あら、もっとゆっくりしていらしたら？」

せっかくの話し相手を手放したくないのだろう。家政婦はにっこりとして声を弾ませる。

「お気持ちは嬉しいのですが、私もそろそろ署に戻らないとなりませんので……」

「そうね、お仕事だったのよね。私ったら長々とお引き留めしてごめんなさい」

「いえ、楽しかったです」

漑は薄く微笑む。そこには少しの本心も混じっていた。嘘に気付かれないかずっと気がかりだ

ったし、騙していることを申し訳なくも思ったが、それでも、彼女が温かく気さくに接してくれたことは、この作戦とは関係なく素直に嬉しかった。

「探してるものは見つかった？」

刑事変装用のスーツから普段着に着替えた滯は、黒髪をなびかせて剛三の書斎に入ると、打ち合わせ机で作業をしている篤史に尋ねた。彼は防護ベストとヘルメットを外したくらいで、まだセキュリティ会社の制服を身につけたまま、真面目な顔でノートパソコンに向かっている。

「いま搜索してるところ。しばらく待ってろ」

「うん」

滯は隣に座って頬杖をついた。その打ち合わせ机についているのは、データ搜索作業をしている篤史、それを斜め後方から見張る公安の溝端、向かいで急かさず待っている悠人と遥、そして今やって来たばかりの滯である。楠長官は今日は来ておらず、剛三は執務机の方で他の仕事をしているようだ。

「探してるもの以外には何が入っているの？」

「ほとんどが不正の証拠になりえるデータだよ」

誰にともなく尋ねた滯に、悠人は些末なことであるかのようにさらりと答えた。

「長澤議員ならばそのくらい揉み消すことは可能だろう」

剛三が執務机の方から口を挟む。

「ええ、だからこそ例のデータが必要なのです」

溝端も同調する。その口ぶりはとても冷静だったが、眼鏡の奥の瞳は燃えたぎり、怖いくらいに鋭い光を放っていた。職務に対する忠誠心なのだろうか。それとも、彼自身の正義感なのだろうか——このときの滯には、彼の静かなる情熱の正体がまだわかっていなかった。

「おし、暗号化フォルダ開いた！」

篤史の弾けた声に反応し、滯たちはパッと一斉に振り向く。

これまでの搜索作業で目的のデータは見つかっておらず、残るは、唯一暗号化されていたこのフォルダのみだった。おそらく、最も秘密にしたいファイルが、ここに保存されているはずである。

「どう？ 探してるものはあった？」

「それはこれから確認……って、はあっ？！！」

滯が画面を覗き込もうとした瞬間、篤史は裏返った声を上げ、そして力まかせにノートパソコンを閉じた。壊れるかと思うくらいの勢いである。滯だけでなく、遥も、悠人も、みな驚いて不思議そうな顔をした。篤史は閉じたノートパソコンに手を掛けたまま、固く口を引き結び、額にじわりと大粒の汗を滲ませていく。

「滯はあっちへ行ってる。遥も来るな」

「ちょっ……、何よそれ！！」

「子供には見せられないんだよ！！！」

カッとして噛みついた濡に、篤史はその何倍もの迫力で怒鳴り返した。彼がここまで感情的になったのは初めてである。少なくとも濡は今まで一度も見たことがなかった。気圧されて咄嗟に言葉が出てこない。

「濡、そっちに座ってて」

「……はい」

さすがに悠人に命じられては従わざるを得ない。濡は渋々そう返事をし、示された対面側にまわり遥の隣席に座った。入れ替わりに悠人が篤史の隣席に座る。篤史は険しい目つきでまわりを確認すると、気持ちを落ち着けるように息をつき、悠人と溝端に覗き込まれながら、そろりとノートパソコンを開いた。

「……何だ、これは」

「さあな。お偉い議員さんの趣味だろ」

溝端が面食らったように尋ねると、篤史はキーボードに手を置いて吐き捨てるように答えた。悠人も画面を眺めながら眉をひそめている。三人とも見るからに不快そうな表情をしており、何かはわからないが、それが余程のものであることが窺えた。

「こういう写真ばかりなのか？ 他にはないのか？」

「ファイルは全部画像みたいだが、開けてみないと何かはわかんねえよ。今やってんだから黙って待ってろ」

篤史はかなり苛立っているらしく、遥か年上の溝端に、失礼なくらいぞんざいな口調で返事をした。ただ、その間も手は動かし続けている。それを見て溝端は口をつぐんだ。書斎にはカシャカシャという乾いた打鍵音だけが響いていた。

「ねえ、何なんだろう？ 遥は何だと思う？」

「普通に考えれば、エロかグロのどっちかだろうね」

画面を見ることを許されない濡と遥は、目の前の三人の様子を窺いながら、顔を近づけてひそひそと話し合う。しかし、部屋が静かだったこともあり、あまり離れていない三人には、話の内容まで丸聞こえだったようだ。

「子供が余計な詮索するなっ！」

篤史は画面から目を離すことなく叱り飛ばした。濡は口をとがらせる。

「そんなに子供じゃないもん」

「17歳は間違いなく子供だ」

そう言う篤史も、成人はしているのかもしれないが、さほど濡と年齢は変わらないはずだ。大学二年生と聞いているので二十歳くらいだろう。ほんの三歳ほどしか違わない彼に、偉そうに子供扱いされるのは、濡としてはやはり面白くない。

「濡、篤史の言うとおり、君はまだ子供なんだよ」

悠人にそう言われるのも釈然としないものがある。確かに年齢的には親子ほど離れているが、強引なキスをしたうえ結婚まで迫っているのだから、もはや子供扱いする資格があるとは思えない。

「よくそんなことが言えますよね」

「滯は大人として扱われたいの？」

「.....子供のままでいいです」

にっこりと満面の笑みを浮かべて尋ねられると、そこはかたない身の危険を感じてしまい、不本意ながらも引き下がるしかなかった。篤史と剛三にはニヤニヤと意味ありげな目を向けられる。いろいろと言いたいことはあったものの、藪蛇になりかねないので、あえて口を閉ざして知らんぷりを決め込んだ。

「でも、篤史ひとりだけで確認するのって効率悪くない？」

話を逸らそうと何気なくそう言うと、正面の三人は一斉に顔を上げた。思わず滯はビクリとする。

「だって、ほら、私たちには見せられなくても、師匠なら見てもいいんでしょう？二人で分担した方が早く終わると思うんだけど。師匠だって篤史ほどじゃないけどパソコン使えるよ？名前とか住所とか書かれてる画像があるか確認するくらいなら出来るはずだし.....特殊な方法であぶり出さないと確認できないなら仕方ないけど.....」

「それだっ！！」

「えっ？」

篤史は唐突に滯を指さして大声で叫ぶと、ノートパソコンにかぶりつき、これまでの何倍もの速度でキーボードを叩き始めた。視線もせわしなくあちらこちらと動いている。その表情は真剣そのものだった。

「画像ファイルに隠し情報として埋め込まれているかもしれない」

滯にその意味はわからなかったが、彼が何かをひらめいたのは確かだろう。

「出たっ！」

しばらく作業に没頭していたかと思うと、短く歓喜の声を上げ、ほっとしたように椅子の背もたれに身を預ける。その両側から、悠人と溝端が前のめりになって画面を覗き込んだ。

「これで間違いないでしょう」

そう言って、溝端は中指で眼鏡を押し上げ、切れ長の目をちらりと篤史に流す。

「天才ハッカーにしては随分と手際が悪かったですね」

「まったく、よりによって滯に気付かされるとはな」

篤史は苦々しげに顔をしかめて吐き捨てた。その言い様に、滯はムツとして口をとがらせる。

「何よ、素直に感謝してくれてもいいじゃない」

そう抗議するものの、自分の言葉がどうヒントになったのかは理解しておらず、あまり声を大きくして言うことはできなかった。

篤史は天井を仰いで後頭部で手を組み合わせる。

「方法としては難しいわけじゃなく初歩的なものなんだ。けど、まさかあのジジイがやってるとは思わなかったし、このとんでもない画像を見て完全に逆上してたからな」

「仕方がないだろう」

悠人は軽く溜息を落とす。

「フォルダのパスワードを破ったとしても、この画像を見れば、それだけでたいいの人間は納得してしまう。これを隠すためにパスワードを掛けたんだとね。心理的なもう一つの鍵といったところだな」

「なるほど、趣味と実益を兼ねた保管方法というわけですか」

溝端は抑揚のない声で相槌を打つと、ノートパソコンの画面を冷ややかに見下ろした。

「どうやら一つのファイルが一人または一企業の情報になっているようですね。おそらく他のファイルにも書き込まれているでしょう。すべて取り出すにはどのくらいかかりますか？」

「そうだな、一時間くらいってところか」

「今すぐ取りかかってください」

「はいはい、やっておきますので休憩してきていいですよ」

篤史はいかにもうざったそうにそう言い、再びノートパソコンに向かうと、溝端を追い払うかのごとく手をひらひらさせた。しかし、彼は鉄仮面のようにピクリとも表情を動かさない。

「私が目を離すわけにはいきません」

「……勝手にしろ」

まるきり信用していないであろう口ぶりに、篤史は眉間に皺を寄せ、前を向いたまま突き放すように言う。そして、関わり合いになりたくないとはばかりに、必要以上に画面に顔を近づけて作業を始めた。

「二人とも、夕食を済ませておいで」

悠人が、正面に座ったままの滯と遥にそう促した。

掛け時計はもう夕食の時間を指している。それを見て、滯は思い出したように空腹を感じた。この案件についての打ち合わせのため、昼食が早めだったせいもあるのだろう。今にもおなかが鳴り出しそうである。

「行こう、滯、おなかすいた」

遥も同じく空腹を感じていたようで、そう言いながら、さっそく机に手をつけて立ち上がった。滯も続いて立ち上がる。一人で作業を続ける篤史のことが気になったが、ここにも自分に手伝えることはない。今は、素直に悠人の言葉に甘えることにした。

「はあっ?!」

再び発せられた篤史のただならぬ声に、書斎を出ようとしていた滯たちの足が止まった。振り返ると、彼が画面を覗き込んだまま固まっているのが見えるが、その画面に何が映し出されているのかまではわからない。

滯たちを見送ろうとしていた悠人も、怪訝な顔で振り向いた。

「どうしたんだ、篤史」

「あ、いや……」

いつになく篤史の歯切れが悪い。すると、斜め後ろにいた溝端が口を切る。

「財団法人 生体高エネルギー研究所——当然ご存知でしょうが、橘美咲女史が所長を務める研究

所です。長澤議員は、不正に提供を受けた資金の多くをそこに流しています」

「……えっ？」

あまりにも突飛な話で思考が追いつかない。母の研究所が長澤議員から資金を受け取り、その資金というのは、過激派や宗教団体から不正に得られたもので——漣は必死に咀嚼するが、内容の難しさゆえぼんやりとしか理解できない。それでも、深刻な事態であることを感じ取り、じわじわと嫌な汗が滲んでくる。遙も、隣で険しい顔を見せていた。

「知っておったのだな？」

執務机の剛三が、非難めいた眼差しを溝端に投げる。それでも彼は平然とした態度を崩さない。

「確たる証拠はないと申し上げました」

「敢えて我々に曝かせるとは、警察庁も良い趣味をしておる」

「感謝していただきたい。あまり他に知られたくないでしょう」

溝端は一步も引かず、百戦錬磨の剛三と渡り合っている。彼自身の性格もあるのかもしれないが、こちらの弱みを握っていることが何より大きいのだろう。だからといって、しおらしくなるような剛三ではない。鋭く刺すように睨みつけて威嚇する。

「あまり図に乗るでないぞ」

「ご忠告、痛み入ります」

それでも溝端は動じることなく、淡々と受け流した。

漣は立ち尽くしたままそっと眉を寄せる。この一連のやりとりを聞いていると、まるで美咲の不正が決定事項のようである。少なくとも二人はそれを前提に話をしていた。しかし、漣としてはとても信じられなかったし、信じたくもなかった。

「お母さまが不正なお金をもらってたって、本当なんですか？」

「十分に有り得る話だ。研究にはいくらでも金がかかるからな」

剛三は事も無げに頷いた。すぐに悠人が補足する。

「しかし、研究一筋の美咲が主導できるものとは思えません。おそらく大地が咬んでいるのではないかと。もしかすると、美咲は何も知らないということも考えられます」

「なるほどな……」

剛三は真剣に考え込む。

「問題は、なぜ長澤議員が資金を提供していたのかということだ。何の見返りもなくそんなことをする奴ではあるまい。美咲の研究で利益を享受する算段をつけていたとしか思えんが、そのあたりのことは何かわかっておらんのか」

溝端は横目でノートパソコンの画面を一瞥した。

「ファイルには書かれていないようですね。もし、何かわかりましたらお知らせいたします。ご承知いただいているとは思いますが、捜査の妨げになりますので、橘美咲女史にも、橘大地氏にも、その他の誰にも、なにとぞ今回の件はご内密にお願いします」

漣は口を引き結んでうつむいた。肩から落ちた黒髪がさらりと頬を掠める。こんな話を聞いたあとで、何事もなかったように両親と接するなど、果たして自分に出来るのだろうか。両親の不

正を完全に信じたわけではない。だからこそ本人の口からきちんと聞いて、話し合いたいののに、それすら許されないことがもどかしい。

「お母さまの研究所、どうなるの……？」

「ご安心ください。この件が表沙汰になることはありません。長澤議員の罪を公に暴き立てるつもりはなく、取引材料として、これらの証拠を使わせていただく所存ですので。当然、研究所への金の流れはストップすることになるでしょうが」

溝端はいたって事務的に答えた。非難しているようにも、嫌味を言っているようにも聞こえない。しかし、彼の思考がまったく掴めない分、漣には、その答えがかえって空恐ろしく感じられた。

漣、遥、悠人の三人は、そろって廊下に出ると静かに書斎の扉を閉めた。当初は、漣と遥だけで夕食に行くはずだったが、急に悠人も一緒に行くと言ってついてきたのだ。漣たちがショックを受けていないか心配しているのだろう。

窓から見える風景は、もうすっかり紺色に塗り替えられていた。その下方で、黒い枯れ木が音もなく揺れる。

漣はほんのり冷えた空気を吸い込み、息をついた。

「これで、いいのかな」

「何が？」

遥は無表情のまま尋ね返した。少し躊躇いつつ、漣は後ろで手を組んで答える。

「長澤議員も、研究所も、何の罰も受けないみたいなこと言ってたから」

「漣は、母さんや父さんが逮捕されてもいいの？」

その挑発的な物言いに、幾分かムツとしながらも冷静に言葉を返す。

「別に逮捕されてほしいわけじゃないよ。私だってそんなの嫌だし、困るし、このままずっと平穏な生活が続けばいいって思ってる。だけど……もし本当に、お母さまやお父さまが悪いことをしてるんだったら……」

「それをいったら僕らも同じだよ。窃盗してるわけだし」

「それは……そうなんだけど……」

遥の指摘があまりに身も蓋もなくて、漣は言葉に詰まった。確かに自分たちも罪は犯している。が、私利私欲でなければ、他人を傷つけるものでもない。一方の長澤議員は、過激派や宗教団体から大金をもらい受け、この日本を危険にさらしているのだ。そして、その金が美咲の研究所に流れているのだとしたら――。

「漣」

考え込んでいた漣の頭に、悠人が優しく微笑みながら手を置いた。

「漣の考えていることは正しい。これからもずっとその気持ちを忘れずにいてほしいと思う。だが、現実には、正義よりも最善を選択することは少なくないんだ。納得はしなくてもいい。ただ、自分ではどうにも出来ないことであれば、あまり深く思い悩まない方がいい」

それは、漣を傷つけることなく宥めるために、慎重に選んだ言葉なのだろう。けれど、どこと

なく彼自身に言い聞かせているようでもあった。師匠もつらいのかもしれない——滯はそう感じたが、硬い表情のままこくりと頷くことしかできなかった。

悠人に促されて、滯たちはゆっくりと歩き出す。

誰も口を開こうとはせず、三人の靴音だけが、静寂に包まれた廊下に冷たく響いた。

## 15. 見えない枷

---

「終わったー！」

昇降口から外に出ると、滯は両手をまっすぐ空に突き出し、大きく伸びをして息を吸い込んだ。空は鉛色に垂れ込めているが、空気は新鮮で心地良い。利きすぎた暖房でぼうっとした頭も、少ししゃっきりとしてきた。

隣を歩くスーツ姿の悠人は、お疲れさま、と柔和な微笑みで滯をねぎらった。

今日は高校の三者面談だった。

本来は生徒の保護者が出席するものだが、両親とも忙しく、その代理として悠人が来たのである。こういったことは今回が初めてではない。学校側も橘家の事情は理解しており、入学当初から、戸籍上無関係の悠人を保護者代理として認めていた。

面談の内容は、主に進路のことである。

滯は文系を選択しているが、担任には、以前から理系に変更することを勧められていた。特に理系分野の成績が良いわけではないのだが、おそらく母親が名の知れた科学者なので、滯にもその才能があると思われるのだろう。おまけに、意欲さえあれば遥にも負けないはずだと、何の根拠もないことを本気で言うのだ。そのたびに、滯は辟易としていた。

「お母さまのせいで、変に期待をかけられちゃってつらいな」

「気にすることはないよ。滯は滯でやりたいことをやればいい」

人影のない静かな石畳を歩きながら、つい弱音をこぼした滯に、悠人は優しく励ましの言葉を掛ける。けれど、逆にそれが滯を悩ませることになった。うーん、と唸りながら思案顔で小首を傾げる。

「やりたいこと、特にないんですよね。将来の夢とかも全然なくて……」

遥は橘家を継ぐように言われているが、滯の将来は誰にも決められていない。橘の名に泥を塗るようなことでない限り、何を目指しても反対はされないだろう。しかし、せっかくの自由にもかかわらず、いまだ方向性を定めることさえ出来ずにいた。

思い悩む滯を横目で見ながら、悠人はくすりと笑った。

「僕もそうだったよ」

「えっ？ 師匠も？」

「そんなに意外？」

「はい……」

滯はまじまじと悠人の横顔を見つめた。いつも現実的に先を見据えて行動している彼が、将来について悩んでいたなど思いもよらなかった。彼にも未熟なころがあったということだろう。

「師匠はどうやって大学や学科を決めたんですか？」

「僕と一緒にのところにしろ、って大地に言われてね」

悠人は苦笑しながら答える。

いかにも大地が軽々しく言いそうなことで、濡もつられて笑ってしまう。しかし、このときまで二人が同じ学科だったことを知らなかった。同じ高校・大学出身だとは聞いていたが、学部や学科のことまでは話題に上らなかったのだ。

「何学科だったんですか？」

「工学部生物工学科だよ」

「理系、だったんですね」

「見えない？」

「そんなこともないですけど」

そう答えたものの、二人とも何となくではあるが文系のイメージが強く、少しだけ驚いてしまったのは事実である。しかし、白衣で実験する姿を想像してみると、意外と似合っているように感じた。悠人に言っても断られてしまいそうなので、こっそり大地に頼んで当時の写真を見せてもらおう、などと考えて、思わずくすっと小さな笑みをこぼす。

「無理に大学に行かなくても構わないよ」

「えっ？」

悠人の声で現実に戻され、濡は振り向いた。彼は足を止めることなく続ける。

「専業主婦という道もあるだろう？ もちろん強制ではないよ。僕は濡を縛るつもりはないから、大学へ行きたくれば行ってもいいし、働きたければ就職してもいいけど、そういう選択肢もあるということ」

その一方的な内容に、濡は眉をひそめた。

「あの、師匠と結婚するのは決定事項なんですか？」

「そう言わなかった？ 時期については濡の希望も聞くつもりだよ。僕としては少しでも早い方がいいんだけど、現実的には次の夏休みか卒業式のあとくらいかな。結婚式や披露宴はもちろんだけど、新婚旅行もきちんと行きたいしね」

悠人は少しも悪びれずに言う。

彼が結婚を決めていることはわかっていたが、一応、春までは返事を待つと言っていたはずだ。せめて自分の発言には責任を持ってほしいと思う。だいたい、早い方がいいといっても、怪盗ファントムの仕事も終わらないうちに結婚だなんて——そこまで考えたとき、ふと、ある疑問が濡の頭をよぎった。

「私たちって警察に黙認されてるんですよね？ だったら、ファントムのことを誠一に話したって……」

「それでも法を犯していることに変わりはない」

彼の声に厳しさが宿った。

「確かに僕たちは私利私欲で動いているわけではないし、黙認もされているけれど、悪いことをしているという自覚は持つべきだ。気の緩みは破滅に繋がりがねない。そもそも警察庁にとっても機密事項なんだよ。これ以上、誰にも知られてはならないということは、きちんと理解しておいて」

「……はい」

ピシヤリと言われて、滯には返す言葉がなかった。

悠人の指摘したことも確かにあるが、考えてみれば、肝心の誠一がどう受け止めるかもわからない。いくら警察に黙認されているとはいえ、彼自身の正義が許さない可能性もある。そう思うと、急にゾクリと背筋が震えてきた。

「さ、これからどこへ行こうか」

「えっ？」

考え込んでいるうちに、いつのまにか悠人の黒い小型車の前まで来ていた。駐車場に他の車は見当たらない。彼は助手席側のドアを大きく開き、滯を促しながら、にっこりと満面の笑みを浮かべる。

「嫌だと言っても一晩付き合ってもらうからね。三者面談なんて面倒なことを押しつけられたんだから、そのくらいのご褒美がないとやってられないだろう？ もちろん剛三さんにも許可はもらってきたよ」

滯はくすりと笑った。

「遥とも三者面談のあと御飯を食べに行きましたよね」

遥の三者面談は数日前だったが、そのあと二人で食事に行ったと彼から聞いている。帰ってきたのは日付が変わるころで、自分のいないところでそんなに盛り上がったのかと、少し寂しく、そして羨ましく思ったことを覚えている。

「ああ、あれは二人きりで男どうしの話がしたくてね」

「男どうしの話？ それってどういうのなんですか？」

「内緒」

悠人は澄まし顔のまま素気なく一蹴した。しかし、秘密にされると余計に気になってしまう。

「ヒントだけでも」

「ダメだよ」

こうなっちはいくら粘ったところで聞き出せそうもない。ひとまずは素直に諦めたふりをして、あとでこっそり遥に聞いてみようかな——などと少々ずるいことを考えながら、悠人に促されて助手席に乗り込む。

「で、どこへ行こうか。晩御飯まではまだ少し時間もあることだし、行きたいところがあれば連れて行ってあげるよ」

悠人は開いたドアに片腕をのせ、助手席の滯を覗き込みながらそう尋ねてきた。しかし、急に行きたいところと言われてもなかなか思いつかない。少し考えて、頭に浮かんだものを素直に答える。

「じゃあ、海が見たい」

「海ね、了解」

少し無謀なことをやってしまったかと思ったが、悠人はにっこり微笑んで了承してくれた。助手席のドアを丁寧に閉め、反対側から運転席へ乗り込む。そして、カーナビに手早く目的地を設定すると、エンジンをかけてゆっくりと発車させた。

タップン、タップン――。

下方から、コンクリートに打ち付けられる水音が聞こえる。眼前には細波立った黒い海面が広がり、どこからか運ばれた小枝の塊や、捨てられた空のペットボトル、ビニル袋などを不規則に揺らしていた。ところどころ油も浮かんでいるようだ。そのせいか潮風には僅かに異臭が混じり、視覚的にも嗅覚的にも、さわやかな海のイメージとはほど遠い。

「確かに海だけど……」

「あしたの予定を全部キャンセル出来たら、きれいな海へ連れて行ってあげられたんだけどね」  
悠人は肩をすくめて苦笑する。

しかし、滯とてリゾート地のような海を期待していたわけではない。思ったよりほんの少し酷かっただけのことだ。薄汚れた白い柵に両腕を置き、そこに顔をのせて、鈍重な冬の海をじっと眺める。不意に強まった冷たい潮風が頬を掠め、長い黒髪をさらりと吹き流した。

「海の匂いを嗅いでいるとね、私、お母さまのことを思い出すの。研究所が海の近くだからかな。健康診断で研究所に行くときくらいしか、お母さまとゆっくり過ごせなかったし……」

そう言うと、目を伏せて薄く微笑む。

研究に明け暮れている母親との思い出は、ほとんどが研究所に関わるものだった。けれど、それを悲しいと思ったことはない。優秀な科学者である母親は、滯にとって誇りであり、憧れてさえいたからだ。なのに、その研究所で不正が行われていたなんて――。

「滯、大丈夫か？」

心配そうに声を掛けた悠人に、滯は精一杯の笑顔を見せた。

「平気です。私には師匠や遙がついているんですから。師匠には、橘家のことで面倒ばかりかけて、申し訳なく思ってますけど……今日の三者面談だって……」

「滯はそんなことを気にしなくていいんだよ」

悠人は滯の頭にポンと大きな手を置いて言う。その言葉に嘘はないだろう。ただ、面倒をかけられたことは否定しておらず、この現状については、やはりそれなりの不満を感じているのだと確信する。

「お父さまのお仕事って、そんなに忙しいんですか？」

「まあ、忙しいのは忙しいと思うけど、家に帰れないほどではないはずだよ。仕事も上手い具合に人に押しつけてるし。あまり家に帰ってこないのは、少しでも美咲と一緒にいたいからだろうね」

「……えっ？」

話の意味が今ひとつ掴めず、滯は振り向いて聞き返した。

「仕事のあと研究所に行ってることが多いんだよ。知らなかった？」

「うん……」

仕事が忙しいと聞かされていたためか、不在のときはすべて仕事だと思い込んでいた。いや、実際に昔はそう言っていたはずだ。今ではもう尋ねることさえなくなったが、小さな子供のころは、両親が帰らない理由をよく訊いていた。そして、答えはいつも「仕事」だったのだ。

悠人はズボンのポケットに片手を入れて、うつむいた。

「美咲は研究に明け暮れているからわかるが、大地があれこれ僕に押しつけるのは、多分、面倒なことをしたくないからだろうね。興味のあること以外はやりたがらない子供みたいな奴だから……」

そう言って小さく息をつくと、顔を上げ、遠い眼差しを空に向ける。

「大地は、昔から自分勝手に気ままで自由だった」

淡々とした口調。しかし、そこには深淵な感情が潜んでいるように感じられた。

「美咲のことも……いくら気に入ったからといって、まだ小学生の女の子を、いずれ結婚するつもりで引き取るなんて、僕には狂っているとしか思えなかった」

怪盗ファントムとして絵画を取り返した大地は、一目見て、本来の持ち主である美咲に心を奪われた。そして、彼女に身寄りがないことを知ると、剛三に頼んで養子として橘家に迎える——それが倫理的に褒められるものではないことは、滯も理解している。

「でも、剛三さんもどういうわけか乗り気でね。僕の反対意見は聞き入れてもらえなかったよ。幸か不幸か、小笠原の事故に遭って、大地と美咲の気持ちは通じ合ったみたいだけど」

結婚前のことだが、大地と美咲が小笠原へ向かう途中、乗っていたフェリーが沈没するという事故に遭ったらしい。生存者はこの二人だけだったようだ。科学者としての橘美咲を特集していた新聞記事で、この話を知ったのだが、当事者である両親から直に聞いたことはない。

「事故に遭ったから……？」

「きっかけはそうだろうね。あの事故で、美咲にとって大地は命の恩人になったんだ。それまでも兄としては慕っていたようだけど、それとは違う、危うささえ感じるくらいの慕い方をするようになってね。事故からしばらくの間は、片時も離れようとはしなかった」

それは初めて聞く話だった。過去のこととはいえ、自立した今の美咲とは別人のようで、滯は少しばかり戸惑いを感じてしまう。しかし、よく考えてみれば、無理もないのかもしれない。まだ10代前半の少女が、命を落としかねないほどの大事故に遭えば、心に深い傷を負うだろうことは容易に想像がついた。

「今の研究の道に進んだのも、大地の意向らしいよ」

「じゃあ、お父さまが才能を見いだしたってこと？」

「ある意味ではそういうことになるかな。でも、彼女にとっては幸せだったのかどうか……」

以前の滯なら、迷うことなく「幸せだ」と言い返していただろう。しかし、研究所の不正を知ってしまった今では、そう断言する自信はなくなってしまった。美咲が関与していたのかはわからないが、研究所としての不正は間違いないらしく、そこまで追いつめられていたとしたら、もしかしたら——。

「大地が何を考えているのかわからない」

悠人は白い柵に腕を置き、前屈みにもたれかかりながら言う。

「昔から相談してくれたことなんて何ひとつなかった。いつも自分ひとりで勝手に決めて進み、そして僕やまわりの人たちを巻き込んでいく。他人がどうなろうとお構いなしさ。僕は彼のことを友人だと思っていたけれど、彼は都合よく利用していただけなのかもしれない」

「……恨んでいるの？」

「そうかもしれないね。でも、どうしても嫌いになれない。悔しいけれど好きなんだよ」

それは初めて聞く悠人の本音だった。どういうわけか、今日はこれまで語らなかったことを次々と口に上している。研究所の不正を知って少し参っているのだろうか。滯と同じように、もしかすると滯以上に、やりきれない思いを抱えているのかもしれない。言葉の端々からそれが滲んでいるような気がした。

滯が無言で立ち尽くしていると、悠人はふっと柔らかく微笑んで振り向いた。

「何より、大地のおかげで滯と会えたわけだしね」

そう言いながら、人差し指で滯の横髪をすくい上げ、ゆっくりとなぞるように耳に掛けていく。たったそれだけのことで、くすぐったさとは別のものを感じてゾクリとする。表情に出したつもりはなかったが、悠人にはすっかり見透かされていたようで、意味ありげに片側の口角が上がった。滯はほのかに頬を染めたまま、唇をとがらせる。

「師匠も最近自由に見えますけど」

「大地を見習ってみたんだよ」

悠人は臆面もなく答えた。そして薄い唇に笑みをのせると、白い柵を握り、仄暗い鉛色の空を仰ぎ見る。

「人生で一度くらい、ひとつくらい、我が儘になっても構わないだろう？」

「……そういう言い方、ずるいです」

滯は胸にズクンと鈍重な痛みを感じた。目を細め、鼻筋の通った彼の横顔をそっと見つめる。大地の我が儘に振り回され、剛三の野放図に付き合わされ、自分たちの世話まで押しつけられてきた、そんな彼がたったひとつ望むことだとしたら――。

「冷えてきたね。そろそろ行こうか」

いつのまにか陽が落ち、あたりには急速に夜の帷が降りてきていた。自分の口から出た吐息はうっすらと白く、手足も顔もすっかり冷え切っている。滯はこくりと頷いて柵から手を離し、彼の隣に寄り添う。

「滯は何が食べたい？」

「……温かいもの」

「温かいものね、了解」

悠人は笑いを含んだ声で復唱すると、滯の肩に手を回し、離れた駐車場に向かって歩き出した。

二つの足音が次第に重なっていく。

彼の隣は居心地がいい。物心ついたときからずっと大好きで、尊敬していて、言いようもないくらいに感謝もしている。そんな人に結婚を望まれるのは幸せなことかもしれない。そして、それを受け入れれば彼への恩返しにもなるだろう。

けれど――。

滯は視線を落としたまま眉を寄せ、そっと唇を引き結んだ。それ以外に選ぶべき未来のないことは理解している。だが、その現実と正面から向き合う覚悟までは、まだ持てずにいた。

## 16. 親子

---

「今まで師匠と何してたわけ？」

あからさまな不快感と、若干の怒りが含まれたぶっきらぼうな口調。

剛三の書斎へ向かう途中の廊下で、漣は並んで歩く遙にそう尋ねられた。一瞬、振り向いてきょとんとしたものの、すぐに言わんとすることを理解する。後ろで手を組み合わせてくすすと笑うと、長い黒髪をさらりと揺らしながら彼を覗き込んだ。

「遥だって、三者面談のあと師匠とごはん食べに行ったじゃない」

「僕はごはんだけで、その日のうちに帰ってきたけどね」

遙は仏頂面のまま刺々しく答えるが、漣はまるで気にすることなく、目を輝かせて無遠慮に踏み込んでいく。

「ね、師匠とどんな話をしたの？」

「内緒」

「男どうしの話って聞いたけど……」

「ノーコメント」

「んー、じゃあヒントだけでも」

「言わない」

遙の態度は、悠人以上に取り付く島もなかった。当てが外れて、漣は拗ねたように口をとがらせる。

「だったら私も答えない」

「いいよ、別に」

自分から訊いたにもかかわらず、もう興味をなくしたかのように、彼は涼しい顔でそう受け流した。これでは漣の方が困ってしまう。募る悔しさに眉をひそめながらも、ぼそりと小さな声で言い訳をする。

「ホテルのプールで一緒に泳いだだけだからね」

「一晩中？」

「まさか。もちろん部屋には泊まったけど……」

三者面談が終わったあと、埠頭で海を見てから食事に行き、その後ホテルのスイミングプールで泳いだ。久しぶりに悠人と50mのタイムを競って、何度挑戦しても勝てなかったけれど、一時でも面倒なことを忘れられて楽しかった。いい気分転換になったと思う。

そして、夜はそのホテルに泊まったが、やましいことなど何ひとつない。

子供の頃はよく一緒に寝ていたし、今も泊まりがけで下見に行ったりしている。結婚の話が出てからは、さすがに多少は意識をしてしまうが、何もしないという彼の言葉を信じているし、これまで実際に何も起こっていない。そんなことは遙も知っているはずなのに、何を気にしているのか漣にはわからなかった。

「もう師匠と結婚することに決めたの？」

「……そんなの、まだわからないよ」

あまり考えたくなかったことを蒸し返され、漣は少しムツとする。それでも遥は追及の手を緩めなかった。

「早く決めてはっきりさせなよ。これじゃ二股だよ」

「二股って……師匠とは、別に……」

漣には二股を掛けているつもりなど微塵もない。それだけに、遥の言葉には軽く衝撃を受けた。きっぱりと否定すればよかったのだが、口から出た言葉は、なぜか自信なさげなたどたどしいものだった。

彼は前を向いたまま、冷やかに付言する。

「それに、先延ばしにすればするほど傷つくことになるから」

漣は小さく首を傾げた。

「誠一が？」

「二人とも」

確かに、先延ばしにすればするほど離れがたくなるのかもしれない。だが、今すぐ別れることなどとても出来ないし、出来たとしてもしたくない。できるだけ二人でいる時間を延ばしたいと思ってはいけないのだろうか——視線を落として考え込んでいると、遥はふと思い出したように尋ねる。

「それよりテレビは見た？」

「テレビ……？」

漣はさらりと黒髪を揺らして振り向き、ぱちくりと瞬きをした。

「怪盗ファントムが狙っている『ある少女の肖像』について教えてください」

最前列の若い女性レポーターが、パイプ椅子から立ち上がって尋ねた。その視線の先には、会見の主演と思われる恰幅のいい男性が、フラッシュを浴びながら、勝ち誇ったような不敵な笑みを浮かべている。

「『ある少女の肖像』は、天野俊郎が元華族に依頼されて手がけた肖像画で、描かれている少女は、橘財閥会長の亡くなられた妻だと聞いている。これまで世間にはあまり知られていない作品だ。しかし、彼の他作品と比較すると圧倒的に価値は低く、なぜファントムが欲するのはわからない」

今度は後方の男性リポーターから声が上がる。

「その絵を見せていただけませんか？」

「残念ながら現時点ではご容赦いただきたい。盗みのヒントを与えることになりかねませんから。無事を守りきれた暁には、何らかの形でみなさんに披露することをお約束しましょう」

別の男性リポーターが手を上げた。

「怪盗ファントムの対策はすでにお考えでしょうか」

「丁重な予告状をいただいたのだ。こちらも真正面から相對したいと思う」

そう答えて一呼吸おくと、真正面からテレビカメラを見据えた。

「見ているか怪盗ファントムよ。扉は開けておく。二階応接室にて、この内藤自ら肖像画とともに

にお迎えしよう」

会場にどよめきが起こり、目のくらむような無数のフラッシュが焚かれた。その中心に座る男性は、せり出した腹を見せつけるようにふんぞり返り、厭らしく口の端を上げていた。

パチン——。

打ち合わせ机に仮置きされたテレビの電源が切られた。

録画映像を見ていた滞たち怪盗ファントムの面々は、黒くなった画面から目を離し、どことなく重たい空気に包まれつつ机の中央に向き直った。皆、何とも言いがたい微妙な面持ちをしている。

「今朝の予告状を見た内藤からの返答だ」

剛三はリモコンを机に置きながらそう言うと、眉間に皺を刻んだ。

「わざわざ自社にマスコミを呼び集めて会見したらしい。良い話題作りになると思ったのだろう。メディアを利用して成り上がってきた内藤らしい下品な遣り口だ。あのような輩の手元に、一秒たりとも瑞穂の肖像画を置いておきたくはない」

苛立ちを露わにしてそう言うと、ギリギリと奥歯を噛みしめ、握りつぶさんばかりにリモコンを握りしめる。無言の空間に、張りつめた軋み音が響いた。

会見をしていた男性は、内藤茂という実業家である。

これまで何かと剛三に対抗意識を燃やしていたようだが、当の剛三は歯牙にも掛けず、様々なちょっかひも動じることなく黙殺してきた。しかし、瑞穂の肖像画を手に入れたなどと言われては無視できない。面会したいという内藤の要求を、不本意ながらも、初めて受け入れることになったのだ。

事前に調査したところ、その肖像画はどうやら本物らしいことが判明した。剛三は存在すら把握していなかったが、瑞穂が嫁ぐ前、彼女の父が馴染みの画家に描かせたものようだ。最愛の娘の姿を手元に残しておきたかったのだろう。所有者である瑞穂の父が亡くなったあと、長きにわたり行方不明だったが、最近、天野俊郎の未公開作品としてひっそりと市場に現れ、それを内藤が150万円ほどで購入したのである。

剛三は買い取らせてほしいと頭を下げたが、内藤は応じなかった。しかし——。

「飽きたら無償でお譲りしますよ。ただし、傷だらけになっているかもしれませんがね」

あからさまな挑発である。

内藤はそれだけのために瑞穂の肖像画を手に入れに違いない。無視され続けたことに対する復讐だったのかもしれない。だが、剛三からすれば逆恨みもいいところだ。このような理不尽な横暴を許せるはずもなく、絵画関係ということもあり、怪盗ファントムに肖像画を救出させようと思ったのである。

「しかし、計画が大幅に狂ってきたな……」

剛三はリモコンを机に置きながらそう言い、眉間の皺を深くする。

「でも、扉を開けててくれるなら楽ですよ」

「バカもん！真に受ける奴があるかっ！！」

場を和ませようとした滯の言葉も、苛立っている彼には通じず、思いきり怒鳴り返されてしまった。遙は溜息を落としながら頼杖をつき、悠人は声を立てずに苦笑している。が、篤史だけは険しい表情を崩さなかった。

「現時点での問題は三つ」

おもむろにそう言って、三本の指を立てる。

「一つ目、俺らが警備員として潜入することは不可能になった。内藤は警備会社に依頼するつもりはないらしい。万が一、これから依頼することがあったとしても、直前では準備のための時間が足りないからな」

当初の計画では、篤史が警備員の一人に成り済ますことになっていたが、さすがに警備員を雇わないのではどうしようもない。ただ、この件については事前に想定済みのはずである。何の愛着もない150万円程度の絵に対して、あの内藤が警備など頼みはしないだろう——と、先日の打ち合わせで剛三に指摘され、別案を考えておくよう言われていたのだ。

篤史は眉を寄せて、言葉を継ぐ。

「二つ目、警備システムが利用できなくなった。内部監視や陽動作戦に、内藤邸の警備システムをハッキングして使う予定だったが、あの会見以降、どういうわけかすべての警備システムが切られている」

このことは悠人も遙も初耳だったようで、ハッと目を見張った。

滯は小首を傾げながら尋ねる。

「それって、こっちの計画が読まれてるってこと？」

「過去の事件から推測した可能性はあるだろうな」

篤史は淡々と答えた。それから、小さく溜息をついて続ける。

「三つ目、仕掛けておいた盗聴器やカメラも一つ残らず外されてしまった。今は内藤邸の様子を知る術はない。だからといって再び仕掛けに行くのは危険すぎる。つまり、計画はまっさらな白紙に戻っちゃったってことだ」

これまでずっと冷静に述べていたが、最後だけ少し投げやりな口調になった。準備がすべて水の泡になったのだから無理もない。今回は悠人が別件でいろいろと忙しかったため、篤史が中心となって進めており、それゆえなおさら悔しく思う気持ちが大きいのだろう。

しかし、悔しいだけですむ話ではない。

予告時間が刻々と近づいてきているのに一体どうするつもりなのだろうか。いっそ中止にしてくれた方がありがたいが、怪盗ファントムのイメージを考えれば、そう簡単に予告を撤回するわけにもいかないはずだ。滯は眉をひそめ、八つ当たりぎみに口をとがらせて言う。

「私的なことにファントムを利用するからバチが当たったんですよ」

「なんだとッ！！」

剛三はクワッと目を見開き、筋張った両こぶしを激しく机に叩きつけた。

「おまえは瑞穂が陵辱されてもいいというのか？！」

「陵辱って、そんな大袈裟な……」

その凄まじい勢いに、漣は困惑ぎみに身をのけぞらせる。

悠人は小さくクスッと微笑んだ。

「確かに、今回の件は私情を挟んでいるが、絵の尊厳を守るという理念には反していないよ」

言われてみれば、この案件が今までで一番理念に叶っているのかもしれない。浅はかな目的のために傷つけられる絵画を救い出す——それは、所有者でも作者でもなく、絵そのものの尊厳を守ることに他ならないのだから。もっとも、剛三は瑞穂の肖像画を取り返すことしか頭にないようであるが。

「今から計画を練り直しても、その準備をする時間がない」

篤史は机の上で手を組みながら言う。

「外部からのサポートが難しいこの状況では、怪盗ファントムにすべてを任せて、正面突破で絵を奪ってきてもらうしかないと思う。内藤には秘書兼ボディガードの屈強な男が二人、常に付き従っているそうだが……漣、おまえやれそうか？」

「私は反対です」

尋ねられた漣を差し置いて、悠人が声を張った。毅然とした口調で続ける。

「漣には荷が重すぎます。今回は遥に任せた方がいい」

「私、やります」

漣は手を上げて言った。

やりたいと思ったわけではない。けれど、体が反射的に動いていた。遥の方がすべての能力において上であることは認めており、妬ましく思う気持ちはないはずだが、なぜかこのときばかりは大きく気持ちがざわついたのだ。

振り向いた悠人の表情は厳しかった。

「今回は些細な失敗も許されない。意地は捨てて考えるんだ」

「……大丈夫です。必ずやり遂げますから」

まるで心の中を見透したかのような彼の言葉に、漣は少し動揺したが、ゆっくりと右手を握りしめてそう断言した。必ずやり遂げる、やり遂げられる——自らに言い聞かせるように胸の内で復唱すると、小さく息を吸い込んで顔を上げ、にっこりと精一杯の笑顔を作ってみせた。

その日の夜——。

漣は近くのビルからハングライダーで飛び立つと、緩やかに弧を描きながら、内藤邸の正面玄関前にすっと静かに降り立った。門の外側には数多くの野次馬やマスコミが集まっており、歓声とも野次ともつかない声を上げて騒々しく盛り上がっている。対照的に、敷地内には警備員も警察も見当たらず、不気味なくらいに静まりかえっていた。

玄関の扉は、宣言通り大きく開け放たれていた。

こういうわかりやすいパフォーマンスは、マスコミが食いつきやすく話題になる。そう計算してのことだろう。過剰な売名行為でのし上がってきた内藤だけに、さすがにそのあたりについてはぬかりがなかった。

滯はハンググライダーをその場に置き、用心しながら玄関へと足を踏み入れた。

『セカンド、二階へ上が……』

「副司令？」

イヤホンから聞こえていた悠人の声が、途中で雑音に呑み込まれた。妨害電波で通信を阻害されたようだ。事前にそういう可能性もあるとは聞かされていたが、実際に連絡が取れなくなるとやはり不安になる。が、今は前に進むしかない。

正面には、待ち構えるように幅広な階段があった。

罨が仕掛けられていないか確認しながら、滯は一步步慎重に足を進めていく。屋敷に響くのは自分の足音だけで、あたりに人の気配は感じられない。本当に警備は頼んでいないようだ。

階段を上りきったすぐ目の前が応接室である。飾り彫りが施された木製の扉——滯はその前に立ち、ごくりと唾を飲む。一瞬、ドアノブに触れることに躊躇したが、この扉を開かなければ始まらない。覚悟を決めると、白い手袋をはめた手で両開きの扉をゆっくりと押し開いた。

「ようこそ、怪盗のお嬢さん」

広い応接室の奥に、不敵な笑みを浮かべた内藤が立っていた。その両側には、いかにも屈強そうなスーツ姿の男性二人が付き従っている。篤史が言っていた秘書兼ボディガードに違いない。

「君が欲しがっているのは、この絵かな」

そう言って、内藤は肖像画を前に掲げて見せつけた。額装されていない剥き出しのキャンバスを、素手で無造作に掴んでいる。そこからは絵に対する敬意など欠片も感じられなかった。滯は顎を引き、仮面の下でキュッと下唇を噛みしめる。

内藤は口もとを斜めにした。

「私にとっては何の価値もないものだが、君にとってはそうでもないのだろうか？」

彼の右手には金色の四角い何かが握られていた。親指でカチャッと蓋を跳ね上げ、スイッチのようなものを押すと、薄青色の炎が揺らめきながら現れる。どうやらライターのようなものだ。その炎で、彼は無言のまま肖像画の下方をあぶり始めた。キャンバスの縁が茶色く変色し、焦げくさい匂いが広がる——。

ハッターじゃない、本当に燃やしてる！！

滯は大きく目を見開いて息を呑み、弾かれたように内藤へ突進していく。が、部屋の中ほどまで来たとき——。

「……っ?!」

足もとがすくわれて体が宙に浮き、視界が大きく反転した。一瞬、何が起こったのかわからなかったが、あたりを見まわしてすぐに理解した。内藤の仕掛けた罨にかかり、網に絡め取られ、天井から吊されているのだと。もがいても思うように動けない。体は腰から二つ折りになっており、下手すると自分の膝で仮面を打ちつけてしまいそうだ。めくれているスカートを直すこともできない。傍らから見たら、とんでもなくはしたない格好になっていることだろう。

内藤がゆったりと近づいてきた。

「まさか、これほど簡単に捕らえられるとはな。他にもいくつか罨を準備してあったが、少々買

い被りすぎだったのかもしれん」

吊された怪盗ファントムを見上げながら、顎に手を添え、すこぶる愉しそうにそう声を弾ませた。そして、嗜虐的な笑みを瞳に宿すと、粘り気のある視線をいやらしく這わせていく。濡の背筋にゾクリと冷たいものが走った。

「一部では性別不明と言われているが」

「……っ！！」

内藤の無骨な指が、網越しに濡の太腿に触れた。口から飛び出しそうになった悲鳴を何とか呑み込む。しかし、それで終わりではなかった。ゆっくりともったいつけるように、もしくはじっくりと味わうように、太腿をなぞりながら付け根の方へと這わせていく。

——嫌っ！

濡の全身に強烈な悪寒が駆け抜けた。身を振るが逃れられはしない。太く無骨な指で、容赦なく蠢くようにまさぐられる。それでも、涙目できつく唇を噛みしめながら堪え、悟られないよう密かに内ポケットを探った。

「女で間違いないようだな」

薄笑いを含んだ、ひどく下卑た声が耳に届く。

「すぐに警察に引き渡してしまうのは惜しい。顔は仮面を取ってみないとわからんが、体の方はなかなか良さそうだからな。色白の吸い付くような肌も、適度に肉のついた太腿も、実に私好みだ。濡れやすいのも悪くない。少し楽しませてもらってからでも遅くはないだろう。拘束具も用意して……」

シュウウウツ——。

濡は内ポケットから取り出した催涙スプレーを、内藤の顔面に噴射した。

「うぐああああ！！！」

至近距離でその直撃を受けた内藤は、悲鳴を上げて倒れ込み、絨毯の上で目を押さえてのたうちまわる。

後方に控えていたボディガード二人が、息を飲んで雇い主のもとへ駆け出した。その片方に狙いを定め、もう一度スプレーを強く噴射すると、彼もまた目を押さえて絨毯に崩れ落ちた。もう一方は即座に飛び退いて距離を取り、身構えながらジリジリと横歩きをする。濡はその男に噴射口を向けたまま、反対の手で懐からナイフを取り出し、網縄に少しずつ切れ目を入れていった。思いのほか頑丈だったため少し時間が掛かったが、どうにかくぐれるだけの穴を開け、ひとまずその罠からは無事に脱出することができた。

しかし、まだ仕事が残っている。

残ったボディガードを催涙スプレーで牽制しつつ、足もとの内藤を避けながら、無造作に投げ出された瑞穂の肖像画へにじり寄っていく。これを持ち帰らないわけにはいかないのだ。しかし、あともう少しで手が届こうかというそのとき——。

ガンッ！！

後頭部に衝撃が走った。前のめりで絨毯に倒れ込んだ濡の上に、男が馬乗りになり、背中側で両腕を押さえて動きを封じる。

「おまえ、目は大丈夫なのか？」

「浴びた量が少なかったからな」

頭上で言葉が交わされる。

濡を押さえ込んでいるのは、先ほど催涙スプレーを浴びせたボディガードのようだ。どうにかして逃げようともがいてみるが、相手の方が格段に体格が良く、おまけに武術の心得もあるようで、まったくもってビクともしない。殴られた後頭部が熱く、視界がグラグラと揺れてきた。

「よくやった」

内藤は苦しげに目を押さえながら、体を起こそうとする。

「まだマスクは外すなよ。素顔は私が曝いてやる」

「こいつは危険です。すぐに警察を呼んだ方が……」

「冗談ではない。ここまでのことをやられたんだ。たっぷりと報復せねば気が済まん。そして、マスコミを集めて大々的に晒してやる。警察に引き渡すのはそのあとだ」

そう言いながら、片手で目を覆ったままよろよろと立ち上がる。ふらつく彼の体を、手の空いているボディガードが支えた。内藤の目はまだ見えていないようだが、回復するのも時間の問題だろう。

このままでは、何もかもがおしまい——。

頭の中で激しく警鐘が鳴り響くものの、体は動かず、目の焦点も合わなくなってきた。仮面の内側に汗が伝う。それでも歯を食いしばり意識を保とうとしていた、そのとき。

バサバサッ——。

派手に風を切るような音を立て、黒い何かが視界を横切っていく。しかし、それが何か考えるより前に、濡の意識はすっと闇に沈んでいった。

大人たちの話し声が聞こえる。

会話の内容まではわからないが、優しくて穏やかな声、そして体に心地よく響くリズム。ゆったりと波に揺られているようで、何だかとても懐かしい。けれど、それは次第に遠ざかっていく。

どうして？

お願い、私を置いていかないで、私たちを拒絶しないで——。

「濡、気がついた？」

「お母さま……？」

無意識に伸ばした手の向こうに、並んで見下ろしている悠人と美咲の顔が見えた。少し離れたところには遙もいる。状況の掴めない濡は、混乱した頭であたりを見まわしながら、肘をついてゆっくりと体を起こした。ここは自分の部屋に間違いはない。怪盗ファントムの赤いシャツを身につけたまま、ボタンを上から三つほど外され、いつも使っているこのベッドに寝かされていたようだ。確か、内藤邸でボディガードに取り押さえられて、それから——。

「えっと、私、どうして……？」

「師匠が助けてくれたんだよ」

遥が答える。

「やっぱり滯一人に任せるのは不安だからって、先代ファントムの格好でこっそり乗り込んで行ってね。滯が上手くやれてたら出番はなかったはずなんだけど」

それ、見たかった——！

気絶する寸前に視界を横切った黒い影は、マントを翻した悠人だったのだろう。きちんと見る前に意識をなくしてしまったことが悔やまれる。もういちど着て見せてほしいと思ったが、今はとても頼めるような状況ではない。とりあえず、と遠慮がちに悠人を見上げて首をすくめた。

「あの、すみませんでした」

「この程度で済んで良かったよ」

悠人は微笑んだ。

「えっと、肖像画は……？」

「ちゃんと盗んできたよ」

その答えに、滯はほっと胸を撫で下ろす。そして隣的美咲に視線を移した。

「お母さまはどうして？」

「滯が心配だからに決まってるでしょう？ これでも母親だもの。悠人さんから連絡をもらって、研究所から大急ぎで飛んできたわよ」

確かに、白衣こそ着ていなかったものの、仕事用のスーツを身につけたままである。髪も、いつも研究所でしているように、後ろでひとつに束ねているだけだった。

「大地は出張中だから来られないの。ごめんなさいね」

「ううん、私なら大丈夫だから」

こんなことで大事な仕事が駄目になっては、かえって申し訳が立たない。会えないことに寂しさを感じるものの、そこまでの贅沢を言うつもりはなかった。美咲が心配して帰ってきてくれたこと、そして母親だからと言ってくれたこと、それだけで十分すぎるくらいである。

ふと、美咲は思い出したように言う。

「そうそう、さっき石川さんに診てもらってね。すぐに意識が戻ったら問題はないだろうけど、頭を打ってるから、念のため設備の整った病院で精密検査してもらった方がいいって」

「うん、そうする……石川さんは？」

「先に研究所に戻ってもらったわ」

寸暇を惜しまねばならないくらい研究が忙しいということだろう。美咲も、石川も、こんなところへ来ている場合ではなかったのかもしれない。滯は心苦しさを感じつつも、薄く微笑む。

「ありがとうございます、って伝えてください」

「ええ、必ず伝えておくわ」

美咲はニコッと笑顔で答えた。普段は凜とした姿を見せている彼女の、こういう無邪気な表情は、娘の滯から見ても可愛らしいと思う。小柄で女性らしくて、愛くるしくて、それでいて頭も良くて——どれをとっても自分には足りないものばかりだ。

「寝ていなくて大丈夫か？」

ぼんやり考えごとをしていると、不意に悠人が割り込んできた。覗き込まれた顔の近さに動揺しつつも、漣はこくりと頷く。無理をしているわけではない。殴られた後頭部に若干の痛みは残っているが、それ以外はもう何ともなかった。

しかし、美咲は腰に手を当て、まるで子供のように口をとがらせる。

「悠人さん、少しは反省してます？ 怪盗ファントムをやるなどとは言わないけれど、あまり危険なことはさせないでほしいわ。決めているのがお父さまだってことはわかってる……でも、せめてもうちょっと気をつけてあげてね」

「肝に銘じておきます」

悠人は体を起こしながら少し笑ってそう答えると、含みのある視線を漣に流す。

「僕だって、未来の妻は大事にしたいからね」

「ちょっと！ なに勝手なこと言って……！！」

漣はカァッと頬を染めてあたふたした。二人きりのときならまだしも、今は事情を知らない母親も一緒なのに、絶対に変に思われてしまう。いったいどう説明すれば、と頭を抱えなくなったのだが――。

「あら、悠人さんとの結婚、もう決めたんじゃないの？」

当然のような物言いで尋ねてきた。あらかじめ悠人に聞かされていたのだろうか。この様子からすると反対というわけではなさそうだ。以前にも勧めるようなことを言っていたので、特に驚きはしないが、次第に外堀を埋められているようで怖くなる。

「まだ、決めたわけじゃ……」

「今の彼氏、刑事ですってね」

「うん……」

そこまで知っていたことにはさすがに驚いた。しかし、どう反応すればいいのかわからず、何ともいえない複雑な表情でうつむき、縋るように白いシーツをぎゅっと握りしめる。

「すべてを捨てる覚悟があるなら、貫き通しなさい」

「……えっ？」

漣は怪訝に聞き返し、顔を上げた。

「本当に彼のことが好きなら、本当に彼と結婚したいなら、諦める前にまだ出来ることがあるはずよ。でも、困難な道を進む覚悟がないのなら、悠人さんと結婚した方が幸せになれると思うわ。最終的に決断を下すのは、漣、あなた自身だということを覚えておきなさい」

美咲は漣を見据えて言った。

確かに理想論としては理解できる。しかし、いくら好きな人と一緒になるためとはいえ、他のすべてを捨てるなど、現実的に不可能ではないだろうか。結局のところ選択肢は一つしかない気がする。それとも、そう思うのは甘えでしかないのだろうか――。

「美咲、あまり煽らないでくれるか」

悠人が苦笑しながらそう言うと、美咲は悪戯っぽく笑って振り返る。

「あら、自信がないの？」

「漣を苦しめたくないだけだよ」

「相変わらず狡い大人なのね」

意味ありげな眼差しで見つめられ、悠人は誤魔化すように顔をそむけて話題を変える。

「そうだ、濡も元気になったことだし、剛三さんのところへ行こうか」

「うん」

濡は頷き、急いで胸元のボタンを留める。プリーツスカートのフックも外されていたので、布団から出る前にそれも留めた。剛三にも篤史にも心配を掛けただろうし、一刻も早く元気になったことを知らせたいと思う。

「美咲もだよ」

「えっ？」

ハンドバッグを手にとって帰り支度を始めていた美咲は、きょとんとして悠人に振り向き、「私も？」と胸に手を当てて不思議そうに瞬きをする。しかし、悠人は何も答えず、ただニコニコと笑みを浮かべて美咲の肩に手を回した。

「あら、これもしかしてお母さま？」

「だから美咲を呼んだんだよ」

執務机に置かれた瑞穂の肖像画を目にすると、美咲はパツと顔を輝かせ、少女のように愛らしく声を弾ませた。その様子を、悠人が後ろからあたたかい眼差しで見守っている。

「私にも見せて」

隣から、濡はひょっこりと顔を出した。描かれた瑞穂を見ようと思ったのだが、肖像画そのものよりも、つい隅の焼け焦げに目がいってしまう。内藤にライターで炙られた部分だ。いきなりだったので防ぎようがなかったが、それでも傷物にした責任を感じて胸が痛む。

「やっぱり、少し焦げちゃってるね」

「これくらいで済んで良かったわい」

剛三は椅子の背もたれに身を預けながら、溜息まじりに答えた。

「絵の価値がわからぬ奴は本当にやっかいだな。そもそも保管方が悪かったようで、埃や汚れがこびりつき、かなり傷もついている。少し修復をした方がいいだろう。そのあとは、額に入れてここに飾っておくつもりだ」

濡は頷いた。

そして、あらためて肖像画に目を落とす。絵の中の祖母は、今の濡よりも少し若いくらいだろうか。まだあどけなさが残っていたが、表情は凜としており、可愛らしさの中にも気品漂う美しさがあった。

「瑞穂おばあさま、きれい」

「うむ。本当に美しくて、慎ましやかで、気品のある娘であった。何故これが受け継がれなかったのか……」

剛三は気難しそうに眉を寄せてそう言うと、腕を組みながら、じとりと観察するような視線を濡に流す。それだけで、彼の考えていることは十分すぎるほど理解できた。

「どうせ私には気品なんてないですっ」

漣はやけっぱちに口をとがらせる。と、背後から抑えた笑い声が聞こえてきた。

「漣は現代的なだけだよ」

「それ、フォローになってます？」

思いきり眉をしかめて振り返り、悠人を睨む。だが、彼はくすくすと笑い続けるだけで、言い訳しようとしなかった。その態度に、漣はますますムツとして頬を膨らませる。

「そんな顔をするでない」

宥めるような剛三の声が耳に入った。一瞬、自分に向けられた言葉かと思ったが、どうもそうではないらしい。剛三はどっしりと椅子に腰を下ろしたまま、僅かに眉をひそめ、申し訳なさを滲ませながら美咲の方を見つめている。

「何もおまえが責任を感じることはないのだからな」

「誤解ですわ。少し他のことを考えていただけです」

「なら良いが……」

にっこりと応じる美咲とは対照的に、剛三はどこか釈然としない様子だった。

「もしかして、何か困ったことでもあるのか？」

「誰だって多少の困難は抱えているでしょう？」

「……美咲、もっと私たちに頼っても良いのだぞ」

もどかしげに目を細め、奥歯に物の挟まったような物言いをする。おそらく研究所の不正資金提供という事実を受けての言葉だろう。もっとも、美咲が関与しているかわからないし、そうであったとしても、この曖昧な言い方では伝わっていないかもしれない。だが、公安に固く口止めされている以上、具体的に言及することは出来ないのだ。

「お父さまには十分に良くしていただきました」

美咲はわかっているのかいないのか、感情のこもった温かみのある声でそう答える。

剛三の表情はあっという間に険しいものになった。

「私はおまえの父親だ。遠慮はいらん」

「では、ひとつだけお願いいたします」

「うむ」

そう頷き、執務机の上で両手を組み合わせ、緊張ぎみに次の言葉を待った。

美咲はくすっと可愛らしく笑ってから口を開く。

「漣と遥に、あまり危険なことをさせないでくださいね」

「いや、そうではなくおまえ自身のことだな……」

「私は二人の母親です」

困惑を露わにする剛三を遮り、美咲は微笑を湛えたまま、柔らかくも毅然と言い放った。

「……今後は気をつけよう」

剛三は観念したように溜息まじりに答える。もっとも、気をつけると言っているだけなので、実質的には何も変わらないかもしれない。しかし、あの剛三が押し切られたという事実には、大きな驚きを感じずにはいられなかった。いつもの強引な態度はどこへやら、美咲には振り回されっぱなしである。

おじいさまにとっては、やっぱり娘ってことなのかな——。

二人にはまったく血の繋がりがなく、多くの時間を共有してきたとも思えないが、それでも形だけの親子ではなかった。その絆のようなものを実感できたことが、滯にとっては無性に嬉しく、そして、少し羨ましかった。

## 17. アリバイ

「ほっ、本当に大丈夫なんですか？」

『セカンド、僕の指示を信じるんだ』

怪盗ファントムの衣装に身をまとった滯は、風呂敷に包んだ絵画を抱えて、比較的人通りの少ない道路を疾走していた。足を止めることなく後ろをちらりと確かめる。いまだに刑事一人と警官二人が追ってきていた。

失敗したわけではない。これも計画のうちである。

いつもはヘリコプターや下水道、あるいは群衆に紛れるなどの手段で引き上げていたのだが、マンネリは良くないという剛三の一存で、あえて警察に追われつつ街中を逃走する羽目になったのだ。危険なことをさせないでと美咲が頼んだ矢先にこれである。もっとも、悠人がいつでも助けられるよう待機しているため、危険に晒される心配はないという話ではあるが――。

住宅街に入った滯に、新たな指示が飛ぶ。

『セカンド、正面の道には警官が二人待ち構えている。右側の住宅の間を突っ切って、向こうの道路へ抜けるんだ。男子高校生が一人歩いているから注意して』

「了解」

そう答えて、住宅を仕切るブロック塀に飛び乗り、軽やかにその上を駆けていく。両側の住人のうち一人に気付かれたが、窓から顔を出しただけで追ってはこない。たとえすぐに追いかけてきたとしても、並みの人間では簡単に追いつけはしないだろう。

視界が開けて素早くあたりを見渡すと、十数メートル先に、街灯にうっすらと照らされた男子高校生らしき姿が見えた。悠人が言及した人物だと思われる。この距離ならば追ってきても逃げ切れると確信し、滯は躊躇なく塀を蹴り、くたびれたアスファルトにすたりと着地した。

「……滯？」

よく知った声。

滯はドキリとして反射的に振り向いた。薄暗いうえに距離もあるため、顔まではよく見えなかったが、おそらく間違いないだろう。その男子高校生は、滯の同級生で幼なじみの富田拓哉だ。怪盗ファントムの衣装を身にまとい、仮面をつけたこの姿を見て、彼は「滯」と呼びかけた――その意味するところを理解し、滯の背筋は一瞬で凍りつく。

『セカンド、どうした？』

イヤホンからの声にも反応できない。しかし――。

「見つけたぞっ、怪盗ファントム！」

富田の背後から追いかけてきた警官の、若干息切れしたその声を耳にして、ようやくハッと我にかえった。すぐさま長い黒髪をなびかせて地面を蹴り、少しだけ騒々しくなった住宅街を疾走していく。呆然と立ち尽くした富田だけをその場に残して――。

「富田にバレたかもしれない?!」

「シーッ！ 声が大きいよ!!」

翌朝、きのうのことを遥に相談すると、彼は大きく目を見張って聞き返した。慌てて、滯は立てた人差し指を唇に当てて見せる。悠人にも、篤史にも、もちろん剛三にも知られたくない。怖々とあたりの廊下を見まわしたが、誰の姿もなく、とりあえずはほっと胸を撫で下ろした。

「どうして反省会の際に言わなかったのさ」

「だって……そう決まったわけじゃないし……」

滯の言い訳に、遥は呆れかえって溜息をつく、いかにも面倒くさそうに口を開く。

「どういう状況だったの？」

「うん……」

滯は目を伏せて頷いた。

「住宅街を走って逃げていたときにね、たまたま歩いてた富田の前に飛び降りたんだけど、いきなり『滯?』って名前を呼ばれて……しかも、無視して逃げればよかったのに、っていうっかり振り返っちゃって……」

「仮面はつけてたんだよね？」

「うん」

「何か声を出したりしたの？」

「ううん」

「どこか掴まれたりはした？」

「触れられてもないよ」

矢継ぎ早の質問に、滯は一つずつ端的に答えを返していった。それを聞いた遥は、スクール鞄を肩に掛け直しながら、拍子抜け

したかのように小さく息をつく。

「それならまだバレたってわけじゃないよ。証拠は何もないんだからさ、富田が疑ってたとしても、濡さえ認めなければ大丈夫。知らない、わからない、何のこと？ って、何を訊かれてもしらを切り通してよね」

「そっか……うん、わかった」

濡は的確な助言を聞いてようやく安堵した。遥の前に回り込んでニコッと微笑むと、玄関の扉を開け、長い黒髪をなびかせながら外に出る。先ほどまでの重さが嘘のように足取りが軽い。のんびり出てくる遥を「早くっ！」と急かし、二人並んで学校へと向かい始めた。

「そっか、今日は富田と日直だったんだ……」

教室に入った濡は、黒板に書かれた日直二人の名前を見て、その場に呆然と立ち尽くした。よりによって昨日の今日で富田と日直など、ついていないとしか言いようがない。

「なんだよ、その微妙に嫌そうな言い方は」

「ひゃっ！」

いきなり耳元で本人の声がして、口から心臓が飛び出しそうになった。少し身を引きながら振り返ると、すぐそばに富田が立っていた。濡のあからさまな過剰反応のせい、きのうの出来事のせい、何ともいえない複雑な表情を浮かべている。

「朝っぱらからセクハラとは、さっすが富田だねえ」

「やってねえし！」

綾乃がクラス中に聞こえる声でからかい、富田は慌てふためきながら言い返す。この二人の言い合いは日常茶飯事であるが、今日の彼はあまり乗り気でないようだ。ふう、と疲れたように小さく溜息をつく、物言いたげな目で濡に向き直る。

「今日はよろしくな」

「う、うん……」

「じゃ、またあとで」

彼はぶっきらぼうに自席に腰を下ろし、頬杖をついて窓の外に目を向けた。きのうのことには触れていないものの、それが気になっていることは明白である。知らないふりをしてくれるのか、あとで言うつもりなのか——濡にはどちらかわからないだけに、二人きりになる機会の増えるこの日直が怖かった。

放課後になっても、富田は切り出してこなかった。

すっかり人のいなくなった教室で、濡は黒板消しをクリーナーにかけ、富田は自席で日誌を書いている。これまでも二人きりになる機会は何度かあったが、富田は怪盗ファントムの話題に触れることすらしなかった。もしかしたら勘違いだと思ってくれたのかな、といささか都合の良い解釈をしながら、濡はクリーナーのスイッチを切った。ウウーン……と吸い込まれるようにモーター音が消滅し、教室はしんと静まりかえる。

「濡、おまえさ……きのうの夜、何してた？」

来た——濡の心臓はドキンと大きく跳ね上がる。

「いきなり、何……？」

声がうわづまっているのが自分でも認識できた。もっと落ち着かなければ、普段どおりに話さなければ、とわかってはいるのだが、冷静になろうとすればするほど動揺が大きくなっていく。

富田はシャープペンシルを置いて、そっと日誌を閉じた。

「今日、何か用があるか？」

「え……別にないけど……」

聞かれるまま正直にそう答えたあとで、濡はハツとして息を呑んだ。おそらく富田はファントムの件を問いただすつもりなのだ。今さら用があるなどと言いつつすることもできず、顔からすうっと血の気が引いていく。

「じゃあ、これが終わったらどこか……」

ガラガラガラ——。

富田の発言を遮るかのように、派手な音を立てて後ろの引き戸が開かれた。そこに立っていたのは帰ったはずの遥である。スタスタと教室に進み入ってくると、富田の後ろの自席に鞆を投げ置き、乱暴に椅子を引いて腰を下ろした。

「忘れ物か？」

「まあね」

振り返って尋ねた富田にそう答えながら、取り出したノート数冊を鞆に放り込んだ。そして、ふと思いついたように顔を上げて言う。

「富田、せっかくだから付き合ってよ」

「え？ 付き合うって、どこへだ……？」

「久しぶりにパフェが食べたいんだけど」

「ああ」

遥の答えを聞いて、富田は安堵したように吐息混じりの声を漏らした。二人はこれまで何度も一緒にパフェを食べに行っている。富田も意外と甘いものが好きで、遥に誘われると断りはしなかった。けれど、今日の彼には他に重要な目的がある――。

「悪いけど、今日は……」

「私のことなら気にしないで！」

滯は黒板消しを持ったまま声を張り上げると、富田に駆け寄り、机に置かれた日誌を取って胸に抱えた。

「あとは私がやっておくから、遥とパフェしてきてよ」

滯としては、何がなんでも行ってもらわなければ困る。富田の肩を押して強引に立ち上がらせ、返事を聞こうともせずにつこりと手を振った。不自然だという自覚はあるが、そんなことに構ってられない。彼は困惑ぎみに眉をひそめたものの、遥に手を引かれると、仕方なくといった様子で教室を出て行った。

二人は学校近くのフルーツパーラーに入った。

品のある落ち着いた雰囲気の内装で、パフェも美味しく、遥も富田も気に入っている店である。遥は迷うことなくフルーツパフェを、富田も少し考えて同じものを注文した。ウェイトレスが水を置いて戻っていくと、それきりどちらも口を開こうとしなかった。

やがて、フルーツパフェが二つ運ばれてきた。

富田はほっとしたように小さく息をつくとき、さっそく生クリームをすくって食べ始めた。同様に、遥も黙々とパフェを口に運んでいく。そんな彼らに、まわりの女性たちはチラチラと好奇の目を向けるが、二人ともそういう視線にはもう慣れっこだった。

「滯を呼び出して何するつもりだったの？」

パフェの残りが少なくなってきたところで、遥がそう口を切った。

富田はスプーンを持ち上げたまま動きを止める。

「まさか、おまえ……それを阻止するために俺を誘ったのか？」

「富田が滯だけを呼び出すなんて、今までなかったと思うけど」

その追及に、彼はきまり悪そうに目を逸らしたが、やがて表情を硬くこわばらせて口を開く。

「俺さ……、きのう間近で怪盗ファントムを見たんだ」

「それで？」

遥は冷ややかに先を促す。

富田は僅かに顎を引き、ごくりと唾を呑んだ。

「あれは、滯だ」

「ファントムが？」

「ああ……」

そう言うと、スプーンをそっとグラスの中に置き、白いテーブルの上で両手を重ねた。溢れそうな感情を押しとどめるかのように、その指先にはグツと力がこもっている。しかし、遥の飄々とした態度は少しも崩れなかった。

「滯ならずと家にいたけど」

「……それ本当か？」

「僕の部屋でグダグダ宿題やってたよ」

富田は眉を寄せると、ゆっくりと顔を上げて遥を見据える。

「てか、おまえも仲間なんじゃないのか？もしかしたら、おまえの家族もひっくるめてみんな……ファントムってヘリとかよく使ってるけど、おまえんなら簡単に調達できるだろうし……」

「何？富田はウチを犯罪一家だって言いたいなの？」

「……すまん、言い過ぎた」

じとりと非難の視線を返した遥に、富田は両手を合わせて許しを請う。由緒ある橘財閥に対して、また友人の家族に対して、失礼な物言いだったことは素直に認めたが、それでも納得はしていないようだった。

「でもなあ、あれはやっぱり滯に間違いないと思うぜ。俺、ずっと昔から滯のことを見てきたし、顔は見えなくても何となくわかるんだよ。それに、滯って呼びかけたら振り向いたし……」

「声がしたから振り返っただけじゃない？」

「それは……そうかもしれないけど……」

遥は残り少なくなったパフェを、グラスの底からすくった。

「もし滯がファントムだったらどうするつもり？」

「そんなのわからねえよ……けど、とりあえず本当のことが知りたいんだ。何か理由があるなら聞かせてほしい。俺は警察に突き

出そうなんて思ってないぜ？でも、こんなこと続けてたらいつか捕まるかもしれないし、できれば早いうちに説得してやめさせたい。友達だから言えることってあるだろ？」

「そうだね」

静かにそう答えたあと、畳みかけるように続ける。

「けど、滯はファントムじゃないよ。確かに髪型や背格好が似てるのは認めるけど、滯にはあんなことをするだけの度胸も頭脳もない。富田はさ、滯のことばかり考えてるから、そう見えたんじゃない？」

「うっ……」

富田は頬を赤らめてのけぞった。それでも、遥は容赦なく問い詰めていく。

「隠す気ないよね？気付いてないの滯本人くらいだよ」

「……………」

富田はもの言いたげに半開きの唇を動かすが、そこから言葉が紡がれることはなかった。諦めたように口を結んでうつむき、テーブルに置いた手をギュッと握りしめる。その顔は、今にも湯気が立ち上りそうなくらい真っ赤になっていた。

遥は小さく溜息をついた。

「ねえ、滯のどこがいいわけ？お調子者のバカだよ？」

「バカって……」

富田は困惑ぎみにそう言い、顔を上げる。

「お調子者はともかくバカってのはないだろう。そりゃおまえと比べたらそうかもしれないけど、だいたいいつも校内で5位以内だし、全国模試でも名前が載ってたりするし、俺からしたら十分すぎるくらい……」

「勉強の話じゃなくて、なんにも考えずに生きてるってこと」

遥はぶっきらぼうにそう言い放つと、最後のひとすくいを口に運び、スプーンをグラスの中に投げ置いた。細い銀色の持ち手が縁に沿ってまわり、カラリと乾いた音を立てる。

「滯は考えろって言われないと考えないんだよ」

「確かに、考えなしなところはあるけどな」

それには富田も同意せざるをえなかった。もっとも、そういう能天気なところも気に入っているのだが、今はとても言えるような雰囲気ではない。口をつぐんだ富田を、遥は頬杖をつきながら醒めた目でじっと見つめる。

「やっぱり顔なの？」

「ん……まあ、それもないわけじゃないが……」

富田はどっちつかずの曖昧な答えを返し、コップに手を伸ばした。氷が融けてぬるくなった水を口に流し込む。そのとき――。

「じゃあ、僕でもいいんだ」

何気ない口調でまさかの爆弾発言が落とされた。富田は目を白黒させ、コップを机に戻しながらゲホゲホとむせこんだ。そして、涙目のままバンツと両手をついて立ち上がると、嘔みつかんばかりの勢いで遥に詰め寄る。

「おまえいきなりなに言い出すんだ！」

「ダメなの？」

「当たり前だっ！！」

「どうして？」

遥はちょこんと可愛らしく小首を傾げて尋ねた。大きな漆黒の瞳がまっすぐ富田を捉えている。その仕草も表情も、まるで滯を真似たかのようにそっくりだった。邪気があるのかないのかかわらず、富田は調子を狂わされる。

「どうしてって……おまえ男だろ……」

「男じゃいけない？」

「いけないとかじゃなくてだな……ん？」

言い返しているうちに混乱してきたらしく、首を捻りながら、浮かした腰をゆっくりと椅子に下ろした。

それでも、遥は追及の手を緩めようとしなない。

「僕のこと嫌いなの？」

「嫌いじゃねえよ」

「じゃあ、好きなんだ？」

「……友達としてだぞ？」

富田は微妙な面持ちで釘を刺す。これまでずっと友達づきあいをしてきた遥に、いきなりこんなことを言われては、当惑や不安を覚えるのも致し方ないだろう。その遥の方はといえば、思考の読めない瞳で富田を見つめ返している。

「滯のことはもう諦めた方がいいよ。友達としての僕からの忠告」

「彼氏がいるってのはわかってるよ……けど、そのうち別れるかもしれねえし……」

「婚約者がいるんだよ」

何の前置きもなく話が飛躍し、富田はついていけずにきよんとする。

「えっと、彼氏が……？」

「そうじゃなくて、うちのじいさんが勝手に決めた婚約者だよ。濡もこのことは知ってる。相手は長年じいさんの秘書をやってて、僕たちの保護者代理でもある人なんだけど」

「ああ、あの人か……」

富田も学校に来た悠人を何度か目撃しており、挨拶したこともあるため、遥の説明だけですぐに彼だと思い至った。顎に手を添え、頭を巡らせながら斜め上に視線を向ける。

「じゃあ、彼氏はどうなるんだ？」

「もちろん別れるしかないよね」

簡単にそう言う遥とは対照的に、富田はやるせなさを滲ませた。

「富田が同情してもどうにもならないよ」

「ああ……」

富田には橋家の事情に口を挟む権利はないし、挟んだところで聞き入れられるはずもない。それが現実である。いっそう神妙な顔つきになると、視線を上げ、そろりと遠慮がちに切り出した。

「もしかして、おまえにもいるのか？ 決められた婚約者とか……」

「今のところは聞いてないけど、そういうこともあるかもね」

遥はまるで他人事のように軽く受け流すと、空になったパフェグラスを横にどけ、テーブルに腕を置いて大きく身を乗り出した。

「だから、僕にしといたら？」

「いや、何でそうなるんだよ」

富田は脱力して額を押さえた。けれど、遥は真顔のまま言い募る。

「男ならそもそも結婚だとか望みを持たなくて済むよね」

「まあ、それは……一理あるような、ないような……」

「はっきりしなよ。いったい僕の何がいけないわけ？」

じれったそうに少しきつく問い詰めると、テーブルに手をつき、腰を上げてズイッと顔を突きつける。その近さに、富田はピクリとしてのけぞった。顔から首までみるみるうちに紅潮していく。

「いっ、いけないとかじゃなくてだな……」

「じゃなくて、何？」

「えっ、な……なんだっけ……えっと……」

富田はソファの背もたれに張り付いたまま、しどろもどろになった。

「ねえ、富田、キスしたことある？」

「キ……？！」

遥はさらに身を乗り出して、額がくっつきそうなほど近づくと、艶めいた唇に薄く笑みをのせた。ふいに二人の息が触れ合う。富田の脳内はその一瞬で限界値を振り切り、瞬きすらできず、ただ体を硬直させたままゴクリと唾を呑んだ。

「お、俺……」

「じっくり考えればいいよ。何日でも、何ヶ月でもね」

遥はそっと目を細めて囁くように言うと、くすっと小悪魔のような笑みを浮かべる。濡と見まがうほどそっくりな顔で、濡のしない妖艶な表情を見せられ、富田は壊れそうなほどの動悸を感じていた。

「おかえり！」

濡はフレアのミニスカートをひらめかせて玄関に駆け下りると、ようやく帰ってきた遥を笑顔で出迎えた。半分ほど袖に隠れた手を、ざっくりと編まれた白いセーターの胸元に置いて言う。

「さっきは助けてくれてありがとう」

「とても見ていられなかったからね」

遥は一瞥しただけで、足を止めることなくさっさと階段を上っていく。しかし、濡は気にせず軽やかな足取りで追いかけると、後ろで手を組み、さらりと黒髪を揺らしながら覗き込んだ。

「富田、何か言ってた？」

「疑ってた。ていうか、確信してた」

おそらくそうだろうと予想していたので、驚きはしないが、やはり不安が募るのは止められない。それでも落ち着いていられるのは、遥という心強い味方がいるからである。

「疑いは晴らせたの？」

「その時間は僕の部屋にいたって言うておいたけど、完全には信用してないみたいだね。僕も他の家族もみんな共犯じゃないかって疑ってるし。ま、実際そのとおりなんだけど」

「そっか……」

力のない相槌が零れ落ちた。しかし遥は淡々と続ける。

「今は他のことで頭がいっぱいだろうから、次に怪盗ファントムが話題になるまでは大丈夫だと思う。でも、あくまで応急処置にすぎないから、できるだけ早く何か手を打たないと」

「他のこと？ 応急処置??」

何を言っているのかさっぱりわからず、濡はきよとんと小首を傾げた。

遥は足を止め、ゆっくりと思わせぶりの視線を流す。

「富田は単純だからね」

その声は、彼にしてはめずらしく弾んでいた。何か良からぬ悪だくみをしているのではないかと心配になるが、自分ではそれを白状させることさえできないのだと、濡にはよくわかっていた。

その日の夜――。

怪盗ファントムの次の案件が、剛三から告げられた。

標的となる絵画の写真を見せられつつ、それにまつわる話と、奪わねばならない理由を聞かされる。今回も、本来の持ち主に返却することが最終目的だ。濡にも異存はなく、時折小さく頷きながら真面目に聞いている。

舞台は、橋の屋敷からほど近い美術館だった。

悠人が全体の計画と各々の役割を説明していく。今回は取り立てて難しくないということだが、何重にも代替手段が用意されているあたり、篤史にはない彼の慎重さや緻密さが窺える。経験の差もあるのかもしれない。

一通りの説明が終わると、遥が手を上げて立ち上がった。

「どうした、遥」

「前回、濡が逃走中に同級生と鉢合わせたみたいで、今そいつに思いっきり正体を疑われてて」

予想もしなかった唐突な暴露に、濡は啞然とした。出来ればみんなには内緒しておきたかったことであり、何の相談もなく話した遥を恨めしく思うものの、さすがにここまできて嘘をつくわけにはいかない。

「本当か？」

「うん……」

悠人に尋ねられると、小さく縮こまって頷いた。

すぐに遥は補足する。

「仮面のおかげで顔は見られてないし、他に決定的な証拠もないから、しらを切り通せばすむ話なんだけど、濡だからそれも難しいみたいで」

「だろうな……」

悠人は溜息まじりに同意する。剛三も、篤史も、まったくだと言わんばかりに何度も大きく頷いていた。

「だから、次で疑惑を晴らしたい」

「何か策でもあるのか？」

「気乗りはしないんだけど……」

遥はあからさまに嫌そうにそう前置きすると、彼の考える作戦を説明し始めた。

数日後――。

「富田ー！ こっちこっち！！」

綾乃はつま先立ちで背伸びをしながら、大きく手を振り、人混みの向こうに見える富田を呼んだ。一緒にいた濡と真子も小さく手を上げる。富田は黒山の人だかりを縫いながら、なんとか三人のもとに辿り着いた。

「はー……結構、野次馬って来るもんだな」

溜息まじりにそう言いながら、ぐったりして腰に手を当てる。実際、あたりはまるでお祭りのように人が溢れかえっていた。濡たちの学校から近いこともあり、他にも見知った顔がちらほら目につく。日が沈んでからは冷え込みがいつそう厳しくなり、吐く息も白いが、美術館の周辺だけは沸き立つような熱気に包まれていた。

「ていうか、綾乃、おまえ怪盗ファントム嫌いじゃなかったのかよ」

「せっかく近くに来るってんだから、とりあえず見とかないとね」

綾乃はニカッと白い歯を見せた。

「まったく、何だかんだいって結局ミーハーなんだよな」

富田は呆れたように白い溜息をつくとき、そろりと濡に目を向けた。

「おまえ、そろそろ行かなくていいのか？」

「え、どこへ？」

あらかじめ心の準備をしていた滯は、過剰な反応をせず、不思議そうに小首を傾げて尋ね返す。そのリアクションに、富田は意表を突かれたようだ。

「あ、いや、別に……」

あたふたと否定しながら言い淀んだが、それでもまだ滯を気にして、ちらちらと不安げな眼差しをよこしている。予告時間の間際になっても一向に動こうとしないので、どうするつもりなのかと心配しているのだろう。なにせ、怪盗ファントムの正体は滯だと思っているのだから――。

ざわざわ、と、急にあたりが騒がしくなった。

「来たよ、ほら！」

綾乃が勢いよく指さした方向を見上げると、夜の帷が降りた空の彼方に、白いハンググライダーがぼんやりと浮かび上がっていた。まだ目を凝らさないとよく見えにくいくらいだ。しかし、次第に大きくなり、やがて操縦者の姿まで認識できるようになる。

間違いなく怪盗ファントムだ。

野次馬の頭上をすうっと音もなく横切り、緩やかに弧を描くと、美術館の正面玄関前にふわりと降り立った。すぐさま襲いかかる警備員を次々とかわし、長い黒髪を舞い上げながら、まるで挑発するかのように鮮やかに翻弄していく。野次馬の集まる門のそばに来て、存分にその姿を見せつけると、あたりの熱気は最高潮に達した。

「わあ、私、実物初めて見た！」

真子は手袋をはめた両手を組み合わせて、目をキラキラ輝かせながら、小さくピョンピョン跳び上がっている。普段おしとやかな彼女とは思えないはしゃぎっぷりだ。隣の綾乃は、微笑ましげに幼なじみの可愛らしい姿を眺め、そして腕を組みながら滯に振り返った。

「やっぱちょっと滯に似てるかもね。滯の方が女の子っぽいけど」

的確な指摘に、滯は苦笑する。

怪盗ファントムとして美術館に降り立ったのは遥である。その間に、滯は富田たちと一緒に怪盗ファントムを見に行き、別人であることを納得してもらおうという計画だ。このために、遥はハンググライダーの操縦まで習得したのだから、滯としてはますます頭が上がらなくなる。

富田は怪盗ファントムと滯を交互に見て唖然としていた。やがてハッと我にかえって門に飛びつき、その向こうにいるファントムを凝視する。そして、ジーンズのポケットから携帯電話を取り出すと、手早くいくつかボタンを押してから耳に当てた。

「あ、遥か？」

『……富田？』

「ああ、おまえ本当に遥なのか？ 今どこにいるんだ？！」

『……うざい』

「ちょっ、おま……切りやがった！！」

富田は目を大きく見開き、握った携帯電話に向かって叫ぶ。

隣で耳をそばだてていた綾乃は、腹を抱えてグラグラと大声で笑い出した。

「いきなりそれじゃウザいわ、確かに」

当然ながら電話に出たのは遥ではない。あらかじめ遥の携帯電話を預かっていた篤史が、富田からの電話を受け、数パターンの録音した音声から適切なものを選んで流したのだ。普段からぶっきらぼうな遥だからこそ成り立つ計画だったのかもしれない。

「風邪ひいたって言ってたし、寝てたのかもしれないよ」

真子が冷静に推論を述べる。風邪がみで微熱が出ているというのが、遥が来なかった表向きの理由なのだ。普段より輪を掛けて無愛想なもの、それが原因と考えるのが普通だろう。しかし、富田の不満は収まらない。

「だからって、このまえあれだけ付き合えとか迫ってきたくせに、今日はどうざいから拒否るなんてありえねーだろ！ そりゃまだ返事はしてなかったけど……俺は……」

「付き合え？ 迫る？」

滯がきょとんとして聞き返すと、彼はギクリと顔を引きつらせた。

「あ、いや、それはその……」

急にたじたじになり、言い訳もできないまま目を泳がせる。頬もほんのりと薄紅色に染まっていた。

綾乃は両手を腰に当てると、思いきり胡散臭そうに下から覗き込む。

「あんたたち、いつのまにそういう関係になってたわけ？」

「誤解だ！ 遥が一方向的に迫ってきただけで、俺は別に……」

富田は両手をふるふると振り、大慌てで弁明する。

「もしかして、最近、様子がおかしかったのってそのせい？」

「……俺、おかしかったか？」

「うん。ぼーっとしながら遥くんを見てることが多かったよ」

真子が指摘すると、彼の顔はまるで茹で蛸のように真っ赤になった。富田は単純だからね——先日の遥の言葉と合わせて考えてみると、富田に迫ったというのは、怪盗ファントムから気を逸らせる策だったのだろう。だが、それは富田の気持ちを弄ぶ行為であり、滞としてはさすがに少し申し訳なく思う。

「あのね……多分、遥はからかっただけだと思うよ」

「やっぱそうだよなあ」

富田は溜息をつきながら、まるで夜風で火照りを冷ますかのように、顔を上げてぼんやりと遠くの空を見やる。そんな彼にも、綾乃は容赦なく横向きに間合いを詰め、彼の脇腹を肘でつついてニヤニヤとからかう。

「なにになに？もしかしてマジで落とされちゃった？」

「落とされたとかじゃねえし！」

富田はむきになってそう言い返したが、直後、気力を喪失したように吐息を落とした。綾乃から逃げるように視線を逸らすと、前髪を掻き上げつつ、反対側にいた滞を横目でちらりと一瞥する。

「悪かった」

「えっ？」

「いや、なんでもない」

わあっ、とまわりで再び大きな歓声が上がった。

バリバリバリ……と大きな音を立てて近づいてきたヘリコプター。それを待っていたかのように、絵画を抱えたファントムが美術館の屋上に姿を現し、垂らされた縄ばしごに飛び乗って颯爽と去っていく。どうやら本来の目的の方も無事に達成したようだ。滞はほっと安堵すると、すぐ隣にいる富田の横顔をそっと窺った。

こっちこそ、ごめんね——。

伝えられない言葉を心の中でそっと呟く。少し、胸が締め付けられるように疼いた。

## 18. 願いごと

---

「師匠、お待たせしました...って、あれ？」

美容室で着付けとヘアメイクをしてもらった漣は、悠人を待たせていた喫茶店に入り、歩幅を小さく刻みながら奥の席にいる彼のもとへ駆けていく。しかし、そこにいたのは彼一人ではなかった。後ろ向きなので顔までは見えないが、対面には、彼とよく似た体格の男性が座っている。

「漣、あけましておめでとう」

「お父さま?!」

にこやかに振り返ったその男性は、漣の父親であり、悠人の親友でもある大地だった。正月だというのに、濃紺色のトラッドなビジネススーツを身につけ、ネクタイまできっちりと崩さず締めている。仕事帰りなのだろうか。それでも、まったくとっていいほど疲れた顔を見せていない。

「その振袖も髪型もよく似合ってるよ」

「ほんとですか？」

漣は大きく声を弾ませてそう言うと、腕を少し広げ、その場で軽やかにまわって見せる。鮮やかな赤地に色とりどりの花が咲き誇る、上品ながらも人目を惹きつけるデザインで、漣自身もとても気に入っていた。振袖に合わせて、髪も可愛らしく華やかに結い上げられている。

「師匠に見立ててもらったんです」

「へえ、結構いいセンスしてるね」

大地はソファの背もたれに腕をかけ、意外そうに言う。彼は知らなかったようだが、漣と遙の衣装は悠人が見立てていることが多い。あまりファッションに詳しくないと本人は言っているが、それでも的確に似合うものを選んでくれるあたり、確かにいいセンスを生まれ持ったのだろう。

「そういえば、お父さまはどうしてここに？」

「おまえたちと正月を過ごすつもりで家に帰ったんだけど、漣と悠人は初詣に出掛けたっていうから、合流させてもらおうと思って来たんだよ。邪魔だったかな？」

「そんなことはないです」

漣は屈託なくニコッと笑いかける。普段あまり一緒に過ごすことの出来ない父親が会いに来てくれて、そのうえ初詣にも一緒に行ってくれるというのだから、父を慕う娘としては嬉しくないわけがない。しかし、悠人の方は不快感を露わにして大地の横顔を睨みつけていた。

「漣、行くぞ」

感情を押し込めたような声でそう言うと、コートと伝票を持って立ち上がり、ストールをまとった漣の肩を抱いて歩き出す。大地も慌ててコートを引っ掴み、軽い駆け足で追いかけてきた。

「おいおい、そう急ぐこともないだろう」

どうしたんだと言わんばかりのその声に、悠人は足を止め、漣の肩に手を置いたまま振り返った。そして、持っていた伝票を大地の胸元に押しつけ、怨念のこもった仄暗い眼差しを向けて言う。

「馬に蹴られて死んでしまえ」

まるで呪詛だった。それでも大地はあまり気にしていないらしく、ニコニコと伝票を受け取り、心底迷惑そうにしている悠人の肩に気安く手をのせた。そんな二人の様子を横目で見、滯はクスッと小さく笑みを零した。

空は厚い灰色の雲に覆われ、風は斬りつけるように冷たい。

いつ雪が降り出してもおかしくない天気である。

滯は喫茶店の軒先で空を見上げ、ほわりと白い息を吐いた。

車通りのほとんどない細い道路を並んで歩くが、着物の滯を気遣い、両側の二人はゆっくりと足を進めてくれていた。さらに、悠人は包み込むようにしっかりと滯の手を握っている。転倒を心配してくれる気持ちはありがたいが、子供扱いされているようで少し複雑な心境である。反対側では、大地がニコニコと人なつこい笑みを浮かべていた。

「悠人も滯も元気そうで良かったよ。活躍はいつも新聞や雑誌でチェックしているけどね」

「あはは……」

滯は曖昧に笑って受け流した。往来ではっきりと言うわけにはいかないので言葉を濁しているようだが、活躍というのは怪盗ファントムの起こしている事件のことだろう。犯罪行為なだけに、実の親にあっけらかんと言及されると微妙な気持ちになる。もっとも、彼が先代ファントムであることを考えれば、おかしいことではないのかもしれない。

「遥も元気にしてますよ」

「ああ、さっき帰ったときに話をしたよ。一緒に行かないかと誘ったんだが、篤史君とDVD三昧の方が楽しいそうだ。年中行事に興味がないのは相変わらずだな」

大地は軽く笑いながら言う。

滯も何度か誘ったのだが、遥にも篤史にも面倒くさいからと断られた。最近わかったことだが、二人は意外と趣味が合うらしく、休日にはよく篤史の部屋で一緒にDVDを見ているようだ。これまであまり誰とも遊ぼうとしなかった遥が、気の合う仲間を見つけたのであれば、たとえ相手が篤史であっても嬉しく思う。

「そうだ、遥にも渡したんだが……」

大地は思い出したようにコートのポケットを探った。

「はい、お年玉」

「わあ、ありがとうございます！」

滯はパッと顔を輝かせて赤いポチ袋を受け取った。かなり厚みのある感触だ。口は軽く折り曲げてあるだけだったので、はしたないとは思ったものの、親指で押し上げてちらりと中を覗いてみた。入っていたのはおよそ5、6枚、それもすべて一万円札のようである。

「こんなに……あの、いいんですか？」

「ここ二年くらい忘れてたからね。あとは仕事の手当分かな」

大地は冗談めかして言う。

仕事というのは怪盗ファントムのことだろう。冗談であることは百も承知だが、あれだけの時間と労力に対する手当には安すぎる気がして、漣は思わず苦笑を漏らしてしまう。もっとも、そもそも手当をもらう性質のものでないことは理解している。これで利益を得ているわけではなく、気取った言い方をすれば、絵画の尊厳を守るためのボランティアなのだ。

「普段ほったらかしのくせに、何でも金で解決できると思うなよ」

「ったく、いつまで拗ねてるんだよ。デートを邪魔したのは悪かったけどさ」

大人げなくふてくされている悠人に、大地は呆れたように言い返す。漣としてはデートではなくただの初詣のつもりだったが、定義はさておき、邪魔されて拗ねているというのは間違いないだろう。漣と悠人が二人きりで出かけることはそれほど多くないのだ。

「悠人、おまえ本当に漣と結婚するつもりなのか？」

「ああ、そのつもりだ。真剣に将来を考えている」

ふいに大地が口にした問いかけを、悠人は狼狽えもせず真顔で肯定する。二人に挟まれた漣は、どうにもきまりが悪くて小さく身を竦めた。自分の結婚のことを、自分を挟んでだなんて——と思うが、二人は気に掛ける様子もなく話を続ける。

「それなら、ちゃんとそのことを言いに来いよ。美咲にはこっそり報告してたみたいだけど、どうして僕には電話の一本も寄越さないんだ。父親だぞ？ お父さん僕に娘さんをください幸せにします、って挨拶しに来るのが筋だと思うんだがね」

「都合のいいときだけ父親面するな」

悠人は前を向いたままピシャリと突っぱねた。

「ずっと家にも帰らずほったらかしにしておきながら、たまに思いつきで可愛がって、それで父親としての役目を果たしているつもりなのか？ おいしいところだけ持っていこうなんて狡いんだよ。普通だったらとくにグレてもおかしくない家庭環境だぞ」

「二人をいい子に育ててくれたおまえには感謝してるって」

大地はあっけらかんと笑って言う。そんな彼を、悠人は横目でじとりと睨みつけた。

「だったら、漣をもらっても文句はないな」

「もともと反対なんてするつもりはないよ。おまえが漣と結婚して橘を継いでくれれば、僕は自由にやりたいことをやれるし、むしろそうなってくれるとありがたい。橘を継ぐなんて僕には不向きだしね」

大地は穏やかにそう答え、コートポケットに両手を差し込んだ。

しかし、悠人はますますムツとして顔をしかめる。

「そういうことを言ってるんじゃない」

「わかってるって」

大地はニコッと笑って軽い調子で受け流した。そして、悠人に流した目をそっと優しく細める。

「良かったよ、おまえに好きな人ができて」

学生のとき以来、悠人にはずっと恋人がいなかったと聞いている。が、それ以前に、好きな人さえいなかったということだろうか。もしかしたら大地がからかっているだけかも、と思ったが

、悠人はじっと目を伏せたまま反論もしなかった。

「ところで、おまえらどこまでいったんだ？」

大地はふいにそう尋ねると、首を伸ばしてニヤリと濡たちを覗き込む。

「どっ……?!」

「まだキスまでしかしていない」

湯気が出そうなほど真っ赤になる濡の隣で、悠人は顔色一つ変えずにさらりと答えた。

「したんじゃないです！ されたんですっ！！」

濡は顔を火照らせたままこぶしを握りしめて力説する。そこだけは絶対に誤解されたくない部分だった。しかし、伝わったのか伝わっていないのか、大地は感心したような眼差しを悠人に向けて言う。

「へえ、おまえにしては頑張ってるな」

「それ反応がおかしいですからっ！」

濡は感情のまま抗議の声を上げると、今度は反対側の悠人に威勢よく詰め寄る。

「だいたいああいうのはノーカウントじゃないんですか?!」

「そうだね。それならそれでいいんだけど」

悠人は拍子抜けするくらいあっさり引き下がった。思わず動揺する濡に、にっこりと満面の笑みを浮かべて続ける。

「じゃあ、結婚式での誓いのキスを僕たちの初めてにしようか」

「……あの、まだ師匠と結婚するなんて決まってないですけど」

濡は顎を引き、調子づいた悠人を咎めるように上目遣いで睨んだ。それでも彼はニコニコと微笑んでいる。まるで、自分の望みどおりになると確信しているかのようだった。もっとも、このままではいずれそうなることは避けようがない。

大地は濡の様子を窺いながら、不思議そうに尋ねる。

「悠人と結婚するのは嫌なのか？」

「嫌、っていうんじゃないんですけど……」

悠人のことは、物心が付いたころからずっと好きだし尊敬もしている。一緒にいられると嬉しい。きっと濡を大事にしてくれるだろうこともわかっている。けれど——。

「彼氏のことが吹っ切れないんだろう」

「ああ、あの刑事の……」

悠人が口にした端的な理由に、大地は得心したように頷く。誠一のことは話していなかったはずだが、悠人や美咲から聞き及んでいたのだろう。思いきり渋い顔になって腕を組んだ。

「さすがに刑事はまずいよなあ」

「……………」

当然かもしれないが大地もそういう考えなのだ。濡の顔に翳りが落ちる。

「悠人は本当にいい奴だよ。僕が保証する」

「それは、わかってますけど……」

「僕はね、濡にも悠人にも幸せになってほしいんだ」

結い上げた髪を崩さないように、優しくふわりと大きな手が置かれる。彼の気持ちや思いは理解はできるのだが、素直に首肯するわけにはいかず、だからといって闇雲に否定することもできない。口を閉ざしたまま、曖昧に目を伏せるしかなかった。

「だったら邪魔しないでほしいんだがな」

不意に、反対側から棘を含んだ声が聞こえた。声だけでなく表情も冷たく刺々しい。

「それよりもっと美咲のことを大事にしろ」

「言われるまでもなく大事にしてるけど？」

大地はしれっと答えた。悠人の眉間にふいと縦皺が刻まれる。

「何をやってるのか知らんが、美咲を巻き込むな」

おそらく研究所の不正について言っているのだろう。大地主導で行われた可能性が高く、美咲は何も知らないかもしれない、と悠人は当初から主張していたのだ。それが事実かどうかはわからない。ただ――。

「すべて美咲自身の意志だよ」

悠人の意図をわかっているのかいないのか、大地は不敵な笑みを唇にのせ、まるで挑発するかのように言い返した。一瞬、空気が凍りつく。しかし、悠人は冷ややかな一瞥を送っただけで、そのことについてはもう触れようとしなかった。

神社の大きな赤い鳥居をくぐり、石畳で舗装された参道を歩いていく。

さほど大きくなく、有名でもない神社だが、さすがにこの時期だけは多くの初詣客で賑わっていた。家族連れや恋人どうし、友達どうし、あるいは一人など、老若男女さまざまな人たちの姿が窺える。濡と同じように晴れ着で盛装した女性も、多くはないがちらほらと目についた。

すぐに、拝殿の近くまで辿り着いた。

屋根付きの小さな手水舎で手を漱ぎ清める。その身震いするような水の冷たさに、気も引き締まるように感じた。それから拝殿前に出来ていた行列に並んで待ち、順番が来て石段を上ると、三人それぞれが賽銭を入れて両手を合わせる。

いつまでも誠一と一緒にいられますように。お願い、神様――。

濡は、両側の二人を気にしながらも、どこかにいるはずの神様に真剣に訴えた。願いごとは去年と全く同じだが、その根底にある気持ちは別物である。ただ幸せで無邪気だったあのときとは違い、終わりが現実になろうとしている今は、もはや神様に縋るくらいしか為すすべがなかった。

。

「何をお願いしたの？」

「内緒です」

濡は小さく肩をすくめて大地に答えた。刑事はまずいと言われたばかりなのに、臆面もなくこの願いを口にできるほど、図太い神経は持ち合わせていない。幸い、彼はそれ以上しつこく追及することなく、今度は悠人に視線を移して尋ねる。

「おまえは？」

「今年中に滯と結婚できますように」

悠人は涼しい顔で答える。以前は春まで返事を待つと言っていたはずなのに、もはや彼の中では決定事項になっているようだ。そして、それを当然のことのように言い、隠そうともしないその態度に、滯は乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

「奇遇だな。僕もそう願っておいたよ」

「嘘をつけ」

「たくさんある願いごとのひとつだけどね」

大地はコートのポケットに手を差し入れ、白い息を吐きながらそう言うと、大きく広がる空を見上げて薄く微笑んだ。目に掛かるくらい長く伸びた前髪が、冷たい風に吹かれてさらさらと揺れる。その間から覗く瞳には、灰色にくすんだ曇天が映し出されていた。

三人はゆっくりと参道に戻っていく。

両側に二つほど出ている屋台から、焼きそばやフランクフルトの匂いが漂ってきたが、大地も悠人も興味がないのか一目もくれなかった。滯は美味しそうな匂いにひかれたものの、ちらちらと眺めただけで、何も言い出せないまま通り過ぎていく。

「さ、これからどうする？」

大地は少し前屈みになって悠人に尋ねた。しかし、悠人は正面を向いたまま目も向けない。

「大地、おまえはもう帰れ」

「つれないこと言うなよ」

「ホテルのレストランに予約を入れてある。二名でな」

その話は滯も初耳だった。遙や篤史が来ていたらどうするつもりだったのかと訝しく思う。

「電話して三名に増やせないか訊いてみるよ」

大地は腹を立てるでも諦めるでもなく、当たり前のようにそう指示を出した。逆に、悠人の方がムツとして横目で睨みつけている。しかし、身勝手な彼に何を言っても無駄だと悟ったのか、渋々ながら内ポケットから携帯電話を取り出した。

滯は、電話をかけようとする悠人から少し離れ、何となく手持ち無沙汰あたりを見まわす。すると、参道脇にひっそりと佇む、こじんまりとした神社のような建物が目に入った。賽銭箱も置かれている。それを見た瞬間に名案が浮かび、パッと顔を輝かせて大地に振り返る。

「お父さま、私、あそこでお参りしてきますね」

「ん、大事なお願いし忘れちゃった？」

大地がニコニコしながら尋ねてきたが、滯は笑ってごまかし、逸る気持ちのまま小刻みに走り出した。願いごとを忘れていたわけではない。もう一度、たったひとつの願いごとを祈るのだ。滯の意に反する願いごとを悠人と大地の二人にされてしまったので、多数決ではないだろうが、数で負けないようにしておこうと思いついたのである。

その小さな神社には、先客がいた。

古びたジーンズにブルゾンというラフな格好をした長身の男性で、風邪をひいているのか、顔の大半が隠れるくらいの大きな衛生用マスクをしている。手を合わせるでも賽銭を入れるでも

なく、ブルゾンのポケットに両手を突っ込んだまま、じっと何か考えごとをしているように見えた。

濡は邪魔をしないようそろりと隣に立ち、賽銭を用意すべくハンドバッグを開ける。

そのとき、男性が勢いよくバツとこちらに振り向いた。

何なの——？

ビクリとして怪訝に眉をひそめる濡を、彼は大きく目を見開いて凝視する。表情はマスクでよくわからないものの、愕然としている様子だけは見てとれた。何か気に障ることをしたのだろうか、どこかで会ったことがあるだろうか——そんな疑問を抱きながら、ほとんど隠れている彼の顔をチラチラと横目で観察する。

まさか——？！

濡はハッと、飛びかかるようにして男のマスクを剥ぎ取った。その顔は——。

「やっぱりあのときのバイク男！！」

まさかいきなり手が出るとは思わなかったのだろう。男はすっかりマスクを取られてから、慌てて顔半分を片手で覆って後ずさり、悔しそうに奥歯を食いしばった。そして、険しい目つきで素早く左右を覗くと、意を決したように身を翻して駆けていく。

「待って！」

濡はすぐにあとを追ったが、和装でまともに走れるわけもなく、砂利に足を取られて転びそうになる。よろけて地面に落としたハンドバッグから、小銭が濁った音を立ててあたりに散らばった。

「誰かあの人を捕まえて！ 痴漢です！！」

最後の手段とばかりに、有らん限りの声を張り上げて指さすと、逃げかけていた男はギョツとして振り向いた。今日ここで出会ったのは偶然かもしれないが、彼が自分や遥を付けまわしていたのは事実である。わざわざ戻ってきたことさえあるのだ。何が目的なのか、どういう理由なのか、どうしても彼本人から聞き出したかった。

「濡、大丈夫か？！ 何をされた？！」

「あの人を捕まえて！」

ただならぬ声を聞いて駆けつけた悠人に、濡は必死に懇願する。

男は我にかえって再び走り出すが、悠人が凄まじい勢いで追い、逃げ道を迷う男との間はすぐに詰まった。男は足を止めて振り返ると、迫りくる悠人と相對して身構える。悠人も少し手前で身構えた。二人ともジリジリと摺り足で相手の出方を覗っている。

先に均衡を破ったのは悠人だった。

素早く腰を落として足払いをするが、男にはあっさりかわされてしまう。が、あらかじめそれを見越していたようで、すぐさまみぞおちを狙って低いところから拳を繰り出した。しかし、それさえも男には受け止められる。いったん身を引こうとするが、一瞬早く、男の膝蹴りが悠人の側頭部に入った。悠人の体は、受け身を取りながら、湿った土の上に叩きつけられる。

「師匠！」

「平気だ」

滯が駆け寄る間に、悠人は顔をしかめつつ立ち上がった。あたりを見まわしながら土を払う。そのときには、もう男の姿は見えなくなっていた。今から追いかけても捕まえることは難しいだろう。悠人が無事だっただけでも良かったと思わねばならない。

「それより大丈夫なのか？ あの男に何をされた？」

「あ……すみません、痴漢ていうのは嘘なんです……」

騙した罪悪感に、今さらながら滯はしゅんとしてうなだれた。

悠人は不可解な面持ちでそっと眉をひそめる。

「どういうことか説明してくれないか？」

「痴漢って聞いて完全に逆上してたんだぞ」

いつのまにか近くに来ていた大地が、滯を窘めながら、持っていた携帯電話を悠人に手渡した。その携帯電話は悠人のものだ。通話中のそれを投げ出して一目散に駆けつけてくれたのだろう。滯は申し訳なさにもますます身を縮こまらせる。

「あの男、誰だかわからないんだけど、以前から私や遥を付けまわして……だから、何が目的なのか聞きたかったの……」

そう説明すると、悠人は目を大きく見開いた。すぐに眉を寄せて問い詰める。

「どうして早く言ってくれなかったんだ」

「別に、何かされたわけじゃないし……」

「何かあってからでは遅いんだぞ」

「うん……」

冷静ながらもどこか歯がゆそうな彼の物言いから、責めているのではなく、心から滯の身を案じているのが伝わってくる。そのことがとても嬉しく、同時に、とても心苦しかった。

「あの男……」

大地はふとそう呟くと、顎に手を添えてじっと考え込んだ。

「もしかしたら僕も見たことがあるかもしれない。研究所の近くをうろついている男がいるんだよ。いつもフルフェイスのヘルメットでバイクに乗っているから顔まではわからないが、背はあのくらいだし、体格もなんか似てる気がするんだよな」

「そう、そのバイク男です！」

滯は奪ったマスクを握りしめながら力強く肯定した。同一人物である保証はないものの、滯の見た男もバイクに乗っており、おそらくは相違ないだろうと思う。

「目的は、美咲の研究か……」

大地はぼつりと言葉を落とした。何度も研究所付近で目撃しているとなると、やはり研究所に目的があると考えるのが妥当だろう。そして、研究所で最も価値のあるものは美咲の研究である。

悠人は男の逃げ去った方を見やり、表情を陰しくした。

「あの男、かなりできるぞ」

それは、滯も見ていて感じたことである。あの男は悠人と対等以上に渡り合っていた。少なくとも、動きの切れや素早さに関しては、相手の方が数段上といえるだろう。以前、滯と遥が逃れ

られたのは、彼の虚をついたからに他ならない。もし、あの男が本気で何かを仕掛けてきたとしたら――。

「守ってくれるんだらう？」

「ああ、守るさ……」

いつになく真面目な大地の問いかけに、悠人は噛みしめるように答え、滯の肩に手をまわして強く抱き寄せた。指先から感じる痛いくらいの力。そこから彼の真摯な想いと決意が伝わってくる。けれど、そのことが、逆に滯の不安と戸惑いを大きく煽っていた。

## 19. 牽制

ピンポン——。

約束の時間より少し早く、チャイムの音が鳴り響いた。

誠一はのんびりした声で「はい」と応答すると、読んでいた新聞を折りたたんで玄関に向かう。今日は今年になって初めての非番であり、濡の冬休み最後の日でもある。それゆえ、久しぶりに二人でゆっくり過ごそうと約束をしていたのだ。

この部屋で、というのは濡の希望だ。

誠一としてはどこかへ出かけることも考えていたが、結局、彼女と二人でいられるのならどこでも構わなかった。むしろ、外より部屋の方がいいかもしれない。まわりの目を気にすることなく、誰にも憚ることなく、彼女と「恋人」でいられるのだから——。

「えへへ……」

玄関の扉を開くと、濡は気まずそうに肩をすくめて笑っていた。その理由は訊くまでもない。彼女の隣に楠悠人が立っていたのである。彼女の武術の師匠であり、保護者的存在であり、そして婚約者候補でもある人物だ。予想外の事態に、誠一はポカンと間の抜けた顔を晒して固まった。

「ごめんね」

濡は申し訳なさそうに眉を寄せ、口もとで小さく両手を合わせながら言う。

「師匠、心配してついてきちゃったの」

「えっ？」

誠一はきょとんとして瞬きをするが、すぐにハッとして息をのむ。その瞬間、熱湯と氷水を同時に浴びせられたかのような衝撃を受けた。思い当たることはひとつしかない。彼は二人の関係を認めていないのだから、誠一の部屋で二人きりで過ごすと聞けば、当然——。

「あ、えっと、心配されるお気持ちはわかりますが、私はそんな……その、何もしていないとまでは言いませんが、無理強いをしたことは一度もありませんし、それなりに配慮もしているつもりですし、すべて合意のもとで……」

「じゃなくてっ！！」

濡は顔を真っ赤にして声を上げた。そのあとに、悠人が無表情のまま説明を繋げる。

「濡が怪しい男に付きまといられているようなので、念のため付き添ってきました」

自分が疑われていたわけではないとわかり、誠一は冷や汗を滲ませたまま、気が抜けたように大きく安堵の息をついた。しかし、濡に付きまとう怪しい男というのが気にかかる。彼女は以前にもそれらしいことを言っており、遥もまた同じ男に付けまわされていたらしく、誠一も一度だけだが実際に目にしたことがあるのだ。フルフェイスのヘルメットで顔はほとんど見えなかったが、鋭い眼光を放つ瞳と、モデルのような人目を引く体躯はよく覚えていた。

「長身のバイク男？」

そう濡に尋ねると、彼女は困惑ぎみに眉を寄せてこくりと頷く。

「ここまでしなくてもって言ったんだけど……」

「何かあってからでは遅いだろう？」

悠人は横から優しく諭すように言う。何ヶ月にもわたって付きまといられているとなれば、そこまでするのも無理からぬことである。彼の言うように、何かあってからでは取り返しがつかないのだ。

「それでは南野さん、あとはよろしくお願いします」

「あ、はい……」

真顔で頼まれ、誠一は若干たじろぎながら返事をする。しかし、悠人はすでにこちらを見ていなかった。滯の頭にぽんと大きな手をのせると、少し身を屈め、額がくっつきそうな距離で目を合わせて言う。

「滯、帰る時間が決まったら電話して」

「……わかりました」

滯は微かに眉をひそめつつ、諦め口調でそう答える。あからさまに不服そうな態度だが、それでも悠人は満足したのだろう。ふっと慈しむように微笑み、じゃあねと軽く右手を挙げて身を翻した。

「……あの！」

誠一は去りゆく広い背中に声を掛けた。足が止まり、悠人は無表情を保ったまま振り返る。

「何でしょう？」

「その、よろしければ上がっていきませんか？」

カチャッ——。

誠一は水を入れたヤカンをガスコンロに置くと、つまみを押しまわして火を付けた。ちらりと背後に目を向け、小さな丸テーブルを囲んで座る二人の姿を覗く。滯は落ち着きなくそわそわしているが、悠人は動じる様子もなく平然としていた。以前に会ったときと違ってスーツ姿ではないが、ジャケットを身につけており、カジュアルでありながらもきちんとした印象である。

「紅茶でよろしいですか？」

「どうぞお気遣いなく」

悠人から社交辞令の決まり文句が返ってくるが、言われるまでもなく、気遣いのあるもてなしなど出来そうもない。安っぽいマグカップにティーバッグの紅茶が精一杯である。この部屋に来るのは滯くらいであり、今後も滯しか予定がなかったのも、来客用の用意など当然ながら何もありません。

「ねえ」

戸棚を開こうと手を掛けたところへ、滯がそっと駆けてきて、肩を押しつけるように体を寄せた。怪訝に顔を曇らせながら、隣の誠一にだけ聞こえるくらいに声をひそめて尋ねる。

「どうして師匠を家に上げたりしたの？」

「いや、わざわざ滯に付き添ってここまで来てくれたのに、そのまま帰してしまうのもどうかと思ったんだよ」

誠一もできるだけ声のトーンを落として答える。実のところ、なぜ呼び止めたのか自分でもよくわかっていなかった。ほとんど反射的に声を掛けてしまっただけである。もしかすると、彼とじっくり話してみたいという気持ちが、心のどこかでくすぶっていたのかもしれない。

漣は拗ねたように目を伏せた。

「ようやく誠一とゆっくり過ごせると思ったのに、これじゃ何にもできないよ……」

その言葉に、誠一の心臓はドキリと大きく脈打った。誘っているつもりはないのかもしれないが、その声も、その顔も、その目も、もはや誘っているようにしか感じられない。悠人への対抗心もあったのだろう。思わず、居間から死角になる壁に彼女を押しつけると、両肩に手を掛けたまま熱のこもった目で見つめる。

「えっ？ ちょっと」

「今、ここで……」

「だ、ダメだって！」

漣はあたふたと逃げようとする。が、胸元を軽く押し返すだけであり、本気の拒絶でないことはすぐにわかった。誠一は調子に乗ってズイッと間合いを詰める。

「バレないよ」

「ちょっ……」

「キスだけだから」

「……」

彼女の抵抗の手は止まった。戸惑いと期待が縋い交ぜになった面持ちで息を詰めている。微かに揺らいだ漆黒の瞳に、誠一は吸い込まれるように顔を近づけていく。

「無理強いしないはずでは？」

背後から聞こえたその冷やかな声に、誠一は口から心臓が飛び出しそうになった。シューウウ、と急速に蒸気のお音がおさまっていくことに気付く。おそろおそろ振り返ると、悠人が沸騰したヤカンの火を止めてそこに立っていた。横顔は醒めきっているように見えたが、瞳の奥の熱い滾りだけは隠せていない。誠一は息を呑んで立ちすくんだ。が、漣は臆することなくムツとした表情を見せる。

「別に嫌がってないです」

そう強気に反論すると、誠一の体に手をまわしてギュッと抱きついた。

「ちょ、漣……！」

密着して柔らかい胸が押し当てられ、あたたかい吐息が首筋に掛かり、思わずくらりとのぼせそうになる。今はまずい。彼の怒りに火をつけるだけだ。そう思いつつも、彼女を無理やり引きはがすことも出来ず、抱きつかれたままあたふたするだけだった。

そんな誠一に、悠人は敵意を露わにした目を向けた。

それは、どう見ても保護者としてのものではなく、彼女を想う一人の男としてのものだった。そういう方面に疎い誠一でさえもはっきりとわかるくらいである。漣との結婚を望んでいるという話も、今までどこか信じ切れずにいたが、このときようやく現実のものとして実感することができた。

単調なエアコンの運転音に、心拍が呼応する。

丸テーブルの上には、デザインの統一されていないマグカップが三つ置かれ、濡の持参したマフィンとクッキーが無造作に広げられていた。マグカップの紅茶からはほんのりと湯気が立ち上っている。しかし、三人とも一口つけただけで、その後は気まずい空気に絡め取られたかのように動きを止めていた。

「なかなか良いお部屋ですね」

沈黙を破ったのは悠人だった。先ほどまでの重苦しい空気が嘘のように彼の声は柔らかい。誠一は見えない呪縛が解けてほっとしたものの、彼の口にした内容には困惑を禁じ得なかった。

「ありがとうございます……」

一応はそう答えたものの、どう考えても褒めるに値するような部屋ではないのだ。一人暮らしにしては広いというだけで、取り立ててきれいでもないし、インテリアに凝っているわけでもない。単なる会話の糸口で深い意味はないのかもしれないが、もしかしたら、濡にはふさわしくないという遠回しな嫌味かもしれないと思う。

「独身の警察官はみな寮に入るものだと思っていました」

「入寮者は多いですけど、特にそういう規定はありません」

「南野さんは？」

「私も一年ほど前までは入っていました」

最初は少し警戒していたが、雑談を交わすうち自ずと肩の力が抜けてきた。だが――。

「なるほど」

彼は意味ありげにフツと鼻先で笑って言った。

誠一は少し気色ばんで眉をしかめる。

「何ですか？」

「寮では濡を連れ込めませんからね」

「……そういうことではありません」

確かに独身寮を出たのは濡と付き合い始めた頃である。だが、それは彼女のことを秘密にしなければならなかったからで、家に連れ込もうなどという下心のためではない。実際、初めのうちは、濡がここに来ることを拒み続けていたのだから。

「まあ、私はどちらでも構いませんけど」

悠人はさらりと受け流し、涼やかな顔で紅茶を口に運ぶ。その態度に、誠一はカチンときて顔をしかめた。これまで成り行きを静観していた濡も、おそらく同じ気持ちだったのだろう。じとりと恨めしげに悠人を睨みつけると、引き結んでいた口を解き、感情を抑えた低い声で切り出す。

「あの、喧嘩を売るのはやめてもらえます？」

「売ってるつもりはないけどね」

「十分すぎるくらい売ってますっ！」

「そう見えたのなら申し訳なかった」

悠人は身を乗り出した彼女の頭にぽんと手を置き、先ほどまでとは別人のようににっこりと笑みを浮かべた。滯は不満げに口をとがらせつつも小さく頷く。やはり、彼は名前だけの保護者代理というわけではなさそうだ。

「楠さん……」

渴いた喉から、少し掠れた声を絞り出す。

悠人は急に醒めた顔になって振り向いた。滯もきょとんとして振り向く。一気に二人の視線を浴び、誠一は思わずごくりと唾を飲み込んだ。体ごと悠人に向き直って正座をすると、固いこぶしを膝にのせ、ゆっくりと噛みしめるように述べていく。

「私は、滯さんと真剣にお付き合いしています。滯さんの方も同じ気持ちだと思います」

その発言に、滯は面食らったように目を見開いたが、すぐに真面目な顔になってごくりと頷いた。

「私も真剣です」

「それで？」

悠人は冷ややかに先を促す。

誠一の額に汗が滲んだ。

「……楠さん、あなたは滯さんの保護者同然の立場と伺いました。でしたら、何よりも彼女の幸せを第一に考え、あなたの望みではなく、彼女の気持ちを尊重すべきではないでしょうか」

正論だという自信はあった。だからこそ、年齢も立場も上である悠人に向かって、このような諫言を口にしてしているのだ。滯のことを大切に思っているのであれば、少しは動揺するかと思っただが、彼は顔色一つ変えずに言っただけのける。

「私には滯を幸せにする自信があります。南野さん、あなたよりもずっと」

「……」

誠一は絶句したあと、もやもやした胸の内から必死に言葉を紡ぎ出す。

「あなたは……滯の家族も同然なのに、そんな人が……」

「血が繋がってなければ何の問題もないでしょう」

静かながらも強硬な口調で、悠人は遮るように答えをかぶせてきた。まるで議論は無駄だと言わんばかりである。法律的には確かに何の問題もない。けれど、そういうことではなく——誠一はそっと視線を上げる。

「私は……、滯さんのことを第一に考えています」

「まだ17歳の滯に手を出しておいてよく言いますね」

間髪入れず、悠人は痛いところをついてきた。手を出したという表現については納得しがたいが、そのこと自体は事実であり、ただ黙ってうつむくしかなかった。しかし、滯は悠人をきつく睨みつけて突っかかる。

「師匠こそよくそんなことが言えますね」

「僕はキスまでしかしてないだろう？」

「……えっ？」

一瞬にして、誠一の脳内は真っ白になった。呆然と濡に目を向ける。

「ちっ……違うの！ したんじゃないなくてされたの！」

濡は顔を真っ赤にして、両手をふるふると振りながら必死に否定した。つまり、合意ではなく無理やり——相手の意思に反して行為に及ぶような人ではないと、かつて彼女は主張していたはずだが、結局のところ買い被りにすぎなかったということだろう。彼女の信頼を裏切ったその男に、誠一は無言で怒りと蔑みの視線を送る。

それでも彼の飄々とした態度は崩れない。

「そのときは、まだ彼氏がいるなんて知らなかったからね」

「いなければいいってものじゃないです」

濡は責め立てるように続ける。

「だいたい、キスだけなんて言い訳したところで、師匠も手を出したことに変わりないです。誠一のことをとやかく言う資格なんてありません。自分のことを棚に上げるなんて卑怯じゃないですか」

「じゃあ、帰ったら続きをしようか」

悠人は満面の笑みを浮かべて、とんでもないことを口にした。

血の気が引いて蒼白になる誠一とは対照的に、濡はカァッと茹でだこのように顔を紅潮させる

。

「どうしてそうなるんですかっ！」

「変わらないんだらう？ キスまででも、最後まででも」

「……撤回します」

固く握りしめたこぶしを膝に下ろすと、悔しげに眉を寄せ、低い声でぼそりとそう言葉を落とす。誠一も無意識に顔を曇らせた。不安はおさまるところか大きくなる一方である。なにせ、二人は同じ屋根の下で暮らしているのだから——。

「そろそろ帰るよ」

唐突に、悠人はそう言って立ち上がった。

誠一はつられるように顔を上げて、息を呑む。すぐ隣で見上げたその姿に圧倒された。背が高いというのもあるだろうが、武術を嗜んでいるからか、体は適度に筋肉がついて引き締まり、立ち姿が美しくさまになっているのだ。こんなことで張り合うつもりはないが、それでも言いようのない敗北感に襲われる。

「南野さん、ありがとうございました」

その声で我にかえると、慌てて立ち上がり小さくぺこりと会釈する。隣の濡も、微妙に視線を逸らしつつ立ち上がった。そんな彼女を見て、悠人はどことなく寂しげに吐息を落として薄く微笑む。

「濡に嫌われることばかりしてしまうな」

「わかってるんだったらやめてください」

濡は口をとがらせて至極もったもなことを言った。しかし、彼と目が合うと、困惑ぎみにうつむいて小声で付け加える。

「……嫌いにはなれませんが」

悠人の目にはっきりと安堵の色が浮かんだ。

しかし、誠一の胸には釈然としないものがわだかまった。ずっと親子同然に暮らしてきたのだから、滯の性格上、そう簡単に嫌いになったりはしないだろう。嫌いになってほしいわけではない。ただ、わざわざそれを彼に告げてしまっただけではないだろうか。出来ることなら今すぐにでもあの家を出てほしい——無理だとはわかっているが、そう願わずにはいられなかった。

広くはない玄関で、悠人は窮屈そうに腰を屈めて靴を履くと、誠一たちに振り返って丁寧に頭を下げた。

「それでは失礼します。帰りはまた迎えに参りますので」

「いえ、私が責任を持ってご自宅までお送りします」

「……わかりました。それではよろしくお願いします」

正直いえば、迎えに来られるのでは落ち着かない。もちろん遅くならないうちに帰すつもりではあるが、せつかく彼女と二人きりの時間を過ごすのだから、なるべく他のことに気を取られたくなかった。彼に嫌味を言われる心配もせず、ただ溺れるくらい彼女にだけ没頭していたい——

。

「くれぐれも節度ある付き合いを」

誠一の考えていることなどとうに承知しているのだろう、悠人は去り際に冷ややかな視線を流してそう釘を刺す。誠一はギクリとし、縫い付けられたように身じろぎひとつできなかつた。

ボタン——。

重い扉が閉まるのを、誠一と滯は並んで眺めていた。

「滯、ごめんな」

「うん……私も」

滯は前を向いたまま小さくそう答えると、誠一に抱きつき、甘えるように肩口に顔を埋めてきた。胸元に当たる小さな硬いものは、誕生日に贈ったピンクダイヤのペンダントだろう。見える見えないにかかわらず、誠一と会うときはいつも身につけてくれているのだ。

次の誕生日も、彼女にプレゼントを贈れるだろうか——。

誠一は彼女の背中にそっと手をまわし、優しく、そして次第に強く、その柔らかな温もりを抱きしめた。

## 20. 依頼人

---

「日比野涼風（ひびのすずか）と申します」

凜とした声が、形の良い唇から発せられる。

悠人に連れられてきたその美女は、剛三の書斎に集まっていた濡たちの前で挨拶をすると、両手を重ねて恭しく一礼した。小柄で細身の体には不釣り合いなほど、胸にはボリュームがあり、ブラウスははちきれんばかりになっている。

濡たちは啞然とし、剛三は怪訝に眉をひそめる。

それでも、彼女は堂々としていた。正面を見据えたぱっちりとした目、僅かに口角の上がった紅を引いた唇——表情は凜として揺らがない。背筋もピンと伸びている。全体的に理知的で仕事の出来そうな雰囲気だが、あまりきつい感じがしないのは、やや童顔ぎみの容貌によるところが大きいのだろう。

「私は、銀座にある小さな画廊のオーナーで、まだ駆け出しですが美術鑑定士もしております」

「まわりくどいのは好まん。簡潔に用件を述べてもらおう」

剛三は威圧的に睨みつけた。

しかしながら、彼女は臆することなくニコッと笑う。

「実は、悠人さんの妻にしてもらおうと思って押しかけてきました」

「え……、えええっ?!」

耳をつんざくような大声を上げ、濡はパイプ椅子からずり落ちんばかりにのけぞった。艶然と微笑む涼風と、その背後に控える悠人を、口を半開きにしたまま交互に見つめる。篤史も、遙も、声こそ上げていないが、息をのんで大きく目を見開いていた。

「真面目に話してくれないか」

そう言った悠人の声には苛立ちが滲んでいた。

涼風は軽やかに振り向いて、大きな瞳をくりっとさせる。

「あら、結構本気なのよ」

「私には婚約者がいます」

「そうなの？ なぁんだ残念」

悠人に冷たく一蹴されると、芝居がかった調子でそう言い、手のひらを上に向けて肩をすくめた。残念と言うわりには、それほど残念そうに見えない。むしろ、楽しげにくすっと笑みさえこぼしていた。

剛三は、おもむろに眉根を寄せる。

「思い出したぞ。おぬし日比野夏彦の娘だな」

「はい、その節は大変お世話になりました」

先ほどまでのおちゃらけた態度とは打って変わり、すっと姿勢を正して剛三に向き直ると、明瞭な声でよどみなく礼を述べた。肩より少し短めの黒髪をさらりと揺らし、流れるように深々と頭を下げる。

「父の絵画を取り戻していただき感謝しております」

その言葉で、澪にも何となく事情がわかってきた。涼風のために絵を取り返したのは、おそらく、絵画泥棒である怪盗ファントム——といっても、澪には覚えがないので、悠人と大地がやっていた先代の方だろう。

「そして」

涼風はちらりと悠人を一瞥した。

「悠人さんには、父を亡くして泣いてばかりいた私を慰めていただきました。優しく抱いてくださったあの日のことは、今でも忘れていませんし、これからも決して忘れはしません」

「……っ！！」

澪は顔を真っ赤に火照らせ、思わず両手で口を押さえた。しかし、遙は醒めた顔でじとりと視線を送り、篤史は怪訝な顔で頬杖をついている。二人とも、これといって驚いた様子は窺えない。

。

「抱いたのは肩だけだ」

悠人は苛立ちを募らせてそう言うと、溜息をつき、きょとんとしている澪に視線を移す。

「何かあらぬ誤解をしているみたいだが、僕がファントムをやった頃の話だからな。考えてみればわかるだろうが、そのときの彼女は、まだ小学生になるかならないかくらいだった」

「あ、そっか」

先代が活動していたのは二十数年前。彼女は現在二十代半ばくらいなので、普通に考えれば容易に推測できることである。

「怪盗ファントムとして絵を返しに行ったら、父親のことで泣きじゃくっていて、仕方なく落ち着くまで待っていた——ただそれだけのことだ。会ったのはその一度きりで、もちろん手は出していないし、ましてや将来を約束した覚えもない」

悠人が半ば自棄になってそう釈明すると、涼風は小さく舌を出し、悪戯っぽく笑いながら肩をすくめた。騙してどうこうするつもりはなく、ちょっとからかうくらいの軽い気持ちだったのかもしれない。

「どうやって我々を突き止めた」

静かながら凄みのある低い声で、剛三は詰問する。

「そのとき悠人さんにいただいたものです」

涼風はポケットから紙切れを取り出してそう言うと、打ち合わせ机に歩み寄り、内面が見えるように丁寧に開いて置いた。ノートをちぎったような古びた紙に、橘家の住所がボールペンで書かれている。筆跡は、悠人のものに酷似していた。

「何かあったらここを訪ねるようにと渡されました」

「悠人、おまえ……」

「彼女があまりにも憔悴して痛々しかったので……申し訳ありません」

悠人は少しきまり悪そうにそう言い、頭を下げる。

剛三は呆れたように嘆息したものの、それ以上は何も言わなかった。年季の入った小さな紙切れを、ただ忌々しげに睨めつけている。今さら彼を責めたところでどうにもなりはしないのだ。涼風は声を立てず密かにくすつと笑うと、紙切れを掬い上げ、壊れ物を扱うかのように慎重に折

り畳んでいく。

「私が今日まで生きてこられたのは、悠人さんにこれをいただいたおかげです。いざとなれば頼れるところがある、そのことが大きな支えとなりました。私にとって何よりも大切なお守りで宝物です」

そう言ったあと、急に真剣な顔になって剛三を見つめた。漆黒の瞳に強い光が宿る。

「悠人さんとの約束どおり、このことは誰にも話していません」

「それは脅しにならんぞ」

剛三はフンと鼻を鳴らした。

「君が警察やマスコミに何を言っても、我々が脅かされることはない。逆に、我々が君を社会的に抹殺することは、赤子の手を捻るよりも容易い」

「まあ、物騒なことをおっしゃいますのね」

涼風はわざとらしい抑揚と仕草で驚いてみせる。

「ご安心ください。恩を仇で返すようなことはいたしませんわ。怪盗ファントムに力を貸していただきたくて訪ねただけのこと。もちろん、相応の依頼料はきちんとお支払いするつもりです」

「残念ながら、依頼は一切受けておらん」

剛三はピシャリと突っぱねた。それを予期していたかのように、涼風は魅惑的に目を細めて言う。

「日比野夏彦の絵画に関することだとしても？」

ピクリ、と剛三の眉が動く。

「……よかろう、とりあえず話だけは聞こう」

低い声でそう応じると、机の上でゆったりと筋張った両手を組み合わせる。剛三が彼女の話に興味を示したことは間違いない。だが、彼女を信用したわけでないことは、少しの隙もない彼の瞳を見れば一目瞭然だった。

「ご覧ください」

涼風は雑誌の切り抜き記事を机に置いた。切り抜かれているので何の雑誌かはわからないが、下世話な週刊誌などではなく、おそらく美術の専門誌であろうと思われる。その内容は、現代抽象画家である日比野夏彦の遺作が見つかり、所蔵する美術館で近々公開されるというものだった。

「我々が取り返してやったものだな」

「いいえ、違います」

剛三が記事を一瞥して口にした言葉を、涼風は即座に否定した。

「取り返していただいたものは、ずっと手放すことなく大切にしていました」

後ろにいた悠人が、脇に立てかけてあった平たい風呂敷包みを手に取った。その中から出てきたのは油絵である。いわゆる抽象画というものだ。滯には何が描かれているのかよくわからない。ただ、その強烈な色彩と筆致の力強さに、何か激しく訴えかけてくるものを感じた。

「なるほど、こちらは贋作というわけか」

剛三は切り抜きをトントンと指で叩いてそう言うと、鼻から息を漏らした。

滯は腕をついて身を乗り出し、もう一度その記事に目を走らせる。

「でも……、ほら、これ鑑定したって書いてありますよ？」

「真贋鑑定も絶対ではないからな。後に覆ることもある」

「へえ、そうなんですか」

当然だと言わんばかりの剛三の言葉を聞きながら、滯は頬杖をついた。絵画専門の怪盗をやっているわりには、いまだに絵画に関する知識もないし、勉強しようという気にもならない。滯にとっては、あくまで義務的にやらされているだけの仕事である。

一方、涼風の顔は険しくなった。

「本当に、日比野夏彦が描いたものかもしれません」

剛三の眉が僅かに上がる。

「どういうことだ？」

「父はよく同じ絵を二つ描いていました。何のためだったかは知りません。けれど、必ず一方は庭で燃やしていました。おそらく試作のようなものではないかと思います。もったいないからちようだい、と幼い私がお願いしても、これは存在してはいけないものなんだよ、って言って——」

彼女の声にはほのかな感傷が滲んだ。小さく息を継ぐと、研ぎ澄まされた瞳で前を見据える。

「両方とも日比野夏彦の手によるものならば、どちらも本物と言えるかもしれません。しかし、何を本物にするかは作者本人の意思で決めるべきこと。本人が公表する意思のない作品を世に出すなど、許されて良いのでしょうか」

じっと彼女に向けられていた剛三の目に、ぎらついた光が宿った。

「それで、君は我々に何を望む？」

「この作品を燃やしてほしいのです」

涼風は毅然と答える。

「父が生きていたら、きっと庭で燃やしていたはずですから。もし、父が描いたものでなかったとしても、その場合は贋作となりますので、どちらにしても燃やすことに問題はないでしょう。美術に携わる者としての、そして日比野夏彦の娘としての願いです」

「こちらが本物だという証拠はどこにある？」

「お預けしますので存分にお調べください」

「そうさせてもらおう」

剛三は安易に人を信用しない。おそらくその絵も徹底的に調べられることになるだろう。しかし、涼風は揺るぎない自信を瞳に湛えており、滯としてはきっと間違いないのだと思えた。が——。

「あの……」

遠慮がちにそう切り出し、集まる視線にたじろぎながら言葉を繋ぐ。

「何も燃やすなんて過激なことをしなくても、今の話を公表すればいいんじゃない……」

本物が手元にあるのなら、世間に証明することも難しくはないはずだ。信頼のおける専門家に

比較鑑定してもらえばいいだけのことである。なのに、わざわざ危険を冒して盗み出したうえ、燃やすだなんて——平和主義の澤としては異論を唱えずにはいられない。

しかし、涼風は優しく言い聞かせるように答える。

「それで、もうひとつの絵の存在が、世間から消えるわけではないわ。それに……」

「必ずしも真実が真実と認められるわけではない、ということだな」

実感のこもった重い口調。

涼風は真摯に剛三を見つめて頷いた。ふと、彼の口角が不敵に吊り上がる。

「面白い」

「引き受けていただけるのですね」

涼風はほっとしたように顔をほころばせる。堂々とした態度で剛三と渡り合っていた彼女も、内心はやはり不安を感じていたのだろう。世間には秘密にしている怪盗ファントムを盾にして、橘財閥会長の家に乗り込むなど、命知らずだという自覚はあったようだ。

「ただし」

貫禄のある声が書斎に響く。

あたりは水を打ったように静まりかえった。剛三はもったいつけるようにゆっくり顔を上げると、身を固くした涼風を見据えながら、有無を言わさぬ高圧的な物言いで条件を突きつける。

「この件が片付くまで、君の身柄を拘束させてもらう」

「……えっ？」

涼風はその場に立ち尽くしたまま、大きな漆黒の瞳をぱちくりと瞬かせた。

「広くてきれいなお部屋、おいしい食事、おいしいお酒……」

白くほっそりとした指が、ブランデーグラスの縁を官能的になぞる。澄んだ琥珀色の液体が、グラスの中で震えるように揺れ、ふわりと仄かな芳香を立ち上らせた。しかし、その指の持ち主である涼風は、この甘美な雰囲気を目無しにするような、ひどくムツとした顔をしていた。

「待遇に不満はないけれど、私にも仕事があるのよね」

思いきり恨みがましくそう言うと、革張りのソファに身を預けながら、すらりと伸びた脚を大きく組み替えた。シャワーを浴びたばかりのため、髪はまだ湿り気を帯びており、おまけに白いバスローブ一枚きりという格好だ。胸元からは白く艶やかな谷間が大胆に覗いている。しかし、正面に座るスーツ姿の悠人は、視線を逸らしもせず、かといって興味も示さず、ただ平然と秘書としての顔を見せていた。

「先ほど報告のとおり、あと数日の辛抱です」

「今日、すごく大切な商談があったのに！」

涼風はしつこくも言い募る。

彼女がここに来た日から一週間が過ぎていた。身柄を拘束させてもらう——剛三にそう宣言された直後から、本当に橘家の一室に閉じ込められ、携帯電話も取り上げられ、一歩たりとも外に出させてもらえなくなった。閉じ込められるといっても、牢獄のようなところではなく、涼風の自宅より広くてきれいな部屋だ。トイレも風呂も洗面所も備え付けられている。食事もレストラ

ン並みにおいしい。必要なものがあれば、悠人や執事の櫻井に言えば用意してくれる。毎日、完璧なくらいに清掃もされ、まるで高級ホテルに滞在しているかのような快適な生活だった。

だが、彼女には仕事があった。

それも、小さいとはいえ画廊のオーナーである。休暇を取ればいいというものではない。部屋の電話を使うことは許されているが、通話内容はすべてチェックしているという。これでは守秘義務のある話については避けざるを得ないし、そもそも電話だけで済むような仕事ばかりではない。画廊の方は臨時の従業員を手配してくれたので、渋々それで手を打ったが、今日の商談だけは折れるわけにいかなかった。ようやく取り付けたアポイントメントであり、これを逃せば次はないと断言できる相手だ。しかし、必死に縋り付いてみたものの、どうしても部屋から出してもらえなかったのである。

あまり文句を言える立場でないことはわかっている。彼らは涼風の依頼のために動いてくれているのだ。とはいえ、またとない商機をふいにした落胆は大きく、今日くらいはやけ酒をせずにはいられない。悠人の報告を聞いている間、アルコールは強くないにもかかわらず、ブランデーを何杯もハイペースで呷っていた。

「今は篤史を信じて待つしかないでしょう」

「信じるも信じないもないわ！」

悠人が篤史に行かせることを提案してくれたので、一応、涼風はそれを受け入れることにした。今頃ちょうど相手と会っている頃だろう。だが、あくまで非礼を詫びるために行ってもらったようなものであり、これで次に繋がるなどという能天気な期待はしていない。たまたま、グラスに残っていたブランデーを一気に口に流し込んだ。

「私が行かないと意味がないのよ。私という人間を見て、信用に足る人物か判断して、それで取引を決めてもらうんだから。あなたたちはどうだか知らないけど、私たちの世界は数字だけじゃない。わかる？」

喉から胃まで焼け付くような熱さを感じながら、それでも強気な態度を崩すことなく捲し立てた。頭が少しくらりとしたが、深く息をついて落ち着けると、自嘲げみにうっすらと微笑を浮かべる。

「もっとも、女としてしか見てくれない人もいるけれど」

それを聞いて、悠人は訝るように眉を寄せた。

「まさかとは思いますが……」

「あら、これでも身持ちは固いのよ」

涼風は両手を左右に広げ、オーバーな身振りでおどけるように言った。そして、空になったグラスにブランデーを注ぎながら、僅かに目を細めてくすくすと愉しそうに笑う。

「私はただ、相手の勝手な期待を利用させてもらうだけ」

「あまり感心しませんね、そういうやり方は」

「ふふっ、悠人さん心配してくれるの？ 嬉しい」

そう言って、左手でブランデーグラスをすくい上げ、ゆったりとソファにもたれかかった。グラスを優雅にまわすと、琥珀色の液体が緩やかに波打ち、芳醇な香りがふわりと立ち上る。

悠人は無表情で書類をまとめ始めた。

「今日はこれで失礼します」

「ねえ、一杯くらい付き合ってよ」

涼風はしなやかに身を乗り出し、艶のある声で悠人に誘いをかける。化粧をしていない顔はあどけなくさえあったが、表情や仕草は、それとは不釣り合いなほどの色気を醸し出している。しかし、彼は眉ひとつ動かすことなく、書類を脇に抱えて立ち上がった。

「まだ仕事がありますので」

「一杯だけでいいの」

「付き合う義理はない」

その突き放した拒絶の言葉に、涼風はしゅんとしてうなだれる。

「わかってるけど……」

小さな口から落とされた声は、これまでの彼女からは想像もつかないほど弱々しいものだった。目には少し涙が溜まっている。瞬きをするだけで粒になって零れ落ちてしまいそうだ。

悠人は顔をしかめ、そして深く溜息をついた。

「ね、悠人さんって女の涙に弱いでしょう？」

「男女問わず、泣かれるのは好きじゃない」

涼風がブランデーを注いだグラスを差し出しながら尋ねると、隣に座る悠人は、腕を組んだまま身じろぎもせずに応えた。そんな彼に視線を流し、涼風はふっと柔らかく目を細める。

「でも、ほっとけない？」

「……………」

「あのときもそうだったものね」

微かに笑いを含んだその声に、悠人は何も答えなかった。目の前のブランデーグラスを手に取ると、乾杯もせず、すぐに口をつけてぐいっと流し込む。それでも、涼風が意に介することはない。

「実はね、悠人さんが私の初恋だったんだあ」

懐かしむような甘えた声を出すと、ゆったりと悠人の方に体を倒し、見かけよりも逞しい腕に寄りかかる。スーツ越しにほんのりと彼の体温が伝わってきた。そのあたたかさは、じんわりと心の奥まで沁み入ってくるかのようである。

「ずっと名前も知らなかったけれど、私にとっては恩人でヒーローなの。あのとき優しくしてくれた記憶と、悠人さんのくれたお守りがあったから、私は今日まで頑張ってきたの。本当よ？」

涼風は上目遣いで悠人の顔を見つめ、目が合うと、少女のように無邪気にニコッと笑った。

「どうしようかすごく迷ったんだけど、父の絵のこと、お願いに来て本当に良かった。初恋の人と一緒にお酒まで飲めたしね。悠人さん昔と変わらないんだもの。私が大好きだったあの頃のまま……だから、あらためて好きになったのよ。ね、私じゃダメ？」

「婚約していると言ったはずだ」

相変わらず悠人の言葉はつれないものだった。涼風は少し彼に体重を掛ける。

「濡ちゃん……ですってね。篤史に聞いちゃった」

「別に隠してはいない」

悠人の他にも、篤史や濡たちが度々この部屋を訪れていた。特に用があるわけではないが、閉じ込められた涼風を気遣い、様子を見に来るといった感じだ。きのう、篤史が一人で部屋に来たときに、婚約者について訊いてみたら、少し迷いながらも濡のことを教えてくれた。ただ、彼も詳しいことは知らないらしい。

悠人は少し眉を寄せて、自分に寄りかかる涼風を見下ろす。

「篤史の気持ちを弄ぶなよ」

「失礼ね、ちゃんとお断りしましたっ」

涼風は口をとがらせて言い返す。当初、篤史は誰の目にも明らかなほど涼風に執心していた。それゆえ、自分にその気はないということを、冗談めかしつつもきっぱり伝えておいたのだ。篤史は大いに残念がっていたが、しつこく言い寄ることはなく、二人の間に変なわだかまりはない。

「私、年下には興味ないのよね。悠人さんくらいがちょうどいいの」

そう言いながら、腕を絡めてしなだれかかる。悠人の腕に豊満な胸が押し当てられ、バスローブの合わせ目から白い太腿が覗いた。小ぶりの艶めいた唇が、絡め取るような甘い誘惑の言葉を紡ぐ。

「ね、奥さんにしてなんて言わないから、今夜一晩だけでもどう？」

しかし、悠人は眉ひとつ動かすことなく、そっと涼風の腕を外した。

「あなたには興味がありませんので」

「随分はっきり言ってくれるのね」

さすがに少しムツとして気色ばんだが、その姿勢は涼風の嫌いなものではない。かえってさっぱりした気持ちになると、ブランデーを呷ってソファの背にどさりともたれかかった。零れた口もとを手で拭い、熱い吐息を落としながら潤んだ目を天井に向ける。

「まあ、せっかくの逆玉を棒には振れないわよね」

「違います」

悠人は静かながら明確にそう言った。脚の上で組み合わせた指先に力がこもる。

「橘の家や財産は関係ありません。橘会長には別の思惑があるようですが、私はただ濡と一緒にいられるだけでいい。そのためなら今の地位や立場をなげうっても構わないし、逆に橘会長に利用されるのも厭わない。濡と二人で幸せに暮らしていくことが、私のたったひとつの願いです」

「そっかあ……濡ちゃんいいなあ……」

涼風は羨望を口に上すと、ゆっくりと甘えるように悠人の太腿に体を横たえた。何度か身をよじりながら仰向けになり、微妙な顔つきの彼を見上げてニコッと笑う。寝転がってもぞもぞ動いたせいか、もともと緩く着ていたバスローブは崩れ、胸元も裾も大きくはだけている。もうほとんど着ている意味がない状態だった。

「酔ってるだろう？」

「酔ってるふりよ」

目を閉じる彼女の頬には赤みが差していた。体もほんのり桜色に染まっている。

「飲み過ぎだ。そろそろ寝た方がいい」

「ん……もう少しだけ、このままでいさせて……おねがい……」

その声は次第にかぼそくなっていき、やがて小さな口も動かなくなった。腹の上に置かれていた手がだらりと滑り落ちる。そのうち、胸がゆっくりと上下に動いて、規則正しい安らかな寝息を立て始めた。

静寂が二人を包む。

悠人はグラスに残っているブランデーを一気に呷った。カタン、と空になったグラスをローテーブルに戻す。そして、煩わしげに溜息をつく、脚の上で眠っている涼風の腰紐に手を掛け、すでに用をなしていないそれを解き始めた。

「いよいよね」

ひゅうう、と不気味な音がして、凍てつく風が黒髪を舞い上げる。

明かりの灯されていない古びたビルの屋上で、涼風は塗装のはがれかかった金属製の柵にもたれかかり、煌々と輝く小さな美術館を見下ろしていた。その目がふっと感慨深げに細められる。隣でその様子を見ていた滯は、同じように柵にもたれかかりながら、にこっと力づけるように微笑んでみせた。

まもなく怪盗ファントムの予告時刻である。

今回の標的は、眼下の美術館が所蔵している日比野夏彦の遺作だ。ただし、それは『偽物』——涼風の持っている方が本物だと確信した剛三は、彼女の望みどおり、美術館の方を盗み出して燃やすことに決めたのである。

周囲には溢れんばかりの野次馬が集まっていた。日比野夏彦という画家は、美術界ではそれなりに評価されているが、一般的な知名度はほぼ皆無といってもいい。抽象画という理解されにくい分野ゆえかもしれない。にもかかわらず、これだけの人間が集まったのは、怪盗ファントムがこの絵を狙うのは二度目であるということ、予告状に「本物は一つ」という謎めいた言葉が書かれていたこと——その暗示的な二つの事象が、様々な憶測や論争を巻き起こしたためである。

涼風と滯がここに来たのは、悠人の指示だった。涼風に願いの成就を見届けさせるためである。念のため、彼女がおかしな行動をとらないか見張るのが滯の役目だ。だが、それはほとんど形だけのものといえるだろう。

涼風は美術館を見下ろしたまま言う。

「今の怪盗ファントムって滯ちゃんかと思ったけど、遥くんだったのね」

「私と遥の二人でやってるんです。今日は私の出番はないんですけど……私だと燃やすの失敗しそうだから、って師匠に言われて……」

自分の鈍くさはそれなりに自覚しているし、別にファントムをやりたいわけではないのだが、師匠に認めてもらえないのはやはり悔しい。滯は無意識に口をとがらせる。

「大切にされているのよ、悠人さんに」

「単に信用されてないだけです」

反論の声が気色ばんだ。

涼風は柵に両肘をついて顎をのせ、視線だけをそっと濡に流す。

「婚約してるんでしょう？」

「……まだ、していません」

濡は硬い顔で答える。「まだ」など、婚約自体は決定しているかのような言い様だが、そう口を滑らせたのは、心のどこかに諦めの気持ちがあったせいかもしれない。刺すように冷たい風を頬に受けながら、小さく溜息をつく。

涼風はぱっちりとした目を瞬かせた。

「へえ、そうなの……じゃ、私にもチャンスがあるのかな」

小悪魔っぽく挑むような彼女の言葉に、濡は一気にパァッと顔を輝かせた。長い黒髪をなびかせて涼風に向き直ると、目をキラキラさせながら、胸元でこぶしを握り締めてずいっと踏み込む。

「それはもう！ ぜひ頑張ってくださいっ！！」

その勢いに気おされるように、涼風はたじろぎながら一歩足を引いた。不思議そうな顔で小首を傾げる。

「もしかして、悠人さんとの結婚に乗り気じゃないの？」

凶星だった。

あれほどわかりやすい態度を見せれば、言い当てられるのも当然といえば当然である。濡は神妙な面持ちになってこくりと頷いた。しかし、涼風はまだ納得していないようで、立てた人差し指を口もとに当てると、記憶をたどるように言葉を紡ぐ。

「でも、濡ちゃんの初恋は悠人さんだって篤史から聞いたんだけど……」

「それは小さいころの話ですっ！」

篤史にそこまで話した覚えはないので、おそらく悠人が遥から聞いていたのだろう。知られたところで困る話ではないが、今さら蒸し返されるのも少し恥ずかしく、みんなの口の軽さを恨めしく思う。

「悠人さん、いい人だと思うんだけどなあ」

「それは、わかってますけど……」

濡は困ったように声のトーンを落とし、顔を曇らせた。

「だからって結婚はまた別の話じゃないですか。師匠のことは今も好きだし、尊敬してるし、感謝もしてますけど、結婚だけはどうしても考えられない、っていうかありえない……私にとっては親同然の人なんですよ？」

「……えっ？」

涼風は大きく目をぱちくりとさせた。濡は視線を落として続ける。

「両親がずっと仕事で家を空けていて、師匠が代わりに育ててくれたようなものなんです。学校にも保護者代理として来てくれますし。物心ついたときからずっとそう。なのに、そんな人といきなり結婚だなんて言われても……私、付き合っている人もいますし……」

「そっかあ」

涼風は目を細めて夜空を仰ぎ、白い吐息まじりの相槌を打つ。

「悠人さんは知ってるの？ 彼氏のこと」

「何度か顔を合わせたこともありますよ」

滯は軽く苦笑して答える。

「今すぐ別れるとは言われてないんですけど、私たちのことを認める気はなさそうで……どんな手を使ってでも私と結婚するつもりみたいです。彼が刑事だと知ってからは譲歩もしてくれませんか」

「ちょっ……刑事なの？！」

涼風の声が裏返った。滯は肩をすくめる。

「彼と付き合い始めたときは、まだ知らなかったんですよ。ウチが怪盗やってること」

自分の一家がそろって怪盗などという話は、あまりにも非現実すぎて、滯でなくとも思いつきはしないだろう。ましてや橘家は財閥である。危険を冒してまで盗みを働くなどあり得ないことだ。あえてやっているのは祖父の道楽のために違いない。それに無理やり付き合わされた挙げ句、彼氏が刑事であることを理由に別れさせられるなど、滯からすれば受け入れがたい横暴である。

「でも……」

「あっ、来たわよファントム！」

思い詰めたように呟きかけた言葉は、はしゃいだ声に掻き消される。

涼風の視線をたどると、濃紺色の空に浮かび上がる白いハンググライダーが見えた。すうっと静かに闇を切り裂きながら、緩やかに弧を描くと、美術館の屋上に滑り込むように着地する。野次馬たちからワアッと割れるような歓声が上がり、警備員や警察の動きも一気に慌ただしくなった。

「遥に任せておけば大丈夫ですよ」

「ええ、私も信じているわ」

剛三と対峙してもまるで怯まなかった涼風だが、この状況にはさすがに緊張を隠せないようだ。息を詰め、祈るような眼差しを怪盗ファントムに送っている。館内に侵入してその姿が見えなくなっても、彼女は立ち尽くしたまま微動だにしない。柵を掴む指先は、血が止まったように白くなっていた。

再び、大きく歓声が上がる。

絵画を脇に抱えた怪盗ファントムが、颯爽と屋上へ舞い戻り、自らの姿を見せつけるように正面側へ向かった。いつもならすぐさま逃走するところだが、今日はもうひとつ大切な仕事が残っている。追ってきた警備員たちを牽制しつつ、縁に立つと、手にしていた絵画を全力で上方に放り投げた。

白い手袋から飛び出したそれは、ほとんど回転せず、すうっときれいに夜空に上がる。

バンッ——！！

放物線の頂点に達して動きが止まった瞬間、大きな音がして、キャンバスは目映いオレンジの

炎に包まれた。派手に燃えさかったまま、怪盗ファントムの眼前を落下していき、正面玄関前のコンクリートに叩き付けられる。木枠が砕け散りながらも、まだ燃焼は収まらず、色とりどりの炎が揺らめいていた。

警備員も野次馬も館長も凍り付く。その際に、怪盗ファントムは姿を消した。

傍目にも明らかなくらい硬直していた涼風の体から、ふっと力が抜けた。古びた柵からそっと手を離すと、大きく安堵の息をつく。血が通わなくなるほど真っ白になった指先に、次第に赤みが戻っていった。

「ありがとう」

「良かったですね！」

濡は満面の笑顔で言った。しかし、涼風は再びきゅっと表情を引き締める。

「今度は私の出番ね」

このあと、涼風が日比野夏彦の遺作を公表する段取りになっている。

それは、怪盗ファントムの名誉を回復するために必要不可欠なことで、この依頼を受けるための交換条件として、剛三に約束させられていたことだった。絵画を愛する知的でスマートな怪盗というイメージを、真っ向から覆す今回の行動に、大きな失望を感じた人も少なくないだろう。実際に、野次馬から怒号のようなものが聞こえ、戸惑いがちななどよめきも起こっている。しかし、涼風の方が本物だと認められれば、燃やされた方は必然的に偽物となり、怪盗ファントムは血迷っていなかったと証明できるのだ。

「頑張ってくださいね。師匠とのことも！」

濡は元気よく声を弾ませながらこぶしを握り、涼風を後押しする。しかし――。

「あ、そっちはやめておくわ」

「えっ？」

涼風は軽く肩をすくめる。

「私、まったく脈のない相手には執着しない主義なの。泣き落としも、色仕掛けも、悠人さんにはぜーんぜん通用しなかったしね。裸で抱きついてもビクともしないんじゃないかしら」

「そんなことないですよ！」

濡はあたふたと両手を振りながら、なんとか引き留めようとする。

「ほら、理性で我慢してるだけかもしれないしっ」

「いいえ、あれは完全に濡ちゃんしか見えてないわね」

涼風はどこか楽しむような弾んだ口調で言う。からかっているのか本心なのかはわからない。ただ、彼から想いを聞かされている濡には、それを真っ向から否定することはできなかった。

「でっ、でも、心変わりすることもありえますし」

「私、それを待てるほど暇でも気長でもないの」

「……………」

あっというまに返す言葉が尽き、思わず口をとがらせて涼風を睨む。理不尽な八つ当たりであることはわかっているが、それ以外に気持ちの持っていき場所がなかった。しかし、彼女はそんな

な滯の様子を見ながら、口元に手を添え、楽しそうにクスクスと笑っている。

「ごめんなさいね、滯ちゃんの期待に応えられなくて」

「せっかいいいチャンスだと思ったのに……」

滯は肩を落とすより他になかった。その肩を、涼風は励ますようにポンと叩く。

「愚痴くらいならいつでも聞いてあげるから、ねっ」

「そんなこと言ったら、本当に押しかけちゃいますよ？」

「ええ、いつでもどうぞ」

涼風は身を翻し、明るく凜とした声を闇夜に響かせる。

その小柄な後ろ姿を目で追いつつ、滯はふっと柔らかく表情を緩めた。一縷の望みが絶たれたことは残念だが、気持ちは不思議と軽くなっている。おそらく、今まで友人にさえ話せなかったことを、涼風にすべて聞いてもらえたからだろう。

それが、何の解決にもならないことはわかっている。けれど——。

滯の足がコンクリートを蹴る。長い黒髪をさらりとなびかせながら、小走りで涼風を追うと、後ろからその腕にじゃれつくように抱きついた。

## 21. 囚われの少女

---

「こんにちは。滯ちゃん、遙くん」

「あっ、師匠のお父さま……」

滯と遙はいつものように学校から帰るなり呼び出され、そろって剛三の書斎を訪れる。そこには上質なスーツを身につけた中年の男性が立っていた。悠人の父の楠警察庁長官である。後ろでゆったりと手を組み、滯たちを歓迎するかのように満面の笑みを浮かべている。しかし、滯はその笑顔を素直に受け止めることができなかった。

「もしかして、また警察のお仕事ですか？」

警備局公安課の溝端も一緒に来ているので間違いないだろう。怪盗ファントムを黙認してもらう代わりに、要請があれば公安の手助けをする、という取引がなされていることは理解している。ただ、滯としてはやはり気の進む話ではない。そんな心情を察してか、楠長官は申し訳なさそうに苦笑して肩をすくめた。

「そういう約束だからね。依頼内容は君たちにも説明するよ」

「待ってください、私は反対だと言ったはずですよ！」

剛三の後方に控えていた悠人が、大きく一歩踏み出して声を上げた。楠長官を睨めつけて言葉を継ぐ。

「私と篤史だけで十分です。二人を巻き込む必要はないでしょう」

「家族である以上、二人にも知る権利があるろう」

ふいに横から口を挟んだのは剛三だった。さも当然だといわんばかりの顔をして、振り返りもせず執務机で両手を組み合わせている。こういうときの彼は他人の意見に耳を貸さない。それでも悠人は素直に引き下がろうとしなかった。

「大人には子供を守る義務があります」

「二人とも、もう十分に分別のつく年齢だ」

「しかし、未成年には違いありません」

表面上はあくまでも理性的にに応じているが、言葉の端々に隠しきれない反抗心が滲んでおり、実際にはかなり焦っているだろうことが窺える。その表情もずいぶん張り詰めているように感じられた。

「悠人……おまえは、滯ちゃんや遙くんを信じておらんのか」

今度は、楠長官が呆れたように溜息まじりの声を落とす。長官ではなく父親としての言葉であることは、近しい人間を諭すようなその口調からも窺える。しかし、悠人は態度を硬化させる一方だった。

「私はただ二人を傷つけないだけです」

「真実を隠された方が傷つくのではないか？」

「あんな真実は聞かせられません」

一歩たりとも引かず毅然と言い放ち、楠長官を刺すように鋭く見据えた。その双眸には燃えるような怒りが滾っている。しかし、楠長官は顔色ひとつ変えることなく悠然と構えていた。

「二人のため、ね……」

冷やかに目を細め、何か含みのありそうなつぶやきを落とす。悠人はムツとして眉を吊り上げた。だが、楠長官も負けじと強く睨み返す。互いに無言のまま、物言いたげな視線だけを激しくぶつけ合っていた。

「あのさ」

緊迫した空気に、遥が苛立った声で切り込んだ。

「何のことだかよくわからないけど、家族の問題っていうなら僕だって当事者だよ。当事者を置き去りにして勝手に決めないでくれる？ 僕としては、こんな中途半端に聞かされて終わりっていうんじゃ承服できない」

彼の言い分には、同じ立場である澁も全面的に同意だった。首を縦に振ることで悠人に訴えかける。そこまでして隠したい真実とは何なのか——自分たち家族の問題であるならなおさら、教えないと言われても納得できるものではない。

悠人は一筋の汗を伝わせ、追いつめられたように硬い表情で目を伏せた。

澁たちは、書斎の隅にある打ち合わせ机に移動した。

席に着いているのは、怪盗ファントムの面々と公安課の溝端である。楠長官は予定があるとかで溝端に説明を任せて帰って行った。悠人は暗澹とした表情で下を向いている。いつも調子のいいことばかり言っている篤史も、気のせいかどこか減入っているように見えた。普段と変わらないのは剛三くらいだろう。

「ご覧ください」

そう言って、溝端は一枚の写真を机の中央に置いた。そこには白い外観の建物が写っている。

「お母さまの研究所、ですね」

澁の胸にふいと嫌な予感が湧き上がる。表沙汰にはなっていないものの、この研究所には不正な資金提供を受けていたという過去がある。その件はすでに片付いているはずだが、他にも何か、というのは十二分に考えられる話だ。

「ここで、違法な実験が行われている疑いがあります」

予感はず中していた。顔をこわばらせる澁の向かいで、溝端は無表情のまま言い添える。

「違法というには些か微妙なのですが……」

「もったいつけてないで、はっきり言ってよ」

遥も冷静ではいられないようだ。ピリピリと神経をとがらせながら、なかなか核心に触れない溝端をせっつく。それでも彼は無表情を崩すことなく、ちらりと遥を一瞥して言葉を落とす。

「子供を使った人体実験」

「……………えっ？」

「すでに、何人も死なせているようです」

「う、そ……」

澁の鼓動はドクドクと早鐘のように打っていた。何かの悪い冗談だと思いたかったが、悠人も篤史も、澁たちの視線から逃れるように、沈痛な面持ちでうつむいている。とても演技には見え

ない。

溝端は、ケースファイルから紙束を取り出した。

「これが秘密裏に入手した実験の記録です」

どうやら手書きの原本をコピーしたもののようだ。何かの数値や観察記録らしきものが走り書きされており、そこに貼られている少年少女の写真は、いずれも金髪碧眼などの日本人らしからぬ特徴を備えている。筆跡は母親のものによく似ていた。紙をめくっていくと、ところどころに書かれた『死亡』という文字が目に入る。疑いようのない証拠を突きつけられたようで、漣の背筋にゾクリと冷たいものが走った。

「完全に違法じゃないの？ どこが微妙なわけ？」

遥はその紙の何枚かを手に取り、拾い読みしながら尋ねる。

「その実験に使われた子供たちは、姿かたちこそ人間そのものですが、遺伝子的には僅かながら相違があり、人間と定義すべきかは難しいところなのです。なので、橘美咲女史としては動物実験という認識なのかもしれません」

「そんな……」

遺伝子的にはどうだか知らないが、姿はどう見ても人間としか思えない。そんな子供たちを動物扱いして、命に関わる実験に利用するなど、あまりにも残酷な話である。しかも、それを主導したのが自分の母親だなんて——漣は唇を噛みしめる。

「そんな生き物、どこから連れてきたの？」

「それは重大な機密事項です。ご容赦ください」

遥の質問を、溝端は涼しい顔でかわす。

「我々は、研究所や所員たちを罪に問うつもりはありませんし、この事実を公表するつもりもありません。ただ、人道的観点から見過ごすことはできず、あなた方をお願いすることにしました」

そう言うと、視線だけを動かして皆を見渡した。

「現在、幼い少女がひとり、実験体として地下に監禁されていると思われます。あなた方には、研究所に侵入してその少女を救出していただきたい」

「あの……」

漣はおずおずと小さく拳手をする。

「その子を解放するように説得するとかじゃ、ダメなんですか？」

「すでに何度か試みましたが、取り合っていただけませんでした」

溝端は丁寧な口調でさらりと受け流した。机に散らばった実験の記録を掻き集めると、もう用は済んだとばかりに、速やかに枚数を確認してケースファイルにしまう。だが、漣にはまだ話を終わらせる気はなかった。

「私が説得してみます！ やらせてください！！」

バンッ、と勢いよく机を叩きつけて立ち上がり、正面の溝端を見つめて懸命に訴えかける。しかし、彼はピクリとも表情を動かさなかった。眼鏡を中指でクイッと押し上げると、切れ長の目で冷ややかな視線を投げかける。

「そうこうしているうちに、助けられる命も助けられなくなります」

「一日だけ、今日一日だけでいいので時間を……」

次第に、濡の声は弱々しく消え入っていく。

溝端の言うように、その間にも囚われの少女は命を失うかもしれない。そうでなくても、苦しみ続けていることには違いないのだ。なのに、自分は身内のことばかり考えていた——机に手をついたまま、首が折れそうなほど深く頭を垂れる。長い黒髪が肩から滑り落ち、まるでカーテンのように視界を遮断した。

「話し合うのは少女を救出してからで良からう」

剛三は宥めるように穏やかにそう諭した。机の上でゆったりと両手を組み合わせ、付け加える。

「どちらにしても罪には問われないのだからな」

「……………」

濡は崩れるようにパイプ椅子に腰を落とし、顔を両手で覆った。罪に問われないと言われて安堵すると同時に、そんな身勝手な自分を責める気持ちに苛まれる。様々な矛盾した思考が頭の中で渦巻き、こんがらかり、引っ張り合い、ぶつかり合い、次第に何も考えられなくなる。泣けるものなら泣きたい気分だったが、どうして泣きたいのかさえわからなくなっていた。

午前0時をまわる頃、濡たちは研究所に向けて出発した。

車は、悠人が運転していた。篤史は助手席でノートパソコンを膝に広げ、濡と遥は後部座席に並んで座っている。今日は怪盗ファントムとしての仕事でなく、何かに成りすます必要もないので、二人ともジーンズにパーカーとという動きやすい服装をしていた。

「もしかしたらさ」

走行音がやけに大きく聞こえる重苦しい沈黙の中に、遥はぽつりと言葉を落とした。濡がそっと不思議そうな目を向けても、彼は振り向きもせず、緩やかに流れゆく車窓をただじっと眺めている。

「僕らも、人体実験されていたのかもね」

「えっ……？」

濡は短くそう言ったきり絶句した。そして、こぼれんばかりに大きく目を見開く。

「そんな、ありえないよ！！」

思わずカッとして全否定するものの、何の根拠もなく、それ以上のことは何も言えなかった。むしろ彼の言葉に思考が蝕まれていく。幼いころ頻繁に受けていた点滴、そして過剰なまでの健康診断——それが人体実験の一環だとすれば長年の疑問に説明がつく。けれど、どうしても信じたくはない。

「ごめん」

不意の謝罪が耳を掠める。

その声は、いつもの彼らしからぬ頼りのないものだった。隣に目を向けると、膝に置かれたこぶしは固く握りしめられ、うつむいた横顔には仄暗い陰が落ちている。つられるように、濡も力

なくうなだれて表情を曇らせた。

ほとんど街灯のない道路の先に、赤信号が鮮烈に輝く。

悠人は滑り込むように車を停止させた。ハンドルを握る手に力を込め、まっすぐ前方を見据えたまま口を開く。

「二人とも無理はするな。今から降りても構わない……すべての責任は、僕が取る」

強い決意を感じさせる声。

彼は、軽い気持ちでこんなことを言う人間ではない。具体的にどう責任を取るのかはわからないが、剛三や警察に楯突く覚悟で、漑と遥のことを守ろうとしているのだろう。その思いはとても嬉しかった。けれど――。

「やらせてよ。他人事じゃないんだから」

「私も、遥と同じ気持ちです」

つらくないわけではないが、逃げて後悔するだけである。本当に両親がそのような蛮行に手を染めているのなら、せめて、家族である自分たちが止めなければならない。漑は意を決すると、隣の遥と視線を合わせて小さく頷き合った。

切り立った海沿いの道路を上りきったところで、悠人は車を停めた。

ここから森側へ分岐する細道を進んでいくと、美咲の研究所にたどり着く。正面には小さいながらも駐車場があり、そこまでは車で乗り付けられるが、音で気付かれる可能性があるため、ここから徒歩で向かうことになっていた。

「今日は短時間決戦だ」

篤史は膝上のノートパソコンに目を落とすと、少女救出計画の最終確認を始めた。

漑は若干の緊張を感じて背筋を伸ばし、真剣に耳を傾ける。

「今回は正体を隠す必要はないから、このまま強引に突入して救出する。もともと警備員は雇われていないし、他の所員が帰ったことは確認した。今、研究所の中にいるのは美咲さんと大地さんだけだ。おまえたちなら難しくはないだろう。ただし気は抜くなよ。家族だけに、なおさらどう出るか予想がつかねえからな」

「わかってる」

遥がぶっきらぼうなのは今に始まったことではない。だが、今日はいつもと違って余裕が感じられなかった。僅かながら苛立ちさえ窺える。篤史は肩越しに物言いたげな視線を送るが、そのことには触れず、本題に関することだけを淡々と口に上していく。

「合図をしたら、通常の電気系統と非常電源をすべて遮断する。しばらく復旧することはないはずだ。その間に、入り口の二重扉を爆破して侵入してくれ」

入り口の扉には複数の高度なセキュリティが施されている。おそらく篤史でも容易には破れないだろう。だからといって爆破はやりすぎのように思えるが、対案を出せない以上、おとなしくその計画に従うより他にない。

「内部はおまえらの方が詳しいだろうが、念のため確認しておく」

そう言うと、篤史は後部座席の方へ身を乗り出し、二人に紙の見取り図を差し出した。漑はそ

れを受け取り、小さな懐中電灯で照らしながら遥と一緒に覗き込む。

「赤で印をつけたところが地下へ続く階段だ。そこの扉は玄関ほど頑丈じゃないから、鍵さえ壊せば簡単に開くと思う。あとは、その中にいる少女を保護して戻ってくるだけでいい」

「地下室のことは何もわからないの？」

遥のその疑問は、滯も少し不思議に思っていたことだった。これまでの仕事では、内部についても詳しく説明があったし、行動についても事細かに指示があった。けれど、今回は『突入して救出する』という大雑把な命令だけである。

篤史は片眉をしかめて答える。

「当初はただの物置だったところを改装したらしいが、残念ながら改装を手がけた業者は見つけれなかった。だから現在どうなっているかはわからない。ただ、それほど広い場所ではないだろうし、少女がいればすぐに見つかると思う」

「了解」

遥が真面目に答えたその隣で、滯も頷いた。作戦自体は単純で難しくなさそうだが、それを遂行する意味はとても大きい。必ず成功させなければならない。弱気になりそうな自分を奮い立たせるように、膝の上で重ねた手をぎゅっと握りしめた。

照明灯の光を受けた研究所が、鬱蒼とした中にぼんやりと白く浮かび上がる。

その入り口の扉に、遥は音を立てないよう気をつけながら、少し重みのある黒い小箱を貼り付けた。滯の待機するところまで小走りで戻ってくると、壁を背にしてヘッドセットのマイクを口もとに寄せる。

「こちらは準備完了」

『了解。じゃあ電気を落とすぜ』

イヤホンから、別場所で作業する篤史の声が聞こえた。

『いくぞ……5秒前、4、3、2、1、0』

カウントダウンが終わると同時に、研究所周辺の照明灯がいっせいに消え、あたりはすっと闇に呑み込まれた。それでも、近い範囲ならば月明かりで視認できる。遥は動じることなく、右手に持っていたリモコンのスイッチを押した。

——バァァン！！

強烈な目映い光が弾け、耳をつんざくような爆音が起こった。

爆弾を仕掛けた扉からは十分に離れていたはずだが、爆風で大きく黒髪が舞い上がり、壁からも地面からもかなりの震動が伝わってきた。薄灰色の煙が、闇夜にもくもくと上がっていく。

「行くよ！」

「うん！」

滯は気合いを入れると、先に飛び出した遥を追って駆け出した。頬を打つ風は刺すように冷たかったが、それに構う余裕もないくらい、これからのことで頭がいっぱいになっていた。

「っ……」

ビニルが溶けたような、薬品臭いような、焦げ臭いような、どこか煤けたような、何とも形容しがたい不快な匂いがあたりに漂っていた。漑は不覚にも思いきり吸い込んでしまい、咽せそうになりながら、顔をゆがめて口もとを大きく手で覆う。

しかし、目的は達せられたようだ。

爆弾を仕掛けた金属製の扉は、ぐにやりと大きくひしゃげていた。遥はその開いた部分をくぐって中に入り、漑もあとに続く。そこには僅かな光さえなく、言葉どおり一寸先も見えない闇である。漑はポケットから細身の懐中電灯を取り出し、スイッチを入れた。

「漑、こっちを照らして」

「あ、うん」

声のした方に懐中電灯を向ける。

そこには、先ほどと同じくらい頑丈そうな扉があった。遥は手早くもうひとつの爆弾を取り付けると、漑とともに屋外に出て、今度はすぐにリモコンのスイッチを押した。内部で轟くような爆発が起こり、扉の隙間から煤けた煙が立ち上る。二人はそれが落ち着くのを待って戻ると、同じようにひしゃげた二番目の扉をくぐり、そろりと研究所内部に侵入した。

漑は懐中電灯で目的の方向を照らす。

見る限り、その廊下には誰もいないようだった。予告なくあたりが暗闇に覆われれば、部屋を出るのも簡単ではないだろう。それでも気を抜くことなく、遥とともに慎重に進んでいく。幼い頃から何度も行き来した廊下だが、照明がないだけで、何か知らないところのように感じられた。

やがて、地下へ続く階段に辿り着いた。

狭い階段だが、二人は手を取り合い一段ずつ降りていく。その行きあたりに扉があった。一応ドアノブをまわして確認してみるが、やはり鍵がかかっている。遥は、先ほどよりだいぶ小さな箱を、鍵の付近に貼り付けてセットした。

——バンッ！

階段の上に退避してからスイッチを押すと、短めの爆発音がした。ちょうどまぐ鍵の部分だけ壊れたように見える。漑は近くで確認しようと先に階段を下り始めた。そのとき——。

「何者だ?!」

ぎこちなく廊下を駆ける足音とともに、緊迫した鋭い声が聞こえる。大地だ。階段の前に立つ遥の影に迷うことなく飛びかかっていく。遥はすんでのところまでそれをかわした。が、大地の追撃は容赦なく、今度はしっかりと脇腹に蹴りが直撃した。

「うっ……」

「遥っ!!」

漑はよろけてうずくまる遥に懐中電灯を向け、階段を駆け上がった。

「えっ、漑？ 遥?!」

懐中電灯に照らされた二人の姿を目にし、大地は大きな動揺を見せた。その隙を逃さず遥は素早く飛びかかると、うつぶせに押し倒し、半乗りになって体を押さえつける。両腕も背中側で拘束していた。

「父さんや母さんを罪には問わない。実験に使っている女の子を救出するだけ」

そう説明すると、大地の体から力が抜けたように見えた。

「公安か？」

「そうだよ」

大地もかつて怪盗ファントムとして活動していた。当時も、今と同じように公安と取引をしていたのだろう。そのあたりの事情は説明するまでもないようだ。

「母さんは？」

「逃がした」

「どこに？」

「さあね……」

もはや子供たちを実験に使っていた事実は疑いようもない。漣は顔をこわばらせた。すでに覚悟はしていたつもりだが、父親のそういう言動を目の当たりにすると、冷たい手で心臓を鷲掴みにされたように感じる。

「漣、中を見てきて」

「あ、うん」

大地を押さえつけたままの遙に言われて、漣はひとりで階段を降りていく。鍵の壊された扉は簡単に開いた。懐中電灯で中を照らしながら、おそるおそる足を踏み入れる。床には絨毯が敷かれていた。近くには戸棚と机があり、右奥には扉らしきものが見える。

ジャラ……。

不意に聞こえた金属音にビクリとする。息を詰めて、音のした方に懐中電灯を向けた。

「きゃあっ！」

耳をつんざく可愛らしい悲鳴。

そこにいたのは、まだ小さくあどけない少女だった。薄地の白いワンピースを身につけ、パイプベッドの上に座り、怯えた表情で腕をかざしている。反対側の手首には鎖のついた手枷が嵌められていた。そして、緩やかなウェーブを描く灰赤色の長髪に、それより少し濃い色の瞳——やはり、溝端に見せられた資料と同様、日本人らしからぬ特徴を備えている。

漣は近くに駆け寄った。

パイプベッドに繋がれた鎖を外そうと、力任せに引っ張ってみるがビクともしない。手首の方に鍵穴らしきものがあったので、鍵がないかあたりを探してみるが、机の上にも、机の中にも、戸棚の中にも見つけることができなかった。

少女のいたいけな体は小刻みに震え、表情は凍りついている。

こんなところに閉じ込められて、拘束されて、実験台になって——どれほどの恐怖だったかを考えると胸がズクリと痛む。早く助け出してあげたい。漣は焦りを感じつつ、少女を置いていった地下室から飛び出し、階上にいるはずの遙に向かって叫んだ。

「女の子いたよ！でも、鎖でベッドに繋がれてて動かせない！」

「わかった。師匠に指示を仰いでくるから、漣はそこで待ってて」

研究所の中には電波が届かないので、トランシーバーを使うには屋外に出るしかない。それは

、あらかじめ篤史から言われていたことである。

「父さんも来て。話を聞きたいから」

「今さら逃げるつもりはないよ」

遙は拘束を解き、手を差し伸べて大地を立ち上がらせた。そして、まるで連行するかのようになり、しっかりと腕を引いて入り口の方へ向かっていく。二人の姿はすぐに闇に吞まれて見えなくなった。

滯は地下室に戻った。

懐中電灯を少女の顔に向けないよう気をつけながら、足音を忍ばせて近づいていく。よく見ると、ベッドにはふかふかの布団が敷かれており、着ているワンピースもまだ新しくきれいなものである。薄地ではあったが、部屋には暖房が利いているので、それ一枚きりでも十分快適に過ごせるだろう。手枷で拘束されていることを除けば、待遇はさほど悪くない印象を受ける。だからといって、決して許されるわけではないのだが――。

今度はベッドのまわりに目を向ける。

すぐ隣にはスチール机があった。その上には、少女の写真と書類が整然と重ねられていた。剛三の書斎で見せられたものと同様、実験の記録か何かのようだ。食事内容や起床時間、就寝時間、身長体重などに加え、何かの専門的な計測結果らしきものも書かれている。滯は無意識に眉を寄せた。

「大丈夫、きっと助けてあげるからね」

少女の前で腰を屈めて視線を合わせると、優しくそう言い、ニコッと安心させるように微笑みかける。

しかし、紅い瞳は小さく震えたままだった。

「ミサキ……どこ……？」

「えっ？」

可愛らしい声でたどたどしく紡がれた言葉は、紛れもなく母親の名前である。実験を行っている研究者と被験者なのだから、面識はあるだろうが、名前を呼ぶような関係だとは思いつかなかった。

「ミサキ……こわい、たすけて……」

少女の声は、次第に涙まじりになっていった。瞳もみるみるうちに潤んでくる。ジャラ、と鎖の音をさせながら、濡れた目元を幼い手のひらで何度も擦り上げた。

滯は息を詰める。

少女には実験に利用されている自覚がないのだろうか。たとえそうであっても、この状況が異常なことくらいわかりそうなものだ。いや、拘束した張本人が美咲だと知らないだけかもしれない。いったい美咲はどのようにして少女の信頼を得たのだろうか。そもそもどのような実験を施していたのだろうか。

バチッ——！！

考え込んでいた滯の背中に、突然の衝撃が駆け抜けた。声にならない悲鳴を上げる。よろけて

崩れ落ちそうになりながら、背後に振り向こうとすると、再び同じ箇所に焼けるような激痛が走った。

「ぐっ……」

こらえきれず、懐中電灯を握ったまま絨毯に倒れ込む。

「どう、し……て……」

薄れゆく意識の中で最後に見たものは、無表情で自分を見下ろす、手にスタンガンを持った母親の姿だった。いったい何が起きているのか、このときの濡にはまだ理解することができなかった。

「おいっ！」

「ん……」

「目を開けろ！！」

体を動かそうとすると背中がズキリと痛んだ。瞼を震わせながらゆっくりと目を開く。濡を覗き込んで切羽詰まった声を上げていたのは、フルフェイスのヘルメットをかぶった男だった。シールド部分が上げられて端正な目元が覗いている。それだけで、濡にはこの男が誰なのか認識できた。

「バイク男……？」

「この子はどこにいる？！」

まだ薄目しか開けずぼんやりとしている濡に、一枚の写真を突きつけて詰問する。それは、ここに監禁されていた少女の顔写真だった。少しずつではあるが記憶がよみがえってくる。スチール机に置かれた写真と記録、小さな少女の怯えた表情、父親の諦めたような態度、自分たちがここへ来た目的、そして、ひとりここで倒れていた理由——ハッとして、弾かれたように絨毯敷きの床から飛び起きる。

ベッドの上に少女の姿はなかった。開かれた手枷だけが残っている。

「お母さま……」

姿は一瞬しか見ていないが、あれは間違いなく母親の美咲である。スタンガンを使ってまでどうして——いまだに背中が痛むのを感じながら、ゆっくりと目を伏せて考え込む。が、バイク男は容赦なく肩を掴んで詰め寄ってきた。

「橘美咲が連れて行ったんだな？！」

「た、多分……ていうか、あなた何なの？」

濡は戸惑いがちに眉をひそめて疑問をぶつける。しかし、彼の耳に届いているのかさえわからない。こちらの質問には答えようともせず、掴んだ濡の肩を揺さぶりながら、怖いくらいの勢いで続けて問いただす。

「橘美咲はどこへ行った？！ 答えろっ！！」

「そんなの、私が聞きたいよ……」

悄然とした気持ちが声に表れる。バイク男はギリと奥歯を食いしばった。

「来い！！」

「あっ」

抵抗する間もなく、滯の両手首に金属製の手錠が掛けられた。そのまま腕を鷲掴みにされ、乱暴に連れ出される。引きずられるように歩く間、滯は手錠を千切ろうと力任せに引っ張ってみるが、ガシャガシャとうるさい音を立てるだけでビクともしない。逆に、手首の方が壊れてしまいそうだ。

——そうだ、師匠に連絡すれば……！

そうひらめいたものの、直後に不可能だと悟る。自分のヘッドセットがなくなっていたのだ。おそらく、悠人たちの動きを把握するために、美咲が奪っていったのだろう。滯の顔に浮かぶ不安の色はあっそう濃くなった。

ひしゃげた扉を二つくぐって、二人は外に出る。

バイク男は神経質にあたりを覗いていた。もちろん滯の腕は掴んだままである。ふりほどいて逃げることも考えたが、どう考えても上手くいきそうもない。彼の身体能力や武術の実力は、悠人と同等かそれ以上なのだから。だからといって、おとなしく連行されるわけにもいかない。

どうにかしなきゃ——。

正面階段の先にある駐車場に目を向けると、そこに遥と大地が立っているのが見えた。滯のいるところからは距離がある。それでも声を届かせるだけの自信はあった。悟られないようにそっと息を吸い込み、渾身の声を張り上げて助けを求める。

「遥っ！ お父さまっ！！」

「ばっ……！！」

バイク男は慌てて滯の口を塞いだ。だが、もう遅い。遥と大地がこちらに振り向いた。

「滯？！」

「動くな！」

口を覆っていた大きな手が外され、代わりに、頭に硬いものが押しつけられた。拳銃だ。階段を駆け上がろうとしていた二人の足が止まり、顔から一気に血の気が引いた。彼らに見せつけるように、バイク男はもう一度グリッと拳銃を押しつけ直す。

「橘美咲はどこへ行った？ あの子をどこへ連れて行った？！」

滯に尋ねたときと同じ語気で問いたです。しかし、遥は怪訝な顔になり小首を傾げた。

「どういうこと？」

「お母さまが私を気絶させて女の子を連れ去ったの！」

滯は一息に説明する。

遥は大きく目を見開き、そして咎めるように隣の父親を睨みつけた。だが、大地は自嘲めいた笑みを浮かべるだけである。それがどういう意味なのかはわからなかったが、彼が美咲のために嘘をついたことは間違いなさそうだ。

「師匠」

遥はヘッドセットのマイクを引き寄せて話し始める。

「母さんは滯を気絶させたうえ、女の子を連れて逃走したらしい……そうだと思う……今バイク男に捕まって、僕たちの目の前にいる……そう……僕にもわからない……了解」

「師匠ってあいつか」

神社での対峙を思い出したのか、バイク男は忌々しげに吐き捨てた。今一度あたりを確認すると、濡に銃を突きつけたまま腰を抱き寄せて階段を下り、茂みの方へじりじりと後ろ向きに足を進めていく。

「ど……どこへ行くの？」

「黙ってろ」

濡の質問は、凄みのある低音で撥ねつけられた。その間、遥と大地は顔を寄せて何かを話し合っていたが、やがて濡たちの方へ向き直ると、今にも飛び出さんばかりに重心を落として身構えた。

「濡！ リボルバー！」

濡はその声にハツとする。即座に、突きつけられていた拳銃のリボルバーを握り、捻り上げるように銃口を空に向けさせた。手錠のままの反撃が予想外だったのか、バイク男はひどく慌てふためいている。その隙に、遥と大地はそろってバイク男に突進していった。

「くそっ！」

バイク男は焦燥を露わにしてそう言うと、濡と揉み合ったまま、気持ちを落ち着けるように深呼吸する。瞬間、二人はうっすらと青白い光に包まれた。

「?!」

遥と大地の足が止まる。得体の知れない現象を目の当たりにして、当惑と恐怖の入り混じった表情を浮かべた。しかし、互いに顔を見合わせて小さく頷くと、再び駆け出し、左右に分かれて挟み打ちにかかる。すると――。

バン――！！

バイク男から放射状に強烈な白い光が走り、飛びかかる寸前だった遥と大地を一瞬で弾き飛ばした。二人は受け身を取りながらアスファルトに叩きつけられ、勢いよく転がっていく。

濡は息を詰めた。何が起こったのか理解できない。

バイク男は疲れたように吐息を落としながら、力の抜けた濡から拳銃を抜き取り、ブルゾン内側のホルダーにしまった。そして、濡の体を素早く肩に担ぎ上げると、がっちり太腿を抱え込んで走り出す。

「ちょっ、下ろしてっ！！」

「暴れたら殺すぞ！」

広い背中を叩きながら抗議していた濡は、物騒な脅しに息を呑み、凍りついたようにすべての動きを止める。本当に殺しかねないその迫力に、おとなしくするより他になかった。男が森を駆ける間、ずっと上半身逆さで担がれたまま揺さぶられ、次第に頭に血が上ってぼうっとしてくる。

「待てっ！」

喉の奥から絞り出したような苦しげな声。

顔を上げると、息を荒くして追ってくる大地と遥が見えた。時折、肩や腕を押さえて顔を歪めている。打ちつけられた痛みはまだ残っているようだが、それでも二人は速く、濡たちとの距離

は少しずつ確実に縮まりつつあった。

バイク男は舌打ちする。

それでも、濡を放り出そうとはしなかった。肩に担いだまま軽やかに振り返ると、追跡者に手のひらを突き出し、そこから大きな白い光球を打ち放つ。二人は避ける間もなく弾き飛ばされた。

「遙っ！ お父さま！！」

濡は有らん限りの声で叫んだ。

けれど、彼らは苦悶の呻きを上げるだけで、体を起こすことすらできない。それどころか、濡の呼びかけに答えることさえなかった。彼らの声を聞けないまま、その姿は次第に闇に紛れて見えなくなった。

濡を荷物のように担いだまま、男は森を抜け、アスファルトの上に飛び出した。

そこは、研究所へ行くときにいつも通る、切り立った海沿いを走る道路だった。もともとあまり通行量の多くないところで、深夜ともなればほとんど車は通らない。あたりは不気味に静まりかえり、せいぜい木々の葉擦れや単調な波音が聞こえるくらいである。

近くの茂みに、大型バイクが止められていた。

その後部座席に濡を下ろすと、男は肩で大きく息をした。フルフェイスの開いた部分には玉のような汗が浮かび、長めの前髪からは雫がぽたぽたと滴り落ちる。表情にも疲労が色濃く滲んでいた。

「あなた……いったい何者なの？」

濡は眉をしかめて低い声でそう尋ねる。

だが男は何も答えなかった。無表情で前の座席に跨がり、振り返る。

「逃げるなよ」

そう牽制すると、小さな鍵で濡にかけた手錠を片方だけ外し、その手を両側から自らの体にまわしたあと、再び元通り手錠を掛けて拘束する。あっというまの出来事だった。濡は男に後ろから抱きつくような格好になっている。彼から離れることは物理的に不可能な状態だ。

「ちょっ、なによこれ！」

「落ちたくなければしっかり掴まってろ」

バイクのエンジンが唸った。

ハンドルを握って前傾姿勢になった男に引っ張られ、濡は為すすべなく広い背中に寄りかかった。その悔しさに歯噛みする。しかし、彼は無慈悲にもエンジンを吹かして走り出した。知ってか知らずか、悠人の車がある場所とは反対方面へ向かって――。

「どこへ連れて行くの？ 私をどうするつもり？！」

「うるさい！ 黙ってろ！！」

凍てつく風を切りながら、二人を乗せたバイクが海沿いの道路を疾走する。ヘルメットをかぶっていない長髪は、大きく吹き流されて舞い乱れ、月明かりを受けてきらきらと煌めく。

濡の不安はますます募った。

もう追っ手は振り切ったのだから、ひとりの方がよほど身軽で逃げやすいはずだ。逃げるための人質ではなく、別の目的があるのだろうか。どちらにしろ、こんな得体の知れない男と一緒にいたら、どうなるかわかったものではない。

——それなら、イチかバチか……。

監禁でもされてしまっただけなら完全に手遅れになる。辛うじてではあるが、逃げられる可能性があるのは今だけだろう。迷っている場合ではない。濡は緊張で鼓動が速くなるのを感じながら、そろりと足を座席に引き上げて腰を浮かし、後部座席でしゃがむような格好になった。不安定な足場で、息を詰めて必死にバランスを取る。

「おい、何やってんだ！座ってろ！！」

ひどく慌てた声だが、それでも男はバイクを止めようとしめない。

濡はそっと目を閉じて息を整える。そして、決死の覚悟でありつただけの勢いをつけて立ち上がると、手錠で繋がれたままの両手を、下方から彼の上腕部に叩きつけるように引き上げた。

うわっ、という短い声とともに、彼の手は目論見どおりハンドルから離れる。このまま腕を引き抜けば自由になれると思った。しかし、当然のようにバイクはコントロールを失い――。

ドゴンッ！！

前輪が白いガードレールの支柱に激突した。その勢いで、二人は大きく放物線を描きながら向こう側に投げ出される。バイクも一回転してガードレールを乗り越え、崖にぶつかりながら転がり落ちていく。

下は黒い海だった。

二人の体は絡まり合ったまま、その海に吸い込まれるように落下していった。海面は小さなしぶきを上げただけで、何事もなかったかのように、再びゆったりと黒い波を打ち始める。辛うじて残された痕跡は、歪んだガードレールと道路についたタイヤ痕だけだった。

## 22. 人質

---

「ん……」

顔を掠める空気は刺すように冷たいが、背中にはほんのりと温もりを感じる。あたりに漂っているのは草木の湿った匂いだろうか。そこには僅かなカビ臭さも混じっており、無意識に顔をしかめるものの、同時にどこか懐かしいような気持ちも湧き上がる。

滯は、ぼんやりと目を開いた。

錆びて崩れかかったドラム缶、乱雑に積まれた藁、無造作に放置されたシャベルや布きれ、塗装が剥げて変色したトタン板、腐蝕しかけた金属製のバケツ、薄汚れたガラス窓、その高窓から降りそそぐ月明かり。どうやら、ほとんど廃屋といってもいい物置小屋か何かのようだ。そして、自分は――。

「動くな！」

耳をつんざく鋭い声に、滯はビクリと身をすくませる。

「せっかく温まった空気が逃げる」

「あ……」

滯と男は薄汚れた一枚の毛布にくるまっていた。その毛布以外は、おそらく二人とも何も身につけていない。滯は男の膝の上で抱きかかえられていたが、密着している部分は間違いなく双方とも素肌である。

ただひとつ、滯には手錠が嵌められている。

その感触と痛みで、何があったのか記憶がよみがえってきた。研究所からこの男に連れ去られる途中、滯が逃げ出そうとしたことで、二人一緒にバイクごと真冬の海へ転落したのだ。それ以降のことは何も覚えていない。

「おまえ、心中でもする気だったのかよ」

「……私は、ただ逃げようとしただけ」

「バカが、結果を考えてから行動しろ」

「そっちこそ！」

滯はカッとして後ろに振り返った。瞬間、大きく目を見張って凍りつく。

「それが、本当の色……？」

「ああ、カラコン流れちゃったのか」

至近距離で自分に向けられていたのは、まるでサファイヤのような鮮やかな青の瞳だった。高窓からの月明かりを浴びて、神秘的に、不気味に、怖いくらいの鮮烈な輝きを放っている。碧眼などそうめずらしいわけでもないのに、なぜだか身の毛がよだつほどゾクリとさせられた。

「あなた、いったい何者なの？」

「答える義務も義理もない」

「あの女の子と同じで、人間じゃない……？」

滯は一方向的に憶測を投げかける。不思議な力を使うことから考えても、女の子を知っていたことから考えても、おそらく間違いのないような気がした。しかし、男は露骨にムッとして眉根を寄

せた。

「それはおまえらの言い分だ」

「えっ？」

「正確なことは俺にもわからないが、もともと同じ人間だったのは事実だ。おそらく、環境の違いにより別々の進化をたどった、というところだろう。俺らの側から言わせれば、おまえらが人間じゃないとも言える」

滯はハッと小さく息を呑み、目を伏せた。

「……ごめんなさい」

「俺も感情的になった」

男は気持ちを整えるように呼吸をすると、静かな口調で話を続ける。

「たとえ双方にゲノムの違いがあったとしても、本質的な部分では何ら変わるところはない。外見にも特徴的な相違はない。どちらも紛れもなく『人間』といえる。それが、この国で何年か暮らしてきた中で得た結論だ」

「でも、手から光みたいなのを出してたのは、その遺伝子の違いによるものだよな？」

滯が尋ねると、男は急に怪訝な顔になった。

「おまえは使えないのか？」

「あんなこと出来るわけないよ」

自分たちの中には出来る人など誰ひとりいないはずだ。何年もこちらにいながら知らなかったのだろうか、と滯は不思議に思う。それに、もし滯にあのようなことが出来るのならば、とっくにその力を使って反撃していただろう。こんなところまでむぎむぎと連れて来られはしなかった。

彼の眉間に、ふと深い皺が刻まれる。

「力はあるんだがな」

「え、どういうこと？」

「ああ……」

彼は低い声で相槌を打つと、思考を巡らせながら言葉を紡いでいく。

「あれは……俺らは魔導というような呼び方をしてたが、おそらくゲノムの違いには関係ないはずだ。俺らの中でも力のない奴は大勢いたし、こっちの世界でも力を持った奴はいる。おまえたち双子のようにな」

「私と、遥？」

滯は困惑して眉をひそめ、首を傾げた。

「でも、本当にあんなこと出来ないんだけど……私も、遥も……」

男が嘘をついているようには見えなかったが、滯ももちろん本当のことしか言っていない。少なくともこれまで一度もやったことはないし、やろうとしたこともない。訓練すれば出来るようになるのだろうか。まるでテレビゲームのような現実味のないことが――。

男はふと表情を険しくして考え込むと、若干低めの声で切り出す。

「橘美咲が研究していたのは、この力だ」

「えっ……」

「知らなかったのか？」

そう尋ねられ、滯はうつむいたまま小さく頷く。美咲が何について研究しているのかも、武蔵の不思議な力がそれであることも、自分たちがその力を持っていることも、何ひとつとして知らなかった。もしそれらが真実だとすれば、自ずと一つの推論が導き出される。

自分たちも、母親に人体実験をされていた——。

幼い頃から頻繁に研究所に連れて行かれ、健康診断と称して検査や点滴をされていた、という事実を併せて考えると、もはやそう確信せざるを得なかった。滯としては信じたくなかったが、遥の言ったことはやはり間違っていなかったのだ。

「橘美咲の研究は、生体エネルギーに関するものだ」

男は耳元で語り始めた。

「俺やおまえのように魔導力を持つものであれば、体内で作り出すことができるが、橘美咲はそれを人工的に生み出そうとしている。もし自在に発動させることができれば、おそらく人類最大の兵器となるだろう。原爆と同規模のものも不可能じゃない。それもいっさい汚染のないものだ。すべてを吹き飛ばして更地にしたうえで、すぐ次の目的に利用することもできる。ただ、そのエネルギーに耐えうる器を作ることができていない。器となりうるのは、今のところ、もともとその力を持っている人間だけ——つまり、俺や、あの子や、おまえら双子だ」

滯の鼓動がドクンと打った。

男の顔は険しさを増す。

「実験でその原理を解明しようとしているのか、手っ取り早く人間兵器を作ろうとしているのか——どちらにしてもあの子を利用しなければ進められない。あの橘美咲が、そう簡単に手放してはくれないだろうな」

ザッ、ザッ、ザッ——。

ふいに、小屋に近づく鈍い足音が耳に届いた。

背後の男は瞬時に全身を緊張させた。息をひそめながら、滯を抱きかかえる手に力を込め、もう一方の手で滯の口を塞ぐ。鼻まで一緒に覆われてしまったため、滯は次第に息苦しくなりもがき始めるが、彼の大きな手はビクともしない。

「武蔵、おるのか？」

「ああ……入ってきてくれ」

しゃがれた声を聞くやいなや、男は大きく安堵の息をついてそう答え、ようやく滯の口を覆っていた手を外した。すると、立て付けの悪い扉がギギギと軋みながら開き、地味な作業着姿の老人が小屋に入ってくる。足腰はしっかりしてそうだが、頭髪はほとんど真っ白なうえ、顔には深い皺が刻まれており、剛三よりも幾分か年老いている印象を受けた。

「ほれ、着替えじゃ」

「サンキュ」

男は邪気のない笑顔で答え、そそくさと一人毛布から抜け出していった。乱雑に地面に落とさ

れたその毛布を、濡は手錠で繋がれたまま大慌てで掻き寄せ、裸の体を隠すべくあたふたと巻き付けていく。恨めしげに口をとがらせ横目を流しても、彼はまるで意に介していないようだ。前を隠すことなく堂々と立ち、老人から大きな手提げの紙袋を受け取っていた。

「ムサシ……って名前？」

「そ、宮本武蔵の武蔵」

紙袋から取り出した衣類を身につけながら、軽い口調でそう答える。本当のことを知らないときであれば、素直に信じたかもしれないが、今となっては胡散臭いと思えない。

「本名じゃないよね」

「世を忍ぶ仮の名だ」

そんなふざけた言いまわしで答えると、彼は続けてジーンズを穿き、ブルゾンに袖を通し、半乾きの黒い前髪を大きく掻き上げる。

「……髪、染めてる？」

濡が遠慮がちに尋ねると、武蔵と名乗った男はニヤリとして振り向いた。その意味ありげな視線に耐えかねて、濡はぷいっと顔をそむける。そして、ほんのり染まった頬を膨らませながら、縋るように毛布を掴んで身をすくめた。

「さ、行くか」

「ちょっ、もういいでしょう?!」

濡は体をよじって精一杯の抵抗を示すが、彼はものともせず、薄汚れた毛布ごとひょいと抱き上げた。

「何のためにわざわざ助けたと思ってんだ。おまえは人質だ」

「せめて服くらい着させて！ 私の服はどうしたの?!」

「そうだ、忘れてた」

武蔵の振り向いた方に、二人の着ていた衣類が無造作に積み上げられていた。まだ濡れているようだ。彼は横抱きにした濡を下ろすことなく片腕を伸ばし、その衣類の山に手のひらを突き出すと、日本語でも英語でもない理解不能な言葉を呟く。すると手のひらから強烈な光球が放たれ、一瞬ですべて燃え尽きたかのように灰と化した。

「ちょ……！」

抗議は言葉にならなかった。驚きのあまり口を半開きにして啞然とする。武蔵はそんな濡をしっかり横抱きにしたまま、あたりを警戒しつつ、作業着を身につけた老人とともに早足で小屋をあとにした。

外はまだ暗く、夜は明けていなかった。

濡たちのいた小屋は、枯れ木に覆われた小山を少し登ったところにあったようだ。他に建物は見当たらない。不気味なくらいの静寂があたりを包んでいる。草や小枝を踏みしめる音がやけに大きく響いた。

「ねえ、おじいさま」

隣を歩く老人に、濡はあからさまに媚びるような声をかけた。

「私、橘財閥会長の孫なの」

「ほう」

興味をひかれたように大きくなる目。脈ありとばかりに、老人の方に首を伸ばして畳みかける

。「ね、どうにかして私を逃がしてくださらない？ 無事に逃げられたらきちんとお礼をするわ。私個人でも一千万くらいなら出せるし、祖父に頼めば三億くらいは用意してくれると思うの。孫娘の命の恩人にならそのくらい惜しくないはずよ」

老人はフツと鼻先で小さく笑った。濡を一瞥し、ゆったりと後ろで手を組み合わせる。

「お嬢ちゃん、ワシは友人を売ったりはせんよ」

「友人？ だったら悪事に手を染めるの止めなきゃ！」

「武蔵は何も間違ったことをしておらんだろう」

「うら若き乙女を拐かそうとしてるじゃない！！」

「おまえ、いいかげん黙れ」

黙って二人の会話を聞いていた武蔵が、うんざりした口調で割り込んできた。呆れたような目つきで、腕に抱く濡をじとりと見下ろしている。確かに、犯人の目の前でこんな交渉をするなど、馬鹿げた行動としか言いようがないだろう。それでもほんの僅かでも可能性があるのなら、どんな無謀なことでも試さずにはいられなかった。

こうなったら――。

「大声で助けを呼ぼうとか考えるなよ」

まるで思考を見透かしたかのようなタイミングで、武蔵がそう牽制する。濡はグッと言葉を詰まらせたが、すぐに気持ちを立て直し、まっすぐ強気な視線を送って挑発する。

「私はあなたにとって大切な人質なんでしょう？」

「ああ、おまえには生きててもらわないと困る。だが――」

武蔵はいったんそこで言葉を切ると、足を止め、凄みのある低音で静かに威嚇する。

「おまえを助けに来た奴は、全員殺す」

「なっ……」

濡は口を半開きにして固まった。

「悲鳴を上げたら、無関係な人も含めてまわりは皆殺しだ。俺にはそれが可能だということも、今のおまえならわかるだろう。無駄な死人を出したくなければ大人しくしてろ。いいな？」

「……………」

理性的に諭すような口調であるが、実質は脅迫以外の何物でもない。そのようなことに素直に頷く気にはなれない。だからといって逆らうことも出来はしない。不条理に耐えつつ、キュッと小さな唇を噛み締めるのが精一杯だった。

しばらく林道を下ったところに、小型トラックが駐めてあった。

荷物の積載部分がアルミの箱になっている、宅配業者が配達で使っていそうな車だ。それなりに手入れはされているが、かなり古びているように見える。しかし、それがかえって本物らしさ

を醸し出していた。

「検問はあったか？」

「いや、一度も見かけなかったな」

「念のため大通りは避けてくれ」

「わかっておる」

二人はそんな会話を交わしながら、トラックの後方へと向かう。

老人が荷台の扉を開くと、武蔵は濡を抱えたまま軽々と飛び乗った。そして、荷台の中ほどでそっと濡を下ろし、積まれた段ボール箱をいくつかどけて、意図的に隠していたと思われる奥の扉を開いた。その向こう側は、人ひとりが何とか立てるくらいの狭い空間になっている。いわゆる隠し部屋のようなものだろう。

「入れ」

この状況では従うより他にない。

濡は長い毛布を内側からつまみ上げて中に進んだ。すぐあとから彼も入って扉を閉める。微かな光さえ届かない暗闇の中、武蔵は手探りで濡を両腕に閉じ込める。薄いアルミの向こうからは、段ボール箱を引きずるような音が聞こえた。

「武蔵、良いか？」

「ああ、行ってくれ」

老人は了解を得るとすぐに荷台から降り、運転席に乗り込んでエンジンをかける。もう取り返しの付かないところまで来てしまったのではないか、という濡の不安をよそに、トラックは小刻みに振動しつつ軽快に林道を走り出した。

「おい、起きろ」

鼓膜を震わせたその無愛想な声で、濡は目を覚ました。

いつのまにか、立ったまま武蔵に身を預けて眠っていたようだ。トラックはすでにエンジンを切って停車している。一時間か、二時間か、どのくらい走ったのかわからない。ここがどこなのかもわからない。最初のうちは外部の音に耳を澄ませていたが、夜明け前という時間もあり、これといって手がかりらしきものは得られなかった。

「おいっ！」

「起きてるよ」

濡はムツとしてぶっきらぼうに言い返す。彼から離れようとするが、たくましい両腕に拘束されて身じろぎもできない。文句を言おうとしたそのとき、ギィ、と音を立てて外から扉が開かれた。

「サンキュ、じいさん」

武蔵はそう言いながら、濡を抱きすくめたまま二人一緒に荷台へ出た。

そこには、半開きになった外扉から光が射し込んでいた。老人の顔も武蔵の顔も判別できる。が、トラック外の様子はその扉が邪魔してよく見えない。全体的に明るそうに見えるし、鳥のさえずりも聞こえるので、もう夜は明けているようだ。

「わっ……」

ぼんやりと考えごとをしていると、いきなり武蔵の着ていたブルゾンを頭に巻き付けられた。視界が遮られて何も見えなくなる。あたふたしていると、トラックに乗せられたときと同じように、毛布にくるまれた体を武蔵に抱え上げられた。

「息苦しいかもしれないが、しばらく我慢してくれ」

そう言って、彼はそのまま軽やかに荷台から飛び降り、坂道らしきところを大股で歩いて上っていく。足音は一つだけだ。トラックの走り去る音が聞こえたので、あの老人は武蔵を下ろして帰ったのだろう。

数分ほど歩き、どこかの建物に入った。

座らされるような格好で下ろされ、頭に巻き付けたブルゾンを外される。はあっと大きく口を開けて酸素を吸い込むと、鎖で繋がれた両手を握り合わせながら、おずおずと周囲を見まわしていった。

そこは、ただっ広い部屋だった。

調度品はほとんど置かれておらずガランとしている。ただ、左奥にはダイニングテーブルと片付けられた台所があり、その一角だけは多少の生活感を窺うことができた。正面奥はガラス窓になっているようだが、厚手のカーテンが引かれていて外は見えない。

武蔵はどこからかもう一つの手錠を持ってくると、細いポールに濡の左手を繋いだ。

「なっ……」

右手と左手、左手とポールがそれぞれ手錠で繋がれている状態だ。両腕を引っ張り出されたことで、体に巻き付けてあった毛布が滑り落ちたが、武蔵はすぐにそれを拾い上げて巻き付け直した。ぞんざいではあるが、とりあえず見られたくない部分は隠されている。

「俺、シャワー浴びてくるからな」

「あっ、自分だけずるい！」

「じゃあ、おまえも一緒に入るか？」

「誰がっ！」

濡は噛みつかんばかりの勢いで言い返した。

しかし、武蔵はふっと軽く笑っただけで、思い出したようにエアコンをつけると、何も言わずに部屋をあとにした。耳に届くのは静かな運転音だけである。ガシャリ——身を振ると手錠が無機質な音を立てた。濡は現実を思い知らされたように感じ、ポールに頭をつけてぐったりとうなだれ、大きく溜息をついた。

——あれ、もしかして今ってチャンス？

部屋が暖まってきた頃、濡はふとその考えに至った。

落ち込んでいる場合ではない。外に見張りがいるわけでもなさそうなので、手錠さえなんとかすれば逃げられるはずだ。慌てて顔を上げ、左手が繋がれているポールを観察する。見たところ手首ほどの太さしかないが、金属製で継ぎ目もなく、ちょっとやそっとでは壊れそうもない。床から天井まで通っているため、壊さずに抜くことも不可能である。手錠の鎖を引きちぎることも

上手くいかなかった。とはいえ、可能性としてはそれがいちばん高いだろうと思う。

滯は決意を固め、ひとり真剣な顔で頷いた。

ガシャガシャ、ガシャン——歯を食いしばって痛みに耐えながら、何度も全力で引きちぎろうとする。すでに痛々しく変色していた手首に、新たな傷がいくつも重ねられていく。毛布が落ちて上半身が露わになったが、そんなことに構っている余裕はない。あまりの痛さに脂汗が滲んでも、傷口から赤い血が滲んでも、手を止めようとはしなかった。

「まったく、無駄なことはやめろ」

呆れたようにそう言いながら、武蔵が部屋に戻ってきた。半袖Tシャツにジーンズという冬らしからぬ格好だが、エアコンのきいたこの部屋ではちょうどいいくらいかもしれない。首にかけたバスタオルで無造作に髪を拭きながら、拘束されている滯の方へと足を進める。

「……っ！」

そのとき、滯は自分の上半身が露わになっていることに気付いて息を呑んだ。しかし、手錠で拘束されたこの状態では、毛布をかけ直すことも体を隠すこともできない。昨晚からすでにさんざん見られているので、今さらではあるが、それでもやはり恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

「む……無駄かどうか、やってみないとわからないじゃない……」

「その手錠はおもちゃじゃない。おまえよりよっぽど頑丈だ」

「……………」

言われるまでもなく、本当はもう身をもって気付かされていた。ただ認めたくなっただけである。絶望的な現実を突きつけられて沈む横顔を、武蔵はしゃがみ込んでじっと見つめた。

「シャワー浴びてこい」

「えっ、いいの？」

「悪臭を放たれても困るからな」

「悪臭って……」

滯は微妙な面持ちで口をとがらせるが、武蔵は無表情のまま鍵を取り出し、ポールに繋がれていた左手の手錠を外した。ただし、両手を繋ぐ手錠はそのままである。

「下手なことは考えるなよ」

「ちょっと、毛布っ！！」

滯は武蔵に抱き上げられた。かろうじて下半身に掛かっていた毛布は、無情にも彼に払いのけられ、今は何ひとつ身につけていない状態だ。慌てて落ちた毛布を示しながら声を上げたものの、彼は醒めた目で滯を見下ろすだけである。

「シャワーはすぐそこだからいいだろ」

「そういう問題じゃなくてっ！」

必死の抗議も虚しく、結局、滯は素っ裸のままバスルームへ連れて行かれた。

「……ずっと見張ってるつもり？」

「おまえは油断ならないからな」

バスルームの扉を大きく開け放ったまま、武蔵はその入り口を塞ぐように座り込んでいた。狭いバスルームなので必然的に距離は近くなる。そんなところからじっと見張られていては落ち着かない。何より、逃げるのが格段に難しくなってしまう——。

それでも、この機会を逃すつもりはない。

濡は不自然にならない程度に自分の体で隠しながら、シャワーの温度設定をさりげなく最高値までまわす。残酷だとは思ふものの躊躇してはいられない。シャワーヘッドを手にとって堅く握りしめると、目一杯カランを捻り、武蔵の顔面に思いきり熱湯シャワーを浴びせかけた。つもりだったが——。

「えっ?!」

彼の前にガラスでも置かれているかのように、熱湯シャワーはその手前できれいに阻まれた。アイボリーの床へ垂直に流れ落ち、もわもわと白い湯気が立ち上る。その向こうから現れたのは、凄まじい怒気を放つ青の双眸——。

ゴトン。

濡はシャワーヘッドを滑り落とした。立ち上がった彼に気圧されて後ずさるが、たったの二歩で壁にぶつかる。背筋にぞくりと冷たいものが走り、膝は今にも崩れそうなくらいガクガクと震え出した。

「本当に油断も隙もねえな」

武蔵は低く唸るようにそう言うと、ズイッと間合いを詰め、大きな手で乱暴に顎を掴み上げた。

「ぐ……」

濡の顔は苦痛と恐怖で大きく歪み、喉の詰まるような声が漏れた。それでも彼の手は緩まない。鮮やかな青の瞳が、視界に映るすべてが、次第にぼんやりとその輪郭を失っていく。

意識が途切れかけたそのとき、手が離された。

濡はぐったりと壁に寄りかかり荒く呼吸をする。足もとで身を屈めた武蔵に目を落とすと、彼は温度設定を適正值に戻しながら、床に投げ出されたシャワーヘッドを拾い上げていた。自分の手で水温を確認したあと、そのシャワーを濡の頭上から浴びせかける。

「んっ?!」

濡は思わず目をつむって下を向くが、武蔵は容赦なく強い水流で浴びせ続けた。そして、ありえないくらい大量のシャンプーをかけると、乱暴な手つきで髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜていく。みるみるうちに、濡は頭から体まで泡だらけになった。

髪も、体も、すべて武蔵の手で洗われた。

初めのうちは怒りまかせの乱暴な手つきだったが、その荒々しさは徐々に消えていき、体を拭かれるときにはすっかり落ち着いたものになっていた。その手で服も着せられる。用意されていたのは、武蔵のものと思われる黒のTシャツ一枚きりである。しかしながら太腿くらいまで丈があり、見られたくない部分を隠す役割は、ひとまず果たしているといえるだろう。

部屋に戻ると、再びポールに繋がれる。

手首は広範囲にわたって傷ついており、内出血もひどく、もはや暴れる気力はなくなっていた。手錠を外されたのはTシャツに袖を通すときだけで、あとはずっと嵌められっぱなしである。バスルームでは湯が沁みてさんざんな思いをした。今となっては、おとなしく繋がれているだけでも痛みを感じる。

武蔵は台所で食べるものを作っていた。

炊飯と煮物の匂いに食欲が刺激され、堪え性のないおなかが、ぎゅるぎゅるとけたたましく音を立てた。滯は顔を赤らめてうつむく。武蔵には聞こえていないことを祈った。だが――。

「待ってろ、もう少しだから」

彼はニッと唇に笑みをのせて振り返る。

その見透かしたような態度が無性に腹立たしい。普通、気付いても気付かないふりをするものだ。放っておいてくれればいいのに――滯は頬を染めたまま口をとがらせ、上目遣いで睨みつけた。

野菜の煮物と白飯、お茶、箸などが、ダイニングテーブルの上に並べられている。

それを挟んで、滯と武蔵は向かい合わせに座っていた。まるで家族の食卓のようである。ただ、滯の両手を繋ぐ銀色の手錠が、その家庭的な雰囲気をも台無しにしていた。

「材料がなくてたいしたものが作れなかったが、今日はこれで我慢してくれ。あしたからはもう少しまともなものを食わせてやる。まあ、財閥のお嬢様が満足するような豪勢な料理じゃないけどな」

武蔵は箸を手に取りながら淡々とした口調で言う。

しかし、滯は膝に両手を置いたまもうつむいていた。

「手錠のままじゃ食えないなんて言うなよ」

「そうじゃなくて……」

武蔵から向けられる追及の視線に思わず身をすくませ、さらに深く顔をうつむける。言うべきかどうか少し迷っていたが、答えを待たれる沈黙に耐えかねて、そろりと戸惑いがちに口を開く。

「何か……毒とか、変なもの入ってないかなって……」

「はあ？」

武蔵は裏返った声を上げると、これでもかというくらい盛大に溜息をついた。

「おまえ、本っ当にどうしようもないバカだろ。わざわざ毒なんか仕込まなくても、その気になれば、おまえくらい簡単に殺せるんだよ。そんな七面倒くさいことをやる必要がどこにあるっていうんだ」

「殺すのが目的じゃなくて……自白剤とか、惚れ薬とか……」

滯としては真面目に考えたつもりだったが、武蔵は心底呆れたような顔をしていた。溜息をつきながら滯の皿に箸をのばすと、じゃがいもを取って自分の口に放り込む。そして、見せつけるようにモグモグと口を動かして飲み込んだ。

「これで信用したか？」

「でも……」

ぎゅるるる、と再びおながが高らかに鳴り響いた。よりによってこのタイミングで。あまりの恥ずかしさに、濡は顔を紅潮させて小さく身を縮こまらせる。今にも頭から蒸気が噴き出しそうになっていた。

「食え、命令だ」

武蔵は面倒くさそうに言いつける。

不安に思う気持ちは残っていたが、そこまで言われては仕方がない——と内心でもっともらしい言い訳をしつつ、濡は両手を繋がれたまま箸を持ち上げ、危なっかしい手つきでじゃがいもを口に運んだ。

「……おいしい」

「だろ？」

思わず呟いてしまった一言に、武蔵は嬉しそうに目を輝かせた。その屈託のない表情が、濡の警戒心を和らげる。両手を繋がれているという慣れない状態で、何度も箸を往復させ、時間は掛かったがすべてきれいに平らげた。

窓には遮光カーテンが引かれているので、外の様子はわからないが、だいぶ日が高くなっているように感じた。隙間から漏れ入る光が、ここへ来たときよりかなり眩しさを増している。そろそろ昼になる頃かもしれない。

濡は再び繋がれたポールの横に座り込んだまま、せわしなく動く武蔵を眺めていた。

彼は食事の後片付けを慣れた手つきで済ませると、押し入れから一組の布団を取り出し、ポールに一端をくっつけるように敷き始めた。見るからに薄っぺらい煎餅布団で、あまり寝心地は良くなさそうである。それでも、昨晚からまともに休めていない体には、十分すぎるほどありがたいものだ。しかし、濡のために敷いてくれたのかと思いきや、彼自身が真っ先にその布団で横になった。

「俺はしばらく寝る。おまえも寝た方がいい」

「えっと……一緒に、ってこと……？」

「布団は一組しかない」

その愛想のかけらもない返答にムツとしながらも、濡はガシャガシャと手錠の音をさせて頼み込む。

「じゃあ、せめてこれ外してくれない？」

「そのままでも寝られるだろう」

考えてみれば、これから寝ようというときに、人質の拘束を解く犯人などいない。いっそ座ったまま眠ろうかとも思ったが、布団の引力には抗えず、彼の隣へそろりと足から潜り込む。両手はポールに拘束されたままなので、バンザイのような格好になっているが、座っているより随分と体が楽に感じた。

隣の武蔵は、すでに目を閉じていた。

その無防備な横顔を見ていると、次第に胸がざわついてくる。濡はまだ逃げることを諦めていない。手錠を外すことができたとしても、逃げるのは難しいかもしれないが、油断をさせられれば勝機はあるだろう。やるなら彼が疲れている今しかないのでは——少しの逡巡の後、若干の緊張を覚えながら隣に身を振った。

「……ねえ」

「何だ」

目を閉じたまま返事をする彼に、なけなしの艶をのせて問いかける。

「このまま寝ちゃうのもつまらなくない？」

「はあっ？」

「ほら、男と女が一つ布団の中にいるんだし……」

「面倒くさいこと言うな。俺は疲れてんだ」

武蔵はぶっきらぼうに言い捨てて背中を向けた。微塵も興味がないと言わんばかりのその態度に、濡は本来の目的そっちのけでカチンときた。私にだって少くくらい色気はあるんだから——半ば意地になりながら、自分にできるありったけの甘い声で囁く。

「そんなこといわずに、ねえ……しょ？」

「ったく……」

武蔵はうんざりしたようにそう言うと、布団を跳ね上げて体を起こし、溜息をつきながら前髪を掻き上げた。そして、おもむろに濡の足首を掴んで引き寄せると、それをグイッと持ち上げて大きく左右に広げる。

「ひゃっ！ ちょっ、まっ……！！」

完全に予想外だったその展開に、濡は顔を真っ赤にしてパニックを起こした。着ているのはTシャツ一枚きりで下着はつけていない。彼の前に自分の秘所が晒されているのだ。抵抗しようと足をばたつかせるがびくともしない。ますます焦る濡を、武蔵は脚の間からじっと無表情で見下ろしていた。

「やるんだろ？」

「ま、まずこれとってよ！」

濡はポールに繋がれた手錠をガチャガチャ動かし、大慌てで訴えかけた。

しかし、武蔵の表情はまるで変わらない。

「別にこのままでも出来る」

「やっ、そんなのダメ！！」

「なんで？」

濡はすでに頭が真っ白になりかけていた。それでも、彼を納得させる答えを捻り出すべく、死にももの狂いで思考を巡らせる。額にはじわじわと汗が滲んだ。やがて、彼の冷ややかな視線に追いつめられ、考えがまとまらないまま口を開く。

「わ……たし……ノーマル至上主義なの！！」

「……………くっ」

武蔵は掴んでいた濡の足を下ろしてうつむくと、小刻みに体を震わせ始めた。

「えっ……あ、の……」

「おまえ、本当にどうしようもないバカだな」

その声は明らかに笑いを含んでいた。頭の後ろで手を組み、滯の隣にごろんと仰向けになる。「おまえの考えてることなんて丸わかりなんだよ。それに、手錠を外したって俺から逃げられはしない。やられ損になるだけだぞ。結果を考えてから行動しろって言っただろう」

「だって……帰りたいんだもん……」

率直な言葉を口に上すと、堰を切ったように気持ちがあふれ出す。

「誰だってそうでしょう？ 得体の知れない人に監禁されたら、どうにかして逃げ出したいって思うじゃない。逃げる方法があるなら試してみたいじゃない。バカかもしれないけど必死なんだもん。遙や師匠のところに帰りたい、学校に行きたい、遊びに行きたい……ずっと続いていた幸せな日常に戻りたい……ただそれだけなのに、こんな……」

最後の方はほとんど涙声になっていた。鼻の奥がつんとして目頭が熱くなる。それでも、まっすぐに白い天井を見つめ、涙がこぼれないよう懸命に堪えていた。

暫しの間、沈黙が続いた。

耳に届くのは、鳥のさえずりと木々のざわめきくらいである。

二人とも身じろぎ一つせず、ただじっと息をひそめている。

そこには、呼吸さえ許されないような、張り詰めた空気が流れていた。

「研究所に監禁されていた女の子は、俺の姪だ」

思慮深い声が、沈黙に落とされる。

滯は小さく息を吞んで隣に振り向いた。先ほどと同じく、武蔵は仰向けのまま頭の後ろで手を組んでいる。その声からも横顔からも感情は窺えない。ただ、青い瞳だけは、思いを馳せるように遠いところへ向けられていた。

「俺の故郷では、小さな子供が行方不明になる事件が続いていた。わかっているだけで十人は下らない。いずれも犯人からの接触は皆無だった。巷では神隠しだの何だのと言われていたが、俺たちは、外部からの侵入者の仕業だとあたりをつけていた。そんなとき……姪のメルローズも、忽然と姿を消してしまった」

穏やかな口調だが、そこにはやるかたない思いが滲んでいた。

「俺はメルローズを捜すために故郷を出た。けれど手がかりが掴めないまま何年も過ぎ、諦めかけていたとき、ようやく掴んだ糸口が橘美咲の研究だった。残念ながら今回は救出に失敗したが、橘美咲に監禁されていたという確証は得られた」

地下室のベッドで手枷を嵌められていた、白いワンピースを身につけた赤い瞳の少女——忘れようとしても忘れられない鮮烈な光景だ。もっとも、それを目にしたのは滯だけであり、武蔵はまだ対面も果たしていない。

「俺は必ずメルローズを救う……といっても、故郷に帰る手立てを失った俺には、あの子を両親のもとに帰してやれないかもしれない。けれど、せめて人並みの幸せくらいは与えてやりたい

と知っている。実験体として一生を終えさせたくはないんだ」

ドクン、ドクン、と滯の鼓動は大きく打ち始めた。次第に息をするのも苦しくなってくる。

武蔵は青い双眸をゆっくりと滯に振り向け、真摯に見据えた。

「だから……ここにいてくれ。人質になってくれ」

切実な声が深く突き刺さる。

彼の姪である小さな少女は、一方的に日常を奪われ、人生を台無しにされ、未来さえ望めなくなっている。そして、その犯人はおそらく自分の母親であり、今もどこかで少女の監禁を続けている。なのに、自分は自分のことしか頭になくて——考えているうちに、いつしか涙が溢れて止まらなくなった。顔をそむけても嗚咽までは隠しようがない。

「泣きたいのはこっちなんだがな」

「ごめんなさい……わた、し……お母さまのせいでこんな……」

「悪いのはおまえじゃないし、連帯責任だとか言うつもりもない」

「でも……」

武蔵は煩わしげに溜息をつき、上半身を起こした。

「罪悪感や同情で泣くのは勝手だが、俺からしたらただ鬱陶しいだけだ。おまえに泣かれても謝られても、問題は何かひとつ解決しないし、所詮はおまえの自己満足でしかない」

返す言葉がなかった。それでも涙を止めることは出来ず、背を向けてすすり上げていると、ふと覆い被さるように上から覗き込まれた。思わずビクリと身をすくませる。自分を見下ろす武蔵は無表情で、怒っているのかどうかさえわからない。しかし——。

「悪かった」

彼はそれだけ言うと、おもむろにTシャツの裾で滯の涙を拭い、宥めるようにぼんぼんと軽く頭を叩いた。そして、再び布団を掛けて仰向けになる。目を閉じた横顔からは何の感情も読み取れない。滯は戸惑いを感じながら、濡れた漆黒の瞳を細めてそっと彼を見つめた。

## 23. 代償

---

「バイクがここから落ちたのは間違いない」

悠人はそう言いながら、眉をひそめて大きく歪んだガードレールを見つめた。その手には壊れたサイドミラーが握りしめられている。先ほど崖下の海に潜って拾ってきたものだ。そのため、頭から靴先までずぶ濡れで、足もとには小さな水たまりができています。寒さのせい、小刻みに体を震わせて奥歯を食いしばった。

「もう一度、探してくる」

「落ち着いて師匠」

背を向けて海に戻ろうとした悠人を、遥は冷静に引き留める。

「濡れちが研究所を去ってから、どれだけ経ったと思ってるの。真冬の海にそんなに長くはいられない。今も海の中にいるんだとしたら……この極寒の海の中にいるんだとしたら、生きている可能性は限りなくゼロに近い。師匠が命を懸けることじゃないよ」

「しかし……」

悠人は唇を噛み、反論の言葉を飲み込んだ。

遥は目を細めて濃紺の空を仰ぐ。

「濡れは生きてるよ、絶対に」

今はそれしか言えなかった。何の根拠もない発言であることは、悠人にもわかっていただろう。だが、それを口にした遥の気持ちは伝わったらしく、顔をつらそうに曇らせながらも小さく頷いた。

遥は後ろに振り返り、車の後部座席を覗き込んだ。

「篤史、何か手がかりは？」

「可能な限りの映像や写真を探しているが、今のところ手がかりらしきものは見当たらない。あの男の名前か職業がわかれば、もっと探しようがあるんだけどな」

篤史の声には苦悩と焦燥が滲んでいた。それでも諦めてはいない。膝に載せたノートパソコンから目を離さず、指を踊らせるようにキーボードを叩いている。その険しい表情を、ディスプレイの光がぼんやりと浮かび上がらせていた。

濡れがバイク男に連れ去られてから、すでに一時間半ほどが経過している。

連れ去られてすぐ悠人に追ってもらえば、もしかしたら奪還できていたかもしれない。しかし、バイク男の攻撃で遥のイヤホンマイクが壊れてしまい、身体も打ちのめされていたため、すぐに状況を報告することは叶わなかったのだ。もちろん、遥と連絡が取れなくなった状況を、悠人が放置していたわけではない。篤史に指示を出して様子を見に行かせたが、遥たちはすでに森に入ったあとで、簡単に探し出すことができなかったのである。

遥がようやく体を起こしたところで、篤史が発見された。真っ先に彼のマイクを借りて悠人に報告する。

当然、悠人はすぐさま濡れを探しに行こうとしたが、不意に現れた公安の溝端がそれを引き留

めた。どうやら断りもなく近くで作戦を監視していたようで、研究所周辺の不穏な様子に気付いてやって来たらしい。美咲が少女を連れて行方をくらましたことを知ると、二人を捕らえるべく公安に大掛かりな動員をかけた。そして、何かを知っているはずだということで、大地の身柄までもが拘束されてしまった。

遥たちには、それを止めるだけの根拠も権限もない。

しかし、滯の拉致に関する態度にだけは、どうしても納得がいかなかった。搜索してくれるよう頼んでも、なおざりな返事をするだけである。美咲と少女を捕らえることだけに注力しているようだ。人道的観点から少女を救い出す、という彼らの言い分に違和感を覚えざるをえない。

すでに剛三にも連絡をとり動いてもらっているが、圧力がかかっているのか、警視庁も滯の搜索に色よい反応を示さなかった。上層部に詰め寄っても歯切れの悪い返事ばかりである。搜索を拒んでいるわけではないが、今すぐに開始する気配はないとのことだった。

滯は、僕たちが探すしかない――。

協力的でない警視庁や警察庁の態度を知り、遥がそう決意を固めるのに時間はかからなかった。もちろん、大きく打ちのめされている悠人の代わりに、自分がしっかりしなければならない、彼の役割を引き受けなければならない、ということも自覚していた。

「もし滯とバイク男が活着ているなら、もうここから離れてしまっている可能性が高い。僕たち三人だけでやみくもに探しても見つけられるものじゃない。今、じいさんが周辺を搜索する人員を集めてるから、僕たちは家へ帰って態勢を立て直した方がいいと思う」

「賛成だ。悠人さんをこのままにしておくわけにもいかないしな」

篤史は手を止め、ちらりと悠人に視線を流す。

全身から水を滴らせながら立ち尽くす彼は、寒さのあまりガタガタと震え出し、月明かりでもわかるくらい真っ青になっていた。着替えはおろかバスタオルさえないこの状況で、いつまでもここに留めておいては、大袈裟でなく命にも関わりかねない。雪こそ降っていないが、気温はおそらく氷点下である。

「すまない……」

これほど弱々しい彼の声は、今まで聞いたことがなかった。

遥は無言のまま首を横に振り、後部座席に悠人を押し込んだ。続いて自分も乗り込む。篤史は後部座席から運転席に移ると、アクセルを強く踏み込んで、誰もいない夜更けの道路を走らせた。

。

「いったい何を隠し立てしているのだ！ ……誤魔化すでない！！ 今回の依頼についても、少女を救出するという目的ではなかったのだろう。美咲の研究が目的か？ 美咲と大地をどうするつもりなのだ？！」

遥たちが剛三の書斎に戻ると、彼は電話に食いつかんばかりの勢いで詰め寄っていた。しかし、追いつめられているのが彼の方であることは、その焦った口調からも苦々しい表情からも明らかである。

「もう良いわ！！」

剛三は捨て台詞を吐き、電話の子機を叩きつけるように充電スタンドに戻した。椅子の背もたれに身を預けて深く息をつく、正面に立っていた悠人をちらりと一瞥して言う。

「悠人、まずシャワーを浴びて着替えてこい」

「……濡を守れず、申し訳ありませんでした」

「すべての責任は私にある」

深々と頭を下げた悠人には目を向けず、剛三は遠くを見やり噛みしめるように言う。肘掛けに置いた手には力がこもり、押しつけた指先は白くなっていた。悠人は何か言いたげな表情を見せていたが、その唇を引き結ぶと、もう一度頭を下げてから書斎をあとにした。

「さっきの電話の相手は誰だったの？」

「楠警察庁長官だ」

遥の予想通りの答えだった。途中で話を打ち切るように電話を切り、悠人を書斎から出て行かせたのは、そのこともあったのだろう。確かに、憔悴した今の彼に聞かせるには酷な話かもしれない。

剛三は眉をひそめながら、執務机に肘をついて両手を組み合わせた。

「警視庁に圧力をかけているのは彼で間違いないようだ。研究所の人体実験が公になっては厄介だろうと脅してきおったわ。だが、厄介なのは警察庁も警視庁も同じことだ。我々は互いの弱みを握り合っているのだからな」

「どうするの？」

「警察を頼らずに探すしかあるまい。出来る限りの人員は集めている。海と周辺を隈無く搜索すれば、何かしらの手がかりは見つけられるだろう。もうひとつ別の作戦も考えているが、それは悠人が戻ってきてからにしよう」

遥は扉の方をちらりと見やったが、まだ戻る気配はない。

「父さんと母さんは？」

「大地は公安の方で取り調べを受けておる。この事実を公表するつもりはないらしく、手荒なこともしないと約束してくれたが、美咲が戻るまで返すわけにはいかないそうだ。要は人質だな。とはいえ、我々にも美咲の行き先など見当がつかんし、あまり公安を信用する気にもなれん。美咲本人から話を聞いてみたいところだが……」

「とりあえず、今は濡の搜索を優先だね」

「ああ……遥、おまえは大丈夫なのか？」

いつもの剛三らしくなく、どこか気遣わしげに歯切れの悪い質問を投げかけた。

それが何についてのことなのかは、言われずとも理解している。

「僕はちゃんと冷静に受け止めてるし、そうしなければならぬ理由もわかってる。この状況を嘆いたところで何にもならない。濡を探さないといけないし、師匠を守らないといけないし、橘家を支えないといけない。泣いてる暇なんてどこにもないよ」

遥がそう答えると、剛三は渋い顔になって視線を落とした。

隣の篤史も怪訝な表情で横目を流している。

「無理はするなよ」

「別にしてない」

遥は前を向いたまま無愛想な答えを返す。その声は自分で思った以上に余裕のないものだった。篤史は物言いたげに目を細めて溜息をつく、遥の頭にガシッと手を置き、髪がくしゃくしゃになるくらい撫でまわした。

悠人が戻ってくると、剛三は打ち合わせ机で二つ目の作戦を説明した。

それは大胆だが納得のいく内容で、聞いた三人は誰も異を唱えなかった。いや、これまでも滯以外が反論することは基本的になかった。だから、今日はこんなにも静かなのかもしれない——そう思うと、遥の胸に乾いた風が吹き抜けた。だが、今は感傷にひたっている場合ではない。

「わかったけど、それにはバイク男の写真がいるんじゃない？」

「似顔絵でも良からう。問題は誰に描いてもらうかだが……」

剛三は難しい顔で考え込む。

今日はフルフェイスのヘルメットを取らなかったが、遥は以前にバイク男の顔を見たことがあった。似顔絵を作成することは可能だろう。ただし、警察の協力が得られない以上、自分たちで似顔絵の描ける人物を捜すしかない。

「遥、おまえには画家の血が流れておろう」

「無茶なこと言わないでよ。絶対無理」

美術の成績はどちらかといえば良い方であるが、特別に絵が上手いわけではなく、ましてや似顔絵など描こうとしたこともない。記憶を頼りに再現するなど、とてもじゃないが出来はしない。

「画家の知人はおるが、今すぐとなると……」

「私に心当たりがあります」

剛三の言葉を遮ったのは悠人だった。振り向いた三人の視線を受け止めると、その瞳に強い光を宿し、落ち着いた口調で語り始める。先ほどまでの弱々しさは見られない。少なくとも表面上は、普段の冷静な彼に戻っているようだった。

夜明け前の静寂に包まれながら、悠人の車は裏通りを走行していた。

遥はその助手席に座り、星々のきらめく夜空をフロントガラス越しに眺めていた。研究所に乗り込もうとしていたことが、遠い昔の出来事であるかのように感じられる。しかし、実際にはまだあれから数時間しか経っていない。

「ねえ、師匠」

「どうした？」

悠人は運転を止めることなく、静かに聞き返した。

遥は自分の膝元あたりに視線を落として言う。

「師匠がひとりで責任を感じることはないよ。僕も滯も自分でやりたいって言ったんだから」

「いや、僕は保護者としてそれを止めなければならなかった。たとえ剛三さんに歯向かうことになっても、濡や遥に恨まれることになっても……まあ、今だから言えることだけだね。あのときは、精神的にきついだろうとは思っていたけど、身に危険が及ぶとは考えてもいなかった。その認識の甘さも含めて僕の責任だ。それに……」

悠人はそこで言葉を切り、前を見据えたまま僅かに顎を引いた。

「大地と美咲を止められなかったのも、僕の責任だ」

その横顔は苦しげでありながら、どこか寂しげにも見えた。大地とも美咲ともずっと昔からの付き合いだったのだ。他人に把握できるほど単純な心情ではないだろう。遥は膝に置いた手をそっと握り締めると、訊きたかったことも、言いたかったことも、声にすることなく胸の奥にしまい込んだ。

「さあ、どうぞこちらへ」

「申し訳ありません、朝早くに……」

悠人はそう言ったが、まだとても朝とはいえない未明の時間である。しかも、突然電話で叩き起こして面会を申し込んだのだ。非常識だとなじられても返す言葉はない。にもかかわらず、物柔らかな笑顔で迎え入れられるなど、ほとんど奇跡のようなものである。

もともと、悠人には初めから勝算があったようだ。

遥たちをにこやかに案内する品のよい女性は、中堂由衣——悠人が高校時代に付き合っていた相手である。遥は今日が初対面であるが、剛三や濡から彼女の話は聞いていた。かつて悠人がファントムではないかと疑っていたこと、画家を目指して美大に進学したが叶わなかったこと、美大在学中に画商の中堂に見初められ結婚したこと、今でも悠人に未練のある素振りを見せていることなど、どれもあまり好ましい話ではない。

そんな彼女にこうやってわざわざ会いに来たのは、バイク男の似顔絵を描いてもらうためである。悠人によれば、彼女は似顔絵を得意としていたらしいのだ。はっきりとは言わなかったが、自分の頼みであれば断らないという自信もあったのだろう。

「濡さん！！」

突如頭上から振ってきた声に、遥たちは顔を上げる。

そこには、吹き抜けの二階から身を乗り出す男性がいた。由衣の息子の幹久である。彼は大きく目を見張って呆然としていたが、すぐ我にかえると、転げ落ちんばかりに階段を駆け下りてきた。脇目もふらず遥の手を取り、両手で優しく包み込むように握る。

「誘拐されたと聞いて心配しました。無事だったのですね！」

彼の顔は屈託なくキラキラと輝いていた。

対照的に、遥は上目遣いでじとりと睨みつける。

「僕は、濡の兄です」

「……えっ?!」

優美な雰囲気似つかわしくない素っ頓狂な声。それが何に対してのものなのか、おおよその見当はついている。遥は不快感を隠すことなく嘆息した。しかし、幹久はその手を柔らかく握り

しめたまま、にっこりと魅惑的な笑みを浮かべて言う。

「失礼いたしました。とてもよく似ていらっしゃるので驚きました。瓜二つといっても過言ではないくらいですね。このほっそりとした白魚のような手も、まるで……」

「幹久、あなたはもう部屋に戻りなさい。今はそういう話をしている場合ではないのよ」

半ば呆れたように窘める由衣の言葉を聞き、ふと幹久の表情が曇る。

「それでは、濡さんはまだお戻りになられては……」

「はい、ですから由衣さんにご助力いただこうと」

悠人は淡々と答えた。口調こそ丁寧だが決して目を合わせようとせず、幹久を快く思っていないことは容易に想像がつく。しかし、幹久本人はそのことに気付いていないようだ。握っていた遥の手をそっと優しく放すと、悠人に向き直り、自分の胸元に手を置いて真摯に問いかける。

「僕に、何かお手伝いできることはありませんか？」

「ありがとうございます。お気持ちだけで十分です」

「……濡さんのご無事を祈ります」

申し出を断られてしまった以上、祈るくらいしかできないだろう。幹久は胸元の手をギュッと握りしめながら、その端正な顔にやりきれなさを滲ませ、長い睫毛を伏せて視線を落とした。もしかすると、いまだに濡への想いを断ち切れていないのかもしれない。

悠人は無表情を保ったまま、儀礼的に頭を下げた。

遥と悠人は客間へ通された。

さすが画商の家と言うべきだろうか。上質な西洋アンティーク調の家具と、同じくアンティーク調の内装が、過剰でもなく、簡素でもなく、センス良く上品にまとめられている。壁には、この雰囲気と調和する小さめの絵画がいくつか飾られていた。

由衣は奥のソファを二人に勧め、その向かいに腰を下ろした。ローテーブルにはすでに描くための準備がなされている。少しでも時間を無駄にしないための配慮なのだろう。髪も、邪魔にならないよう後ろでひとつに纏められている。彼女はスケッチブックと鉛筆を手にとると、さっそく似顔絵の作成に取りかかり始めた。

まず対象者の容姿や雰囲気を一通り聞き取り、大まかにあたりをとって輪郭から形作っていく。その間にも対話を止めることなく、軌道修正しながら少しずつ細部を描き込んでいく、というのが彼女の手法らしい。

「遥さん、悠人さん、どうかしら？」

由衣はまだラフ段階の絵を立てて見せると、意見を求める。

しかし、悠人は難しい顔のまま口を開こうとしない。彼もバイク男の顔を見たことはあるのだが、格闘に集中していたときで、おまけに逆上していたこともあり、明確には覚えていないと言っていた。代わりに、よく記憶していた遥が答える。

「口はもう少し小さかったと思います」

「わかったわ」

由衣は柔らかく微笑み、再びスケッチブックに鉛筆を走らせた。

悠人は小さく溜息を落として立ち上がると、窓に向かい、カーテンを掴んでガラス越しに外を見つめた。彼の目に何が映っているのかわからない。ただ、そのうつむき加減の横顔には、自分の無力さに打ちひしがれたような、暗澹とした微苦笑が浮かんでいた。

「悠人さんって、澪ちゃんのことを好きなんですか？」

スケッチブックに鉛筆を走らせている由衣に、まるで不意打ちのように凶星を指され、悠人は外に目を向けたまま小さく息を呑んだ。彼女の真意を測りかねているのだろう。窓ガラスに置いた指先に力をこめ、少しだけ顎を引いて表情を引き締めた。その変化に気付いているのかいないのか、由衣はさらに容赦なく踏み込んでいく。

「だから今まで独身だったのね」

「いや……それ、は……」

「私、洞察力には自信があるのよ」

その一言で、悠人は顔をうつむけて口をつぐんだ。

由衣は手を止めることなく一方的に話を続ける。

「澪ちゃんに向けていたあなたの眼差し、そして今日のあなたの態度で確信したわ。悠人さんって意外と気持ちを隠すのが下手なんだもの。初めて会ったあのときからずっと……私と付き合うのが本意でなかったことも、私との会話を面倒がっていたことも、最後まで好きになってくれなかったことも、すべて承知していたのよ」

その口調はとても穏やかだった。責めているようには聞こえないが、本音はわからず、遥は固唾を呑んで彼女を警戒する。悠人も同様の心境なのだろう。いや、当事者であるがゆえ、より大きな不安を感じているはずだ。後ろ姿が心なしか硬直しているように見えた。

「顎はもう少し細いです」

「少しだけでいいの？」

「はい」

遥が似顔絵を指さして指示を出すと、由衣はにっこりと微笑み、顎の部分を消して描き直し始める。これで似顔絵に集中してくれればと思ったが、目論見どおりにはいかなかった。彼女はサラサラと軽快な音を立てながら、物柔らかに悠人への質問を再開する。

「橘君への当てつけだったんでしょう？」

橘といっても遥のことではなく、父親の大地のことだろう。二人は同じ高校に通っていたのだから、互いに面識があっても不思議ではない。だが、彼女の発言についてはまるで意味がわからない。しかし、悠人には思い当たる節があったようだ。

「……それは、少し違う」

ゆっくりと振り返り、揺れる眼差しで由衣の横顔を見下ろす。

「佐藤の告白を断ったら絶交だと……あいつが、大地が突然そう言い出したんだ。だから僕は断れなかった。もっとも、あいつは何の気なしに言ったらしく、あとで訊いたら言ったことすら覚えてなかったんだが……おまえには悪いことをしたと思っている。今さら詫びたところで許してはもらえないだろうが」

「じゃあ、橘君に感謝しないといけないわね」

「感謝？」

悠人が訝るように眉をひそめると、由衣は手を止め、顔を上げて華やかに微笑みかけた。

「私はそれでも嬉しかったのよ。大好きな人の彼女になれて」

「……………」

悠人は何も答えず、曖昧な表情でただじっと立ち尽くしている。しかし、由衣は満足したかのように表情を緩め、再びスケッチブックに向かい手を動かし始めた。訪れた沈黙の中、鉛筆の控えめな摩擦音だけがあたりに響いていた。

「さ、これでどうかしら？」

「……よく似ています」

スケッチブックを立てて尋ねた由衣に、遥はこくりと頷いて返事をする。社交辞令などではない。遥の記憶そのものといえるくらいそっくりで、似顔絵として本当に申し分のない出来だった。

由衣はほっと息をつくとき、あらためて自分の描いた似顔絵と向かい合った。

「そう、この人が澪ちゃんを……生半可なモデルさんでは敵わないくらい整った顔をしているわね。これで背が高く脚も長いだなんて、街中を歩いているだけでも目立つし、まわりが見逃すわけじゃないわよ？ すぐに身元はわかるんじゃないかしら」

「そうだといいんですけど……」

普通に考えればそうかもしれない。だが、美咲の研究所を狙ったことから考えても、不思議な力を使うことから考えても、そこらで平凡に暮らしている人物だとは思えなかった。バイクではフルフェイスのヘルメットを被り、神社ではマスクをしていたのだから、普段から常に顔を隠していた可能性が高い。もしかすると、すでに指名手配されている犯罪者であることも考えられる。

遥がうつむいてじっと思考を巡らせていると、窓際にいた悠人がずっと由衣の方へ進み出た。彼には時間を無駄にする余裕はない。閉じたスケッチブックを彼女から受け取り、それを脇に抱え、深々とお辞儀をしてから礼を述べる。

「今日は本当にありがとうございました」

「私にできることならいつでも力になるわ。澪ちゃんの無事を祈ります」

「後日、あらためてお礼に伺います。今度はご主人がご在宅のときに」

中堂家の主人は海外出張のため不在だが、当然、彼にも礼を尽くさねばならないだろう。事後報告にはなるが、橘家の緊急事態だったといえ、彼が嫌な顔をすることはないはずだ。逆に、橘家に恩を売れたとほくそ笑むに違いない。

「ねえ、悠人さん？」

由衣は柔らかいシフォンのロングスカートを揺らしてソファから立ち上がった。正面から悠人と向かい合い、背の高い彼を見上げて、少女のように可愛らしく小首を傾げる。

「ひとつだけ、私のお願いを聞いてくださる？」

「何でしょう？」

悠人は平静を装いながらも、心持ち表情を硬くして尋ね返す。

そんな彼を見つめ、由衣は思わせぶりに微笑んだ。艶やかな紅い唇がそっと動く。

「怪盗ファントムの正体を、教えていただけないかしら」

一瞬にして、場の空気が凍りついた。

息をすることさえ憚られるような緊迫した雰囲気。三人とも口を開かない。気の遠くなるくらい長く感じられる沈黙が、全身にじわりと重苦しくのしかかってくる。悠人の顔からは血の気が失せているようだ。普段の彼ならともかく、滞のことで憔悴している今の彼では対処が難しいだろう。

「ごめんなさい、言ってみただけよ」

遥が意を決して立ち上がろうとしたそのとき、由衣はクスッと悪戯っぽく笑ってそう言った。先ほどまでの張り詰めた雰囲気はもうどこにもなく、表情も声音も元の優しく穏和なものに戻っていた。

それでも、悠人は緊張を解かなかった。

僅かに顎を引いてスケッチブックを抱え直すと、一步後ずさり、由衣に体を向けたまま後ろ手で窓の鍵を探った。両開きの大きな窓がゆっくりと外側に開いていく。レースのカーテンがふわりと柔らかく風をはらんだ。

まさか、師匠は——。

悠人は後ろ向きでそろりとベランダに出ると、軽やかに床を蹴って飛び上がり、白い手すりの上にトンと降り立った。背後に浮かんだ目映い月が、ジャケットのはためくシルエットを、鮮やかに浮かび上がらせている。その姿はまるで——。

遥はソファから立ち上がった。

「師匠……」

「僕は、かつて怪盗ファントムだったよ」

彼は穏やかな声を夜風に乗せると、身を翻し、軽くベランダを蹴って外に飛んだ。

広い背中は、闇へと掻き消える。

由衣は胸元で両手を重ねてぱちくりと瞬きをした。やがてふっと柔らかく表情を緩めると、重ね置いた手に力を込め、おもむろに瞳を閉じてうつむいた。彼女にとっては長年の願いが叶ったことになる。けれど——その幸せそうな横顔に横目を流しながら、遥は密かに眉をひそめた。

## 24. 覚悟の行方

その朝は、穏やかに幕を開けた。

レースカーテン越しの柔らかい光に包まれながら、誠一は小さな丸テーブルの前に座り、ホットコーヒ一片手に取ってきたばかりの朝刊を広げる。そして、オーブントースターがチンと音を立てると、焼き上がったトーストにたっぷりとマーガリンを塗って口に運んだ。何の変哲もない平凡な日常である。しかし、何気なくリモコンを手にとりテレビをつけると――。

「……えっ?!」

その画面に浮かび上がってきたのは、滯の写真と、鉛筆で描かれた男の似顔絵だった。次の瞬間、画面は記者会見の映像に切り替わる。その中央でフラッシュを浴びている人物は、滯の祖父であり橘財閥会長でもある橘剛三だ。画面を見つめる誠一の手から、食べかけのトーストが滑り落ちた。

『昨夜、孫娘の滯が誘拐された。犯人はこの男だ』

剛三はそう言うと、先ほど映し出された鉛筆描きの似顔絵を掲げた。

『マスコミの皆さんにもお配りしますので、どうか情報提供を呼びかけてほしい。そして、テレビでご覧になっている皆さん、この男や滯に関する目撃情報など、あればぜひ情報を寄せてほしい。滯を無事救出できたあかつきには、有益な情報提供をしていただいた方に、私の気持ちとして三億円をお支払いしましょう』

会見の場がどよめく。

『どうか、孫娘の救出に力をお貸してください』

剛三が立ち上がって深々と頭を下げると、画面が白くなるほどの無数のフラッシュが焚かれた。

誠一は一通りチャンネルを変えてみたが、ほとんどの番組がこの話題で持ちきりだった。どうやら実際に今朝行われた会見らしい。現実であると認識するにつれ、顔からは血の気が引き、指先の震えは大きくなっていく。丸テーブルに置いてあった携帯電話を手にとると、幾度も操作を間違えながら滯の携帯電話に発信した。

トゥルルルル、トゥルルルル――。

呼び出し音に呼応するかのようになり、鼓動は次第に速さを増していく。おそらく留守電になるだろう。そう思いながらも、心のどこかで期待する気持ちは打ち消せない。

『……誠一?』

五度目の呼び出し音のあとに聞こえたその声は、留守電ではないが、滯のものでもない。

「君は、遥か?」

『テレビ見たんだね』

「ああ、滯が誘拐って……」

『本当だよ』

遥の声はいつもと変わらず醒めていた。そのことが、なおさら誠一の焦燥を煽り立てる。

「犯人はあのときのバイクの男なんだろう？ あいつの目的は何なんだ？ 身代金の要求はあったのか？ どういう状況で攫われたんだ？ 正体はわかっているのか？ 濡の無事は確認できているのか？ 何でもいいから教えてくれ」

似顔絵については二つの心当たりがあった。そのうちの 하나가、バイクを止めて遥を凝視していた男である。似顔絵に描かれた射抜くような鋭い目は、フルフェイスから覗いたあの目と酷似している。もし、本当に同一人物であるならば、遥の懸念が現実になったということだ。誘拐の話聞いたときに、何かできることがあったのではないか、何か対処すべきだったのではないか——後悔と自責の念が大きな波になって押し寄せる。

暫しの沈黙のあと、遥が口を開いた。

『濡は、僕たちが必ず救出する。だから——』

遥の言葉が不意に途切れ、まもなく別の声が聞こえた。

『南野さん、楠です』

「あ、はい……」

楠悠人は濡たちにとって保護者同然の人物である。そして、自身が濡と結婚することを望んでおり、誠一と濡の交際に良い感情を持っていない。当然、この電話も拒まれるものと思ったが——。

『もし、あなたに覚悟があるのでしたら、すべてをお話しします』

「えっ……それは、どういう……」

『あなたがこれまで信じてきたものが、何もかも壊れることになるかもしれません。濡とも、これまでどおり付き合えなくなる可能性があります。その覚悟がないのでしたら、黙って濡が戻るのを待っていてください。私たちが必ず救出します』

悠人の言っていることは正直よくわからなかった。ただ、以前に濡から聞いた「家の事情」という言葉が頭をよぎる。そのことと今回の誘拐事件が何か関係しているのだろうか。知ってしまうのが怖いという気持ちはあるが、ここまで思わせぶりに言われて、敢えて目をそむけるなど出来そうもない。

「……聞かせてください」

『わかりました。電話ではなく直接お話ししたいので、お手数をお掛けしますが、今から橘の家までお越しください。正面にはマスコミが大勢集まっていますから、裏口の方をご案内します』

「よろしくお願いします」

誠一の携帯電話を握る手に力がこもる。たとえどれだけ思案したとしても、結局は同じ決断を下しただろう。それでもこれで良かったのか自信はなく、迫りくる不安と早すぎる後悔が、胸中で重い唸りを上げるように渦巻いていた。

「どうぞ、こちらへ」

誠一は指示された裏口から橘家を訪れ、待ち構えていた悠人に応接間へと通された。以前にもここで悠人と話をしたことがある。そのときと同じように、ローテーブルを挟んで革張りのソファに腰を下ろした。悠人の隣には遥が座る。誠一は緊張のせいかわ喉が張りつくように感じ、意識

的に唾を飲み込んだ。

「南野さん、今日のお仕事は？」

「午前中だけ休みをいただきました」

「急にお呼び立てして申し訳ありません」

「いえ……」

聞かせてほしいと言ったのは誠一の方だ。社交辞令とわかっていても、そういう言い方をされては恐縮してしまう。落ち着かずにそわそわしていると、悠人は怖いくらいの真剣な眼差しになり、誠一の双眸を真正面から鋭く射抜いた。

「今から話すことは他言無用に願います」

「……わかりました」

彼の有無を言わせない雰囲気には圧倒され、誠一は体を硬くした。

その間、遙は終始無言のまま不服そうに顔をしかめていた。しかし、気付いているのかいないのか、悠人はまるで意に介していないように見える。脚の上でしっかり両手を組み合わせると、小さく息をつき、真剣な表情を崩すことなく語り始めた。

話を聞いている間、誠一は何も口を挟むことが出来なかった。

怪盗ファントムは先代から橘家がやっていたこと、それを警察上層部が黙認していること、代わりに公安の手伝いをしていること、母親の美咲が行っていた人体実験のこと、父親がその関係で公安に連行されたこと、突然現れた謎のバイク男に濡が拉致されたこと、そのバイクが崖から海に転落していたこと――。

「大丈夫ですか、南野さん」

「……………いや、はい……」

吐き気がこみ上げるくらいの酷い目眩、頭の中をかき混ぜられるような感覚。雑多な感情の渦に飲み込まれ、自分の気持ちがわからなくなっていた。それでも、必死にどうにかして整理をつけようとする。

警察が怪盗ファントムを黙認していたことについては、やはりそれなりに衝撃を受けたし怒りも感じる。しかし、警察を汚れなきものと信じるほどの純粹さは持ち合わせておらず、特に公安絡みということであれば、善悪は別にして十分にありうる話だろうと腑には落ちた。

それよりも、問題は濡の方である。

濡と遙が怪盗ファントムをやっていたのは、家族である祖父に懇願されてのことだ。つまり「家の事情」である。遙はどうだかわからないが、濡の方は間違いなく悩んでいた。そのうえ、研究所で行われていた残酷な事実を突きつけられ、なおかつそれを自らの手で曝くなど、母親を尊敬していた彼女にはつらすぎる現実だろう。挙げ句、正体不明の危険な男に拉致され、さらに事故に遭ったかもしれないなんて――。

「何か、手がかりは……」

「いま探しているところです。我々は、濡の生存を信じています」

悠人は寸分の迷いも見せずに断言した。もちろん誠一も信じたいとは思っているが、あまりにも悪い状況が重なりすぎて、どうしても暗澹とした気持ちにならざるを得ない。悠人から聞いた話だけでも十分に悪夢のようだが、さらに、おそらく彼らは知らないであろう絶望的な情報があるのだ。

「もしかしたら、濡を攫った男は指名手配犯かもしれません」

そのことを告げると、正面の悠人と遥は小さく息を飲んで目を見開いた。

「それは、どういうことでしょうか」

「私が刑事になって間もないころですから……今から約5年ほど前のことになりますが、指名手配犯としてあの男の写真がまわってきました。写真の方では金髪碧眼だったのですが、顔は同じですし、同一人物の変装で間違いないと思います。ただ、直後に指名手配そのものが撤回され、記録からも跡形なく抹消されたようです。先輩は、公安に持って行かれたんだろうと言っていました」

話を聞くにつれ、悠人の表情は険しさを増していった。

「彼の容疑は？」

「……手配書には、殺人と」

口にすることであらためてその深刻さを思い知った。誠一の指先は冷たくなっていく。悠人と遥の顔面からは血の気が失せているように見えた。次第にうつむきぎみになる三人に、息の詰まるような重たい空気がのしかかった。

悠人は顔を上げると、切迫した眼差しで訴える。

「南野さん、どうか濡を救うため我々に力をお貸してください。そのためにすべてをお話ししました……犯罪者に協力できないとおっしゃるなら、諦めるより他にありませんが」

「いえ、手伝わせてください」

孫たちに犯罪を無理強いした橘会長や、それを止めなかった悠人には、言い様のないくらい腹立たしさを感じている。それでも、一刻も早く彼女を救出するためには、彼らに協力するのが最善だと判断した。

悠人は静かに頷く。

「南野さんをお願いしたいことは一つだけです。警察内部の情報を提供してください。ただし無理をする必要はありません。普通にしていって耳に挟んだ話、感じ取った雰囲気、搜索の動きなどを教えてほしいのです」

「わかりました。ただ……」

誠一はそう言い淀み、眉根を寄せる。

「公安が絡んでいるとなると難しいかもしれません。あそこの情報は厳重に管理されていますし」

「研究所については公安の案件ですが、濡が連れ去られたのはまた別の話です。少なくとも表向きには。おそらく警視庁の方でも何らかの動きはあるでしょう。世間の目もありますし、完全に無視するようなことはないはずです」

「あ、それであんな会見を……」

「我々は藁にも縋りたい思いなのです。南野さん、どうかよろしくお願いします」

悠人はそう言うと、ローテーブルにぶつかりそうなくらい深々と頭を下げた。

誠一は居たたまれなくなって自分の手元に視線を落とす。

「どれだけお役に立てるか、わかりませんが……」

「くれぐれも無理はなさらないでください。濡を悲しませたくありませんので」

悠人の顔にうっすらと自嘲の笑みが浮かんだ。その表情に、その言葉に、彼の胸中に渦巻いている様々な葛藤が窺える。それでも、濡を救出したいという強い気持ちは揺るがないだろう——誠一は彼を見据えたまま、ゆっくりと口を引き結んで頷いた。

「南野！」

誠一が捜査一課のフロアに向かっていると、背後からよく通る大きな声で呼びかけられた。その特徴的な声だけですぐに誰だかわかる。誠一は早足で近づいてきたその人物に振り返り、ぺこりと頭を下げた。

「岩松さん、急に休んですみませんでした」

「それは構わんが……おまえ、大丈夫なのか？」

先輩刑事の岩松が、気遣わしげな眼差しで言葉を選びながら尋ねる。どうやら濡の誘拐にショックを受けて休んだと思っているようだ。同僚たちの中では、彼だけが誠一と濡の交際を知っているのである。

「大丈夫です」

誠一はしっかりと答えてみせる。しかし、岩松は微妙な面持ちになった。

「おまえもわかっているとは思いますが、半端な気持ちで出来る仕事じゃない。濡ちゃんのことでもいつもの仕事が出来ないのなら帰った方がいい。責めているわけじゃないんだ。おまえ自身のためであり、俺たち仲間のためでもある」

「問題ありません」

「そうか……」

完全には納得していないようだが、それ以上の追及はしてこなかった。ただ疲れたように小さく吐息を落とすと、左手を腰に当て、右手で緩く頭を搔きながらぼつりと言う。

「濡ちゃん、無事だといいな」

「濡は大丈夫です、絶対に」

誠一は自らに言い聞かせるようにそう答えた。岩松は頷き、たくましい大きな手で誠一の頭を撫でまわす。おかげで硬めの髪はぼさぼさになってしまった。いつもなら文句を言っているところだが、今はその手から伝わる仄かな温もりが有り難かった。

「誘拐じゃなくて駆け落ちなんじゃないですかね」

扉を開けた途端、遠慮のない声が誠一の耳に飛び込んできた。同僚たちが簡単な昼食をとりながら歓談していたようだ。話題は今朝報道された濡の誘拐についてだろう。捜査一課の連中はほとんどが濡と顔見知りなので、他の事件よりも興味をひかれるのは当然といえる。ただ、話の内

容については飛躍しすぎと云わざるを得ない。

「確かに、腑に落ちない点が多いけどな」

同僚の一人である田辺は、難しい顔で考え込みながら相槌を打った。それを聞いて、駆け落ち説を唱えた笹原はパッと顔を明るくし、わが意を得たりとばかりに勢いづいて畳みかける。

「橘会長は誘拐されたと言っていましたけど、犯人側からの要求は何もないようですし、相手の顔がわかってるということは、誰かが現場を目撃してるはずなのに、その状況について話さないのも不自然ですよ」

「俺としては、濡ちゃんが駆け落ちだなんて信じたくないなあ」

今まで黙っていたお調子者の遠藤が、盛大に溜息を落としながら頬杖をついた。見るからに意気消沈している。濡のファンだと公言して憚らない彼ならば、誘拐はもちろんだが、駆け落ちであったとしても喜ばはしないだろう。

ふと、田辺が思いついたように尋ねる。

「むしろ、ストーカーの方がありえるんじゃないか？」

「ストーカーだったら隠さずそう言ってるはずですよ」

「それもそうか……」

笹原に指摘され、彼はまた難しい顔に戻ってうつむく。

誠一は心情的にも立場的にも話に巻き込まれなくなかった。だからといって、あからさまに逃げ出すわけにもいかず、素知らぬ顔を装ってこっそりと自席に着いた。しかし、田辺は目ざとく見つけて話を振ってくる。

「南野、おまえも心配だろう？ 濡ちゃんのこと」

「あ、ええ……」

「けっこう懐かれてたもんな」

一時期、濡は頻繁にこのフロアを訪れていて、誰にでも人懐っこく接していたが、中でも誠一にはいちばん懐いていた——というのが、当時の捜査一課における共通認識である。二人の様子は、あくまで懐くという言葉通りの微笑ましいものであり、その後この二人が付き合っているとは考えもしないだろう。岩松には知られてしまったが、基本的には誰にも知られてはならないことだ。だから——。

決して、駆け落ちなどではない。

悠人から聞かされた事の顛末からも明らかだが、加えて、誠一にはそう確信するだけの根拠がある。だが、どちらも口にできない以上、笹原の説に反論することはできない。やり場のないモヤモヤした気持ちを抱えたまま、ただ言葉少なに話を合わせて頷くだけだった。

「南野！！」

遠くから切羽詰まった声で呼ばれ、誠一は弾かれるように立ち上がった。声の主は捜査一課長である。思わず後ずさりたくなるような凄まじい形相で、勢いよくこちらに向かって歩を進めている。誠一は思わずビクリとして顔をこわばらせながらも、慌ててペコリと頭を下げた。

「すみません、急にお休みをいただいて……」

「おまえ、いったい何をやらかしたんだ?!」

「えっ？」

困惑する誠一に、課長は大きく息をついてからあらためて切り出した。

「たった今、おまえに辞令が出た」

「辞令？ 聞いてないですけど……」

「私もさっき知らされたところだ」

彼は苛立ち露わにそう言うと、手にしていた辞令書らしき紙を突きつける。

誠一は怪訝に思いながらも丁寧に一礼し、両手でそれを受け取った。確かに宛名には「南野誠一」と入っており、自分への辞令で間違いないようだ。しかし――。

「……なんですか……これ……」

それは、常識的に考えれば到底ありえない内容だった。硬直した身体からじわりと嫌な汗が滲み、紙を持つ手は微かに震え始める。意識的にゆっくりと深呼吸をしてから、あらためて読み返してみたが、やはり見間違いというわけではなかった。

本日付で警察庁への出向を命じる――。

その短い文面に大きな力の存在を感じ、誠一はごくりと唾を飲んだ。

## 25. 彼の激情

---

「何ですか、このありえない人事は?!」

「知らん、こっちが訊きたい!」

後からフロアに戻ってきた岩松が、のしかからんばかりの勢いで課長に詰め寄っている。

誠一は二つの辞令を見つめたまま硬直していた。一つは警察庁への出向辞令、もう一つは警部昇進の辞令である。どちらも先ほど課長に手渡されたものだ。おそらく今の巡査部長という身分では警察庁へ出向できないため、警部に昇進させたものと考えられるが、このなりふり構わない強引な遣り口には戦慄せざるを得ない。

「いい意味でも、悪い意味でも、南野が目をつけられるとは思えないんだがなあ。なんでいきなりこんなことになっちゃったんだ。二階級特進なんて殉職じゃあるまいし」

「ちょっ、縁起でもないこと言わないでくださいよ」

誠一はぎょっとして振り向いた。が、岩松に揶揄している様子はない。思いのほか心配そうに顔を曇らせつつ、瞳の奥をじっと探るように見つめてきた。

「おまえ、心当たりはないのか?」

「.....何も」

彼には自分の下手な嘘など通用しない——わかってはいたが、誠一にはそう答えるしかなかった。研究所で起こった事件と無関係でないのなら、たとえ上司であっても話すわけにはいかない。そもそも、簡単に話せるようなことであれば、こんな事態になっていないはずである。

ガチャ——。

扉を開けて騒ぎの場に入ってきたのは、仕立ての良さそうなスーツを着こなし、細い眼鏡を掛けた、伶俐な雰囲気を漂わせる男性だった。あたりは水を打ったように静まりかえる。それでも彼は意に介することなく直進し、課長の前で足を止めると、洗練された流れるような所作で深々と一礼した。

「警察庁の溝端です。南野さんを迎えに来ました」

「ああ.....わざわざ.....」

課長は反応に苦慮して口ごもる。しかし、溝端はまるで関心なさそうに視線を外すと、今度は立ち尽くす誠一の方に振り向いた。眼鏡越しの無感情な瞳で見つめながら、抑揚のない声で言う。

「あなたの配属先は特殊事案対策室になりました。案内します」

「あ.....えっと、まだ荷物をまとめていないので.....」

「あとで構いません。直属の上司がお待ちかねです」

有無を言わさぬ物言いに、威圧的な冷たい眼差し——とても逆らえる雰囲気ではない。誠一は仕方なく彼のあとについて歩き出した。四方八方から戸惑いの視線が浴びせられるが、誰よりも戸惑っているのは誠一自身である。けれど、逃げることも助けを求めることも出来ない以上、無理にでも腹を括るより他になかった。

「あの、お手洗いに寄ってもいいですか？」

警察庁の最上階まで連れてこられた誠一は、廊下の少し先に男性用トイレを見つけ、前を歩く溝端におずおずと声を掛けた。彼はあからさまに非難めいた顔で振り返ったものの、さすがに生理的欲求を拒むほど横暴ではなかったようだ。

「……早く済ませてください」

「なるべく早く戻ってきます」

誠一は小さく会釈してから男性用トイレへ駆け込むと、個室へ入って鍵を掛け、すぐさまジャケットの内ポケットから携帯電話を取り出した。これから自分に何が起こるかわからない。だから、悠人にこの現状を知らせておきたかった。音をごまかすために水を流しながら、彼の番号へ発信し、息を詰めて単調な呼び出し音を数える。

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル——。

三コール目の終わりで音が途切れ、代わりに持ち主の声が聞こえた。

『はい、楠です』

「南野です。急いでいるので用件のみ伝えます。今、私に警察庁への急な出向辞令が出て……」

声をひそめて話し出したところで、不意に頭上から大きな影が落ちてきた。ビクリと顔を上げる。そこには、扉の上にしゃがみ、冷淡にこちらを見下ろす溝端がいた。彼は無言で個室内に飛び降りると、啞然とする誠一の手から携帯電話を奪い取った。

『南野さん？ どうしました?!』

微かに悠人の声が聞こえるが、誠一に返事をする術はない。いや、大声を出せば届くかもしれない——そう思った直後、溝端はボタンを押して通話を切った。そして、ゾットするほどの冷たい目を流し、薄い唇を開く。

「業務時間内の私用電話はご遠慮願います」

そう言い終わると同時に、手にしていた携帯電話を真っ二つにへし折った。砕けた破片や部品がボロボロと零れ落ちていく。そして、まるで用をなさなくなったその本体を、啞然とする誠一に押しつけるようにして返した。

「さあ、行きましょう」

「……………」

溝端は扉を開け、何事もなかったかのように平然と促す。それでも、誠一は反論どころか声のひとつも上げられなかった。ただひたすら空恐ろしいものを感じつつ、壊れた携帯電話をポケットにしまい、促されるまま閑静なトイレをあとにした。

誠一が通されたのは、廊下の突き当たりにある角部屋だった。

適度な明るさのゆったりとした空間が広がり、正面には大きな執務机、右の窓際には応接用のソファが置かれている。その執務机の方には、がっしりとした逞しい体型に、威圧的な雰囲気をもった、見るからに貫禄を感じさせる男性が座っていた。溝端の言っていた直属の上司だろうか。直接の面識はないと思うが、その顔は印刷物などで何度か目にした覚えがある。名前は、確か——。

「楠警察庁長官です」

記憶を辿っていると、隣の溝端が前を向いたまま名を告げる。

誠一はハッとして目を見張った。先ほど会ったばかりの悠人の顔が脳裏に浮かぶ。二人とも「楠」なのだ。今朝からの特異な状況を考えると、めずらしい名字ということもあり、偶然の一致とはなかなか考えづらい。

「南野誠一君、君のことは調べさせてもらったよ」

楠長官は大きな執務机で両手を組み合わせると、値踏みするような目つきで不敵に微笑む。

「ずいぶん橘家と親しくしているようだね。それに、私の息子とも」

やはり――。

この口ぶりからすると、息子というのは悠人で間違いないだろう。二人が手を組んでいるのかはわからない。そして、楠長官が敵か味方かもまだ判然としない。今の段階で下手なことを言わない方が賢明だと思い、誠一は静かに口を引き結ぶ。

楠長官はフッと小さく笑った。

「今朝、悠人に呼ばれて橘家に行ったのだろう？ 警察の動向を探るよう頼まれたかな？ いかにもあの子の考えそうなことだ。出来の悪い息子でね。何かにつけてすぐ他人を利用しようとする。まったく困ったものだよ」

雑談のような気安い口調ではあるが、目は絡め取るように誠一を捉えている。誠一も身をこわばらせつつ負けじと強気に見つめ返す。しばらく無言で視線をぶつけ合っていたが、溝端が一礼して退出すると、楠長官は結んでいた口もとをふっと緩めた。

「まあ座りたまえ。君の席はそこだよ」

「……えっ？」

楠長官が示したのは、彼自身の大きな執務机の脇に置かれている、ノートパソコンだけが載った簡素な机だった。その冗談のような配置に誠一は狼狽える。溝端から聞かされた配属先は、特殊事案対策室というところだ。それが、なぜ警察庁長官の部屋で席を並べることに――。

「ここが特殊事案対策室だ」

楠長官は心を見透かしたように答えとなる言葉を落とし、説明を継ぐ。

「君を呼ぶためだけに設置した長官直属の部門でね。つまり所属は君一人なのだよ。急ごしらえの席で申し訳ないが、しばらくはそこで辛抱してほしい」

「……私を、どうするつもりですか？」

誠一はぎこちなく顎を引き、警戒心を露わにして尋ねる。

しかし、楠長官は面白がるようにニヤリと口の端を上げた。

「こう見えても猫の手を借りたいくらい忙しくてね。やってもらう仕事はいくらでもあるのだよ。君の刑事としての経験も無駄にはしないつもりだ。あとは……そうだな、ちょっとした世間話の相手でもしてもらおうか」

これが言葉通りの意味でないことくらい、誠一にもわかる。要するに橘家の情報を流せと言っているのだ。もちろん二重スパイのような真似をするつもりはない。だが、逆に楠長官から情報を引き出す好機であるともいえる。悠人には無理をするなどと言われていたが、捜査一課に戻れな

い以上、ここで自分の出来ることをやるしかないだろう。多少の危険を冒してでも——誠一は気を引き締めると、小さく一礼してから用意された席に着いた。

電話は頻繁に鳴っていた。人の訪問も少なくない。

訪れた人の多くは誠一に怪訝な目を向けるが、楠長官が秘書のようなものだと説明すると、みな一応は納得したように調子を合わせていた。しかし、完全に信じている人はおそらくいない。もちろん楠長官も十分承知しているだろうが、まったく気にしておらず、むしろこの状況を楽しんでいるように見えた。

誠一は頼まれた書類をノートパソコンで作成していた。頭を悩ませるような難しいものではなく、秘書の仕事というのもおこがましい雑用レベルだ。本来の目的をカムフラージュするための作業であることはわかっている。それでも、何かしら手を動かしてられる方が、誠一としても気が紛れてありがたかった。

何度目かの電話が鳴った。

楠長官はこれまでと同じように事務的に応対したが、何かを耳にした途端、双眸に力強い光を宿してニッと口角を上げた。それは、まるで獣が獲物を捕らえるときのような、獐猛さを剥き出しにした表情だった。

「わかった、通してくれ」

彼はそう答えると、以後は何も取り次がないよう言い添えて電話を切った。鼻歌でも歌い出しそうなほどの上機嫌で、椅子の背もたれにゆったりと身を預けながら、肘掛けに腕を置いてどこか遠くを見つめている。

いったいどういう来客なのだろうか。

誠一は漠然とした緊張と不安を感じながらも、与えられた仕事をこなすためノートパソコンに向き直る。そして、書類のひとつを完成させて保存まで終えたそのとき——ダンッ、とノックもなく乱暴に扉が開かれた。そこから姿を現したのは悠人だった。肩をいからせながらズンズンと進み入り、執務機の正面まで来ると、勢いよく両手をついて楠長官を睨みつける。

「さすが、やることがえげつないですね」

「先に巻き込んだのはおまえの方だろう」

誠一の知る限り、悠人はこれまで常に理性的だったが、今は怒りの感情を隠そうともしていない。相手が遠慮のいらぬ家族だからだろうか。それとも、許容範囲を超えてしまったせいだろうか。控えめに二人の様子を覗いていると、悠人は思い詰めたような顔でバツとこちらに振り向いた。

「南野さん、辞表を提出してください」

「辞表……って、ええっ?!」

「転職先は私が責任を持って斡旋します」

「ちょっ、ちょっと待ってください!」

誠一は狼狽え、思わずガタリと立ち上がる。

その隣で、楠長官はククッと喉を鳴らして笑った。大きな椅子にどっしりと身を沈めたまま、

正面の悠人に挑発的な眼差しを向けて言う。

「相も変わらず愚劣で自分勝手な奴だな」

「あなたにだけは言われたくありません」

悠人は強気に睨み返した。が、長官は微塵も動じない。

「おまえは怒りのあまり目的を忘れている。濡ちゃんの行方について情報を得るには、ここに留まるのが得策だと思うがな。公安があの男に目をつけていたことは、すでにおまえも知っているのだろう？」

途中で、急に芝居がかかった厭らしい口調になった。濡のことを餌にして引き留めようとしているのだろうが、この言い方ではまるで——誠一は額にじわりと汗を滲ませる。悠人も同様の考えに至ったのか、張り詰めたその顔からすうっと血の気が失せた。

「……まさか、すでに濡の居場所を？」

「我々が知りたいのは橘美咲と少女の行方でね」

「だからあの男を泳がせているというのか?!」

悠人が身を乗り出して詰め寄ると、長官はフツと鼻先で笑った。

瞬間、悠人の形相が変わった。凄まじい殺気を漲らせて執務机に飛び乗り、書類を踏み散らしながら、椅子に座した長官の首に両手を掛ける。が、まだ力が入っていないようだ。長官の余裕に満ちた冷笑がそれを物語っている。

「これはいったい何のつもりだ？」

「濡の居場所を言え!!」

「殺されても言わんよ。私も、誰も」

悠人を鋭く貫くように見据えながら、微かに笑いを含んだ声で答える。直後、一瞬だけ首筋の両手に力を込められ、ウグツと引き攣った声を漏らす。それでも挑発的な表情が消えることはなかった。

「我々の命などとは比べものにならないくらい、重要な……この国の存亡がかかった事態になっているのだよ。脅しなどには決して屈しない。我々はみな命を懸ける覚悟で臨んでいる」

「だから濡を見捨てるというのか!!」

激昂する悠人を、長官はさらに煽り立てる。

「人質というのは生きていなければ意味がない。目的を遂げるまで殺されはしないだろう。もっとも、あの男にどういう扱いを受けているかはわからんがな」

もったいつけるような思わせぶりな口調。泳がせて見張っているのだとしたら、状況を知っていても不思議ではない。いったい濡はあの男に何をされているというのだろうか。何を——過去に扱った誘拐事件のいくつかをよぎり、誠一は目の前が赤く染まったように感じた。

悠人は奥歯を食いしばり、首を絞める手に徐々に力を込めていく。

「濡の居場所を言わなければ、本当にこのまま殺す……!」

「グァッ」

長官は潰れた声を上げると、苦しげに喘ぎながら言葉を絞り出す。

「おまえは……世話になった橘財閥に、泥を……塗る気か？」

「濡を犠牲にして守りたいものなど何もないッ！！」

「楠さん！！」

我にかえった誠一は、だらりと全身の力が抜けた長官から、なおも首を絞め続ける悠人を引きはがす。彼の手首を掴んだまま、長官を背に庇うように二人の間に割り込んだ。

「落ち着いてください！」

「君はどっちの味方だ？！」

鬼気迫る表情で激しく怒鳴りつけられ、誠一は咄嗟に何も答えられなかった。額から頬に汗が伝い流れる。それでもどうにか自分の気持ちを伝えようと、彼を説得しようと、必死に考えを巡らせながら言葉を紡いでいく。

「私も……濡を救いたい気持ちは同じです。けれど、あなたの行動はやはり間違っている。このままでは無意味に殺人犯になるだけだ。そんなことは濡も望んでいない。濡を悲しませたくないと言ったのはあなたでしょう」

「……………」

悠人は大きくうなだれ、力が抜けたようにぐったりと執務机に座り込んだ。前髪で隠れて表情までは窺えなかったが、気のせいかわからない、その佇まいはまるで泣いているかのように見えた。誠一は掴んだ手首の重みを感じながら、憔悴した彼の姿にそっと目を細めた。

幸い、楠長官は一時的に気を失っていただけで、すぐに意識を取り戻した。

誠一は念のため医者を呼ぼうとしたが、長官本人に制止され、この状況をよく考えてみると窘められた。確かに事故とするには無理がある。あとで主治医に診てもらうという彼の言葉を信じ、今は濡れタオルで首を冷やしてもらうことにした。まずは、くっきりとついた指のあとを消さなければならないだろう。

面会の約束をキャンセルする電話を聞きながら、誠一は踏み散らかされた執務机の書類を片付ける。その合間に、ソファに座らせた悠人の様子をチラチラと覗いた。もうだいぶ落ち着いてはいるようだが、その広い背中はいまだに丸められたままである。

カチャリ、と静かに受話器が戻された。

「いろいろとすまなかったね、南野君。愚息の世話までしてもらって」

「……いえ」

誠一は控えめに答える。首筋に濡れタオルを当てる楠長官の前に、まとめた書類を差し出すように置いた。

「南野君」

「はい」

楠長官は視線だけを誠一に向ける。

「君もわかっていると思うが、悠人は本当に出来の悪い息子でね」

「そんなことは……」

「昔から何を考えているかわからない根暗な子で、他人とまともに接することもできなかった。そのくせ気に入ったものに対しては病的なまでに執着する。大人になってからは、常識人の仮面

を被ることを覚えたようだが、本質は何ひとつ変わっていないようだ。橘会長の力を借りなければ、好きな女の子の一人も手に入れられないのだからな」

誠一は困惑しながらも、ソファの悠人をちらりと窺った。彼は深くうなだれたまま微動だにしない。話の内容がどこまで真実なのかはわからないが、父親にここまで言われたことについては同情を覚える。それも、暴露の相手が恋敵となれば一層いたたまれない。

楠長官は悪びれもせずに続ける。

「その点、君は立派だ。橘財閥を必要以上に怖れることなく、利用することなく、真摯に滯ちゃんと向き合っているのだからな。まあ、中学生に手を出したのは褒められることではないがね」

最後は、軽くからかうように付言する。

中学生に手を出したというのは正しくないが、滯と付き合っている事実は把握されているようだ。この短時間で調べ上げたのだろうか。それとも、以前から目をつけられていたのだろうか。何かあったときのために、橘家に関わる人間をあらかじめ調べていたのかもしれない。誠一は無意識に奥歯を食いしばった。

「南野君、私は君のことが気に入っているのだよ。事がすべて終われば捜査一課に戻してやってもいい。もちろん警察庁に残りたいのなら歓迎するが。どちらにしても、然るべき時が来るまでは私の元にいたまえ」

「……はい」

「君は悠人より余程大人だな」

楠長官はすこぶる満足げに頷きながら声を弾ませる。その言葉は、憔悴している悠人の傷をさらに抉るものだった。

楠さん、今は耐えてください——。

背後のソファでうなだれているだろう悠人を思いながら、誠一は胸の内で祈る。警察庁に留まることを決めたのは、決して楠長官に籠絡されたからではない。滯の救出に有益な情報を得るためである。それを達成するには、可能な限り反抗的な態度を取らない方がいいと判断したのだ。

けれど——。

滯のことで我を忘れるほどの激情に駆られた悠人が少し羨ましく、胸の奥が微かに疼くのを自覚した。

## 26. 翻弄

「そう……」

さして広くなく、必要最低限のものしかないシンプルな部屋。

その端に置かれた清潔そうなシングルベッドに、誠一は遥と並んで腰掛け、出来る限り主観を交えず今日の出来事を話した。しかし、彼は溜息まじりに相槌を打つだけで、特にこれといった反応を見せることなく、ただ無表情で前を見据えるだけである。

本当に話して良かったのだろうか――。

何があったか教えてほしいとせがまれたので、ありのままを話したが、この判断が正しかったかどうか自信はない。しっかりしているとはいえまだ未成年だ。妹は殺人犯に攫われて行方不明、母親は警察に追われて逃亡中、父親は警察に囚われの身という状況で、平気であるはずはないだろう。そのうえ、頼るべき保護者代わりに悠人が、あのような状態になってしまったのは――。

「僕ではダメなんだよね」

遥はどこか遠いところを見つめ、独り言のようにぼつりと呟いた。その声にも表情にも悲壮感はない。だが、言葉はひどく思い詰めたもののよう感じられた。

「遥……」

「心配しないで。どうすればいいか考えてただけだよ」

遥は天井を仰いだ。

「師匠が望むなら、僕は滯の代わりでも何でもやるつもりだけど、偽者なんかじゃ何の慰めにもならないよね。顔や背格好が似てたって肝心なときに役に立たない。それどころか、滯そっくりの滯じゃない人間がそばにいたら、余計につらく感じてしまうかもしれない。難しいよ……」

淡々と心情を吐露すると、遠くに目を向けたままそっと細める。彼のもどかしさ、やりきれなさ、そして隠しきれない寂しさが、その言動の端々から滲み出ていた。誠一は胸を衝かれるが、こんなときに掛けるべき言葉を見つけられない。

「その、あまり無理はするなよ」

「優しいね、誠一は」

ふっと表情を緩めて振り向いた遥に、ドクリ、と誠一の心臓は痛いくらいに跳ねた。その儚い微笑は、遥がこれまでに見せたことのない顔である。本人は決して認めないだろうが、やはりだいぶ打ちのめされているように感じられた。

「でも、誠一の方こそ無理しないで。もともと誠一には関係のないことなんだから」

「滯が攫われてるんだから関係あるだろう。見捨てるような真似は絶対にしない」

悠人たちとの協力は、誰に強制されたわけでもなく、誠一自身の意志で決めたことだ。もっとも、ここまでの事態になるとは思っていなかったが、だからといって手を引こうなどとは考えていない。

しかし、遥は難しい顔になってうつむいた。

「そのことだけどさ……誠一は刑事だから言うまでもないと思うけど、人質として生かされては

いても、どんな仕打ちを受けているかはわからない。もしかすると、体も心もボロボロにされてる可能性だってある。それでも、僕は家族だから支えていかなきゃいけない。だけど、誠一は...  
...誠一にはそんな義務なんてないから」

「.....！」

誠一は鈍器で頭を殴られたような衝撃を受けた。思わず身を乗り出して訴える。

「義務なんかなくても、俺は.....」

「簡単に結論を出せることじゃないよね」

冷ややかにそう一刀両断され、金縛りに遭ったように口が動かない。もし、濡が最悪の一步手前の状態で戻ってきたら——想像するだけで背筋が震え、身も心も凍りつきそうになる。果たして自分に支えていけるだろうか。無言のまま、シーツに置いた指先にグッと力をこめる。

「今はまだ何も言わなくていいよ。濡が帰ってからでいいから」

遥の声は先ほどより少し和らいでいた。しかし、それに甘えることは卑怯としか思えない。濡がどんな状態であっても支えていくと言わなければ——そう頭の中では考えていたにもかかわらず、全身がこわばり、どうしても声にすることができなかった。

翌日——。

誠一は定められた時間より幾分か早めに出勤した。だが、部屋の扉を開けると、楠長官はすでに執務机で仕事に取りかかっていた。少しばかり気まずいものを感じたが、あえてそのことには触れずに一礼する。

「おはようございます」

「おはよう」

楠長官は悠然と挨拶を返し、意味ありげな薄笑いを浮かべる。

「悠人の様子はどうかね」

「落ち着いていました」

昨夜、橘家へ戻る悠人に同行したときには、すでに冷静さを取り戻していたようだ。自分に来ることをやるしかないのだと、自分たちの力で濡を捜すしかないのだと、淡々と前向きな決意を口にしていた。だが、それはおそらく虚勢だろう。何かを必死に堪えるような張り詰めた表情からは、今にも崩れ落ちそうな危うさが見てとれた。

「あの子を頼んだよ」

楠長官は書類に目を落としながら軽い調子で言う。からかっているのか、本気で心配しているのか、誠一にその真意は汲み取れない。しかしながら、いずれにせよ悠人を放っておくつもりはなかった。無難に「はい」とだけ返事をすると、自席に着き、机に置かれたノートパソコンをゆっくりと開いた。

「南野君」

「はい」

頼まれた書類を作成していた誠一は、キーボードを打つ手を止めて顔を上げた。

楠長官はちょうど電話を終えたところのようだ。節くれだった手で白い受話器を戻すと、大きな椅子にゆったりと身を預けて視線をよこす。

「私は、何も意地悪で滞ちゃんを放置しているわけではないのだよ。まだ高校生の女の子に犠牲を強いることは心苦しく思っている。ただ、国の安全を守るものとして優先すべきことがあってね。許すことはできないだろうが、せめて理解だけはしてほしい」

そういえば、彼はきのうも同じようなことを言っていた。つまり――。

「橘美咲の研究は国の存亡に関わるもの、ということですか？」

「対未確認生物の要として必要不可欠なものだよ」

「未確認生物というのは、実験体の女の子でしょうか？」

「今、君に話せるのはここまでだがね」

楠長官はニッと不敵に笑って切り上げた。が、すぐに真面目な顔になって提案する。

「我々が橘美咲を確保した折には、全力で滞ちゃんを救出すると約束しよう。だから、我々の側につきたまえ。君にとっても悪い話ではあるまい。君の目的はあくまで滞ちゃんの救出であり、橘に忠義を尽くす必要はないのだからな」

「私に何をさせたいのですか？」

「橘美咲を捜索するのに必要な情報収集だよ。その中には、君が私的に得た情報も含まれる」

きのうと同じ内容の答えだが、幾分か具体的になっていた。

ここにいる以上、職務として命じられれば遂行せざるをえず、ある程度は覚悟していたつもりである。だが、橘の情報を流すことだけは、何とかして誤魔化そうと思っていた。悠人を、遙を、ひいては滞を裏切ることにもなりかねないからだ。それが、たとえ滞を救うためだったとしても――。

楠長官は見透かしたかのように言い添える。

「君にも立場があることは理解している。返答は求めない。行動で示してくればそれでいい」

誠一はゆっくりと顎を引き、唇を引き結んだ。二重スパイのような真似はしないと、楠長官に籠絡などされはしないと、そう決意したはずの気持ちが徐々に傾いていることに気がついた。嫌悪と期待がせめぎ合う。しかし結論は出せず、現実から逃避するようにノートパソコンでの書類作りを再開する。

しかし、楠長官の話は続いていた。

「さっそくだが、君にやってもらいたいことがある」

「……何でしょう？」

誠一は再び手を止め、少し警戒しながら尋ねる。

そんな様子を楽しむかのように、楠長官は口もとに意味ありげな微笑を浮かべた。

誠一が楠長官に連れてこられたのは、地下の取調室だった。

取調室といっても警視庁のそれとは違い、厚いアクリル板で仕切られた、刑務所の面会室を模した作りになっていた。その両側にはそれぞれ見張りと思われる人物が控えている。仕切られた向こう側の中央に座っているのは、滞の父親であり、美咲の夫であり、剛三の息子である橘大

地だ。シャツは少々くたびれているが、ヒゲは剃られ、髪も梳かれ、それなりにきちんと身なりは整えられている。彼は、楠長官とともに入ってきた誠一を見るなり、人懐こい笑みを浮かべて口を開く。

「今度はずいぶん人の好きそうな取調官ですね」

楠長官は仕切りの前に用意されていた椅子に座り、誠一も促されるままその隣に腰を下ろす。そして、アクリル板の向こうでニコニコと微笑んでいる大地に小さく会釈をした。

「彼は南野誠一君といってね、澪ちゃんの恋人なのだよ」

「本当に？」

大地は目を丸くして誠一を見る。

まさかそんな紹介をされるとは思わなかった誠一は、胸の内で慌てふためくが、この状況で言い逃れるなどとても出来そうにない。額に汗が滲むのを感じながら、消え入りそうな声で「はい」と頷く。それを聞いて、大地は腕を組みながら苦笑した。

「澪に彼氏がいたのも驚きだけど、よりによって公安とはね」

「事件の日までは捜査一課の刑事だったが、引き抜いてきたのだよ」

その補足的な説明を耳にした瞬間、彼の瞳に強く鋭利な光が宿った。が、すぐに鼻から息を抜いて口もとを緩める。

「おじさんは相変わらずやることがえげつないですね」

「悠人にもまったく同じことを言われたよ」

二人はアクリル板を挟んで軽く笑い合った。会話から察するに昔から面識があったのだろう。表面上は和やかで親しげな光景に見えるが、実際はそうでもない気がして、誠一は何ともいえない居心地の悪さを感じる。

「まあ、南野君を不憫に思うなら、早く白状してあげることだね」

楠長官はそう言って立ち上がった。誠一も慌てて立とうとするが、左手で制される。

「後は任せたよ」

「はい……」

どうやら今から一人で大地の取り調べをしなければならないようだ。こんなことになると思っていなかった誠一は、困惑と不安を露わにするが、楠長官は涼しい顔のまま悠然と取調室をあとにする。バタン、と重たい扉の閉まる音が大きく響き渡った。

「南野さん、それでは取り調べを始めましょうか」

「あ、はい……よろしくお願いします」

誠一はそう言って頭を下げる。しかし、彼の娘と内緒で付き合っていたことを知られたばかりであり、気まずいのはもちろんのこと、どのように取り調べを進めるべきか大いに頭を悩ませていた。相手に反感を持たれては聞き出せるものも聞き出せなくなる。勝手に暴露してさっさとなくなった楠長官が恨めしい。

「澪とはいつから？」

誠一が逡巡していると、大地は両腕を台にのせて身を乗り出し、好奇心に目を輝かせながらそ

う尋ねる。まるで友人の恋愛話を聞き出すかのような態度だ。誠一はますます困惑しながらも、今さら隠し立てするわけにはいかず、出来る限りの平静を装い正直に答える。

「知り合ったのは彼女が中三のとき、付き合い始めたのは高一のときです」

「けっこう犯罪的な感じだね。まだ何もない、ってことはないんだろう？」

「えっと、その……すみません……」

誠一は釈明のひとつもできないまま、小さく身を縮こまらせてうつむいた。さすがに冷や汗が止まらない。大地の声に非難めいた色は感じられず、ただ面白がっているだけのようには思えるが、実際のところはどうか判然としない。一般的に言えば、高校生の愛娘に手を出した男に、良い印象を持つはずはないのだ。

「悠人はこのことを知っているのか？」

「少し前に知られてしまったようで……」

「反対してる？」

「はい……」

「だろうねえ」

大地はニヤニヤしながら楽しそうに言う。この口ぶりだと、悠人の滯に対する想いは知っていそうである。彼は父親としてどう考えているのだろうか。やはり悠人と結婚させようとしているのだろうか。いっそ目の前の本人に聞いてみれば――。

そこまで考えて、誠一はふと我にかえる。

いつのまにかすっかり大地のペースにのせられていた。これではどちらが取り調べを受けているのかわからない。もちろん彼が娘の恋愛を気に掛けるのは理解できるし、誠実に答えねばならないとも思うが、一刻も早く滯を救出するために優先すべきことがある。

「滯は……滯さんは、正体不明の男に連れ去られたままです」

「そのようだね」

まるで他人事のような物言いに、誠一は不快感を覚えた。それでも理性的な態度は崩さない。「橘美咲さんの居場所を教えてください。彼女が確保できれば、滯さんを救出することができます」

それが楠長官との取引であることには言及しなかった。話していいのかわからなかったというのもあるが、どこかしら後ろめたさを感じていたことも否めない。それでも訊かれれば正直に答えるつもりである。

「南野さん」

「……はい」

先ほどまでとは打って変わり、大地は真剣な顔になっていた。台の上で両手を組み合わせる。「君にとって滯がかけがえのない存在であるように、僕にとって美咲は何よりも守りたい存在なんだよ」

「でも、滯さんはあなたの娘ですよ」

「そうだね……僕は良い父親にはなれなかった。滯も遥も可愛いとは思っているけれど、美咲が子供たちかと問われれば、僕は迷うことなく美咲をとるからね。それは、これからも永遠に変わ

ることはない」

詭弁ではない、と誠一は思った。

滯から聞いた話では、保護者としての役割はほとんど悠人が担っており、両親とは月に数回会えればいい方という状況だったようだ。それでも滯は両親を慕っているようなので、彼女には言えなかったが、いくら忙しいとはいえ少し異常だと感じていた。大地の愛情が子供に向いていないのであれば、残念ではあるが納得はいく。

「しかし、美咲さんも逃げ続けるのは大変なはずですよ。いつまで逃亡を続けるつもりですか？この先どうするか当てはあるのですか？警察は罪に問わないと言っているのですし、この国を守るためにも……」

「南野さん」

大地の顔つきが陰しくなった。

「あの実験を美咲に強要したのは公安だ。最初の何年かは言われるまま実験していたが、次第に反発するようになってね。もう言いなりにはならないと宣言した途端、すべての責任を美咲に押しつける形で捕らえようとする。しかも、僕らの家族を利用するという汚いやり口でだ。そんな奴らを信じられると思うかい？」

その淀みない説明を聞くにつれ、誠一の鼓動は速さを増していく。

「……本当ですか？」

「証拠は提示できないけどね。どちらを信じるかは君次第だ」

大地は一呼吸してから続ける。

「とにかく、僕は僕にできる方法で美咲を守る。警察のことは信用していないから、何ひとつ情報を渡すつもりはない。滯のことは……そうだな、君と悠人に頼むよ。勝手を言うようだが救ってやってほしい」

誠一は眉根を寄せてうつむいた。おそらく都合の良いところだけを選んで、都合の良いように脚色したのだろうが、まるきり嘘をついているようには思えなかった。警察側と美咲側のどちらに正義があるのかはわからない。それでも、滯の救出に利用できるものがあれば、用心深く利用していくしかないと思う。

「何か、ヒントだけでもいただけませんか」

「取調官とは思えないセリフだね」

大地はくすっと笑うと、腕を組んでゆったりと椅子にもたれかかった。

「そうだな……ヒントというより忠告になるが、君は志賀篤史君を知っているか？」

「面識はありませんが、怪盗ファントムの仲間で天才ハッカーだと聞いています」

「そのことも知っているわけだね」

彼は口もとを斜めにする。

「公安は彼のハッカーとしての腕を欲しているはずだ。不正を働いた証拠を掴まれてしまえば、警察に拘留され、無理やり手伝わされることになる。僕は橘家の人間だから配慮してもらってるけど、篤史君だとどうなってしまおうだろうね？人生台無しになりかねないよ」

その忠告には、篤史のハッキング行為を封じようとする意図が感じられた。橘の側であれ、警

察の側であれ、篤史がハッカーとして動くことを怖れているのだろう。つまり――。

「それは、美咲さんの逃亡を有利にするために言っているのでは？」

「もちろんそうだよ。でも、言ったことは嘘じゃないからね」

大地は悪びれもせずに言う。

誠一は顎を引き、アクリル板越しに彼を見据えた。

「私がそれを聞いて志賀さんを止めるとお思いですか。私の目的は滯を救い出すことだけです。それを叶えてくれるのなら橘だろうと警察だろうと構わない。ましてや、面識のない彼がどうなろうと関係ありません。必要とあれば彼を警察に売り渡すことだって厭わない」

「君はそういうタイプではないね。それとも、滯のためなら悪魔にでもなれる？」

大地はゆっくりと頬杖をつきながら、誠一の瞳を見つめ、挑発するように悪戯っぽく問いかける。はったりであることは完全に見透かされているようだ。彼の指摘どおり、おそらく自分にはそんなことなど出来ないだろう。報復を怖れているわけではなく、道義的に許されないと思うからだ。けれど。

悠人なら、どうするだろう――。

その疑問が脳裏をよぎった瞬間、誠一は膝にのせた手を無意識にグッと握りしめた。手のひらに爪が食い込んでいく。頬を伝い流れるぬるい汗が、小さく震えるこぶしの上にぽたりと落ちて弾けた。

## 27. 二人の誓約

---

「はっ……っ……」

幾分か苦しそうな、それでいて規則正しい呼吸。そのリズムと連動するように、漚の上半身は大きく上下に揺れていた。束ねていない艶やかな黒髪は振り乱れ、上気して汗ばむ頬や額に張り付いている。深くはない胸の谷間には、幾筋もの汗が流れていった。

「ごはんできたぞ」

「あ、うん」

エプロンを着けたままの武蔵に、頭からスポーツタオルを掛けられる。

漚はスクワットを止め、手錠を嵌められた両手でタオルを取り、滴る汗を拭いながら荒い息を整える。真冬にもかかわらず、半袖Tシャツにジャージのズボンという薄手の格好だが、暖房のよくきいた室内での運動となれば、これでもむしろ暑すぎるくらいだ。

「こういう状況でよくそんなことやる気になるな」

「じっとしてたら体がなまっちゃうんだもん」

呆れたように見下ろす武蔵に、漚はえへへと笑って答える。

左手首とポールを繋ぐ鎖は、当初より随分長くなっていた。短いときはちょっとした身動きすらほとんどとれなかったが、今はスクワットや腹筋ができるくらいの余裕はある。そして、そういう簡易的な筋トレが漚の日課になっていた。

「ほんと変わったヤツ」

武蔵は半ば呆れたように独り言を落としたあと、両手の手錠はそのままで、ポールと繋がれている左手の手錠だけを外した。漚は屈託なくにっこりと微笑んで「ありがとう」と礼を言い、食事の準備が整えられたダイニングテーブルへと駆けていく。椅子に座って催促するように振り返ると、武蔵は小さく息をつき、背中で結んだエプロンの紐を解きつつ歩いてきた。

「いただきまーす」

漚は両手を合わせて元気よく声を弾ませると、手錠を掛けられたまま、器用に箸を使ってごはんやおかずを口に運ぶ。端から見れば異様な光景だろうが、漚自身は、視覚的にも動作的にもすっかり慣れてしまっていた。

今晚のメニューは、ごはん、肉じゃが、卵焼き、ほうれん草のおひたし、味噌汁である。武蔵の作るものは和食中心で、素朴なものが多いが、どれも文句のつけようがないくらいに美味しい。橘家では洋食や中華がメインだったので、漚にはこの食事がかえって新鮮に感じられた。

「武蔵の作るごはんってほんと美味しい」

「そりゃどうも」

幾度となく繰り返されてきたやりとり。言葉としてはやや素っ気なく感じられるものの、その弾んだ声音からも、ほころんだ表情からも、彼が気をよくしていることは十分に伝わってくる。別に機嫌をとろうとしているわけではないが、素直な気持ちを伝えて喜ばれるのはやはり嬉しい

。

「もしかしてコックさんだったとか？」

「料理は昔からただの趣味だ……おっ？」

武蔵はぴくりと眉を動かし、箸を持つ手を止めた。イヤホンから気になる情報が流れてきたのだろう。これまでも度々そういうことはあった。普段からよく片耳にイヤホンを着けており、ラジオか何かを聞いているらしいのだ。

「怪盗ファントムが予告状を出したみたいだぞ」

彼はイヤホンを押さえながらそう言うと、滯に視線を流してフツと鼻先で笑った。

「薄情な奴らだな。まだおまえが行方不明だっていうのに」

「……それは、違うよ」

滯はゆっくりと箸を置き、真剣な面持ちで武蔵を見据えて言う。

「私のいない間だけファントムが活動してなかったら、間違いなく私に疑惑の目が向けられる。だから、私のためにやろうと決めただと思う。いつか無事に帰ってくるって信じてるから……って、あれ？ どうして武蔵が知ってるの??」

彼に怪盗ファントムのことを話した覚えはない。知っているのは家族と仲間、そして公安くらいである。まさか公安と何か繋がりがあるのでは——滯が疑いの眼差しを送ると、武蔵は呆れたように指さしながら言い返す。

「おまえたち双子には魔導の力があるって言っただろう？ 魔導力は一人ひとり違うんだ。それを認識できる人間からすれば、顔を隠したところで正体バレバレなんだよ」

「うそっ、何よそれ」

滯はギョツとして、はずみで手錠の鎖をガシャリと鳴らす。

武蔵は小さく笑いながら頬杖をついた。

「魔導を使いこなせるようになれば、自分の力を隠すことも可能だが、少なくとも今のおまえらには無理だしな。とはいえ、この国には魔導力を持つ人間は滅多にいないし、ましてや認識できる人間はほぼ皆無だろうし、まあ問題になるようなことはないだろう」

「だといいいんだけど」

そう言いつつも、滯は眉をひそめて口をとがらせる。まるで見えない発信機をくっつけているようで薄気味が悪い。認識できる人間はほとんどいないのかもしれないが、少なくとも武蔵には、隠れていても居場所が見つかってしまうということだ。別に内緒で何かをするつもりはないが、気持ちの問題である。

武蔵はそんな思考を見透かしたかのようにフツと口もとを緩めると、箸を持ち直して食事を再開した。

食事のあとはシャワーを浴び、それから再びポールに繋がれる。

滯にはもう逃げるつもりはなかったが、武蔵はあくまで慎重だった。食事やシャワーなどやむを得ないとき以外は常にポールに拘束し、外したときは必ず対処可能な距離で見張っている。窓に引かれた遮光カーテンも開かれたことがない。

それでも、当初に比べれば幾分かは譲歩されていた。

シャワー時に扉を開けて見張られることはなくなり、磨りガラス越しに見張ってくれるようになった。ポールと左手首を繋ぐ鎖はだいぶ長くしてくれた。手錠で擦れてできた傷がひどくならないよう、傷薬が塗られ、常に清潔な包帯を巻いてくれるようになった。他にも必要なものがあればたいい用意してくれる。そして、相変わらずひとつの布団で寝てはいるが、手を出されたことはなく、いつも朝までぐっすり熟睡できていた。

最初は殺されるのではないかと本気で思ったし、どんなひどい目に遭わされるかと怯えていたが、今ではそれなりに人権を尊重されているように感じている。手錠さえなければ、拉致監禁されているとは思えないくらいの待遇だ。

しかし、ここに来てからすでに二十日が過ぎている。

武蔵はノートパソコンを使って必死に美咲たちの行方を追っているが、残念ながら順調に事が運んでいるとはいえないようだ。状況を教えてもらったわけではない。それでも、眉間に皺を寄せて画面と睨み合う姿を見れば、おおよその察しはつく。

濡としても心配だった。

武蔵があの子を無事に取り戻さない限り、濡が解放されることもないのだから――。

今も、武蔵はダイニングテーブルの一席に座り、いかめしい顔をしてノートパソコンに向かっている。苛立ち紛れに頭を掻いたり、手を止めて考え込んだりしながら、いつもよりさらに慎重にキーボードを叩いていた。何をやっているのかはわからないが、見ている濡の方が息が詰まりそうである。

「あの、私に何か手伝えることない？ パソコン以外で……」

「今はない。いずれ人質として利用させてもらうけどな」

武蔵は顔も上げず、突き放したように答える。

その態度に、その空気に、濡は居たたまれなさを感じて顔をそむけた。気晴らしに腹筋でも始めようかと思ったが、シャワーを浴びたあとなので、今から汗を掻くようなことはできるだけ避けたい。いっそ寝てしまおうかと布団に体を横たえかけた、そのとき――。

「くそっ！」

唐突に発せられた怒声とともに、バンッ、と勢いよくテーブルが叩かれた。

濡はビクリとして振り返る。

「あと少し、あともう少しだったのに……失敗した……！」

彼は喉の奥から絞り出すような声でそう言うと、ギリギリと奥歯を食いしばり、テーブルについた両手をグッと握りしめた。その筋張ったこぶしは小刻みに震えている。

「失敗、って……？」

「この三週間の工作が水の泡になっちゃったんだよ！」

激昂して当たり散らしながら答える彼に、濡はおそろおそろ質問を重ねる。

「それって、また一からやり直してこと？」

「いや、もう二度と同じ手は通用しない」

「じゃあ……？」

「知るかよ！！」

武蔵は目の前のノートパソコンを払いのけ、倒れるようにテーブルに突っ伏した。こんな彼の姿を見るのは初めてだ。まるで何もかも投げ出したかのような態度に、事態がいかに深刻であるか思い知らされる。

漣は気が遠くなりそうだった。

深く落ち込む彼のことも、囚われの少女のことも、もちろんそれなりに心配ではある。しかし、身勝手かもしれないが、自分の帰る目処が立たなくなったことに、他の何よりも大きな衝撃を受けていた。ここでの生活がつらいわけではない。居心地も悪くないと感じている。それでもやはり家族のもとに帰りたいし、友達と遊びたいし、学校にも行きたいし、誠一にも会いたい。事件前の穏やかな日常を取り戻したいのだ。

「……ねえ」

漣はおずおずと声を掛けた。しかし、武蔵はテーブルに突っ伏したままピクリともしない。それでも聞こえてはいるだろうと、そっと一呼吸してから言葉を継いでいく。

「武蔵がどういうことをやろうとしていたのかはわからないけれど、私たち家族と一緒に怪盗ファントムをやってる仲間に、コンピュータやインターネットにすごく詳しい人がいるの。天才ハッカーだって。だからね、お母さまの行方を捜しているのなら、みんなと協力すればいいんじゃないかな。武蔵が掴んだ手がかりと、篤史の能力を合わせれば、何とかなるかもしれないから」

武蔵はゆっくりと顔を上げた。燃えるような鮮やかな青の瞳が、まっすぐに漣を射抜く。

「敵と手を組めっていいのか？」

「敵じゃないよ」

「橘剛三は、俺に三億円の賞金を懸けている」

それは漣の初めて聞く話だったが、剛三ならやりそうなことだと思う。三億円という金額も妥当な線だろう。自分を取り戻そうと頑張ってくれていることを知り、武蔵には悪いが胸の内でもこっそりと嬉しく思う。しかし、すぐに緊張を取り戻して真顔のまま話を続ける。

「それは私を連れ去ったからだよね？ 無事がわかれば取り下げてもらえるよ」

「どうだかな。俺が橘美咲を追っていることは承知のはずだ。あちら側が協力するとは思えないし、俺も橘美咲の家族なんて信用できない。協力を装って罠に掛けられかねないからな」

武蔵の顔つきはいっそう険しさを増していた。

漣は手錠の鎖を引いて身を乗り出す。

「武蔵はあの女の子を助けたいだけなんだよね？ お母さまに復讐するつもりはないんだよね？ だったら、私がみんなを説得するから。武蔵を裏切らせないようにするから。だから……」

「敵を欺くにはまず味方から。おまえを騙すなんて簡単だろうぜ」

彼の端的な言葉は的を射ていた。漣は唇を引き結び、瞼を震わせながら目を伏せる。

「お願い、私や私の信じる人たちを信じて」

「簡単だよな。おまえは信じろって言うだけだ。仲間が俺を裏切っても裏切らなくても、おまえはどのみち仲間のもとへ帰れるが、俺には命に関わる重大なリスクがある」

彼の主張はもっともである。濡もそれなりのリスクを負わなければ信じてもらえないだろう。ひとり小さく頷いて意を決すると、あらためて武蔵の方へ向き直り、布団の上で背筋を伸ばして正座する。

「もし仲間が武蔵を裏切ったら、私は帰らない」

「今はそう言っても土壇場で気が変わるはずだ。目の前に差し伸べられた救いの手を、自らの意志で払いのけるなんて無理だろう。それ以前に、俺が罠に掛かって殺されてるかもしれないけどな」

「約束する。絶対に武蔵を裏切らないし、裏切らせないから」

濡はひたむきに訴え続ける。それでも、武蔵の心は動かさなかった。

「たいした覚悟だな。だが、それをどう証明する？」

「え……指切りげんまん……とかじゃ駄目だよな……」

呆れたような冷ややかな眼差しで睨めつけられ、濡は身をすくめてうつむいた。証明と言われても難しい。必死になって考えてみるが何も思い浮かばない。沈黙が重くのしかかる。すると、武蔵がやにわに椅子を引いて立ち上がり、無言で歩を進め、正座した濡の膝先にしゃがみこんだ。瞬ぎもせず、まっすぐに見つめながら口を開く。

「俺に抱かれるか？」

「……えっ？」

きよんとする濡の左頬に、包み込むように大きな手が添えられ、グイッと端整な顔が近づけられる。息が触れ合うほどの距離にたじろぐが、見えない力で拘束されたかのように動けない。

「そこまで出来るのなら信用してやるよ」

「えっと……どうして、そうなるの……？」

「相応のものを差し出せてことだ」

「じゃ、じゃあ、別のものでもいいんだよね？」

「今のおまえに他に何があるんだよ」

「……………」

彼の理屈は正直よくわからなかったが、その眼差しは真剣そのもので、冗談ではないのだと思い知らされる。少なくとも彼に納得してもらうには、信じてもらうには、言うとおりにするしかないのだろう。恋人でもない彼に抱かれるしか——考えているうちに、目の奥がじわりと熱くなり涙が滲んできた。

「こんな……こんなのって、間違ってるよ……」

「所詮、おまえの覚悟は口先だけなんだな」

武蔵は冷やかにそう言い捨てると、すっと立ち上がり、躊躇いもせず背を向けて去っていく。

「待って！」

濡はバツと顔を上げて縋るように声を張った。武蔵の足は止まり、スローモーションのように振り返る。その鉄仮面のような顔つきからは、感情を窺うことができない。気色ばんでいるようにも、呆れているようにも、興味をなくしているようにも見える。濡の心臓は、壊れてしまいそ

うなくらいに早鐘を打っていた。

「いいよ、その条件で」

その声はぎこちなく微かに震えていた。それでも、潤んだ瞳のまま強気に見上げて言う。

「だから武蔵も約束して。必ず、みんなと協力するって」

「……約束する。俺も決しておまえを裏切ったりしない」

武蔵は表情を動かすことなく静かにそう答えると、再び滯のもとへ戻ってきた。しゃがんで瞳の奥を探るように見つめたあと、滯の体をそっと仰向けに倒し、眉ひとつ動かすことなくそこに跨がる。そして、手錠で繋がれた両手を頭上に押しやりつつ、白いTシャツをまくり上げ、露わになった膨らみの片方を大きな手で覆った。

二人の視線はまっすぐにぶつかり合う。

「撤回するなら今しかないぞ」

「撤回なんてしない」

もうとっくに腹は括ったつもりである。それでも、早鐘のような鼓動は少しも鎮まらない。きっと武蔵にも伝わってしまっているだろう。彼は滯の片胸に手を置いたまま、覆い被さるように上体を倒し、真上からじっと顔を覗き込んできた。そのゾクリとするくらい鮮やかな青の瞳には、獲物を捕らえるように鋭く、それでいてどこか情欲に濡れた光が宿っている。

「途中でやめてもらえるなんて、甘い期待はするなよ」

「わかってる……んっ……」

首筋に濡れた舌先が這い、胸を包む手が意志を持って動く。

思わず甘い声が漏れそうになるのを、滯は口を引き結んで必死に堪える。目もきつく瞑ったまま開かない。誠一のものとは違う大きな手、繊細な指先、薄い唇、熱く蠢く舌——緩急のある絶え間ない刺激が、首筋から胸、脇腹、そして脚へと順に与えられていく。その度に、身体が呼応するようにひくんと跳ね、手錠の鎖がジャラリと音を立てた。

片足に、抜けきらないジャージがわだかまる。

彼の眼前にすべてを晒す格好になり、濡れたそこに指を挿し入れられると、いつしか堪え切れない嬌声が漏れ始めた。しつこいくらいの愛撫はもどかしい疼きを与え、身体から聞こえる淫らかな水音は猛烈に羞恥を煽る。それでも容赦ない攻めは続いた。次第に頭が痺れて何も考えられなくなる。顔も身体も熱を帯び、白い肌にはじわりと汗が浮かんできた。

「はあっ……」

武蔵のどこか苦しげな熱い吐息が耳朶にかかり、その逞しい腕で苦しいくらいに強く抱きしめられた。互いの汗ばんだ素肌が密着する。開かれた脚の付け根に固いものを感じると、無意識に体の奥が疼き、足のつま先には引き攣れるように力が入った。滯は上気して浅い息を繰り返しながら、しがみつくように、手錠で繋がれた両手を彼の背中にまわした。

## 28. 交渉

トゥルルルル、トゥルルルル——。

学習機の隅に置いてある携帯電話が鳴り出した。

そろそろ寝ようとノートや教科書を片付けていた遙は、携帯電話に手を伸ばすが、そのディスプレイを目にして怪訝に眉をひそめた。発信者番号が非通知になっているのだ。短い逡巡の後、二つ折りのそれを素早く開き、通話ボタンを押して耳に当てる。

「……はい」

『遙、久しぶり！』

「濡？！」

電話の向こうから聞こえた声は、疑いようもなく濡のものだった。しかし、行方が掴めないまま三週間が過ぎ、そこへいきなり本人から電話など、とてもにわかには信じられない。思わず息を呑んで前のめりになる。

「本当に濡なの？ 無事なの？ 今どうしてるの？！」

『うん、長いこと心配かけて本当にごめんね。でも元気にしてるから。どこかは教えられないんだけど、武蔵……えっと、私を連れ去った人のところにいるの』

どうやら武蔵というのはあのバイク男の名前らしい。濡の言い回しから察するに、その武蔵に命じられて電話をしてきたものと思われる。当然ながら、それには何らかの目論見があるはずだ。考えられることといえば——。

「そいつが僕たちと取引したいって？」

『取引っていうか、交渉っていうか……うん……具体的なことについてはおじいさまと話すから替わってほしいんだけど、その前にあらかじめみんなに警告しておきたいことがあるの』

「わかった、何？」

遙が尋ねると、彼女は小さく息を継いで毅然と告げる。

『私と武蔵の居場所を捜さないで。三億円の懸賞金も取り下げて。もし無断でここを突き止めたとしても、私は絶対に帰らないし、逆に武蔵のことを全力で守るから。私がみんなのところへ帰るのは、武蔵が目的を達成したときだけ』

「その目的は？」

『地下室に監禁されていた女の子を取り戻すこと』

遙は直接見えていないが、研究所の地下室には実験体の若い少女が監禁されていた。どうやら彼女が唯一の生き残りであると思われる。それゆえ、研究を継続するためには手放せなかったに違いない。美咲は逃亡の際にその少女も一緒に連れ去っていたのだ。それを「取り戻す」というのだから、武蔵は少女の身内か仲間なのだろう。

「つまり、濡を返してほしければ、無用な詮索はせず黙って手を貸せてこと？」

『うん……まあ、だいたいそういうことかな。おじいさまにも伝えてくれる？』

「わかった。しばらく待ってて」

遙は携帯電話を下ろすと、微かに眉を寄せる。

濡の声に怯えた様子は窺えない。どうやら自らの意思で誘拐犯に協力しているようだ。少女に対する同情ゆえの行動だとすれば頷ける部分もあるが——あの男に聞かれている可能性が高いため、下手に突っ込んだことを訊くわけにもいかない。さしあたり濡に命の危険はないと判断し、通話状態の携帯電話を手にしたまま立ち上がった。

「しばらく待ってて、だって」

「ああ、聞こえた」

布団に足を崩して座っていた濡は、携帯電話を耳から離すことなく隣の武蔵にニコッと笑いかけた。肩に掛けたバスタオルで軽く押さえるように濡れた髪を拭く。しかし、対照的に彼の表情はいまだ硬いままである。

「心配しなくても約束は守るよ。一緒に頑張ろう？」

「……ああ、わかってる」

ようやく武蔵の顔が少し和らいだ。

そのことにほっとして小さく息をつくとき、不意に大きな手で肩を抱き寄せられた。思わずきょとんとして彼を見上げる。何を考えているのかはよくわからなかったが、肩を抱く手の力強さから、堅い決意が伝わってくるように感じた。素直に彼の腕に寄りかかったまま、声を立てずにくすっと小さく微笑んだ。

「濡、待たせたな。よく電話をしてくれた」

『ご面倒をお掛けして申し訳ありません』

「命に別状がなく何よりだ」

遥が電話を受けてから二十分ほど経ったころ、ようやく剛三と濡が話し始める。

電話口で濡を待たせている間に、書斎の隅にある打ち合わせスペースに大急ぎで準備を整えた。各自の部屋にいた悠人と篤史を呼び集め、全員が電話の内容を聞けるよう、スピーカに音声を飛ばすようにしたのである。念のため録音もしている。すべて剛三に命じられて遥が行ったことだ。

「武蔵とやりに詳しく話を聞きたい。替わってくれ」

『わかりました』

濡は神妙に答える。しかし、そのあと電話の向こうから聞こえてきたのは、誘拐犯とその被害者とは思えない、随分とざっくばらんなやりとりだった。

『武蔵、おじいさまが替わってって』

『条件を呑むって言ってたか？』

『とりあえず詳しく話を聞きたいみたい』

携帯電話を口もとから離して会話しているのだろう。声が遠かったが、その内容は十分に聞き取ることができた。ガサガサ、と何かが擦れるような音がしたあと、武蔵と思われる男性のやけに挑発的な声が響く。

『どうも、橘剛三さん』

「武蔵だな」

『仮の名前だけだな』

武蔵は茶化すような口調でそう言ったが、剛三を含め、誰も本名だとは思っていないだろう。「君のことはひとまず武蔵と呼ばせてもらうことにしよう。まず始めに伝えておく。ここには秘書の楠悠人、孫の遥、協力者の志賀篤史の三人が同席しており、スピーカーで電話の音声を聞いている。問題はあるか？」

『構わない。了解だ』

その返事に、剛三は厳めしい顔のまま頷くと、さらに眉根を寄せて低い声で尋ねる。

「ところで、武蔵……濡に乱暴狼藉など働いてはおらぬだろうな？」

『ああ、三食昼寝付きの極楽生活だ。快適すぎて少し太ったくらいさ』

『ちょ、うそっ、ほんとに太った?! トレーニングしてたのにな!!』

濡は電話の向こうで狼狽えた声を上げた。しかし、その内容は脱線だと云わざるを得ない。もっとも誘導したのは武蔵であるが――。

『俺としては、もう少し肉をつけてもいいと思うけどな』

『武蔵の好みなんてどうでもいいのっ!』

むきになって喚きちらす濡の声と、愉快そうに笑う武蔵の声が重なり合う。

遥、悠人、篤史の三人は、怪訝に眉をひそめつつ互いに顔を見合わせた。おそらく三人とも同じことを考えているのだろう。悠人の顔面からは徐々に血の気が失せていく。そして、剛三は携帯電話を耳に当てたまま、呆れ果てたような顔をしていた。

「……武蔵、聞いておるか」

『ああ、ちゃんと聞いてるぜ』

武蔵は笑いを含んだ声音でそう返事をしたあと、またしても濡をからかい出す。まるでじゃれ合っているかのようなこそばゆい雰囲気、電話のスピーカーを通して伝わってきた。

剛三はわざとらしく咳払いをした。

「濡が元気なのはよくわかった。そろそろ本題に入りたいのだが」

『ああ、そうだな』

武蔵は急に落ち着いた口調になり、説明を始める。

『俺の目的は、姪のメルローズを救い出すこと。橘美咲が拉致して実験体に使っていた少女だ。この三週間、インターネットを通じて橘美咲の行方を捜し、匿名のメールで連絡を取るところまでは漕ぎ着けたが、正体を怪しまれて連絡を絶たれてしまった。だが、そのときに得た情報があれば、そちらさんのハッカーなら行方を突き止められる、と濡は言っている』

「その情報が確かなものであれば、可能だろう」

剛三の答えを聞き、篤史は神妙な面持ちでみんなに頷いて見せた。これまでは公安に付け入れられないように、ハッキング行為自体を控えていたが、それは剛三の指示を受けてのことである。篤史自身は、ハマせずハッキングする自信があるのに、とよく不満げにそうこぼしていた。

『メルローズを無事に救い出せば、必ず濡を解放すると約束する。俺としては、橘美咲の家族なんか信用できないし、協力を頼む気にもなれなかったが、濡の強い希望でそうすることにした

。俺を、そして濡を裏切らないでくれよ』

「美咲はどうするつもりだ。報復するのか」

『復讐が何も生まないことはわかっている。俺はメルローズを無事に取り戻せればそれでいい。橘美咲を傷つけるようなことは決してしない。濡ともそう約束した』

隣にいる濡が反論しないところから察すると、そういう約束をしたことは事実のようだ。だが、所詮は口約束に過ぎない。単純な濡を丸め込むことなど容易いだろう。その程度のことかわからないはずはないのに、なぜか剛三は意外なほどあっさりと言肯した。

「わかった。君たちの居場所を捜さない、三億円の懸賞金を取り下げる、君と協力して美咲を捜す、メルローズを救出する——我々への条件をまとめるとこういうことだな。そして、最終的にメルローズが無事に救出できれば、濡を我々に帰してくれると」

『いや、メルローズ救出は俺の仕事だ。橘美咲とも俺が交渉する』

「よかろう。情報の受け渡しについては、篤史と直接話をしてくれ」

『了解』

武蔵からの返答を聞くと、剛三は通話状態のまま携帯電話を篤史に差し出した。彼は横柄ともいえる態度でそれを受け取り、パイプ椅子の背もたれに身を預けながら、いつもどおりの些か不躰な物言いで切り出す。

「もしもし、武蔵さん？」

『天才ハッカーか？』

「篤史だ。専門的な知識は？」

『底辺ハッカー程度だ』

「なるほど」

篤史はニヤリとした。武蔵を馬鹿にしているわけではなく、言いまわしを面白がっているのだろう。

「こちらから方法を指示するが、不明な点があれば尋ねてほしい」

『ああ、手間を掛けるかもしれないが、よろしく頼む』

意外にも、武蔵は礼をわきまえた分別のある発言をした。人質を取っている誘拐犯とは思えない態度である。先ほどの会話を思い返してみても、冷静な交渉であり、脅迫めいたものは感じられなかった。そういう人物だからこそ、濡が心を許しているのかもしれない。ただ、それが彼の本性であるかどうかは、遥にはまだ見極めることができなかった。

しばらく、データの受け渡しに関しての専門的なやりとりが続いた。

篤史が状況を聞き取って具体的な指示を出し、武蔵が実行して報告する、さらに篤史が愛用のノートパソコンを使って確認する、という流れを繰り返している。傍らで聞いている限り、特に問題なくすんなりと進んでいるようだ。篤史がわかりやすく説明しているとはいえ、理解している武蔵もそれなりの知識を持っているのだろう。

ときどき、濡が隣から口を挟んでいるのが聞こえる。当然ながら有益なアドバイスなどではなく、興味本位であれこれ尋ねているだけである。だが、二人の仲睦まじさを感じさせるには十

分だった。遙は無意識のうちに眉を寄せ、悠人も苦々しい表情を浮かべていた。

やがて、データの受け渡しが完了した。

画面を凝視していた篤史も、電話の向こうにいる武蔵も、互いに大きく安堵の息をついた。篤史によれば、公安にも気付かれていないだろうということで、これに関してはひとまず無事に成功したようだ。

『どのくらいで突き止められる？』

「今は公安に目を着けられてて派手な動きが取れない。通常なら一日あれば余裕でこなせる作業だが、煩わしい隠蔽工作も必要になるだろうし、多めに見積もって一週間というところだ。目処がついたら連絡する」

『わかった、よろしく頼む』

そう返事をした武蔵の声は、肩の荷が下りて幾分か穏やかなものになっていた。

しかし、この打ち合わせスペースの空気は、未だにピンと張り詰めたままである。その原因は――。

「篤史、替わってくれ」

悠人は感情を抑えた低い声でそう言うと、手のひらを上に向けて催促する。その瞳には、やり場のない激しい怒りが滾っていた。剛三の睨めつけるような牽制の視線も意に介さず、篤史が躊躇いがちに差し出した携帯電話を、じれったそうに奪い取って耳に当てる。

「会長秘書の楠です」

『どうも』

武蔵は呑気に軽い挨拶を返した。悠人の眉間に深い皺が刻まれる。

「濡と替われ。話がしたい」

『……待っている』

出し抜けにあからさまな敵意を向けられ、武蔵もさすがに少し気を悪くしたようだ。それでも拒みはしなかった。濡と短いやりとりを交わしたあと電話を替わる。

『師匠、お久しぶりです。濡です』

「濡、本当に大丈夫か？ 言わされてるだけじゃないのか？」

『武蔵には良くしてもらってますし、心配はいりません』

濡はいつもと変わらない明るい声で答えた。言わされているだけとはとても思えない。そんなに器用に嘘をついたり演技をしたりなど、彼女に限っては出来るはずがないのだ。生まれてから17年の間、ずっと一緒に過ごしてきた遙だからわかることである。そして、ずっと面倒を見てきた悠人にもわかっているはずだ。

「そうは言っても、顔を見ないことには安心できない……」

『私も、早く師匠やみんなに会いたいです』

小さくはにかんだようなその声に、携帯電話を握る彼の手に力がこもる。

「早く会えるよう力を尽くす。待っていてくれ」

『うん……きゃっ！』

その可愛らしい悲鳴は、身の危険を感じさせるようなものではなかった。しかし、悠人は一瞬

で青ざめて表情を凍りつかせると、電話に食らいつかんばかりの勢いで呼びかける。

「滯?! どうした?! 何があった?!」

『ここまでだ。じゃあな、会長秘書さん』

『ちょっと、あっ……』

ツーツ、ツーツ、ツーツ――。

滯のあたふたした声が遠くに聞こえたのを最後に、通話が切れた。だが、滯に危害が加えられたようには思えない。おそらく武蔵が電話を奪い取っただけなのだろう。悠人が先に挑発的な態度をとったのだから仕方ない。だが、彼は震える手で握った携帯電話を、恨みがましい目つきで睨みつけていた。

「剛三さん、どうするつもりですか」

通話の切れた携帯電話を机に置きながら、悠人は低い声で尋ねた。その眉間には深い縦皺が刻まれ、瞳には鋭い光が宿り、必死に激情を堪える様子が見てとれる。だが、意図的なのかそうでないのか、剛三の返事はまるで彼の意に沿わないものだった。

「武蔵の言うとおりにすればよかろう」

「しかし、一刻も早く滯を……」

「武蔵が誘拐犯であることは間違いないが、人間的には意外とまともなようだ。あそこまで言うのだから約束は守るだろう。何より滯に手なずけられているようだからな。さすがはわが孫娘、なかなかやりおるわい」

そう言い、ニッと口の端を吊り上げる。

遙も、武蔵にはあまり悪い印象を抱かなかった。人を見る目のある剛三が言うのだから、まともというのはそうなのかもしれない。ただ、滯に手なずけられているかはわからない。結果的にそうなっているのだとしても、滯が意図したものではないだろう。

「悠人」

首が折れそうなほど深くうなだれている彼に、剛三は冷ややかな視線を流して釘を刺す。

「おまえの気持ちもわからんではないが、勝手にするでないぞ」

「承知しています」

悠人の答えは、いつもどおりの従順なものだった。けれど、大いに不満を感じていることは、誰の目にも明らかである。警察庁のときみたいに暴走しなければいいけど――苦悩する彼の横顔を見つめながら、遙は慎重に見守っていこうと心に決めた。

「どうして強引に切っちゃうかなあ」

「あいつはどうもいけ好かない」

口をとがらせ詰め寄る滯に、武蔵は忌々しげに顔をしかめて吐き捨てるように答えた。滯の手から奪い取った携帯電話を床に置き、立てた膝に寄りかかって溜息をつく。そんな彼を見つめながら、滯はふっと小さく息をついて表情を和らげた。

「でもありがとう、私のお願いを聞いてくれて……途中までだったのに……」

「やめたのはあくまで俺の意思だからな。おまえの覚悟は十分に伝わった」

「やっぱり武蔵っていい人だね」

肩に掛けたバスタオルで濡れた髪を包みながら、くすっと微笑む。

途中でやめてもらえるなんて、甘い期待はするなよ——そう言っていたにもかかわらず、結局、武蔵は途中でやめてしまったのだ。濡が拒絶したわけではない。武蔵の気が萎えたわけでもない。ギリギリのところでは我にかえったという感じだ。いきなり濡を放置して何も言わず浴室に駆け込み、シャワーで身体中を冷やして戻ってくると、「どうかしてた」と力なく呟いて濡の拘束を解いたのである。

「……そんなに嫌だったのかよ」

「えっ？」

武蔵が何を言っているのかわからなかった。しかし、すぐに例の条件についてだと思い至る。

「だって、それは……武蔵は彼氏じゃないし……」

戸惑いながらも、上目遣いで眉をひそめて言い返す。別に武蔵のことが嫌だとかそういうわけではない。武蔵も、気持ちもないまま体を重ねるのは間違っていると、そう気付いたからやめたのではなかったのか——。

彼の顔に仄かな陰が落ちた。

「心配するな。もう二度と無理強いはいしない」

「うん……」

濡はもやもやした気持ちのまま頷き、膝を抱えた。半袖Tシャツから伸びた腕には、もうどこにも拘束の鎖は見当たらない。だが、手錠を嵌められていた手首のあたりは、治りきっていない内出血と傷で、見るからに痛々しい状態になっていた。

武蔵も、濡の視線を追ってそこに目を落とす。

「かなり痕になってるな」

「多分、そのうち消えるよ」

淡々と答えながらも、内出血はともかく傷痕は残るのではないかと一抹の不安が胸に湧き上がった。が、そうなったときのことなど考えたくもない。きっと元通りきれいに跡形もなく治るはず、と自分に言い聞かせながら、にっこりと精一杯の笑顔を作って見せる。しかし——。

「消える、か」

じっと濡の手首を見つめたまま、武蔵は独り言のようにぼつりと落とした。気のせいかもしれないが、まるでそれを望んでいないかのように聞こえる。だが、そんなことはあるはずないとすぐに思い直し、深く考えることなく意識の外へ追いやった。

## 29. 許されない願い

---

「はっ！！」

武蔵の懐に素早く飛び込み、みぞおちに放った一撃は、読まれていたかのように軽く阻まれた。すぐさまもう一方の拳を打ち込むが、こちらも完全に受け止められてしまう。一度間合いを取るべく、後方へ飛び退こうとしたが、その一瞬に足もとをすくわれた。

「——っ！」

受け身を取りつつ倒れ込み、一回転して彼の追撃をかわすと、その勢いを利用して側頭部に蹴りを入れる——はずだったが、すんでのところ足首を掴まれてしまう。さらに、膝裏を抱え込んで体ごとのしかかられ、両腕までもがあっさり取り押さえられた。逃れようと懸命に体を振るが、彼の力には敵わず、ほとんど身動きすらとれない。

「も……もう一回！」

「いいかげん諦めろ」

躍起になって再戦を申し込む滯を、武蔵は煩わしげに溜息を落として軽くあしらう。そして拘束していた滯の両腕と左脚を解放し、少しだけ体を起こすと、滯の顔にかかる乱れた黒髪をそっと払った。

橘家と電話で交渉をしてから三日が過ぎた。

それ以降、滯の手錠はずっと外されたままである。外に出なければ何をやってもいいと言われたが、やはりトレーニングくらいしかすることはできない。それゆえ一人で黙々と体を動かしていたのだが、今朝ふと思立ち、武蔵に手合わせの相手を頼んでみたのだ。

彼は面白がって快諾してくれた。

悠人以上に強い相手がいるのだから利用しない手はない。滯は大いに張り切って挑み掛かるものの、何度やっても軽くねじ伏せられるだけだった。手合わせの意味があるのかも怪しい状態だ。実力が違いすぎることは嫌というほどわかったが、このまま終わるのは悔しく、なんとしてもせめて一矢報いたいと思ったのである。

滯は仰向けのまま、顔の前で両手を合わせて懇願する。

「あと一回でいいから、お願いっ！」

「もう勘弁してくれ。疲れたんだよ」

「嘘ばかり」

運動量でいえば、攻撃を仕掛ける滯の方が圧倒的に多い。おそらく滯よりもずっと体力のある武蔵が、これしきのことで疲れるとはとても思えない。滯は思いきり頬を膨らませて不服を訴えるが、武蔵は大きく息をつき、ぐったりと滯に覆い被さるように脱力した。彼の体重がずしりとのしかかる。

「ちょっ、重いよ」

「しばらく休ませろ」

武蔵は投げやりにそう言うと、濡の首筋に顔を埋めたまま、はあっと熱い吐息を落とした。ドクドクと早鐘のような鼓動が、密着した体から伝わってくる。疲れているというのは本当なのかもしれない。

でも、この体勢って——。

先日、武蔵に抱かれそうになったあのときと似たような形になっている。違いは、服を着ていることと手錠がないことくらいだ。意識すると急に顔が火照り、体も熱くなってきた。鎮まれと思えば思うほど、鼓動も速くなっていく。どうしよう、と動けないまま狼狽していると。

ぎゅるるるるる——。

腹の虫が盛大に悲鳴を上げた。

しん、と時が止まったかのような静寂が訪れる。が、すぐに武蔵はククッと肩を震わせて笑い出した。ゆっくりと体を起こして立ち上がり、両手を腰に当てると、軽く息をつきながら小さく微笑んで言う。

「そろそろ昼飯の準備するか」

「え……あ、うん！」

呆然と頬を紅潮させていた濡は、彼の一言で我にかえった。跳ねるように立ち上がり隣に並ぶ。

「お昼は何？」

「ぶり照り」

「やったあ！」

武蔵とともに台所の方へ向かいながら無邪気に声を弾ませる。武蔵の作るおかずはどれも美味しいが、その中でも一二を争うくらいの好物なのだ。足を止めずに歩く武蔵を隣から覗き込み、ニコッと屈託なく笑いかけた。

「ねえ、お味噌汁も作るんだっけ？」

「あった方がいいだろ？」

「うん、じゃあ味噌とか出しとくね」

濡は、武蔵に確認しながら一つ一つ食材を用意していく。

拘束を解かれて以来、いつのまにか食事の準備や後片付けを手伝うようになっていた。武蔵に頼まれたからではなく、暇なので自発的に始めたことだ。家では専門の人材を雇っているのだからという経験がなく、料理に関してもよくわからないため、食器や食材を用意する程度のごく簡単なことしか出来ない。どれだけ役に立っているかは定かでないが、それでも武蔵は邪険にせず、無理のない範囲で濡のしたいようにさせてくれた。

こういうの、ささやかな幸せって言うのかな？

手際よく料理を進める彼の手元を眺めながら、濡はふとそんなことを考える。人質として拉致監禁された状態でおかしな話だが、彼と台所に立つ時間は素直に楽しく、幸福に近いものを実感していることは事実だった。

「懸賞金の三億円は寄付するらしいぜ」

昼食を平らげたあと、武蔵は思い出したようにダイニングテーブルの隅に手を伸ばし、四つ折りの新聞を掴んでそのままひょいと濡に手渡した。広げると、社会面にその記事が大きく掲載されていた。濡が見つかったので三億円の懸賞金を取り下げること、寄せられた中に有益な情報はなかったこと、三億円は福祉団体に寄付することなどが書かれている。世間の反応が気になったが、そういったことには何も触れられていなかった。

「それで世間が納得してくれればいいけど……あれっ？」

難しい顔で新聞を畳もうとしたとき、ふと隣の見出しが目に入った。

怪盗ファントム 予告通り高塚修司の作品を盗む——。

そういえば、怪盗ファントムの犯行予告があったと、武蔵から数日前に聞かされていた。おそらく怪盗ファントムに扮していたのは遥である。濡がない分、いつもより人数が少なくて大変だったと思うが、記事を読む限りでは特に問題なく遂行できたようだ。

「良かった……」

濡はほっと安堵の息をつき、胸を撫で下ろした。

「怪盗ファントムの方か？」

「うん、大丈夫だとは思ってたけど」

新聞を畳みながら、クスッと笑って武蔵の質問に答える。しかし、彼の表情は対照的に険しくなった。

「いつまで怪盗ファントムをやるつもりなんだ？」

「え、私たちがハタチになるまでって聞いているけど」

なぜそんなことを聞くのかと不思議に思いながらも、濡は素直に答えた。本来なら他言してはならないことだが、すでに正体は知られているので、この程度であればもはや隠す意味はないだろう。

武蔵はふいと眉をひそめる。

「やらされてるのか？」

「うん、まあ……おじいさまに絵の尊厳を守るためとか言われて仕方なく……遥だけにやらせるわけにもいかなかったから。私としてはあんまりやりたくなかったんだけどね。何だかんだいっても窃盗は犯罪だし、世間に迷惑かけるし、捕まったら困るし」

濡は肩をすくめて苦笑を浮かべる。仲の良い友人にさえ話せないことなので、ここぞとばかりに愚痴をこぼしたが、それでどうこうというつもりはなかった。だが——。

「それでも、あの家に帰りたいのか？」

「え？ うん……それは、そうだよ……」

思いがけない問いかけに戸惑いを隠せない。追い打ちを掛けるように、鮮やかな青の瞳がまっすぐに濡を射抜く。

「俺なら、そんなことはさせないけどな」

武蔵はそう言い残し、空になった食器を重ねて流しに運んでいく。その唇は真一文字に結ばれていた。まるで何かを堪えているようであり、心なしか怒っているようにも見える。何が言いた

いのか、何を思っているのか、漣にはさっぱりわからない。ただ彼の端整な横顔を困惑ぎみに見つめるだけだった。

「ん……」

鉛のように重たい瞼がぼんやりと開かれる。

昼食後、何とはなしに布団で横になっていたら、いつのまにか眠りに落ちていたようだ。漣は気怠い体を起こし、眠い目を擦りながら部屋を見まわす。だが、武蔵の姿はどこにも見当たらなかった。シャワーかトイレだろうと特に気にしていなかったが、厚手のカーテンがゆるりと風をはらんでいるのに気付くと、吸い寄せられるようにその窓際へと向かっていった。

カーテンとガラス窓を開き、冴え冴えした外気を感じながら顔を出す。

そこは小さなベランダになっていた。白い塗装がところどころ無様に剥げ落ち、泥で汚れ、隅には濡れた落ち葉が溜まっている。あたりは鬱蒼とした木々に囲まれており、目の届く範囲に他の建物は見えなかった。木々の隙間からは幾筋もの柔らかい日射しが降りそそいでいる。

案の定、武蔵はそのベランダの奥にいた。古びた手すりに腰からもたれかかり、携帯電話を片手に何かを喋っている。相手は誰だかわからないが、まるで友人と話しているかのような親しげな口調だ。ふとこちらを一瞥したものの、特に気に留める様子もなく電話での会話を続けている。

漣は裸足のままベランダに出た。肌を刺すような凜とした空気と、凍てついたベランダの冷たさに、ぶるりと身震いして鳥肌が立った。半袖Tシャツでは厳しい。もう三月に入っているはずだが、真冬としか思えない気候である。

「ああ、じゃあな」

武蔵はそう言って通話を切った。左肘を錆びた手すりの上に置き、右手の携帯電話を掲げて見せる。

「篤史から。行方を突き止めたんだと」

「へえ、ずいぶん早かったね」

一週間ほどかかるかもしれないという話だったが、まだあれから三日しか経っていない。その間には怪盗ファントムの仕事もあったはずだ。それだけ篤史たちが頑張ってくれたということだろう。

「明日の早朝、橘の屋敷で詳しく話を聞くことになった」

「私も一緒に行けるの？」

「ああ、ただしメルローズを救出するまでは俺の側にいろよ」

「わかってる。約束は絶対に守るから安心して」

漣は寒さを堪えながらそのすぐ隣に並び、ざらついた手すりに指をのせる。吐く息が仄かに白い。その様子を横目でじっと見つめていた武蔵は、腰からもたれかかったまま、手すりに両肘をついて大きく顔を上げた。真上には薄水色の空が広がっている。

「今日でこの生活も最後になる、のかもしれないな」

「最後にしなきゃ。頑張ってメルちゃん助け出そうよ」

濡はグッと両こぶしを握って力強く訴える。が、武蔵は不思議そうな顔をして振り向いた。

「メルちゃん？」

「メルローズだからメルちゃん」

「ああ……」

勝手な呼び方をして彼の気分を害したかと思ったが、そうではなかったようだ。彼は納得したようにひとり頷くと、再び空を仰ぎ、ふっと曖昧な笑みを浮かべて目を細める。

「そうだな、助けないと」

濡はそっと視線を流して彼の横顔を見つめた。そして、ゆっくりとうつむきながら逡巡すると、下を向いたまま躊躇いがちにそろりと切り出す。

「あの、ね」

「どうした？」

「もしも……もしもだけどね……その、メルローズを助けられなかったとしたら……」

この仮定を口にすることが、どれだけ無神経で身勝手かはわかっているつもりだ。それでも訊かずにはいられない。彼の表情が大きく曇ったのを見て若干たじろいだが、それでも引き下がることなく静かに言葉を継ぐ。

「私、帰れないのかな」

その声に隠しきれない不安が滲んだ。約束では、メルローズを取り戻したあと濡を解放することになっている。取り戻せなかったときの処遇については何も聞いていない。失敗時のことなど考えるべきではないのだろうが、どうなるかわからないからついあれこれ考えてしまうのだ。

武蔵は眉を寄せ、足もとに視線を落として沈思する。

「……帰さない。そういう約束だったはずだ」

「人質として使い道がなくなったとしても？」

「ずっと、一生だ」

彼の声は落ち着いていた。感情的になっているようには思えないが、どこまで本気なのか、あるいは冗談なのか、もしくは牽制なのか、濡には判断することが出来なかった。メルローズを取り戻すことが永遠に不可能となった場合、濡を手放さないことにどんな意味があるのだろうか。考えられるのは復讐くらいだが――。

「なあ……」

今度は武蔵が躊躇いがちに切り出した。目を伏せ、手すりに背を預けたままで続ける。

「メルローズを救出したら約束どおり解放するが、おまえさえ良ければ、そのあともずっと一緒に暮らさないか？」

予想外の提案に、濡は声もなく目を見開いた。

「二人きりじゃなくメルローズも一緒になるんだが……おまえとなら上手くやっていけると思う。あ、いや、別にメルローズの世話を押しつけるつもりじゃない。おまえが好きだから一緒にいたいだけだ。ここじゃなく橘家の近くに部屋を借りてもいい。もちろん外出は自由だし、学校にも行けるようにする。だから……」

「それは、出来ないよ」

ひたむきな訴えに心苦しさを感しながらも、そう答えるより他になかった。

武蔵の顔に仄暗い陰が落ちる。

「俺を、許せないか？」

「そうじゃなくて……私、付き合ってる人がいるし……」

恨んでいるわけではないが想いには応えられない。武蔵ならわかってくれると信じて、戸惑いつつも正直に理由を伝えた。しかし、彼は苦々しく顔をしかめて舌打ちする。

「なるほど、あの会長秘書か」

「あ、師匠は違うよ。ただの保護者」

「保護者……ねえ……」

眉をひそめ、まるきり信じてなさそうな声音で言う。確かにここ数ヶ月のことを思い返してみると、ただの保護者とは言いがたいかもしれない。だが、滯との結婚を望んでいるなどと暴露して、わざわざ話を煩雑にはしたくなかった。

「付き合ってるのは別の人だもん」

「そいつのことが好きなのか？」

「好きだから付き合ってるんだよ？」

どうしてそんな当たり前のことを訊いてくるのだろう、と訝るように小首を傾げると、武蔵はきまりの悪い顔で逃げるように視線を逸らせた。そのまましばらく曖昧に眉を寄せていたが、やがて意を決したように唇を結び、怖いくらい真剣な顔で滯に向き直って言う。

「俺じゃ、ダメなのか？」

「えっ？」

「その男より俺の方を好きにはなれないか？」

「えっ、あの、そんなこと言われても……」

まさかここまで食い下がってくるとは思わなかった。どう言えば不快にさせることなく納得してもらえるのだろうか。適切な言葉が見つからず口ごもっていると、武蔵は何かを悟ったように自嘲を浮かべた。

「約束どおりメルローズを助けるまでだな」

「うん……ごめん……」

「今晚だけ、にしないといけないんだよな」

「だね」

明日こそメルローズを無事に助け出そうという強い意志を胸に、武蔵と向かい合う。しかしながら彼の青い瞳は揺らいでいた。思わず不安に駆られた滯の頬に、ゆっくりと大きな手が添えられる。その包み込むような優しい温もりに、胸が、身体が、奥からじわりと熱くなるのを感じた。

「む……さし……？」

視線を合わせたまま当惑した声で呼びかけると、彼はすっと目を細めた。頬に置いていた手を黒髪に差し入れて頭を固定し、気持ちを探るように、様子を覗いながら少しずつ顔を近づけてくる。彼が何をしようとしているか、わからないわけではない。心臓は壊れそうなくらいに激し

く打っている。けれど、身じろぎもせず為すがままそれを受け入れた。

温かい吐息と、少し冷えた唇が重なる。

そのとき気がついた。すでに身体中の至るところを彼に触れられていたが、唇へのキスはこれが初めてだったということに。別れを惜しむかのような長い口づけ。柔らかな木漏れ日が二人に降りそそぎ、清冷な風になびく黒髪をきらきらと輝かせていた。

最後の晚餐、ということになるのだろうか。

その日の夕食はいつもと変わらないメニューだった。武蔵はせっかくなので特別なものを作ったようだが、急なことだったので食材を揃える時間がなかったらしい。しかし、あまり感傷的になりたくなかったので、濡としてはこの方がありがたかった。それでも、最後にもういちど感謝の気持ちだけは伝えておこうと思う。

「ごちそうさま……今までありがとう……」

「ああ……」

それだけで思いのほかしんみりとしてしまい、濡は慌てて笑顔を作ると、逃げるように食器を流しに運んでいく。武蔵も一息ついてすぐに立ち上がった。

二人並んで後片付けを始める。

濡も武蔵も口を閉ざしたまま黙々と手を動かしていた。喋っていればそうでもないのだろうが、ついベランダでの出来事を思い出し、無意識のうちに表情が硬くなってしまふ。彼と口づけしてしまったことを後悔するというより、それを抵抗なく受け入れた自分自身に戸惑いを覚えていた。

夜が更けたころ、二人はひとつの布団で横になった。

明日は朝早くに家を出ることになっている。美咲とも対峙することになるかもしれない。きちんと十分な睡眠をとらなければと思うものの、今日のこと、明日のこと、いろいろと考えてしまつてなかなか寝付けない。武蔵に背を向けて少し体を丸める。

「濡……」

「ん……？」

背後からの呼びかけに、濡は振り返ることなく微かな声で聞き返す。

「眠れないのか？」

「うん、武蔵も？」

「ああ……」

武蔵は重々しく吐息まじりにそう答えると、おもむろに体を起こして前髪を掻き上げる。濡もつられるように起き上がり、両手をついて隣からそっと覗き込んだ。間接照明の薄明かりは彼の背後にあるため、陰が落ちてよくわからなかったが、随分と苦しげな表情をしているように見えた。

「どうしたの？」

顔を近づけたまま小首を傾げて尋ねる。と、無言で肩を抱かれ、あっというまに懐に引き入れ

られた。華奢な体はすっぴりと彼の腕に収まる。もそりと頭を上げるが、近すぎて彼の顔はほとんど見えない。

「あ……あの……」

「俺は必ずメルローズを救い出さなければならない。そのためにこの国へ来た。別の可能性を願うことは決して許されない。頭では理解しているつもりだが、気持ちが……ついてこない……」

彼の声は苦悶に満ちていた。

滯は考えを巡らせながら慎重に言葉を紡ぐ。

「会えなくなるわけじゃ、ないよ」

「けれど、おまえは……」

武蔵は言いよどみ、滯を抱きしめる両腕に力を込める。そう、会えなくなるわけではないが、彼の望む形で会うことはできない。受け入れるわけにはいかないのだ。滯はただ押し黙るより他になかった。

長い沈黙が続く。

滯も武蔵も抱き合ったまま動こうとしなかった。互いの鼓動が呼応するかのようにならざる、体温は融け合うかのようにならざる。微かに触れた熱っぽい呼吸が、自分の体を、相手の体をさらに強く火照らせる。

Tシャツの裾から、大きな手がそっと入り込んだ。

滯はビクリと体を震わせる。

しかし、その手は一瞬の躊躇いを見せただけで、ゆるゆると脇腹の上を彷徨い出した。まるで滯の気持ちを探るかのようにならざる——無理強いはいらない、という彼の言葉が脳裏によみがえる。嫌だと言えば、やめてと言えば、やめてもらえる確信はあった。けれど、滯はおずおずと彼の背中に両手をまわす。

「滯……」

熱く濡れた吐息まじりの声に耳をくすぐられて、ゾクリと芯から震える。次の瞬間、体が浮いたかと思うと仰向けに寝かされていた。目の前には武蔵の顔があった。暖色の間接照明に照らされ浮かび上がる表情は、怖いくらい真剣で、何かひどく思い詰めているようにも見える。鮮やかな青の双眸には烈しい炎が燃えたぎっていた。

優しく落とされた口づけは、次第に息もつけられないほど荒々しいものへと変わる。

その間にも手はTシャツの中へ滑り込み、胸の膨らみをやんわりと揉み出した。指先がその頂きに刺激を与える。唇は耳から首筋へと徐々に下りていき、そして、いつのまにかはだけられた胸元へと向かう。

滯の口から小さな声が漏れ始めた。

互いに求め合っているからだろうか。前回と行為自体に大きな違いはないはずだが、得られる感覚はまったくと違っていいほど違った。武蔵は躊躇いなく滯を高みへと押し上げていき、滯は与えられる甘い刺激を食欲に受け取っていく。滯の控えめな甘い喘ぎ声、二人の息づかいと衣擦れの音、そして体の奏でる音が、暗がりの静寂に生々しく響いていた。

中途半端に脱がされた服が、下着が、ことさら淫靡さを強調する。

「濡……目を開けて俺を見ろ……名前を、呼んでくれ……」

「……っ……ん……」

どこか苦しげな声で求められ、濡は固く閉じていた瞼をそろりと薄く開く。涙の滲んだ瞳に武蔵の顔が映った。名前を呼んでしまえばもう後戻りは出来ない。心の片隅で理性の警鐘が鳴り響いていたが、まるで熱に浮かされたかのように、唇が勝手に彼の名前を紡いでいく。

「む……さし……ん、あっ」

下肢に感じた猛りがゆっくりと中を押し開くように侵入してきた。思わずシーツを掴み白い喉を仰げ反らせると、武蔵は汗ばんだ上体を倒して抱きすくめるように覆い被さる。濡も縋りつくようにその背中に手をまわし、力を込めた。緩急をつけて揺さぶられ、打ちつけられ、言葉にならない声上がる。頭の中は真っ白でもう何も考えられない。ただ息苦しくなるほどの激しい快感だけが、濡のすべてを支配していた。

## 30. 過去との邂逅

---

「そろそろ起きる時間だぞ」

「んー……眠い……」

大きな手でペチペチと頬を叩かれるが、それでも目は覚めない。夢うつつで武蔵の声を聞きながら、濡はごそごとと掛け布団に顔半分もぐり込んだ。自分の体温であたたまった布団が心地よく、ますます夢の世界に引きずり込まれそうになる。

「家に帰りたくないのか？」

「帰りたい……けど……」

まどろみの中、その気配から逃れようと無意識に背を向ける。

頭上で小さく溜息が落とされた。

「ま、仕方ないか」

そんなあきらめたような独り言が聞こえたかと思うと、バツと掛け布団がめくられ、猫のように丸まっていた体がひょいと抱き上げられる。濡は驚いて目を開けた。そして、自分が一糸まとわぬ姿であることに気付き、カァッとゆでだこのように顔を真っ赤にする。

「や、ちょっと……！」

「寝かせてやりたいけど、そもいかないからな」

「わかったから！ もう起きたから下ろしてっ！！」

まるで駄々っ子のように、自分を抱える腕の中でジタバタしながら喚き立てた。武蔵にはさんざん裸を見られているせいか、わりと平気になっていたはずだが、今朝はどうしてだかやたらと羞恥を覚えてしまう。きのうはあんなことまでしたのに——そう考えた瞬間、思わず脳裏にその情景がよみがえり、ますます動揺して顔が熱くなっていく。

武蔵は見透したようにニッと口の端を上げると、濡を横抱きにしたまま、スタスタと軽い足取りで浴室へ向かっていった。

やっぱり、まだ眠い——。

シャワーを浴びていったんは目が覚めたかと思ったが、落ち着いたらまたしても睡魔が襲ってきた。力が抜けて滑り落としそうになった箸を持ち直し、形の良い卵焼きをぼんやりと口に運ぶ。噛みしめると、ほっとするような優しい甘さがじわりと広がった。

結局、武蔵に解放されたのは朝方だった。最後は意識をなくしたのか眠気に負けたのかも覚えてなく、時計を見る余裕もなかったが、そのころ夜が明けようとしていたのは感覚的に間違いない。おそらく一時間も寝ていないだろう。当然ながら酷い睡眠不足であり、おまけに体もだるくてたまらない。朝まで眠らせないなどというキザな物の喩えを、本当に実践する人がいるとは夢にも思わなかった。

「武蔵は……その、眠くないわけ？」

「俺は二、三日寝なくても平気だからな」

そんな自分本位な基準に付き合わされては甚だ迷惑である。今日が大事な日であることくらい

、わかっていたはずなのに——濡はじとりと恨みがましい視線を送るが、彼はお構いなしに箸を進めていた。

「元気だよね」

「おかげさまで」

涼しい顔で嫌味を受け流す彼に、ますますムツとして口をとがらせる。

「きのうは泣きついてきたのに」

「会えなくなるわけじゃないんだろう？」

「……会うだけだよ」

濡は警戒心を露わにして予防線を張った。しかし、武蔵は悪びれずもせずに声を弾ませる。

「冷静に考えてみたら、彼氏がいるからといって諦める道理はないんだよな。脈無しってわけじゃなさそうだし、体の相性もバッチリだったし、俺になびく可能性は十分あるってことだ。落ち込んでなんかいられるかよ」

そのあけすけな物言いに、濡は思いきり頬を紅潮させて狼狽えた。

「あ……あの……きのうのことは、みんなには言わないで……」

「きのうのことって？」

その声にはニヤニヤした笑いが含まれていた。とぼけていることは明白である。濡をからかって面白がっているのだろうか。それとも、まさか——。

「おっ、脅す気……？」

「そんなことするかよ。おまえを無理やり縛り付けたところで、嫌われたら元も子もないからな。それに……おまえにとっては単に流されただけのことかもしれないが、俺にとっては一生忘れるつもりのない大切な思い出だ。それを自分で穢すような真似はしない」

だから、あんなに名前を呼ばせたわけね——。

濡は恥ずかしくなって目を逸らしつつ、胸の内で密かに毒づく。二人で抱き合っているさなか、目を開けて顔を見ること、そして名前を呼ぶことを、しつこいくらいに何度も要求された。思い出のためと言われれば、合点がいかなくもない。

「あ、でも武蔵って本名じゃないよね」

頭で考えたことが独り言となって口をついた。その話の飛躍に、武蔵は少し不思議そうな顔を見せたが、すぐに濡のたどった思考を理解したようだ。柔らかく表情を緩めると、卵焼きにたっぷりの大根おろしをのせながら言う。

「おまえにとっての俺は武蔵だから、それでいいんだよ」

判然としない言い分に、濡はどこかむず痒いものを感じながら小首を傾げる。

「そういうもの？」

「そういうもの」

武蔵はさも当然のように断定して卵焼きを口に運んだ。価値観の相違だろうか。話を聞いても首を捻るだけで納得はいかなかったが、だからといっていつまでも固執していても仕方がない。武蔵自身がそれで良いというのであれば、濡が否定しても意味はないし、むしろ余計なお世話でしかないだろう。

「じゃあ、本当の名前はなんていうの？」

気を取り直すように、今度は明るい声音でそう尋ねる。

「それ聞いてどうするんだよ」

「ただ知りたいただけ。ね、教えてよ」

「別に知らなくてもいいだろう」

何の不都合があるのか武蔵は冷ややかに突き放した。だが、そうなる余計に知りたくなるのが人間の性である。もちろん濡も例外でなく、何がなんでも聞き出さなければと身を乗り出した。

「で、何??」

「.....」

彼は眉をしかめ、思いきり渋い顔になって濡を睨めつけた。それでも無邪気にニコニコと返答を待っていると、やがて、観念したようにぞんざいな溜息をついて答えを返す。

「アンソニー」

「へえ、見かけによらずメルヘンな名前なのね」

「おい、メルヘンって.....何だよそれ.....」

メルヘンという表現は適当でなかったかもしれないが、濡の中では、少女漫画に出てくる王子様のような人物が思い浮かんだ。豪勢なバラを背負ってキラキラと輝いているような——もちろん、それが偏見に満ちた想像であることは承知しているのだが。

「もしかして、結構いいところのお坊ちゃま？」

「まあ、当たらずとも遠からずってところだな」

武蔵はさらりと答える。その発言が本当なのか確かめる術はないが、こんなことで嘘をついても仕方ないだろう。意外な事実が明らかになるにつれ、これまで考えもしなかった彼の生い立ちについて興味が湧いてきた。思わず、前のめりになって目を輝かせる。

「ね、武蔵の小さい頃ってどんなだったの？」

「俺の恋人になるんだったら教えてやるよ」

「えー.....イジワル.....」

決して呑むことの出来ない条件に意気消沈し、子供のように唇をとがらせた。

「そんなこと言うなよ。服だって用意してやったのに」

武蔵はそう言って小さく笑いながら顎をしゃくる。何だろうと不思議に思いながらも、濡は示された方向を素直に視線で辿った。すると、カーテンレールに掛けられた衣装カバーつきのハンガーが目についた。わあ、と顔を輝かせて感嘆の声を上げると、箸を置いて弾むように駆け出していく。

「着替えるのは食べ終わってからにしろよ」

「うん、わかってる！」

ここに連れてこられて以降、ずっと半袖Tシャツとジャージばかりだったので、どういう服を用意してくれたのか想像もつかない。胸を躍らせながら、衣装カバーのファスナーを下ろして中を覗き込んだ。

まず目についたのは、小さめのTシャツと黒革のライダーズーツだった。運転もできないのに格好だけ一人前というのは面映ゆいが、武蔵のバイクに乗って行くのであれば、実際的にスカートよりも適切なのは確かだろう。濡個人としても一度くらいは着てみたい服である。

さらに内側にはブラジャーとショーツも吊してあった。肌触りのなめらかな柔らかい白地に、繊細なレースとリボンがあしらわれた、可愛らしくて清潔感のあるデザインである。今までのハーフトンクトップや安物のショーツとは大違いだ。ふと疑問を感じてブラジャーのタグを確認すると、アンダーもカップも自分のサイズに間違いなかった。

「どうかしたのか？」

「サイズ……」

「ああ、だいたい合ってるはずだぜ」

タグを見つめたままぼつりと呟いた濡に、武蔵は事も無げに答える。サイズを教えたことはなく、測られた覚えもないのに、どうしてぴったり合っているのだろうか。何とも形容しがたい微妙な気持ちが湧き上がるが、武蔵を追及する気にはなれず、ただ衣装カバーを掴んで力ない笑いを浮かべていた。

「結構歩くんだな」

「もうすぐだよ」

剛三の指示で、濡と武蔵はいくつかある隠し通路のひとつから橘の屋敷へ向かっている。橘所有の地下駐車場まではバイクで乗り付けられるが、その隠し扉より先は徒歩でしか行くことができないのだ。隠し通路といえは聞こえはいいが、人ひとりがどうにか通れるくらいの舗装もされていない地下道である。ぽつぽつと薄明かりはついているものの、足元を照らすだけの光量はない。

濡は怪盗ファントムの仕事で使っているのに、この狭く薄暗い地下道にもだいぶ慣れていた。しかし、武蔵は今日が初めてである。何度となく後ろを振り返って確認したが、腰を屈めて歩きづらそうではあるものの、遅れることなく濡についてきていた。もっとも、遅れたところでは一本道なので迷いはしないだろう。

やがて突き当たりに到着し、古めかしい重厚な扉を開けて中に入った。

そこは調度品も何もないがらんとした小部屋である。床も壁も白一色で、ずっと薄暗い地下道を歩いてきた目には眩しいくらいだ。正面奥には収納式の階段が天井から下ろされている。そして、扉のすぐそばには執事の櫻井が控えていた。彼はいつものように恭しく一礼して濡を出迎える。

「お帰りなさいませ、お嬢さま……ご無事で何よりです」

「ありがとう。心配かけてごめんなさい」

濡が小さく肩をすくめてそう言うと、櫻井は無言でもういちど頭を下げた。ただでさえ並外れて心配性な彼のことだ。どれほど胸を痛めていたかは想像に難くない。武蔵のことは敢えて紹介していないが、濡を誘拐した犯人だとは認識しているだろう。それでも一切失礼な態度を取ることなく、ただ静かに頭を下げて迎え入れた。武蔵も軽く会釈を返し、ぐるりと見まわしながら濡

のあとについて入る。

「へえ、大層なもの作ってるんだな」

「ここから家に上げられるの」

濡は階段を指し示してそう説明し、先導するように軽い足取りで駆け上がっていく。すると――。

「濡！」

「誠一?!」

階段を上がった濡を待ち構えていたのは、恋人の誠一だった。カジュアルなジャケットにジーンズという休日の格好である。なぜこの家の住人でない彼がいるのか不思議だったが、それより今は会えて嬉しい気持ちの方が大きく、パッと大きく顔を輝かせて駆け寄ろうとした。が、そこへ素早く武蔵が割って入り、濡を背中に隠すようにして誠一と対峙する。カラーコンタクトを嵌めた黒い瞳が光った。

「今はまだ俺のものだ」

「……………」

誠一の表情が険しくなった。視線だけを動かして上から下まで武蔵を観察すると、彼にしてはめずらしく敵意を剥き出しにして睨めつける。それに応じるかのように、武蔵も凄みのある冷たい眼差しで睨み返した。どちらも引き下がろうとしない。二人の間の空気は、息が詰まりそうなほど緊迫していた。

「あ……あの……」

濡は両手を合わせつつ、武蔵の背後からおずおずと顔を覗かせた。

「誠一、えっと、せっかく来てくれたのにごめんね。ある条件が達成されるまでは、この人の側につく、味方であるって約束してるの。あと少しで解決すると思うから、それまで待っててくれる？」

「そう……か……」

誠一は戸惑いながらも一応は理解を示してくれた。曖昧な説明しかできなくて心苦しいが、彼がどこまで事情を把握しているか不明なため、あまり詳しく話すわけにはいかないのだ。

「誠一はどうしてここにいるの？」

「ああ、遥に連絡をもらったんだ」

「遥に？」

濡のためにわざわざ呼んでくれたのだろうか。しかし、家族と櫻井以外には秘密のはずの、地下への階段まで教えるなど、剛三に了承を取っているのか心配になる。ここは怪盗ファントムの仕事でも使うもので、刑事である彼に存在を知られてしまっては――。

「積もる話はあとでしてよ。みんな待ってる」

「遥！」

大階段の方から顔を覗かせた双子の兄に、濡はパッと笑顔を見せた。

「心配かけてごめんね」

「……無事で良かった」

遥はそれだけ言うと、すぐに踵を返して大階段を上っていく。久しぶりの再会とは思えない無愛想な態度だが、それがかえって彼らしく、漑としてはようやく帰ってきたのだと実感できた。その姿を見送りながら、胸元のファスナーを少し下ろして武蔵に声を掛ける。

「私たちも行こう？」

話は剛三の書斎で聞くことになっている。すでにみんなが待っているのであれば、いつまでもここで立ち話をしているわけにはいかない。だが、武蔵の返事はなかった。どうしたのかと小首を傾げて覗き込むと、突然、彼は見せつけるように漑の手を引いて歩き出した。黒髪が大きくなびく。青ざめて立ち尽くす誠一の前をそのまま横切ったが、目を向けるだけで声を掛けることは出来なかった。

書斎の隅にある打ち合わせスペースには、カーテン越しに柔らかい陽光が射し込んでいた。

席に着いているのは七人。現在の橘家住人である剛三、悠人、篤史、遥の四人、呼ばれてやって来た武蔵、漑の二人、加えてなぜか誠一までもがいる。研究所での人体実験や怪盗ファントムについては、彼にも一通りの事情を説明してあるということだ。その犯罪行為の数々を彼はどう思っているのか——漑は考えるだけで血の気が引いたが、今はとても二人で話し合える状況ではない。

「美咲がいるのはここだ」

そう言って、剛三は一枚の写真を差し出した。

武蔵はそれを手元に引き寄せ、身を乗り出した漑とともに覗き込む。そこに写っていたのは大きなビルだった。質実剛健という言葉が相応しい飾り気のないデザインで、商業ビルというよりオフィスビルといった印象の建物だ。

「どこかの会社？」

漑は感じたまま呑気にそう尋ねたが、剛三はひどく険しい顔をしていた。少しの間のあと、机の上でゆっくりと両手を組んで口を開く。

「米国大使館だ」

「えっ……？」

思いがけない答えに、漑はきょとんと瞬きをした。隣の武蔵は眉を寄せる。

「大変なところなのか？」

「かなりやっかいだな」

剛三はそう答え、険しい顔のまま小さく息を吐いた。

「美咲はアメリカへ逃亡するつもりなのかもしれん。美咲の研究はあちらも喉から手が出るほど欲しいはずだ。保護を頼まれて断る理由はないだろう。表向きには事件など起こっていないのだから、警察の引き渡し要求に応じる義務もない」

彼の話は端的でわかりやすかった。漑は真剣に考えて疑問を口に上す。

「大使館に留まっているのは何故です？」

「それはわからん。受け入れ準備に時間がかかっているのか、条件面での折り合いがつかっていないのか、あるいは日本でやり残したことがあるのか……いずれにせよ、今はまだ米国大使館にい

ることは間違いない」

「メルローズも一緒にいるのか？」

「確認はできていないが、その可能性は高いだろう。美咲にとっては現在唯一の実験体だからな……武蔵、君が直接本人に訊いてくるといい。美咲との面会の約束は取り付けてある。今日の午前11時に米国大使館だ」

剛三の言葉に、武蔵は大きく息を呑んだ。

「面会できるのは滯と護衛一人だ。君は護衛として行くがいい」

「……その面会が、あいつらの罠でないと切り切れるのか？」

「切り切れん。だが、美咲と交渉することを望んだのは君だ」

「わかった、了解だ」

二人のやりとりを聞きながら、滯は胸に大きな不安の波が押し寄せるのを感じた。美咲と対峙する覚悟はしていたつもりだが、僅か数時間後などあまりにも急すぎるし、何より大国の後ろ盾など想像もしなかったのだから――。

「武蔵、君が理解しているかわからないが……」

剛三はそう前置きしてから、武蔵の双眸を見据えて続ける。

「米国大使館には、我々はもちろんのこと警察でさえ手が出せない。だからこそ美咲はそこを選んだ。正直、乗り込んで行くのはかなり危険だと思っている。君がどうなろうと構わないが、下手をすれば滯や美咲にも危害が及びかねないのだ」

「橘美咲を守る気はないが、滯は命を懸けて守ってみせる」

武蔵は憚りもせず堂々と宣言した。守ってくれるというのはありがたいが、この言い方では、まるで恋人同士か何かのように聞こえる。少なくとも誘拐犯と被害者には思えない。滯は困惑ぎみに顔を曇らせて目を伏せた。だが、剛三は真剣な面持ちのまま首肯する。

「よかろう。ただし、くれぐれも無理をするでないぞ。メルローズの居場所がわからない、あるいは取り戻せそうにない場合は、いったんおとなしく引き下がってほしい。帰ってからともに作戦を練り直そう」

「そんな悠長に構えてもいられないが……まあ、仕方ないな」

武蔵は前髪を掻き上げながら溜息まじりに同意した。不服そうな様子だが、それが最善であることは理解しているようだ。剛三はそんな彼を見て満足げに頷いたあと、悠人に視線を流す。

「悠人、あれを」

「はい」

悠人は短く返事をして立ち上がると、執務机から半透明のプラスチック製キャリングケースを持ってきて、打ち合わせ机の中央にそっと差し出すように置いた。中身は紙束のようだ。滯が無遠慮に顔を近づけて覗き込む隣で、武蔵は怪訝な面持ちで眺めている。

「これは？」

「美咲が残っていた人体実験の記録だ」

メルローズの監禁されていた地下室に残されていたものだろう。公安が持っていたコピーの原本も入っているかもしれない。滯もそのうちのいくつかに目を通したことはあるが、専門的な内

容については当然ながら理解していない。ただ、何度も出てきた「死亡」という言葉は、今でもはっきりと脳裏に焼き付いている。

剛三は、固唾を呑んだ武蔵を見つめ、机の上で両手を組み合わせる。

「現在、我々が所有しているのはそれがすべてだ。見たところでどうなるものでもないだろうが、君の国の子供たちが実験に使われていた以上、君には事実を知る権利があると思ってな。もちろん見るも見ないも君の自由だ。どちらを選択しよう構わない」

「……………」

武蔵はキャリングケースに目を落として考え込んだ。無表情を装っているようだが、その瞳には怒りとやるせなさが滲んでいた。やがて、真剣な眼差しをゆっくりと剛三に向けると、感情を抑えた静かな声で話し出す。

「俺にはこの内容を知る義務があると思う。だが、読んで冷静でいられる自信はない。可能であれば、おまえたちのいないところで読ませてもらいたい」

「了解した。ただし、見張りとして濡はつけさせてもらう」

「ああ、俺としても濡と離れるつもりはないからな」

濡の意見を聞こうともせず勝手に決められてしまった。母親が行った非道で残酷な実験の記録——それを読んでいる武蔵のそばで、どんな顔をすればいいのかわからない。だが、居心地が悪くとも逃げ出すことは許されないだろう。

「濡、おまえの部屋を貸してやれ」

「わかりました」

剛三の具体的な指示に、濡は気持ちを落ち着けて了承の返事をする。そして、キャリングケースを抱えた武蔵とともに、指示どおり自分の部屋に向かおうとした、そのとき——。

「待ってください！」

ダン、と悠人は机を叩きつけて立ち上がった。ひどく思い詰めた面持ちで剛三に訴える。

「私は反対です。得体の知れない男と濡を二人きりにするなど……」

「もう何週間もずっと二人きりだったんだ。今さらだろう」

武蔵は挑発的な冷笑を浮かべながら口を差し挟んだ。瞬間、悠人は火に油を注いだようにカッといきり立った。わなわなと震えるくらい強く拳を握りしめ、奥歯を噛みしめ、今にも殴りかからんばかりに武蔵を睨めつける。

濡はぎょっとして、どうにかこの場を収めようと必死に笑顔を作った。

「あ、あの、師匠？ 私なら大丈夫ですから……」

「大丈夫じゃないだろう、そんな痕まで付けられて！」

痕って——？

濡は手首に視線を落とすが、長袖の下から僅かに包帯が覗いているだけで、手錠の傷痕はまったく見えていない。もっとも、一般的にいえば、包帯の下には傷のある可能性が高いわけだが——あれこれと考えを巡らせていた濡の肩を、武蔵は軽く抱き寄せた。

「俺は、濡の嫌がることはしない」

「……………！」

悠人はますます鬼のような形相になり、血管がぶち切れんばかりに青筋を立てた。そして、武蔵は相変わらず不敵な笑みを浮かべたままだった。もはやどうすればいいかもわからず、濡は困惑してオロオロするだけである。

その一触即発の状況を制したのは、剛三だった。

「悠人、感情に流されるな」

パイプ椅子にどっしりと深く腰掛けたまま、貫禄のある声でそう言い、何かを訴えるような鋭い視線を彼に送る。悠人はグッと歯噛みした。そのまま口を開くことなく椅子に体を落とすと、大きくうなだれ、無造作に右肘をついて前髪をぐしゃりと掴んだ。

「これ、おまえの部屋？」

先に足を踏み入れた武蔵は、興味深げにぐるりと見まわして意外そうに尋ねた。

濡はドアノブに手を掛けたまま振り返り、小首を傾げる。

「そうだけど、変？」

「財閥令嬢っていうから乙女チックな部屋を想像してた」

「私、小さい頃からこういうシンプルな方が好きなの」

可愛らしいものも決して嫌いではないのだが、自分の部屋をレースやフリルで飾ろうとは思わなかった。女の子らしさとは縁のない育てられ方をしたせいかもしれない。あるいは、着飾ることに興味のない母親からの遺伝だろうか。

「この写真……」

濡が扉を閉めて向き直ると、武蔵は腰を屈めてじっと学習机を覗き込んでいた。視線の先にあるのは、写真立てに飾られた十年ほど前の家族写真である。昔から家族四人が揃うことはあまりなかったため、自分にとっては思い出の詰まった貴重な一枚なのだ。しかし、武蔵にとっては見たくもない不愉快な写真に違いない。

「ごめんなさい」

謝罪とともに、大慌てで写真立てを伏せようと手を伸ばす。が、武蔵はそれを制止した。穴の空きそうなほど写真を見つめたまま、不思議そうな顔でぼんやりと口を開く。

「そうじゃなくて……これ、おまえらなのか？」

「うん、こっちが私で、こっちが遥だよ」

濡も隣から覗き込み、丁寧に写真を指さしながら答える。真ん中の二人が濡と遥だ。濡は肩より少し長いくらいのおかっぱ、遥は今とほぼ同じショートカットである。今もよく似ているが、この頃は瓜二つといえるくらいそっくりだった。

「この写真がどうかしたの？」

「いや、俺の親戚によく似てるなと……」

「なにそれ、古いナンパの手口か何か？」

「おまえをナンパしてどうするんだよ」

武蔵は体を起こすと、腰に手を当てて呆れたように言い返した。もちろん濡も本気で思っているわけではない。クスクスと笑いながら奥に向かうと、厚手のカーテンをシャッと引き開ける。

清かな朝の光が部屋に広がった。

「武蔵、その机、好きに使っていいから」

「いや、机じゃなくあっちにしてくれ」

武蔵が指さしたのはベッドだった。えっ、と滯は小さく瞬きをしてきょとんとする。

「何のために二人きりになったと思ってるんだよ」

「あ、えっ……?!」

彼の言わんとすることに思い当たり、声が裏返った。両手をわたわたと振りながら後ずさる。

「えっと、あ、ここじゃちょっと……防音じゃないし……その……」

「何を言ってるんだ。読む間、隣にいてほしいだけなんだけどな」

「……えっ？」

滯はこれ以上ないくらい真っ赤に顔を火照らせた。その様子を、武蔵はこれ以上ないくらい楽しげに眺めている。わざと誤解させるような言い方をしたに違いない。その思わせぶりのニヤニヤした顔を見ていると、頭から蒸気が噴き出そうになり、思いきり口をとがらせて上目遣いに睨み上げた。

「期待させたなら悪かった」

「期待なんかしてないし！」

少しも悪いと思っていなさそうな半笑いの謝罪に、滯はますますカッとして言い返す。

しかし、そのあと武蔵は急に真面目な顔になった。持っていたキャリングケースをベッドに投げ置くと、小首を傾げた滯をひょいと横抱きにし、優しくベッドに横たえるように下ろした。黒髪がシーツの上に広がる。ギシ、とベッドのスプリングが僅かに軋んだかと思うと、片膝をベッドにのせた彼が、覆い被さるように両手をついて真上から見下ろしてきた。

「ちょっ、え……しないんじゃ、なかったの……？」

「今はしない」

そう言いつつも、武蔵はゆっくりと顔を近づけてくる。滯は瞬きもせず見つめ返した。これもからかっているだけに違いない——自分にそう言い聞かせるものの、彼の動きが止まる気配はない。熱を帯びた吐息が触れ合う。堪えきれずに瞼を震わせながら目を閉じると、ほのかにあたたかい唇がそっと重ねられた。

その感触に、昨夜の出来事を思い出して一気に体中が熱くなる。決して期待しているわけではない。少なくとも理性では否定している。なのに、この状況を嫌だと思えないのはなぜだろうか。次第に頭がのぼせたようにぼうっとして、何も考えられなくなっていく。

やがて、ゆっくりと唇が離れていった。

おずおずと目を開くと、至近距離に留まっていた武蔵がふっと薄く微笑んだ。「続きは、無事に帰ったらな」と吐息でくすぐるように囁かれ、滯は思わずゾクリとして逃げるように目を逸らす。続きなんて絶対にありえないんだから——心の中でそう反論するものの、口にすることは出来なかった。

武蔵はベッドに腰掛け、手に取ったキャリングケースを開く。

「寝不足ならしばらく寝てていいぞ」

「……寝られるわけじゃない」

滯は頬を火照らせたまま恨めしげに呟いた。さっきのキスでまだ心臓がバクバクと暴れている。睡眠不足に責任を感じているのなら、何もせず最初からそう言ってほしかった。小さく溜息をつきながら体を起こすと、彼の隣に並んで腰掛ける。

「武蔵、何か落ちたよ」

「ん？」

彼がキャリングケースから書類を取り出したとき、何か小さなものが転がり落ちるのが見えた。拾い上げると、身分証明書のような顔写真入りのカードだった。アルファベットのような文字が書かれているが、英語ではないらしく、目を通した限りでは単語のひとつも判読できない。写っているのは金髪碧眼の少年である。全体的にあどけなさは残っているものの、とても整ったきれいな顔立ちをしていた。

この子も、実験に使われたのかな――。

そんなことを考えて居たたまれない気持ちになりながら、武蔵にカードを手渡した。しかし、彼は受け取ったものを一瞥した瞬間、目を見開いて驚愕の表情を浮かべた。慌てて表も裏も食い入るように観察すると、そのまま動きを止め、じわじわと額に大粒の汗を滲ませていく。ただごとではないその様子に、滯は心配になって横から覗き込んだ。

「知ってる人？」

「……これ、俺だ」

「えっ?!」

とっさに武蔵の横顔と顔写真を見比べてみたが、確かに共通する面影は窺えた。少年時代の写真と言われれば納得はいく。武蔵が嘘をついているようには思えないし、自分の顔を見間違えることもないだろう。だとしたら、いったいなぜ美咲がこのカードを――滯も武蔵も困惑し、言葉をなくしたまま互いに顔を見合わせた。

## 31. 血縁

美咲との面会の時間が近づき、濡たちを乗せた車は米国大使館に向かっていった。

運転しているのは車の所有者である悠人で、助手席には遥、そして後部座席には濡と武蔵が並んで座っている。当初、武蔵は濡だけを連れてバイクで行こうとしていたが、メルローズを連れ帰るなら車にすべきだという助言を受け、不満げながらも車を出してもらうことにしたのだ。それにもない、濡もライダースーツから高校の制服に着替えている。なるべく相手を警戒させない服装の方がいいという悠人の判断である。

武蔵は懐から問題のカードを取り出し、目を落とした。

彼によると、それは少年時代に所持していた学生証で、確かに一度なくしたことはあるが、どこでなくしたかは覚えていないとのことだ。顔写真の横には彼の本名であるアンソニーと読める文字が入っている。英語ではないが類似した言語のようで、文字もアルファベットに近く、その固有名詞だけは何となく判読できたのだ。このことから、武蔵本人のものであることは間違いないだろう。

剛三たちにはすでに報告済みである。しかし、その学生証がどういう経緯で美咲の手に渡ったのか、手がかりは何も残されておらず、彼らも困惑してただ首を捻るだけだった。もちろんキャリアリングケースの中身がすべてではないので、どこかに記録が存在するのかもしれないが、そうだとすると簡単に手に入れられるものではない。今のところ、頼りは武蔵の記憶だけである。

「本当に心当たりないわけ？」

「ないから困ってるんだろ」

遥の冷ややかな追及に、武蔵は顔をしかめて苛ついたように言い返す。とぼけたり嘘をついたりしているのではなく、本当に覚えがないのだということは、ずっと彼の様子を見てきた濡にはよくわかっていた。

「もしかしたら、武蔵も何かの実験に使われてたんじゃない？」

「確かに、あの頃は派手に結界が壊れていたが……」

真顔で学生証を見つめながら呟く武蔵に、濡は小首を傾げる。

「結界？」

「国を守るために張り巡らせている、目に見えない防御壁みたいなものだ。許可なく出入りが出来ないようになっていて、外部から存在を隠す役割も果たしている。だから、おまえたちの地図に俺らの国は載っていない。ただ、あの頃はちょうど事故があって結界が壊れていた。今はもう完全に修復しているが、数年前までは綻びが残っててな。橘美咲はそこから俺らの国を見つけ、子供たちを攫っていったんだろう」

濡はじっと彼の横顔を見つめながら聞いていた。結界についてはぼんやりとしかわからなかったし、そんなことが可能なのか半信半疑だったが、話の腰を折るのも躊躇われて口を挟めなかった。

武蔵は微かに眉を寄せる。

「だが、俺には橘美咲と会った記憶はないし、行方不明になったこともないし、そもそも子供た

ちの失踪事件とはまったく時期が違う」

残された記録によると、美咲が子供たちを拉致していたのは10年前に始まり5年前に終わっている。10年前であればまったく時期が違うとはいえない気がして、漣は首を傾げた。

「その学生証、いつ頃のなの？」

「おまえらの生まれる前だぞ」

「え……??」

あまり武蔵の年齢を意識したことはなかったが、何となく20代半ばくらいのように思っていた。しかし、それだと計算が合わない。うっすらと認識違いを感じながら、おそろおそろ、けれど単刀直入に尋ねてみる。

「武蔵って、その、年いくつ？」

「31、2くらいだ」

「うそ、意外とおじさん……」

思わず本音が口をついた。武蔵はムツとして横目で睨み、喧嘩腰で突っかかる。

「おまえの冴えない彼氏とそんなに変わらないだろう」

「冴えないとか言わないで。それに誠一はまだ20代だし」

「でも、体力や持久力は俺の方があるんじゃないか？」

「そ、そんなの知らないし！」

何か含みのある口ぶりに、漣はカァッと顔を真っ赤にして誤魔化すように言い返す。その直後、急ブレーキが踏まれた。前のシートにぶつかりそうになり咄嗟に手をつく。とりたてて危険を感じるほどではなかったが、いつもの悠人らしからぬ荒い運転に、何かあったのではないかと少し心配になった。一方の武蔵は、運転席のヘッドレストを軽く叩いて文句をつける。

「おい、ちゃんと運転してくれよ」

「話しかけないでくれないか」

悠人の声は刺々しく、それだけで十分に苛ついていることは伝わってきた。ハンドルを握る手にも明らかに無駄な力が入っている。ただ、何について苛ついているのかはよくわからない。武蔵との砕けた会話が気に入らなかったのだろうか。

「くだらないことばかり言ってないで、もう少し真面目に考えなよ」

漣はやにわに後部座席に振り向いて眉を上げた。先ほどの憶測を裏付けるかのような言葉に、漣は思わず小さく肩をすくめて視線を落とす。しかし、武蔵の方はつゆほども悪びれる様子はなく、鷹揚に頭の後ろで手を組んでシートに身を預ける。

「考えてもわからないものは仕方ないだろう。どうせ今から橘美咲に会うんだ。ついでにこのことも追及してくるさ。俺らの国に来たときにたまたま拾った、くらいの話だといいいんだけどな」

「そうだね……」

たまたま拾った学生証を持ち帰って保存というのは、どう考えても無理のある話だが、そんなことくらい彼自身もわかっているだろう。それでも願わずにはいられない気持ちを、漣には敢えて否定することなど出来なかった。

米国大使館に着くと、念入りにボディチェックをされてから応接室に通された。

調べられることは事前に予想していたので、発信機や録音機の類、もちろん武器なども一切身につけていなかった。こんなことで、せっかく手に入れた機会を棒に振るわけにはいかない。まず会わないことには何も始まらないのだ。

案内の女性が退出してからしばらく経つが、まだ誰も現れない。

二人は長いソファに並んで座っていた。密かに様子をモニタされている可能性があるので、滯はおとなしく口をつぐんでいたが、武蔵はわかっているのかいないのか、滯の肩をぐいっと抱き寄せて耳元で囁く。

「そんなに緊張するな。俺がついてる」

「そういうボディガードっぽくないことはやめてよ」

「俺が護衛じゃないことは、とっくにバレてるぜ」

「え？ どういうこと？」

滯は大きく目を睜りつつも小声で尋ねた。

しかし、彼は悠然とソファにもたれかかって声を張る。

「忘れたのか？ 俺は数日前まで三億円の賞金首だったんだ。おまえは見てないから状況が掴めてないかもしれないが、テレビや新聞に似顔絵が出まくってたし、日本にいて俺の顔を知らない人間の方が少ないくらいだ。実際、ここの受付の女も俺を見てハッとしてたしな」

「……それ、大丈夫なの？」

思わず眉をひそめた滯を横目に、武蔵はククッと喉の奥で笑った。

「世間では誘拐じゃなく駆け落ちだと噂されてるみたいだぜ。橘会長が二人の仲を許したから懸賞金を撤回したんだろうってな。警察の動きが鈍かったことも噂に拍車をかけているらしい。ま、だから俺ら二人が一緒にいてもなんら不思議はないってことだ」

事実から大きく乖離したあまりに突拍子もない話に、滯は啞然とした。噂にしてもひどすぎる。彼が思いつきで捏造しているのではないかと少し疑いつつ、眉を寄せてじとりと睨む。

「どうして、私が武蔵の恋人みたいになってるのよ」

「それだけお似合いに見えたってことだろう。週刊誌にはメロドラマみたいな妄想記事が山ほど書かれてたぞ。まあ、結果的に恋人同然の関係になったわけだけだな」

「なってないし」

それについてはキッパリと断ったはずである。恋人同然というのが体の関係のみを指しているなら、間違いといえなくもないが、それも昨晚きりのことで継続するつもりはない。滯は表情を硬くしたが、逆に武蔵は口もとを上げてくすりと笑った。

「ずいぶん意地っ張りだな。ベッドの中ではあんなに素直なのに」

「……あの煎餅布団のいったいどこがベッドなわけ？」

「よし、じゃあ今度はきちんとベッドでしょう。約束する」

「ちょっ、勝手に約束しないで！ 今度なんて絶対にないだから」

自分がこれほど顔を火照らせているというのに、武蔵はいたって余裕なのが悔しい。滯は横目で睨んで口をとがらせる。それでも彼は軽く笑って受け止めていたが、急に真剣な顔になると、

手を伸ばして濡の頭をグイッと引き寄せた。至近距離には彼の真顔がある。

「ちょっと、こんなところで……」

そう言って彼を押し返そうとするものの、その手にはほとんど力が入っていなかった。抗議の言葉ごと唇を奪われる。そのうえ舌までも情熱的に絡められた。のぼせたように頭の中が霞みがかってくる。どうして今こんなことをするのだろうか。いつ誰が来るかもわからないのに――。

ガチャリ、と扉の開く音が聞こえた。

濡は我にかえり、彼の胸を必死にこぶしで叩いて訴えるが、頭を抱え込んだまま放してくれない。その間にも、二つの足音は躊躇いなくこちらに向かい、そろって正面のソファに腰を下ろす気配がした。

「待たせたわね」

その声で、ようやく塞がれていた唇を解放された。ハアッと胸いっぱい空気を吸い込むと、上気した顔で武蔵を思いきり睨めつける。そこに浮かぶ意味ありげな微笑が腹立たしい。突っかかりたくなる衝動をどうにか鎮めると、濡れた口もとを拭いながら正面に向き直る。

そこには、美咲と石川がいた。

美咲は膝丈の淡いワンピースを身につけて、優美で凜とした佇まいを見せており、石川はくたびれたスーツに白衣を羽織り、穏やかな笑みを浮かべている。石川までいるとは思わず少し驚いたが、今までと何ら変わりのない二人の姿に、濡の涙腺はじわりと緩む。

「お母さま……」

「久しぶりね。元気だった？」

「はい、お母さまたちは？」

「この通り元気にやってるわ」

まるで何事もなかったかのように挨拶が交わされる。目の前にいる二人があんな非道な実験をしたなど、濡にはとても信じられない気持ちだった。今までにしてもほとんど実感はなかったが、直接会って言葉を交わすと、ますますそれが希薄になっていくように感じる。しかし、現実から逃げてばかりはいられない。

「前に言っていた内緒の彼氏って、その人なの？」

「えっ？」

濡が本題を切り出すより先に、美咲が尋ねてきた。一瞬、何を言っているのかわからなかったが、美咲に連れられて研究所に向かうときに、好きな人について話したことを思い出した。もちろん好きな人というのは誠一である。刑事だとは知られなくなかったので、素性については内緒にさせてもらったのだ。

「それは別の人！ 武蔵は全然そういうのじゃないから」

「これからそうなる予定だけどな。よろしくお母さま」

「ちょっと！」

武蔵は勝手なことばかり言うと、ソファの背に腕を掛けてもたれかかり、ひどく挑発的な笑みを美咲に向けた。それで復讐しているつもりなのだろうか――彼の思考が理解できず、濡は困惑

ぎみに横目を流して眉をひそめる。しかし、美咲は少しも狼狽えた様子を見せることなく、若干呆れたような視線を返しながらい口を開いた。

「あなたたち、交際報告に来たんじゃないでしょう？」

「当たり前です！ そうじゃなくて……えっと……」

滯は小さく息をついて気持ちを落ち着けると、丁寧に言葉を紡いでいく。

「お母さま、どうしてあんなひどい実験をしたの？ 動物実験のつもりだったの？ 私たちと少し違うかもしれないけど、私たちと同じように思考も感情もある人間だよ？ それも、何の罪もないあんな小さな子供たちを……」

「言い訳はしないわ。私たちがひどいことをしたのは確かよ」

美咲は背筋を伸ばしたまま淀みなく答える。その眼差しには何の翳りも見られなかった。進むべき道を固めているかのように、覚悟を決めているかのように、一片の迷いもないかのように――。滯の目には涙が滲み、視界は大きくぼやけてぐにゃりと揺らめいた。

「わかってるんだったらやめてよ！ 一緒に帰ろうよ……」

「もう、引き返せないところまで来てしまったのよ」

「そんなことない！」

声を震わせて訴えるが、美咲はただ曖昧に薄く微笑むだけだった。今度は縋るように石川の方に身を乗り出す。

「石川さん、お母さまを止めて！」

「滯ちゃん、申し訳ないけど僕にはできないよ。僕にとって美咲さんは絶対だ。何があっても美咲さんについていく、美咲さんを守っていくって、もうずっと昔からそう決めているから。滯ちゃんが生まれるよりも前からね」

穏やかな彼に似つかわしくない、情熱的な決意。

滯は返す言葉が見つからず唇を噛んだ。

「……お父さまはどうするんですか」

「私がどうこうできるものではないわ」

美咲は顔色ひとつ変えずに答えた。まるきり他人事のような態度に、滯はカッと頭に血を上らせる。

「警察に捕まっているのは知ってるんですね？ それでも見捨ててアメリカに行くんですか？ 今でも二人は赤い糸で結ばれてると思ってたのに、愛し合ってるって信じてたのに……石川さんさえいけば、お父さまは要らないっていの？！」

「いつか、一緒に暮らせるといいわね」

はぐらかしているとしか思えない的外れな返事は、何も答えないという美咲の意思なのだろう。まともに議論することさえできないこの状況に、滯は泣きたくなるが、零れそうになった涙を堪えてキュッと唇を引き結んだ。

「橘美咲、俺から二つ要求がある」

「何かしら、護衛の武蔵さん」

武蔵が表情を引き締めて真剣に切り出すと、美咲は含みのある物言いで揶揄した。それでも彼は怯むことなく毅然と見据えて言う。

「まず一つ目。おまえたちが実験体として使っていた少女、メルローズを引き渡してほしい。あの子は俺の姪だ。あの子のためにも、姉さんのためにも、俺自身のためにも、必ず無事に助けなければならないし、どんな手段を使っても助けるつもりでいる」

「なるほど。それで私たちのまわりをうろついていたのね。ネットで接触してきたのもあなたかしら？」

「そうだ。おまえらは俺らの国の子供たちを何十人も殺してきた。とても許せるものじゃない。だが、メルローズさえおとなしく引き渡してくれれば、おまえたちに危害は加えないと約束する。濡ともそう約束した」

「わかりました。あなたにお返しします」

即座に返ってきたその答えに、武蔵も濡も目を丸くして顔を見合わせる。すぐに承諾してもらえると夢にも思わなかった。彼女にとってメルローズは現存する唯一の実験体のはずだ。それなのに、なぜ――。

美咲はくすりと笑う。

「もともとそのつもりだったのよ。あの子は実験体として不適格なことが判明してね。手元に置いておく意味はなくなったわ。だから、お父さまたちがここを突き止めてやって来たら、面倒をみてくれるようお願いしようとして決めていたの。こちらの担当者にも許可はもらってあるから安心して」

「じゃあ、どうして連れて行ったんです？」

「あの場に放置していたら公安に連れて行かれたでしょうね。そうなれば、間違いなく無策無謀な実験で殺されていたわ。だから、信頼できる人に確実に託すためにこうしたのよ。あの子にはそれなりに情が移っているから。でも、あなたたちがなかなか来てくれなくて、いい加減しびれがきれそうだったわよ」

美咲はそう言って悪戯っぽく微笑む。

しかし、武蔵は難しい顔で考え込んでいた。

「おまえたちの実験は、魔導...いや、生体高エネルギーを留める器を作るためのものだ。つまり、メルローズの身体そのものを器にするってことだろう？ いったいどういう理由で不適格と判断したんだ？ 俺ほどじゃないにしても、あの子は――」

「あら、ご不満？」

不遜なまでに挑発的な美咲の態度に、武蔵はムツとして顔をしかめる。

「せめて納得のいく説明くらいよこせよ」

「そうしたいのは山々だけど、研究については何も話さないよう釘を刺されているの。私が話そうとすれば、あなたたちは即刻ここを追い出されるわ。メルローズも取り戻せなくなるわよ」

こう言われては引き下がるより他にないだろう。その話が本当かどうかはわからないが、万が一そうなのは後悔してもしきれない。何よりも優先すべきはメルローズの救出なのだ。わかった、と武蔵が悔しげに声を落とすと、美咲はにっこりと満足げに頷く。

「石川さん、連れてきて」

命じられるまま、石川は丁寧に一礼して応接室を出て行った。連れてくるのはもちろんメルローズだろう。さすがの武蔵も少し緊張している様子で、表情をこわばらせながら、膝の上で祈るように両手を組み合わせた。それでも、美咲はお構いなしに淡々と話を進めていく。

「もう一つの要求は何かしら」

「もう一つは……、これだ」

武蔵はブルゾンの内ポケットから学生証を取り出し、掲げて見せた。

ああ、と美咲は気の抜けた声を漏らす。

「どうしておまえがこれを持っていた。俺の学生証だぞ」

「えっ……、それあなたなの？」

「見た目が随分違うと言いたいんだろうが、髪は黒く染めていて瞳は黒のカラコンだ。この日本で金髪碧眼は目立つからな。変装していることは濡も知っている。俺の本当の名前がアンソニーであることも、この学生証を見つける前から濡には言ってあった」

武蔵の話を受け、濡はこくりと頷いて肯定を伝える。

美咲は大きく目を見開いて口もとに手を添えると、初めは小さく、やがて大きく肩を震わせながら笑い出した。そして、困惑を隠せない濡と武蔵に向き直り、この上なく愉快そうに声を弾ませる。

「本当になんて偶然なのかしら」

「自分ひとりでわかってないで俺にも教えて！」

「言ったでしょう？ 研究については話せないって」

「俺に、何かしたのか？」

何か得体の知れない実験をされていたのではないか——信じたくなかったであろうその推測が、にわかに現実味を帯びてきた。武蔵の額にはじわりと汗が滲んでいる。恐怖を感じるのも無理はない。実際に彼女の実験で何人もの人間が殺められているのだ。

美咲は真顔になると、濡を見つめて強い口調で言う。

「濡、その男だけはやめなさい」

「え……と……どうして？」

もともと武蔵とどうこうなるつもりはなかったが、なぜ急にそんなことを言い出したのか気に掛かり、とりあえず遠慮がちに理由を尋ねてみた。しかし、美咲は素知らぬ顔をして答えようとせず、再び武蔵に目を向けて冷たく言い放つ。

「あなたも随分と濡にご執心なようだけど、諦めてちょうだい。残念ながら許されないことなのよ」

武蔵はムツとして眉を寄せる。

「別に、おまえに許してもらおうとは思っていない」

「許さないのは私じゃないわ。言うなれば血かしら」

「……それは、俺の血に何かしたってことか？」

「研究については話せないって何度言えばわかるの」

思わせぶりなことばかり口にして、核心については素気なく撥ねつける。おそらく、いくら問い詰めても答えてはくれないだろう。しかし、何かしらの実験を施したことは、この返答で示されたも同然である。武蔵は頬に一筋の汗を伝わせながら、忌々しげに歯噛みして目を伏せた。

コンコンー。

扉が軽くノックされ、すぐに開いた。

石川が小さな女の子の手を引いて入ってくる。その子は、確かに地下室で見たあの幼い少女だった。薄地の白いワンピース一枚きりだったあのときとは違い、今日は白いワンピースにボレロを合わせ、レースの可愛らしい靴下に、つま先の丸いストラップ留めの革靴という、良家のお嬢様のような格好をしていた。彼女の赤みがかった長い髪にもよく似合っている。

「ミサキっ！」

少女はパッと顔を輝かせてトタトタと駆け出し、ソファに座る美咲に飛び込んだ。美咲も笑顔で抱き止める。それは、まるで幼い娘が母親に甘えているかのような光景だった。思い返してみれば、地下室でも縋るように美咲の名を何度も呼んでいた。もしかすると、少女にとって美咲は母親同然の存在なのかもしれない。

武蔵は呆然とその光景を見つめていた。どういうことだと譫言のように呟いたあと、何とか気を取り直し、前屈みでメルローズに何かを話しかける。その言葉は彼の母国語なのだろう。しかし、メルローズは鶯色の瞳をぱちくりさせ、不思議そうな顔をするだけだった。

「この子、お国の言葉は忘れちゃったみたいなの。無理もないわよね。連れてきたときはまだ3歳だったんだから。でも、日本語ならある程度は理解できるわよ」

「……………」

罪悪感の欠片もない美咲の物言いに、武蔵は敵意を露わに睨みつける。しかし、すぐに目を伏せて気持ちを落ち着けると、カラーコンタクトを外して立ち上がり、美咲の傍らまで進んでいった。その膝先でしゃがんでメルローズと視線を合わせる。ビクリとして美咲にしがみついた小さな少女に、武蔵は鮮やかな青の瞳を向けて微笑みかけた。

「メルローズ、俺はアンソニーだ。メルローズのお母さんの弟の……覚えてるか？」

しかし、彼女は困惑したように顔を曇らせ、ゆっくりと小首を傾げた。物言いたげな視線は頭部に向けられている。そのことに気付いた武蔵は、小さく苦笑して自分の黒髪に左手を差し入れた。

「これは黒く染めてるんだ。けど、顔や声は一緒だろう？」

「……おじ、さま？」

メルローズはおずおずと言う。武蔵は少女の頭に大きな手をのせた。

「大きくなったな。無事でよかった」

「おじさまっ！！」

メルローズは灰赤色の髪をなびかせて広い胸に飛び込んだ。縋りつく小さな体を抱き上げた武蔵は、あやすように背中を優しくぽんぽんと叩く。その表情からは大きな安堵が窺えた。ソファに座ったまま見守っていた澪も、実験体の少女を取り戻せたことに、血縁の二人が無事再会でき

たことに、ようやくほっとして胸を撫で下ろす。

「俺と一緒にいこう」

「……………」

武蔵は真摯にメルローズを見つめて言うが、彼女はきょとんとするだけだった。美咲や石川から何も聞いていないのだろう。この場で事情を説明するのは難しいと思ったのか、安心させるように柔らかく微笑むと、何も言わずに小さな体をひょいと抱き上げた。そのままぐるりと振り返って言う。

「濡、帰るぞ」

「えっ？」

濡は目をぱちくりさせ、慌ててローテーブルに手をつき前のめりに立ち上がる。

「ちょっと待って！もう少しお母さまと話をさせて」

「残念ながら時間切れよ。今すぐ家に帰りなさい」

武蔵が答えるより先に美咲がそう言いつける。いったい何が時間切れなのか意味がわからない。しかし、有無を言わさぬ毅然とした口調、強い意志を感じさせる厳しい表情、形容しがたい気迫に圧倒されてしまい、何も言い返すことはできなかった。

「ありがとう……そして、ごめんなさい。みんなにもそう伝えておいて」

美咲は柔らかく微笑んで付言する。

濡の胸中には相反する様々な感情がせめぎ合っていた。彼女のささやかな願いに頷くことさえ躊躇われる。口を引き結んで立ち尽くしていると、メルローズを抱えた武蔵が肩を叩いて促した。濡は顔を曇らせながらも小さく首肯する。

「元気でね、メルローズ」

美咲は連れられていく少女に別れの言葉を贈る。しかし、まるで事態を把握していないその少女に、答えを求める純粋な眼差しを向けられると、困ったような微妙な面持ちになり言い添える。

「私はここに残るの。あなたは叔父さんと一緒にいきなさい」

「いや……ミサキ……！ミサキっ！！」

メルローズは大きく身を乗り出し、美咲に手を伸ばす。しかし、武蔵はその体を抱きしめて離さなかった。苦々しげに顔をしかめ、急いでその場から立ち去ろうとした、そのとき――。

「……………?!」

メルローズの体が急にまばゆい光を放ち始めた。直後、武蔵はバチッと大きく弾き飛ばされ、絨毯の床に受け身を取りながら倒れ込む。彼の腕から離れて一人になったメルローズは、白く発光したまま絨毯の上でうずくまっていた。

「メルローズ、落ち着け！！」

武蔵は臆することなく彼女に駆け寄り、白い光を纏った小さな体を抱き込んだ。彼の体も同じように白く発光し始める。その光が、メルローズの光を抑え込んでいるように見えた。やがてどちらの光も緩やかに収まっていく。何が起こったのかはよくわからないが、それでも危機が去ったことを感じ、濡は我知らずホッと安堵の吐息を落とした。しかし――。

「逃げて！」

突如、美咲がソファから立ち上がってそう叫んだ。同時に、背後から二人の屈強な男性が飛び込んできた。騙したな、などと英語で怒声を上げながら、一人は美咲と石川を取り押さえ、もう一人は武蔵に照準を合わせて拳銃を構える。

武蔵は片手を伸ばし、自身の前に透明な光の壁のようなものを作り出した。

拳銃を構えた男は大きく目を見開くが、すぐ我にかえり、武蔵の足もとに狙いを定めて発砲した。しかし、弾丸はすべて光の壁に阻まれる。彼は拳銃を下ろして大声で何かを叫んだあと、トランシーバーで捲し立てるように指示を出す。英語なのですべては聞き取れなかったが、どうやらメルローズを奪取するための応援要請らしい。

「濡、行くぞ！」

「え、うん！」

隅にいる美咲と石川をちらりと一瞥したが、二人とも上腕を掴まれているだけで、それ以上の手荒な真似はされていないようだ。心配ではあるものの留まってははいられない。メルローズを横抱きにした武蔵とともに、濡は扉を開けて応接室から飛び出した。しかし、すでに両側の廊下から複数の追っ手がこちらに向かっていて、正面には嵌め殺しのガラス窓があるだけである。

「ど、どうしよう！」

「……クッ」

武蔵は奥歯を食いしばり、汗を滴らせながらあたりを見まわした。そうしているうちにも追っ手は迫ってくる。どうすればいいか濡にはわからない。怪盗ファントムで大勢の警備員や警察官を相手にしてきたが、今回は勝手が違い、こちらが無抵抗でも容赦なく拳銃を向けてくるのだ。

「武蔵……？」

メルローズを抱えたまま前方に突き出した彼の手に、直視できないほどの白くまばゆい光が集まった。はっ！という掛け声とともに放射すると、前方のガラス窓と壁が砕け散り、眼前が大きくひらけて長い黒髪が舞い上がった。

「先に飛べ！」

武蔵は濡の腕を掴んで促した。

正面には薄い雲のかかった青空が広がっている。ここは三階だ。しかし飛び降りられない高さではない。濡は大きく空いた風穴から下を覗き、着地点を確認すると、助走をつけて踏みきり外へと飛び出した。バン、バン、バン、と背後で何発か発砲する音が聞こえる。空中で身をすくませるが体には当たらなかった。

濡は見定めた歩道近くの芝生に着地して振り返ると、武蔵もメルローズを抱えて飛び降りていた。濡からさほど離れていないところに着地する。が、メルローズをそっと地面に下ろすと、そのまま崩れるように片膝をついてうずくまった。

「武蔵……？」

怪訝に思って覗き込み、ギョッとする。

胸元を押さえた彼の手は赤く染まっていた。ブルゾンが濃色のためわかりにくいだが、おそらく銃撃を受けて出血したのだろう。よく見ると、メルローズの白いワンピースやボレロも一部が赤

く染まっていた。

「メルローズを連れて逃げてくれ……」

「ダメ！ 武蔵も一緒に！！」

「俺は、必ず……あとから、行く……」

たまたま居合わせた人たちが遠巻きに見ている。目の前で繰り広げられる映画のような光景に、ただただ呆然としているようだ。それでも、そのうちの何人かは我にかえり、携帯電話で警察や救急に連絡し始めた。

ビルから複数の男たちが駆けてくる。

どうしよう、どうしたらいいの——濡は半ばパニックになりながらも、血に濡れた武蔵の手を握りしめ、必死に思考を巡らせようとする。そのとき、悠人の車が勢いよく歩道脇に滑り込んできた。

「乗れ！！」

開いた運転席の窓から悠人が叫ぶ。

濡は車に駆けつけて後部座席のドアを開け放つと、メルローズを乗せ、武蔵を押し込み、最後に自分が飛び乗ってドアを閉めた。アスファルトに血痕を残したまま、車は振り切るような急発進で走り出す。

武蔵の息はだいぶ荒くなっていた。

濡は急いで制服のジャケットを脱ぐと、傷口と思しきところにギュッと押し当てる。しかし、そのジャケットもみるみる血まみれになり、押さえる手までもが赤く染まっていく。生まれて初めて目にする惨状に、血の匂いと感触に、くらりと目眩がして少し気が遠くなった。それでも何とか意識を保つ。

お願い、死なないで——。

今は他に為すすべもなく、ただ必死に祈り続けることしかできない。その頬には知らず涙が伝っていた。

## 32. おかえり

負傷した武蔵は橘家に運ばれた。

あらかじめ剛三には電話で概況を連絡しており、到着したときにはすでに医師が手配されていた。橘家とは先々代からの古い付き合いで、腕も口の堅さも信頼できる田辺という開業医である。年の頃は悠人よりも幾分か上だろうか。濡と遥は何度か風邪を診てもらった程度だが、亡き祖母の瑞穂が大いに世話になったことは知っていた。

田辺医師はひとまずの処置を済ませてから、関係者の集まる廊下に顔を出した。

一般向けと思われる簡素な説明によれば、弾は貫通しており、臓器に損傷もないが、出血量が多いので今すぐ輸血が必要とのことである。濡はパッと勢いよく前に進み出た。

「武蔵の血液型は?!」

「O型です」

「私もO型です!」

自分の胸に血まみれの手を当てて訴える。今この場に集まっている人間の中で、血液型のわからないメルローズを除けば、O型は濡と遥だけである。武蔵に自分の血液を分けられることに、彼を救えることに、まだその段階ではないが少しだけ安堵した。しかし――。

「待って」

背後から遥が口を挟んだ。

「僕らの血液で大丈夫なのかな。メルローズが同じ血液型なら、メルローズの方がいいと思う」

事情を知らない田辺医師の手前ゆえか、理由は述べなかったが、その意味するところはすぐにわかった。武蔵たちは自分たちと遺伝子的にわずかながら相違がある。血液型が同じだからといって輸血が可能という保証はどこにもない。その点、同種のメルローズであれば問題はないはずだ。きょとんとした小さな少女に一斉に皆の視線が注がれる。

「そんな小さな子供一人ではとても足りませんよ。なぜ輸血を躊躇っているのですか? 濡さんや遥くんに何か問題でもあるのですか?」

田辺医師は怪訝に眉をひそめた。

しかし、さすがに武蔵の素性を説明するのは憚られ、誰もその問いに答えようとはしなかった。剛三でさえもどうすべきか決めかねているようだ。その隣で、悠人も腕を組みながら真剣に黙考していたが、やがて思いついたように田辺医師に尋ね返す。

「輸血をしなければどうなりますか?」

「命を捨てるようなものですよ」

その声には、呆れとも怒りともつかない声音が滲んでいた。

遥は軽く拳手をしながらぶっきらぼうに進み出る。

「じゃあ、僕の血を使って」

「私の血もお願いします!」

濡も負けじと一步踏み出して隣に並んだ。しかし、遥は冷ややかに一瞥して言い捨てる。

「濡は駄目だよ」

「どうして?!」

もし輸血しか手段がないのであれば、同じ血液型を持つ者として、血を提供するのは当然のことである。なのに、遥自身はそう申し出ているにもかかわらず、滯には許さないなどわけがわからない。追及の目を向けるが、彼は視線を逸らせたまま答えようとしなかった。

「一人では足りません。できれば、お二人にお願いします」

医師としての使命を感じさせる強い口調で、田辺医師は言う。一刻も早く輸血しなければならないことは、医師でない滯でも十分に理解している。遥が何と言っても自分の血を使ってもらおう、そう決意を固めて田辺医師に振り向いた、そのとき――。

「少しだけ時間をください」

悠人が後ろから滯の手をとって、おもむろにみんなから少し離れたところへ誘導した。いったい何だっというの――滯は反発して腕を振り払おうとするが、彼は真剣な面持ちで覗き込んで声をひそめる。

「もしかしたら、武蔵は滯や遥の血を受け付けないかもしれない。輸血することで彼が死ぬかもしれないんだよ。自分の血で彼を死なせてしまう、その現実を受け入れるだけの覚悟はあるの？」

「……助けられる可能性があるなら、それに懸けます」

正直、そこまでの覚悟をしていたわけではなかった。悠人に言われて少し怖くなったのも事実だ。けれど、逃げ出して彼を死なせてしまっただけでは後悔してもしきれない。まず輸血をしないことには助かる可能性さえ潰えるのだ。震えそうになる手をグッと握り締め、強い意志を秘めた瞳で見つめ返す。

悠人は微妙に顔を曇らせながらも、頷いてくれた。

「よろしくお願いします」

田辺医師に振り向いて真摯にそう言うと、滯の肩をそっと押して送り出す。

遥は眉をひそめていたが、悠人の決定に異を唱えることはなかった。

二人は許容量いっぱいまで採血され、武蔵に輸血された。

その後、田辺医師が付きっきりで経過を観察していたが、やがて容態は落ち着き、もう心配はないだろうという診断が下された。今は薬の影響で眠っているが、そのうち意識は戻るとのことである。それでも滯はベッド脇から離れられなかった。不安のためか息苦しさを感じながらも、椅子に座ったまま彼の寝顔をじっと見守る。

「滯……」

悠人の大きくあたたかな手が、滯の肩に置かれた。

「シャワーを浴びて着替えておいで。その格好では、彼が目覚めたときに驚くだろう？」

「……そうですね」

採血のときに腕と手だけは洗ったが、制服のシャツもスカートも血まみれで、顔にも脚にも血がこびりついたままである。もう乾いているので血みどろという感じではないが、それでも尋常な姿とはとてもいえないだろう。武蔵のことが気がかりで離れがたくはあったが、もう大丈夫と

いう田辺医師の言葉を信じて立ち上がる。少し、くらりと目眩がした。

「僕も行く。血を抜いたあとだし、滯を一人にしておけない」

遥は誰にともなくそう宣言すると、滯の手をしっかりと握って先導するように歩き出した。戸惑いつつも、滯は引かれるまま素直について歩く。視界の端には物言いたげに立ちつくす誠一が映っていたが、彼はただ見送るだけで、滯が部屋を出て行くまで一度も口を開くことはなかった。

シャワーを浴びて服を着替えたあと、遥とともにダイニングルームで食事をした。武蔵と朝食をとってから何も口にしていなかったことに、ダイニングルームに連れてこられてようやく気がついた。だが、それでもあまり食欲はなく、遥を心配させない程度に口に運んだだけだった。

部屋に戻っても、武蔵はまだ目覚めていなかった。

滯は再びベッド脇の椅子に腰掛ける。穏やかな顔で眠る武蔵を見ていると心配になり、布団の中に手を差し入れ、彼の大きな手を両手で包み込むように握った。顔色はあまり良くなかったが、手はいつものように温かい。そうやって彼の生存を実感していないと、漠然とした不安に心が押しつぶされそうだった。

遥も一緒にこの部屋に来ていた。どこからか持ってきた椅子を滯の斜め後方に置いて座っている。武蔵というより滯を気にして見守っているようである。悠人と誠一はともに奥のソファに座っていたが、小声で何かを話し合うと、二人で連れ立って部屋を出て行った。滯たちと入れ替わりで食事に行ったのかもしれない。出て行く間に遥に耳打ちをしていたが、滯には聞き取ることができなかった。

ふと、握っていた手がピクリと動く。

滯はハッと顔を上げて武蔵に目を向けた。微かに震える瞼がゆっくりと上がっていき、鮮やかな青の瞳がぼんやりと滯を捉える。瞬間、滯の心臓はドクンと飛び出さんばかりに跳ねた。ガタリと腰を上げて身を乗り出しながら、彼の手をぎゅっと握りしめる。

「武蔵っ！ わかる?!」

「どこだ、ここは……」

「ウチだよ、橘の家」

彼の手を胸元に抱き込みながら、まだ虚ろな瞳を覗き込む。長い黒髪がさらりと彼の頬を掠めた。

「お医者さんはもう大丈夫だって。助かったんだよ？」

「感謝してよ。僕と滯がだいぶ血をあげたんだから」

背後で立っていた遥が、腕を組んでぶっきらぼうに言い放つ。武蔵はフッと薄く笑った。

「なるほど、おまえらが俺の命の恩人ってわけか……」

「もともと、僕らの血で大丈夫なのか保証はないけどね」

「ああ、おまえらとは生物学的に少し違うんだったな」

そう言ったあと、急にきよろきよろと視線を動かして部屋を見回した。

「メルローズは？」

「篤史が他の部屋で寝かせてる。連れてくる？」

「いや、そのまま寝かせといてやってくれ」

遥の答えに安堵したようにそう言い、天井を見つめながら少し目を細める。

「大使館の連中は？」

「追って来てないよ」

今度は滯が答えた。すぐに遥が補足する。

「あちらも事を大きくしたくないだろうし、大使館の外で強引な真似は出来ないよね。でも、橘の人間であることは知られてるから、用があればここに来るはずだよ。今のところは関係者らしき人物は来てないけど……ねえ、いったい何があったの？」

帰ってからまだ誰にも何があったのか訊かれていなかった。武蔵は意識をなくして話せる状態ではなかったし、滯もショックでそれどころではなかったので、配慮してくれていたのだろう。滯は助けを求めるように武蔵に目を向けると、彼は小さく頷き、ベッドで仰向けになったまま静かに話し出す。

「橘美咲はメルローズを俺に返すと言ったが、大使館の連中はそれを許さなかった。簡単にいえばそれだけだ。ただ、実験に不適格なことが判明したから、という橘美咲が口にした理由は嘘だ。大使館の連中もそれがわかったから取り戻そうとしたんだろう。メルローズの体は、人為的な作用によるせいかな不安定だが、すでに大きな力を蓄えられるようになっている。原理を解明するにせよ、人間兵器を作るにせよ、必要不可欠な実験体のはずだ。なのに、なぜ橘美咲が手放そうとしたのかわからない」

滯は現実に対処するだけで精一杯だったが、武蔵は論理的に考えを巡らせていたようだ。けれど、故意なのか失念なのか、その話からは美咲の語ったことの一部が抜け落ちている。

「お母さま、ずっとあの子と一緒にいて情が移った、みたいなことを言ってたじゃない」

「まさか。あんな非道な実験を行ってきた奴が、情なんかで大事な実験体を手放すかよ」

「武蔵がそう思うのは仕方ないけど……でも、私は……」

母親がそこまで非道な人間だと信じたくなかったし、今まで見てきた優しい笑顔が嘘だと思いたくなかった。両手で包み込んでいた武蔵の手を、再びぎゅっと縋るように握りしめる。彼は少し困ったように顔をしかめ、視線を逸らせた。

遥は気まずい空気をものともせず、淡々と話を進める。

「学生証のことは訊いたの？」

「ああ、はっきりとは答えてくれなかったが、心当たりがあるのは確かなようだな」

思い返すように答えた武蔵に、滯は神妙に頷く。

「お母さま、その学生証が武蔵のものだって聞いたとたん、急に武蔵と付き合うなとか言い出したんだよね。血が許さない？ みたいなわけのわからないことを言って……あ、別に私は武蔵と付き合いたいとかそんなつもりは全然ないんだけど！」

ふと誤解を招きかねない発言をしてしまったことに気付き、パッと武蔵の手を放して、大袈裟なくらい両手をふるふると横に振りながら釈明する。しかし、彼は怖いくらいに真剣な面持ちで考え込んでいた。

「血って、どういうこと……？」

「橘美咲に訊いたが答えてくれなかった。研究については何も話せないと言ったことから考えると、やはり何かしら研究に関わることではあるようだ。記憶にはないが、血液に関する何らかの実験をされたのかもしれない」

武蔵は天井を見つめたまま、思考を整理するように答えていく。

それを聞いた遥は、キッと眉を上げて滯を睨んだ。

「滯も血のこと聞いてたんだったら輸血の前に言ってよ。もし、実験のせいかな何なのかわからないけど、滯と武蔵の血液が相容れないって意味だったら、滯が輸血したことで拒絶反応が出るかもしれないんだよ？ その危険性が示されていたなら、他のO型の人間を探してきて血を提供してもらうべきだった」

「あ……あのときは、そんなことまで頭がまわらなくて……」

遥に指摘されるまでは思い至らなかったし、そんなことを考える余裕もなかった。しかし、彼の指摘どおり明らかに自分の落ち度だ――滯の顔から血の気が引いていく。自分の失敗のために、自分の血によって、武蔵が命を落としたらと思うと怖くてたまらない。

うつむいた滯の頬に、あたたかい大きな手がそっと触れる。

「心配するな、俺は生きてるんだから」

武蔵は小さく微笑んで滯の頭を抱き込んだ。為すがまま、滯は広い胸に頬を寄せて目を閉じる。穏やかな心音が、あたたかな体温が、恐怖心を落ち着かせてくれるようだった。

「これからどうなるかはわからないが、どんな結果になったとしても、絶対におまえを恨んだりはしないから……それだけはわかってくれ。まあ、おまえの血に殺されるってのも悪くないしな」

「バカなこと言わないで！」

軽く冗談めかして言う武蔵に、滯は跳ね起きて一喝した。彼の胸に手をついたままキッと睨みつける。その目にはじわりと涙が滲んできた。慌てて再びうつぶせになり胸に顔を埋めるが、ぼろぼろとしずくが零れ落ち、彼の素肌を生ぬるく濡らしていった。

「お願いだから死なないで……死んでほしくないよ……」

「悪かった」

自らの意思でどうにもならないことを懇願されても困るだろうが、それでも彼は優しかった。泣きながら縋りついて小さく体を震わせる滯を、慈しむように、髪を梳くようにそっと柔らかく撫でていく。

「そうだよな、これから滯ともっと楽しいことするんだ。死んでなんかいられないよな」

「ん……早く、良くなってね……」

彼の言葉が本気なのか軽口なのか判別はつかなかったが、そんなことはどうでもよかった。生きてさえいてくれればそれでいい。そこに責任逃れの気持ちがないとは云わないが、それ以上に、一月近くともに過ごしてきた彼への情があった。

滯たちが話している間、遥は二人を見下ろしながら難しい顔で立ちつくしていた。

その後、念のため田辺医師を呼んで診察してもらったが、もう生命の危機は完全に脱しているとのことだった。もっとも武蔵の素性や実験のことは話していないので、拒絶反応の可能性については調べていないだろう。けれど、今のところはそれらしい兆候も見られず、意識も明瞭ですっかり元気そうである。ただ、それでもしばらくは安静が必要なため、ゆっくり朝まで寝てもらうことになった。

漣は遥とともに部屋を出ると、大階段の方へ歩き出した。

「漣、これからどうするつもり」

「これからって、何のこと？」

「武蔵と付き合うのかってこと」

「そんなつもりは、ないよ……」

先ほど付き合うつもりはないと言ったはずだが、信じてもらえなかったのだろうか。予想外の追及に、なんとか冷静を装って答えるものの、その声は少しうわずってしまった。遥も気付いたのか、微かに眉をひそめて不快感を滲ませる。

「誠一はさっき帰ったよ」

「そう」

「絶望的な顔してた」

「……………」

大使館から戻ってきて以来、ほとんど武蔵のことしか見ておらず、誠一がいたことすらも記憶にない。本当に絶望的な顔をしていたとすれば、彼を顧みなかったことが原因なのだろう。それについては多少の申し訳なさを感じるが、重傷を負った武蔵の方を気にするのは当然だと、どこかしら反発するような気持ちもあった。

遥は足を止め、静かに言葉を落とす。

「誠一、刑事じゃなくなった」

「えっ？」

「警察庁に出向になったんだって。誠一が橘家の人間と親しくしているのを知って、楠長官が利用しようと引き抜いたみたい。おかげで頑張ってた刑事の仕事も奪われてさ。楠長官には橘家の情報を流すように言われ、師匠には公安の情報を流すように言われ、意図せず二重スパイみたいな状態になってる。つらいだろうね。それでも辞めることなく耐えてきたのは、漣を救出する手がかりを掴むためだったんだよ」

その話は、砕けた硝子のように漣の胸に鋭く突き刺さった。

遥はさらに容赦なく追い打ちをかける。

「師匠も、一時は自責の念もあってかなり憔悴してたし、そのせいで精神状態が不安定なときもあった。楠長官のところに乗りでいって、逆上して首を絞めて殺しかけたりしてね。誠一が止めてなかったら取り返しの付かないことになってたよ」

そこで大きく息を継ぐと、漣を一瞥する。

「漣が無事に戻ってきてくれたのは嬉しいよ。たとえ生かされていてもどんな扱いを受けているかわからないし、肉体的にも精神的にも嬲られて壊れているかもしれないって、そんな覚悟もし

てた。けれど、帰ってきた滯は今までとまったく変わりのない元気な様子で……本当に良かったけど、師匠や誠一からするとやりきれない気持ちもあるよね。あんなに心配してたのに、誘拐犯と楽しくいちゃついていたんじゃ」

「私、そんなつもりは……」

ドクン、ドクンと次第に大きくなる鼓動を感じつつ、滯は弱々しく否定の言葉を口にする。

「誠一と別れて武蔵に乗り換える気？」

「そんなこと、しない……よ……」

全身から汗が噴き出して、喉がカラカラに乾いてきた。

それでも彼の厳しい迫及はやまない。

「じゃあ、いったいどういうつもりなわけ？ 武蔵と楽しくセックスしていちゃついで、誠一とも付き合い続けて、愛想尽かされたら師匠と結婚すればいいとか思ってる？」

「そんなこと……っ！」

思わずパッと顔を上げて言い返そうとする。しかし、氷のような冷たい遥の瞳に凍りついた。

「してないの？ セックス」

「……し、た……けど……」

「合意の上で？」

滯は萎縮して言葉に詰まり、ぎこちなく首を縦に振る。

遥はわざとらしく大きな溜息を落とした。

「ふらふら流されてばかりいないで、少しはみんなの気持ちを考えたら？ 滯がそんな好き勝手な態度でいたら、みんなが、誠一がどう思うかくらいわかるよね。いつも守られて甘えてそれで何とかなってきただろうけど、僕も滯が大切だから守ってきたけど、せめて自分の大切なものくらい自分で守る努力しなよ」

呆れ口調でそう言うと、鋭く射抜くような眼差しを滯に向ける。

「言っとくけど、師匠に乗り換えようなんて絶対に許さないから。滯なんかと結婚したら師匠が不幸になるだけだ。師匠やじいさんがどういうつもりでも、僕は絶対に許さないし認めないし、どんな手を使ってでも阻止してみせる」

「私、そんなつもりじゃ……」

「じゃあどういうつもり？」

おろおろする滯を遮り、遥はきつく問い詰める。

「誠一を裏切っておきながら、何事もなかったかのように平気な顔して付き合い続けるの？ それが許されると思ってるの？ 少しは申し訳ないと思わないの？」

「それは、その……悪かったって思って……ごめん……」

「僕に謝っても仕方ないだろ！」

遥とは思えないほど荒げられた声に、滯はビクリと身をすくませた。もうどうすればいいかわからない。彼の指摘どおり自分が悪いことは認めているが、何を言っても怒られてしまうだけである。涙を滲ませながら、力なくうなだれて自嘲の笑みを浮かべる。

「もう、謝る資格もない気がしてきたよ」

「謝る資格って何？ それって自分が傷つきたくないだけじゃないの？ 誠一に許してもらえないのが怖いだけじゃない？ 自分は平然と相手を傷つけておきながら、相手に自分が傷つけられるのは嫌だなんて、本当にどこまで甘えれば気が済むわけ？」

遙は徹底的に心の奥底を暴き立てていく。言われてみればそのとおりかもしれない。怯えて、逃げて、甘えているだけである。自分自身でさえ気付いていなかったことを突きつけられ、何もかもが音を立てて崩れていくようだった。

「このまま誠一と終わってもいいの？」

「いや……そんなの……」

涙がはらはらと頬を伝っていく。それでも、遙は険しい表情を崩さない。

「本当にそう思うんだったら、今すぐ誠一のところへ行ってきたよ。甘えてないで、自分で自分の気持ちを伝えてきなよ。悪いと思うなら反省して謝ってけじめをつけなよ」

それは、厳しくもまっすぐな叱咤――。

滯はようやく彼の思惑を理解した。嗚咽をどうにか堪えつつ濡れた頬を手のひらで拭い、決意を固めてこくりと頷くと、短いスカートをひらめかせながら身を翻して駆け出した。しかし、大階段に向かおうと角を曲がったところで、ふと人影を見つけてビクリと足を止める。そこにいたのは、鷹揚に腕を組んで壁にもたれかかる悠人だった。

「あの、もしかして聞いてました？」

「だいたいはね」

おずおずと上目遣いで尋ねると、悠人は小さく笑いながら肩をすくめて答えた。そのいつもと変わらない親しげな反応に、滯は少し安堵すると同時に、先ほどの話を思い出して胸が締め付けられる。

「すみません、師匠も私のせいでつらい目に遭ってたんですよ……」

悠人はただ優しく穏やかに微笑んでいた。肯定も否定もせず、責めることもなく、慰めることもなく、彼が何を思っているのかはわからない。滯はドクドクと鼓動が速くなるのを感じながら、体の横でグッとこぶしを握りしめる。

「でも……私、誠一のところへ行きます」

「こんな夜中に女の子ひとりで外出させられないよ」

「お願いします！ とても大事なことなんです！！」

勢いよく腰を折り曲げて頭を下げた。長い黒髪がさらりと落ちて廊下についたが、構うことなくそのままの姿勢を維持する。せっかく誠一のところへ行こうと決心したのだ。こんなところで出鼻を挫かれるわけにはいかない。

「僕が車を出そう」

「えっ？」

驚いて顔を上げると、悠人はくすっと笑って言い直す。

「彼の家まで送っていく」

「……いいんですか？」

「抜け出されても困るからね」

そう冗談めかすと、大きな手であやすように濡の頭をぽんぽんと叩いた。またしても濡の視界はぼやけていく。しかし、今度はひとしずくの涙も零すことなく、悠人を見つめたままにっこりと笑ってみせた。

橘家の大きな車が、誠一の住むアパートの前でゆっくりと停まった。あたりはすっかり夜の闇に包まれ、しんと静まりかえっている。濡は助手席から降りてドアを閉めると、開いたパワーウィンドウに手を掛けて運転席の悠人を覗き込んだ。

「朝まで戻るつもりはないので、師匠は先に帰ってもらえますか」

それは、誠一に許してもらえなくても簡単に引き下がらないという決意だった。まだどうすればいいか具体的に考えてはいないが、すぐに逃げたり頼ったりせず、自分の力で誠意を伝える努力をしなければならない。それが濡のつけるべきけじめである。

悠人は小さく頷いて「わかった」と答えた。

濡は少しほっとして表情を緩める。そもそも誠一のもとへ行かせることからして、彼としては認めたくなかつただろうが、それでも濡の意思を最大限に尊重してくれたのだ。どれだけ感謝してもしきれない。

「師匠、ありがとうございます。それと……いろいろごめんなさい」

「遥はああ言っていたけど、僕はまだ濡を諦めてないよ。彼に振られたら僕のところにおいで。もし濡が望んでくれるのなら、遥がなんと言おうと受け入れるつもりだから」

悠人は真面目な顔で言う。その思いは嬉しかった。けれど――

「もう甘えないうって決めました」

「……そうだったね」

絞り出すように答えた彼の、その寂しげな笑みに胸を衝かれる。それでも、濡は未練を断ち切るようにペコリとお辞儀をすると、長い黒髪をなびかせながらアパートの階段へ向かって駆け出した。

ピンポン――。

震える人差し指で扉のボタンを押すと、その向こうでチャイムが鳴った。

何度も訪れているが、今このときほど緊張を感じたことはない。心臓が捻り潰されそうなくらい収縮し、口から飛び出しそうなくらい大きく跳ねる。遠くに聞こえる誠一の返事、急いで近づいてくる足音――ややあってガチャリと重い金属音がし、無機質な扉がゆっくりと開いた。

「濡……」

「あ、あの……ごめんなさい！」

戸惑いの滲んだ彼の表情にビクリとしつつも、濡は勢いをつけて頭を下げた。

「私のことで誠一が刑事を辞めさせられたって聞いて……それと、あの……武蔵とのことも本当にごめんなさいっ！！私、取り返しの付かないことをしたけど、許してもらえるなら、これからも誠一と付き合っていきたい。勝手かもしれないけど、やっぱり誠一が好きなの……」

腰を折ったまま謝罪の言葉を口にする。目眩がしてきたが、それでもひたすらに頭を下げ続

けた。

「漣、顔を上げて」

ほとんど感情の窺えない平坦な声。

漣は痛いくらいに暴れる鼓動を抱えつつ、そろりそろりと顔を上げていく。どんな言葉で非難されたとしても、すべてを拒絶されたとしても、ここから逃げるわけにはいかない。小刻みに瞼を震わせながら、息を詰めて正面の誠一に目を向けた。すると――。

「おかえり、漣」

ふっと柔らかく微笑まれたかと思うと、漣の体は優しい温もりに包まれた。微かに鼻をくすぐるシャンプーの匂いが懐かしい。胸は止めようもなく高鳴っていく。しかし、本当に受け入れてもらえるのだろうか。拭いきれない不安を感じながら、おそるおそる広い背中に手をまわす。

「ただいま、誠一……」

その途端、まるで逃がすまいとするかのように、抱きしめる誠一の腕に力がこもった。

漣は目頭が熱くなった。黒いタートルネックの首もとに顔を埋めると、背中にまわした手で縋りつくようにパーカーを握る。堪えきれずに口から漏れるくぐもった嗚咽が、冷たい蛍光灯の下で響いた。

### 33. 切れない縁

---

ザー——。

滯は窓の外から聞こえる激しい雨音で目を覚ました。すでに本降りのようなようだ。傘を持ってきていないことを思い出し、どうしようかとぼんやり考えながら、気怠さの残る体でもぞもぞと寝返りを打つ。そのとき、隣の誠一がいないことに気がついた。首を伸ばして仄明かりの部屋を見回すと、少し離れたところに、背を向けて立っている彼の姿を見つけた。白のTシャツとトランクスだけを身につけ、左耳に携帯電話を当てている。

「わかりました……はい……はい、失礼します」

彼は小さく頷きながらそう応答して、電話を切った。

「誠一？」

「あ、悪い……うるさかったな」

「ううん、雨の音で目が覚めたから」

「そうか」

誠一はふっと小さく笑って携帯電話を机に置き、再びベッドを軋ませながら潜り込んできた。二人で寝るには少し狭く、自然と寄り添う形になる。滯は間近で彼の横顔を見つめて小首を傾げた。

「お仕事の電話？」

「いや、楠さんにね。滯が来てることを連絡しておいた」

「師匠なら知ってるよ。師匠に送ってもらったんだもん」

「そうみたいだな」

誠一は遠くを見やっただまま目を細める。その何かを思い出しているような表情を見ていると、悠人とどんな話をしたのか気になってしまうが、そこまで踏み込むことは躊躇われて黙り込む。ぼんやり考え込んでいるうちに、彼はふいと表情を緩ませてこちらに視線を流してきた。

「楠さん、朝になったら戻ってくるように、迎えがいるなら電話してって言ってたよ」

「うん……」

誠一のもとへ向かうことを許してくれたうえ、その行き帰りまで気遣ってくれる優しさに、滯はあらためて胸を衝かれて泣きそうになった。悠人のその大きな愛情に報いるために、何より受け入れてくれた誠一のために、もう二度と裏切るようなことはしないと心に決める。

「誠一……ありがと……」

ありったけの気持ちをその声に乗せて感謝を伝えると、誠一は横目を向けたまま柔らかく微笑んだ。しかし、すぐに天井へ視線を戻して表情を硬くする。

「遥に言われてたんだ」

「えっ？」

「滯は、長いあいだ異常な状況下に置かれていたせいで、正常な判断が出来ない状態になってるかもしれない。だから、難しいかもしれないけど滯の過ちを許してほしい、不誠実な態度を取っても見捨てないでほしい、って」

遥一一。

滯は焼けるように胸が熱くなるのを感じて目を潤ませた。遥はやはり一番の味方だった。間違っていることは厳しく叱責するが、決して見放さず、必要なときには確実に手を差し伸べてくれる。遥だけでなく悠人もそうだ。自分がいかにまわりの人たちに大事にされてきたか、そして甘えてきたか、わかっているようでわかっていなかったのかもしれない。

「覚悟はしていたつもりだった。けど、二人を見てたら自信がなくなって」

誠一はそう言い、自嘲の笑みを浮かべる。

「そもそも、滯のような子が俺なんかと付き合っていること自体が不思議だった。まだ若いから一時の気の迷いかもしれない、いつか釣り合いの取れた人に気持ちが移るかもしれない——ずっと心のどこかでそんな不安を抱えていた。だから、とうとう来るべきときが来たと思ったんだ」

「そんな……」

付き合い始めの頃はそんなことを言っていたが、未だに拘泥しているなんて知らなかった。私には誠一しかいない、気の迷いなんかじゃなく本気で好きなの——そう訴えたかったが、過ちを犯したあとではあまりにも白々しい。唇を引き結び、布団の中でギュッと握った手を胸元に抱き込む。

「滯を責める気持ちはなかったよ。ただ、そうはいってもつらくて苦しかった。二人の間には到底割り込めないように感じて……並んでいる姿が似合いすぎてたつてのものもあるけど、二人の間に何か絆らしきものが見えた気がしてね。武蔵がどんな人間かはよく知らないけど、会ってみるとそんなに悪い奴ではなさそうだったし、何より滯に対する気持ちは本物だと思った。それに……滯も……」

誠一は苦しげに眉を寄せて言い淀んだ。気持ちを鎮めるように瞼を閉じると、今度は明確に言葉を紡ぐ。

「滯はあいつが好きだったんだ。だから、あいつに抱かれたんだろう？」

遠慮のない直接的な問いかけに、滯は小さく息を飲んだ。

「……ごめんなさい」

一方だけでも否定できれば良かったのだが、ここまできて嘘をつくわけにはいかない。彼も下手なごまかしなど望んでいないだろう。そして、何より滯自身が彼に対して正直でいたかった。

誠一は、そっと滯に振り向いた。

「それでも滯は俺を選んでくれた、そう思っているんだよな？ 自惚れてもいいんだよな？」

まじろぎもせず瞳を見つめ、静かながらも熱っぽく懇願するように訴えかける。彼がここまで言ってくれたことに、彼にここまで言わせてしまったことに、滯は罪悪感で心が抉られるように感じた。涙を浮かべて小さく頷き、彼のあたたかい胸元にそっと額を寄せる。

「私、もう絶対に裏切らないから……」

誠一は何も言わず、優しくゆっくりと力を込めて抱きしめた。何ひとつ身につけていない滯の素肌に、Tシャツを通して彼の体温が伝わってくる。それだけで、大きく包み込まれるような安心感があった。

「こんなことを言うと、呆れられるかもしれないけど……」

躊躇いがちな声が耳元に落とされる。

漣はきょとんとして顔を上げようとするが、瞬間、肩を押されてくるりと仰向けにされた。白いシーツの上に長い黒髪がさらりと広がり、体を起こした誠一に真上から覗き込まれる。その怖いくらい真剣な眼差しに、張り詰めた表情に、戸惑いながら目をぱちくりさせた。

「漣の体に残ってるあいつの痕跡を、全部消したい」

見つめ合った誠一の口が動く。

痕跡というのが何を指しているのかはよくわからない。それでも、彼の瞳にともされた情欲の炎を見れば、何を求めているのかはおおよその察しがつく。

「ん……誠一の気の済むようにして……」

漣は曖昧にはにかんだ。その唇に、誠一は触れるだけの口づけを落とし、ゆっくりと上体を起こしていった。布団が捲れ、薄明かりに照らされた漣の白い肌を、真顔でじっと食い入るように見下ろす。

「あ……の……？」

羞恥と困惑が緋い交ぜになり、漣は頬を上気させる。

やがて、誠一は微かな熱い吐息を落とすと、探るように指先を肌に這わせ、そっと覆い被さり胸元に顔を埋めてきた。互いに無我夢中で求め合った先刻とは違い、緩やかに、しかし確実に刻み付けるような愛撫が施される。その狂おしくもじれったい感覚に翻弄され、小さな唇から色めいた声が零れ始めるまで、さほど時間はかからなかった。

まだ日の昇らない早朝。

深夜から激しく降り続いていた雨は、いつのまにか雪へと変わっていた。不気味なほどの静けさの中、分厚いカーテンの引かれた書斎で、遥は執務机の前に立ち、そこに座する剛三と向かい合っていた。いつも傍に控えている秘書の悠人はいない。

「すまん、こんな早朝に呼び出して」

「検査結果、届いたの？」

挨拶などどうでもいいと言わんばかりに、遥は単刀直入に本題を口にした。

剛三は渋い顔になり手元の薄いファイルに目を落とす。

「ああ……遥、おまえの推察どおりだった」

苦渋に満ちた声でそう言うと、気乗りしない様子で重々しくそのファイルを差し出した。しかし、遥の方は何の躊躇いもなく平然とした態度で受け取り、一枚ずつ捲りながらざっと目を通していく。

「漣や師匠にも話すよね？」

「そうせざるを得ないだろう」

剛三は椅子の背もたれに身を預けて、深く溜息を落とした。その眉間には縦皺が刻まれている。そんなめずらしく苦悩する祖父にちらりと目を向けたあと、遥は閉じたファイルを執務机に戻しながら尋ねる。

「橘の家はどうなるの？」

「どういう意味だ」

「僕は、橘の血を継いでいない」

口調は普段どおりの落ち着いたものだったが、声には僅かながら硬さが窺えた。彼自身にも張り詰めた気配が感じられる。しかし、剛三はふっと鼻から息を抜いたかと思うと、たいしたことではないかのようにあっけらかんと言いつつ。

「黙っておればわからんだろう」

「.....それでいいの？」

「後継者は、遙、おまえ以外に考えておらん」

「.....そう.....責任重大だね」

遙は感情のない面持ちで考え込むようにうつむき、ぽつりと独り言のように呟いた。そんな彼を眺めて、剛三は椅子にもたれたまま微かに口の端を上げる。しかし、その表情はすぐに重苦しいものに塗り替えられた。

再び、書斎は静寂に包まれた。窓の外で雪が降りしきる音まで聞こえてくるかのようだった。

朝になり、滯は一人で橘の家へ帰っていく。

さすがに恋人の家に悠人を呼びつけるのは気が引け、仕事へ向かう誠一とともに家を出て、地下鉄と電車を乗り継いで帰ることにしたのだ。ちらちらと白い粉雪が舞う薄曇りの中を、誠一に持たされた紺色の傘を差して歩く。素手の指先はかじかみ、吐く息も白い。だが、その冷たい空気を胸いっぱい吸い込むと、身も心もシャキッとしてとても心地がよかった。

屋敷の裏口に到着し、軒先で傘の雪を落として中に入る。そこには、いかにも不機嫌そうにむすっとした武蔵が、壁に寄りかかって滯を待ち構えていた。新しいシャツの開いた胸元からは、まっさらな白い包帯が覗いている。

「さっそく朝帰りかよ」

「いけない？」

滯は反抗的に言い返す。彼が動けるほど元気になったのは良かったが、誠一の家に行ったことを咎められる謂われはない。保護者には許可をもらったのだ。口をとがらせて男物の傘を隅に立てかけていると、武蔵はさらに嫌味たらしく追い打ちをかける。

「随分薄情だよな。重傷の俺をほっぽって彼氏のところにしけ込むとは」

そのことに関しては反論のしようがなかった。だからといって、こんな言われ方をされては詫げる気になれない。口を固く引き結び、下を向いたまま彼の前を通り過ぎようとする。が、不意にガシッと手を掴んで引き止められた。振り向くと、鮮やかな青の瞳が射抜くように見つめていた。

「続き、帰ってからって約束したよな」

熱を帯びた深みのある低音に、思わず胸が震える。滯は慌てて目を逸らせた。

「ごめん.....私、やっぱり誠一が好きだから」

「俺のことは好きじゃないっていうのかよ」

「誠一を裏切らないって、そう決めたから」

「そんな答えじゃ、納得いかないな」

武蔵は握りしめた濡の手を放そうとしなかった。逆に、気持ちを伝えるように力を込めてくる。どうにかしてその温もりから逃れなければと思ったが、だからといって力任せに振り払うようなことはしたくない。

「お願い、わかって……武蔵のこと嫌いになりたくないよ……」

今にも泣き出しそうに声を震わせる。身勝手な言い分だという自覚はあるが、濡にはそう懇願するしかなかった。いっそ嫌いになってしまえば楽なのかもしれないが、それではあまりにも寂しすぎるし、そもそも完全に嫌いになることなど出来そうにない。顔を暗く沈ませてうつむくと――。

「あんまり濡をいじめないでくれる？」

冷やかな声を響かせ、遥が牽制するように睨みをきかせながらやってきた。しかし、武蔵は少しも悪びれることなく堂々とした態度で言い返す。

「俺は自分の気持ちに素直になれって言ってるだけだ」

ドクリ、と濡の心臓は大きく蠢いた。それでも決して受け入れるわけにはいかない。もう二度と誠一を裏切ることにはしないと決めたのだ。武蔵にどんなことを言われたとしても、自分に求める気持ちがあったとしても――。

「濡、武蔵も、話があるから来てくれる？」

遥は踵を返しながらか無感情にそう言い、目で二人を呼んだ。濡はちょこんと小首を傾げて尋ねる。

「どこへ？」

「じいさんの書斎」

遥は端的にそれだけ答えてスタスタと歩き出した。しかし、二人がついてきていないことに気が付くと、非難するように眉を吊り上げて振り返る。濡は困惑しつつ隣の武蔵と目を見合わせた。今は言うとおりにするしかないと思い、彼とともに早足で遥の後を追っていった。

濡と武蔵は、遥に続いて書斎の打ち合わせ机についた。

篤史はメルローズの面倒を見ているということで不在だが、剛三と悠人はすでに席について三人の到着を待っていた。おそらく今後のことを話し合うのだろう。メルローズを取り戻すという目的は果たしたものの、警察庁や米国大使館とのことなど問題は山積しているのだ。

剛三は深く息をつく、めずらしく緊張した面持ちで切り出した。

「きのう、遥からある推測を聞かされた」

濡は眉をひそめる。予想外に出てきた遥の名前を不思議に思い、隣の彼を窺い見るが、いつものように素知らぬ顔をしているだけだった。何の話か見当がつかないということもあり、そこはかたない不安を感じて鼓動が速くなる。

剛三はさらに表情を険しくした。

「その推測が正しいかどうかを確かめるために、知り合いの研究者に無理を言って、早急にある検査をやってもらった。これが、今朝の早くに届いたその結果報告書だ」

そう言い、手元の薄いファイルを掲げて見せると、何も言わず悠人にすっと差し出した。彼は一瞬だけ怪訝な表情を見せたが、すぐに従順な秘書の顔になり、受け取ったファイルを開いていく。何枚かめくるうちに彼の目は大きく見開かれた。顔面はみるみるうちに血の気をなくし、ページを繰る手も微かに震え始める。

「何が、書いてあるんですか？」

滯は胸に手を当て、上擦った声でおそろおそろ尋ねた。

悠人はファイルに目を落としたまま答える。

「これは、親子鑑定だ」

「え……誰の、です？」

心のざわめきが次第に大きくなる。ファイルを閉じた悠人の瞳が、ゆっくりと滯を捉えた。

「滯、遥……君たち二人は、美咲とは親子関係にあるが、大地とは親子関係にない」

「……………」

声は聞こえていたがすぐには内容を把握できなかった。言葉が頭の中をぐるぐると回る。しかし、まるで理解を拒否しているかのように、一向に思考の中に入ってこない。胸元に置いた手が自然と強く握られていく。そんな滯を目にして悠人は苦しげに眉を寄せるが、それでも役割を全うするように言葉を継ぐ。

「二人の生物学上の父親は、武蔵だ」

私の、父親——？

小刻みに震えながら正面の武蔵に目を向ける。彼は口を半開きにしたまま啞然とし、電池が切れたように動きを止めていた。滯と目が合うとハッと我にかえり、ダン、と机を叩きつけて隣の悠人に訴える。

「ちょっと待て！俺には心当たりなんてないぞ！！」

「学生証をなくしたときだよ」

答えたのは遥だった。勢いよく振り向いた武蔵にも動じることなく、冷静に言い添える。

「なくしたっていうか、母さんが抜き取ったんだと思うけど」

「いや、でも俺は……そんな記憶なんて、何も……」

武蔵は目を泳がせながらそう言い淀み、じわりと額に汗を滲ませた。

遥はまるで他人事のように淡々と説明を続ける。

「僕の推測だけど、異種族間の交配実験みたいなものだと思う。母さんたちは武蔵を攫って体外受精でもしたんじゃないかな。武蔵に記憶がないってことは眠らされていたのかも。別に起きている必要はないわけだし。記憶を消したって考えるよりはよっぽど現実的だよな」

誰も何も口を挟まなかった。静まりかえった書斎に、遥の声だけが冷たく響く。

「僕と滯は生まれてからもずっと経過を観察されてきた。もしかすると、他に何らかの実験を施されていた可能性もある。僕たちの体がどうなっているのか、何も問題がないのか、母さんたちに訊かないとわからない」

混乱したまま、滯は机に手をつけて弾かれるように立ち上がる。

「わっ……私たちは、実験のためだけに生まれてきたの？ 実験の道具にすぎないってこと？！」

「母さんたちからすればそういうことになるだろうね」

遥は事も無げにさらりと肯定した。

武蔵は顔をしかめ、前髪をぐしゃりと掴む。

「くそっ、人の命を何だと思ってやがるんだ！あのマッドサイエンティストめ！！」

彼の言うとおりに、母親だと思っていた人は狂った科学者でしかなかったのかもしれない。家族だと思っていた繋がりや実験体を繋ぎ止める檻にすぎなかったのかもしれない。美咲の凜とした微笑、大地の屈託のない声、二人の仲睦まじい姿――次々と脳裏に浮かんで消える。すべては絵空事だったのか。濡の顔からすうっと血の気が引き、汗が滲んできた。

「落ち着くんだ、濡」

悠人が身を乗り出して手を取ろうとする。が、濡はビクリとして反射的に一歩下がった。足がパイプ椅子にぶつかりガシャンと音を立てる。心臓はドクドクと壊れんばかりに暴れ出し、頭の中はぐちゃぐちゃに掻き混ぜられ、今にも吐きそうなくらい気持ちが悪い。胸元のセーターを引っ掴んで奥歯を食いしばる。

「私は、何のために、生まれ、て……き……」

「濡！！」

あたりの音は遠くに聞こえ、視界も暗く狭くなっていく。直後、ぷつりと意識が途切れた。遥が崩れ落ちる体をすんでのところで抱き留め、駆け寄った悠人と武蔵が必死になって呼びかける。だが、その声が濡の意識に届くことはなかった。

## 34. 積み重ねた17年

---

「う……ん……」

ぼんやりと開いた漆黒の目に、幼いころから見慣れたアイボリーの天井が映った。ベッドの感触も馴染んだものである。ここは自分の部屋だ――滯がおぼろげながらそう認識した直後、必死な顔をした武蔵がいきなり視界に飛び込んできた。

「滯、目が覚めたか？ 気分はどうだ？！」

「えっ……と……」

思考が混濁していて、何がどうなっているのかわからない。しかし――。

「過労と心労が重なってるみたいだから、しばらく寝てれば良くなるだろうって、さっき診てくれた田辺先生が言った。今朝、じいさんの書斎で何があったか覚えてる？」

「あ……」

少し離れたところに座っていた遥に問いかけられ、ようやく記憶がよみがえってきた。帰るなり剛三に呼びつけられて書斎に集まり、そこで出生に関する調査結果を聞かされたのだ。遥の口ぶりから察するに、残念ながら夢というわけではなかったらしい。

「おい、今、それを言うのかよ」

「隠したって何にもならないよ」

武蔵と遥が淡々とした口調ながらも言い合いをしている。その様子を、滯はベッドに横たわったままぼんやりと眺めていた。自分と遥は実験のためだけに作られた存在で、血の繋がった本当の父親はこの武蔵なのだ――今は少し落ち着いて考えられる。しかし、やはりすんなりと受け入れられるものではない。

「ねえ、遥……どうしてそんなに冷静でいられるの？」

「僕が僕であることに変わりはないから」

何か上手くはぐらかされたような気がした。納得がいかず顔を曇らせると、彼はちらりと一瞥してから言葉を繋ぐ。

「遺伝子だけじゃなく生まれてからの17年が、今ここにいる僕たちを作っている。母さんたちの思惑とは無関係なところで、多くの人と関わり合ってきた記憶が、僕や滯という存在を支えてくれている。もし、幼いころに知ったらもっとショックを受けただろうけど、今の僕は自分の存在意義を見失ったりしないよ」

「よく、わからないよ……」

滯は天井に視線を移し、目を細めた。

「僕たちが実験のためだけに作られた存在だとしても、実験のためだけに生きてきたわけじゃないってこと。師匠が僕たちに武術を教えてたのも、じいさんがファントムをやらせてたのも、綾乃や富田や真子と友達になったのも、滯が誠一と付き合っているのも、どれも母さんの実験とは無関係だったはずだよ。それさえ理解していれば、必要以上に悲観しなくてすむと思う」

「うん……」

完全に理解したわけでも納得したわけでもないが、それでも少しだけ気持ちが楽になった気が

した。これまでの人生すべてを否定する必要はないのだ。家族という枠組みは嘘で塗り固められていたかもしれないが、実験を知らなかった人たちとの交流に嘘はなかったはずである。

「まあ、僕も異種族交配の影響については心配だし、父親があんなのって知ってガッカリしたけど」

「おいっ、あんなのって！ ガッカリって！！」

不満を露わにして突っかかる武蔵に、遙は面倒くさそうに言葉を返す。

「武蔵としては良かったんじゃない？ 濡のこと、これでもう諦めがついたよね」

「おまえはバカか。そう簡単に気持ちの整理なんてつけられるかよ。俺は本気だったんだぞ。いきなり俺の子供でしたとか言われたところで、何の実感もないし、気持ちが変わることも萎えることもない。俺にとっては娘なんかじゃない、好きな女なんだよ」

武蔵は眉を寄せ、堰を切ったように真情を吐露する。

「でも、親子だって事実は変わらない」

「子供さえ作らなきゃ問題ないだろう」

「こっ……？！」

濡はギョツとして素っ頓狂な声を上げながら、布団から跳ね起きた。

「ちょっと武蔵、落ち着いてよ！！」

「俺は十分すぎるくらい落ち着いてる」

そう言った彼の青い双眸には、隠しきれない情熱が滾っていた。あの夜に見たものと同じ――思わず逃げるように目を伏せると、血色のない手でぎゅっと掛け布団のシーツを掴む。

「私、武蔵の気持ちには応えられない。武蔵の気持ちは変わらないかもしれないけど、私は血の繋がった父親とは絶対に無理だから……たとえ誠一と上手くいかなかったとしても、武蔵と恋愛とかそういうのはもう考えられない……ごめんなさい……」

たとえ恋愛に近い感情がくすぶっていたとしても、濡の理性はそれを拒絶する。もう二度と受け入れることはないだろう。あえてそのことを口にしたのは、自分自身のためにも、彼のためにも、明確にしておいた方がいいと考えたからだ。

武蔵は静かにうつむき、その顔に仄暗い陰を落とした。

「好きでいることくらい、許してくれよな」

「それは……ん……」

許すも許さないも自分が決めるべきことではないが、そう突き放してしまうのは、弱ったところに追い討ちを掛けるようで抵抗を感じる。だからといって許すと言うのも憚られる。濡は困惑し、視線を落としたまま曖昧に頷くことしか出来なかった。

コンコン、と部屋の扉が小さくノックされた。

「あ、どうぞ」

濡は淀んだ空気を払拭するように声を張る。すぐに、そろりと扉が開いて悠人が顔を覗かせた。ベッドで上体を起こしている濡を目にすると、ほっと小さく息をついて中に入ってくる。

「濡、もう目を覚ましてたのか」

「はい……って、え？ 誠一？！」

悠人に続いて部屋に入ってきたのは誠一だった。今朝、仕事に出かけたときと同じスーツを身につけたまま、少々きまり悪そうにごまかし笑いを浮かべている。まだ午前中なので仕事が終わったわけではないだろう。

「どうしてここに？」

「仕事でね、楠長官と溝端さんに同行して橘会長に話を聞きに来たんだよ。そうしたら濡が倒れたなんて言うだろう？ 動揺してたら楠長官が見舞いに行ってくいって……. 仕事だし、一応は遠慮したんだけど」

そう言いながら、遥に譲られた椅子をベッドに寄せて座った。

「話を聞きに……って、きのうのこと？」

「ああ、複数の目撃者に車のナンバーごと通報されてるし、騒ぎを起こしたのが橘家の人間だってことは露見している。大使館で誰と会っていたかも察しはついているみたいだな」

楠長官は美咲のことを聞きに来たに違いない。剛三がどこまで話すのかはわからないが、事実を知ったところで、彼女を手中に収めるのは困難なはずである。相手は世界随一の大国なのだ。日本が交渉したところで切り札がなければどうにもならない。当然ながら、いかに財閥会長といえど剛三個人では話にもならない――。

「濡、どうした？ 大丈夫か？」

ふと、誠一が心配そうに覗き込んできた。別に体調が悪いわけでも気分が悪いわけでもないが、うつむいたまま黙り込んでいたので誤解されてしまったのだろうか。濡は安心させるように精一杯の笑顔を見せる。

「ちょっと考えごとをしてただけ」

「それならいいんだけど……」

その言葉とは裏腹に、彼の表情はいまだ曇ったままである。

「ねえ、ちょっと心配しすぎじゃない？」

「倒れたばかりなんだから当然だろう」

「それだって疲れが出ただけなんだからね」

「まあ、きのうは大変な一日だったからな」

「うん……」

声のトーンが少し落ちた。美咲を説得することは出来なかったが、メルローズは取り戻し、みんな生きて帰って来られたのだから、結果としてはそれほど悪くないだろう。決して無意味ではなかったのだと、間違っただけではなかったのだと、そう自分に言い聞かせる。

「おいっ！」

その刺々しい声につられて顔を上げると、武蔵が身を乗り出し、誠一の鼻先に人差し指を突きつけていた。

「他人事みたいに言ってんじゃねえよ。わかってるのか？ 自覚してるのか？ 濡が倒れたのはおまえのせいでもあるんだぜ。昨晚、濡が大変な一日だったことを知っていながら、本能のまま朝まで寝かせなかったんだろうが」

「あ、いや、寝かせなかったってことは……少くくは……」

誠一はしどろもどろで弁明しかけたが、途中で開き直ったように反撃に転じる。

「それについては悪かったと思うが、君だって人のことを言えるのか？ ここに戻ってくる前日、大変な一日になるとわかっていながら一晩中ずっと濡を放しもしないで……あんなに痕が残るくらい……だいたい、あれさえなければ俺だってあんなには……」

「ほう、全部俺のせいだって言いたいのか？」

武蔵は僅かに顎を持ち上げ、冷笑を浮かべながらひどく挑発的に問いかける。だが、誠一もいつになく強気で一步も引こうとしない。二人の視線は、激しく火花を散らしてぶつかり合った。

「もうやめてよ、二人とも！」

濡は顔を真っ赤にして声を上げた。これではまるで二人に抱かれたことが過労の原因であるかのような。確かにこの二日間はあまり寝ておらず、影響がまったくなかったとは云えないが、だからといってこんなことを言い争われてはたまらない。

「濡、こんな男と別れた方が身のためだぞ」

「君にそんなことを言う権利はないだろう」

「それが、残念なことにあるんだなあ」

武蔵は芝居がかった抑揚をつけてそう言うと、不敵に口角を上げる。

「なんてったって、俺は……」

「待って！」

彼が何を言おうとしているか察し、濡は慌てて制止した。悠人に視線を移して指示を求める。

「師匠、あのこと……」

「南野さんになら話しても構わないよ。もちろん濡さえ良ければだけど」

誠一はすでにおおよその内情を把握している。今さら隠し立てするつもりはないが、当事者である濡の意思は尊重する、というのが橘家としての判断のようだ。濡としては、積極的に話したいわけではないが、彼に対しては正直でいようと決めた。だから――緊張が高まるのを感じながら小さく頷くと、怪訝に眉をひそめている誠一に向き直り、ゆっくりと語りかけるように言葉を紡ぐ。

「あのね、私自身もまだ全然実感がなくて、ちょっと信じがたいんだけど……その……そこにいる武蔵がね、私と遥の本当の父親だったらしいの」

「……は？」

「私たちは、橘美咲と武蔵の子供ってこと」

「……………」

誠一はだらしなく口を半開きにしてぽかんとしていた。しかし、濡の話した内容を咀嚼するにつれてその顔は怒りに染められていき、ついには弾かれるように武蔵の胸ぐらに掴みかかった。

「君は橘美咲さんにも手を出していたのか！」

「?!」

濡はようやく自分の言葉足らずに気がついた。そうじゃなくて、と慌てて声を上げようとするものの、どう説明をすればいいのかわからない。考えがまとまらずおろおろしていると、武蔵は

溜息をつき、軽く顎を上げて後ろに視線を流した。

「遥、おまえが説明してくれ」

「そうだね」

遥も呆れたように溜息を落とすと、その場に立ったまま事務的に説明を始めた。DNA親子鑑定の結果に始まり、異種族交配の実験ではという推測まで、落ち着いた口調で流れるように述べていく。しかし、それを聞いている誠一の表情は、徐々に陰しさを増していった。

「あ、あのね、誠一……無理しなくてもいいからね……」

滯は掛け布団の縁をギュッと縋るように握りつつ、おずおずと切り出した。誠一に怪訝な目を向けられ、鼓動が速くなるのを感じながらも、それに答えるように冷静を装い言葉を継ぐ。

「こんなのが父親だなんて嫌だろうし」

「おい、こんなのって何だよ」

「それに、異種族交配の影響がどうなるか……」

武蔵の抗議には取り合わず話を進める。この異種族交配の影響が最も深刻な問題だろう。滯たちの体に何が起こるのか、あるいは何も起こらないのか、おそらく前例がないため誰にもわからない。美咲に聞けばある程度のことは判明するだろうが、今まで問題がなかったとしても、今後ともそうだという保証はどこにもない。そんな面倒な相手とあえて付き合い続ける義務はないし、離れていっても仕方がないと思う。しかし――。

「俺はとっくに腹を括ってるよ」

誠一はいつもの優しい笑顔を見せてそう言った。彼がどこまでこの事態を理解しているかはわからない。いつかは滯のもとから去ってしまうかもしれない。それでも、少なくとも今の滯には、彼の与えてくれたその言葉が大きな慰めとなった。

「ごめんね……ありがと……」

目の奥がじわりと熱くなるのを感じながら、精一杯の笑顔を返す。どちらからともなく伸ばされた手は、互いの温もりを確かめ合うように、互いの気持ちを伝え合うように、掛け布団の上でそっと優しく重ねられた。

「親の許しも得ないで勝手に盛り上がるなよ」

「都合のいいときだけ父親ぶらないでよ」

あからさまにふて腐れて身勝手な文句を言う武蔵に、滯は目元を拭いながら言い返した。隣では誠一が困惑まじりに苦笑している。それでも、自分たちが親子だという事実から不自然に目を逸らすより、このくらい軽く言い合える方がいいのかもしれない――奇妙だが悪くない空気を感じながら、頭の片隅でそんなことを考えていた。

不意にノックもなく扉が開いたかと思うと、篤史が何の躊躇いもなく入ってきた。左手には小型のノートパソコンを携えている。ベッドで体を起こしている滯をちらりと一瞥すると、さして興味なさそうに言葉を落とす。

「何だ、もう起きてたのか」

「ちょっと、無断でヒトの部屋に入ってこないでよ」

「おまえじゃなくて武蔵さんに用があるんだよ」

口をとがらせる濡をさらりと受け流し、ノートパソコンを掲げながら武蔵の方へ向かう。

「頼まれてたもの、一通り作ってみた」

「お、早かったな、さすが天才ハッカー」

「それほど難しいものじゃないからな」

武蔵の賛辞にも、篤史が浮かれることはなかった。ノートパソコンを開いてベッドに置く。

「急いで作ったから、見た目や使い勝手にはあまり手を掛けてないけど、時間が許せば少しずつ改良していくつもりだ。要望があれば遠慮なく言ってほしい」

「了解」

武蔵はそう答えて小さな画面を覗き込んだ。誠一、遙、悠人の三人が後ろから取り囲むように集まり、濡もベッドの上で四つん這いになって首を伸ばす。そこには橘家付近の地図が表示され、そのほぼ中央に赤と緑の点が重なって打たれていた。

「緑がこのパソコンの位置で、赤がメルローズのいるところだ」

「両方ともウチだね」

ああ、と篤史は素っ気なく肯定しながら、トラックパッドに指を滑らせて操作する。すると地図が滑らかに拡大され、緑の点は不動のまま、赤の点だけが斜め上に離れていった。ただし、地図上の位置としては変わっていないようだ。

「この上下で地図の縮尺を変えられる。さすがに屋敷の見取り図までは表示されないし、ここまで拡大するとわかりづらいと思うけど、赤の位置は俺の部屋のすぐ隣になっている。そこが今現在メルローズの寝かされている客室で、武蔵さんにも今日からそっちに移ってもらおうと……あ、メルローズと同部屋でいいですよ？」

「ああ、その方が助かる」

客室は基本的に一人用だが、二人でも十分すぎるくらいの広さがあるので問題はない。彼女にとっては親戚である武蔵と一緒にの方が安心できるだろうし、武蔵も彼女を目に見えるところに置いた方が安心できるだろう。

「発信機はメルローズの足首に取り付けてある。防水になってるから風呂もそのまま大丈夫だ。あと、このパソコンと発信機が100メートル以上離れたとき、あるいは発信機が探知できなくなったとき、このパソコンで警告音を鳴らすようにしてある。ただし、シャットダウン時やスリープ中は作動しない」

「わかった」

武蔵は真剣に頷いた。

そのとき、どこからか小さく振動するような音が聞こえた。ノートパソコンを覗き込んでいた誠一が体を起こすと、スーツの内ポケットから震える携帯電話を取り出し、背面ディスプレイにちらりと目を落とす。すぐにその場から離れながら、二つ折りの電話をさっと開いて耳に当てた。

「はい、南野です……もう目は覚ましていますし、特に心配はないと思います……いえ、戻ります……はい……申し訳ありません……はい、伝えておきます……」

口調と内容から察するに、相手は一緒にこの屋敷へ来ている楠長官と溝端のどちらかだろう。最後に「失礼します」と言い置いて通話を切ると、背中を向けたまま小さく吐息を落とし、携帯電話を懐にしまいつつ濡たちの方へ戻ってきた。

「楠長官から。仕事はいいから濡についてろって言われた。あと濡にお大事にって」

「あ、うん……」

楠長官が何を考えているのかわからず、濡は曖昧に目を伏せる。一応、今現在は美咲を巡って橘家とは敵対関係にあるはずだ。仕事に関しては非情な人だと思っていたが、本来は思いやりのある人なのだろうか。それとも何らかの計略や底意があるのだろうか。親切心を疑うようなことはしたくないのだが――。

「僕は剛三さんのところに戻るよ」

「あ、はい」

悠人は軽く手を挙げると、振り向きもせず急ぎ足でそそくさと部屋を出ていった。楠長官の名前が出たことと関係しているのかわからないが、その後ろ姿からは若干の焦りが見てとれる。彼らの中に剛三を置いてきたことが心配になったのかもしれない。

今度は、遥が体を起こした。

「僕も自分の部屋に戻る。宿題、まだ残ってるから」

「あっ、私、一ヶ月も学校休んじゃってる……」

「落ち着いたら進んだところまで教えてあげるよ」

「うん、ありがと」

濡はベッドの上に座ったまま、部屋を出ていく彼をにっこりと手を振って見送った。遥が教えてくれるのは心強い。しかし、事件前の日常を早く取り戻したいと切望する一方で、それどころではないという矛盾した思いも抱えており、今はまだ学校に復帰する心持ちにはなれなかった。

「俺はメシ食ってくるかな」

篤史はそう言って、欠伸をしながら大きく伸びをする。

「きのうの夜から作業に没頭してたせいで、寝てないし食ってないしへロへロだぜ。メシ食ったあとはしばらく部屋で寝るつもりだけど、武蔵さん、そのことで疑問があったらいつでも訊きにきてくれていいから」

「感謝する」

武蔵はノートパソコンに片手を置いて振り返り、気怠そうに出ていく篤史にそう声を掛けた。部屋の扉が閉まると、パイプ椅子に座ってノートパソコンを膝に載せ、無言でトラックパッドに指を滑らせ始める。

「武蔵はまだ部屋に戻らないの？」

「おまえらを二人きりにするかよ」

武蔵さえいなくなれば二人きりになれる。せっかくだから二人きりになりたい――その魂胆はすっかり見透かされていたようだ。せめてもう少し離れてくれればいいのだが、誠一のすぐ隣にいるので気になって仕方がない。濡は口をとがらせる。

「邪魔なんだけど」

「邪魔してるからな」

「はあ?!」

完全な嫌がらせだ。思わずカッと頭に血を上らせる滯を、誠一は苦笑しながら宥める。

「あんまり怒っているとまた倒れるぞ。もう少し寝てた方がいいんじゃないか？」

「せっかく誠一と一緒にいられるのに、寝ちゃうなんてもったいないよ……」

「滯が元気になったら一日中でも付き合っただけよ」

その言葉とともに、ベッドに寝かされて布団を掛けられるものの、ついあれこれ考えてしまって眠れそうもない。この二日間であまりに様々なことが起こりすぎて、まだ自分の中で消化しきれていないのだ。ベッドに横になったまま、顔だけをそろりと誠一の方に向ける。

「ねえ、誠一はお父さまに会ったりしてるの？」

「大地さんなら、ときどき取り調べしてるよ」

「元気そう？」

「ああ、橘財閥の人間だからそんなに悪い扱いはしていないはずだし、実際とても元気そうにしているよ。囚われの身なのにそんなことを感じさせないくらい明るくて、こっちが調子を狂わされるくらいだ」

「お父さまらしい」

滯はくすっと笑みを零したあと、少し真面目な顔になる。

「あのね、今度、私たちの出生についていろいろ訊いてきてほしいんだけど」

「あー……彼の取り調べは二人きりってわけじゃないんだ。録画録音もされているから秘密の話はできそうにない。滯の頼みを聞いてやりたいのは山々だけど……ごめんな、役に立てなくて……」

「ううん、それなら仕方ないよ」

そう言いながらも、心のどこかで無意識に安堵している自分がいた。覚悟をしていなかったわけではないが、臆する気持ちまではそう簡単に拭いきれない。しかし、いつかは訊かなければならないときが来るだろう。大地と美咲が隠していた真実と思惑を――。

「滯にとっての父親は、今でも橘大地さんなのか？」

「……わからない……どうすればいいのか……」

気遣わしげに切り出された誠一の問いかけに、滯はそっと目を細めた。思い返してみると、大地にはほとんど父親らしいことをしてもらった覚えがない。それは、我が子と認められていなかった証左なのかもしれない。彼のことを父親として慕うのは迷惑でしかなかったのだろうか。そもそも、どうして父親として慕っていたのかもわからなくなってきた。

「あのな、滯」

武蔵がノートパソコンから顔を上げ、静かに切り出した。

「良くも悪くも、家族ってのは簡単に切れるものじゃない。いくら絶縁して家族じゃないと思っても、心の奥深くでは呪いのように縛られている。それは血の繋がりによるものじゃなく、家族として過ごしてきた時間によるものだ。おまえは17年も橘大地を父親だと思ってきたんだからな。向こうがどうであれ、滯の方はそこから逃れられはしない。下手に拒絶しても歪みが生じるだ

けだ」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「あるがまま受け入れるしかない」

「よくわからないよ……」

天井を見つめたまま、漣は消え入りそうな声で答えた。武蔵は少し考えてから続ける。

「父親だと思いたい気持ちと思えない気持ち、どちらも否定するなってことだ」

「そう、だね……」

彼の言いたいことは何となくわかったが、結局、大地を父親と思うべきかどうかは曖昧なままである。いつか決断を下さねばならないときが来るかもしれないのに。だが、どういう決断を下してもその心の有り様は必要だろう。漣は彼の言葉をそっと胸に刻み、目を閉じた。

「武蔵さん！」

ようやくとうとうと眠りかけていたところで、バンッと扉が開き、篤史が勢いよく部屋に飛び込んできた。彼らしくない慌てぶりに面食らったものの、またしてもノックがなかったことに気付き、漣はベッドから体を起こしながら口をとがらせる。

「もうっ、ノックしてってあれほど……」

そう言いかけたが、彼の様子を目にして息を飲んだ。

どこからか全力で走ってきたらしく、額に大粒の汗を滲ませて荒い息を吐いているが、その顔は今にも倒れそうなくらい青ざめている。そのうえ、武蔵をまっすぐに見つめる眼差しには、ひどく思い詰めたものが感じられた。おもむろに彼の口から重い声が落とされる。

「メルローズが、どこにもいない」

「何っ?!」

武蔵はとっさに手元のノートパソコンを覗き込む。

だが、最初に見たときと変わることなく、赤と緑の点は中央にほぼ重なって表示されていた。その矛盾が何を意味するのか漣にはわからない。ただ、メルローズがいなくなったという事実だけでも、大変な事態であることを察するには十分だった。

## 35. 疑心暗鬼

メルローズの部屋には誰もいなかった。

ベッドにははっきりと使用された痕跡が残されている。いや、荒らされているといった方が近いかもしれない。敷き布団はベッドから大きく斜めにずれ、その上に掛け布団が乱雑に投げ置かれたようになっていた。小さな女の子がひとりでやったとするには些か無理があるだろう。

「発信機はこのすぐ近くにある」

ベッド脇まで来て足を止めた武蔵は、手に載せたノートパソコンを覗き込みながら言った。限界まで拡大された地図の中央付近に、赤と緑の点がほぼ重なって表示されている。つまり、そこからごく近いところに発信機があるということだ。

篤史は掛け布団をばさりと捲り上げた。その下にあった細い金属製の輪を目にすると、小さく舌打ちして顔をしかめる。それがメルローズの足首につけてあった発信機らしい。壊れてはいない。どうやら腕時計のように簡単に着脱できる仕組みのようだ。

「メルローズがひとりでやったとは考えづらい。そもそも外し方を教えてないしな。外したいときは俺か武蔵さんに声を掛けるように言ってあったし、危ないからひとりで部屋を出るなとも言っていた。メルローズもちゃんと理解してくれていた」

「シーツがなくなってる」

遙がベッドにそっと手を置いて言う。確かに、敷き布団に掛けられているはずの白いシーツが見当たらない。単に外れているだけということではなさそうだ。

誠一は腕を組んだ。

「だとすると、考えられるのは……」

「正面玄関の防犯カメラに映っていた」

剛三は被せるようにそう言い、開かれたままの出入口から険しい表情をして入ってきた。彼に付き従ってきた悠人が薄っぺらい紙を差し出す。それは防犯カメラの映像をプリントアウトしたものだ。白い布にくるまれたメルローズと思しきものを横抱きにする溝端と、そのすぐ前を歩く楠長官の姿がはっきりと映っている。滯が声もなくその紙に目を落としていると、後ろから誠一や武蔵が首を伸ばしてきた。

「こんなに堂々と……正面玄関から……」

「あやつら、隠す気はなかったようだな」

啞然と言葉を落とす誠一に、剛三は忌々しげに応じる。

武蔵はノートパソコンを閉じて眉をひそめた。

「だが、こいつらはなぜメルローズの居場所を知っていた？ この屋敷にいることは見当がついていたかもしれないが、何十も部屋があるのに、迷った形跡もなくごく短時間でメルローズを拉致している」

それを聞いて、皆、難しい顔で考え込んだ。

楠長官たちが剛三の書斎に通されたあと、悠人と誠一が滯の部屋に行き、残った剛三が楠長官たちに対応して、しばらく後に悠人が戻り、楠長官たちが書斎をあとにする――というのがおお

よその流れである。この間にどうやってメルローズの居場所を掴んだのだろうか。剛三がひとりで対応しているときに口を滑らせたと考えるのが自然だが、百戦錬磨の彼がそのような軽率な失敗をするとは思えないし、たとえ失敗したとしてもそれに気付かないことはありえない。

武蔵は射るような視線を誠一に向けた。

「裏切り者がいるとしか思えない」

あたりの空気が一瞬にして凍りつく。はっきりと名前は口にしていないが、誠一を疑っていることは明らかだ。濡は狼狽える彼を庇うように飛び出し、キッと眉を吊り上げて武蔵の前に立ちはだかった。

「誠一は絶対に裏切ったりしない！」

「こいつ、公安の人間だろう」

「好きでそうなったんじゃないよ！」

「そんなことはわかっている」

武蔵は目つきを鋭くすると、再び、濡から誠一へと視線を移した。

「濡を救出する手がかりを掴むためだったんだらう？ だが、濡は無事に戻ってきた。今となってはもう橘の味方をする理由はないはずだぜ。公安に職務として命じられれば従うんじゃないかなあ、見るからに真面目そうな南野誠一さん？」

その疑惑は、彼への反発心からきているものではなく、彼の置かれた状況に基づく推測のようだ。しかしながら、濡はそれが見当違いであると確信している。そんなことをすれば濡が悲しむことくらい、彼にはわかっているはずだから――。

「メルローズのことは誓って誰にも話していない」

誠一は誠実なまなざしを返して断言する。しかし、武蔵が疑いの姿勢を崩すことはなかった。

「それをどう証明する？」

「メルローズがどこにいるかは、さっき志賀君が話していたときに初めて知った。それ以降はずっと君たちと一緒にいたんだから、誰かに教える機会なんてなかったらう」

彼の言葉に嘘がないことはわかっているはずだが、それでも武蔵は納得しなかった。

「濡の部屋にいたとき、上司と電話で何か話をしていたな」

「メルローズのことは話していない。君も聞いていたはずだ」

「暗号で伝えた可能性もある」

もはや言いがかりとしか思えなかった。あれだけの言葉がどんな暗号になり得るというのだろう。これまで分別のある態度を見せていた誠一も、さすがに不快感を隠しきれずに眉を寄せる。

。

「こんなことを言いたくないが、状況的に疑うべき人物は他にもいる」

「……篤史か」

武蔵は戸惑いがちに顔をしかめて答え、部屋の隅に立つ篤史に視線を流した。つられて他の皆も振り向く。不安と疑惑の入り混じった視線を浴びた彼は、無表情のまま眉だけをピクリと動かした。

「確かに、きのうからずっとメルローズについていたのは俺だし、メルローズの部屋を決めたの

も俺だし、メルローズの行方不明に気付いたのも俺だ。あいつらの側に寝返っていたとしたら、さぞ簡単に手引きできただろうな」

淡々とそう言った彼の双眸に、ふと強い光が宿る。

「でも俺はやっていない。証明は出来ないから、信じる信じないは勝手にしてくれ。ただ、状況っていうなら悠人さんも疑える。メルローズの部屋は悠人さんと相談して決めだし、何より悠人さんの父親はあの楠長官だ」

「やめてよ！！」

濡は堪えきれず、体の横でこぶしを握って声を上げた。

「みんな仲間だよ？誰も裏切ったりなんてしないんだからっ！！」

根拠は何もない。それでも、みんなのことを信じたいし信じてほしい。互いに疑心暗鬼になっていては、これまで築いた信頼さえも崩れてしまう。それこそ楠長官の思うつぼではないか。悠人も、誠一も、きまり悪そうな顔でうつむいた。

「ねえ」

不意にぶっきらぼうな声上がる。振り向くと、遥が思案顔で小首を傾げていた。

「誠一に盗聴器が仕掛けられてた、ってことはない？」

「……えっ？」

濡がそう聞き返した隣で、誠一はハッと息を飲んだ。まるで心当たりがあるかのように。

剛三の顔つきが鋭く険しいものになる。

「皆、書齋に来い」

そう言うや否や、くるりと踵を返して一人足早に部屋を出て行き、悠人はすぐにあとを追って飛び出した。武蔵は逃げるなよと言わんばかりの視線を送り、誠一も睨み返して応じ、険悪な雰囲気のまま二人並んで書齋へと歩き出す。濡はその後ろ姿を困惑ぎみに見つめながら、遥たちとともにあとに続いた。

「このボールペンだな」

篤史は、発見器が反応を示した誠一の胸元を探り、胸ポケットのボールペンに目星をつける。手際よく中を開けて確認すると、そこにはボールペンの機能とは無関係の精密機械が仕掛けられていた。盗聴器である。

正面の執務机で座っている剛三は、瞬ぎもせず誠一を見つめる。

「君のものか？」

「いえ、行きの車中で溝端さんが貸してくれたものです。楠長官に言いつけられてメモをとろうとしたとき、手帳の鉛筆が見当たらなかったんで……使い終わったあとすぐに返そうとしたんですが、また使うかもしれないから持っている……」

誠一はうつむいて眉を寄せた。

話を聞く限り、楠長官と溝端に利用されたとしか思えない。鉛筆がなくなっていたのも偶然ではないだろう。つまり、ここにいる誰も裏切っていないということだ。しかし、武蔵だけはいまだに渋い顔で誠一を睨んでいる。

「本当は共謀してたんじゃないだろうな」

「もう疑うのはやめてよ！」

滯は泣きそうになりながら腕を掴んで訴えるが、彼は困ったように眉をしかめただけで、固く唇を結んだまま何も答えようとしなかった。

誠一は真剣な面持ちになり、武蔵に向き直る。

「信じてもらうのは難しいかもしれないが、本当に盗聴器のことは知らなかったんだ。だが、メルローズが連れて行かれたのは俺の責任だ。もっと自分の立場を理解して警戒しておくべきだった。本当に心から申し訳なく思っている……」

「メルローズが無事に戻らない限り、許すとは言わないからな」

武蔵は斜めに目を伏せ、葛藤とやるせなさを滲ませてそう言い捨てた。メルローズの救出に何年も費やしてきたのだから、いくら真摯に謝られても簡単には許せないだろう。しかし、彼が本当に許せないのは彼自身なのではないか――思い詰めた横顔を見て、滯は何となくではあるがそんなふう感じていた。

「随分とふざけた真似をしてくれたな。我が屋敷から連れ去った少女を返してもらおう……とぼけるでない！ 防犯カメラに映っておったわ！……君らが少女を抱えて玄関から出て行くところだ……それで言い逃れられると思っておるのか！……待て！！」

剛三は舌打ちし、叩きつけるように受話器を戻す。

「あやつら、連れ去ったことからして認めるつもりはないようだ。防犯カメラに映っていたのは白い布だけだからな。あくまで状況証拠でしかなく決定的な証拠にはなりえん。まあ、証拠を掴んだところでメルローズを返してくれるとは思えんが」

眉間に皺を刻む剛三を、武蔵は執務机に片手を付いて覗き込んだ。

「おい、このまま引き下がるつもりじゃないだろうな？」

「ここまで虚仮にされて引き下がるわけなからう」

責任感とは別のところで剛三の闘志に火が付いた。漆黒の瞳には怖いぐらいの鋭い光が宿っている。こうなってはもはや誰にも止められない。もっとも、今回に限っては誰も止めはしないだろうが。

「私は警察庁に戻って話を聞いてきます」

誠一は意を決したように姿勢を正してそう告げた。しかし、それは敵の本拠地に一人で乗り込むようなものだ。公安は次第に手段を選ばなくなってきているのに――滯は顔を曇らせ、後ろから彼の袖をちょっと引っ張った。

「大丈夫、なの？」

「職場に戻るだけだよ」

誠一は安心させるように柔らかく答えてくれた。それでもあまり不安は拭えなかったが、行くなどとは言えない。滯にできるのはせいぜい無事を祈ることくらいだ。

「無理をするでないぞ」

剛三の言葉に、誠一はあらためて表情を引き締めると深々と礼をした。

悠人は一歩踏み出して思い詰めたように訴える。

「私も彼と一緒にいきます」

「おまえが行ってはややこしくなる」

逆上して楠長官の首を絞めたという前科がある以上、このような緊迫した状況では行かせられないだろう。以前の二の舞になりかねない。悠人自身もそのことを自覚しているのか、悔しげに歯噛みしつつも素直に引き下がった。

「手を貸してほしいときには連絡します」

誠一はうつむく悠人に視線を送りながらそう言うと、再び剛三に一礼し、今にも走り出しそうな勢いで書斎をあとにする。その背中には、濡たちの前では見せなかった怒りが滲み出ている気がした。

「お返しします」

誠一は執務机の前に立つと、胸ポケットから取り出したボールペンを楠長官の前に置いてそう言った。感情を見せないよう平静を装ってはいるものの、次第に速くなる鼓動までは制御しようもなく、知らず知らずのうちに顔が上気していく。対照的に、楠長官は眉ひとつ動かさずボールペンを一瞥した。

「それは溝端のものだろう」

「長官のご指示ですよね？」

先回りして尋ねると、彼は無言のまま口の端を上げた。誠一の手のひらが少し汗ばむ。

「メルローズをどこへやったのですか」

「何のことだね」

とぼけるその声には、どこか楽しむような声音が混じっていた。

誠一はカッと頭に血が上るのを感じながら、それでも必死に理性を保つ。

「あなたのしたことは誘拐です」

「誘拐？ 言うのなら窃盗だろう」

「.....どちらにしても犯罪です」

楠長官の発言は、メルローズを人として扱わないと宣言しているも同然だ。しかし、今は人間の定義について言い争っている場合ではない。それよりも、メルローズの救出方法を優先して考えるべきである。

「メルローズをどうするつもりですか」

「さあ、知らんな」

「橘美咲さんを手に入れるためですか」

恐怖心を胸の奥にしまい、揺さぶりを掛けるべく真正面からぶつかっていく。

ふっ、と楠長官の唇に笑みが浮かんだ。

「南野君、君のそういうところは気に入っているがね。残念ながら君の諫言を受け入れることはありえない。なぜなら私個人の意志ではなく、警察庁、ひいては国の意志なのだからな。私も駒の一つにすぎないということだよ」

以前も国の存亡に関わる事だと言っていた。長官ですら駒だと聞くと、相手がいかに途轍もないかを思い知らされ、ゾクリと背筋に冷たいものが走る。それでも手を引くつもりはない。何の罪もない幼い少女が実験体として攫われているのだから。

「橘大地の取り調べを許可願います」

「……良かろう」

楠長官が断らないだろうことはわかっていた。たとえ誠一から申し出なかったとしても、いずれ楠長官の方から命じられたに違いない。状況が大きく変わった今、橘美咲を手に入れるための新たな情報を、少しでも大地から引き出すために――。

「やあ、南野君、どうしたんだ？」

アクリル板の向こうで、橘大地がニコニコと人懐こく微笑んだ。

仕切られた両側にはそれぞれ警備担当がひとりずつ配置され、複数の監視カメラがアクリル板を挟む二人を捉えている。もちろん音声も録音されているだろう。しかし、橘側の情報の大部分が知られてしまった今、隠さなければならないことはそれほど多くない。

「きのう、滯さんが無事に戻ってきました」

「それにしても浮かない顔をしているね」

感情を表に出さないよう細心の注意を払ったつもりなのに、彼には簡単に見抜かれてしまった。それでもあえて素知らぬ顔で受け流すと、当初の予定どおり淡々と話を進めていく。

「橘美咲さんの居場所もわかりました」

「ほう？」

「橘会長が先方と面会の約束を取り付け、滯さんが行ってきました。滯さんは帰ってくるように訴えたいのですが、残念ながら美咲さんは首を縦に振らなかったようです」

「だろうね」

大地はクスッと笑って相槌を打つだけで、美咲がどこにいたのか尋ねようとしなかった。今までの口ぶりから考えても知っていた可能性が高い。米国大使館で起こった一連の事件について、彼の見解を聞きたい気持ちはあったが、公安に知られない方がいいと判断して思いとどまる。

「ただ、メルローズは預かってきました」

「ここで話してもいいのか？」

「もうすでに公安に奪われてしまいましたので」

「は？ ……ったく、悠人は何をやってたんだか」

大地は呆れたように大きく溜息をついた。しかし、その口調も態度もいたって軽く、深刻な様子は見受けられない。誠一は微かな違和感を覚えつつも、そのことについては追及しなかった。

「何のために彼女を奪ったと考えますか？」

「実験体なんだから実験以外にないだろう」

「しかし、橘美咲さんは戻っていません」

「公安の目的はもとよりメルローズの方さ」

話が見えず、誠一は怪訝に眉をひそめた。大地は少し考えてから言葉を繋ぐ。

「公安は僕らに実験を強要していたが、次第に言いなりにならなくなった、ということは話したな？ 美咲を脅して実験を継続させることも考えてはいただろうが、最後の実験体であるメルローズさえ奪取すれば、たとえ美咲の協力がなくても実験を継続することはできる。研究の道筋はすでに美咲がつけているからね。まあ、僕としてはそう簡単にいくとは思ってないけど」

「では、どこかの研究機関に……？」

「さあ、そこまではわからないな。一時期、国立医療科学研究センターを間借りしていたことはあったけど、ずいぶん昔のことだし、かれこれ十数年ほどまったく接点を持っていない。少なくとも僕たちはね」

唐突に具体的な名称が出て、誠一は慌てて手帳を広げてメモを取る。しかしながら公安にも聞かれてしまった以上、そこにメルローズが拘束されていたとしても、すぐに別の場所へ移送される可能性が高いだろう。それでも貴重な手がかりであることには違いない。

「君は、なぜそんなに一生懸命なんだ？」

「えっ？」

思いもしなかったことを問われ、誠一は手帳を閉じながら顔を上げる。

「滯は恋人だから命懸けで取り戻したいと思うのも理解できる。だが、メルローズは君とはまったく無関係の存在じゃないか。こんな危険なことにわざわざ首を突っ込むこともないだろう。橘剛三に利用されているだけなのか？ 抜けるに抜けられなくなったのか？」

「それもありますが……人命を守るのは警察の務めですし……」

「いや、あの子は『人間』ではないだろう？」

嫌味でもなく、挑発でもなく、悪意でもなく、ただ単に事実を確認しただけのような口調。だからこそ、その言葉はなおさら誠一の胸に深く突き刺さった。メルローズは人間ではないと、人間以外の生物だと、大地は当然のように認識している。そして――。

「滯と遥のことも、そう思っているのですか」

「……なんだ、知っていたのか」

大地は目を見開いてそう言ったあと、小さくフツと笑った。

黒い手帳を握った誠一の手に力がこもる。

「今朝、親子鑑定であなたが父親ではないと判明しました。本当の父親は滯を攫った男です。彼はメルローズの叔父にあたる人物で、彼女を取り戻すためにこの国へ来たそうです。滯と遥のことは、彼の方も寝耳に水だったらしく動揺していました」

「へえ、それは不思議な縁だね」

その態度はまるきり他人事だった。ふざけるな、と怒鳴りたい衝動をグッと堪える。

「実験、だったんですね」

「そうだよ。研究を進めるために公安の提案を受け入れた。僕も美咲も反対はしなかったよ。研究者の多くは道徳心より探求心の方が勝っている。それでも通常は法律を犯さないよう自制するが、国家機関が促しているなら遠慮はいらない。命を弄ぶような実験は許せないかい？」

そう尋ねた大地の顔には微笑が浮かんでいた。ついに、誠一は糾弾の言葉を抑えられなくなった。

「生まれてくる子供がどんな気持ちになるか、考えなかったのですか」

「そもそも真実を話す気はなかったからね」

「異種族間交配による何らかの悪影響が出る可能性もあったんですよね」

「障害を持って生まれてくる子は大勢いるさ」

「自分の妻に他の男性との子供を身籠もらせるなんて常軌を逸してる」

「セックスしたわけじゃない。人工授精だよ」

何を訊いても彼は淀みなく答えを返す。そこからは罪悪感の欠片も感じられない。もし彼の本心だとすれば、理解しがたい思考である。むしろ理解などしたくない。彼に対する嫌悪感と拒絶感が沸々と湧き上がった。

「それでも、私なら絶対にさせません」

「ボーダーラインは人それぞれだろうな」

誠一から見れば、彼のボーダーラインは異常としか思えなかった。橘美咲が漣と遥を産んだのは16歳のときだと聞いている。たとえ本人が納得していたとしても、そんな年若い少女に、しかも自分の妻に、誰だかわからない男との人工授精をさせるなど、あらゆる意味で考えられることではない。

「漣と遥のことは……」

「ああ、人間かどうかはともかくとして、ちゃんと可愛いとは思っているよ。愛する美咲の遺伝子を継いでいるんだから当然だろう？ あまり良い父親ではなかったかもしれないが、それなりに可愛がってきたつもりだけだな。あの子たち、愛情が足りなかったとでも言っていたか？」

彼は少しも悪びれていない。

誠一は、腹立たしいというよりも、得体の知れない恐怖を覚えた。

「申し訳なさは感じていないんですか」

「漣も遥も生まれてきて良かったと思っているだろう。なのに、どうして申し訳なく感じなければならぬんだ。それこそ二人に対して失礼じゃないのか。君は、漣が生まれて良かったと思っていないのか？」

いくら漣と出会えたことに感謝していても、二人が生まれて良かったと思っても、それをここで認めてしまえば彼らの実験を肯定することになりかねない。大地の詭弁にすぎないとわかっている――。

「漣を見捨てるつもりか？」

「そんなことはしません！」

思わず、弾かれたように顔を上げて言い返す。

大地はにっこりと満足げに微笑んだ。

「じゃあ、これからも漣のことを大事にしてやってほしい。悠人にとられないよう気をつけるんだな。あいつ結構ずるくてしつこいぞ。まあ、僕としては悠人の方を応援してるんだけどね。長年尽くしてきたのにまったく報われてないし、中学生のときからずっと片思いばかりの可哀想なヤツだからな」

そう軽く笑いながら頬杖をつく、思い出したように付け加える。

「そうそう、ついでに遥も可愛がってくれるとありがたい。頭が良くてしっかりしているけど、そのせいか甘えることを知らない子でね。どうにも危なっかしくて心配なんだよ」

「.....わかりました」

父親面した彼には反発を覚えるが、言っていることは至極まともで、気持ちを鎮めて了承の返事をする。ずっと握り締めていた手帳を内ポケットにしまい、あらためてアクリル板の向こうの大地に目を向けた。

「今日はこれで失礼します。後日、また話をさせてください」

「南野君の取り調べなら大歓迎だよ。あ、そうだ悠人に伝えてくれるか」

そう言って悪戯っぽい笑みを浮かべた彼に、小さくちょいちょいと手招きをされる。どうやら内密にしたい話のようだが、いくら声をひそめてもマイクに拾われる可能性が高い。聞かれますよとやんわり断ったものの、わかってるからと笑顔で軽くいなされ、仕方なく穴の空いたアクリル板に耳を寄せる。そこに囁かれた言葉は、一連の出来事とは無関係に思える私的なことだった。しかも――。

「.....楠悠人さんに、ですか？」

「そう、楠悠人さんに」

「わかりました、伝えておきます」

ニコニコと微笑む大地に、誠一は事務的に一礼して立ち上がった。彼の思考はとても理解できそうにない。胸にわだかまる奇妙な思いを抱えたまま、振り返ることなく無機質な部屋をあとにする。その背後で、彼が僅かに口の端を上げたことには気付いていなかった。

## 36. 遠い約束

「南野さん、ビンゴだぜ」

剛三の書斎に足を踏み入れた誠一は、場違いなくらい弾んだ声に出迎えられた。

声の聞こえた打ち合わせスペースの方に目を向けると、篤史がパイプ椅子に座ったまま振り返り、グッと力強く親指を立てていた。篤史だけでなく、剛三、悠人、武蔵、漣、遥がそこに集まっており、中央の机には資料のようなものが大量に散らばっている。メルローズが連れ去られた一件について話をしていたのだろう。

誠一が橘家に戻ってきたのも、そのためである。

出来ることならもっと早くに来たかったが、さすがに定時前に帰るような真似はできない。ただ、大地の取り調べで掴んだいくつかの手がかりについては、すでに電話で報告しており、その情報をもとに篤史たちが調査を進めることになっていた。逸る気持ちを抑えながら、皆のいる打ち合わせスペースへと足を進めていく。

「では、やはり国立医療科学研究センターに？」

ビンゴというからにはそういうことだろう。空いていた篤史と遥の間のパイプ椅子に座りながら尋ねる。剛三と悠人はそろって真剣な面持ちで頷いた。それを受けて、篤史が散らばった紙を選び取りながら答える。

「今朝メルローズを攫ったあと、車はまっすぐ国立医療科学研究センターの方へ向かっている。主にNシステムの情報だから、実際にそこへ行ったかどうかまでは捉えられていないが、状況と合わせて考えるとほぼ間違いないだろうと思う」

誠一の前にいくつもの紙が無秩序に置かれていった。一枚の地図と複数の画像だ。それぞれ赤字で対になる番号が書き込まれている。地図上の番号は橘家付近から国立医療科学研究センター付近まで続き、それらに対応する番号の画像にはすべて同じ車が写っていた。その意味するところを理解して頷くと、悠人が補足を入れる。

「国立医療科学研究センターは昨年末に地下を改装し、新しいベッドや医療器具、実験設備などを一気に揃えている。おそらく、我々怪盗ファントムにメルローズを奪わせて、そちらに移すつもりで準備をしていたのだろう。大地の証言とも一致する」

公安の目的はもとよりメルローズの方さ——その発言が、誠一の脳裏にまざまざとよみがえる。美咲に実験を継続させるつもりでいるなら、新たに設備を整える必要はないはずだ。やはり美咲は切り捨てられたと考えるのが妥当である。

篤史が画像の車を指さしながら、言葉を継ぐ。

「で、同じ車がまた国立医療科学研究センターへ行って、警察庁に戻ってきた。ついさっきのことだ。多分、大地さんが医療科学研究センターの名前を出したから、大急ぎでメルローズを連れ帰ってきたんだろう。警察庁の方が断然安全だからな」

「せっかく、お父さまが教えてくれたのに……」

漣は落胆の吐息を落とすが、武蔵は僅かに口もとを上げる。

「いや、無駄じゃなかったぜ。警察庁にいると判明したのはそのおかげだからな。それに、メ

ルローズを警察庁に幽閉している限り、人体実験を進めることは出来ない。つまり、当面メルローズの無事は確保されたってことだ」

「でも、いつまでもこのままじゃないよね」

遙は頬杖をつき、大人たちに視線を送りつつ問いかけた。

剛三は顔つきを険しくして重々しく頷く。

「国立医療科学研究センターのセキュリティを強化するか、他の研究施設に変更するか、あるいは警察庁内部に設備を整えて実験を進めるか。あやつらが取り得る方法はそのあたりだろうな」

挙げられた三つの中で、最も可能性が高いのは他の研究施設への変更ではないかと思う。セキュリティを強化するにしても限度があるし、警察庁内部で実験というのはあまりにも危険すぎる。どのような実験を行うつもりかは知らないが、高エネルギーを取り扱う以上、失敗すれば大爆発が起こるかもしれないのだから――。

「南野さん」

誠一はその声で現実に戻される。顔を上げると、真剣な眼差しで見つめる悠人がいた。

「メルローズが警察庁内のどこにいるか、探せませんか」

「探してはみまずけど……自分にはほとんど何の権限もありませんし、協力を頼める仲間もいないので、見つけれられる可能性は低いと思います。いまだに橘大地さんの拘留場所さえ把握できていませんし……あ、そういえば」

瞬間、まわりの皆が一斉に振り向いた。誠一はビクリとして少し上体を引く。

「あっ、いえ、メルローズの話とは全然関係ないんですけど、大地さんから伝言を預かっていたことを思い出しまして……その、楠さんへの……」

「大地から、僕に？」

悠人は見当がつかないとばかりに眉をひそめた。

誠一は小さく頷いたあと、あたりに目を配りつつ声を低める。

「でも、ここではちょっと……」

「構わないから言ってくれ」

そう強い口調で促されても踏ん切りは付かなかった。どういう意味があるのかは知らないが、みんなの前で言うべきことだとは思えない。聞いたら後悔するのではないだろうか――そんな心配をよそに、悠人はますます苛立ちを募らせて声を荒げる。

「変にコソコソすると、またみんな疑心暗鬼になるだろう」

「それは、そうかもしれませんが……」

「大地に言われて困るようなことは何もない」

躊躇う理由を理解しているとは思えないが、ここまで言われては仕方がない。静かに顔を上げると、集まっていた皆の視線を無視し、彼の瞳をじっと見つめて口を開く。

「それでは伝言をお伝えします。一言だけですが……愛してるよ、って……」

ピキッ、という音が聞こえそうなくらい、悠人は一瞬のうちに表情を凍りつかせた。無言のまま手元の紙をぐしゃりと握り潰す。誠一はビクリとして身をすくませたが、剛三はどっしりと腰を据えたまま、眉だけをひそめて訝しげに尋ねかける。

「どういう意味だ？」

「意味なんてあるわけじゃないじゃないですか。私をおもちゃ代わりに弄んで面白がっているだけです。大地は昔からそういうヤツでしたから……いつだって、人の気も知らないで……」

悠人はそう答えて奥歯をグッと食いしばった。しかし、剛三はその話を鵜呑みにしなかったようで、頭に血を上らせている悠人を刺激しないように、めずらしく遠回しな物言いで聞き出そうとする。

「この状況で言い出したのは、何か意味があると思うが」

「そんなものありませんよ。大地はただ……あっ……」

「どうした？」

悠人は遠い目をして動きを止めていた。ふと真剣な顔になると、ゆっくりと顎を引いて静かな声で言う。

「大地は、自分を救出しろと言っているんだ」

「……えっ？」

話の飛躍に、滯は目をぱちくりさせて戸惑いの声を上げる。

しかし、悠人は曇りのない眼差しで前を見据えていた。

「大地を警察庁から救出する」

「あの、どうしてそうなるんです？」

「遠い昔の約束だ」

彼の答えは要領を得なかったが、じっと物思いに耽るような表情を見ていると、それ以上は踏み込めない気持ちにさせられた。滯も口を半開きにしたまま何も訊こうとしない。しかし、悠人はその場の微妙な空気に気付いたのか、急に背筋を伸ばし、取り繕うように端然とした口調で言葉を継ぐ。

「大地が今になってそれを望むということは、何か重要な情報を掴んだのかもしれないし、美咲のことで何か話したいのかもしれない。メルローズ救出の手がかりになる可能性も大いにある。どういふつもりにしる救出して損はないはずだ」

後付けに感じたが、救出の理由としては十分に納得のいくもので、誰ひとりとして異議を唱えようとしなかった。ただ、武蔵だけは露骨に眉をひそめていた。救われるべきメルローズを放置したまま、元凶の一人である大地を救出するなど、彼からすれば不快に感じるのも当然である。それでも、メルローズ救出の突破口になるのなら、反対するわけにはいかないだろう。

悠人はやにわに覇気を取り戻し、迅速に仕切り始める。

「篤史、警察庁の見取り図は手に入れられるか？」

「やってみる」

「他にも使えそうな情報を出来るだけ集めてくれ」

「わかった」

篤史は手元に置いてあったノートパソコンを開き、キーボードを打ち始めた。

「南野さんもどうかご協力をお願いします」

「自分に出来ることなら協力はしますけど……」

誠一はそう答えながら、無意識にうつむいて顔を曇らせた。もっと慎重に事を進めた方が良いのではないか、いくら何でも無謀すぎるのではないか、次から次へと不安が波のように押し寄せてくる。そんな心中を見透かしたかのように、篤史は手を止めてニヤリと口の端を上げた。

「俺たちは怪盗ファントムだぜ？」

「……ですが、警察庁のセキュリティは美術館とは比べものになりません。それに、たとえ証拠も残さず完璧に救出できたとしても、犯人が橘の人間であることはほぼ特定されます。大地さんが拘留されていることさえ、私たち以外はほとんど誰も知りませんから」

彼らが数々の盗みを成功させてきたのは事実であり、それに関して誇りと自信をもっていることは理解できる。だが、今回の件についてはこれまでとあまりにも勝手が違うのだ。誠一の冷静な指摘に、篤史は虚をつかれてぱちくりと瞬きをしたが、剛三は少しも動じることなく鷹揚に言い返す。

「もともと不当に勾留されているのを返してもらっただけだ。もちろん奪おうとすれば阻止しに掛かるだろうが、我々の仕業とわかってでも逮捕はしないはずだ。あちらも表沙汰にしたいくないだろうしな」

表沙汰にしたいくないというのはその通りだが、それでもみすみす見逃してくれるとは思えない。正式な逮捕でなくても拘束する手段はいくらでもあるのだ。どちらにしる、付け入る理由を与えることになるのは間違いない。

「心配するな。警察をクビになったら雇ってやるわい」

「あ、いえ……それはもう覚悟していますから……」

誠一が案じているのは自分ひとりのことではなく、橘財閥への影響と、このことに関わる各人の身の安全である。公安も橘も次第に手段が強硬なものになってきており、このままでは取り返しの付かない事態になりかねない。しかし――。

「ならば、快く協力してくれるな」

「……はい」

態度も口調も決して威圧的ではないのだが、どこか抗いがたいもの感じ、胸につかえを残したままそう返事をしてしまう。こうなったからには腹を括るしかないだろう。念を押すような視線を送ってきた剛三に、今度は迷うことなくしっかりと頷いてみせた。

ノートパソコンの打鍵音が軽快なリズムを刻む。

まず最初の標的は警察庁内部の見取り図である。それを手に入れなければ計画を立てることさえできない。手伝う技量のない誠一たちは、篤史のハッキングをおとなしく待つしかなかった。時折、壁に当たったような難しい顔を見せていたが、悠人との会話からすると、今のところは大きな問題もなく進んでいるようだ。

「濡、君はもう部屋に戻って休んだ方がいい」

「そんな、まだ寝るには早いです」

悠人が腕時計を確認して退出を促すと、彼女は不服そうに抗議の声を上げた。まだ九時をまわ

ったばかりであり、確かに高校生が寝るには早い時間だ。しかし――。

「倒れたばかりなんだから無理をしては駄目だよ。田辺医師にも十分な休養をとるよう言われている。濡の気持ちもわかるけど、ここで無理したらまた倒れかねないからね。いつものように、計画については僕たちに任せておいて」

「……わかりました」

もうずいぶん前のように感じるが、濡が倒れたのは今朝のことである。次から次へと事が起こり、落ち着いて寝られる状況ではないかもしれないが、せめて体だけでも休めておくべきだろう。

ガシャリ、とパイプ椅子が派手な音を立てた。

「ねえ、誠一？」

「ん？」

濡は立ったその場で深くうなだれたまま、動きを止めていた。長い黒髪がカーテンのように降りているため、誠一から表情を窺うことはできない。ただ、落とされたその声はとても繊細で、心なしか震えているような気がした。

「私たちのことについて、お父さまと何か話した？」

「あ、ああ……」

「お父さま、何て言ってた？」

落ち着いて話そうとしているようだが、逸る気持ちは隠せていない。彼女の鼓動は早鐘のように打っているだろう。同様に、誠一の鼓動もうるさいくらいに騒いでいる。外野からの刺すような視線を受け流し、声が上擦らないよう慎重に答えを紡ぐ。

「二人とも可愛いと思ってるって、可愛がってきたつもりだって」

「そう……」

薄い唇から、消え入りそうな吐息まじりの相槌が零れた。安堵したような、落胆したような、信じ切れないような、不安定に揺らいだ複雑な感情がそこから見え隠れする。誠一はどんな言葉を掛ければいいのかわからず、そっと唇を引き結んだ。

「濡が会いたくないのなら、大地と顔を合わさずにすむよう配慮する」

不意に、悠人がそんな提案をする。

同じ家で顔を合わさないなど不自然ではあるが、それが現実的に可能な唯一の対処法かもしれない。しかし、濡はうつむいたまま首を横に振ると、彼に振り向いてニコッと小さく微笑んだ。

「大丈夫。むしろ会って話をしたいから」

「……わかった」

無理して明るく振る舞っていることは一目でわかった。だが、会って話をしたいというのも、彼女の本当の気持ちではないかと思う。悠人もそう感じたからこそ、気遣わしげに表情を曇らせながらも、否定の言葉を呑み込んだに違いない。

遥が静かに手をついて立ち上がった。

「行こう、濡」

「うん……」

そんな言葉を交わすと、当たり前のようにすっと濡の手を取って歩き出す。彼の彼女に対する無条件の庇護と、彼女の彼に対する絶対的な信頼が、二人の様子からありありと伝わってきた。それは、二人が過ごしてきた十七年の年月が培ってきたものである。

いつか、遥の役割を担えるときがくるのだろうか――。

手を引かれて書斎をあとにする彼女を見送りながら、誠一はそんなことを考えた。疼くような胸の痛みは、その難しさを自覚しているからかもしれない。それでも、諦めるという弱腰の選択をするつもりはなかった。

二つの足音は次第に遠ざかっていく。

打ち合わせ机の人間は誰も口を開くことなく、じっと耳を澄ましてそれを確認していた。やがて、聞こえるのが微かな空調音だけになると、武蔵は腕を組んでパイプ椅子にもたれかかり、誠一にゆっくりと険しい視線を流して問いかける。

「本当は、何て言っていた？」

「嘘は言っていない」

誠一はきっぱりと答える。

「愛する美咲の遺伝子を継いでいるから可愛いと思うのは当然だろう、と大地さんはそういう言い方をしていました。ただ、実験を行ったことへの後悔や、濡と遥への申し訳なさは、彼の言動や態度からは全く感じられません。二人のことを人間だとも認めていないようです」

父親がこのような考えであるなど濡には知られたくない。しかし、彼女が直に会って話をすることを望んでいる以上、無理に会わせないようにしても不信感を募らせるだけだ。これは濡自身が向き合うべき問題なのかもしれない。悠人も武蔵も同じ意見なのか、奥歯を食いしばりやるせなさを滲ませていた。

「おい」

武蔵は顔を上げ、その気持ちをぶつけるように剛三を睨めつける。

「大地ってのはおまえの息子なんだろう」

「ああ、そうだ」

剛三は悪びれもせず平然と返事をする。武蔵は顔をしかめて不快感を露わにした。それでも落ち着きを失うことなく、固く握ったこぶしを見せながら言う。

「戻ったら一発殴らせる」

「殺さん程度にな」

「加減はするつもりだ」

そんな会話をする二人の間で、悠人はずっと奥歯を食いしばり、両手を固く握り締めていた。激しい感情を押し殺そうとしているのが見てとれる。大地の友人であり、美咲の友人であり、濡と遥の親代わりであるからこそ、なおさら許し難いものを感じているのかもしれない。

「……殺すなよ」

不穏な様子に気付いた剛三は低い声でそう牽制する。しかし、聞こえているのかいないのか、悠人はうつむいたまま何の反応も返さない。ただ、机の上に置かれた両手だけが微かに震えて

いた。

## 37. 責任の所在

---

「橘大地さんの取り調べを許可願います」

誠一は、執務机で書類を眺める楠長官の前に立ち、すっと背筋を伸ばして声を張った。緊張で体がこわばっているが、それを悟られないよう強気な視線を送る。しかし、彼は無感情な一瞥をくれただけで、再び手元の書類に目を落とした。

「昨日の今日で何を取り調べる？」

「伝言の返事を預かっています」

昨日の取り調べは監視カメラでチェック済みなのだろう。伝言の内容も把握しているに違いない。それゆえ、詳しい説明をしなくともわかったようだ。顔を上げ、興味深げな瞳を見せつつニッと口角を上げる。

「悠人は何と saying いた？」

「ここでは答えられません」

「良からう、許可する」

楠長官は間髪入れずそう言うと、フツと鼻先で笑った。どうも彼にはこの事態を面白がっている節が見受けられる。国家の一大事であるかのように言っていたのに、あまりに警戒心が不足しているのではないだろうか――思わずそんな余計な心配をしつつ、あくまで堅苦しい表情を保ったまま一礼した。

誠一は金属製の扉を開け、見張りの男性とともに取調室に足を踏み入れた。

中央はアクリル板と壁で完全に仕切られ、その両側にパイプ椅子が置かれている。それ以外に目立ったものはない。冷たい床と壁だけに囲まれた無機質で殺風景な部屋だ。天井にひっそりと据え付けられた複数の監視カメラに、否応なく緊張感が高められていく。

見張りの男性が扉付近に立ち、誠一はアクリル板の前に置かれたパイプ椅子に座る。

正面にはすでに大地が座っていた。疲れた様子もなく、相変わらず人懐こい笑顔を見せている。下方は不透明な壁に阻まれているため、足下がどうなっているかはわからないが、少なくとも手は拘束されていないようだ。彼の後方には、いつものようにスーツを着た見張りの男性が待機していた。一見、ただ突っ立っているだけのようだが、その立ち姿も目配りも巧みで隙は窺えない。

「さっそく会えて嬉しいよ」

「楠悠人さんに伝えました」

「悠人は何て？」

その話題を切り出されることは予想の範囲内だったのだろう。大地はニコニコと笑みを浮かべたまま先を促す。誠一は内ポケットから手帳を取り出し、菜紐の挟まれているページを開いて目を落とした。

「……彼の言葉をそのまま伝えます」

静かにそう切り出すと、言いづらさを感じつつも努めて平坦に読み上げる。

「僕がいつまでもそんなくだらない挑発に乗ると思うなよ。おまえみたいな愚かな奴なんかもう愛想が尽きた。いい気になって自惚れるなよ馬鹿。今後、僕の前に姿を見せることがあったら殺してやる」

「これはまた辛辣だね」

どんな反応を見せるのか些か不安だったが、彼は愉快そうにくすくすと笑っていた。そして「この状況で言われてもね」と独り言のように小さく呟く。それを聞いて誠一は確信した。彼は「この状況」をわかっているのだと――。

「橘さん、体はなまっていますか？」

「ここに来るまではそれなりに運動もしてたんだけどね。ここではほとんど運動もさせてもらえないし、一ヶ月でかなりなまってしまったかな。でも、まあ後ろの男一人くらいなら問題ないよ」

「では、よろしくお願いします」

雑談としか思えない会話からの流れだったため、見張りの男性は理解が遅れたのかもしれない。ハッとして腰の無線機に手を伸ばそうとした瞬間、大地にすばやく手を捻り上げられ、為すすべもなく鳩尾にこぶしを叩き込まれていた。男性は小さく呻きを漏らして気を失い、冷たい床に崩れ落ちた。

「監視カメラは大丈夫なのか？」

「ダミーの映像を流しています」

そう答える誠一の隣で、こちら側の見張りがアクリル板に丸く大きな穴を開ける作業をしていた。彼は、あらかじめ本物の見張りとしり替わっていた悠人である。いつもと違って黒縁の伊達眼鏡をかけてはいるが、基本的に変装らしい変装はしておらず、長年の付き合いである大地なら一目でわかるだろう。

「身分証と無線機を奪え。服もそいつのに着替えろ」

悠人は手を止めることなく抑揚のない声で指示を出す。言われるまま、大地は倒れた男性のポケットから身分証を取り出し、腰にかけられた無線機を外すと、スーツの上下とシャツを脱がせてそれに着替えた。体格はほぼ同じくらいなので違和感はない。脱いだネルシャツとチノパンは無造作に床に投げ置かれている。

「これで手足と口を縛れ」

アクリル板に穴が開くと、悠人はそこから縄とハンカチを投げ込んで言った。

すぐに、大地は気絶している下着姿の男性を縛り始める。

「よくこんなところまで侵入できたな」

「そちら側は嚴重だが、こちら側は意外とザルだ」

「さすが」

そんな会話をしている間に、男性の両手両足はすっかり縛り終えられていた。口にも白いハンカチが噛ませられている。後ろ手で拘束されているので立ち上がるのも容易でなく、猿ぐつわをされているので助けを呼ぶのも困難だろう。

大地は満足げに両手の汚れをパンパンと叩き払うと、仕切りの両側についている幅30センチほ

どの台に飛び乗り、穴をくぐって誠一と悠人のいる側に降り立った。腰に手を当て、薄い微笑とともに煽るような視線を悠人に送る。

「話はあとだ」

悠人は挑発に乗らず、伊達眼鏡のブリッジを中指で押し上げて冷やかに言った。そして、金属製の重い扉を大きく開けると、身を潜めることなく堂々と取調室を出ていく。誠一と大地も、同じように背筋を伸ばして彼のあとに続いた。

警察庁を出たあと、誠一たち三人は補佐役の篤史と合流し、乗ってきた車で橘家へと向かった。その間、ハンドルを握った悠人はずっと難しい顔をしていた。大地は後部座席から何度か話しかけていたが、ろくに返事がなく、興味をなくしたかのように外に目を向けた。

重苦しい沈黙が続く。

その淀んだ空気に、誠一は今にも息が詰まりそうに感じた。助手席の篤史も居心地が悪そうにしている。だからといって二人とも場を和ませようとはせず、ただじっと無言で座っているだけだった。

「お父さま！！」

切羽詰まった高い声が玄関ホールの吹き抜けに響き渡る。振り向くと、濡が転げ落ちんばかりの勢いで大階段を駆け下りていた。恋人の誠一も、師匠の悠人も、今の彼女の双眸には映っていないようで、まっしぐらに父親の大地の方へ向かっている。しかし、彼から少し距離のあるところでその足を止めた。

「……………」

口を閉ざしたまま、物言いたげな顔をして胸元でぎゅっと両手を重ねる。しかし、大地がにっこりと微笑んで両手を左右に広げると、まごつきながらも一歩二歩と足を進め、やがて黒髪をしなやかになびかせて広い胸に飛び込んだ。その肩を、大地がそっと優しく抱こうとすると――。

「汚い手で触れるな」

敵意をむき出しにした低い声。濡のあとから大階段を静かに下りてきた武蔵が、今にも殴りかからんばかりに大地を睨んでいた。そのまま、困惑する濡の上腕を掴んで引き離そうとする。

「落ち着きましょう」

誠一は慌てて二人の間に割って入り、それぞれに目を向ける。

「とりあえず、今はまず書斎の方へ……」

武蔵は舌打ちしつつも掴んだ濡の腕から手を引いた。大地も少しおどけたように両手を挙げ、濡に触れていないことをアピールする。二人ともひとまず誠一の言葉を聞き入れてくれたのだろう。小さく安堵の息をつく、二人の間でおろおろする濡の背中を押して書斎へ促した。

書斎では、剛三と遥が打ち合わせスペースで待っていた。

警察庁から戻ってきた誠一、悠人、篤史、大地、そして玄関まで出迎えた濡、武蔵が、次々と書斎に入って打ち合わせ机の席につく。特に決められているわけではないが、上座からおおよそ

年齢順になっているのはいつものことである。

「まず、始めに」

張り詰めた空気の中、剛三がおもむろに口を切った。

「南野君、つい先ほど警察庁の楠長官から電話があった。今日は休暇扱いにしておくから、明日は必ず来るようにとのことだ。奪った身分証と無線機とスーツと眼鏡を忘れず持参しろとも言っておった」

誠一はゾクリと身震いする。

もちろんそれなりに覚悟はしていたつもりだが、配慮すら感じるこの対応は、考えが読めない分かって恐ろしい。正式に懲戒解雇の処分を下されるのだろうか。あるいは自己都合退職を勧められるのだろうか。もしくは、そのような生温いことではなく――。

「私は、どうなるんでしょうか……」

「そう怯えずとも取って食ったりはせんだろう。今のところ首を切るつもりもないようだぞ。どうやら、まだ君に利用価値があると思っていそうな口ぶりだったからな」

剛三の言葉はあまり慰めにはならなかった。もっとも、今は誰のどんな言葉も慰めにはなりえない。結局、謀反を起こした相手のもとへ行くのは自分なのだ。恐怖と不安が胸中で大きく渦巻くを感じながら、誠一はぎこちなく目を伏せた。

「それでは本題に入る」

剛三は張りのある重低音を響かせて仕切り直した。場の空気が引き締まる。ただ、大地だけはまるきり緊張感のない顔で、不思議そうにまわりの様子を覗いていた。その姿はどこか楽しんでいるようにも見えた。

「大地、おまえが警察庁からの救出を望んだ理由は何だ」

「理由？」

彼はそう聞き返しながら腕を組み、首を傾げる。

「理由と言われても、特にこれといって……いい加減あそこにいるのも飽きてきたし、そろそろ外に出たいと思っただけです。待遇はそれほど悪くなかったんですが、何もやることがないし、外を見ることもできないし、一ヶ月もいればうんざりしますよ」

「ふざけるな！！」

ダンッ、と武蔵は跳ねそうなくらい激しく机を叩きつけて立ち上がった。一瞬、大地は驚いたように大きく目を見開いたが、すぐにフツと鼻先で笑って言い返す。

「僕が何か期待を持たせるようなことを言ったか？」

「このタイミングで思わせぶりすぎるだろう！」

そう言いながらも、自分の分が悪いことに気付いたのか、武蔵は苦々しい顔で奥歯を食いしばった。確かに大地は何も言っていない。何らかの意図があるように言ったのは悠人であり、その何の根拠もない憶測話を、各自が勝手に納得しただけのことである。

「君はメルローズの叔父なんだって？」

「……滯と遥の父親でもある」

少し考えて、武蔵は低い声でそう答えた。僅かに眉をひそめて続ける。

「おまえは他人の命を何だと思ってるんだ。実験のために身勝手に子供を作って、殺して……大事な研究のためなら何をしても許されるっていうのか？ 命を弄んで神にでもなったつもりか？！」

「自分は可哀想な被害者です、って顔だな」

大地にせせら笑いながらそう言われ、武蔵の瞳にカッと激情の炎が燃えさかった。ガシャガシャン、とパイプ椅子を蹴飛ばして机に飛び乗り、向かいに座る大地の胸ぐらを掴み上げる。

「貴様……」

低く唸るように喉の奥から声を絞り出し、ギリギリと奥歯を軋ませる。白いシャツがミチミチとちぎれそうな音を立て始めた。それでも武蔵の力は緩まない。しかし、僅かに腰が浮いているように見えるものの、大地はいまだ余裕の薄笑いを浮かべていた。

「先に仕掛けたのは君たちの方じゃないか」

「……は？」

武蔵は訝しげに聞き返した。

大地の目はますます挑発的になる。

「たった一日で、何の罪もない人間を643人も殺しただろう。生き残ったのは僕と美咲だけだ。あの事件さえなければ、僕たちもこんなことに手を染めずに済んだ。人生を狂わされたのはこっちの方さ」

「あ……あれは……」

武蔵の狼狽ぶりは傍目にもわかるほどだった。大地の胸ぐらを掴む手も弱まる。

「知っていたから美咲を突き止められたんじゃないのか。小笠原フェリー事故の生き残りということで目をつけたんだろう？ 被害者面して、自分たちの先制攻撃のことはずっとみんなに黙ってたんだな」

「違う、あれは事故だった！」

「今さら信じろとでも？」

「……あれは俺の親戚が起こした暴発事故で、決しておまえらに攻撃を仕掛けたわけじゃない。被害が出ていたことさえ俺たちは知らなかった。この国に来てようやく知ったことだ。今まで黙っていたのは悪かったと思うが、どうか信じてほしい」

そう言いながら、背後の濡にちらりと縋るような目を向ける。しかし、彼女はまだ理解が追いついていないのか、混乱したような面持ちを見せていた。それでも彼女が疑うことはないだろう。誠一も、武蔵が嘘を言っているようには思えなかった。

大地は目を細め、胸ぐらを掴んでいた武蔵の手を払いのける。

「故意にしる、事故にしる、あの力が日本の、ひいては世界の脅威になることは間違いない。だから、あれが何なのか解明するしかなかったんだよ。そのために君の国の生体を実験に使わせてもらった。高々数十体。君たちが殺した人数に比べれば可愛いものだろう？」

見るものを凍てつかせる瞳、口角を吊り上げた残忍な表情――武蔵は小さく息をのみ、机に乗ったまま瞬ぎもせず固まった。誠一も、自分に向けられたものではないとわかっていたが、そ

の迫力に思わずゾクリと背筋を震わせた。

しかし、大地はすぐに人懐こい笑みを浮かべる。

「まあ、美咲は何だかんだいって優しいから、犠牲を出す方法は嫌だったみたいだけどね。僕としては、この国よりも世界よりも美咲の方が大事だし、美咲がやめたいといえれば反対なんてしないさ」

彼とは対照的に、まわりは硬い表情をしていた。

剛三は眉間に深い皺を刻む。

「美咲は、どうするつもりでいるのだ」

「長澤議員の金銭的支援を受け、アメリカで研究を続ける準備をしていました。もっとも、支援が完全に止められたうえ、準備半ばで追われることになり、予定は大幅に狂ってしまいましたけど。念のため、アメリカ側には緊急時の保護を要請していましたが、美咲はアメリカ大使館で丁重に保護されているはずですよ。準備が整い次第、アメリカに渡って研究を続けることになるでしょう。今後は非倫理的な実験は行わないつもりです。僕も、可能であればあちらで美咲を手伝いたいと思っています」

ガシャリ、と濡は音を立てて勢いよく立ち上がった。しかし、机に両手をついてうつむいたまま顔を上げようとしない。長い黒髪で覆い隠されているため表情は窺えなかったが、手は微かに震えているように見えた。

「……お母さまに、戻ってくるよう言ってくれませんか？」

「残念だけどアメリカ行きは美咲自身の意志だよ。僕も、それが美咲にとって最善だと思っている。どのみちもうこの国に美咲の居場所はない。国を敵にまわしてしまったんだからね」

「研究をやめればいいじゃないですか！」

悲痛な訴えに、一瞬、大地の瞳が小さく揺らいた。

「やめられないよ。もう引き返せないところまで来ているんだ。それに、あの暴れ狂う光の魔神を見てしまっては……あれが何なのか追究せずにはいられない。僕も、美咲も、取り憑かれていると自覚はしているけど、研究を続けることが間違っているとは思わない」

「私たちより研究が大事なの？」

「ごめんね」

その謝罪は肯定と同義である。彼の態度には少しも悪びれたところがなく、詫びる気持ちがあるようにも思えない。濡は泣きそうな顔で、崩れるようにパイプ椅子にガシャンと腰を下ろした。

「でも、美咲は君たちの幸せを心から願っている。だから君たちへの実験を打ち切ったんだよ。その代わりに、別の実験体を用意することになったけど」

「私たちの代わりに、メルローズ……」

「結局、美咲はその子たちを使った実験も拒むようになったんだけどね。もしかしたら、メルローズが美咲を正気に戻したのかもしれない。あの子に懐かれて非情でいることができなくなったんだ。メルローズを助けたいという美咲の気持ちに嘘はないよ。だから、絶対に信頼のおける人間に託した……はずだったんだけどね」

大地は苦笑しながら、両の手のひらを上に向けて肩をすくめる。

漣たちが美咲からメルローズを預かったとき、公安には渡すなと釘を刺されていたらしい。にもかかわらず、直後に奪われてしまったのだから、責められても嫌味を言われても返す言葉はない。皆、黙りこくったまま気まずそうな顔をしていた。特に、悠人は苦しさを堪えるように口を引き結んでいる。

「……大地と二人で話をさせてください」

彼は、真剣な眼差しを剛三に向けて言った。

剛三はまっすぐ視線を返して尋ねる。

「冷静でいられるか？」

「問題ありません」

「今の言葉を忘れるなよ」

重くのしかかるような低い声で念押しする。傍で聞いているだけの誠一でも威圧を感じるのだから、向けられた悠人のプレッシャーは相当なものだろう。よりいっそう表情を引き締めて剛三に一礼すると、すっと立ち上がり、無言のまま目線だけで大地を呼びつけた。大地はフッと口もとに笑みを浮かべ、扉へ歩き出した悠人のあとを追う。その足取りは、気のせいかどこか弾んでいるように見えた。

「武蔵」

悠人と大地が連れ立って書斎を出たあと、乗っていた机から椅子に戻った彼に、剛三はゆったりとした口調で呼びかけた。机の上で両手を組み合わせ、一分の隙もない鋭い眼差しを向けて尋ねかける。

「小笠原のフェリー事故は、本当に故意に起こしたものではないのだな」

「ああ……さっきも言ったが、あんなことになっていたことすら、この国に来るまで一切知らなかった。攻撃するつもりだったらもっと上手くやっている。あの事故で俺らの国の結界も一部破損して、完全修復するまでに何年もかかった。そのせいでおまえらに見つけれ、侵入まで許してしまったんだからな」

彼は淡々と答え、眉を寄せた。

その話が嘘だと思っているわけではないが、誠一は今ひとつ釈然としなかった。武蔵は日本ではないどこか別の国の人間で、そしてその国には結界というものが張っており、外部からは見つけることも立ち入ることもできない——ということだろうか。そんなことが現実には可能だとはにわかに信じがたい。

「武蔵の国ってどこなの？」

漣も同様の疑問を感じたのか、怪訝にそう尋ねた。

武蔵は目を伏せたまま淡々と答える。

「小笠原沖の海底一帯に広がっている。もっとも、自分たちの住んでいるところが海底だなんて、上層部のごく一部しか知らない機密事項だけだな。あくまで人為的なものだが、空もあって、昼も夜もあって、見た目は地上とあまり変わらない」

ますます信じがたい話だが、事実として受け入れるしかないのだろう。理論を聞かされてもきっと理解はできない。ただ、彼が嘘をついていないのであれば、そういう国が間違いなく存在するのだ。滯も混乱したように顔を曇らせていたが、それ以上の疑問を挟むことはなかった。

剛三は黙って彼の話を聞いたあと、再び口を開く。

「我々の国を攻撃するつもりはないのだな」

「俺たちは俺たちの国だけで十分幸せに暮らしてきた。外界との接触を徹底的に断ってきたし、外界の存在すら秘匿されているくらいだ。わざわざ攻撃を仕掛ける理由なんてどこにもない。俺が特例として国を出ることを認められたのは、連れ去られた子供たちを救出するためで、攻撃しようとも復讐しようとも考えていない」

「信じて良いのだな？」

「信じてほしい」

武蔵が鮮やかな青の瞳を向けて答えると、剛三はゆっくりと頷いた。

しかし、滯はまたしても泣きそうな顔でうつむいていた。そのことに気付いた武蔵は、彼女の震える白い頬に手を伸ばしかけたが、触れる寸前で動きを止めて眉を寄せる。直後、彼女にふと仄暗い自嘲の笑みが浮かんだ。

「私と遥の身代わりで、メルローズが酷い目に遭ったんだもんね……」

「違う、そうじゃない、そんな言い方はよせっ！」

武蔵は彷徨っていた手を勢いよく彼女の肩に置き、横から覗き込んだ。

「おまえには何の非も責任もないんだ、謝る必要なんてこれっぽっちもない。むしろ犠牲者だろう。責めるべきは橘美咲か橘大地か公安か……いや、そもそも俺の国での事故がすべての始まりか……」

「責任の所在についての議論は無意味だ」

剛三は厳しい口調でそう一蹴したあと、少し声を和らげて続ける。

「それよりもメルローズの救出に注力しよう。良いな？」

「……ああ」

武蔵は椅子に座り直してそう答え、滯も口をつぐんだままこくりと頷いた。せめてメルローズを救出しないことには、武蔵も、滯も、遥も、悠人も、篤史も、そして誠一も、自身を責め続けることになるだろう。もしかすると、剛三も責任を感じているのかもしれない。橘の当主として彼女を守れなかったことに、そして、美咲の父親として実験に気付けなかったことに――。

「いきさつはどうあれ、武蔵、君は我々の家族も同然だ」

「……そう思ってくれるのなら、心強い」

武蔵は視線を落としたままそう答えたが、言葉とは裏腹に、声には随分と力がないように感じられた。しかし、気を取り直したように表情を引き締めると、凜然と背筋を伸ばしてまっすぐに前を見据える。その瞳には、彼の強い決意と覚悟が滲んでいた。

## 38. 拒絶よりも残酷な

「何度目かな、ここへ来るのは」

先導する悠人に続いて、ぐるりと部屋を見まわしつつ足を踏み入れた大地は、やけに浮かれた声でそんな独り言を呟いた。楽しい話をするわけではないと承知しているはずだが、ニコニコと微笑み、まるでこの状況を楽しんでいるかのような素振りを見せる。

「同じ屋根の下で暮らしてるんだから、たまには呼んでくれよ」

「ほとんど帰って来ないくせに勝手なことを言うな」

悠人はまわりつく大地をぞんざいにあしらいながら、いつもの肘付き椅子に腰を下ろし、客人の彼にはすぐ隣のベッドに座るよう手振りで促した。悠人の部屋にはソファなど置いていないため、座ってもらうところはそこくらいしかない。大地は言われるまま素直に腰掛けたものの、いまだ部屋のあちこちを興味深げに観察していた。私的な空間を探られることに落ち着かないものを感じつつ、悠人は遠慮がちにその横顔を窺う。

「あんな昔の冗談を実行するとはな」

「おかげで自由の身になれた」

大地は振り向いてにっこりと微笑む。しかし、悠人はついに冷ややかに目を細めた。

「僕が忘れていたとは思わなかったのか」

「おまえは忘れないよ、一生ね」

彼の物言いはまるで確信しているかのようなようだった。いや、彼には実際に確信するだけの根拠があるのだ。それが何なのかは悠人自身にもわかっている。それでもほんの僅かに顔をしかめただけで、あえて素知らぬ態度で机に向かい、閉じてあったノートパソコンをゆっくりと開いた。

画面に表示された見取り図と照らし合わせながら、悠人は大地から警察庁での話を聞き出す。

彼の監禁されていたところには、ベッドが備え付けられた八畳ほどの居室に加え、自由に出入りできるユニットバスもあったらしい。しかし、手元の見取り図にはそのような部屋は存在しない。部屋の外の様子がわかればと思ったが、移動時は常に目隠しをされていたので、一度たりとも見ていないとのことだ。ただ、取調室に向かうときはエレベーターで上がる感覚があったという。そこからわかるのは、監禁部屋があるのは地下三階の取調室よりさらに下ということくらいである。

メルローズに関してもこれといった手がかりは得られなかった。姿を目にすることもなく、声を耳にすることもなく、またそれらしき物音も聞こえず、見張り以外の気配はまるで感じなかったという。おそらくかなり離れたところに留置されていたのだろう。そして、やはりその場所は見取り図に載っていないと思われる。なにせ、彼女は大地以上に慎重に扱わねばならない存在なのだから――。

「おまえ、嘘は言っていないだろうな？」

「この期に及んで嘘なんかつくかよ」

メルローズの居場所が思うように探れないもどかしさから、悠人は半ば八つ当たりのように言いがかりをつけたが、大地は気分を書した様子もなくさらりと受け流した。そして、地味な紺色のネクタイを緩めながら言い添える。

「ここでの話も、書齋での話も、すべて僕の知りうる範囲での事実さ」

疑っていたわけではなかった。警察庁での監禁の様子はもちろん、実験に至ったいきさつについても――少なくとも小笠原でフェリー事故に遭ったことは事実であり、その点には同情もするが、やはり彼の選択が正しかったと認めるわけにはいかない。

「……どうして相談してくれなかった」

「おまえに相談してどうにかなるか？」

「間違っただ道に進むのを止められた」

「随分な思い上がりだな」

大地は愉しげに鼻先でせせら笑う。

思い上がり、と言われても仕方がないのかもしれない。これまで一度たりとも忠告を聞き入れてもらえたことなどなかった。そして、ひどく腹立たしさを感じつつも仕方がないことだと諦めていた。グッと奥歯を噛みしめて眉を寄せると、椅子をまわし、ベッドに座っている彼と膝を突き合わせる。

「おまえの様子がおかしいことは気付いていたが、大事故に遭ったんだから無理もない、そっとしておくのがおまえのためだと思っていた。だが、こんなことになるなら無理にでも聞き出せば良かった。そうすれば……」

「公安に口外するなときつく言われてたんだ」

「おまえがそんなものに縛られるとは思えない」

大地はフッと笑う。

「どちらにしる誰にも言うつもりはなかったよ。あんなもの理解してもらえないからな。情けない話だが、あれからしばらくの間は、事故を思い出しては恐怖で身を震わせていた。あのときの僕に必要なのは美咲だけだった。美咲が身も心も捧げてくれたおかげで、僕の冷えた心はあたためられていったんだ」

「っ……！」

事故からしばらくして美咲と会ったとき、大地に助けられた命だから彼のために使いたい、という少し不穏当なことを口にしていた。そのときのやけに大人びた表情が脳裏に焼き付いている。おぼろげながらではあるが嫌な予感はしていた。なのに、どうしてあのとき何も行動を起こさなかったのか――。

「美咲をおまえから引き離すべきだった」

「僕が壊れたままでいればよかったと？」

「美咲はまだ子供だった」

「じゃあ、おまえが美咲の代わりになってくれた？」

大地は膝に手を置き、少し前屈みになってじっと悠人を見つめる。含みのある口調、挑発的な眼差し、引き上げられた口角――面白がっているだけだということはずぐにわかった。が、痛い

くらいに暴れる鼓動は止められず、彼の視線に絡め取られるように硬直したまま、何も言葉を返すことが出来ない。

「冗談だよ」

そう言って大地は人懐こい笑みを浮かべると、上体を起こして背筋を伸ばす。

「おまえにあのときの僕の傷は癒せない。それができるのは、同じ事故を経験し、同じ秘密を共有した美咲だけだ。別に美咲をないがしろにしたつもりはないよ。力尽くってわけじゃないし。まあ、最初に限っていえば多少強引だったのは否めないけどね。あのときの怯えた姿にはそられるものがあったな」

想像などしたくもないのに、意思に反して勝手にその光景を思い浮かべてしまう。脳裏に響く幼い美咲の泣き声に、涙に、悠人はギリと奥歯を軋ませる。大地が身勝手な人間であることは承知していたが、それでも美咲にだけは優しくしていると信じていた。なのに――。

「そのうえ、おまえは美咲を歪んだ研究の世界へ導いた」

「ああ、おまえには感謝しているよ」

話の繋がりがまるで見えない。問いかけるように眉を寄せると、大地は思わせぶりに微笑を浮かべる。

「小笠原のフェリー事故に遭ったときには、もう研究に取りかかる下地が出来ていた」

まさか、あのことを知って――。

悠人はゾクリと背筋を震わせて息をのんだ。杞憂でないことは、彼のしたり顔を見れば明らかだった。

「何も知らないと思っていたのか。おまえが毎週のように美咲を大学の図書館に連れて行ってたことなんて、当時からすべて把握していたよ。ま、正直あまり面白くはなかったけど、美咲も楽しそうにしていたし、知らないふりをしてやっていただけさ。おまえに出来るのはせいぜいその程度だろうしな」

もしかしたら美咲と出かけていることを気付かれているのでは、と感じたことは何度かあったが、ここまで何もかも突き止められているとは思わなかった。今さらながら驚きと困惑で言葉にならない。

「おまえは臆病なんだよ」

大地は少し後ろに両手をついて天井を見上げた。ベッドのスプリングがギギギと軋む。

「僕の実質的な婚約者である美咲を奪うことなんて出来なかった。彼女への想いが日ごとに膨らんでいくことを自覚していても、そして、彼女の気持ちが自分に傾きつつあることがわかっていても」

悠人の鼓動は次第に速さを増していく。喉はすでにカラカラだった。

「事故以前の僕は、美咲にとって『大好きなお兄ちゃん』でしかなかったからね。彼女が他の異性に恋心を抱いても責められはしない。もっとも、まだ愛とも恋ともつかない淡い想いだったみたいだけど。いずれにせよ、その相手がおまえで良かったと心から思ったよ」

僕で良かった――？

ふと猜疑と期待の緋い交ぜになった表情が浮かぶ。それはほんの一瞬だったはずだが、目ざと

い大地が見逃すことはなかった。フッと含みのある嗜虐的な笑みを零し、答えを口に上す。

「おまえなら、何の気兼ねもなく叩きのめせるからな」

「……………」

腹立たしく思うと同時に納得した。叩きのめせる理由を見つけてさぞや歓喜したことだろう。何かにつけて悠人の神経を逆なでし、その反応を見るのが、彼の悪趣味な楽しみごとの一つなのだ。

「まあ、そうする前に美咲を僕のものにしてしまったわけだけど。本気になったおまえとやり合ってみたい気持ちもあったよ。美咲の心がおまえに傾いても、美咲を奪い去ったとしても、僕はありとあらゆる手段を用いて奪い返すけどね」

悠人は無言のまま表情を硬くし、瞳だけを揺らした。

大地はニッと口の端を上げて言葉を継ぐ。

「なあ、どんな気持ちだった？ 僕と美咲のことを引きずりながら、僕たちの住む家に居候して、僕たちの父親に仕え、僕たちの子供を育てるって。僕はそんなおまえを見るのが楽しくて仕方なかったよ。おまえがどんな気持ちでいるのか考えると胸が躍った。まさか濡に向かうほどこじらせているとは思わなかったけど」

「違う、それは関係ない！」

悠人は身を乗り出して否定した。しかし、大地は涼しい顔で言い返す。

「無意識かもしれないが、無関係とは言えないだろう。濡が好きだという気持ちまでは疑っていないよ。ただ、僕と美咲の子供だから興味を持った、執着した、そして意地になって手に入れようとする——違うか？ あ、別におまえと濡のことを反対しているわけじゃないからな。おまえなら濡を大切にしてくれるだろうし、おまえもようやく少し報われるだろうし」

相変わらず勝手なことばかり言いやがって——悠人は胸の内で密かに毒づき、自嘲を滲ませた。

「濡との結婚はもう諦めている」

「えっ、どうして？」

「切り札をなくしてしまった」

「いくらでも方法はあるだろう」

大地は得心のいかない顔で腕を組み、首を捻った。

「父さんも二人の結婚を望んでるんだから、頼めばどうにかしてくれるはずだぞ。自分の力で手に入れたいんだとしても、まだいくらでも策を弄する余地はある。少なくとも諦める段階じゃない。おまえにしてはめずらしく積極的に頑張っていたのにどうしたんだ？ もしかして、濡に人間以外の血が混じっているとわかって嫌になったのか？」

「そんなことは思っていない！」

悠人はカッとして声を荒げた。それでも、大地は淡々と畳みかける。

「僕の子じゃなかったから興味をなくしたか？」

「……濡の気持ちを無視できないと思っただけだ」

「どうだかな」

滯に対する気持ちが冷めたわけではない。可能性としては低いだろうが、滯が恋人と別れることになったら、そして滯さえ了承してくれるのなら、彼女と結婚したいと今でも思っている。だが、大地に「俺の子じゃなかったから」と問われ、一瞬ドキリとしたことは否定できない。

大地は気楽な口調で続ける。

「ま、滯に執着するのをやめて、普通に恋愛してみるのも悪くないかもな。おまえ一度だってまともに恋愛したことないだろう？ 佐藤由衣にしても俺が付き合えって言ったからで、結局、最後まで好きになれなかったみたいだし」

元交際相手の名前を耳にして、悠人は我知らず眉間に皺を寄せた。

「おまえのせいで二年近くも無駄にした」

「女を知れて良かったじゃないか」

大地はむしろ感謝しろとばかりに尊大な暴言を吐き、クスクスと笑う。

「佐藤と付き合ってなければ、多分その年まで童貞だったよ」

「それでも構わなかった。好きでもない女とでは虚しさしか残らない」

彼女と付き合ってわかったことの一つがそれだった。事の最中はいい。余計なことを喋らなくていいし、何も考えなくていいし、他のことをするよりもよほど気が楽である。けれど、終わったあとはいつも虚しさしか残らなかった。これが好き合っている相手ならきっと違うのだろう。

「だったら、さっさと別れば良かったんだ」

「誰のせいだと思って――」

「そんなに怖かったか？ 僕に絶交されること」

彼女と付き合わなければ絶交する――大地が軽い気持ちで口にしたその言葉を真に受けて、二年近くも付き合い続けた。苦痛を感じても耐え続けた。傍から見れば馬鹿みたいに映るかもしれないが、当時はそのくらい彼に絶交されることを怖れていたのだ。なぜなら、彼はただ一人の友人であり、秘密を共有する仲間であり、そして――。

「……その質問には、あのとき答えただろう」

「できれば言葉で聞かせてほしいね、その口から」

大地は目を細めて蠱惑的な視線を送ると、固く引き結んだ唇にすっと手を伸ばす。男性にしては細くきれいな指先が、微かに触れたその瞬間――悠人の中で何かがぷつりと切れた。彼の手を叩きつけるように薙ぎ払うと同時に、体をベッドに押し倒し、その上に膝立ちで跨がって両手を首に掛ける。真上から見下ろした彼は、鳩が豆鉄砲を食ったように目を丸くしていたが、ややあって状況を把握すると愉快そうにふっと笑う。

「僕はさ、美咲とおまえになら殺されても構わないと思ってるんだ。絞めたいのなら絞めろよ」

彼が話すたび、手のひらに喉の動きを感じ、体の芯からゾクリと震えた。

たったこれだけのことで――。

「どうした？」

そっと穏やかに問いかける唇に、薄い微笑が浮かんだ。

悠人はきつく目をつむり、首を絞める両手にグググッと力を込めていく。彼の頭が柔らかくないベッドに沈むにつれ、潰れた呻き声が上がリ、苦しげにジタバタともがき始めるのがわかった

。縫るようにジャケットの袖口を掴まれる。やがて、その手がだらりと落ちた気配を感じると、ハッと大きく目を見開いて力を緩めた。

「大地！」

ぐったりとした彼を見て体中から血の気が引いた。しかし、すぐに彼はゲホッと咳き込んで身を振った。うっすらと痕の付いた首に手を当て、背中を大きく揺らしながら、ぜいぜいと荒い息遣いで喘いでいる。

「おまえは中途半端なんだよ」

呼吸が落ち着いてくると、いまだ苦しげな声で吐き捨てるようにそう言い、跨がっていた悠人を押しのけてベッドから体を起こした。大きく息をつき無造作に前髪を掻き上げる。そして、酷薄な眼差しを悠人に向けて口を開いた。

「いろんなものを引きずっているせいで、本当の望みは何なのか、自分でもわからなくなってるんだろう。僕は決して見失わない。いくら非難されようとも、誰から恨みを買おうとも、本当に欲しいものは必ずこの手で掴み取る」

格好をつけているわけでも大袈裟に言っているわけでもない。大地は実際にそういう生き方をしてきたのだ。他人の事情を顧みず強引に突き進んでいく彼に、許しがたい腹立たしさを感じながら、同時に焦がれるように強く惹かれてもいた。けれど――。

「僕は、おまえのようにはならない」

「なに格好つけたこと言ってるんだよ。何の覚悟もないくせに、物欲しそうな顔ばかりしてる奴が」

大地は唾棄するように言い放つ。

それでも、見えない鎖で縛り付けたまま解放してはくれないのだろう。たいして興味などないくせに、好きでも嫌いでもなくせに、ふらりとやってきては心の中を素手で掻きまわし去っていく。いっそ完全に拒絶してくれた方がどれだけ楽かと思う。

「もう話は終わったのか？」

物思いに耽っていると、大地はぶっきらぼうにそう言って立ち上がった。軽く右手を挙げ、ポケットに左手を差し入れながら、迷いのない足取りで立ち去ろうとする。

「.....どこへ行く」

「決まってるだろう？ 僕の妻のところだよ」

彼はドアノブに手をかけたまま振り返ると、艶然と微笑を湛え、立ち尽くす悠人に横目を流して答えた。僕の妻、というところには露骨なアクセントがつけられている。

今さら、こんなことで動揺などしない――。

悠人はそう自分自身に言い聞かせるが、心がざわつくのは止めようがなかった。唇を噛みしめながら去りゆく背中を睨めつける。しかしながら扉の閉まるボタンという音を耳にすると、ハッと我にかえり、何をするつもりかわからない彼を追って駆け出した。

## 39. 家族

---

「どうなってるんだ」

大地は苦々しげにそう言って、電話の受話器を叩きつけるように戻した。執務机で座っている剛三も、後ろで立っている悠人も、打ち合わせ机についている誠一たちも、皆一様に息を詰めて彼の様子を覗いている。彼からはまだ何の説明もないのではっきりとはわからないが、電話の内容からおおよその見当はついた。

ほんの数分前のことである。

一度、悠人とともに書斎を出て行った大地が、再び彼とともに早足で戻ってきたかと思うと、「借ります」とだけ告げて執務機の電話を手を取った。そして、立ったまま受話器を片手に持ち、手早く番号を押して発信すると、流暢な英語で話し始めたのだ。

誠一は英語のヒアリングが得意ではないため、すべてを聞き取れたわけではないが、相手が米国大使館であることはすぐにわかった。美咲と会わせてくれ、話をさせてくれ、と懇願もしくは交渉しているようだったが、色好い返事はなかなかもらえず、彼の声は次第に大きくなり荒れていった。電話を切ったときの様子からすると、結局、取り付く島もないまま終わったのだろう。

大地は疲れたように溜息を落として、前髪を掻き上げた。

「あいつら、君たちは我々の信頼を裏切った、今回の話はなかったことにする、の一点張りだ。美咲を出してほしいと言っても、終わったことだと取り合ってもらえない。大使館にいるのかどうかさえ答えてくれない」

その話を聞いて、大地以外の全員がハッとした様子を見せる。

「その裏切りって、もしかして……」

「ああ、メルローズのことだな」

表情をこわばらせて怖々と切り出した瀧に、武蔵が同意した。実際に現場を見たのはこの二人だが、誠一も話は聞いており、思い至った先はおそらく同じだろう。剛三、悠人、篤史、遙も同様である。皆、心当たりを隠すことなく硬い顔をしていた。

大地は要領を得ない面持ちになり、打ち合わせ机の方へ振り向いて尋ねる。

「何かあったのか？」

「……………」

しばらく重い沈黙が続いたが、やがて武蔵が米国大使館での出来事を話し出した。

実験に不適格と言われてメルローズを託されたこと、その場で彼女の魔導が暴発しそうになったこと、それは武蔵が自分の魔導で抑え込んだが、直後に大使館の警備員に銃で追われたこと、命からがらメルローズを連れて脱出したこと――。

「それだな……」

大地は苦虫をかみつぶしたような顔をして、額を押さえた。

「実験に不適合と偽ってメルローズを逃がそうとしたが、嘘だとバレた。それで契約を白紙に戻されたんだろう。美咲はあの子を救いたい一心だろうが、あちら側からすれば重大な裏切りだし、信頼関係を築けないと判断して白紙に戻すのも頷ける。それどころか、悪くすればスパイ容疑を掛けられかねない」

「スパイ容疑……」

滯は啞然としてオウム返しにそう呟いた。馴染みのない物騒な単語に気圧されているのだろう。しかし、そのことが何を意味するかまでは理解できなかつたらしく、そっと眉を寄せて小首を傾げる。

「結局、お母さまはどうなるんです？」

「それを知りたいのは僕の方だよ」

大地は真面目な顔で思案を巡らせながら、言葉を重ねていく。

「すでに大使館を追い出されたか、あるいは逆に監禁されているか……現在の状況も、今後の処遇も、今のところはあちら側に訊くしかないが、さっきの頑なな態度からすると難しいだろうな。手みやげ持参で心からの誠意を見せれば、話くらいは聞いてもらえるかもしれないが」

「手みやげ？」

「メルローズだよ」

当然のように返ってきたその答えを聞き、滯は口もとを両手で押さえて息を呑んだ。同時に、武蔵は弾かれたようにパイプ椅子から立ち上がる。机に左手をついて前のめりになりながら、右のこぶしを震えるほどきつく握りしめ、今にも殴りかからんばかりに大地を睨みつける。

「おまえ……！」

怒りを露わにした低く唸るような声。それでも、大地は飄々とした態度を崩さない。

「美咲はメルローズを守ろうとしているが、僕としては美咲の方を守りたいんでね。メルローズを救ったところで美咲が救えないんじゃ本末転倒だ。残念ながら、今はメルローズも行方不明だからどうしようもないけど。ま、メルローズを渡したくないのであれば、美咲が無事に見つかることを祈ってるんだな」

「絶対にメルローズは渡さない」

武蔵は強気にそう宣言すると、奥歯を噛みしめつつ静かに腰を下ろした。殴りかからず堪えたのは滯のためだろう。父親の非情さをあらためて目の当たりにし、顔面蒼白で絶句する彼女を、これ以上追いつめることは出来ないはずだ。

しかし、大地は意に介する様子もなく、声に出して思考を整理し始める。

「とりあえず、追い出されていたと想定して行き先を考えよう。普通に考えればこの橘の家だろうが来ていないしな。今朝になって追い出されたのなら、これから帰ってくる可能性はある。だが、きのう、おとといに追い出されていたとしたら、どこか別のところに行ってるってことだ……考えられるのは研究所か……」

「研究所は厳重に封鎖されておる。警察が見張りを立てていて近づけんはずだ」

執務机の剛三が口を挟んだ。大地の身勝手な態度を快く思っていないことは、その険しい表情から見てとれるが、それには触れずあくまで理性的に対応している。今は事を荒立てている場合

ではない、という判断なのかもしれない。

ふと、後方に立っていた悠人が口を開く。

「別荘の方かもしれない」

「なるほど……」

大地はそう言って腕を組んだ。しばらく真顔で思案したのち、振り返る。

「悠人、一緒に来てくれ。手伝ってほしい」

橘家が所有している別荘は一つ二つではないため、すべて確認していくには手が掛かるのだろう。悠人はすっと表情を引き締めて首肯すると、再び大地とともに書斎を出て行こうとする。剛三はその背中を見据えながら、執務机の上でゆったりと両手を組み合わせて顎を引いた。

「大地、調べるのは構わんが、無断で行動を起こすなよ」

「わかっています」

威圧的な物言いをもものともせず、大地はにっこりと満面の笑みを浮かべて振り向いた。剛三はピクリと眉を動かして疑わしげな眼差しを送る。彼だけでなく、この場の誰もが漠然とした不安を感じたに違いない。けれど、はっきりと承諾の返事をしている以上、今はそれを信じるしかないだろうと思った。

「じいさん、俺、寝てきていいか？ このところ徹夜続きだったし」

大地と悠人が出て行って扉が閉まるとすぐに、篤史は執務机の方に振り返ってそう尋ねた。

確かに、彼はこのところ何かと忙しそうにしていた。機器やソフトウェアを作成したり、あちらこちらをハッキングしたり、侵入計画を立てて準備を整えたりで、寝る時間もあまり取れていなかったように思う。憔悴ぎみの顔からも睡眠不足と疲労の蓄積が窺えた。

「構わん。無理をさせてすまなかったな。私も少し休ませてもらおう」

剛三はそう言い、大きく肩を上下させながら息をついた。彼の場合は橘財閥の方にも心を砕かねばならず、会長としての責任もあり、精神力の消耗は並大抵のものではないだろう。年齢的なことから考えても相当きついはずだ。それでも露骨に疲れた様子を見せることなく、しっかりと足取りで書斎を後にする。

篤史も「じゃあな」と軽く手を挙げて、それに続いた。

打ち合わせ机に残された誠一、滯、遥、武蔵の四人は、どうすべきか探るように困惑した視線を送り合う。このメンバーなら自分が主導するしかないのかもしれない——誠一はそう思いながらも、重い空気に飲まれて口を開くことが出来なかった。

遥の提案で、四人は書斎から滯の部屋に移動した。

滯は疲れたようにふらりとベッドに倒れ込むと、うつぶせに寝そべて顔の下に枕を抱え込んだ。短いプリーツスカートからはすらりとした脚が覗いている。誠一は下着が見えるのではないかと心配になり、ちらちらと視線を送りながらベッド近くの椅子に座った。武蔵はその隣に腕を組んで立ち、遥はベッドの端に浅く腰掛ける。

「メルローズはどうすればいいんだ」

沈黙を破ったのは、苦悩に満ちた武蔵の声だった。滯は枕を抱えたまま横目を流す。

「強行突破、してみる？」

「とても無理だよ」

投げやりにも感じる滯の提案を、誠一は溜息まじりに却下した。

「本当に警察庁の地下に監禁されているんだとしても、けっこう広いし、警備も厳重だし……居場所が特定できているなら計画の立てようもあるけど、情報のない今は行き当たりばったりに探すしかない。警備員から逃れつつメルローズを探して、救出して、脱出するなんて不可能に近いと思う」

だよな、と滯は失意の相槌を落とし、抱え込んだ枕に顔を突っ伏す。

「俺が探れるだけ探してみるよ」

そうは言ったものの、処分でそれどころではないかもしれないし、処分がなくても当然ながら警戒は厳しくなる。もちろん出来るだけのことはやってみるつもりだが、公安が相手ではそうそう上手くいくとは思えない。武蔵も光明を見いだせないのか、腕を組んだまま苦しげに顔をうつむけていた。

それきり、会話が途切れた。

誰も口を開こうとはせず、息の詰まるような重苦しい沈黙が続く。言えないのではなく言うことがない。完全に行き詰まってしまったのだ。誠一は膝にのせた手にじっと視線を落としていたが、すー、すー、と微かな寝息が聞こえて顔を上げると、滯が枕に突っ伏したまま小さく背中を上下させていた。

「緊張感のないヤツだな」

武蔵は笑いを含んだ口調でそう言うと、ベッドに片膝をついて彼女に手を伸ばす。

「おいっ！」

「別に変なことしねえよ」

驚いて後ろからジャケットを引っ掴んだ誠一を、面倒くさそうに一睨みしてそう言うと、軽々と滯を横抱きにしてベッドから降りた。長い艶やかな黒髪がざらりと大きく舞う。それでも滯は目を覚ますことなく、彼の腕の中で心地よさそうに眠っていた。

「ちゃんと布団で寝かせた方がいいだろう。遥、布団を捲れ」

命令口調だったが、遥は特に反発することなく素直に掛け布団を捲った。露わになった白いシャツに、武蔵は抱きかかえていた滯の身体をそっと下ろす。頭を枕にのせてから長い黒髪を軽く直し、少しまくれたスカートを戻すと、慎重な手つきで首元まで布団を掛けた。

そんな彼を見ていると、本当に滯を愛おしく思っていることが伝わってくる。

しかしながら誠一としてはやはり不愉快であり、やめろとまでは言えないが自然と渋面になった。なにせ相手は、一ヶ月近くも手錠を掛けて滯を監禁したうえ、いつときとはいえ体も心も重ねていた男なのだ。そして、一番の問題はそんな彼が滯の父親であるということだ。

「触られるのも嫌だって顔だな」

武蔵は振り向き、挑発的にそう言って口の端を上げた。

誠一は表情を陰しくしつつも冷静に言葉を紡ぐ。

「滯にとっての家族は崩壊寸前だ。父親と慕っていた人は父親ではなく、母親と慕っていた人は実験で生んだだけ、おまけに保護者同然の人からは求婚されて……このままでは、滯は家族というものが信じられなくなるかもしれない。だから、一応の父親であるあなたには……父親らしくしてくれとは言わないが、せめて最低限の節度は持ってほしい」

「ずるい言い方だな」

武蔵は抑揚なくそう言い、ゆっくりと腰に手を当てながら冷たい横目を流す。

「滯にちょっかい出すのが気に入くない、って素直に言えよ」

「確かにそう思っている。でも、滯が心配なのも本当だ」

誠一が毅然と答えると、彼は寂しげに表情を和らげて目を細めた。

「そうだろうな。けど、俺はまだ現実を受け止めるだけで精一杯だ。滯の嫌がることをするつもりはないが、そう簡単に気持ちまでは切り替えられない。おまえはそのことまで責めるのか？」

「……………」

突然知らされた真実に戸惑うのは理解できるし、簡単に気持ちが切り替えられないのもわかる。もちろんそこまでは責められない。気持ちは自分の意志ひとつで変えられるものではないのだ。露骨な行動を起こさないだけでも十分なのかもしれない。ただ――。

「二人ともうるさいから出て行ってよ」

遥は、口を開こうとした誠一を遮るように声を張ると、誠一と武蔵を追い立てて部屋を出て行かせようとした。あまりにも急なことで二人とも戸惑っていたが、彼は無表情のまま強引にぐいぐいと背中を押してくる。廊下に押し出され、誠一は大きくよろけながら慌てて振り返った。

「遥、君は？」

「僕は滯が心配だからここにいる。夜這いに来ても無駄だからね」

最後の忠告は、誠一だけでなく武蔵にも向けられていたようだ。二人ともきまり悪さに苦笑を浮かべる。今は真昼であり夜這いという時間ではない。というより、この家でそんなことをするつもりは毛頭ない。武蔵もそのくらいの節度は持っているだろうと思う。

「誠一」

パタンと扉が閉められたあと、その向こうから微かな声が耳に届いた。なぜ自分の名前が呼ばれたのかわからず、怪訝に思いながら立ち尽くしていると、一呼吸の後にぼそりと小さな声で言葉が継がれる。

「僕は、ずっと滯の家族でいるから」

すぐに扉のそばから遠ざかっていく足音が続いた。見えない遥の後ろ姿をそこに重ねて、誠一はふっと目を細めて表情を和らげる。背後では、武蔵が腕を組んで口もとを上げていた。

翌朝になっても、大地たちは橘美咲の消息を掴めなかったようだ。

誠一たちの方で考えていたメルローズ救出についても、糸口すら掴めないまま完全に行き詰まっている。武蔵とは他のことも含めていろいろと話し合ったが、やはり悪い人間ではないという印象が強くなった。滯の実の父親であることを考えると当然かもしれない。どこかずれていると感じることはあるものの、基本的には良識があるのだ。ただ、滯に関する話を話合うときだ

けは、互いに少し攻撃的になるのは致し方ないだろう。

「メルローズの件、難しいだろうがよろしく頼む」

「ああ、出来る限りのことはやってみるよ」

警察庁に向かう誠一を、武蔵はわざわざ玄関先まで見送りにきてくれた。その隣には滞もいる。彼女は朝食のときからずっと心配そうな暗い顔を見せていたが、最後は元気づけるようににっこりと微笑んで手を振っていた。

二人の期待に応えるためにも、少しでも手がかりを掴みたい――。

誠一は重たく垂れ込めた鉛色の雲を見上げると、強い気持ちを胸に、革靴を打ち鳴らしてしっかりと歩を進めていった。

「お返しします」

誠一は抑えた声でそう言い、執務机の楠長官に紙の手提げ袋を差し出した。というより、突き出したという方が正しいかもしれない。中身は大地奪還作戦のときに奪った無線機や衣服類などだ。彼は薄い微笑を浮かべてそれを受け取ると、大雑把に中を確認し、「確かに」と頷いて自らの足元に置いた。

ここは、警察庁内にある楠長官の執務室である。

普段はたいてい楠長官と誠一の二人きりだが、今日は溝端も来ていた。すぐに飛び出せるよう身構えながら、執務机を挟んで向かい合う楠長官と誠一を、無遠慮な眼差しで横からじっと見つめている。やはり反逆者として警戒されているのだろう。

「楠大地はもう用済みだった。気に病む必要はない」

「……はい」

楠長官は何でもないかのようにさらりと言ったが、横からは溝端の突き刺さるような殺気を感じた。少なくとも彼の方は許していない。楠長官に盾突いてまで襲いかかりはしないだろうが、誠一は肌を粟立たせて密かにびくついていた。

そんな情けない心情をすっかり見透かしたように、楠長官は口角を上げた。

「君に会わせたい人物がいる」

「……メルローズですか？」

「私は『人物』と言ったはずだが」

誠一は眉を寄せる。楠長官はメルローズが人間だと認めるつもりはないようだ。わかってはいたが、実際に目の前でそう言われると不快感が募る。しかし、メルローズでないとすると誰だというのだろうか。該当するような人物はまったく思い浮かばない。

「溝端」

楠長官が何かを促すような声音でその名を呼ぶと、溝端は無表情のまま懐から手錠を取り出した。ぎょっとして後ずさる誠一との間合いを詰め、慣れた手つきで両方の手首にそれを掛ける。狼狽しているうちに目隠しまでされてしまった。アイマスクの上からさらに布を巻いて縛られたような感覚だ。

「場所を知られるわけにはいかないのね」

楠長官の愉しげな声が聞こえたかと思うと、今度はヘッドホンらしきものを付けられた。耳全体をすっぽり覆うタイプのように付け心地は悪くないが、耳が痛くなるほどの大音量でクラシックの交響曲が流れている。外部の音はもう聞こえなくなっていた。

車に乗せられて小一時間ほど走ったあと徒歩で建物に入り、廊下を歩かされたりエレベータを昇降したりして、ようやく目的地と思しきところに到着した。

まず、ヘッドホンを外される。ずっと大音量でクラシックを聴かされ続けたせいで、激しい頭痛とともに、聞こえ方が若干おかしくなった感覚もあった。とはいえ心配するほどのものではなく、おそらく時間が経てば元に戻るだろう。

「ご苦労だったね」

楠長官の声が耳に届いた。それから間をおかず、手錠、目隠しと順に外される。視界が開かれて最初に映ったものは、薄暗い中に立つ楠長官と溝端の姿だった。背後からは眩いくらいの白い光を感じる。明るさに慣れない目を庇うように、手をかざしつつ振り向いていくと――。

「橘美咲、さん……メルローズ……?!」

大きなガラス窓の向こうに広がる白い光のあふれた空間。中央にパイプベッドだけがぼつりと置かれている。その上には美咲が座り、甘えるように抱きつく幼い少女を愛おしげに撫でていた。緩やかなウェーブを描いた灰赤色の長髪、それより少し濃い色の瞳、透き通るような色白の肌、愛らしい薄紅色の小さな唇――顔の造形も、他の特徴も、完全に記憶の中のメルローズと一致する。彼女で間違いないと思う。

あらためて、自分のいる部屋を観察する。

隣接するあちら側と比べると奥行きがなく、薄暗いこともあり、まるで水族館の大水槽前のようになっていた。後方の一段高いところには長机と長椅子が据え付けられ、ちょうどその正面が全面ガラス窓になっており、座ってあちら側を観察することができるようだ。溝端の背後には廊下へ続くと思われる扉があり、向かいには美咲たちのいる部屋へ通ずる扉もある。誠一は大きなガラス窓のすぐ前に立っているが、美咲たちに気付いた様子はなく、もしかしたらマジックミラーかもしれないと思う。

「どこですか、ここは……」

「何のために目隠ししたと思っているのかね」

愚問だった。場所を知られるわけにはいかない、と初めに言われたことを思い出す。自分の間抜けさを少し恥ずかしく思ったものの、そんな様子はおくびにも出さず平然と質問を変える。

「では、なぜ橘美咲さんがここに？」

「丁重にお願いして来てもらったのだよ」

嘘っぽい答えだ。少なくとも丁重にはお願いしていないだろうと思う。

「橘美咲さんは必要なかったのでは？」

「当初はそのつもりだったのだがね」

楠長官は口の端を上げ、拍子抜けするほどあっさりとしたと認めた。

「あの実験体が暴発しかねない危険な状態になってな。マニュアルにもそのあたりのことは載っ

ておらず、彼女に対策を仰ごうと思って来てもらったのだ。もっとも実験中はこんな状態になったことがないらしく、彼女もすぐにはわからないということだが、どうも実験体の精神状態と連動しているようでね。親しい橘美咲女史がついていると安定する。おかげで、暴発の心配もなく落ち着いて対処法を研究できるよ」

一度は切り捨てたはずの彼女に助けを求めるなど、どれだけ身勝手なのだろう。誠一は無意識に眉をしかめた。それに気付いたのか、楠長官はふっと意味ありげに目を細めて要点を述べる。

「橘美咲女史は自らの意志でここにいるのだよ。だから探す必要はない——そう橘家に伝えてもらおうと君を連れてきた。無駄な努力をしないですむようにという私なりの配慮だよ」

「本当に彼女の意志でしょうか」

「本人に聞いてみるといい」

そう言って、楠長官は壁に掛かった無線機を手にとると、親指でボタンを押しながら話し出す。

「美咲さん、ちょっと出てきてくれるか」

ガラス窓の向こうで、美咲はこちらの方にちらりと顔を向けて頷くと、しがみつくメルローズを宥めてベッドから降りた。そして、膝丈の白いワンピースをふわりと揺らしながら、迷わず扉へ足を進めてそこから出てくる。初めてじかに目にした彼女は実年齢よりずっと若く見えた。少女らしさを感じさせるワンピースのためか、まっすぐに下ろされた黒髪のためか、化粧気のないナチュラルな顔のためか、卓越した成果を上げている研究者にはとても見えない。ましてや、子供たちの命を犠牲にするような、残酷な実験を行っていた人間とはとても思えない。

彼女は三人を見つめ、不思議そうな面持ちで会釈した。

「紹介しよう」

楠長官はにこやかに誠一を示した。

「こちらは直属の部下の南野誠一君だ。滯ちゃんと交際していた関係で橘家と懇意になり、一連の事件についても事情は聞かされているようだ。今は橘家とともに美咲さんや実験体を探しているらしい。まあ、我々にとっては裏切りもいいところだがね」

わざと困らせるようなことを言っているのだろう。楠長官は見るからに愉しそうな様子で声を弾ませていた。どういうつもりなのかは知らないが、今さらこんなことで取り乱したりはしない。誠一は僅かに眉を動かしただけで、理性的な態度を崩すことなく紹介相手に一礼する。

美咲は少し驚いた様子だったが、ふっと柔らかく目を細めた。

「そう、あなたが……刑事と聞いていたけど……」

「美咲さん、ひとまず帰りましょう。滯さんも遥くんも待っています」

誠一は静かながら熱のこもった口調で訴えかける。

しかし、美咲は少しも動揺を見せない。

「メルローズを放ってはおけません。あんな体になったのは私たちの実験のせいだもの。だから、あの子を救うために精一杯の手を尽くしたい。あの子のそばについてあげたい。あの子の求めるものを与えてあげたい。私は自らの意志でここに留まると決めました」

「あなたが愛情を注ぐべき相手はメルローズじゃない。滯と遥だ」

誠一は頭に血が上るのを感じつつ、努めて冷静を装う。それでも声の端々から怒りが滲んだ。

「実験で作ったとしても実の子供には違いありません」

「そう……そのことも知っているのね……」

美咲は薄く自嘲の笑みを浮かべ、目を伏せる。

「滯と遥のことは私なりに可愛がってきたつもりです。ただ、一緒に過ごす時間は圧倒的にメルローズの方が多から、やはりどうしてもあの子の方に情が移ってしまうの」

「それは、逃げてただけじゃないんですか？」

彼女の瞳が少し揺らいだように見えた。ここぞとばかりに誠一は慎重に畳みかける。

「滯と遥と向き合ってください。二人の母親として……」

「ごめんなさい、何と言われても決意は変わりません」

美咲は穏やかな口調ながらも毅然とそう言い放った。迷いは窺えない。滯のためにも母親として戻ってきてもらいたかったが、無理なのかもしれない。自分の子供よりメルローズの方を大事にするくらいなのだから――誠一は眉を寄せ、少し考えてから話題を変える。

「公安はメルローズを実験に使うつもりでいます」

「止めたいわね」

美咲は研究者の顔になった。声も凜然としている。

「でも私の提案した代替案は一度却下されているの。出来る限り回避する方向で話をしてみるけれど、どうしても了承してもらえないのであれば、メルローズに負担の少ない実験方法を提示するわ。最後の実験体であるメルローズを失いたくないのは公安も同じでしょうし」

「さすが優秀な科学者、冷静な判断ができる」

楠長官は後ろで手を組み、満足げな笑みを浮かべて頷きながらそう言った。美咲の提案を受け入れる用意があるということだろう。これで誠一の切り札はつぶされてしまった。まず彼女に帰ると言わせなければ始まらないのに、打つ手はもう何も思い浮かばない。誠一は首が折れそうなほど深くうつむき、歯噛みする。

「南野さん」

ふいに柔らかい声で名前を呼ばれた。誠一は戸惑いながら硬い顔を上げる。

「お父さまに……橘剛三に伝えていただけますか。ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんと。それと、橘大地に大丈夫だから心配しないで待っていてと」

もしかすると、この伝言も秘密の暗号ではないだろうか。大地から悠人への伝言と同じように――瞬そんなことを考えたが、うっすらと寂しげに微笑む彼女の表情を目にすると、微かな期待もみるみるうちにしぼんでしまう。考えてみれば、このような日常でよく使う文言では暗号になりえない。おそらく本当にただの伝言でしかないのだろう。

「滯と遥には？」

「掛ける言葉なんてあるとお思いですか？」

彼女は急に険しい顔つきになってそう言い捨てると、黒髪をさらりと肩から滑らせながら一礼し、再びメルローズのいる白い部屋へ戻っていった。ガラス窓の向こうでは、ぱっと顔を輝かせて抱きついてきたメルローズを、にっこりと微笑みながら優しく受け止めている。防音になっ

ているのか声は聞こえないが、少女に何か語りかけているようだ。我が子を慈しむ母親そのものの表情で。

やはり、逃げている――。

誠一は額が触れそうなほどガラス窓に近づくと、一見すると微笑ましい二人の姿を眺めながら、そっと口を引き結んで眉根を寄せる。窓についた指先には痛いくらいに力がこもっていた。

## 40. 都合のいい男

---

「それで、おまえはノコノコ帰ってきたっていいのか？」

「そう言われても……帰るしかありませんよ……」

広くはない悠人の部屋で、大地がぞっとするような怒気を孕んで誠一に詰め寄っていた。基本的には人当たりのいい彼も、美咲のこととなれば我を忘れる。その迫力に圧倒されてか、誠一はじりじりと壁際まで追いつめられてしまい、間近に迫った大地の顔を見て表情を引きつらせている。

そんな二人の様子を、悠人は椅子に座ったまま無言で眺めていた。

警察庁に出勤した誠一が帰ってきたのは、夜六時をまわった頃だった。

そのとき、武蔵は田辺医師に銃創を診てもらっており、剛三は外せない用事のため会社の方へ行っていた。それゆえ、とりあえず先に話を聞いておこうと思い、誠一にこの部屋へ来てもらったのである。大地もいたのでちょうどいいと思ったのだ。

メルローズの居場所について何か探れたのか——そのことを尋ねるつもりだったが、彼の口から語られた話に、悠人も大地も驚かすにはいられなかった。メルローズはおろか美咲とまで会っていたなど完全に予想外である。しかも、彼女は自らの意志でそこに留まっているという。それが事実であるかどうか確かめる術はないが、彼が嘘を言っているようには見えなかった。

「君は刑事だろう。なのに、何の手がかりも掴んでこないとはどういうことだ。密かに携帯電話を発信するなり、レコーダーで録音するなり、美咲のいた部屋に盗聴器やGPSを仕掛けるなり、何かしら出来ることはあったんじゃないのか？」

「そんな、無理ですよ」

今にも頭突きされそうな状態で、誠一は壁に背を張りつけたまま引きつり笑いを浮かべた。

彼の言い分は当然だと悠人は思う。大地の気持ちもわからないではないが、そんなことまで要求するのは酷だろう。聞いた話では手錠も目隠しもされていたらしいし、そもそも盗聴器やGPSなど用意していなかったはずだ。予想外の事態なのだから仕方がない。むしろ、自分たちが先回りして対策を立てるべきだったのだ。

「とんだへなちょこ刑事だな」

大地はやり場のない怒りをぶつけるように言い捨てると、腰に手を当てて悠人へ向き直る。

「まだ場所は掴めないのか？」

「そう簡単にはいかないだろう」

自室で休んでいた篤史を電話で叩き起こして依頼したのは、ほんの数分前のことである。いくら何でもそんなに早く突き止められるはずはない。ただ、時間を掛けても可能性は低いのではないかと思う。警察庁の出入り口にカメラがあるわけではなく、ナンバーどころか車種もわからないのでは、どの車を追跡すればいいのかさえわからない。雲を掴むような話なのだ。

「メルローズが警察庁の地下にいるっていうのも違ったようだな」

「たとえ警察庁の地下でも、そうと悟られないため車に乗せるはずだ」

感情的になっている大地をなるべく刺激しないよう、悠人は淡々と答えを返す。そのおかげか彼は少し落ち着きを取り戻したようだ。ふうと大きく息を吐き出して力を抜くと、どさりとベッドに腰掛け、うつむいたまま膝の上で両手を組み合わせる。

「橘美咲さんを探して、どうするつもりですか」

誠一がおずおずと尋ねると、大地は冷たい一瞥を流して答える。

「会いたい、話したい、今はただそれだけだ」

それは彼の本心に違いない。悠人も同じ気持ちである。あんな伝言ひとつで易々と引き下がれはしない。もっとも、悠人に対しては伝言のひとつさえなかったのだが――。

「まどろっこしいな」

大地はベッドからすくっと立ち上がった。強い決意を秘めた表情になると、椅子に座る悠人を見下ろして言う。

「長官に直談判に行くぞ」

「……わかった」

悠人は少し考えてからそう答えた。場所を掴むことが難しい現状では、直接当たってみるのも悪くない。素直に教えてもらえるとは思っていないが、対峙して反応を見ることで、何らかのヒントが得られるかもしれないのだから。

「待ってください！」

慌てた様子でそう声を上げたのは、誠一だった。

「橘会長に行動を起こすなど言われているはずですが。それに、武蔵にもこの話をしてからじゃないと……」

美咲だけでなくメルローズも一緒にいたのだから、武蔵にも話すのが筋だとは思いますが、そうすると確実にややこしい事態になってしまう。できれば、このまま誰にも邪魔をされず自分たちだけで向かいたい。悠人はそう考えながら、大地の意向を探るべく上目遣いで窺う。

「止めるなら、力尽くまで止めてみろ」

彼はまっすぐ誠一を見据え、研ぎ澄まされた本気を思わせる声で挑発した。

誠一は表情を硬くして顎を引く。しばらく物言いたげに大地を見つめ返していたが、やがてふいと背を向け、無言のままドアノブに手を掛けようとする。が、大地がその手をすんでのところで捻り上げ、固く握ったこぶしを鳩尾に叩き込んだ。うっ、という苦悶の呻き声とともに誠一は膝から崩れ落ちる。

足元にだらりと横たわったその身体を、大地は冷たく一瞥した。

「手足を縛って口を塞げ」

「そこまではするのか？」

「妨害されたくないからな」

意識が戻ったら間違いなく武蔵や剛三にこの件を伝えるだろう。そうすれば途中で引き戻されかねない。仲間である彼にあまり手荒なことをしたくなかったが、この状況では仕方ないと自分

に言い訳しつつ、悠人は使えそうなロープやハンカチを探すべく立ち上がった。

「美咲と会わせていただけますか」

執務机で不敵な笑みを浮かべる楠長官に怯むことなく、大地はにっこりと微笑んで本題に切り込んだ。しかし、楠長官もこう来ることは予想していたのだろう。唇に笑みをのせたまま悠然と切り返す。

「彼女の言葉は伝わっているのかな？」

「ええ、だからここに来たのです」

「美咲さんに帰る意志はないようだが」

「でも、会わせてはいただけますよね」

監禁ではないと主張している以上、会わせないなどという強硬なことは言えないはずだ。いつもながら大地はこういう交渉が上手い。悠人が横目を流しながらめずらしく感心していると、不意に楠長官の矛先が自分へと向けられた。

「悠人、おまえも美咲さんに会いたいのか」

「……いけませんか」

からかうような意味ありげな薄笑いが癪にさわり、つい反抗的にそう言い返した。けれど、大地についてきただけと答えた方がよかったかもしれない。あまり美咲に執着していると思われたくないのだ。父親にはもちろん、大地にも――。

楠長官は見透かしたように鼻を鳴らし、再び大地に視線を移す。

「大地君、まだこんなのと連んでいるのかね」

「いけませんか」

その言葉は先ほど悠人が発したものと一緒だった。口もとにはうっすらと笑みが浮かんでいる。悠人に対する揶揄なのか、長官に対する挑発なのか、あるいは他愛もない冗談なのか、考えてみたところでわかりようがない。ただ、願望でしかないのかもしれないが、悠人には彼が味方をしてくれたように感じられた。

「チェックメイト」

カツン――乾いた音を響かせながら白のクイーンを動かし、大地は宣言する。その声には隠しきれない愉悦が滲んでいた。悠人は盤上の駒を確認して小さく溜息を落とす。これでゲームセットだ。まるで勝てる要素のなかったひどい対局である。

「チェスなんて学生のとき以来だけど、案外覚えてるものだな」

大地は腕を組みながら、革張りのソファに身を預けて口もとを上げた。もっとも悠人も同じく学生のとき以来ではあるが、そのことは敢えて口にせず、ソファに座ったままちらりと掛け時計に目を向ける。溝端が退出してから、間もなく指定の時間が過ぎようとしていた。

二時間――。

楠長官はそれだけ待てるならばと条件を提示し、大地の承諾を得ると、美咲をこの部屋へ連れて来るよう溝端に命じた。本当に二時間も必要なのかわからない。美咲のいる場所が離れている

と思わせるために、無駄な時間つぶしをしているとも考えられる。だが、それを問い詰めたところで白状はしないだろう。ここで下手に事を荒立てるより美咲を待った方が得策だ。二人ともそう判断し、おとなしくチェスをしながら待つことにしたのである。

「そろそろかな」

大地はくすりと笑うと、盤上から白のクイーンを手にとって軽く口づける。

直後、複数の足音が廊下の方から聞こえてきた。まっすぐこちらへ近づいてくるのがわかる。その足音が止まるとすぐに扉が叩かれ、返事を待つことなくガチャリと開かれた。そこから入ってきたのは溝端、続いて――。

「美咲っ！」

大地は顔を輝かせて、弾かれたようにソファから立ち上がった。すぐさま駆け寄り、覆い被さるように彼女の小柄な体を抱きすくめる。彼女は薄手の白いワンピースに七分丈のカーディガン、そしてサンダル履きという、まだ雪のちらつくこの時季には相応しくない格好をしていた。

「会いたかった……ずっと……」

「大地、みんなが見てる」

「見せつけてやればいいさ」

艶やかな黒髪に手を差し入れて口づけようとする大地を、美咲は困惑ぎみに制止するが、彼は熱っぽく煽るようにそう言いながら強引に唇を重ねた。その言葉どおり、まわりに見せつけるように堂々と口づけを深くしていく。頬を桜色に染めて恥ずかしそうにしていた美咲も、次第に彼に応え、その広い背中に透き通るような白い細腕をまわしていく。

悠人は見ていられなくなって顔を伏せた。その微かな音や息遣いを聞きたくなくて、わざと乱雑にローテーブルのチェスを片付け始める。しかし、盤の脇に転がされていた白のクイーンを見つけると、壊れ物を扱うかのようにそっと拾い上げた。

「そのくらいにしてもらえないだろうか」

執務机の方でゆったりと椅子にもたれていた楠長官が、悪戯っぽい口調で声をかける。

我にかえった美咲は僅かに体を離してうつむき、初心な少女のように恥じらいの表情を見せた。濡に少し似ているかもしれない――悠人が片付ける手を止めて横目で窺っていると、不意に視線がぶつかり、二人とも何ともいえない複雑な表情を浮かべる。瞬間、大地は彼女の顎を掴むように指を添え、もう一度クイツと自分の方へ向かせた。

「大丈夫だった？ ひどいことされてない？」

「何ともないわ、このとおり元気よ」

美咲は穏やかに微笑むが、大地はまるで幼子を心配するかのよう覗き込む。

「帰りたくはない？」

「メルローズの生体エネルギーを安定させられるまでは、あの子のところにいるわ。私自身がそう決めたの。私がそばについてあげないと……いいえ、私があの子のそばについていたい」

ほとんど誠一から聞いたとおりの答えであるが、実際に美咲本人の口から聞かされると、よりいっそうやりきれない気持ちになる。悠人はチェスの駒を片付け終えても顔を上げられな

った。大地もやりきれない気持ちは同じだと思うが、そんな感情は微塵も見せず、ただ優しく落ち着かせるような声音で先を促す。

「そのあとは？」

「メルローズを救出したい……けれど、そんなのどう足掻いても無理よね……」

「無理じゃないさ。美咲が望んでくれるなら、僕はどんなことだってできる」

顔を曇らせる彼女の肩にしっかりと手を置き、物柔らかに断言した。彼が本当にそう思っているのかはわからない。美咲を安心させるためなら平気で嘘もつくだろう。一方で、美咲が願うなら本気でやりかねないとも思う。たとえ、それがどれほど無謀なことだとしても。

「大胆不敵なロマンチストだな」

楠長官はニヤリと笑い、執務机の上で骨張った両手をゆったりと組み合わせた。

「生憎、そう簡単に実験体を手放すつもりはないがね」

「でしょうね。私の方もそう簡単に諦めはしませんよ」

「面白い」

彼の口角が不敵に吊り上がった。それに応じるように、大地もニッと口もとを斜めにする。そんな二人のやりとりを眺めていた溝端は、口こそ挟まないものの、あからさまに嫌悪の情を滲ませていた。攻撃的な大地の言動に対してはもちろんのこと、真剣味の足りない楠長官の応答に対しても、部下として腹立たしく思っているのかもしれない。

大地はあらためて楠長官に向き直り、美咲の肩を抱いた。

「今後はいつでも会わせてもらえるんですよ」

「残念ながらそうはいかない。研究内容も研究場所もこの国の最高機密でね。かつて我々を裏切ったことのある人間を、気軽に出入りさせるわけにはいかないのだよ。今回、美咲さんをここへ連れてきたのは、君への温情で特例だと思ってほしい」

楠長官の声はどこか愉しげだった。大地も笑みを浮かべて応じる。

「でしたら仕方ありません。美咲は連れて帰ります」

「大地！」

真っ先に反応したのは、彼に細い肩を抱かれていた美咲である。その声には驚愕と非難が入り混じっていた。切羽詰まった目で大地を見上げ、縋るようにシャツの胸元を掴み、黒髪を揺らしながら必死に訴えかける。

「お願い！メルローズに何かあったら、きっと大地を恨んでしまうわ」

「甘受するよ。僕が恨まれるくらいで君を助けられるなら安いものだ」

大地はにっこりと微笑んで彼女の頭に手を置いた。美咲を守る方法がそれしかないのだとすれば、どんな説得にも意見を覆すことはないだろう。彼はそういう人間だ。美咲も冷静になってそのことを悟ったのか、返す言葉を失い、漆黒の瞳を小さく震わせながらうつむいた。

しかし、楠長官は諦めることなく反撃する。

「もし、実験体が暴発を起こせば、無関係な人も含め数百人が亡くなる試算だ」

「構いませんよ。美咲さえ守れるなら、誰がどうなろうと興味はありません」

相変わらず大地は少しの動揺も見せない。が、美咲は息を呑んで表情を凍りつかせた。みるみ

るうちに顔面から血の気が失せていく。再び大地に向き直り、感情をぶつけるようにシャツの胸元を引っ掴んだ。

「大地！私はやっぱり嫌よ！！」

今にも泣き出しそうに叫んだ彼女を、大地は両腕でしっかりと抱きすくめた。そのまま耳元に口を寄せ、優しく言い含めるように言葉を紡いでいく。

「ねえ、美咲、僕だってつらいんだよ。出来るなら君の言うことを何でも聞いてあげたい。でもね、美咲を奪われることだけは許せないんだ。ずっと僕と一緒にいてくれるって、僕のために生きてくれるって、そう約束したよね」

「それは……そうだけど……」

美咲は困惑し、彼の腕の中で顔を曇らせる。

そんな身勝手な約束なんか破棄してしまえばいい——悠人は心の中で毒づく。それでもあえて口に出さなかったのは、美咲が橘家に帰ることには賛成だからである。おそらく大地だけが、この方法だけが、美咲を家に帰らせることが出来るのだろう。腹立たしく思っても今は利用するしかない。

「メルローズのことは帰ってから考えよう。大丈夫、絶対に見捨てたりしないから」

大地の後押しに、美咲の漆黒の瞳は小さく揺らいだ。彼のたくましい腕に拘束されたまま、広い胸に顔を寄せ、追いつめられたような表情を浮かべる。

「一つ提案だが」

ふと楠長官が執務机から声を放った。

大地は眉をひそめたが、すぐに平静を取り繕って振り向く。

「何でしょう？」

「大地君、君も一緒に来てはどうだろうか」

「……どういうことですか？」

彼の仮面は剥がれ、訝るように顔を曇らせた。

楠長官は少しも動じることなく笑みを浮かべる。

「美咲さんに与えた個室で君も一緒に暮らすんだよ。そうすれば君は幾分か安心できるだろうし、美咲さんも望みどおり研究に打ち込める。もちろん自由に外出はさせられないが、実験体が安定して研究の道筋が立てられれば、美咲さん共々解放すると約束しよう。さすがに実験体までは渡せないがね」

そう言って、ククッと鼻から息を抜いて笑う。

無意識なのか、意識的なのか、美咲を抱きしめる大地の手に力がこもる。そのまま無言でじっと考え込んでいたが、やがて顔を上げ、揺るぎのない眼差しで楠長官を見据えた。

「いいでしょう、その条件で」

凜然と答えると、表情を和らげて腕の中の彼女を覗き込む。

「美咲もいいね？」

「ええ……大地さえ良ければ……」

彼女は困惑しながらも承諾の答えを返した。メルローズを見捨てずに済み、大地ともいられる

のだから、彼女からしても悪い話ではないだろう。しかし、視野を広げて大局的に考えてみると、決して橘側に有利な話とはいえない。悠人は険しい顔でソファから立ち上がった。

「馬鹿な真似はよせ。人質が一人増えるだけだぞ」

「何ならおまえも一緒に来るか？」

自分が行ったところで、さらに人質が増えるだけで何の解決にもならない。人の話を聞いていたのだろうか。訝りながら眉をひそめて見つめるが、大地はあっけらかんと畳みかける。

「僕たち三人で仲良く暮らすか？」

「……………」

ドクリと心臓が大きく打った。彼が何を思ってこんなことを言い出したのかわからない。いつのまにかのぼせたように頭がぼうっとして何も考えられなくなる。口を半開きにしたまま立ち尽くす悠人を見て、大地はクスッと笑った。

「本気になるなよ、冗談だ」

悠人は知らないうちに頬を伝っていた一筋の汗を手のひらで拭い、大地を睨めつける。それでも彼は嫌味なくらい余裕たっぷりに微笑をたたえていた。美咲を抱いていた腕を解くと、悠人の方へ歩を進めつつ言葉を重ねていく。

「おまえには滞と遥の面倒を見てもらわないといけないからな。もちろん会長秘書の仕事もあるしね。それに、いざというときに僕らを助けに来てくれる人が必要だろう？ おまえが外にいてくれれば、僕は安心して心置きなく美咲のもとへ行ける」

悠人は思いきり眉をひそめ、舌打ちした。

「勝手なことばかり言いやがって」

「頼りにしてるってことさ」

大地はすぐ正面まで来て足を止めると、すっと手を伸ばし、包み込むように悠人の頬に触れた。ほのかな温もりが手のひらから伝わる。何だ？ と怪訝に思うと同時に顔を寄せられ、抗う間もなく唇を掠め取られた。触れ合っていた時間は一秒もない。何の反応もできずに呆然としていると、間接キスだと思ってもいいぞ——と揶揄するような囁きが耳朶をくすぐった。

「じゃあ、行きましょうか。目隠しや手錠をするんですね」

大地は踵を返し、何事もなかったかのように平然と歩いて戻る。

ありえない光景にさすがに啞然としていた溝端も、すぐに仕事の顔を取り戻し、楠長官の方に伺いを立てるような目を向けた。彼が頷くのを見ると、手を取り合った大地と美咲に感情のない視線を向ける。

「来てください」

そう言うと、大きく扉を開けて部屋を出ていく。大地と美咲もそのすぐあとに続いた。出る間際、大地は満面の笑みを浮かべて手を振ったが、悠人は応えることなくただじとりと睨み返す。大地の隣には、申し訳なさそうに苦笑している美咲がいた。

ガチャン、と扉が閉まる。

悠人は執務机についている楠長官と二人きりになった。気まずさを感じて微妙に体をそむける。いまだ感覚の残る唇を拭おうとするが、上げかけた手を戻し、さらに深く顔をうつむけて下唇

を噛んだ。

「相変わらずいいように利用されているな」

「……言われなくてもわかっています」

小馬鹿にするように言われ、背を向けたまま静かに言い返す。

今さらこんなことで傷ついたりしない。中学生のときに出会ってから今に至るまでずっと、都合のいい存在でしかなかったことくらい承知している。大地は基本的に去る者を追わない。嫌なら去ればいいだけのこと。それをしないのは、どんな理由を付けたとしても自分自身の選択に他ならない——悠人は吐息を落とすと、楠長官に目を向けることなく無言で部屋をあとにした。

## 41. 大人げない大人

---

「うぐっ……」

誠一はくぐもった声を漏らしながら、瞼を震わせてそっと目を開いた。だが、あたりは真っ暗で何も見えない。手首は背中側でまとめて拘束され、足首と膝もそれぞれがっちり縛られ、おまけに猿ぐつわまで嵌められている。立ち上がるどころか助けを呼ぶことさえできない。体のあちこちに壁や荷物のようなものが触れており、かなり狭いところに押し込められているようだと思う。

体を少し振ると、鳩尾のあたりに鈍痛を感じた。

その瞬間、一気に記憶がよみがえって事の次第を理解した。楠長官に美咲とメルローズのところへ連れて行かれたあと、悠人と大地にそのときのことを報告すると、彼らは独断で警察庁へ直談判に行くと言い出し、それを制止した誠一の鳩尾を殴って気絶させたのだ。その後、体を縛り上げたうえでここに幽閉したのだろう。

それからどれだけの時間が過ぎたのか、そもそもここがどこなのか、今のこの状況では判断のしようがない。それでも落ち着いていられるのは、命の危険はないとわかっているからだ。これは直談判に邪魔が入らないための一時的な措置であり、それさえ終わればおそらく解放してくれるはずである。

「師匠！」

不意に、濡の切羽詰まった声が耳に届いた。

直後にガチャリと部屋の扉が開き、スイッチが弾かれて蛍光灯がともった。仕切りの隙間から僅かに灯りが漏れ入ってきたが、外の様子はおろか周囲さえほとんど見えない。ひとつの落ち着いた足音と、それを追う軽めの足音が、部屋の中に進み入ってくるのが聞こえる。だが、誠一の押し込められた狭い場所を開く気配はない。

「今までどこへ行ってたんですか？ お父さまや誠一も一緒だったんですか？ 櫻井さんが言っていました。誠一はお仕事から帰ってすぐ師匠に呼ばれたって。でも、探してもみんなどこにもいないし、帰ってきたのは師匠ひとりだし……」

濡が心配そうな声で問いただしている。しかし、悠人は疲れたように深く溜息をついた。

「あとで話す。今はしばらく一人にしてほしい」

「じゃあ、お父さまと誠一が無事かだけでも教えて！」

必死に追い続けるその声とともに、踏み込んだ足音も聞こえた。濡の思いつめた顔が目には浮かぶ。それでも悠人は心を動かされなかったようだ。訊かれたことに答えるどころか、まるで詰るかのように冷えた声を投げかける。

「僕のことは心配してくれないんだな」

「えっ？」

「ただの雇われの身だから当然か」

「あの」

「どうせ家族でも恋人でもないからな」

「師匠？」

濡は戸惑いを滲ませて怪訝に聞き返した。暫しの沈黙のあと、悠人は静かに吐息を落として口を開く。

「すまなかった……濡、君を傷つけるようなことをしたくはないが、今は自分を抑えられる自信がない。一緒にいたら歪んだ感情をぶつけてしまいそうだ。だから頼む、落ち着くまでしばらくのあいだ一人にしてほしい」

「……わかりました」

濡はそう答えると、一呼吸おいてから冷静に言葉を繋ぐ。

「これだけは言わせてください。私、師匠のこともずっと心配していました。心配しないわけがありません。家族じゃないけど家族も同然だと思ってますし、私にとってかけがえのない大切な人ですから」

「だが、君は僕を選ばない。君だけじゃなく……」

その続きが語られることはなかった。深い苦悶の滲んだ声を詰まらせて、何度目かわからない溜息をつく。クシャと髪を掻き上げる音が聞こえた。

「すまない……」

「うん……私、もう行きますね」

その言葉を耳にして、ずっと会話に聞き入っていた誠一はようやく我にかえった。濡に気付いてもらえるこの機会を逃すわけにはいかない。固く縛られたまま慌てて大きく身を振ると、ガタガタッ、と足と肩が周囲にぶつかり音が立った。

「……何？」

「忘れていた」

ひどく醒めた声が落とされたかと思うと、足音がまっすぐにこちらへ向かってきた。耳元でガタリと音がして仕切りが開かれる。暗かったそこに蛍光灯の光が差し込み、誠一の視界は一瞬で白んだ。その眩しさに眉をしかめて目をつむる。

「誠一?!」

悲鳴のような甲高い声が頭上から降りそそいだ。おずおずと目を開くと、今にも泣きそうに顔を歪ませながら覗き込んでいる濡がいた。遠慮がちに触れてくる彼女の手のあたたかさに、誠一は安堵して体中から力が抜けていくのを感じた。

誠一はすぐにそこから出され、手足の拘束と猿ぐつわを解かれた。

幽閉されていた場所は、悠人の部屋に備え付けられたクローゼットだった。時計を確認するとあれからもう四時間半が過ぎている。縄で縛られていた部分はもちろんだが、無理な姿勢が祟ったのかあちこちが痛い。おまけに全身がカラカラに脱水しているかのようだ。

そのことを告げると、濡がどこからかペットボトルの水を持ってきてくれた。受け取るなり勢いよく呷って流し込む。冷たい水が喉から五臓六腑に染み渡っていき、しおれた体が生き返ってくるように感じた。それでも疲労までは回復されず、いっそのまま寝てしまいたい衝動に駆ら

れるが、腰掛けているのは悠人のベッドなので横になるわけにもいかない。

「こんなひどいこと……これって、師匠の仕業なんですか……？」

「僕たちの行く手を阻もうとしたからね」

「誠一が何をしたっていうの？ ここまでやる必要があったの?!」

漣は涙目になりながら悠人を責め立てるが、彼は顔色ひとつ変えなかった。口を閉ざし言い訳さえしようとしな。そんな彼に苛立ちを募らせ、さらに前のめりになって食いかかっていく。

「何とか言ってください！」

「漣、俺なら大丈夫だから」

誠一は間に入り、彼女を刺激しないようやんわりと宥めて落ち着かせる。もちろん漣が自分のために怒ってくれたことは嬉しいし、こんなことをされた本人として腹立たしい気持ちもある。だが、今はそれに拘泥するよりも、誠一が気絶したあとに何があったのかを冷静に聞くべきだと考えた。

剛三の書斎にある打ち合わせスペースに、皆が集められた。

そこで、今朝から立て続けに起こった重要な出来事を、悠人が時系列に沿って端的に説明していく。誠一が楠長官に連れられて美咲とメルローズのところへ行ったこと、美咲は自らの意志で公安のもとに身を寄せていること、それを聞いた悠人と大地が楠長官のところへ直談判に行ったこと、大地は橘家を離れて美咲とともに暮らす選択をしたこと、メルローズを安定させられれば二人は解放されること、それが可能になるまで数ヶ月ほどかかる見込みだということ――誰も口を挟むことなく、一様に難しい顔をして彼の話に聞き入っている。ただ、武蔵だけは敵意を露わにして悠人を睨みつけていた。

話が終わると、剛三は大きく息をついた。

「勝手な行動はするなと言ったはずだ。おまえがついていながら何をやってた」

「申し訳ありません。しかし、長官と会って感触を掴むのが最善と判断しました」

「準備をしてから臨めば、美咲たちの居場所が早々に掴めたかもしれんだろう」

剛三の言葉を聞き、悠人はひどく苦しげな面持ちでうつむいた。誠一には手がかりを掴んで来なかったからと非難を浴びせておきながら、自分たちは何の準備もしていかなかったなど、二人ともどれだけ間が抜けているのだろうかと思う。

「篤史、進捗はどうだ？」

「難しいな。美咲さんが連れて来られたあたりの映像とも照らし合わせて確認してみるが、場所が突き止められる可能性は低いと思う。あちらさんもかなり警戒して慎重になってるみたいだしな」

篤史は渋面になって剛三の問いに答えた。メルローズが橘家から拉致されたときには、警察庁所有とわかる車を使っていたため、比較的容易に行き先を特定することができた。だが、今回はそれとわからない車が使用されているのだろう。

「数ヶ月、待つしかないってこと？」

今まで静かに聞いていた遥が、不意に口を挟む。

その瞬間、武蔵は沸騰したように頭に血を上らせて「ふざけるな！」と叫び、固く握ったこぶしを思いきり机に叩きつけた。鮮やかな青の瞳には激しい憤怒がたぎっている。

「橘美咲は勝手にすればいいが、メルローズはどうしてくれる?!」

「落ち着け、武蔵」

剛三は眉ひとつ動かさずそう言い、彼を見据える。

「メルローズは不安定な生体高エネルギーを抱えており、美咲はそれを安定させるために尽力しているのだ。メルローズにとっても君にとっても悪い話ではないだろう。今、メルローズを公安から救い出したとしても、暴発の危険があるのなら普通の生活は送れまい。それに、公安も彼女が安定するまでは実験を進められないはずだ」

「そんなものはただの憶測だ」

武蔵はテーブルに両肘をついて頭を抱え込んだ。あいつ殴っておくんだった、と忌々しげに吐き捨てて強く舌打ちする。あいつというのは大地のことだろう。殴っておけば事態が好転したというわけではないが、そう思うしかない彼のやるかたない心情は理解できる。

しかし、剛三は慰めるでも諦めるでもなく、凜として前を向いていた。

「ただの憶測ではなく確度の高い憶測だ。絶望するのはまだ早い。メルローズを救えるよう共に力を尽くそう。美咲が彼女を安定させるまでの数ヶ月で、可能な限りの調査をして救出計画を立てる。南野君にも引き続き協力を頼みたい」

そう水を向けられると、誠一は意識的に背筋を伸ばしてしっかりと頷いてみせる。もとよりこのまま引き下がるつもりはなかった。役に立てるかどうかはわからないが、求められる限りとことん付き合うつもりである。

遥はすっと剛三に目を向けた。

「僕たちは？」

「今のところおまえたちにやってもらうことはない。とりあえず、そろそろ学校へ行った方がいいだろうな。特に滯はもう一ヶ月も休んでおるのだから」

それを聞いて、彼女は困惑まじりの何ともいえない表情を浮かべた。こんな状況で学校なんてという気持ちが滲み出ている。しかし、滯たちが学校へ行くことは誠一も全面的に賛成である。学生時代の一ヶ月は大きい。頭はいいようなので今ならすぐに取り戻せるだろうが、長引けば長引くほど大変になる。できるだけ早く復帰するに越したことはない。

「わかった。あしたから行く」

「私もそうします……」

遥が了承すると、滯も見るからに不満そうではあるがそれに従った。剛三は満足げに大きく頷き、悠人も篤史も同調する。そういえば篤史は大学生のはずだがきちんと通えているのだろうか、と誠一は少し気になったが、自分が干渉することではないと考えて口には出さなかった。

話は一段落した。

誠一たちは、剛三と悠人を残して書斎をあとにした。篤史と遥はさっさと各々の自室へ戻っていく。武蔵も自室へ戻ろうとしていたが、滯が追いかけて後ろから呼び止めていた。何か話して

いるようだが距離があるためよく聞こえない。やがて滯は申し訳なさそうにペコリと頭を下げるが、武蔵は彼女の顔を上げさせ、優しく宥めるようにその頭にぽんと大きな手を置いた。そのまま言葉を交わしたあと、二人は小さく片手を振り合って別々に歩き出した。

滯は離れたところに立っていた誠一に気付くと、小走りで駆け寄って来た。

「もしかして、心配してくれてた？」

「少しね」

誠一がそう答えると、滯はほんのりと嬉しそうな笑顔を見せる。何の話をしていたのかも気になるが、それはあえて尋ねないことにした。だいたいの想像はついている。おそらく大地のやったことを彼女が謝罪していたのだろう。血の繋がりはないが身内であることに変わりはない。少なくとも彼女はそう思っているはずだ。

「あ、こっちだと遠回りだよ？」

考えながら歩いていると、隣の彼女が思いついたように声をかけてきた。二人の足はまっすぐ滯の部屋に向かっているが、誠一の使っている客間はその反対方向にある。しかし、わかったうえでこちらへ歩いているのだ。

「部屋まで送っていくよ」

「えっ……うん、ありがとう」

滯は少し驚いていたが、すぐ屈託のない笑顔になって嬉しそうに頷いた。誠一の腕にぎゅっと抱きついて身を寄せる。シャンプーなのかボディソープなのかわからないが、微かに立ち上るその甘い匂いにひたっていると、彼女が小首を傾げながら遠慮がちに覗き込んできた。

「ね……今日、一緒に寝てほしいな」

「えっ?!」

嬉しくないわけではないがどう考えてもまずい。なにせ隣は遥の部屋なのだ。どこか別の部屋だとしてもやはりまずい。ここは橘の屋敷なのだ。理性を総動員してどうにか踏みとどまろうとする。

「いや……その、声とか聞こえるかもしれないし……」

「あっ、そうじゃないの! そういうのじゃなくて!」

滯は慌てふためいて両手をふるふると左右に振りながら、一気に顔を紅潮させた。それから困ったように顔をうつむけると、ちらりと横目を流し、どこか恨みがましく小さな口をとがらせる。

「ただ一緒に寝るだけなんだけど……ダメ？」

「あ……ああ、そういうこと……」

先走った勘違いがたまらなく恥ずかしいが、あれは仕方ないだろう。どう考えても誘っているとしか思えない。そう自分に言い訳しつつ、誤魔化すように顔をそむけて前髪を掻き上げる。露わになった額には少しだけ汗が浮かんでいた。

「子供のころは、よくこんなふうには師匠と一緒に寝ていたの」

滯はパジャマに着替えてベッドの上に座り、枕代わりのクッションを抱えながら、過去を懐か

しむような口調でそう言った。その表情はどことなく寂しげに見えたが、我にかえったようにパッと笑顔になる。何を思っているのか誠一には察しがついた。しかしながらあえてそこには触れず、冗談めかした物言いでおどけてみせる。

「俺は保護者代わり？」

「ダメ？」

「それはそれで嬉しいよ」

不安そうに顔を曇らせた漣が、ほっと息をついた。

求められたのが保護者としての役割だとしても、漣の不安を解消する手助けになるのなら、彼女の恋人として嬉しく思わないはずがない。ただ、その気持ちの根底には悠人への対抗意識もあるのかもしれない。そんなことを考えながら、誠一は蛍光灯のあかりを落として漣のいるベッドへ向かった。

薄暗い部屋の中、二人は狭いシングルベッドで寄り添って横になった。

ただ一緒に寝るだけなら問題ないと思ったものの、こんなにも密着しながら何もしないというのは難しい。もちろん自制はするが、寝付くまでにはかなりの時間が掛かりそうである。それでも、彼女が少しでも安心して眠れるというのなら――。

「師匠、何かあったのかな」

「……多分ね」

天井に顔を向けたままぼつりと言葉を落とした彼女に、誠一は率直に答えた。あのときの様子を見れば誰でもそう思うだろう。おそらく警察庁で何かあったのだと思うが、さすがに何があったかまではわからない。父親である楠長官に挑発されたのかもしれないし、身勝手な大地と言い合いになったのかもしれない。

「今日の師匠、駄々をこねる子供みたいだった」

今まで親同然の存在だっただけに、彼女が困惑するのは理解できる。だが――。

「大人だからって立派になるわけじゃないよ。本質は子供のころとそんなに変わらない。取り繕うのが上手くなって理性的に振る舞えるようになる、それがある意味で大人になるってことかもしれない。楠さんもそうだろうね。でも、あのときはきっと許容量を振り切っていて、取り繕う余裕がなかったんじゃないかな」

「そっか……」

漣はもぞもぞと誠一の方へ体を向けると、そっと頭を寄せる。

「私、本当に師匠のことを大切に思ってるし、師匠が苦しんでるなら力になりたい。だけど、師匠を選ばなかった私が何を言っても、傷つけてしまうだけなのかな……白々しい慰めとしか受け取ってもらえないのかな……」

「それは、楠さんが自分で乗り越えるしかないだろうね」

漣がどう慰めたところで、彼自身が変わらなければ受け入れられることはない。彼に多少の同情はするが、自分と相手の気持ちが重ならないなど誰にでもあることだ。みんな折り合いをつけながら生きているのである。

寄り添う彼女の体に、少し力がこもるのがわかった。

「師匠との結婚、受け入れられたら良かったのに」

一瞬、目の前が真っ暗になった。冷たい手で心臓を鷲掴みにされたかのように、呼吸も思考も何もかもが凍りつきそうになった。いったいどうして急にこんなことを――。

「……濡、変なことを考えてないだろうな？」

必死に感情を押し殺して問いたです。

彼女はゆるく首を横に振った。

「誠一と出会ってないときに師匠に結婚しようって言われたら、少し迷うかもしれないけど、受け入れて結婚して幸せになったんじゃないかなって思う。でも、誠一と付き合っている今はとても受け入れられない……もし受け入れたとしても、お互いにわだかまりが残っちゃう気がする……上手く言えないけど……」

「わかるよ」

誠一は心から安堵して答えた。しかし、彼女は伏せた顔を震わせる。

「私はますますわからなくなってきちゃった。他人に対しての気持ちって何なんだろう。そのときの状況で変わる相対的なものなのかな。それとも私が流されやすいだけなのかな」

「相対的、か……自分としては縁と言いたいかな」

「縁？」

濡はうつむけていた顔を上げ、半分布団に埋もれた状態で小首を傾げた。

「たとえば、俺と濡がもう一年早く出会っていたら、付き合っていなかったかもしれない。もう一年遅く出会っていたら、もう楠さんと婚約していたかもしれない。でも、俺たちはあの日に会って付き合っている。それは縁があったってことなんだと思う」

「うーん、わかったような、わからないような……」

「別にわからなくても構わないよ」

眉を寄せながら混乱した様子で考え込んだ濡に、誠一は軽く笑いながら言った。運命と言う人もいるだろうし、奇跡と考える人もいるだろうが、それを縁と呼びたいだけのことだ。ほかの人に押しつけようという気はない。

「ただ、俺がこの出会いに感謝してるってことだけわかってもらえれば」

「うん、私も……ずっと今みたいに誠一を好きでいたいな」

濡は小さく肩をすくめてはにかみながら、そんないじらしいことを言う。

誠一は思わずその華奢な体に腕をまわして抱きしめた。突然のことに彼女は若干当惑している様子だが、嫌がっているわけではないようだ。少し腕を緩め、ほんのり色づいた柔らかな頬に口づけを落とす。

それだけで終わるつもりだった。しかし――。

彼女の瞳にともった燃えるような甘い熱情を目にすると、一瞬で気持ちが昂ぶり、抗いがたい何かを引き寄せられるように唇を重ねた。そのまま裾から手を滑り込ませて素肌を探る。指先に感じる柔らかな肌、首筋にかかる熱い吐息、耳に届く抑えた喘ぎ声、鼻をくすぐる甘やかな匂い――理性は溶け出し、次第に歯止めが利かなくなっていった。

「ねえ」

ガチャ、と扉が開くと同時に聞こえた不機嫌な声。

誠一は滯の胸元に顔を埋めた状態でビクリと凍りつき、思考が真っ白になった。

「ちょっ……ノックくらいしてよ！」

滯は顔を上気させたまま、大慌てではだけた胸元を掻き寄せながら、誠一を押しつけるように体を起こした。今さら無意味だと思うが、掛け布団を引いて誠一の頭を隠そうとする。扉の方から、遙の呆れたような大袈裟な溜息が聞こえてきた。

「隣に僕がいることわかってるよね」

「え……あ、うん……」

滯は今にも消え入りそうに返事をした。遙はさらに陰のある声を張る。

「誠一もわかってるよね？」

「……ああ」

誠一は頭から布団をかぶったままぼそりと答えた。顔を出して謝罪すべきかどうか迷ったが、滯が望んでいないだろうと思い、その場で身じろぎもせずじっとしていた。酸素不足のせいか、この状況のせいか、やたらと顔が火照って息苦しい。

やがてパタリと扉の閉まる音が聞こえ、足音が遠ざかっていく。

誠一はほっと安堵の息をついて体を起こした。念のため一通りあたりを見まわしてみるが、遙の姿はない。あらためて胸を撫で下ろしたその直後、ふと滯と視線が合い、気恥ずかしさから互いに目を泳がせて頬を染める。

「ごめんな」

「うん、私も……」

そう言って照れ隠しのように小さく笑い合うと、二人は再び横になった。もう暴走はしないと気を引き締める誠一の隣で、滯はそう時間をおかずにスヤスヤと寝息を立て始める。人の気も知らないで気持ちよさそうに――誠一は少し恨めしく思いながらも、まるで子供のような彼女の寝顔を見つめて柔らかく目を細めた。

## 42. 芽吹き

---

「それでは、数日中にご返答します」

「よろしく願いいたします」

日比野涼風は微笑をたたえて嫺やかに一礼すると、足元に置いた大きな鞆を手に取り、柔らかい革張りのソファから立ち上がった。同じく、上質なローテーブルを挟んで座っていた学園長も立ち上がる。鷹揚に差し出された彼の大きな手に、涼風は白くすらりとした手を差し出し、軽く握手を交わしてから応接室をあとにした。

涼風は画商として有栖川学園を訪れていた。

学園内に飾る絵画をいくつか購入したい、という要望を受け、その商談のためにここまで来たのである。今日で何度目だろうか。提示された予算に収まるものをいくつか見繕い、学園長にも気に入ってもらえ、正式決定まであと少しというところまで漕ぎ着けた。もちろん契約に至るまで気を抜くつもりはない。最終段階とはいえ、些細な失敗で御破算になることはありうるのだ。

校舎の外に出ると、涼風はスプリングコートを羽織った。

降りそそぐ昼下がりの陽光は柔らかく、掠める空気はほんのりと暖かい。本格的な春到来にはまだ至っていないが、今日のような小春日和も次第に増え、木々にも芽吹きの兆候が見え始めていた。賑やかな声につられて正面玄関の方に振り向くと、仲間と喋りながら下校する生徒たちの姿が目に入る。その潑刺とした若々しさが懐かしくて、思わずふっと口もとに笑みをのせた、そのとき――。

「涼風さん?!」

驚きまじりの声で自分の名前が呼ばれた気がした。視線を移すと、下校する生徒たちの群れから飛び出した二人が、こちらへまっすぐに駆け寄ってくるのが見える。二人とも涼風の見知った人物だった。

「滯ちゃん、遙くん、久しぶりね!」

「お久しぶりです!」

滯は腰近くまである艶やかな黒髪をなびかせながら、弾けるような笑顔を見せる。後ろからついてきた遙は相変わらずの無表情だが、それでも涼風と目が合うと小さく会釈をしてくれた。

「どうしたんですか?」

「仕事で来たのよ」

滯の質問に、涼風は肩から提げた大きな鞆を見せながら答える。

「こんな偶然もあるんですね」

「それが偶然でもないのよ」

「えっ?」

滯はきょとんとして目を瞬かせた。その様子が可愛くて、涼風は思わずクスッと笑みを零す。

「この仕事は悠人さんの紹介なの」

「え……あ、そういうこと!」

滯はパッと顔を輝かせて両手を合わせると、ニコニコしながら何度も大きく頷いた。

「諦めるなんて言ってましたけど、仲良くしてるんですね」

「そういうのじゃないわよ」

彼女の言うとおりであれば良かったのだが、残念ながら誤解である。涼風は一抹の寂しさを感じつつ肩をすくめた。

「ほら、あのとき一週間も外に出してもらえなかったじゃない？ そのせいで大切な商談を駄目にしちゃってね。だからその埋め合わせってことみたい。悠人さんからは事務的な電話を数回もらっただけで、会ってさえいないの」

「そっか……まあ、涼風さんと付き合ったら、あんなことは言わないよね……」

滯はがっくりと肩を落として独り言をつぶやいた。望まない結婚を強られる彼女には同情するが、悠人に別の恋人が出来ることは当分ないように思う。あの晩、彼がどれほどの想いを滯に抱いているか、嫌というくらい思い知らされたのだ。

「あんなことってどんなこと？ 愛を囁かれたり？」

少し羨ましくて、悪戯っぽく冷やかすように問いかけた。

滯はほんのり頬を上気させながらあたふたと答える。

「あ、その、結婚とかいう話はなくなった……のかな？ まだはつきりとはわからないけど、彼氏とのことを認めてくれて、私の意思も尊重してくれて。でも、私が師匠を選ばなかったせいで傷つけちゃって、すごくまいっているみたいで、なんかもうどうしたらいいかわからなくて……」

予想もしなかった話で涼風は目を大きくした。しかし、すぐにパッと顔を輝かせて両手を合わせる。

「あ、駆け落ち作戦が上手くいったのね」

「駆け落ちじゃないですっ！」

滯は勢いよく反論すると、辟易とした様子で口をとがらせた。

「もう、みんなして決めつけるんだから……」

「ごめんなさい、てっきり彼氏とのことを認めてもらうために駆け落ちしたんだと思ってたわ。悠人さんと結婚させられそうになって焦っちゃったのかなって。週刊誌にも、本当は誘拐じゃなくて駆け落ちだって書いてあったし」

週刊誌の内容はどれも証拠のないただの憶測であるが、それなりに筋は通っていた。警察があまり真剣に動いていないのは、誘拐ではなく合意の家出であり、事件性はないと判断されたからだろう。そして、橘会長もそのことがわかっていたからこそ、三億円という報奨金を提示し、自力で見つけ出そうとしたのではないかと。

「そもそもあの人は彼氏じゃないですから。その、あまり詳しいことは言えないんですけど……あの人は親戚で、橘に要求があって私を人質にしたんです。でも、今はもう和解してるので心配いりません」

「つまり、お家騒動だったってこと？」

「ん、まあ、だいたいそんなところですよ」

滯は、隣の遥にちらりと視線を流しながら口を濁す。橘財閥ともなれば、ドラマで見るような骨肉の争いもあるのかもしれない。そして、それはあまり外部の人間には知られたくないことだろう。

「あ、ここだけの話にしてくださいね」

「わかってるわ」

慌てて言い添えた彼女に、涼風は安心させるようににっこりと微笑んで答える。もちろん口先だけの返事ではない。橘家には二度にわたって大きな恩を受けたのだ。濡に頼まれずとも、その彼らに仇なすことをするつもりはなかった。

「濡、遥」

濡たちの背後からそう呼びかけたのは悠人だった。ダークグレーのビジネススーツに身を包み、涼風には見せたことのない優しい微笑を浮かべている。濡は短いプリーツスカートをひらめかせて振り返り、師匠！と屈託のない笑顔で心から嬉しそうに声を弾ませた。一方、遥は無表情を崩すことなく少しだけ振り向いている。

「駐車場で待っててって言ったはずだよ」

「すみません、涼風さんを見かけたものですから」

濡は肩をすくめながら後ろの涼風を示した。それを受けて、涼風はとっておきの笑顔で挨拶をする。

「お久しぶりです、悠人さん」

「お仕事ですか？」

「ええ、ご紹介どうもありがとうございました。おかげで近いうちにまとまりそうです。正式に契約を交わすことができましたら、前回の依頼の件も含めまして、あらためて橘家の方へ御礼に伺いたいと思います」

涼風は滑らかにそう言い、丁寧に一礼して正門の方へ足を進めようとしたが、お待ちくださいと悠人に呼び止められて振り返った。感情の読めないその顔をじっと見つめながら、小首を傾げる。

「よろしければ車でお送りします」

「.....それではお言葉に甘えて」

どうしてこんな申し出をしてくれたのか少し不思議に思ったが、おそらくただの親切心だろう。深い意味はないはずだ。期待しそうになる自分にそう言い聞かせながら、あえて営業的な笑顔を取り繕って返事をする。それでも、無意識に浮き立つ心までは抑えようがなかった。

駐車場には、悠人の黒い中型セダンがとまっていた。

彼に促されて涼風がその助手席に座ることになり、濡と遥は後部座席に座る。二人を差し置いてさほど親しくない自分が助手席なんて、と少し戸惑ったが、運転する彼の姿を間近で見られるのは素直に嬉しい。ハンドルを握ってエンジンを掛ける彼を、シートベルトを締めながら横目でこっそりと見つめた。

「毎日、悠人さんが送り迎えを？」

「今はマスコミが騒いでますからね」

彼は前を向いたまま、ゆっくりと車を発進させながら答えた。橘家から学園までは徒歩でも十分に通える距離なので、随分と過保護に感じたのだが、そういう事情なら面倒でも送迎せざるを得ないだろう。

橘の裏門と思われるところで濡と遥を降ろすと、車は再び走り出した。

「画廊の方までお願いします」

涼風はちらりと横目を流して告げる。彼は涼風の自宅住所など知らないはずなので、元々そのつもりかもしれないが、念のため自分の希望を明確に伝えておきたかった。急ぎではないが、早めに片付けておきたい仕事があるのだ。今のうちにと頭の中でその段取りを考え始める。が――。

「少し、お時間よろしいですか？」

「……ええ」

初めからこのために車で送るなどと言い出したのだろうか。何をするつもりなのかはわからないが、考えられるのは仕事についての話くらいだ。悪い話でなければいいのだけど――涼風は前を向いたまま、紅の引かれた小さな唇をきゅっと引き結んだ。

二十分ほど車を走らせた先にあったのは喫茶店だった。控えめに蔦の這った外壁に、煙突のついた三角屋根という、古めかしくも趣のある煉瓦造りの建物である。看板はあまり目立たないところに掲げられており、一見しただけでは喫茶店とわからないかもしれない。

悠人が重厚感のある扉を開き、涼風も続いて中に入る。

そこには外観同様のレトロな雰囲気漂っていた。音楽のひとつも流れていない静かな空間に、天井から吊された暖色の照明が柔らかく灯り、煉瓦造りに調和した内装が浮かび上がっている。そして、正面には年代物の柱時計や小物類が置かれ、カウンターの向こうには使い込まれた器具が並び、調度品にも古そうだが格調高いものがそろっている。好みはあるだろうが、涼風には一目で居心地の良さそうな店だと感じられた。

窓際に客が一組いたが、悠人は彼らから一番遠い奥まったところの席を取った。

「ホットコーヒー」

「私も同じものを」

水とおしぼりを運んできた三十前後と思われる男性の店員に、二人ともメニューを見ることなく注文した。店員が戻っていくと、悠人はおしぼりで手を拭き始めたが、涼風は先にグラスの水に手を伸ばした。自分でも気付かないうちに喉が渴いていたのだろう。平静を装えているとは思いますが、やはりそれなりに緊張や不安は感じているのだ。

「先日の紹介の件ですが」

「はい」

涼風が微笑を浮かべると、悠人はあらためて姿勢を正した。

「簡単に話を通したきり放置状態になってしまい、申し訳ありませんでした。今日にでもこちらから連絡を入れるつもりでしたが、それより先にこのような形でお会いしてしまい、さすがにお気を悪くされたのではないかと……」

「いえ、そんなことはありません。ご紹介くださっただけで十分ですし」

彼がそんなことを気にしていたとは夢にも思わず、涼風は密かに驚いた。紹介だけで十分というのは本心である。その紹介をきっかけにして上手く話を進め、契約までもっていくのは、あくまで画商である自分の仕事なのだ。

「それより、どういったご用件なのでしょう？」

話題を変えようとしたその口調に焦りが滲んだ。早く本題に入ってほしい気持ちが大きく、冷静でい

ることが次第に難しくなっている。何を切り出されるのかと気が気でならない。しかし、悠人は不思議そうな面持ちで見つめ返して言う。

「ですから、一言お詫びがしたくて」

「.....あの、それだけのために？」

「ご迷惑でしたか？」

「いえっ、迷惑なんてことは」

涼風はふるふると首を振って否定すると、小さく肩をすくめる。

「わざわざ喫茶店にまで来てそれだけとは思わなかったものですから。そもそも謝られるようなことではないと思っていましたし。悠人さんに事情があることも察しがついていましたわ。滯ちゃんの件でお忙しかったんですよね？」

「はい.....」

紹介を受けた直後に滯の誘拐事件が起こったのだから、それどころでないことは容易に想像がついた。当時は駆け落ちだと思っていたが、それでも悠人にしてみれば大変な事件であり、こちらの話など失念しても無理はないと――。だから、涼風の方から連絡を取ることも遠慮していたのだ。

もっとも実際には駆け落ちではなかったらしい。だとすれば、悠人はどうして滯との結婚を諦めたのだろうか。そういえば理由までは聞いていなかった。涼風は少し前屈みになり、じいっと覗き込むように悠人の瞳を見つめる。

「何か？」

「滯ちゃんとの結婚、もう諦めたの？」

その質問に、悠人は大きく目を見開いて息を詰めた。やがて観念したように深く溜息を落とすと、腕を組んで椅子の背もたれにどさりと身を預けた。

「滯から聞いたのか」

「心配していたわ」

「だろうな」

今までとは打って変わって急に粗野な言葉遣いになった。こちらが素の彼なのだろう。以前からその片鱗が覗いていたことはあったので、特に驚きはしないが、ここまであからさまなのは初めてかもしれない。もちろん幻滅などしていない。むしろ、ようやく素顔が見られて嬉しいとさえ感じていた。

「ねえ、どうして諦めたの？」

「そうだな.....彼よりも滯を幸せにする自信がなくなったのかもしれない。自分がいかに駄目な人間か忘れようとしてきたが、この一ヶ月で嫌というほど思い知らされた」

うつむきぎみの彼の顔に自嘲が浮かんだ。具体的に何があったのかまではわからないが、その口ぶりから察するに、自尊心を大きく傷つけられる出来事があったのだろう。それも一度や二度ではなく何度も。そのうえで滯との結婚を諦めると決断を下したのであれば、相当つらい思いをしているはずだ。

「悠人さんは駄目な人間なんかじゃないわ」

「君に何がわかる」

「私、見る目には自信があるの」

涼風は自分の目を指さしてにっこりと答えた。絵画についてはもちろんのこと、人間を見る目も備わ

っていないければ、画廊のオーナーなど到底やってはいけない。眼力が重要な商売道具のひとつなのだ。

「いつか大失敗しそうだな」

「信じてくれないのね」

悠人の辛辣な揶揄にむうっと口をとがらせる。しかし、彼は腕を組んだまま視線だけを落とした。

「もう諦めなければならぬと頭では理解しているにもかかわらず、いつまでも執拗に執着し続ける。私はそういう異常な人間だ。濡のことも、諦めたふりをしながら胸の内ですっと燻り続けるに違いない」

「じゃあ、私たち似たもの同士ね」

その意味を測りかねたように怪訝な目を向けてきた悠人に、涼風は左手を胸にあてて微笑みかける。

「私も、ずっと悠人さんへの気持ちが燻り続けていたもの」

幼いころにたった一度だけ会った人を、二十数年もの間ずっと——悠人よりよほど異常といえるかもしれない。誰と付き合っても悠人の幻が消えることはなかった。諦めたつもりでいる今も気持ちは残ったままである。だが、それが間違っただことだとは思いたくなかった。

先ほどの男性店員が、注文したホットコーヒー二つを運んできた。それぞれの前にコーヒーカップと小さなミルクポットを並べると、ごゆっくりどうぞ、と伝票を裏返しに置いてから軽く一礼して戻っていく。

二人とも、ブラックのままコーヒーカップを手を取った。

悠人は一口つけただけでソーサに戻すと、再び腕を組み、ひどく真剣な面持ちになって考え込んだ。そんな彼を、涼風は少しずつコーヒーを口にしながら、どうしたのだろうと上目遣いで窺っていた。

「日比野さん」

「はい」

ふいと顔を上げた悠人に呼びかけられて、涼風はびくりと返事をした。カップを戻し、微かな緊張を覚えながら正面の悠人と向かい合う。彼は両手を膝に下ろして背筋をまっすぐ伸ばし、真剣な眼差しで、涼風の双眸を射抜くように見据えていた。

「一晩だけ、という話はまだ有効でしょうか？」

「……………はい??」

目が点になる、というのはこのことを言うのだろう。確かに酔った勢いでそんなことを口走った記憶はあるが、まさか今になって持ち出されるとは思いもしなかった。しかも日中の喫茶店で口にするような話題ではない。けれど——話の流れを反芻し、彼が何を思ってこんなことを訊いてきたのか見当はついていた。

「そんなことで濡ちゃんは吹っ切れないわ」

「やってみなければわからないだろう」

「……………」

なるほど、濡が心配するのも無理からぬ状態のようだ。涼風は目を細めて僅かにうつむいた。

「私は、そんな理由で抱かれるのは嫌よ」

「それは、そうだな……すまなかった……」

悠人は勝手なことを言った自身を責めるように、眉を寄せて謝罪した。

ちょっと、もったいなかったかな——涼風は上目遣いでちらりと窺いながらそんなことを思う。彼がその気になるなどもう二度とないかもしれないし、自分としてはせめて思い出だけでも欲しかった。たとえ「そんな理由」だろうと構わない。にもかかわらず拒否したのは、そんなことで悠人は救われない、むしろさらに苦しむことになる、という確信に近いものがあったからだ。

「でも、それ以外であれば喜んでお受けするわ」

「それ以外？」

「たとえば、今みたいに喫茶店でお話しするとか、一緒にごはんを食べに行くとか、美術館の展示を見に行くとか、テーマパークに遊びに行くとか、避暑地にのんびり静養に行くとか、豪華客船で地中海周遊クルーズとか」

次第に声を弾ませる涼風に、悠人はじとりと呆れたような視線を送った。

「それは君の願望だろう」

「バレた？」

涼風は悪戯っぽく目をくりっとさせて肩をすくめた。つられるように悠人もふっと口もとを緩める。しかしながらすぐに表情を険しくしてうつむくと、じっと考え込みながら、木目調のテーブルに肘をつき両手を組み合わせた。

「せっかくだが、これから数ヶ月はそういう余裕もないと思う」

「じゃあ、忙しい時期が過ぎたらでいいから誘ってくれる？ デートってわけじゃないのでお気軽にね。そのとき私にまだ彼氏がいなかったら、悠人さんの憂さ晴らしに付き合っただげるわ」

涼風があえて軽い調子でそう言うと、悠人は微妙に眉を寄せた。

「.....彼氏を作るつもりなのか？」

「未来は誰にもわからないってこと」

涼風はまだ熱いコーヒーをすました顔で口に運んだ。

世間的に言えば、数ヶ月もあれば新しい恋人が出来ても不思議ではない。涼風にだってその気になれば出来るかもしれない。今となっては男性と出会う機会などそう多くないが、それでも知り合った男性から、ときには知らない男性から、アプローチをされることは度々あるのだ。けれど——。

きっと、待っちゃうんだろうな。

一応は諦めたつもりでいたのに、こんな展開になっただけで期待する気持ちを抑えられなくなりそうだ。報われる保証はどこにもない。それでも彼と一緒に楽しいひとときを過ごせるのなら十分である。彼のつらい心情につけこんでいることを自覚しながらも、涼風はこれまでにないくらい気持ちが高揚するのを感じていた。

## 43. 束の間の日常

---

「君は……非常識にも程があるだろう」

「承知の上でお願いしています」

誠一はとある頼みごとをするために、悠人の部屋を訪れていた。

応接用のソファやテーブルはないからとベッドに座らされており、正面には椅子をまわして膝を突き合わせてきた悠人がいる。初めのうちは彼も穏やかに応対してくれていたのだが、誠一が頼みごとを口にした途端、その表情を大きく曇らせて不快感を露わにしたのだ。それでも怯まない誠一を見ると、ますます顔つきを険しくして冷ややかに言い返す。

「こんなときに楽しむなど言っているではありません。むしろ、濡たちには普段どおりの生活をしてほしいと思っています。南野さんもたまには息抜きをすればよいでしょう。ただ、濡は高校生です。男性との外泊など認められるとお思いですか？」

その声に非難めいた色がまじった。当然の反応だろう。誠一としても想定の範囲内だ。

「通常ならそうでしょうが……」

「今さら、と言いたいのですか？」

理論武装を展開しようとした矢先に挫かれてしまい、言葉に詰まる。自分の考えはすべて見透かされているのだろうか。胸中に湧き上がったその不安を証明するかのごとく、悠人は射るような眼差しを向けて続ける。

「確かに、夜中に濡をあなたのところまで送り届けたことはありました。ですが、あのときは濡の気持ちを慮ってそうせざるを得ないと判断したからで、今とは明らかに状況が違います」

「それは、そうですが……」

誠一はどう反論しようかと頭を巡らせる。追いつめる言葉なら思いつかないでもなかったが、下手を言って取り返しのつかなくなる事態は避けたい。悠人との関係を悪くするわけにはいかないのだ。やはりここは素直に引き下がった方が賢明かもしれない。そんなことを考えていると――。

「いいでしょう」

「えっ？」

発言の意味を測りかねて、誠一は怪訝に聞き返した。

悠人は感情の読めない面持ちで口を開く。

「今回だけ特別に許可します。濡にも南野さんにも随分とつらいことを強いたので、その罪滅ぼしだと思ってください。ただし、もう二度と許可しませんからそのつもりで。濡との交際までは反対しませんが、節度のある付き合いをお願いします」

「……ありがとうございます」

結局、今回も折れたのは濡のためということだろう。自らの手で両親の罪を曝くようなことをさせられ、そのせいで一ヶ月近く拉致監禁されてしまい、ようやく家に戻ってくれば衝撃の真実が発覚、両親の問題が解決していないにもかかわらず学校へ行き、一ヶ月の欠席を取り戻すために家でも勉強づけ、その間に怪盗ファントムの仕事までやらされていた、そんな彼女の願いを却下するほど非情にはなれなかったのだ。

しかし、彼女に想いを寄せる一人の男としては受け入れがたいに違いない。先日、荒ぶる気持ちを濡にぶつけていたことを思い出し、顔を曇らせながら物言いたげにじっと彼を見つめる。

「……何でしょう？」

「その、私が言うのも何ですが……大丈夫ですか？」

遠慮がちに尋ねると、悠人はふっと自嘲の笑みを漏らして目を伏せた。

「少なくとも濡には、二度とあのような醜態をさらさないつもりです。もう諦めもつきましたし……剛三さんから聞きました。あなたが剛三さんに濡の結婚について尋ねたこと、そして剛三さんがどう答えたのかということも」

剛三は悠人と濡を結婚させたがっている――誠一は、濡と遥からそういう話を聞かされていた。だが、二人とも剛三から直に聞いたわけではないという。なので、実際のところはどうかははっきりさせようと、先日、思い切って本人に心積もりを尋ねてみたのだ。

彼が言うには、悠人と濡に結婚してほしいと思っていることは事実である。何年か前から悠人の気持ちには気付いており、剛三としても悠人に婿として橘を継いでほしいと考え、何度も悠人に行動を起こすよう発破を掛けたり、陰ながらあれこれと手助けもしてきたが、濡の意思を無視してまで結婚させようとは考えていない。濡の気持ちが悠人に向くことを願っていたが、もはやそれも難しいと諦めており、濡の結婚相手は本人の意思を尊重しようと考えている。もっとも、ろくでもない男ならば家族として反対するが、誠一であれば特に反対する理由はないと――。

「濡の幸せを望む気持ちは誰にも負けないつもりです。剛三さんにも、あなたにも」

悠人はやにわに真剣なまなざしになると、静かにそう宣言した。

それについて反論しようという気はさらさらしない。もちろん誠一も決して負けてはいないつもりだが、彼には保護者としての長い年月があるのだ。そのくらいの自負があるのも当然といえるだろう。肯定も否定もせずただじっと見つめ返すと、彼はこれまでに聞いた何よりも重い言葉を紡ぐ。

「濡を、幸せにしてくれますよね」

「……はい、必ず」

誠一は無意識のうちにずっと背筋を伸ばし、若干の緊張を覚えつつも、彼から目を逸らすことなく真摯に答えた。

「師匠がよく許してくれたね。駄目だと思ってたからビックリ」

「こんなことなら小旅行でも考えておくんだっただな」

「ううん、こういう普通っぽいのがいいの。普通がいちばん幸せだもん」

穏やかな陽光が降りそそぐ中、濡は晴れやかな笑顔で振り向いてそう答えた。いつもどおりの自然な口調ではあるが、彼女の境遇を思うとやけに重く感じられる。しかし、ここで持ち出すべき話ではないと思い、誠一はただ柔らかく微笑み返すにとどめた。

今日は映画を観るということくらいしか決めていない。そのあとは街中をぶらぶらしながらのんびりと過ごし、どこかで夕食をとったあと、深夜になるまえに誠一の部屋に来てもらえばいいだろう。外泊の許可が出る可能性は低いと思っていたので、特別なことは何も考えていなかったのだ。もっとも、女子高生とふたりでホテルや旅館というのも難しいので、結局は誠一のところに泊まるしかなかったのかもしれないが。

「私、これがいいな」

シネコンの上映作品一覧の中から滯が指さしたものは、近未来SFと思われる洋画だった。二人とも映画に詳しくなく、特にこだわりもない。滯はSFやアクションなどのハリウッド大作を好み、誠一もラブストーリーよりはそういう方が好きなので、何を見るか決めずに来て揉めることはなかった。

カウンターで最後列の座席を指定してチケットを買い、開場を待って座席に着く。あたりを見まわしてみると、十代、二十代から五十代くらいまで幅広い年齢層の人たちが来ている。席は半分ほど埋まっているだろうか。公開から一週間が過ぎてこれだけ入っていれば、それなりに盛況と云えるだろう。

誠一は、この映画がどんな話なのか知らなかった。

おそらく滯も知らなかったのだろう。知っていれば選ばなかったに違いない。

簡単にいえば、研究者である両親に実験台にされていた少女の話だ。少女は両親とともに幸せに暮らしていたが、ある日、記憶と現実の乖離に小さな疑念を感じる。そんなとき謎の男が現れ、少女は半信半疑ながらも男の助言に導かれていき、やがて自分の過去がすべて作られた偽の記憶であることを知る。過去の記憶が人格に与える影響を研究している両親が、何度も様々な記憶を上書きし、その都度どう人格が変化するかを実験していたのだ。少女は謎の男とともに現実と夢を行き来し、本当の過去と彼女自身の人生を取り戻す、という話である。

全体としてはそう似ているわけではないが、両親に実験台にされていた少女、というあたりがどうしても滯の境遇と重なってしまう。映画とは違い、滯たちは初めから実験のために作られたのだからなお悪い。それなりの時間が経過しているのならともかく、今はまだ生々しすぎるだろう。

「面白かったね」

エンドロールまで流れ終わり館内が明るくなると、滯は椅子から立ち上がってそう言った。笑みを浮かべているものの、泣いていたことは一目瞭然だ。目が少し潤んだまま充血しており、睫毛も濡れている。しかし、誠一はあえてそこには触れず「そうだな」とだけ答え、彼女の手を引きながら若干足早に映画館を後にした。

「さっきの映画、私なら大丈夫だから気を遣わないでね」

映画の後に入ったカフェで、滯はショートケーキにフォークを刺しながら明るくそう言った。すっかりいつもの彼女に戻ったように見えるが、無理をしていないとも限らない。誠一は「ああ」と曖昧に答えてコーヒーを口に運んだ。

「私の場合はもう真実がわかっちゃってるし、助けてくれる仲間もたくさんいるんだもん。あ、でも、自分の記憶が作られたニセモノで、これも現実じゃなくて夢だったら、って考えるとすごく怖いけど……」

滯は難しい顔になってうつむき、フォークを持つ手を止めた。

誠一はふっと表情を和らげてコーヒーカップを戻す。

「大丈夫、少なくとも俺は現実だから」

「そういう人ほど信じちゃいけないって」

滯はいたずらっぽく唇に笑みをのせて言い返した。それは、先ほどの映画でとある人物が口にした

セリフである。即座にそれだけの反応ができるのならもう大丈夫だろう。誠一はフォークを手に取り、ショートケーキのイチゴを突き刺しながら口の端を上げる。

「じゃあ、あとでたっぷり信じさせてあげるよ」

「どうやって……あっ……」

最初はきょとんと不思議そうに聞き返した漣だが、すぐにその意図するところに思い至ったようで、頬を染めながら一人あたふたと目を泳がせる。しかし、やがてそろりと上目遣いで誠一を見つめると、小さくはにかむような笑顔を見せて頷いた。

カフェを出ると、空は薄曇りになっていた。

雨の予報ではなかったので、普通の傘はおろか折りたたみ傘さえ持ってきていない。漣も小さなハンドバッグだけなので持っていないだろう。せめて、外を歩いているときに降り出さないよう祈るしかない。

そういえば、漣が初めて誠一の部屋に来ることになったのは、突然の通り雨に降られたからだったな、とふいに懐かしく思い出した。去年の春休みだからちょうど一年前のことだ。あのときに、本当の意味で彼氏彼女になったのかもしれない。少なくとも誠一の意識としては――。

「ねえ、誠一、これからどうするの？」

「漣はどこか行きたいところある？」

「んー、じゃあ雑貨屋さん。見るだけだけど」

漣はそう答えてくすっと笑う。彼女自身の部屋はいたってシンプルで、雑貨などほとんど置かれていないが、店であれこれ見るのは楽しいようだ。これまでも雑貨を見ながら目を輝かせていたことは度々あった。

「じゃ、あっちに渡ろう」

確か向かいのビルに雑貨屋が入っているはずだと思い、漣の手を取り、ちょうど歩行者信号が青になったスクランブル交差点に向かう。足を踏み入れたそのとき、ジャケットの内ポケットで携帯電話が震え出した。半分ほど取り出して背面ディスプレイに目を落とすと、そこには「楠長官」と表示されていた。何だろうと思いつつ、二つ折りの携帯電話を片手で開いて通話ボタンを押す。

『南野君、いま何をしている?!』

「街中を歩いてますが……非番なので……」

常に冷静沈着な楠長官とは思えないほど焦燥した声に、少なからぬ戸惑いを覚え、質問の意図がわからないまま曖昧な答えを返す。非番であることは彼も知っているはずだ。翌日出勤してから何をしていたか尋ねられることはよくあるが、わざわざ非番のときに電話で問いただされたのは初めてである。

『ということは、君は仲間ではないのだな?』

「……仲間って……どういうことですか?」

楠長官はひどく気が動転しているようで、いまだに何を言っているのか要領を得ない。怪訝に尋ね返すと、電話の向こうでゆっくりと呼吸するような音が聞こえ、そして幾分か冷静さを取り戻した声で説明が継がれた。

『溝端が我々を裏切った。美咲さんと実験体を攫って姿をくらましたのだ』

「えっ……」

スクランブル交差点の真ん中で足が止まった。携帯電話を持つ手に力がこもる。滯が手を繋いだまま心配そうに覗き込んできたが、今の誠一に彼女を気遣うだけの余裕はなかった。さまざまなことが頭を駆け巡っていく。周囲の音が急速に遠くなり、まるで自分だけが雑踏から切り離されたかのように感じた。

## 44. 捨て身の覚悟で

楠長官の電話を受けて、滯とのデートは中止せざるを得なくなった。

誠一はその足で警察庁に向かう。滯も長官の意向を受けて連れて行くことになった。もちろん本人が嫌がれば無理強いはしないつもりでいたが、逆に彼女の方から一緒に行きたいと頼んできたのだ。母親が攫われたのだから当然かもしれない。

執務室に入ると、楠長官は執務机で両手を組み合わせて険しい顔をしていた。

そして、その向かいで背筋を伸ばして立っていたのは――。

「お父さま！ 無事だったんですね！！」

後ろ姿を目にするなり、滯は長い黒髪をなびかせながら駆け寄っていった。しかし、彼は以前に見たときよりもかなりくたびれている印象を受ける。シャツの袖や背中がうっすらと汚れているのも一因だろう。その表情にも隠しきれない疲労と失意が浮かんでいた。

「美咲は守れなかったよ」

「何があったんです……？」

電話での話を思い出したように、滯の顔が曇った。

大地は難しい面持ちでうつむいた。代わりに、執務机の方から楠長官が答える。

「今朝のことだ。私の部下である溝端が大地君をスタンガンで気絶させ、手足を縛り上げたうえで、美咲さん、石川医師、実験体の少女を連れ出して姿をくらました」

石川医師は、美咲の助手として初期段階から共同で研究を続けてきた人物である。米国大使館でも彼女と一緒にいたらしい。前回、公安の研究所へ連れて行かれたときには姿を見なかったが、やはり行動をとともにしていたということだろう。

楠長官は一呼吸おいて続ける。

「大地君にスタンガンを突きつける直前に言ったそうだ。『ようやくすべての準備が整いました。これからは私のやり方で国を守ります』とな。溝端の側についていると思われる人物は二名。いずれも若手の急進派といったところだ」

「急進派？」

滯が小首を傾げて聞き返すと、彼は重々しく頷いた。

「我々は国の防衛のために生体高エネルギーを使おうと考えている。あくまで攻撃に対する防御もしくは反撃という意味でだ。だが、あやつらは攻撃されるより先に攻撃をしかけるという考えでな。特に小笠原沖の海底に棲息する生命体は脅威であり、殲滅すべきだと――時期、溝端はそう主張していた。残りの二人もその賛同者だ。私の説得で考えをあらためたものと思っていたが、甘かったようだな」

そう言って組んでいた手を解き、片肘をついて頭を押さえる。

「彼の父親は小笠原のフェリー事故で亡くなっている。だからこそ彼を採用してこの任務に就いてもらったのだ。あとで聞いた話だが、彼の方もフェリー事故の真相が知りたいがために、当てもなく警察庁の採用試験を受けたのだと。その熱意を買っていたのだがな……いささか度が過ぎたようだ……」

「復讐、ですかね」

誠一は口もとに手を添えて眉を寄せる。溝端の父親の話聞いたのは初めてだが、何の罪もない家族が亡くなったとなれば、そんな考えを持って不思議ではないと思う。だが、大地は反感を含んだ冷ややかな視線を流し、腕を組みながら異論を唱える。

「そういう気持ちもあるのかもしれないが、遺族だからこそ恐ろしさを実感したんだろう。遺体が見つからなかった人も一部しか見つからなかった人も大勢いる。焼けただけのも、焼き切れたもの、頭や手足の吹き飛んだものもたくさんあった。警察や政府がいくら隠蔽しようとしても、ただのフェリー事故じゃないことはわかるはずだ。あの惨劇を目の当たりにした僕としては、起こした奴らを殲滅させたい気持ちはわかる。彼以上にね。人間そっくりの人間とは別の生物という得体の知れなさが、なおのこと恐怖を煽っているんだろうな」

「お父さま……」

滯は微かに声を震わせる。そう、彼女の半分はその得体の知れない生物なのだ。うっかり口を滑らせたのか意識して言ったのかは判然としないが、大地は微塵も動揺を見せることなく、にっこりと笑みを浮かべて細い肩を抱き寄せた。縋るようにシャツを掴んで顔を埋めた彼女に、そっと優しい囁きを落とす。

「滯は、僕と美咲の大切な娘だよ」

「うん……」

まるで理想的な父娘のようなやりとりだが、彼の方には、滯が娘であるという認識は希薄なはずだ。なのに、よくもそんな白々しいことを――誠一は不快感を覚えるが、滯の前でそれを口にするには出来ない。僅かに眉を寄せて物言いたげな視線を送っていると、それに気付いた彼は、滯の頭を抱き込んで挑発的な冷笑を浮かべる。

「何か？」

「いえ……」

二人の短いやりとりに不穏なものを感じたのか、滯は不思議そうに顔を上げて、それぞれに問いかけるような視線を送った。誠一は何も答えられずに固まってしまうが、大地はちらりと滯を一瞥したあと、どこか遠くを見やりながら静かに口を開く。

「僕は家族を何よりも大切に思っているんだよ。溝端君があつた国を滅ぼしたいのなら勝手にすればいい。どちらがどうなろうと僕の知ったことじゃない。ただ、許可なく美咲を利用することだけは許さない……絶対に」

漆黒の瞳が、鋭くぎらりと光った。

自分に向けられたものではないとわかっていながら、誠一はぞくりと身震いした。結局、彼が何よりも大切に思っているのは美咲ただ一人なのだろう。しかしながら難癖をつけたところで何も始まらない。反論はせず、楠長官の方に向き直って建設的に話を進めていく。

「行き先に心当たりはありますか」

「防犯カメラや交通カメラの映像から割り出そうとはしているが、いかんせん人出が足りん」

楠長官は苦々しく顔を歪めた。この件は公安の中でも最高機密事項とされているので、関わっていた人間はそう多くなく、応援を呼ぼうにも大半は他の任務に就いている。もちろん誰でもいいというわけではない。それなりの知識と経験がなければ難しいし、機密保持のため外部の人間は避けたいは

ずだ。しかし――。

「篤史や橘のみんなを呼びましょう」

「私もそれが最善だと思います」

滯が提案し、誠一がすぐさまそれを後押しする。もともと同じことを考えていたのだ。篤史や悠人であれば、すでにおおよその事情を把握しているため、今さら機密だからと躊躇する必要はないし、説明する手間も時間も大幅に省けるだろう。

「公安十人より篤史一人の方が役に立つのは確かだな」

大地がククッと笑って茶々を入れる。

楠長官は難しい面持ちで思案を続けていた。やがて、踏ん切りをつけるように大きく吐息を落とす。

「南野君、手配を頼む」

「はい」

誠一は返事をするなり懐から携帯電話を取り出し、その場で悠人に発信した。電話に出た彼にかいつまんで事情を説明し、皆に、特に篤史に警察庁まで来てもらいたいと要請する。少し待たされた後、剛三には抜けられない仕事があるので無理だが、篤史は今すぐに連れて行くと答えてくれた。

「禁止区域に侵入するのも楽しいけど、これだけの情報を使い放題ってのもいいもんだな」

篤史は上機嫌でノートパソコンを覗き込みながら声を弾ませた。それでも手は止まることなく軽快にキーボードを叩いている。革張りのソファにローテーブルという、作業には不向きな環境のように思われるが、当の本人はまるで気にしていないようだ。そんな彼に、楠長官は執務机からじとりと訝るような視線を送る。

「くれぐれも目的外の使用はせぬように。トラップやバックドアも仕掛けるなよ」

「わかってるって」

篤史はきわめて軽い調子で受け流した。彼の両隣には武蔵と悠人が密着して座り、後ろからは滯と遥と大地が覗いている。誠一は楠長官が座っている執務機の脇に立ち、その様子を眺めていたが、篤史以外はみな思い詰めた顔をしていた。もちろん篤史も事の重大さは理解していると思うが、美咲たちとの関係が希薄なため、他人事のような態度になるのは致し方ないだろう。

「今、埠頭の倉庫にいるみたいだな……ここだ」

そう言って画面を指さす。誠一のところからは見えないので覗きに行こうと思ったが、踏み出すより早く、篤史は軽やかな手捌きでカシャカシャと打鍵を再開した。視線を左右にせわしく動かして何かを探しているようだ。

「おそらく外部に協力者がいる。溝端の携帯に何度も公衆電話からの着信があるし……この男だ」

タンッと中指でキーを弾いてそう言い、ノートパソコンの画面をぐるりとこちら側に向ける。誠一は楠長官とともに早足でローテーブルに近づいていった。覗き込んだそこに映し出されていたのは、スーツを着た二十代後半くらいの男性が、街の公衆電話で話をしている画像である。近くの防犯カメラの映像だろう。画質が粗くかなり不鮮明だが、どうにか顔は判別できる。

「見覚えは？」

「ない。公安の人間ではないな」

楠長官がそう答えると、篤史はすぐさまノートパソコンを自分の方に戻した。そのまましばらく作業に没頭していたが、やがて手を止めると、ひときわ難しい顔になって重々しく口を開く。

「確証はないが、さっきの男は海自かそれに関わりのあるヤツだと思う。海自の施設に近いところで行くつか姿を見つけた。あと、公衆電話から海自の隊員にも何度か発信している」

「なるほど、海自か……」

楠長官の顔にも大きく翳りが落ちた。何となく話が不穏な方向に向かっているのを感じ、誠一も、他の皆も、それぞれ不安を募らせた表情を浮かべている。暫しの沈黙のあと、篤史がおもむろに顔を上げて楠長官に目を向けた。

「海自の内部資料は見られないのか？」

「さすがにそれは無理だ」

「あそこは一筋縄じゃいかないしな……」

苦虫を噛み潰したような顔でぼやくように呟き、前髪をくしゃりと掻き上げる。どうやら行き詰まってしまったようだが、誠一には何の手助けも出来そうにない。悠人も、武蔵も、ただその顔に焦燥を滲ませるだけである。しかし――。

「ねえ、これ軍艦じゃない？」

ふいに濡がソファの背もたれに手をついて彼らの背後から身を乗り出し、画面の一点を指さした。皆は一斉に前のめりで覗き込む。そこには埠頭の映像が映し出されており、その端の方に何か黒いものが見切れていた。よく見ると、軍艦かどうかは判別できないが、確かに大きな船ではあるようだ。篤史が映像を早戻しすると、船体の半分ほどが映っているものが見つかった。

「それ、潜水艇を載せられるやつだと思う」

遥がぼつりと呟いた言葉に、篤史は画面を見つめたまま大きく目を見開く。その軍艦で小笠原へ向かうのではないかという、おそらく全員が思い浮かべたであろう安直な想像が、遥の一言でたちまち現実味を帯びてきた。

「ヤバいな。海自ごと協力している可能性が高い」

「さすがに組織としてそんな馬鹿な真似はしないはずだ。だが、階級の高い者を含むかなりの隊員が協力していることは確かだろう。おそらく、おのれの地位も職も何もかもなげうつ覚悟で、それでもこの国を守るためと信じて、脅威を潰すべく行動を起こしているに違いない」

楠長官はそこまで言うと、眉根を寄せた。

「愚かなことだ。相手の力量もわからないまま攻撃を仕掛けるなど無謀にも程がある。それに、かの国の存在は我々のごく一部の官僚以外にはまだ極秘なのだ。世間に露見すれば大きな混乱と騒動を招くことになる。下手をすれば国際問題にもなりかねないのだぞ」

なにせ、人間同様の外見と知性を兼ね備えた知的生命体の国家である。日本の領海内とはいえ、このような重大な事物を隠していたとなれば、激しい非難を浴びることは避けようがない。ましてや勝手に殲滅などしてしまっただけでは、あらゆる方面から糾弾されることは目に見えている。科学的、地学的、歴史的、いずれにおいても貴重な発見であることは疑いようがないのだ。また、人道的に許されないと考える人もかなり多く出てくるだろう。

「軍艦相手にどうするの？」

「潜水艇なら持ってるよ」

遙の疑問に、大地は事も無げにさらりと答えた。手のひらを上に向けて説明を継ぐ。

「言っただろう？ 昔、何度もあの国に侵入して子供を攫ってきてたんだ。そのときに使っていた潜水艇と船がまだあるんだよ。もう何年も使っていないが、いつでも使えるようメンテナンスを頼んであるから大丈夫だろう」

個人で潜水艇まで所有していたことに絶句するが、橘財閥の御曹司なら難しいことではないのかもしれない。まわりの皆は得心したような顔をしている。ただ、武蔵だけはきつく歯噛みして顔をしかめていた。メルローズたちを攫った潜水艇と聞かされれば、感情が昂ぶるのも無理はない。それでも非難の言葉を口にしないということは、これに頼るしかない現実を理解しているのだろう。

滯は不安そうに顔を曇らせ、小首を傾げる。

「でも、軍艦には敵わないんじゃないか……」

「軍艦と戦うわけじゃないよ」

大地は苦笑すると、腕を組みながら真顔になって前を向く。

「あの国には潜水艇でしか近づけない。僕らが子供たちを攫っていたときは、防護壁の破損したところから侵入していたが、今はもう修復されていて隙はないはずだ。だから、メルローズに生体高エネルギーの暴発を起こさせ、その力で防護壁に穴を開けようとしているんだろう。つまり、潜水艇で向かったメルローズと美咲を、暴発が起こる前に奪還すればいい」

「俺も同意見だ」

武蔵はソファで腕を組んだまま、振り返りもせず言う。

「おまえらに無理やり魔導力の源を注入された今のメルローズなら、強固なあの結界を破るだけの能力は十分にあるはずだ。結界さえ破ってしまえば外部からの物理攻撃も可能になる。ミサイルを撃ち込んで壊滅させるのも難しくはない。だから、救出するのはそれより前でなければならない」

彼の言葉に、大地は背後で深く頷いた。

「今のうちにみんなの意思を確認しておきたいと思う。それぞれ望みは違うだろうが、落とすどころがあれば手を取り合えるはずだ。それを探るためにも何を望むのか順に言っていこう。僕自身は美咲さえ助けられればいいが、可能であれば、彼女のためにメルローズも助けたい。美咲の悲しむ顔を見るのはつらいしね。悠人、おまえは？」

「私も美咲を助けたい。石川医師とメルローズも助けるべきだろうな」

悠人が淡々と答えると、対抗するように武蔵が声を上げる。

「俺はメルローズを助けたい。そして祖国を守りたい。俺の家族や仲間や世話になった人たちが、そこで懸命に生きてるんだ。俺たちには攻撃するつもりなんて微塵もないのに、一方的に脅威と決めつけて殲滅するだとか、絶対に許せないし阻止してみせる」

続いて、楠長官が口を開く。

「私は攻撃をやめさせたい。現段階でこんな勝手なことをされては大問題だ。逆に、国の存亡に関わる事態になりかねない。可能であればすべて秘密裏に処理できればと思っている。少なくとも世間に露見することだけは回避したい」

後半は隠蔽の話になっていた。国を守るにはそうせざるを得ないのかもしれない。積極的に肯定し

ないまでも、甘っちょろい正義感だけで否定することはできないだろう。皆も同じように考えているのか、あるいは何も考えていないのか、誰も反論するような素振りは見せなかった。

沈黙が落ちると、大地は隣の二人に視線を流して促す。

「私は……みんなを助きたい。誰にも傷つけ合ってほしくないよ」

「僕は家族と仲間を守りたいだけ。母さんたちやメルローズを助きたいのはもちろんだけど、ここにいるみんなも大切だから、あんまり無茶なことはしてほしくないんだよね」

漣と遥がそれぞれ希望を述べた。誠一も頷いて同調する。

「できれば、死傷者を出すことなく終わらせたい」

漣も、自分も、他の誰も傷つくことなく美咲たちを救出でき、なおかつ非人道的な実験も終わらせることができれば理想だが、そう何もかも上手くいくとは思っていない。美咲とメルローズを無事に救出できても、少なくとも実験の方は継続されるだろう。自分も警察庁に出向のままかもしれない。ちらりと横目を流して楠長官の表情を窺うが、何か考え込んでいるようで、誠一の話を知っているのかさえわからなかった。

篤史は面倒くさそうに溜息をつきながら、頭を掻いた。

「俺にはあんまり関係ないんだけど……といってもまあ乗りかかった船だし、美咲さんやメルローズを見捨てるわけにもいかないし、出来ることであれば手を貸すつもりだ。ハッキングや情報分析はやってて面白いしな。ただ、命を懸けるつもりまではないから、あんまり危険なことは勘弁してくれ」

冷たいようだが、彼の立場で考えてみれば当然だろう。手伝ってくれるだけありがたいくらいだ。

大地は考えを巡らせながら小さく頷き、口を開く。

「それでは、美咲とメルローズを暴発前に救出することを最優先にする。可能であれば石川さんも救出する。隠蔽工作の方は楠長官にお任せする……という方針でいくが異議はないか？」

そう総括して皆に目を向ける。楠長官は深く思い悩んでいる様子で、漣や悠人は微妙な面持ちをしていたが、特に反対の声が上がることはなかった。それを大地は承諾とみなしたらしく、表情を引き締め、気合いを入れるように頷いた。

「よし、行こう」

「今から？」

漣の呑気な言葉に出鼻を挫かれ、彼は思わず失笑する。

「のんびりしては間に合わないからね」

今すぐに行動を起こしたとしても間に合うかどうかわからない。そのくらい切迫した状況である。だからこそ、楠長官も次々と話を進めていく大地に何も言えないのだ。本来であれば、民間人の勝手な行動を止めなければならない立場なのに。

大地は真顔になってソファの方に振り向いた。

「武蔵、君には一緒に来てもらう」

「来るなど言われても行くぜ」

武蔵はムツとして、睨みをきかせながら噛みつくように答えた。行動はともにするが決して許したわけではないのだと、その態度から、その口調から、彼のやりきれない思いがひしひしと伝わってくる。しかし、大地はまるで相手にすることなく篤史へ視線を移した。

「志賀君は埠頭から支援を頼む」

「了解」

篤史はゆったりとソファにもたれたまま、緊迫感のない声を返した。

大地はあらためて一通りぐるりと見回してから言う。

「あとは希望者だけ来てくれ」

「私、行きます！」

「僕も」

滯が勢いよく挙手し、続いて遙もゆるりと手を挙げる。

誠一は口を引き結んだ。どんな危険があるかわからない異常な状況であり、二人には行ってほしくないが、母親が連れ去られている以上、引き留めることは難しいのではないかと思う。ならば、せめて自分が守らなければと手を挙げた。悠人も同じ気持ちなのか、複雑な表情を浮かべつつ同じように手を挙げた。

「おじさんはどうします？」

大地が楠長官に水を向けると、彼は眉を寄せたまま腰に手を当てて息をついた。

「私はここに残る。状況は逐次報告してほしい」

「そんな余裕があればいいんですけどね」

大地は飄々とした口調で茶化すようにそう答えたが、顔は笑っていなかった。すぐに呼びつけるような視線を皆に送ると、シャツの胸ポケットから携帯電話を取り出し、誰かと事務的に通話しながら執務室を退出する。楠長官以外の全員がそのあとを追った。

白い無機質な廊下を、不揃いな靴音を響かせながら歩いて行く。

誠一は半歩前を歩いていた滯の手を取り、元気づけるように、安心させるように、しっかりと柔らかく握り締めた。彼女はビクリとして振り返ったが、その手が誠一だとわかると安堵の笑みを浮かべる。

滯だけは、絶対に一一。

これから何をするのかよくわかっておらず、誠一に何が出来るのかも定かでないが、いざというときは身を挺してでも彼女を守りたい。繋いだ手の柔らかな温もりを感じながら、そう決意を新たに  
する。

しかし、本当に彼女を案じるのであれば、そもそも行かせるべきではなかったのだ。

その判断が下せなかったのは認識の甘さゆえに他ならない。もっと慎重に考えるべきだった。たとえ彼女に恨まれても置いていくべきだった。この後に起こる取り返しの付かない出来事によって、誠一はそう後悔することになる。

## 45. 家族にはなれなくても

大地の船はすぐに準備され、さほど待つことなく出航できた。

その船は、滯の想像よりもはるかに大きかった。船を持っていると聞いても驚きはしなかったが、見上げるほどの船体を目にしたときにはさすがに唖然とした。何百人も乗れる大型フェリーには遠く及ばないが、二、三十人は余裕で乗れそうである。

船内には個室も用意されているようだが、今回は使用しないということだ。そんな悠長な旅でないことは理解している。溝端たちが何か仕掛けてくる可能性もあるため、いざというときすぐに指示が伝えられるよう、テーブルと座敷のある大広間で過ごすように言われていた。

操縦は大地が行っていた。

昔からこの船の操縦は大地の役目だったらしく、心配ないということだが、免許を持っているかまではわからない。気にはなったが聞かなかつた。普段の滯であれば無免許の操縦など到底容認できないが、今はそうも言っていられない状況であり、それならいっそ知らない方がいいと判断したのである。

テーブル席の方では武蔵と遥が向かい合って座り、少し離れたところに誠一が座っていたが、三人とも黙り込んだままじっと何かを考え込んでいる。滯は通路を挟んだところにある一段高い座敷の縁に腰掛け、ぼんやりとその様子を眺めていたが、息の詰まりそうな空気に耐えかねてこっそり大広間をあとにした。

当てもなく歩くうちに操舵室らしき部屋が目についた。ガラス窓から中を覗き込むと、計器類が前面に並んでいる操縦席に大地が座り、悠人は隣で椅子の背もたれに手を掛けて立っていた。上部の窓が少し開いているせいか、聞くつもりがなかった話し声が耳に届く。

「悠人、おまえ操縦できるんだろう？」

「小型船舶の免許しか持っていない」

「たいして変わらないよ。交代で頼む」

いつもながらの独裁的な言いように、悠人は不快感を露わにして大地を睨み下ろす。

「僕が来なかったらどうするつもりだったんだ」

「おまえは必ず来ると思っていたよ」

大地は前を向いたまま事も無げに答えた。そう言われる理由に心当たりがあったのか、悠人は何も言い返すことなく溜息をついた。暫しの沈黙のあと、再び大地の方にちらりと視線を向けて尋ねる。

「美咲を助けられるか？」

「助けるさ、絶対に」

大地の声は力強かった。無理に鼓舞しているという感じではなく、さも当然であるかのような口調である。まだ希望を失っていないのだとわかり、滯はそれだけで大いに元気づけられた。ひとり小さく頷き、そこを離れて甲板に向かおうとしたのだが――。

「おまえ、美咲との間に子供を作ろうとは思わなかったのか」

背後から耳に届いたその言葉にドキリとし、動きが止まった。すぐさま死角に身を潜めて耳を澄ます。

「思ったけど、出来なかったんだよ」

「……何か原因があったのか？」

「さあね、病院でも何度か検査をしたけど原因はわからずじまいさ。ただ、何となくあんなことをした報いかもしいとは思った。おそらく美咲もね。非科学的でオカルトじみた考えだという自覚はあるけど、そんな不安に囚われてしまうだけのことを重ねてきたからな」

大地の言う「あんなこと」とは、何の罪もない子供たちを拉致して実験に使い、そのほとんどを死に至らしめてしまったことだろう。彼にも少しは罪悪感があったのだろうか。そうでなければ、こういった考えに行きつくとは思えない。

一拍の間のあと、悠人が大きく吐息を落とした。

「結果的には良かったのかもな」

「滯と遥のためには？」

「おまえは自分の子だけを可愛がる」

「かもね」

大地が自分たちを放置しているのは仕事が忙しいからで、仕方のないことだと理解していたが、もし弟か妹だけを可愛がっていたらどう感じただろう。少なからず傷ついたに違いない。自分の何がいけないのかと、幼いながらに必死に頭を悩ませたはずだ。滯は足元に視線を落としてそっと眉根を寄せる。

「盗み聞きはよくないよ」

不意に耳元で囁かれ、思わずヒッと悲鳴を上げそうになったが、予想していたかのように口を塞がれる。それが誰かは声を聞いた時点でわかっていた。遥である。彼がもう片方の手で外へ続く扉を指さしたのを見ると、滯はコクコクと頷いた。

音を立てないように、二人は注意深く扉を開けて甲板へと出た。

あたりはだいぶ暗くなっている。出航してからさほど時間は経っていないはずだが、すでに陸からかなり離れたようで、ぐるりと見まわしてもほとんど海しか見えない。腰近くまである黒髪が大きく吹き乱され、短いスカートも勢いよく捲れ上がり、滯はあたふたしながら両手で押さえる。

「大丈夫？」

短く落とされた問いかけは、潮風に翻弄されていることに対してではないだろう。そのくらいは滯にだってわかる。若干の緊張を覚えつつ、スカートの裾を押さえたまま振り返ると、じっと彼を見つめて尋ね返す。

「遥も聞いてたの？」

「少しね」

「子供のことだよね」

念のため確認すると、遥は動揺を見せることなく無言で小さく頷いた。どうやら滯が大広間を出てすぐに追って来たようだ。そんなに心配しなくてもいいのにと思うが、気に掛けてくれることはやはり嬉しく、胸がほんのりとあたたかくなるのを感じる。

「思ったほどショックじゃないよ。そっかあ、って感じ」

「無理してるんじゃない？」

氣遣わしげに問われ、滯はゆっくりと首を横に振る。黒髪がさらさらと頬にかかった。

「私たちが否定されたわけじゃないんだもん」

「でも、自分の子だけ可愛がるかもって」

「それは、そうならみないとわからないし……」

「……………」

遙は複雑な面持ちで目を伏せた。しかし気持ちを切り替えるように息をつくと、顔を上げる。

「戻ろう」

「うん」

すつと無駄のない所作で差し出された白い手を、漑は迷いなくとった。直後に船の揺れが大きくなり甲板の上で少しよろけたが、すぐに体勢を立て直すと、彼と手を繋いだまま扉から大広間へと戻っていった。

二十分ほどして、操舵室にいた悠人も堅苦しい顔つきで戻ってきた。本題についても話し合ってきたのだろう。武蔵と誠一の座るテーブル席と、漑と遙の座る座敷の間に立ち、事務的な口調でこれからのことについて話し始める。

「小笠原近海までは、大地と私が交互に操縦することになりました。溝端たちからの攻撃を警戒して、通常とは違う航路で向かいますが、ほとんど後れを取らずに着けると思っています。焦ったところで今は何もできませんので、明日に備えて睡眠をとっておいてください」

母親たちのことが気になっているというもあるが、それ以前に、このような揺れる船内で熟睡できるとは思えない。誠一はすでに船酔いしたようでぐったりとしている。しかし、言ったところでどうにもならないことはわかっている。皆も同じ気持ちなのか微妙な面持ちで口をつぐんでいた。

悠人は眉ひとつ動かさず、淡々と話を続ける。

「小笠原近海からは、大地の操縦する潜水艇で海中へ向かうことになります。その間、この船の操縦席には私がつくことになりました。潜水艇の定員は操縦席を除いて四人。ただし一席は美咲とメルローズを連れ帰るために空けておきますので、同行できるのは最大で三人となります」

「石川さんはどうするの？」

「もし空席がなければ往復して救助する。美咲とメルローズはすぐに連れ帰ることを望まれているが、石川さんはそうじゃない。冷たいようだが見捨てるわけではないので構わないだろう。ただ、溝端たちの潜水艇も同じくらいの規模だとすると、石川さんまで連れて行く余裕はないように思う。また、美咲がいるのなら連れて行く意味もないだろう。別の役割を与えられていると考える方が自然だ。その場合は、いったん家に戻ってから彼の救出方法を考えよう」

悠人は遙の質問に丁寧に答えてから、武蔵に振り向いた。

「武蔵、君には潜水艇に乗ってもらいたい」

「当然だ。おまえらだけに任せるつもりはない」

「メルローズだけでなく、美咲も……」

「わかっている」

釘を刺そうとした悠人を遮り、武蔵はうざったそうに顔をしかめて答えた。彼にとって美咲は憎むべき相手であるが、メルローズや漑の気持ちを無視してまで復讐することはないだろう。少なくとも漑はそう信じていた。

悠人は真意を探るようにじっと彼を見つめていたが、やがて頭を下げた。

「ありがとうございます。感謝します」

「それで、条件というわけじゃないが.....」

「穏やかではないですね。何でしょう？」

「滯と遥も一緒に連れて行きたい」

「.....」

悠人はピクリと眉を上げ、不信感を隠そうともせず鋭く射るように睨めつけた。武蔵がどういうつもりなのかは滯にもわからない。念のための人質と考えられなくもないが——問いかけるように不安げな眼差しを送ると、彼は淡々と理由を述べ始めた。

「二人ともかなり強い魔導の力を持っている。おそらく俺からの遺伝によるものだろう。もしかすると、橘美咲の実験の影響も多少あるのかもしれない。今のところ自分自身で制御はできないらしいが、俺の魔導力を補強するのには使えるはずだ」

「.....必要になるというのか？」

「その可能性はないとはいえない」

武蔵が真摯に答えると、悠人は大きく眉をひそめて表情を曇らせた。

「そんな危険があるというなら、なおさら行かせられないな」

「俺も反対だ」

今まで青白い顔でうつむいていた誠一が口を挟んだ。武蔵を見つめて言葉を継ぐ。

「君だって、滯を危険に晒したくはないだろう」

声に覇気がないのも顔色が悪いのも船酔いのせいだろう。それでも十分すぎるくらい懸命さは伝わってきた。武蔵は一瞬だけ顔をしかめたが、おもむろに一呼吸してから理性的に抗弁する。

「なるべく危険な事態にならないようにするし、そうなっても二人は俺が守ってみせる。もしものための保険だと思ってほしい。俺だって出来るなら滯や遥に危険な目に遭わせたくない。だが、二人がいなければ何もかも水泡に帰すかもしれないんだ」

「しかし.....」

「行きます！ 行かせてください！」

難色を示す誠一を遮り、滯は腰掛けていた座敷から立ち上がって声を張った。一斉に注目を浴びるが怯んでなどいられない。目を見開いた誠一と悠人を交互に見やり、自らの胸に手を当てて畳みかける。

「お母さまを見殺しになんて私にはできないよ。武蔵の言ってることはよくわからないけど、役に立てるのなら行かせてほしいの。もし私が行かなかったことでお母さまを助けられなかったら、きっと一生後悔する。自分だけ生きていることを責めるかもしれない。だから.....」

「武蔵が守るって言うんだから大丈夫じゃない？」

遥が座席の縁に腰掛けたまま援護する。彼自身は行きたいと思っているのかわからないが、滯の希望を尊重してくれたということなのだろう。誠一と悠人は互いに困惑して顔を見合わせると、ともに視線を落としてじっと思考を巡らせる。やがて、悠人があきらめたように深い吐息を落とし、真剣なまなざしで武蔵を見つめて口を開いた。

「武蔵、君を信じて滯と遥を託そう」

「感謝する。必ず無事に連れ帰る」

武蔵は真顔で頷いて答える。向かいでは誠一が納得のいかない面持ちをしていたが、口を閉ざしたまま異を唱えることはなかった。心配そうな目を向けてきた彼に、滯は大丈夫だという気持ちを込めてにっこりと微笑んで見せた。

その後、操縦中の大地以外はテーブル席で軽食を摂ることになった。出航前にコンビニで買い込んだサンドイッチやサラダなどである。皆、ほとんど会話をすることなく黙々と口に運んでいた。誠一だけは船酔いで気分が悪いらしく、何も食わずに座敷の隅で横になっていた。

食事が終わると、滯たちも睡眠を取るべく座敷に身を横たえる。各人に与えられたのはタオルケット一枚ずつである。急な出航で贅沢を言えないことはわかっているが、滯は寒がりということもあり眠るどころではなかった。ブラウスにカーディガンという春めいた格好もあだとなった。暖房もない洋上の夜半では厳しい。誰かと身を寄せ合いたい衝動に駆られるが、雑魚寝というこの状況ではさすがに憚られる。

結局、どうにもこうにも寝付けずに起き出した。滯以外は寒さを感じていないのかすでに眠っているようだ。起こしてしまわないよう気をつけながら、特に当てもないまま甲板の方へ足を向けた。

「わあ……」

扉を開けた途端、視界一面に広がった満天の星空に、寒さも忘れて感嘆の声を漏らした。深みのある濃紺色の空と、鏤められた無数の星々が、見渡す限りどこまでも広がっている。プラネタリウムとは比較にならない、紛れもない本物の雄大な星空。見ているだけで吸い込まれそうになる。

こんな星降るような夜空を、あのときのお父さまとお母さまも見ていたのかな――。

すべての始まりである小笠原フェリー事故が起こる前夜、もしかしたら、二人でこの幻想的な星空を見ていたかもしれない。ロマンティックな会話をしていたかもしれない。兄妹らしい可愛らしい会話をしていたかもしれない。そんなふう to 思いを馳せていると、胸がギュッと締め付けられて少し泣きたくなくなった。

「滯……？」

「え、お父さま？」

誰かが船首側の手すりに背を預けて立っていた。灯りが十分でなく距離もあるため、顔の判別まではつかなかったが、声からすると父親の大地で間違いない。操縦は悠人と交代したのだろう。小走りで駆けていくと、彼はいつものように優しい笑顔で迎えてくれた。

「眠れないの？」

「ちょっと寒くて」

そう苦笑を浮かべながら肩をすくめ、彼の隣の手すりに腕をのせてもたれかかる。外の方が寒いことはもちろんわかっていたが、眠れないままじっと耐えているよりはいいだろうし、気分転換にもなると思ってここへ来たのだ。しかし、想像以上に風が冷たくて思わずぶるりと身震いする。

「えっ？」

不意に、背中からふわりと大きなジャケットが掛けられた。大地の着ていたものである。冷えていた体がぬくもりに包まれていくのを感じて、滯はほっと息をつく。

「あ、でもお父さまが……」

「予備の上着があるから」

「じゃあ、ありがとうございます」

素直に礼を言って、掛けてもらったアイボリーのジャケットに袖を通した。当然だが袖も肩もかなり大きい。袖口から指先だけしか出ていないのを見て、くすっと小さな笑みをこぼす。

「懐かしいな」

「えっ？」

「この星空」

大地はズボンのポケットに片手を差し入れ、背筋を伸ばして空を仰いでいた。その視線を辿るように、滯も手すりを掴んで大きく空を見上げた。黒髪が冷たい風を受けて舞い上がり、乱されていく。

「お母さまと、見た？」

「まだ妹だった頃にね」

その言葉に、ここに至るまでの時間の長さを思い知らされる。

大地はふっと寂しげに薄笑いを漏らした。

「あのときはまだ、幸せな未来しか思い描いていなかった。完璧な計画を立てているつもりだった。まさか、一瞬で打ち砕かれるとは想像もしなかったよ」

「……今からでも、遅くないです」

星空を見つめたまま、滯は目を細めてゆっくりと言葉を落とした。それから大地に振り向いて優しく訴える。

「これが終わったら、つらいことは全部忘れてやり直しましょう。お母さまも研究なんてもうやめればいい。みんなで……私たち家族で幸せな未来を作っていきたいよ」

「たくさんの子供を殺した僕たちが？」

「それ、は……」

返す言葉がなかった。たとえ法的には罪に問われないとしても、これほど残酷なことをしておきながら、すべて忘れて幸せになるなんて許されるのだろうか。だからといって、どう罪を償えばいいのかもわからない。

大地はそっと遠くを見やり、口を開く。

「僕はともかく、滯と遥はこんなことを忘れて幸せになるべきだ。いつそ橘から離れた方がいいのかもしれないね。父も僕と同じで常軌を逸したところがあるし、何をさせられるかわかったもんじゃない。未成年の今ならいろんな意味で間に合うよ」

「嫌です。私はお父さまとお母さまの娘です」

滯は迷わず強気に言い返した。自分たちの行く末を案じての提案なのだろうが、何か突き放されたように感じて胸が苦しい。欲しかったのはこんな言葉ではない。しかし、彼は淡々と冷やかな言葉を重ねていく。

「僕は滯の父親ではないよ」

「私にとってはお父さまです」

「そう思いたいだけだろう」

「いけませんか」

「もう少し柔軟に生きた方がいい」

「そうかもしれません。でも……」

「やっかいだね」

ここまでくると、いくら鈍感な滯でも気付かざるを得なかった。彼は自分たちを切り捨てたいのかもしれない、と――。唇を噛んだ滯に、大地は表情を動かすことなく追い討ちを掛ける。

「僕と滯に血の繋がりが無いのは事実なんだ」

「でも……、十七年間、私たちは家族でした」

「僕はそう思っていなかったけどね」

滯の中で、何かがガラガラと音を立てて崩れた。ブラウスの胸元を掴みながらうつむく。

「家族だって、娘だって……言ってくれたじゃないですか」

「そういう設定だったからだよ。家族ごっこはもう終わりにしよう」

「自分たちの都合で勝手に作ったくせに、身勝手にも程があります」

「そうだね」

どう言っても、どう責めても、彼にはまるで響かないようだ。滯はだらりと手を下ろした。

「もしかして、私たちのこと憎んでますか？」

「憎んではないよ。ただ複雑ではあるね。実際の父親のことをよく知らないうちはまだ良かったけど、本人が目の前に現れてしまうとな。美咲とあの男の子供だという事実を突きつけられて、面白くないんだ」

あまりの身勝手さに呆れるしかなく、虚ろな笑いが漏れる。

「自業自得ですよ」

「まったくだ」

そう首肯した彼の顔に、うつすらと自嘲が浮かんだ。

もしかすると本当は後悔しているのかもしれない。小笠原フェリー事故に、未知なる力に、取り憑かれたとしかいえない生き方を――だからこそ、その象徴である滯と遥を切り捨てたくなかったのではないか。いずれにしても身勝手なことこのうえない。

滯は顎を引き、まっすぐに彼を見据えた。

「それでも、私の父は橘大地です」

意志の強さをあらわにした声音でそう言い切ると、一礼し、黒髪をなびかせながら足早に立ち去った。扉から中に入るやいなや、背中を壁に預けて崩れるように座り込む。堪えていたものが涙となって溢れ出し、ジャケットの裾に落ちて弾けた。うっ、と漏れそうになった声を押しとどめて口もとを覆い、小刻みに肩を震わせながら静かに嗚咽した。

「隠れてないで出てこいよ」

扉の向こうから大地の大きく張り上げた声が聞こえて、滯はビクリとした。ここに留まっていることが知られたのだろうか。心臓の鼓動が激しくなるのを感じながら、出て行くべきかどうか考えていると、甲板の船尾側から乾いた足音が聞こえてきた。

「俺がいると知ったうえで、濡にあんなことを言ったのか」

「気付いたのはたった今だよ。その口ぶりだと聞いていたんだな」

大地が話しかけた相手は武蔵のようだ。自分がここにいると気付かれていないのなら出て行く必要はない。濡は泣き濡れた頬を手のひらで拭い、そこに腰を下ろしたまま声だけでも聞き取ろうと耳を澄ました。

「今さら濡を傷つけてどういうつもりだ」

武蔵は怒気をはらんだ低い声でそう言いながら、さらに歩を進め、大地の立っているあたりで足を止めた。二人は至近距離で対峙しているのだろう。暫しの沈黙のあと、大地は質問には答えずに露骨な挑発を口にする。

「今なら簡単に殺せるぞ。僕が憎いだろうか？」

「おまえを殺したら潜水艇は誰が操縦するんだよ」

「冷静だね」

何を言い出すのかとギョツとしたが、大事には至らず、濡はほっと息をついて胸を撫で下ろす。確かに潜水艇で向かうには大地の操縦が必要になるが、激情に駆られれば、頭から抜け落ちてしまうことも十分にありうる。いったいどういうつもりでこんな挑発をしたのだろうか。

「おまえが何を考えているのかさっぱりわからない」

「悠人にも似たようなことをよく言われるよ」

濡の気持ちを代弁したかのような武蔵の言葉に、大地は軽く笑って応じた。

「僕はいたって素直に生きているつもりだけどね。大切なものは自らの手中におさめておきたい、それを阻むものはたとえ誰であろうと許さない、ただそれだけのことさ。そういう欲望は誰しも持っているんじゃないかな。もちろん君も……だろう？」

「……大切なら、なぜあんなことをさせた。なぜ傷つけて平気でいられる」

武蔵の声からは不快感が滲み出ていた。しかし、大地はまるで意に介していない。

「傷つけたというのは君の見解に過ぎない。体外受精に関しては、あくまで美咲自身の意思を尊重した結果だよ。ただ、傷つけることも厭わない気持ちは確かにある。それで自分のことが深く刻み込めるのならね。もっとも今の美咲にはそうする必要もないし、大事にしているつもりだけど、悠人は今でも随分と傷つけてる気がするな」

悪びれもせず、クスクスと笑いながらそんなことを言う。しかし――濡は怪訝に小首を傾げた。その話からすると、手中におさめておきたい大切なものは、美咲だけでなく悠人もということになる。確かに、中学生の頃からの友人だとは聞いているが――。

「自分を刻み込みたい気持ちは、君にもわかるだろう？」

「……だが、俺はそれがエゴだということもわかっている」

「君は立派だよ。そういえば、復讐もしないんだってね」

大地の声には揶揄するような響きが含まれていた。対照的に、武蔵はどこか苦しげな抑制した声で続ける。

「復讐は新たな悲しみしか生まない。だから絶対にするな――親代わりともいえる人にそう教えられた。そして、いかなる報復もしないという約束で、メルローズを探しに来させてもらった。だから、どれ

だけおまえらが憎くても報復はしない.....実は最近まで納得しきれていなかったが、おまえらを見ていて実感したよ。俺の教えられたことは正しかったんだ、ってな」

その話を聞きながら、滯は膝を抱えてゆっくりと顔を埋める。フェリー事故にさえ遭わなければ、復讐心にさえ囚われなければ、大地と美咲は普通に結婚をして幸せに暮らしていたはずだ。少なくともこんな異常な形で子供を作りはしなかった。そう考えると、自分は復讐の産物ということになるのだろう。しかも、結果的に実験にもあまり役立てなかったのだから、何のために生まれてきたのかわからない。

しかし、大地はムツとした声で反論する。

「言うておくが、僕らはこれから生きるために行動を起こしてきた。決して復讐というわけじゃない。おそらく溝端たちも行動原理の根本は同じだろう。あんな危険なものが存在することを知っては、恐ろしくていてもたってもいられない。だから、対処したいと思ったり、潰したいと思ったりする。自分や大切な人たちを脅威から守るためにな。そこは誤解するなよ」

「.....俺も、大切なものを守るためなら、容赦はしない」

武蔵は慎重に言葉を選びながらも言い切った。

「へえ、宣戦布告？」

「おまえら次第だ」

武蔵の大切なものというのは姪のメルローズだろう。これほど懸命になってくれる身内がいて羨ましく思う。私もお父さまとお母さまのかけがえのない存在になりたかった——と願うのは贅沢だろうか。たとえ家族とは認めてもらえなくても、せめて大切なものと思ってくれば良かったのだが、先ほどの話からするとそれすらも絶望的なようだ。

「滯？」

不意に、頭上から降ってきた声。

驚いて弾かれるように顔を上げた滯の前には、声の主である遥が立っていた。滯はあたふたと立てた人差し指を唇に当てて見せる。聡い彼はそれだけで状況を察してくれたようだ。窓ガラス越しにちらりと外を見やったあと、無言のまま滯の手を引いて立ち上がらせ、外の二人から見えないように扉から離れる。

「武蔵も滯もいなかったから心配したけど.....」

「ん、大丈夫。武蔵とは会ってもないよ」

ほとんど抱き合うようなかたちで体を寄せ合い、声をひそめて会話する。遥の手が柔らかく背中にまわされると、滯はおずおずと彼の肩に寄りかかった。泣きはらした目を見られたくなかったので、この体勢に安堵するが、もうとっくに気付かれているのかもしれない。

「これ、父さんのだよね」

「.....うん」

尋ねられたのはアイボリーのジャケットについてだろう。滯にはまるきりサイズが合っていないことと、大地が着ていなかったことを合わせて考えれば、遥でなくともすぐに推察できる。もちろん、ジャケットを渡されたときに大地と言葉を交わしたことも。

「父さんが言ってた子供の話、何か訊いてみた？」

「そのことは……何も話してないけど……」

訥々と答えながら縋るように彼のパーカーを握り締める。その手が微かに震えた。ゆっくりと目をつむり呼吸を整えてから言葉を繋ぐ。

「娘じゃない、家族じゃない、家族ごっこは終わりにしようって言われたの」

「……本当はわかってたよね」

彼の言うとおりに、意地になっていただけで本当はわかっていたのかもしれない。うっ、と小さく喉を詰まらせて彼の肩に顔をうずめ、声を殺してしゃくりあげるように嗚咽する。震える背中をそっと優しくさすられるのを感じ、ますます止まらなくなった涙が、彼のパーカーに落ちて静かに染み込んでいった。

「もう大丈夫。いいかげん現実を受け入れなきゃ」

ひとしきり泣いて落ち着きを取り戻すと、体を離してそう言い、にっこりと精一杯の笑顔を作ってみせる。遥を安心させようとしたのだが、彼は逆に顔を曇らせてしまった。滯の濡れた瞳をじっと見つめて口を開く。

「僕はいつまでも滯の家族だよ。だから、父さんたちはもう諦めなよ」

「……………」

自分は実験のためだけに作られた存在で、家族としては望まれていなかった。その現実を受け止めているつもりだ。家族といえるのは、同じ境遇で血の繋がりのある遥だけだろう。ひとりぼっちでなかったことはとても心強いし、寄り添ってくれることに感謝もしている。しかし――滯は曖昧に伏せていた目をそろりと上げ、真正面から遥と視線を合わせた。

「家族にはなれなくても、お父さまやお母さまが大切な人であることに変わりはないよ……なかったことになんてしたくない。今までと少し形は変わってしまうと思うけど、これからも大切な人として接していきたい。たとえ、私のことを同じように思ってくれなかったとしても」

言葉を噛みしめながら丁寧に主張したあと、ふっと表情を緩める。

遥は呆れたような目つきになりながら溜息を落とした。

「……バカだね、滯は」

「そんなの今さらだよ」

滯はおどけるように肩をすくめて笑い飛ばした。けれど遥は真顔を崩すことなく手を伸ばすと、そっと滯の頬を包み、乾ききっていない涙のあとを親指で拭う。その手は、少し泣きたくなるくらいあたたかかった。

## 46. 銀の弾丸

潜水艇は思った以上に狭かった。

操縦席には大地がつき、座席の前列には漣と武蔵が、後列には遥が座っている。椅子は小さく、女性で細身の漣でさえ少し窮屈に感じるくらいだ。天井も一般的な乗り物ではありえないくらい低く、屈みながらでないと移動も出来ない。おまけに、窓がないためなおさら圧迫感が増しているように思えた。

「ねえ、お父さま」

「何だい？」

漣が声を掛けると、大地はモニタから目を離すことなく返事をする。

昨夜のことがあってから彼とどう接すればいいか悩んでいたが、それは今朝になって呆気なく解決した。彼がこれまでと変わらず話しかけてくれたので、漣も以前と同じように話すことが出来たのである。お父さま、と呼ぶことにはさすがに少し躊躇いを感じたが、彼は特に意識せず受け入れてくれたようだ。ただ、抱きしめたり頭を撫でたりということは一切なくなった。それが彼なりの線引きなのだろう。寂しくないといえどももちろん嘘になるが、拒絶されないだけありがたいとも思う。

「どこに向かえばいいか、わかってるんですか？」

「ああ、きのう武蔵に詳しく聞いたからね」

大地はそう答えながら落ち着いた手捌きで操縦桿を動かした。少し潜水艇が揺れる。その揺れがおさまると、前面のモニタを見つめたまま再び口を開いた。

「昔、僕たちが出入り口として使っていたところは防護壁の破損による穴だったようで、もう何年も前に塞がれてしまっただけだ。だから新しい実験体を手に入れることも出来なかったんだよ。今回、武蔵に聞いたのは正規の出入り口だそうだ。潜水艇から上げられる場所はもうそこしかないらしい。もちろん、僕らでは解錠できない魔導とやらを使った鍵が掛けられているけど」

漣は小首を傾げる。

「メルローズなら開けられるってこと？」

「そうじゃない」

武蔵が間髪を入れず口を挟んだ。

「あの鍵を開けられるのは現時点でおそらく二人だけのはずだ。メルローズはもちろん俺も開けられない。だが、強大な魔導力があれば解錠しなくても吹き飛ばせる。つまり、メルローズに魔導の暴発を起こさせて結界ごと破る、というのが溝端たちの計画だろう」

そういえば――出航前に同じような話を聞いていたことを思い出した。聞いてはいたが理解しきれていなかった。結界が生体高エネルギーで作られた防護壁だということは認識しているが、暴発を起こす、結界を破る、というのがどういうことなのか今ひとつイメージが湧かないのだ。

後列の遥が、漣と武蔵の間に身を乗り出した。

「どうやって暴発を起こさせるの？」

「メルローズはもともとかなり強い魔導力を持っていたが、橘美咲の実験でさらに強い魔導力を持つようになった。だが、使い方を学んでいないせいで制御が上手く出来ない。メルローズの場合は興奮

状態になると急激に魔導力が高まるようだが、そうなると自分自身でどうすることもできなくなり、暴発——高まったエネルギーが制御を失ったまま爆発するんだ。だから、それを誘発するために興奮剤のようなものを使うんじゃないかと思う」

武蔵は視線を落とし、まるで独り言のように述べていった。

補足するように大地が言葉を継ぐ。

「具体的に何の薬を使うかはわからないが、いずれにしても簡単に効果が現れるものではないし、そこからエネルギーが高まるまでにも時間がかかる。溝端たちは少し先を行っているが、暴発を起こすまでには間に合う計算だ。もしすでに薬を飲まされていたら、眠らせるか気絶させるかすれば収まるだろう」

隣の武蔵が緊張した面持ちで頷いていた。

その表情を見ていると、目前に迫った現実であることを思い知らされ、滯もつられるように緊張が高まってきた。失敗するわけにはいかない。失敗して結界が破られれば溝端たちに攻撃され、何万、何十万という命が消えることになる。そして、下手をすれば滯たちも一緒に海の藻屑となるかもしれないのだ——。

やがて、潜水艇は狭い海中洞窟のようなところに進み入った。前面のモニタには流れる岩肌が映し出されている。慎重な操縦でそこを抜けてゆっくりと浮上すると、ほどなく水面に出た。あたりは先ほどまでと同じくごつごつした岩で覆われている。まるで地下洞窟の最奥のような景観だ。

数メートル離れた水面にはもう一つ似た大きさの潜水艇があり、その前で、少し怯えた顔をした男性がこちらに銃を構えて立っていた。溝端の仲間だろう。作業服らしきものを着ているので潜水艇の技術者かもしれない。

「これじゃあ出るに出られないね」

「俺に任せてくれ」

武蔵はそう言うなり梯子をすいすいと登り、上部のハッチを開け、軽やかに飛び出して岩の地面に着地した。とっさの出来事に反応できなかった男性は、慌てて武蔵に銃口を向け直すと、奥歯をグッと噛みしめながら引き金を引く。

バン——！

洞窟内に銃声が轟いた。

滯は思わず口もとを押さえてヒッと息をのんだ。しかし、モニタに映っている武蔵に撃たれた様子はない。彼は勢いよく地面を蹴って飛び出すと、男性の懐にこぶしを叩き込み、崩れ落ちた体を横たえて拳銃を奪い取った。

「もういいぜ」

武蔵がこちらに向かって声を張る。

大地、滯、遥はそれぞれあたりを警戒しつつハッチから外に出た。そこは、人為的な照明が灯されているわけではないが、どこからともなく光が漏れ入ってくるようで、やや薄暗くはあるものの普通に周囲を見渡せる状態だった。

「銃弾、外れたの？」

「いや、結界を張って防いだ」

この国の周囲すべてに張り巡らされている防護壁も結界といわれている。規模は違うが基本的に同じものなのだろう。ミサイルでさえ防げるという話だから、銃弾が防げて何ら不思議ではない。今にして思えば、米国大使館の応接室でも同じように銃弾を防いでいたのだろう。だとすれば――。

「このまえ撃たれたのは結界を張らなかったから？」

「そうだよな、結界を張れば良かったんだよな」

武蔵は半ばやけっぱちのような口調でそう答えると、倒れた男性の上着を脱がせ、その袖を乱暴に破りとっていく。濡からは背中しか見えず表情はわからないが、怒っているような、不満げなような、なんとなく苦々しい様子は伝わってきた。

「あのときはすでに何度も魔導を使っていたせいで、とっさに結界を張るだけの力は残っていなかった。あれしきのことで情けない話だが……地上は魔導の素となる物質が希薄なせいで、魔導を放射するにしても結界を張るにしても、こっちの何倍もの労力が必要になるんだ。そのくせ効果は数分の一しか期待できない。酸素の多いところで炎は大きくなるが、酸素の少ないところでは炎は小さくなる、っていうのと似たようなものだな。逆にメルローズにとっては、ここは暴発を誘発しやすい危険な環境だといえる」

淡々と説明しながら、破った袖で男性の手首と足首をそれぞれ縛り上げる。そして流れるような所作で立ち上がり振り返ると、男性から取り上げた拳銃をこちらに放り投げた。緩やかな弧を描いて大地の手にすんと落ちる。

「まだ弾が入っている。使い方はわかるか？」

「まあな。久しぶりだから腕はなまってそうだけど」

大地はニッと口もとを斜めにして両手で構えた。その銃口は武蔵を捉えているが、彼が顔色ひとつ変えないのを見ると、小さく苦笑して後ろのポケットにしまった。

武蔵は親指で潜水艇を示し、口を開く。

「おまえにはここで潜水艇を見張っててもらいたい。ヤバい事態になったら潜水艇に乗っていったんここから離れる。潜水艇がなくなったら地上に戻りようがないからな。事態が落ち着いたら俺たちを迎えに戻ってきてくれ」

大地は一瞬ピクリと眉を動かしたが、すぐに真顔で考え込んだ。

「……美咲のことは、頼んでいいんだな」

「ああ、復讐はしないと言っただろう」

武蔵の指示が理にかなっていることは理解していても、やはりどうしても不安が残るのだろう。相手が美咲に恨みをもっているのだから当然である。それでも決意を固めたように表情を引き締めると、一歩踏み出し、重々しく彼の右肩に手をおいて力を込めながら懇願する。

「必ず、美咲を連れ帰ってくれ」

うつむき加減になった大地を感情の読めない目で見下ろしながら、武蔵は「ああ」と低い声で返事をした。

潜水艇の正面に、洞窟の奥に続く道がひとつだけあった。足元さえ見えないほど暗くて狭い岩のトンネルだ。武蔵が魔導の光で照らしながら先頭を歩き、そのすぐ後ろから濡と遥がついていく。しば

らく道なりに進んでそこを抜けると、急に視界が大きく開けた。

「わあ……」

見上げても見上げ足りないほどの壮大な空間は、ゴシック様式を思わせる建築物が造り上げていた。装飾は何も施されていないが、まるで宮殿の大広間のようなものである。その天井からは神の祝福を思わせる光が降りそそぎ、凜とした冷涼な空気と相俟って、息をのむような神聖な佇まいを醸し出していた。

「元々は王宮だったらしい。今は移転して別のところに建てられているが、地下だけは侵入者を阻む迷宮として残されたんだとか。まあ、迷宮を抜けたところで鍵を開けないことには入れないけどな」

「溝端さんたちは迷宮を抜ける必要はないんだよね？」

「ああ……だが、あいつらがどこに向かったのか……」

迷宮というだけあって、大広間から四方八方に通路が延びている。すべてしらみつぶしに探してはとても間に合わない。かといって、手がかりとなるようなことは何もなさそうに思える。武蔵も難しい顔でじっと考え込んでいた。

「三人で手分けして探したら……」

「それは駄目だ。俺から離れるな」

濡の提案を即座に却下するが、良い考えは思い浮かばないらしく表情は険しい。この状況で行き先を論理的に推測することなど不可能だろう。ますます眉間に深い皺の刻まれた武蔵に、遥は呆れたような溜息まじりの口調で忠告する。

「じっとしてたら時間の無駄だよ」

「それもそうだな……」

「考えながらでも探していかないと」

武蔵は硬い面持ちを崩すことなく頷いた。そのとき、濡はあることを思い出してハッとする。

「ねえ、武蔵って魔導力を持っている人の気配がわかるんじゃないかった？」

「ああ、だがそこそこ近くないと無理だ。魔導力が高まれば別だが……」

そこまで言うと、彼は唐突に大きく目を見開いて顔を上げた。愕然とした表情で正面を見やっている。その様子に、濡はそこはかたない不安を覚えて顔を曇らせた。

「どうしたの？」

「あっちだ！」

武蔵は視線の先に延びる通路に向かって全速力で駆け出した。メルローズの気配を察知したのだろうか。それとも、不穏なことが起こっているのだろうか。濡と遥は事情のわからないまま彼を追って走り出した。

ミサキ、ミサキっ――。

舌足らずな幼い声が扉の向こうから漏れ聞こえてきた。おそらくメルローズのものだろう。切迫した声音ではないが健気に何度も呼びかけている。たどり着いた武蔵がすぐさま重厚な両開きの扉を押し、濡と遥も加勢するが、鍵が掛けられているのかビクともしなかった。

中からカチャリと無機質な音が響いたあと、溝端と思しき声がそれに続く。

「橘美咲女史、これまでのあなたの働きには感謝しています。何ひとつ恨みはありませんが、日本の

未来のためにここで犠牲になっていただきたい。この弾丸で、二十年以上にわたる長き悪夢と恐怖を終わらせる」

犠牲って、弾丸って――？！

滯はすうっと血の気が引いていくのを感じた。いったい何がどうなっているのだろうか。一緒にいるはずの美咲の声が聞こえてこないことにも、大きく不安が煽られる。

「二人とも退け！」

武蔵は両脇にいた滯と遥を下がらせると、両手を前に突き出し、鍵穴の付近に強烈な白い光を放射する。何かが弾けたような音がして、その部分が大きくひしゃげた。滯、遥とともに、再び力を込めて扉を押し開けていく。

「お母さまっ！！」

薄く開いた扉から、滯は誰よりも先に中へ駆け込んでいった。そこには予想通りの三人がいた。濃紺のスーツを身につけて冷やかな顔をした溝端が、左手でメルローズを自分のもとに押しえつけ、右手の拳銃を美咲の胸元に突きつけている。引き金にはしっかりと指がかかっていた。それを目にした滯はビクリとして足を止める。

「滯？！」

振り向いた美咲が目を見開く。

滯は意を決して突進しようと大理石の床を蹴ったが、直後、武蔵に後ろから上腕を掴んで引き留められた。体が大きく斜めに仰け反り、長い黒髪がしなやかに舞う。美咲が息をのんで口を開きかけた、そのとき。

バン――！

無機質な広間に、耳をつんざくような銃声が反響する。

美咲の小柄な身体は、血しぶきを上げながら後ろに弾き飛ばされて床に倒れた。カラカラと転がる藁莖が脱げたパンプスに当たって止まる。その間にもみるみる白衣が鮮血に染まり、大理石の床にも赤い液体が広がっていく。鼻をつく硝煙の匂いは殊更に現実であることを主張するが、それでもなお信じがたく信じられない――滯は武蔵に支えられながら、その光景をただ茫然と漆黒の瞳に映していた。

## 47. 消えゆく命を前にして

---

「ミサキ！！」

甲高い悲鳴が、無機質な大広間に響き渡った。

溝端に体を押さえつけられていたメルローズは、その腕が外されると、横たわる美咲に飛び込むように縋りついた。白いワンピースが血に染まるのも構わず顔を覗き込む。鳶色の瞳からは止めどなく涙が溢れていた。米国大使館で武蔵が撃たれたときはぼんやりとしていたが、今回は怯えた顔で引きつるように泣きじゃくっている。美咲の身に何が起きているのか概ね理解しているようだ。

「おい、待てっ！」

武蔵は混乱に乗じて逃げようとしている溝端に気付き、腕を引っ掴んで声を荒げた。

その隙に、滯は自分を支えてくれていた彼の手を振りほどき、美咲に向かって駆け出した。遙も同時に走り出す。待て、という制止の声が背後から聞こえてきたが、二人は足を止めるどころか振り返りもしなかった。

「お母さま！！」

滯が膝をついて呼びかけると、虚ろな瞳がかすかに反応したような気がした。遙は大急ぎで着ていたパーカーを脱ぎ、傷口と思われるところに強く押し当てる。しかし、ドクドクと溢れる血が止まる気配はなく、みるみるうちに濡れていくのがわかった。遙の表情は険しい。それを見た滯は、冷たい手で心臓を鷲掴みにされたかのように感じた。

「どういうつもりだ！」

武蔵は乱暴に腕を掴んだまま溝端と対峙していた。カッとして声を荒げるものの、溝端の方はそれでも飄々とした態度を崩さない。

「彼女は人柱になるんですよ」

「わかるように言え！」

「そんな義務があるとでも？」

眉ひとつ動かさない彼を睨みながら武蔵は歯噛みする。しかし、そのスーツの内側に何かを見つけてハッとすると、抗う隙も与えず素早く手を伸ばして奪い取った。美咲を撃った拳銃である。指が食い込むほどの力で溝端の腕を掴んだまま、もう片方の手で撃鉄を起し、彼の額にグリッと黒い銃口を突きつける。

溝端は息をのんだが、その表情はすぐさま冷笑に変わった。

「こんな脅しで口を割ると本気でお思いですか。私の役目はもう終わったのです。殺されても計画に支障はありませんので、撃ちたければご自由にどうぞ。最後まで見届けられないのは些か残念ですが」

彼に臆する様子はない。その額を抉るかのように銃口を押しつけたまま、武蔵は顔をしかめてギリと奥歯を噛みしめた。

「お母さま、しっかり！」

滯は彼女の手を取り、ひたむきに声を掛けることしか出来なかった。遙もまた傷口を強く押さえ続け

るだけである。美咲の目はもう焦点が定まっていない。撃たれた彼女自身も、まわりを囲む三人も、恐ろしいくらい血まみれになっていた。

メルローズは美咲の腕に縋りつき、小さくしゃくり上げながらうわごとのように名前を呼んでいた。しかし、不意にそのかぼそい声が途絶えて嗚咽も聞こえなくなる。濡が振り向くと、うつぶせになった彼女の小さな身体が薄い光を纏っていた。

「メル、ローズ……？」

怪訝に覗き込みながら、その小さな背中に手を置こうとする。が――。

「きゃあっ！！」

「濡？！」

触れた箇所が大きく発光し、パチッと凄まじい勢いで弾かれて後ろに倒れ込んだ。手のひらに無数の針が突き刺さったかのような激痛を感じる。目を落とすとそこは赤黒く焼けていた。手首を掴んで、痛みに耐えながらグツと奥歯を食いしばる。遥は目を見開いて振り返ったものの、美咲からは手を離せず、めずらしく対応に戸惑っているようだった。

「危ないっ！！！」

後ろにいたはずの武蔵が、美咲の傷口を押さえていた遥を乱暴に引き倒すと、彼と濡の頭を同時に抱え込みながら覆い被さる。直後、ドンツと彼の背中越しに衝撃が伝わってきた。はみ出していた脚や身体の一部には焼けるような熱さを感じたが、一瞬だったため耐えられないほどではない。

「ぐっ……」

武蔵は呻きながら体を起こすと、濡と遥を立てて一緒に後ろに下がった。

「武蔵……その、背中……？」

濡はそう尋ねながら、身を挺して守ってくれた彼をおずおずと見上げる。彼は少し苦しげながらも「大丈夫だ」とはつきり答えた。そして、そんなことよりもと云わんばかりに濡の手をとり、焼けただれた手のひらに目を落とす。彼の顔が歪んだ。

「ひどいな……手当は後です。しばらく我慢できるか？」

濡は無言でこくりと頷いた。これまで感じたことのない痛みに脂汗さえ滲むが、ここには薬も包帯も何もないのだから、現実として我慢するしかないと理解している。

武蔵はメルローズの方に向き直る。

美咲の腕を抱え込んだ小さな体は、目の眩むような白い光に包まれていた。息苦しいのか背中は大きく上下している。その度に、まわりの光が少しずつ増幅していくように見えた。

「メルローズの魔導の力が暴走を始めた。もう止めることは不可能だ」

彼女の様子を眺めながら、武蔵は額に汗を滲ませて苦々しげにそうつぶやく。確かに、抱き込んで抑えた米国大使館のときとは明らかに様子が違っている。無知な濡にも何となく手遅れであるようには感じられた。

「下がっている」

武蔵はひとり前に進み出ると、両手をまっすぐメルローズたちの方に突き出し、口先で何か呪文のようなものを唱えた。すぐに薄い光の膜がメルローズたちを覆う。それは彼女を中心に据えた半球状を形作っており、小柄な美咲の体もすべてその内側に収まっている。

「結界の強度が足りない。滯、遥、力を貸してくれ」

武蔵は両手を下ろして真剣な顔で振り返った。そもそも滯たちがここへ来たのは、いざというときに魔導力を使ってもらうため、彼に請われれば力を貸すのが当然である。しかし――。

「お母さまは、どうなるの？」

「.....近づけないんだ」

苦渋に満ちたその一言だけで、何を云わんとするかは十分すぎるほど理解できた。愕然として半開きの口を小刻みに震わせていると、遥が駄目押しのように追い打ちを掛けてくる。

「どのみち助からないよ」

「でも.....っ！」

思わず声を上げたものの、継ぐべき言葉が見つからずきゅっと唇を引き結ぶ。それでも必死に頭を巡らせてひとつの可能性を見つけると、結界の一步手前まで駆けていき、火傷していない方の手を胸元で握りしめて大声で叫ぶ。

「メルローズお願い！ 正気に戻って！！」

反応はなかった。

メルローズ自身が制御できなくて暴発するのだから、正気に戻るとかそういう問題ではないのかもしれない。それでも一縷の望みに懸けるような気持ちで、何度も何度も縋るように彼女の名前を呼ぶ。やがて、大きな手がずっしりとした重みを持って肩に置かれた。

「滯、頼む.....今できることを考えてくれ」

「っ.....そんなの、わからないよ.....」

滯は今にも泣きそうになっていた。そんな様子に気付いているのかいないのか、武蔵は後ろから滯と遥を勢いよく懐に引き入れ、囲い込むような形で結界に両手を置いて言う。

「俺の手におまえらの手を重ねて、気を集中させてくれ。俺に送るようにイメージしてみろ」

それが、今の二人にできるたったひとつのことであり、そしてやらなければならないことなのだろう。遥は請われるまま武蔵の片手に己の手を重ね、気持ちを整えるように目を閉じて浅く呼吸をする。しかし、滯はいまだ覚悟が決まらず立ち尽くすだけだった。

「滯.....！」

武蔵の声には切実さが滲んでいた。

滯は正面を見つめる。美咲の姿はメルローズの発する光に包まれて、もうほとんど見えなくなっていた。かろうじて投げ出された片手と足先が覗く程度である。それももうピクリとも動かない。まわりの床に広がるおびただしい血溜まりが惨状を物語っていた。

お母さまは、助からないかもしれない――。

それは遥に言われずとも感じていたことだ。けれど、助からないという確定的な根拠がない以上、むぎむぎと見殺しになどするわけにはいかない。だからといって、今の自分にはどうしようもないこともわかっている。開いたままの目から一筋の涙が伝った。

「すまない.....」

武蔵の謝罪が何に対するものかはわからない。しかし、本当に謝罪すべきはむしろ自分の方だろう。今は一刻を争う状況なのにいつまでもこんな――滯はようやく決意を固めると、火傷を負っていない方

の手を彼の手を重ね、遥と同じように目を閉じて気持ちを集中させた。

「よし……おまえらの力が伝わってくる……」

体から力が抜けていくように感じるのは、魔導の力が吸い取られているからだろうか。隣の遥もわずかに眉を寄せている。今まで味わったことのない感覚ゆえに不安を覚えるが、生命の危機を感じるようなものでなく、立つのに支障をきたすほどのものでもない。

「これで封じ込められるんだよね？」

「いや、さすがにそれは無理だ」

滯の期待を、武蔵はあっさり和一蹴する。

「だが、もちろん無駄なことをやってるわけじゃないぜ。この結界は間違いなく破られるだろうが、ここで幾分か威力を削いでおけば、国を守る結界の方は破られずにすむ……かもしれない。そっちまで破られたらおしまいだからな」

この国を覆っている結界を破損させたうえ、そこからミサイルを撃ち込んで壊滅させる、というのが溝端たちの計画だということ思い出す。武蔵はその最悪の事態を防ごうとしているのだ。だが、彼の物言いかからすると絶対の自信があるわけではないらしい。

結界を補強している間に、メルローズの体は禍々しい光の渦にのまれて見えなくなった。

滯の胸に恐怖心が湧き上がってくる。ごく薄い光でさえ手のひらが焼けるほどの威力だったのに、この強烈な光の渦に結界を破られたら、いくら武蔵が庇ってくれても無事で済むとは思えない。次第に足が震えてきた。

「すまない、もう少しだけ耐えてくれ」

滯の震えを感じてそう言ったのだろうが、彼自身がひどく苦しそうな声をしている。それでも気は緩めていない。触れ合っている手から緊張が伝わってきた。

グワッ、と急激に光が膨れあがる。

滯はビクリと体を仰け反らせて背後の武蔵にぶつかった。直後、彼は滯たち二人を脇から抱えてくるりと身を翻し、すぐさま降ろして力いっぱい突き飛ばすように背中を押す。

「振り返るな！ 全力で走れ！！」

そう言われたにもかかわらず、滯は足を止めたままオロオロしてしまう。しかし、遥に手を引かれて我にかえり一緒に走り出した。武蔵がどうしているのか気になったが、そのうち後方から彼の足音が聞こえてきて、幾分かほっとする。開かれた扉を超えてさらに進もうとすると、グオオオオオ、と大気が震えるほどの轟音が響き出した。驚きのあまり滯だけでなく遥も足を止めてしまった、そのとき。

ドドドオオオオン——！！

鼓膜が破れたかと思うくらいの爆音とともに視界は真っ白に染まり、背後から強い衝撃を受けて吹き飛ばされる。爆風に揉まれて天地もわからなくなるほど体が回転し、全身に刺すような激痛を感じたかと思うと、受け身さえ取れないまま石の床に激しく叩きつけられた。

考える間もなく、滯の意識はそこで途切れた——。

## 48. 残酷な選択

漣は全身がバラバラになりそうな激痛とともに、意識を取り戻した。どうやら瓦礫の上で仰向けになっているようだ。体の上にも瓦礫が載っているような感触がある。それを退けようと思っても、指先を動かしただけでズキリと腕に痛みが走った。身じろぎひとつできないまま、鉛のように重い瞼を持ち上げる。薄く開いた目に飛び込んできたものは、天まで突き抜ける、目の眩むようなまばゆい光の柱だった。ところどころで枝分かれして禍々しく揺らめいている。

光の魔神――。

大地の言葉が脳裏によみがえる。海上に突き出た部分だけを見れば、魔神のように見えるのかもしれない。何となくではあるが想像はついた。だが、ここから仰いでいると昇り竜のように見える。建物の天井は吹き飛んでしまっており、空なのか海なのかよくわからないが、はるか彼方の薄青色をまっすぐに貫いていた。

ダメ、だったのかな――。

ぼんやりとそんなことを思いながら目を細める。轟音を上げていたまばゆい光の柱は、徐々にその勢いを失い、やがてふっと掻き消えるようになっていった。

ガラガラ、ガラ――。

瓦礫の崩れるような音が聞こえたかと思うと、その向こうから武蔵がよろりと姿を現した。ところどころに軽い擦り傷があるくらいで、大きな怪我はなさそうに見える。彼は瓦礫の中で横たわる漣を視界に捉えると、ハッと息をのみ、何度か蹴躓きながらも勢いよく駆け寄って来た。

「漣！ しっかりしろ！！」

虚ろな目を覗き込んで声を掛け、体の上に散らばった瓦礫を必死に退けていく。そして、あちこち破れた血塗れのブラウスに手を伸ばし、ボタンを外して中を確認すると、ようやくほっと小さく安堵の息をついた。顔にも体にも多数の裂傷を負っているものの、出血は軽く、命に関わることはないと判断したのだろう。

「武蔵！」

武蔵がブラウスのボタンを留め終わる頃、向かい側から、遙が瓦礫を踏みしめながらやってきた。シャツも手足もひどく血みどろに見えるが、漣と同じく美咲の血がついているだけだろう。足取りは軽く、これといって深刻な怪我はなさそうに見える。

「おまえは大丈夫か？」

「何とかね、漣は？」

「ああ……」

武蔵は大きく顔を曇らせると、横たわる漣に視線を落とす。

「見たところ大きな外傷はなさそうだが、だいぶ体や頭を打ちつけているみたいだ。どこか骨折しているかもしれない。致命的なところでなければいいんだが……それよりも心配なのは頭の方だな。意識が混濁しているのか、話しかけても目が虚ろで反応が返ってこない」

「へ……いき……」

滯はどうか掠れた声を絞り出した。確かに頭も打ったが意識はハッキリしている。ただ、苦しくて答える気力がなかっただけである。息をするだけで体中がズキズキと痛むが、どうか堪え、先ほどから気になっていたことを尋ねる。

「結界、は……？」

「結界は破れた」

武蔵は深刻な面持ちで答えた。そして、向かいに立つ遥を見上げる。

「だから一刻も早くここから離れないと危ないんだ。潜水艇は一時避難しているかもしれないが、落ちてきた今なら戻ってくるだろう。俺が今から急いでメルローズを連れてくる。その間、二人はしばらくここで待っていてくれ」

「母さんも忘れないで」

遥は表情ひとつ変えずにそう言い添えるが、武蔵は眉根を寄せ、答えあぐねるような面持ちでうつむいた。美咲が事切れているかもしれないと心配しているのだろうか。しかし、その可能性が大きいことは遥もとうに承知しているはずである。

「どうなっても置き去りにはできないよ」

痺れを切らしたのか、苛立たしげに言い捨てて美咲のいた方へ自ら向かっていく。その言動からは、生きていても死んでいても連れ帰るという強い意志が感じられた。しかし、武蔵は大慌てで立ち上がって追いかけていくと、後ろから細い手首を引き掴んだ。

「俺が行くから待ってろ」

「覚悟はしてるから」

「駄目だ、まず俺が――」

二人がそんな言い争いをしている間に、滯は軋む体を起こし、奥歯を食いしばりながら足を進めていた。美咲が生きているのか死んでいるのか気になり、いてもたってもいられなくなったのだ。すぐに、床がクレーターのように大きくえぐれているのが目に入る。その中心部の最も深いところで、誰かがうつぶせになっていた。鮮血に染まった白いワンピースに、緩いウェーブのかかった灰赤色の長髪――メルローズだ。

「おいつ、滯！！」

ようやく気付いた武蔵が驚愕した声を上げ、血相を変えて追ってきた。滯は反射的にクレーターに足を踏み入れるが、斜面でバランスを崩して倒れ、そのままゴロゴロと砂埃を上げながら転がり落ちる。

「滯っ！！」

「う、ぐ……っ」

あまりの痛さに意識が遠のきそうになった。それでも脂汗を滲ませながら必死に堪え、ガクガクと力の入らない手をつき、どうか上体を起こしてあたりを見まわす。

どこにも美咲の姿はなかった。

暴発前はメルローズの隣にいたはずなのにどうして、と倒れている彼女に再び目を向けると、体の下から指らしきものが覗いていることに気付く。怪訝に思い、横から彼女の小さな体を起こして中を覗き込んだ。

「……っ！！！」

思わず声にならない悲鳴を上げて少女を突き飛ばし、反動で尻もちをついた。

そこにあったのは片腕だけだった。他の部分はどこにも見当たらない。血に濡れた白衣からすらりと伸びている白い手――信じたくはないが、美咲である。

「い、やーーーーッ！！！」

ガタガタと大きく体を震わせたあと、あらん限りの声で絶叫しながら後ろに倒れかかり、追ってきた武蔵にすんでのところで受け留められた。そして、目の前にある現実から庇うように抱き込まれる。滯はその広い胸に縋りついて火が付いたように号泣した。

「ひっ……う、なんで……こんな……こんなの……っ！」

「至近距離で暴発を受けて消し飛んだんだと思う。メルローズが抱き込んでいた部分だけを残して……連れて帰ると言ったのに、こんなことになってしまって本当にすまない……」

武蔵は苦しげな声で謝罪すると、抱きしめる手に強く柔らかく力をこめた。ほのかなぬくもりが伝わってくる。それでも滯の震えと涙は止まらない。頭の中はぐちゃぐちゃで何も考えられず、ただ泣き続けることしかできなかった。

ザッ――。

砂地のようになっている地面を踏みしめながら、遥は前に進み出た。腕だけになった母親を無言のまま見下ろす。そして、血に染まったシャツを静かに脱ぐと、片膝をついてその腕を丁寧にくるんだ。

「腕だけでも、何もないよりはいいから」

「遥……」

武蔵は黒のTシャツだけになった後ろ姿を見つめて、眉を寄せた。

「こんなときにこんなことを頼むのは申し訳ないが、遥にはメルローズを連れて行ってもらいたい。魔導は放出しきってるから数日間は暴発しないだろう。今後、何かのはずみで暴発することがあったとしても、魔導の発現が格段に弱くなる地上なら、こことは違ってさほど大事には至らないはずだ。魔導力を安定させる研究もしていたらしいし、石川とかいう医者に頼れば、メルローズの暴発を抑えることも出来ると思う」

一方的にそう言うと、今度は滯の背中をポンポンと叩く。

「滯、気の済むまで泣かせてやりたいのは山々だが、今はあまり悠長に構えている余裕はないんだ。結界が破られた以上、すぐにでもミサイルが撃ち込まれるかもしれない。体が痛いのはわかってるし、つらいだろうとも思うが、今は堪えて立ち上がってくれ。どうにか潜水艇まで歩いて行ってほしい」

彼の言葉にどこか他人事のような響きを感じ、滯は啜り泣きながらも怪訝に顔を上げる。

「武蔵、は……？」

「俺はここに残る」

滯は濡れた目を大きく見開いたが、彼は迷いなく言葉を紡ぐ。

「ここは俺の故郷だ。攻撃されるとわかっていて、自分だけ逃げるわけにはいかない」

今さら彼一人が残ったところでどうにもならないはずだ。それを承知の上で、故郷と命運をともにするつもりなのだろう。どうして、そんな――滯の目から新たな涙が溢れてきた。肩を震わせながら武蔵の胸に縋りついてしゃくり上げる。

「武蔵が行かないなら、私も行かない」

「冷静になれ。ここにいたら死ぬんだぞ」

「もう、いいよ……疲れたもん……」

「おまえには待ってる人がいるだろう」

「大切な人が死んじゃうのは見たくない」

小さな子供のように、ぐずぐずと泣きじゃくりながら言う。

別にここで死のうと覚悟を決めたわけではなかった。母親に続いて武蔵まで亡くなると思うとショックで、悲しくて、何もかもどうでもよくなってしまっただけである。立て続けに起こった尋常ではない出来事に、心身とも絶望的なくらいに疲れきっていた。

遥はすっと立ち上がり、鋭く厳しい顔つきで振り返る。

「武蔵が残ることでこの国が救えるのならわかるけど、その可能性はほぼ皆無で、無駄死になる可能性の方が圧倒的に高いんだよね？ 故郷を思う気持ちはわかるけど、他に大切なものはないの？ 今の濡を助けられるのは武蔵だけだよ。メルローズを守ってやれるのも武蔵だけ」

「……………」

武蔵は体をこわばらせ、濡の肩を強く抱いたまま無言で考え込んだ。メルローズのことも濡のことも大切に思っているだろうが、この国にはおそらくそれ以上に大切な人たちがいるはずだ。簡単に覆せるとはとても思えない。しかし、遥はあきらめることなく淡々とした口調で畳みかける。

「故郷を見捨てて、僕らを助けて」

彼の迫っている決断はこの上なく残酷なものだ。取り繕うことなく放たれたまっすぐな言葉に、武蔵は眉を寄せてうつむいた。グツと奥歯を食いしばり、目をつむり、手に力を込め、額に汗を滲ませる。息の詰まるような重い沈黙。時が止まったかのような静寂。そして――。

「……わかった」

硬い声でそう言うと、吐息を落として幾分か緊張を緩める。

「俺は濡を抱えていく。おまえはメルローズを頼む」

遥が頷いたのを確認すると、武蔵は濡を優しく横抱きにして立ち上がった。それだけで体中にズキズキと痛みが走り、濡は声を堪えながらも僅かに顔をしかめる。だが、彼と一緒に帰ってくれることになったおかげか、気持ちの方は落ち着きを取り戻しつつあった。

「自分で歩くよ」

「無理はするな」

「……うん」

まだまともに歩ける状態ではないのだから、かえって迷惑かもしれないと思い直し、素直に甘えさせてもらうことにした。小さく息をついて何気なく彼を見上げる。そこにあったのはひどく思い詰めたようなつらそうな顔で、濡は息をのんだ。

「武蔵……」

「ごめんな」

不意に落とされた視線と謝罪。それが何に対してのものだったのかは判然としないが、謝らなければならないのはむしろこちらの方である。自分たちのわがままで故郷を捨てさせたのだ。泣いてどうなるものでもないことはわかっていたし、謝罪すべき側の人間が泣くなど卑怯だとも思ったが、それでも涙

が止まらなかった。必死に泣き声を抑えながら顔をそむけようとした、そのとき。

——ドオオオオン！

轟音とともに地面が突き上げられるように大きく揺れ、それから小さめの振動が続く。足元が不安定になり、遙は横抱きをしていたメルローズを下ろして抱きこんだが、武蔵は時折よろけながらもしっかりと濡を抱えたまま立っていた。

しばらくして揺れはおさまる。

濡はほっとして無意識にこわばらせていた体の力を抜いた。何が起こったのかはわからない。海中深くにあるこの国で地震など起こりうるのだろうか。それとも、まさかもう溝端たちが攻撃を——最悪の可能性が頭をよぎりゾクリと背筋が震える。おそるおそる真上に目を向けると、崩れた天井の向こうに広がる薄青色の一部分に、黒い煙のようなものが禍々しく渦巻いているのが見えた。

「どういうことだ……」

武蔵も同じ方向を見上げながら、愕然として呟く。その頬には一筋の汗が伝っていた。

## 49. 身内意識

「もう、ダメだってこと？」

滯ははるか上空で渦巻く黒煙を眺めながら、自分を横抱きをしている武蔵におそろおそろ尋ねた。彼も真剣な表情でその黒煙を見つめ続けている。どうしたことだ、などと言っていたくらいだから、彼にもわかっていないのかもしれない。だが、汗を滴らせながら僅かに目を細めると、独り言のようにつぶやく。

「結界が復活している」

「えっ？」

彼の言葉は思いもよらないものだった。朗報であるはずだが、なぜか表情は硬くこわばっている。

「完全じゃないが攻撃は防いでいる」

「あれ、溝端さんたちのミサイル？」

「多分な。結界に阻まれてその外側で爆発したんだろう。そうじゃなければ、このあたり一帯が爆撃されているはずだ。間違いなく大惨事になってたぜ。悠長にこんな話なんかしていられなかったらうな」

武蔵はそう答え、苛立ち紛れの吐息を落とした。

ミサイルが撃ち込まれれば大惨事になることくらいは滯にもわかる。遠い国の話ではあるが、ミサイルで街が破壊されて火の手の上がる映像を見た記憶があった。結界が復活しなければ、あれと同じようなことがこの国でも起こっていたのだ。

「どうして復活したの？」

「俺にもさっぱり……」

「本当に破られてたの？」

「俺を疑ってんのかよ」

「だって……」

もともと結界は破られてなどいなかった、と考えるのが最も自然だろう。これほど距離があれば誤認しても仕方がない。だが、武蔵はあくまで強気な姿勢を崩さなかった。

「視覚だけで判断してるんじゃない。気配を感じたんだ。子供のころ同じような暴発で結界が破れたときも、うっすらとだが同じような気配を感じていた。俺が間違えているとは思えない」

滯には彼の訴えることがよくわからず、いまだ半信半疑だった。

「そのときは、復活にどのくらいかかったの？」

「簡易的な修復だけでも数日かかったらしい。今は穴が空いてからまだほんの数分だぞ……普通に考えたらありえない……」

ありえない何かが起こったのか、やはり武蔵の認識違いなのか——考えたところでわかりようもないだろうが、それでも気になってしまい、滯は抱きかかえられたまま思考を巡らせる。そのとき。

ドン、ドン、ドン、ドオオオオオン！！

何発も立て続けに撃ち込まれたらしく爆音が響いた。地面は大きく波打つように揺れるが、ミサイルはすべて結界で阻止しているようだ。先ほどと同じように、しかしより広範囲に、薄青色の空に黒

煙のようなものが広がっている。

「っ……」

地面が揺れたせいで濡の体も何度か大きく跳ねた。もちろん武蔵がしっかりと受け止めてくれたが、全身を強く打ちつけていた濡の体にはズキリと響く。声はどうか堪えたものの、顔は大きくしかめてしまった。それに気付いたのか気付いていないのか、濡を横抱きにする手に優しく力がこめられた。

揺れがおさまると、遥は守るために覆い被さっていたメルローズから体を起こした。

「武蔵、どうするの？」

「……帰ろう」

武蔵はしばらく眉を寄せて考えたすえ、静かにそう言った。その顔には曖昧な微みが浮かんでいる。故郷の危機が去ったらしいことに安堵しつつも、やはり後ろ髪を引かれる思いはあるのだろう。濡は何も声を掛けることができなかった。

武蔵は濡を、遥はメルローズを抱きかかえて、潜水艇を停泊させた洞窟へと戻ってきた。

溝端たちの潜水艇はもう見当たらなかったが、自分たちの潜水艇はきちんとそこに泊まっていた。壊れたり傷ついたりということもないようだ。足を進めると、ハッチが金属音を立てて勢いよく開き、そこから大地がひょっこりと顔を出した。

「お父さま！」

「心配したぞ」

そう言いながら、彼はハッチの縁に足をかけて飛び降り、洞窟内の岩の地面に軽やかに着地した。「君たちはなかなか帰ってこないし、爆音がしたかと思うと地震みたいに揺れるし、正直もう駄目なんじゃないかと不安だったよ……ん？ どうしたんだそれ……まさか、血か？」

「平気、たいした怪我じゃないよ」

みんなの手足や衣服があちこち赤黒く汚れているのに気付いて、怪訝に覗き込んできたものの、遥は冷たいくらいにそっけない物言いを受け流した。その話題を打ち切りたい理由は想像に難くない。だが、そんなことは一時しのぎにしかないだろう。

「美咲は？」

当然のように、大地は焦燥して美咲の姿を探し始めた。

彼には真実を知る権利がある。隠し立てしようという気はさらさらないが、どう伝えればいいかわからず、濡は戸惑いながら目をそむけてしまった。武蔵に意向を伺うような視線を向けられたが、むしろ自分の方が訊きたいくらいである。

沈黙の中、遥が小さな靴音を立てて一歩前に踏み出した。抱きかかえていたメルローズをそっと地面に横たえ、その上にのせていた血塗れのシャツにくるんだものを手に取り、大地の正面に進み出ていく。

「何だ？」

大地は眉をしかめて尋ねるが、遥は無言で包みを解いていった。中から現れたものは――。

「……………！！」

大地はこぼれんばかりに目を見張って息をのみ、口もとを手で覆った。体はガタガタと膝が崩れそ

うなほど震え、顔は青ざめ、額から頬から幾筋もの汗が流れ落ちている。彼には一瞬でわかったのだろう。それが誰よりも愛している人の一部分だということが。

「な……こ、はっ……」

「メルローズの暴発に巻き込まれた」

意味をなさない掠れた声しか発することのできない大地に、武蔵が事実を告げた。横抱きにしていた漑を慎重にその場に下ろし、ひとり足を進めると、神妙な面持ちで大地を見つめて深く一礼する。

「必ず助けると言ったのに、すまなかった」

「……っ！！」

大地が獰猛な獣のように牙をむいた。凄まじい形相で武蔵の胸ぐらを掴み寄せると、固く握ったこぶしを狂ったように頬に叩き込む。隣にいた遙が割り込んで凶行を止めたが、そのときにはすでに何発も殴られており、武蔵の口の端からは一筋の血が滴っていた。

それでも大地は止まらなかった。

こぶしを掴んでいる遙の手を乱暴に振り払い、彼が持っていた美咲の腕を奪い取ると、後ろに飛び退いてぎらついた目で睨めつけた。その目を後方で横たわるメルローズへとゆっくり移していく。そして姿を捉えるやいなや、地面を蹴って猛然と彼女へ襲いかかっていった。

「……っ！」

漑も、武蔵も、とっさに反応することが出来なかった。

大地は歯を食いしばり、凶暴なこぶしを小さな体に勢いよく振り下ろす。すんでのところをそれを止めたのは、またしても遙だった。受け止めた両手で押し返しながら立ち上がる。大地はこぶしを引いて一步飛び下がり、美咲の腕を片手に抱いたまま構え直した。隙あらば再び襲いかかろうとしているようだが、遙は気を緩めることなく間に立ちはだかっている。

「どけ！」

「メルローズは被害者だよ」

「そいつが美咲を殺した！！」

「自業自得じゃないの？」

「何？！」

興奮してかなり立てる大地とは対照的に、遙は非情なまでに冷静だった。

「メルローズは非人道的な実験によって膨大な生体エネルギーを持てるようになったけど、それを抑えるだけの能力がなくて暴発を起こしやすくなっていたんだ。自業自得じゃなくて何だっていうの。母さんたちがこんな実験をしなければ、死ぬようなことにはなっていなかった」

「知ったふうな口を利くなアツツ！！！」

大地は雄叫びのような狂気の声を上げた。顎を引き、上目遣いで遙を睨めつけ鼻息を荒くする。

「美咲や僕がどんな気持ちでやっていたか知りもしないで、偉そうに……」

「どんな気持ちだろうと、メルローズを実験体にした事実は変わらない」

「そいつが美咲をこんなふうにした事実も変わらない！！」

大地はそう叫びながら、美咲の腕を鷲掴みにして前に突き出す。そのとき、漑は焼き切れた切断面を初めてはつきりと目にし、ヒッと喉を引きつらせながら小さく悲鳴を上げた。しかし、遙は冷たい

顔のまま少しも表情を動かさない。

「父さんに責める資格なんてないよ」

「邪魔するなら先に殺すまでだ」

大地は美咲の腕を片手で抱き込み、汗を滴らせながらニッと口の端を吊り上げた。

「美咲のいない世界なんて何の意味もない。だから……おまえたちをみんな殺して僕も死ぬ。もしおまえたちを殺せなかったとしても、僕に帰る意思がない以上、どのみちここで命が果てるのを待つしかないんだ。潜水艇を操縦できるのは僕だけだろう？ 脅されても拷問されても僕は絶対に操縦しない。ここで一家心中だな。この因縁の地で……クッ、ククッ、アーッハッハッハッハッハッ！！ もうすべて終わりだよ！！ 終わったんだ！！！！」

「お父さま……」

洞窟内に狂ったような高笑いを響かせる大地を見て、滯はゾクリと背筋を震わせた。いつも人懐こい笑みを浮かべていた彼とはまるで別人だ。美咲がこんなことになってショックを受けるのはわかるが、まさかここまでになるとは思いもしなかった。もうどうしたらいいのかわからない。しかし――。

「う?! ぐっ……おま、え……」

横からこっそりと近づいていた武蔵が、素早く鳩尾にこぶしを叩き込んで気絶させた。うずくまって崩れ落ちた彼の腕を捲り上げると、懐から取り出した細長いケースを開き、そこに入っていた注射器を躊躇いなく打った。

「何？」

「睡眠剤だ」

訝るような遥の問いかけに、武蔵はケースをしまいながら答える。

「こいつに持たされてたんだよ。メルローズを眠らせるのに使えって言われてな。一応は受け取っておいたが、俺としてはあまり使う気になれなかった。本当に睡眠剤かどうか確かめようもないし」

「じゃあ、もし変な薬だったら……」

「それこそ自業自得ってやつだろう」

その冷たい物言いに、滯は何ともいえない気持ちになり顔を曇らせた。だらりと力なく横たわる大地に目を向けるが、今のところただ眠っているだけのように見える。毒物ではないだろう。美咲が死んだ今ならともなく、注射器を用意したときにはメルローズを殺害する理由などなかったはずだ。

遥はしゃがんで美咲の腕を再びシャツでくるみ、口を開く。

「問題は何も解決してないよ」

「潜水艇は俺が操縦する」

遥も、滯も、目を見開いて顔を上げる。

武蔵が潜水艇を操縦できるなんて知らなかった。気絶させただけでなく、睡眠剤まで使用して大地を眠らせたのは、はなからそのつもりだったということだろう。滯は少し安堵したが、遥はいまだ不安そうに眉根を寄せていた。

「できるの？」

「ここへ来るときにあいつが操縦するのを見ていたが、俺がむかし乗っていた潜水艇と操縦方法が似ている。海上に出るくらいなら大丈夫だろう。心配するな、おまえたちを死なせるような真似はし

ない」

武蔵は断言すると、座り込んでいる濡を覗き込んだ。

「立てるか？」

濡は顔き、差し出された彼の手を取って立ち上がる。体のあちらこちらがズキズキと痛むが、耐えられないほどではない。右足に体重を掛けたときに強い痛みが走ったが、うつむいてやり過ぎすと、にっこりと大きく微笑んで顔を上げた。

「キャッ！」

潜水艇に乗り込もうと準備をしていた濡たちに、突如まばゆい光が向けられた。目を細めて手をかざすその一瞬に、自分たちのまわりに半球状の薄い光の壁が作られた。おそらく結界だ。武蔵も驚いた様子でぐるりと見まわしている。

あらためて光の方へ目を凝らすといくつかの人影が見えた。二つの光が下に向けられてようやく直視できるようになる。そこにいたのは、制服らしき濃青色の上下と紺のコートを着た男性四人と、青を基調にしたドレスに紺のマントを重ねた女性一人だった。両端の男性はそれぞれ懐中電灯らしきものを持っており、その内側の男性と女性は重ねた両手を前に突き出している。濡たちのまわりに結界を張ったのはこの男女二人なのだろう。

中央の男性がひどく挑発的な声音で口を開いた。よく通るきれいな声だが、知らない言語のようで何を喋っているのかはわからない。しかし、ここが故郷である武蔵だけは理解しているようだ。相手が喋り終わると、彼は若干緊張した面持ちで濡たちに振り向いた。

「大丈夫、あの人は知り合いだ。暴発も攻撃も俺たちの仕業だと誤解しているが、話せばわかってくれる人だから心配は要らない」

濡たちだけに聞こえるくらいのでそう説明したあと、一步前に踏み出し、彼らに訴えるべく大きく声を張って話し始めた。中央の男性は時に嫌みたらしく、時に真剣に、時に冗談めいて、武蔵と幾度となく言葉のやりとりをする。その間も、両隣の男性と女性は、こちらに両手を突き出したまま警戒を続けていた。

話の向きがどうなっているのかわからず、濡は不安に駆られて手を握る。

その直後、相手側の全員が驚いたように目を見張り、濡たちの方へいっせいに視線を注いだ。そして中央の男性が軽く笑いながら何かを言うと、武蔵は溜息をつきながら頭を搔いて言い返す。両隣の二人の雰囲気も少し柔らかくなった気がした。

「え……何だったのかな……？」

「武蔵の子供だってことを話したのかも」

ひどく困惑しながら声をひそめて尋ねた濡に、遥は一つの可能性を口にした。確かにそれならば皆の反応にも納得がいく。本当に武蔵がそこまで話したのだとすると、よほど彼らを信頼しているか、よほど親しい間柄ということになるだろう。

その後も、武蔵たちの話し合いは続いた。

やがて中央の男性がふっと小さく笑みをこぼして何かを言うと、両脇の男性と女性は手を突き出したまま目を見合わせて顔き、二人同時に声を合わせて何らかの言葉を口にする。すると、濡たちを覆

っていた結界が蒸発するかのように掻き消えた。

「どうにか信じてもらえたみたいだ」

武蔵は大きく安堵の息をついて腰に手を当てた。そして、颯爽と歩いてきた中央の男性と固く握手を交わす。懐中電灯を持っている二人はその場に留まったが、両隣にいた男性と女性は続いてこちらに向かってきた。二人とも表情は穏やかである。

武蔵は濡たちの背中に手をまわし、前へと促した。

「一応、おまえらの親戚にあたる人たちだから紹介しておく」

「え、親戚って……？」

混乱する濡に、遥は呆れたようにじとりと横目を流す。

「要するに武蔵の親戚ってことだよ」

「俺が父親だってこと忘れてたのか？」

「そういうわけじゃないけど……」

武蔵にからかうように尋ねられ、濡は若干のきまり悪さを感じながら口をとがらせた。彼が父親だということを忘れていたのではなく、親戚という言葉と結びつけられなかっただけである。この異国に自分の親戚がいるなど考えもしなかったのだから仕方がない。

武蔵は背筋を伸ばし、中央の男性を左手で示す。

「こちらはサイファ＝ヴァルデ＝ラグランジェ。俺たち一族の本家当主で、俺の親代わりで、仕事でも上司で、言い尽くせないほど世話になった人だ。魔導省長官という役職に就いていて、実質的にこの国の最高権力者といえる」

先ほどまでは距離があったのでよく見えなかったが、あらためて顔を合わせて、彼が半端なく整った顔立ちをしていることがわかった。加えて、さらさらのきらびやかな金髪、宝石のように鮮やかな青の瞳――まるで少女漫画から抜け出たかのような華やかさである。武蔵ほど身長が高くなく細身であることが、彼をより上品に見せているのかもしれない。そしてとても若々しい。武蔵と同年代といわれても納得してしまうくらいだ。一国の最高権力者にはとても見えないし、それ以上に武蔵の親代わりとは信じられない。

サイファは白い手袋を外し、優美に微笑んで手を差し出した。

しかし、濡たち二人とも血や砂埃で手が汚れており、とても握手できるような状態ではない。当惑していると、サイファは遥の手を両手で包むように握手し、続いて濡とも同じように握手した。地位がある人とは思えないほどの親しみやすい態度は、自分たちを親戚だと認めてくれたからだろうか。濡は戸惑いを覚えつつも無意識にはにかんでいた。

武蔵は続いて女性の方を示した。

「こちらはレイチェル＝エアリ＝ラグランジェ。サイファさんの妻で、この国の守護結界を管理する四大結界師の一人だ。破れた結界が即座に修復されていたのは、彼女の功績によるところが大きいらしい。今の結界は自動で破損部分を応急処置するようになっているんだと。もちろん破損の程度にもよるけどな。だから、俺らのやったことも多分無駄じゃなかったと思うぜ」

彼女もサイファに負けず劣らず若々しく、そして可愛らしい。深みのある蒼の大きな瞳、柔らかそうな小さな唇、透き通るような白い肌、薔薇色に染まった頬、腰まで伸びた金髪、折れそうに細い腕、おまけに小柄ということもあり、まるで十代の少女のようにも見える。ただ、胸だけが不釣り合い

なくらいに豊満だった。ドレスは鮮やかな青を基調にしたもので、胸元が大きく開き、腰から豪奢に広がるデザインである。その肩には紺色のマントが掛かっていた。男性の制服と思われる衣装と配色が似通っているので、もしかするとこれも制服なのかもしれない。

レイチェルも白い手袋を外し、愛らしく微笑んで手を差し出した。

彼女のきれいな手を見て躊躇する気持ちはあったものの、今度は素直に応じる。そのとき彼女に大きな瞳でじっと見つめられ、滯は思わずドキリとしてしまった。遙も困惑したように目を逸らしている。色気というには少し違う気もするが、引き込まれるような何かが彼女にはあった。

武蔵はさらに紹介を続ける。

「で、こちらはジーク＝セドラック。サイファさんたちの娘の旦那さんで、一族の人間じゃないけど、一応親戚ってことにはなと思う。彼も四大結界師のひとりだ。子供のころから何かと世話になって、俺にとっては兄貴みたいな人だ」

先ほどの二人とは違い、笑顔のひとつもなく少々とっつきにくい印象だ。気のせいであえて無表情を装っているように見える。彼は淡々と白い手袋を取り、遙、滯と順に握手を交わした。表情とは裏腹に、その手つきはとても優しくあたたかかった。

「後ろの二人も四大結界師だが、親戚じゃないし挨拶はいいだろう。俺もそう知ってるわけじゃないしな」

武蔵は後方で控えている男性たちに目を向けて言う。二人とも壮年といった年頃のように、顔つきは厳めしく、逞しい体躯をしているように見える。背後を守るためにそこに残ったのだと思っていたが、もしかすると親戚ではないから遠慮していたのかもしれない。

サイファは何か言いながら、横たわっているメルローズを覗き込みながらしゃがんだ。レイチェルとジークも彼女を見下ろし、武蔵も交えて四人で議論を始めた。もちろん滯には何を話しているのかわからない。だが、誰ひとりとして声を荒げることなく、冷静に、真剣に、相手を尊重して話し合っているようだった。

やがて、サイファがにこやかに武蔵の肩を叩いた。彼の顔はしかめられる。

「どうしたの？」

「メルローズに魔導の制御を教えろって」

「それって教えて何とかなるものなの？」

「ある程度はな」

教えるのは苦手なんだよ、といかにも嫌そうにぼやきながら頭を搔く。

彼の説明によると、薬物や人為的なものを使って抑制するより、訓練で制御できるようにした方がいい、という結論に達したそうだ。メルローズの潜在能力ならそれが可能らしい。自分自身で魔導の制御が出来るようになれば、暴発も起こらなくなるという話である。もっとも今の状態では暴発の危険性が高いので、魔導の発現が強くなるこの国には置いておけず、武蔵が地上で教えるということになったようだ。

武蔵は思い出したように真顔でサイファに声を掛け、どこかを指さした。彼が頷いて応じると、滯たちに「少し待っててくれ」と言い置き、彼と連れ立って足早にその場を離れた。声は聞こえないが、かろうじて姿の見える場所で、二人は顔を近づけて内緒話をしている。レイチェルもジークも気にな

っていたようではあるが、途中で示し合わせたように目で追うのをやめた。

ぼんやりうつむく滯の前に、繊細なレースをあしらった白いハンカチが差し出された。顔を上げると、そこにはにっこりと愛らしく微笑むレイチェルがいた。突然のことにきょとんとするが、彼女は血の滲んでいる顔や手の傷を示してから、あらためてそのハンカチを差し出してきた。これで拭けと言っているのだろう。けれどこんなきれいなハンカチを汚すわけには一一躊躇しているうちに、優しい手つきで半ば強引に握らされてしまった。差し上げる、とジェスチャで言っているように見える。

「もらえば？」

「うん……」

遙に言われて、戸惑いながらも彼女の厚意を受け取ることにした。両手でハンカチを持ちながらペコリと一礼する。そのハンカチを怖々と頬に当ててみると、砂とともに固まりかけの赤黒い血がついた。どうやら出血はもうほとんど止まっているようだ。乾いてこびりついた血は簡単にとれそうもないので、砂埃だけを払うつもりで手や顔をそっと拭いていく。それだけでも幾分かましになったような気がした。

「待たせたな」

しばらくして武蔵が軽く片手を上げながら戻ってきた。サイファも一緒である。どういう話をしてきたのか表情から読み取ろうとしたが、二人とも上手く装っているのか、これといった感情を見つけることができなかった。そんなにたいした話ではなかったのだろうか。だとすれば内緒にする必要はなかったはずだ。難しい顔になりながらうつむいた滯の頭に、武蔵がぼんと手を置いた。

「帰るぞ」

「え？」

「帰ろう」

そう言うと滯と遙を両脇から抱き寄せ、ふっと小さく微笑む。その様子を、サイファとレイチェルがあたたかく見守り、ジークも少し表情を柔らかくして眺めていた。

サイファたちに見送られながら、滯たちは潜水艇で海中に出た。

操縦しているのは武蔵である。難関と思われた狭い海中洞窟も無事に抜け、今のところは問題なく操縦できているようだ。前列には滯と眠ったままの大地が、後列には遙と眠ったままのメルローズが、それぞれ席に着いている。美咲の腕は、遙が膝にのせて落ちないように手で押さえていた。

「……あのな」

「ん？」

躊躇いがちに切り出された武蔵の声を聞いて、滯は顔を上げた。彼は前を向いたままだったので背中しか見えず、表情まではわからないが、それでも何となく緊張しているのが伝わってくる。

「レイチェルさんな……」

「うん」

硬い声からも彼の張り詰めた様子が感じられた。何を言おうとしているのか見当もつかないが、ひどく言いづらそうにしている。白いハンカチを持つ滯の手に無意識に力がこもった。暫しの沈黙の

あと、彼は意を決したように小さく呼吸してから言葉を継ぐ。

「彼女の魔導が、小笠原フェリー事故の原因だ」

「えっ？」

「彼女が故意に引き起こしたわけではなく、過失というわけでもない。人為的に暴発させられたと聞いている」

「……………」

何も言葉が出てこなかった。武蔵は振り返りもせず淡々と続ける。

「もちろん小笠原のフェリーを狙ったわけじゃない。海上であんなことになっていたとは誰も知らなかった。だから、さっきサイファさんにだけこのことを伝えておいた。今回の事件がその事故に端を発するものだという事。それをレイチェルさんに伝えるかどうかは、サイファさんの判断に任せてある」

今さら彼女に話したところで何がどうなるわけでもない。そうは思うものの、言葉にならないモヤモヤしたものが胸にわだかまる。その暴発事故の責任は彼女にないのかもしれない。武蔵の言うことが事実ならば、彼女はメルローズ同様に被害者ともいえるだろう。けれど――。

「すまない。文句の一つも言いたかったかもしれないが……」

武蔵はまるで滯の気持ちを汲み取ったかのように前置きしてから、淡々と続ける。

「暴発事故でのこちら側の犠牲者は三人だけだったが、それでも彼女が立ち直るまでに長い時間がかかった。なのに、さらに何百人も犠牲になってただなんて俺には言えない。……まあ、おまえらにはそんな事情なんて関係ないだろうけどな」

「彼女を守りたかった？」

遙が静かに尋ねる。操縦桿を握る武蔵の手に力が入った。

「……ああ」

「仕方ないよね」

遙の言葉が、滯の胸にじわじわと沁み入ってきた。武蔵にとってレイチェルは大切な身内のひとりである。血縁だけの滯たちより優先するのは当然だろう。それを責めることはできない。自分にも、同じように身内を優先する気持ちがあるのだから。

「この話、お父さまにはしないで」

「……わかった」

大地にこれ以上の刺激を与えたくなかった。フェリー事故を引き起こしたのが武蔵の親戚だと聞けば、そして武蔵が彼女を守ろうとしていたとわかれば、気が狂ったように荒れるのは目に見えている。それならば何も知らないままの方がいいだろう。ちらりと振り返ると、後ろの遙も小さく頷いて同意を示してくれた。

これで、もう――。

手にしていた白いハンカチに目を落とすと、レイチェルの愛らしい笑顔が脳裏に浮かんだ。まさか小笠原フェリー事故の原因がこんな人だなんて思いもしなかった。メルローズの暴発を目にしていなければとても信じられなかっただろう。非力な体からとてつもない力を放出する魔導とはいったい何なのか。滯は奥歯を噛みしめると、ハンカチごとぎゅっと両手を握り締めてうつむいた。



## 50. 望まれた半分

---

橘の家に戻ってまもなく、美咲は直葬された。

彼女の遺体が腕だけになっていることは、信用のおける必要最低限の関係者にしか知らせず、近い身内である剛三、遙、滯、そして悠人の四人で見守りながら荼毘に付した。出来れば夫である大地にも最後のお別れをさせたかったが、狂ったように暴れて、とても連れてこられるような状態ではなかった。今頃は、鎮静剤を打たれて屋敷の一室で眠っているだろう。

火葬場を出て、滯は薄青色の空を見上げる。

火葬をするときも、終わってからも、不思議とあまり悲しい気持ちにはならなかった。そもそも柩の中には腕しかなかったのだから、実感が薄いのも仕方のないことだと思う。今は気が抜けたようにぼんやりとしている。誤解を怖れずに言えば、ほっとしたということかもしれない。

「帰るよ」

「……うん」

後ろから遙に声を掛けられて振り返る。包帯を巻いていない方の手を彼に預け、捻挫している足首を庇いながら、剛三と悠人が向かった駐車場の方へ歩き出した。生ぬるい春風がほのかに頬をかすめ、黒髪をさらさらと揺らす。いつのまにか、制服だけでも肌寒さを感じなくなっていることに気が付いた。

美咲の死は、いずれ折を見て公表することになっている。

世間に名の知られた科学者である以上、ずっと伏せているわけにはいかないが、今はまだ各所との調整がすんでいない。公表するまではくれぐれも口外しないようにと、剛三からしつこいくらいに釘を刺されている。学校は春休みのため、欠席して勘ぐられるようなことはないし、うっかり口を滑らせる心配もないだろう。新学期までにはおそらく公表されるはずである。

メルローズは、ひとまず武蔵に預けられることになった。

ずっとこの国で生きていくのであれば、橘家の養子として迎え入れた方がいいだろうが、大地と一緒に家に置いておくのはやはり危険で、加えて魔導の制御を覚えなければならないという事情もあるため、当面は武蔵の隠れ家にこもって訓練することになったのだ。周囲に何も無いあの場所であれば、万が一暴発しても無関係の人を巻き込まないですむ、というのも理由の一つである。

大地は屋敷の一室にこもったまま、日がなベッドの上で過ごしている。

いまだに美咲の死を冷静に受け止めることができず、精神が不安定で、ときどきひどく暴れては鎮静剤を打たれていた。悠人はそんな彼に寄り添いつつ世話をしているらしいが、滯は小笠原から戻ったあと一度も顔を合わせていない。彼が一步も部屋を出ないので偶然会うようなことはなく、だからといって、あえて会いに行こうという気にもなれなかった。

「武蔵たちのところ、行かない？」

翌日、遥が散歩にでも連れ出すかのような軽い調子で誘いに来た。何か思惑があつてのことだろうか。怪訝に思いながら、滯は仰向けに寝転がっていたベッドから体を起こして小首を傾げる。

「どうして？」

「二人が心配だから」

遥は基本的に冷たいくらい他人に無関心だが、身内だけはとても大切にしている。武蔵のことも、メルローズのことも、すでに身内同然と思っているのかもしれない。そうでなければ二人を気に掛けたりはしないだろう。だが、料理を始めとして家事はすべてそつなくこなすし、面倒見も良い方なので、武蔵に限っては何の心配もいらないはずだ。

「私はいいよ。大丈夫だと思うし……」

こころもち目を伏せ、控えめな物言いで断る。

決して武蔵と会いたくないわけではない。ただあそこは彼と暮らした家ということもあり、誠一はこころよく思わないはずで、できれば行かない方がいいような気がした。もちろんもう二度と裏切るつもりはないが、裏切らなければいいというものでもないだろうし――などと考えたものの、自分を納得させるための言い訳でしかなかったのかもしれない。

「メルローズのこと、怖い？」

「……………」

ふいにそう尋ねられて何も言葉を返せなかった。自分自身でも明確には意識していなかったが、凶星である。白い包帯の巻かれた左手にじっと目を落とす。小笠原から帰還して以降、微妙に彼女を避けるような行動をした自覚はある。人間を跡形もなく吹き飛ばすほどの力を目の当たりにしたのだ。地上であればそこまでひどい暴発は起こらないと聞いているし、理解もしているつもりだが、湧き上がる本能的な感情だけはどうしようもない。

「僕一人で行ってくるよ」

「うん……ごめん……」

「武蔵にそう伝えとく」

遥は軽く右手を挙げて身を翻した。深く追及しなかったのも、無理強いしなかったのも、滯の胸中を察してくれたからだろう。扉を開けて部屋から出て行く間際、ドアノブに手を掛けたままちらりと振り返る。

「今度一緒に行こう」

「……うん」

パタン、と静かに扉が閉まる。

たとえ武蔵の隠れ家に行かなかったとしても、メルローズからずっと逃げ回ることはできない。いずれ彼女は橘家の養子になると聞いている。つまり、この屋敷で家族として一緒に暮らすことになるのだ。せめて普通に会話くらいできるようにならなければ――。

滯は溜息を落とし、包帯の手を胸元に置いてこてんと横になる。白いシャツの上にさらりと黒髪が広がった。

夜になると、誠一が仕事帰りに様子を見に来てくれた。

彼も夕食がまだということなので、滯の部屋で一緒に食べることにする。遥が武蔵のところへ出か

けたきり帰って来ず、一人で食べるのも寂しいと思っていたので、いいタイミングで来てくれたことに感謝した。広くはない部屋に折りたたみ式のローテーブルを広げ、クッションを敷き、向かい合わせで食事をしながらここ数日のことを話し合う。

「じゃあ、帰ってきたその日から仕事に行ってたってこと？」

「そう、もういい加減クタクタで休日が待ち遠しいよ」

誠一は苦笑してポタージュを手にとった。

小笠原から帰ったときは船酔いで立つことすら難しかったのに、そのあとすぐ警察庁で仕事をしていたとは思わなかった。それから休みなく働いていれば疲労もたまって当然だろう。濡と付き合っていたばかりに面倒事に巻き込んでしまい、今さらながらあらためて申し訳なく思う。

「休ませてはもらえなかったの？」

「いろいろ大変なんだよ。事件を隠蔽するには、事情を知りたく少人数で後処理するしかなくてな。俺は主に警察庁で溝端さんたちの聴取に当たってるが、楠長官は報告やら謝罪やら根回しやら駆けずりまわってて、寝る間もないくらい忙しいみたいだ」

当たり前のように隠蔽という話が出てきて複雑な気持ちになるが、楠長官の思惑はともかく、あの国を守るには現実的にそうするしかないことは理解している。正しくなくても従うしかない。所詮、自分も剛三や楠長官と同じ穴の貉ということだ。

「溝端さんがどうなるかわかる？」

「普通に逮捕されて裁判ってことはないな」

そう答えたあと、誠一はふいと申し訳なさそうに顔を曇らせる。

「美咲さんを撃ったことは許せないだろうけど……」

「うん……でも、仕方がないよ……」

濡は力のない笑みを浮かべ、ドレッシングのよく絡んだレタスに箸をのばした。まると隠蔽しようというのだから裁判などもってのほかだろう。事件自体をなかったこととして処理するのが最も簡単である。もちろん濡からすれば悔しく思わないわけではない。だが、美咲自身が多数の命を奪ったことも公表されておらず、何の刑罰も社会的制裁も受けていないのだから、それを棚に上げて強くは言えない。

誠一はグラスの水をごくりと飲んで、顔を上げる。

「なあ、今度の休日どこか行かないか？」

「え、誠一、疲れてるんだしゆっくり休んでいいよ」

クタクタで休日が待ち遠しい、とつい先ほど誠一自身が言ったばかりである。誘ってくれるのはもちろん嬉しいが、こんなことで無理をさせたくはない。しかし、彼はどういうわけかまるで聞き入れようとしなかった。

「このまえのデートの続きがしたいんだ。ダメか？」

「もうちょっと落ち着いてからでもいいんじゃない？」

「濡の怪我のことは考慮するし、無理させないから」

「そういうことじゃなくて……」

「濡が嫌だっていうんなら諦めるしかないけど」

「……その……私は、嬉しいけど……」

せっかくの休日に外出しては疲れがとれないのではないか。つらい目に遭った自分を気遣ってのことだろうか。だからって何もそんなに急がなくてもいいのに――滯は困惑ぎみに考えを巡らせていたが、誠一に「じゃあ決まりな」と満面の笑みで言われると、つい胸の高鳴るままこくりと頷いてしまった。

食事を終えてしばらく二人でまったりしたあと、誠一を玄関先まで見送った。

自室に戻るときに遥の部屋を覗いてみたが、まだ帰っていないようだった。さっそく武蔵やメルローズと打ち解けて仲良くしているのだろうか。もしかしたら夕食をご馳走になっているのかもしれない。ふと、武蔵の作ってくれた素朴なごはんを懐かしく思い出した。

ベッドに腰掛けてぱたんと仰向けになると、天井を見つめて目を細める。

遥も、誠一も、武蔵も、他の人たちも、みんな立ち止まることなく前へ向かって進んでいた。それが出来ていないのは自分と大地くらいである。いつまでもこのままではいけないとわかっているが、今はまだ立ち上がるだけの気力がない。そう考えること自体が甘えなのだろうか――。

「……よし」

滯は気合いを入れて、体を起こす。

メルローズに会いに行く勇気まではまだ持てないものの、ひとまずこの家にいる大地に会ってこようと考えた。自分と同じように立ち止まっている彼と会うことで、何か見えてくるものがあるかもしれない。そして、出来ることなら彼にも前を向いてもらいたい。そう何もかも上手くいくとは思わないが、行動しなければ何も始まらないだろう。捻挫を庇いながら、彼のいる部屋へとゆっくり緊張ぎみに足を踏み出した。

「お父さま？」

ノックをしても、声を掛けても、部屋からは何の反応も返ってこなかった。寝ているのかもしれない。こつんと扉に額をつけてうなだれたものの、せっかく来たのだから顔だけでも見てこようと思ひ、そっとドアノブに手を掛けてまわす。

微かな音を立てて、扉が開いた。

照明もつけられていない暗い部屋の中、大地はベッドで上半身を起こしていた。細いアーチ型の格子ガラス窓を全開にし、闇夜に浮かぶ下弦の月を見上げている。その顔はほとんど見えない。冷たい夜風がするりと窓から滑り込み、無造作に開かれたカーテンがふわりと揺れ、彼の短い黒髪もさらさらと軽やかになびく。

「やあ」

声も掛けられず立ち尽くしていると、大地は静かに振り返ってそう言った。

「……元気ですか？」

「それなりにね」

いつもと変わらない冷静な受け答えをする彼を見て安堵する。どうやら今は落ち着いているようだ。遠慮がちに足を踏み入れて後ろ手で扉を閉めると、警戒心を抱かせないようにニコッと微笑んでみせる。

「ちゃんと食べてます？」

「悠人に無理やり食べさせられてるよ」

彼も軽く笑いながら答えた。そしてベッドに座ったまま自分の横をぽんぽんと叩き、優しく目を細めて「おいで」と声を掛ける。まるで父親のような顔をして――滯はいいようのない切なさを感じながら、片足を庇いつつ彼のもとまで進んでいき、ベッドに腰掛けた。

「足、どうしたの？ 怪我？」

「軽い捻挫です。すぐ治りますよ」

「そう、なら良かった」

「心配してくれて嬉しいです」

素直な気持ちを声にのせて顔を上げる。瞬間、怖いくらいの鋭い眼光で捉えられた。絡みつくように、舐めるように、不躰ともいえる視線を体の隅々まで注がれる。

「美咲と似てないね」

「.....そうですね」

美咲と似ていないことを非難しているのだろうか。それとも、単に思いを馳せているだけなのだろうか。真意はわからないが、何とはなしに嫌な予感がして無意識に目を逸らす。しかし、彼は小さな笑みを漏らして頬に手を伸ばした。

「それでも、君の半分は美咲だ」

顔の形を確かめるように、肌の感触を味わうように、大きな手で包み込みながら指先を這わせていく。滯はぞくりとして体をこわばらせた。頭の中でうるさいくらいに警鐘が鳴り響く。しかし、何をされたわけでもないのに振り払って逃げるなどできない。

「あ.....あの.....」

「緊張しなくてもいいよ」

熱を帯びた甘い声。それはもう娘に対するものではなかった。滯は半ばパニックになりながら顔を上げる。

「わっ、私、お母さまじゃありません！」

「わかってるよ、君は滯だ.....美咲の娘のね」

息の掛かる距離で囁くようにそう言われたかと思うと、逃げる間もなく食むように口づけられた。驚いて彼の胸を押し返そうとするものの、思った以上に力が強く、後頭部と背中に手をまわされてびくともしない。唇やそのまわりまで舐め回され、閉じた口をこじ開けられ、肉厚な舌が滯の舌を絡め取るように蠢く。それでも滯は諦めずに腕をつっぱり、抵抗の意思を示す。

「.....っ.....はぁっ」

ようやく口を解放されて大きく息を吸い込むと、大地を突き飛ばして逃げようとする。が、後ろに飛び退きかけたところで腕を取られ、逆に体ごとベッドに叩きつけるように転がされた。治りきっていない捻挫や打ち身に痛みが走り、顔をしかめる。しかし、彼は容赦なく仰向けの体に馬乗りになると、ブラウスの前を力任せに開いた。ボタンが引きちぎれて方々に飛び散る。

「ひっ.....！」

仄かな月明かりを背にした暗がり、大地は蠟人形のような無表情で滯を見下ろすが、その瞳にだ

けは狂気と激情が燃えたぎっていた。顔を引きつらせて怯える滯を見ても躊躇せず、乱暴に下着をずり上げて胸のふくらみを露わにする。

「や、だっ……やめ、て……っ！！」

滯は泣きそうになりながら細い腕を振り回して必死に抵抗するが、すぐに手首を掴まれベッドに押しつけられた。露わになった白い肌にゆるゆると唇と舌が這いまわり、ところどころ強く吸われ、ふるりと小さく震えた胸の頂を口に含まれ舐られる。ギュッと目をつむり、逃れるように何度も勢いよく首を左右に振った。

「ん、あっ……やっ……お父さま、も、やめて……あ……んっ！」

大地はあらがう滯を押さえつけたまま、口だけを使って巧みに愛撫を施していく。彼の動きには微塵の迷いも感じられない。やがて、熱い吐息とともに名残惜しげに体を起こし、ぐったりして浅く呼吸する滯を見下ろした。

「可愛い声で啼くね、滯は」

ありありと嬉しさを滲ませて目を細めると、火照った滯の顔にかかる黒髪をそっと払い、頬を包みながら再び口づけようと身を屈める。そのとき、滯は自由になった左腕で力いっぱい彼の体を横薙ぎにした。

「くっ……」

不意打ちを食らった彼がバランスを崩した際に這い出し、ベッドから転がり落ちると、服も直さず一目散に扉へ向かって逃げ出そうとする。が、大地に後ろから引き倒されて体ごとのしかかられた。またしても両手首を掴まれ、絨毯の上に押しつけられ、彼の前に体を開いた格好になってしまう。

「嫌あっ！ お父さまやめてえっっ！！！」

我を忘れて無茶苦茶に体を振り、絹を裂くような声で絶叫した。しかし――。

バシン、と激しい破裂音が体に響く。

頬を叩かれたのだと理解するまでに数秒の時間を要した。片側の頬がジンジンと熱を持って疼いている。その痛みより、彼に手を上げられたことがショックで放心した。今まで一度だって叩かれたことなんてなかったのに、こんな理不尽なことで――滯の目からぼろぼろと涙が零れ落ちていく。

「痛かったかい？」

大地はひどく優しい声音でそう尋ねると、熱を孕んだ頬を、叩いたその手で柔らかく包み込んだ。愛おしげな笑みを浮かべてゆっくりと覆い被さり、半開きの唇をねっとり舐め上げ、首筋から胸、下腹、内腿、その付け根へと口づけを落としていく。滯は天井を見つめたまま止めどなく涙を流し、横髪を濡らしていた。

「ハァ……良いよ、滯……やっぱり親子だな……美咲を思い出す……」

熱に浮かされたように、歓喜に打ち震えたように、大地は濡れた吐息まじりの声を耳元に落とす。

焦らすような動きで腰を進められるあいだも、奥でじっと動きを止められていたあいだも、滯はきつく唇を引き結んで声を堪えていたが、律動が始まるやいなや呆気なく陥落した。望まぬ快感を引きずり出されてあられもない声上がる。どういうわけか滯の弱いところを知り尽くしたように攻めてくるのだ。頭は霞みがかかり、次第に何も考えられなくなっていった。

それから、どれだけの時間が過ぎたのかわからない。

何度か意識を飛ばして朦朧としていた滯は、コンコンと扉をノックする音が耳に届き、少しだけ現実に戻された。気怠い体の上には、ほとんど衣服を乱していない大地が、体重を預けるようにのしかかっている。下半身が繋がったままだということは嫌でもわかった。

「大地、起きてるか？」

扉の向こう側から悠人の声が聞こえた。

これでようやく解放される――そんな希望を感じて目を細めたものの、大地は滯の体から離れようとしなかった。それどころか、再びゆるゆると腰を動かして揺さぶり始めた。そのリズムに合わせてぐちゅぐちゅと粘着質な音が立ち、中からどろりとしたものがあふれてくる。彼のぬるい汗がぼたりぼたりと滯の首筋に落ちた。

「取り込み中だ。あとにしてくれ……はっ……」

「あ……あっ……は、ああ……」

助けを求めたいのに、口をつくのは熱い吐息ばかりだ。しかし――。

「滯……？ いるのか？」

悠人に自分の名前を呼ばれ、頭が冷えて意識がはっきりしてくるのを感じた。扉一つ隔てたところに悠人がいる。この機を逃せば、おそらくもう助けを呼ぶことはできないだろう。首を大きく振りながら、息の整わないまま絞り出すように声を上げる。

「た、すけて……助けて……っ！」

「滯?! どうした?!」

バン、と勢いよく扉を開いて悠人が入ってくる。絨毯の上で重なる滯と大地の姿を目にすると、愕然として手に持っていたトレイを落とした。サンドイッチが床に叩きつけられて散らばり、コーヒーカップが割れて黒い液体が飛び散る。

「何をやっている!!」

悠人は目を剥いて怒号を上げ、滯に覆い被さる大地を乱暴に引きはがし突き飛ばした。ドタンと壁にぶつかり崩れ落ちたその無様な姿を、呼吸を荒く乱したまま睨めつける。そして我にかえったように滯に振り向くと、肌を隠すように自らのジャケットを掛け、めくれたプリーツスカートを戻して脚を閉じさせた。赤く腫れた頬を見たせいか、胸の鬱血の痕を見たせいか、体液で汚れた内股を見たせいか、彼の顔には激しい怒りとやりきれなさが滲んでいる。

しかし、当の大地には少しも悪びれる様子がなかった。無表情のまま気怠そうに溜息をついて立ち上がり、ジーンズを上げる。冷たい月明かりを浴びた瞳が鈍く光った。

「家族だの大切だの言っても、所詮その程度の気持ちってことだな。美咲なら黙って体を差し出したよ」

どうして、こんな――。

彼を家族として大切に思う気持ちも、彼と家族でいたいと願う気持ちも、彼を父親と慕ってきた過去さえも、すべて否定され穢されてしまったように感じた。彼が必要としているのは美咲の半分としての自分だけだった。滯は濡れた睫毛を小刻みに震わせながら、小さく嗚咽を漏らし始める。

「……っ！」

悠人はこぶしを固く握りしめて大地を睨んだが、殴りかかりはしなかった。クッと歯を食いしばり振り切るように顔をそむけると、泣き濡れた滯を横抱きにして部屋をあとにする。床に散らばったサンドイッチも、砕けたコーヒーカップも、絨毯に染み込んだ黒い染みも、冷たく虚ろな目をしている大地も、何もかもそこに置き去りにして。

## 51. いつか素敵な

滯はベッドで目を覚ました。

カーテンの隙間から淡い光が差し込んでいる。明らかに自分の部屋ではないその場所に混乱したが、ぐるりとあたりを見まわして思い出した。思い出したくなかったこともすべて——いっそ記憶喪失になってしまえば良かったのに、と眉を寄せながら、布団の中に潜り込んで子猫のように小さく背を丸める。

ここは、誠一のアパートである。

昨夜、悠人に助け出されたあと、風呂で体を洗われ、部屋で服を着せられ、怪我の手当てをされ、何かの薬を飲まされ、それから車でここまで連れてこられたのだ。ベッドに横たえられてすぐ眠りに落ちてしまったので、その後、誠一や悠人がどうしていたのかまではわからない。

微かに、隣の居間から物音が聞こえる。

誠一がもう起きているのだろう。彼の家なのに自分だけいつまでも寝ているわけにはいかないと思い、鉛のように重たい体を引きずるようにして起こす。着ているのは武術の訓練で使っているジャージの上下だ。着替えを持ってきているのか気になって探してみたが、滯の荷物はベッドのそばに置かれたスクールバッグだけで、中には財布と携帯電話くらいしか入っていなかった。

仕方なく、その格好のまま居間への扉をそろりと開く。そこには眩しいくらいの光が満ちていた。思わず目を細めたが、身支度を調べた誠一が窓際に立っているのはすぐにわかった。

「滯、もう起きたのか。ゆっくり寝てていいんだぞ」

「うん……」

曖昧に頷きつつも、そこにいたもうひとりの人物に気付いて戸惑う。きのう出かけたときと同じ衣服を身につけ、丸テーブルの前に座り、飾り気のないマグカップに手を掛けているのは——。

「遥……も、ここに泊まったの？」

「僕はさっき来たところ」

そう答えてマグカップを口に運ぶ。そこまで親しくない誠一のところにわざわざ来たということは、滯の身に起こったことについてすでに聞き及んでいるのだろう。それでも、目の前にいる彼の態度はいつもと変わらないぶっきらぼうなものだった。

「座れば？」

「……うん」

滯は捻挫を庇いつつ丸テーブルの方へ足を進めた。その様子を痛ましそうに見つめる誠一に、遥は無表情で声を掛ける。

「誠一、そろそろ仕事へ行かなきゃ」

「……やっぱり、今日は休むよ」

「滯には僕がついてるから大丈夫」

二人の会話を聞きながら、滯はクッションを寄せて遥のそばに腰を下ろした。遠慮がちに視線を上げると、誠一がうつむき加減で窓ガラスに寄りかかっているのが見えた。その表情はみるみるうちに険しくなっていく。

「ちょっといいか？」

誠一は玄関の方を指さしながら遙を呼んだ。最初はじとりとした目で訝しんでいた遙も、誠一が玄関の方へ歩いて行くと、溜息をつきながら腰を上げてついていく。やがてガシャンと重い扉の閉まる音が聞こえた。何をするつもりなのかと不安に思っていると、ほんの数分ほどで二人一緒に戻ってきた。遙は先ほど座っていた場所に腰を下ろしたが、誠一は居間の扉で立ち止まり硬い面持ちで濡を見つめる。

「濡、不安なら仕事を休むけど……」

「私は大丈夫。お仕事してきて」

「無理しなくてもいいんだぞ？」

「遙がいてくれるみたいだから」

「……わかった」

濡が小さく笑みを浮かべると、誠一は納得いかないような渋い顔をしながらもそう頷いた。そして未練がましい気持ちを断ち切るように深呼吸してから、なるべく早く帰れるようにすると伝え、それでもなお心配そうにチラチラと様子を覗いつつ出かけていった。

「トーストくらいしかないけどいい？」

台所をうろつく遙から投げかけられたその質問に、濡は反射的に頷いてしまったが、勝手に食べていいのかなと少し心配になる。しかし遙は何の遠慮もなく戸棚を開け、食パンを焼いたり、ヤカンに火を掛けたりし始めた。

「……きのうの話、聞いてるよね？」

「ざっくりとだけだね」

彼はインスタントコーヒーの瓶を手にとって答えた。その蓋を回し開けながら続ける。

「僕も危険だから家に帰るなって言われて、しばらく武蔵のところに泊めてもらうことになってる。確かに僕も母さんの子供だけどさ……おかしいよね。僕は男だよ？ 師匠にも言ったんだけど聞き入れてくれないし」

「男とか女とか関係ないかも……お父さまにとっては……」

大地にとって重要なのは美咲の半分ということだけだ。その意味でいえば濡も遙も何ら変わりはない。確信があるわけではないが、どう暴走するか想像もつかないのだから、ひとまず遠ざけておくのは正しい判断だと思う。襲いかかってきた彼の狂気を孕んだ目を思い出し、濡はゾクリと背筋を震わせた。

チン、とオーブントースターが高い音を立てた。

香ばしい匂いの立ちのぼる厚切りトーストにマーガリンを塗り、インスタントコーヒーの入ったマグカップに熱湯を注いで、遙がかいがいしく丸テーブルまで運んできた。濡はありがとうと礼を言ってトーストを少しかじる。パンのほのかな甘みとマーガリンの塩気が口の中に広がり、そのとき、自分が随分と空腹だったことに初めて気が付いた。

「今さらだけど、大丈夫？」

用意してもらったトーストをすべて平らげ、少しぬるくなったコーヒーを飲んでいると、遙が何気

ない口調でそう尋ねてきた。曖昧な尋ね方だが、大地に乱暴された件についてだということはすぐにわかった。

「うん……思ったより平気、かな？」

そう答えて曖昧に微笑を浮かべてみせる。しかし、遙は思いきり不満そうに眉を寄せた。

「無理しない方がいいと思うけど」

「無理してるわけじゃないよ」

滯は静かに言い返し、マグカップを丸テーブルに置いて言葉を紡ぐ。

「お父さまにとって、橘美咲の娘でしかなかったことは悲しいし、お父さまにあんなことされたって思うとショックだけど……別に初めてってわけじゃないし……今になって冷静に考えてみたら、そんなにたいしたことじゃないのかなあって……」

そう話す声が次第に力を失っていった。遙にじっと視線を注がれ、逃げるように膝を抱えて顔をうずめる。

「本当にそう思ってる？」

「……よくわからない」

つい先ほどまでは本当にそう思っているつもりだった。けれど、それを言葉にして口に上すと胸がズキズキと痛む。自分の気持ちが自分でもよくわからない。薄く閉じた瞼はまるで痙攣するかのよう

ピンポーン――。

重々しい沈黙にのしかかられて息苦しさを感じていたところに、軽快なチャイムの音が鳴り響いた。来客だろうが、ここは自分たちの家ではなく誠一の住まいだ。出るべきなのか無視すべきなのかわからない。滯は戸惑いながら遙に振り向く。

「どうしよう？」

「心当たりはある」

「え？」

遙は無表情のまますくっと立ち上がった。待ってて、と言い置いて玄関の方へ行くと、すぐに客人を連れて戻ってきた。

「こんにちは、滯ちゃん」

「涼風さん?!」

客人は、怪盗ファントム唯一の依頼人として面識のある日比野涼風だった。タイトスカートのスーツをきっちりと着込み、肩から大きなカバンを掲げ、さらに両手いっぱい

「悠人さんに頼まれたの。着替えや日用品をいろいろ買ってきたわ」

「あ……ありがとうございます……」

いったい悠人は何をどう頼んだのだろうか。その量の多さに圧倒されて、滯は困惑を滲ませながらぎこちなく頭を下げた。涼風は何の遠慮もなく正面に腰を下ろすと、丸テーブルに腕をつけて前のめ

りになり、ぱっちりとした目を興味津々に輝かせて言う。

「さっそく着替えましょうか……あら、怪我してるの？」

「たいしたことはないです」

手に巻いた包帯に気付かれ、滯はとっさにジャージの袖を伸ばしながら笑顔を取り繕った。涼風は少し不思議そうな顔をしていたが、深く追及することなく微笑を浮かべた。そして、ぐるりと一通り見回してから寢室の扉を指さす。

「そこの部屋、使っていいかしら？」

「あ、はい、大丈夫だと思います」

「じゃあ、行きましょう」

そう声を弾ませると、すぐに立ち上がって再び大荷物を持ち、案内を待たずに勝手に寢室へ入っていく。そのあとから、滯はなるべく足を引きずらないよう気をつけながら歩いていった。

「これなんか春っぽくていいんじゃない？」

涼風は見るからに楽しんでいる様子で次々と紙袋の中を見ていくと、そのうちの一つ、襟まわりにレースのあしらわれた花柄のチュニックワンピースに目をつけた。ビニール袋から取り出して全体を眺めながら、満足げに何度も頷いている。

滯はベッドに腰掛けたまま、目を伏せた。

「すみません……あの、私、持ち合わせがあんまりなくて……」

「気にしないでいいのよ。あとで悠人さんにしっかり請求するから」

涼風は悪戯っぽくそう言って魅惑的にウィンクする。本当に請求するつもりなのかはわからないが、そう言われるともう何も言えなくなってしまう。どちらにしても、滯が負担を感じることはないよという気遣いなのだろう。

「これでいいかしら」

滯が考え込んでいる間に、涼風は選んだ衣装をベッドの上に広げていた。先ほどのチュニックワンピースとレギンス、それに下着の上下までもが置いてある。どれも自分では選ばないようなデザインだが、決して嫌いではない。はい、と素直に頷いて立ち上がった。

「着替え、手伝いましょうか？」

「いえ、ひとりで大丈夫です」

手の怪我を気遣ってくれたのだろうが、指は普通に使えるので問題はない。それに――。

「あの……着替え、見られたくないので……その……」

どう伝えればいいのかかわからずしどろもどろになるが、涼風は何かを察してくれたようで、ただ「わかったわ」とだけ答えてベッドから離れた。背中を向けてしゃがみ、紙袋から出した他の服や荷物を片付け始める。

滯は安堵の息をつき、涼風に背を向けてジャージを脱いだ。

胸元にも、腕にも、内腿にも、無数の赤い痣のようなものが残っている。武蔵との情事のあとにも同じような痣がいくつついていたが、そのときはまだどういふものなのかわかっていなかった。しかし、今はもう理解している。あれだけしつこくやられたのだから気付かないわけがない。思わずそのときの感触がリアルによみがえり、ぞわりと肌が粟立った。

「私のこと、どこまで聞いてます？」

背を向けたまま下着に手を伸ばしてそう尋ねると、涼風は少しの間をおいてから答える。

「家に置いておけない事情があって、しばらく知人のところに預けることになった、とだけ。その事情については何も聞いていないわ。ただ、つらい目に遭ってるから力になってほしいって……」

「そうですか……」

大地の蛮行を知られていなかったことに少し安堵する。身近な存在である遥や誠一は仕方ないにしても、やはりあまり多くの人には知られたくない。同情や好奇の目で見られたくないというのが大きな理由の一つだが、こんなことが噂になれば橘の名前に傷がつくのではないかという懸念もある。もっとも、橘の今後がどうなるのか想像もつかない状態ではあるが――。

「悠人さんと何かあったの？」

考え込んでいると、涼風は怪訝にそんなことを尋ねてきた。滯は驚きのあまり大きく目を見開く。

「いえっ、師匠は全然関係ないですから！」

「でも悠人さん、滯ちゃんのそばにいる資格がない、みたいなことを言っていたけど……」

事前に助けられなかったことを悔やんでいるのだろうか。いや、もしかしたら過去のことを気にしているのかもしれない。滯の唇を無理やり奪ったことを、そして強引な方法で結婚を迫ったことを。父親ではないが、父親同然の保護者代理という立場でありながら――。

「あ、ごめんなさいね。つい詮索しちゃって」

「いえ……」

滯はうつむいたまま、手にした下着を握り締める。

「でも、もし聞いてほしくなったり相談したくなったりしたら、いつでもいいから遠慮なく話してちょうだいね。これでも口は堅い方なんだから。口外するなって言われたら絶対に他で話さないわよ」

「ありがとうございます」

確かに涼風の口は堅い。怪盗ファントムのことを二十年以上もずっと秘密にしてきたくらいだ。とはいえ、今はまだ自分からあの出来事を話そうという気にはなれない。話そうとしても感情が先走って上手く伝えられないだろう。もう少し落ち着いて、そのときに相談したいことがあれば甘えようと心に決める。

ずっと手に持ったままだった下着を身につけ、手早く衣服も着て、長い黒髪を揺らしながら涼風に振り返る。もう荷物の片付けは終わっていたようだが、きちんと約束を守ってくれていたらしく、背を向けたままちょこんと正座していた。

「着替え終わりました」

「……あ、やっぱり似合う！」

彼女は振り向きなりパッと顔を輝かせ、両手を組み合わせて大きく頷いた。やっぱり私の見立ては間違いないわね、と満足げに声を弾ませながら立ち上がると、足元に置かれているたくさんの紙袋を示して言う。

「他の服もきっと似合うと思うから、ぜひ着てちょうだいね」

「ありがとうございます。……涼風さん……あの……」

滯は口ごもりながらそう切り出した。不思議そうに小首を傾げた涼風を見つめ、言葉を繋ぐ。

「多分、師匠もまいてると思うから、力になってあげてください」

先ほどまでは彼のことを考える余裕もなかったが、涼風から話を聞いて、彼もつらい思いをしているのだと確信した。美咲が亡くなり、大地が壊れかけ、滯がその餌食になり――明確な怒りのやり場もなく、彼の性格からすると自身を責めている可能性が高い。

涼風は虚をつかれたようにきょとんとしたあと、曖昧な微笑を浮かべて肩をすくめた。

「私じゃ、悠人さんの力にはなれないと思うけど……」

「そんなことはないです。師匠は涼風さんのこと信頼してますよ」

滯の力になるよう頼むくらいだから、そのことについては間違いはないと思う。そして、きっと悠人の力になれると信じている。しかし、彼女はどこか寂しげに目を伏せると、小さな声で「だといんだけど」とあやふやに受け流した。

涼風は外せない仕事があるということで、また来るわねと言い置いて帰っていった。

再び遙と二人きりになり、滯は丸テーブルの前に座っている彼のそばに腰を下ろす。遙は近くに落ちていた新聞を手にとって読み始めたが、滯は何もする気になれず、ただぼんやりと膝を抱えてそこに顔をうずめた。

「私、いつまでここにいればいいのかなあ」

小一時間ほど静寂が続いていたところ、滯はふとそんなことを考え、間延びした声でぼんやりとつぶやいた。独り言なのかそうでないのか、自分でもどっちつかずで判然としない。しかし、遙はちらりとこちらに横目を流すと、新聞を折り畳みながら答えてくれた。

「一時的な避難だしそう長くないと思うよ。師匠がこれからのことをきちんと考えてるはずだから、その準備が整うまでだろうね。新学期が始まるまでにはどうにかしてくれるんじゃないかな。ここからじゃ学校に通うのも不便だし」

せいぜい二、三日くらいだと思っていたが、新学期までならまだ十日近くもある。

「そんなにいたら迷惑だよ」

「誠一はそんなこと思っていないよ」

遙は断定的に言うが、滯にはとても同意できない。抱えた膝をさらに引き寄せる。

「誠一は優しいから思っても言わないだろうけど……私のこと、いいかげん持て余してるんじゃないかな。私のせいでどれだけ迷惑を掛けたかわからないもん。何度も危ないことに巻き込まれてるし、好きだった刑事の仕事も取り上げられたし、大変なこともさせられたみたいだし……それに……」

次第に声が震えていく。自分で言葉にしてあらためて思い知ったような気持ちだった。目の奥がじわりと熱くなり、抱えた膝に顔を伏せて目をつむる。そのまましばらく息の詰まるような沈黙が続いたが、遙がそれを破って切り出した。

「今朝さ、僕、誠一に呼ばれて外に出たけど、そのとき何て言われたと思う？」

「……………」

滯は少しだけ顔を上げ、隣の彼に訝しむような視線を流した。何て言われたかなんて想像もつかない。そもそも、なぜ今こんな話をするのかもわからない。答えを求めるようにじっと見つめると、彼は前を向いたまま口を開いた。

「君を信用していいのか、って」

「えっ？」

「僕と滯を二人きりにして、きのうの二の舞になることを懸念してたみたいだね。僕はこれまでもこれからもずっと滯の家族だって答えておいた。そんなふうに疑われるなんて心外だし頭にくるけど、それだけ誠一は本気で滯を心配してるってことだよ」

滯は目を伏せ、気持ちを抑えるように膝の上でこぶしを握り締める。

「誠一は責任感が強いし、警察の人間だから……」

「僕は、誠一のこと信じていいと思うよ」

誠一が滯のことを本気で心配してくれているのは事実だろう。だが、今後も滯と付き合いたいと思っているかどうかは別だ。たとえ嫌気がさしていたとしても、後悔していたとしても、彼が自ら口にする可能性は低いと思う。だとすれば、私は――滯は唇を引き結び、握ったこぶしを震わせながら目を閉じた。

今朝の言葉どおり、誠一は定時で仕事を切り上げて大急ぎで帰ってきてくれた。ジャージではない滯の格好を見て少し驚いたようだが、知人が着替えを持ってきてくれたことを話すと、安堵したように小さく息をついて頬を緩ませた。

二人の話が一段落したのを見計らって、遥は立ち上がる。

「誠一が戻ってきたことだし、僕はもう帰るよ」

「うん……ありがとう、ずっといてくれて」

帰るといっても、橘の屋敷ではなく武蔵のところである。あまり歓迎されていないのではないかという気はするが、武蔵なら何だかんだ云いつつも面倒を見てくれるだろう。滯としては遥にもう少し一緒にいてほしかったが、自分も居候の身であり、引き留めるなどという図々しいことはできなかった。

誠一と二人きりになると、滯は幾何かの緊張を覚えて無意識にうつむいた。誠一の方も滯のいる丸テーブルには近づこうとせず、まっすぐ台所へ行き、グラスに水道から水を注いで一気に飲み干した。そして、その場に立ったまま軽く振り向いて尋ねる。

「夜ごはんはどうする？ 外に食べに出てもいいし、何か買ってきてもいいし、出前を取るのもありかな」

彼は明るかった。だが、滯には無理してそう振る舞っているようにしか見えなかった。そして漠然と感じていた不安の正体にも気付いてしまう。彼との距離が遠いのだと――誠一はいつもと変わらず優しい言葉を掛けてくれるが、滯に触れるどころか近づこうとさえしない。今朝からずっと。彼が自分を持て余しているのではないか、という憶測は確信へと変わっていく。

「……ごめんなさい」

「えっ？」

「迷惑ばかりかけて」

「そんなことないって」

うつむいて声を沈ませる滯を、誠一は軽く笑い飛ばす。

「俺、実は警察庁へ出向するときに昇進しててさ。それも二階級。だから滯ひとりくらい十分に養えるし、何も心配することなんてないんだ。そんなに甲斐性なしに見えるか？」

冗談めかしたのも滯を気遣ってのことだろう。そんな優しい彼だから好きになったのだが、今はその優しさがつらい。警察庁への出向も、こんな形での昇進も、彼自身は望んでいなかったはずなのに。すべて滯と関わったがゆえに起こったことなのだ。

「私、出て行くね。ホテルにでも泊まるから心配しないで」

「え、ちょっ……」

一方的に告げて彼の反応を見ることなく寝室に駆け込むと、財布と携帯電話の入ったスクールバッグだけを取って出て行こうとする。が、廊下に続く扉の前で、誠一が通せんぼのように両手を広げて立ちふさがっていた。その顔には困惑と焦燥が浮かんでいる。

「急にどうしたんだ。俺は本当に迷惑だなんて思ってないぞ？」

「泊めてもらうことだけじゃなくて、その……もういいの……」

「何がいいんだよ。行かせられるわけないだろう」

「師匠には私から説明しておく。誠一は悪くないって……だからどいて」

滯は努めて冷静に告げる。しかし、言葉足らずでうまく伝わらなかったのか、あるいは納得がいかなかったのか、誠一は扉に立ちはだかったまま動こうとしない。緊張した面持ちで、額に汗を滲ませながらじっと滯を見つめている。

「……頼む。せめて理由を教えてください」

静かながらも思い詰めたような声。

きつと言うとおりにしなければ通してもらえないだろう。無理やり突破することも出来なくはないが、誠一を痛い目に遭わせるのは気が進まないし、そもそもそれでは何の解決にもならない。暫しの逡巡のあと、滯はわずかに眉を寄せながら口を開く。

「誠一、ずっと私に近づこうとしなかった。言葉は優しいけど避けてた。こうやって私の面倒を見てるのは、義務感とか、責任感とか、そんなもののために仕方なくやってるだけで、本当は私のことなんてもう……私のせいで人生めちゃくちゃになったし、要らない苦勞も背負い込まされたし、割に合わなさすぎだよね……おまけに、私……お父さまとあんなことになっちゃったし……触りたくないとか、守る価値もないとか、もういらぬとか……思われても仕方ない……わかってる、から……」

堰を切ったように気持ちがあふれ、言うつもりのなかったことまで口にしてしまう。声が震え、唇が震え、開いたままの目からぼろりと涙がこぼれ落ちた。それを見て、啞然としていた誠一はハッと我にかえった。

「違う！」

「違わない！」

滯は思わず小さな子供のように言い返した。涙目でキッと睨み、一步踏み込んで挑発的に顔を近づける。

「今だって扉に張り付いたまま、私の肩にさえ触れようとしなないじゃない！」

「いや、その、近づかなかったのは……そうなんだけど……」

誠一はしどろもどろになりつつ答える。やっぱり、と滯は非難の目でじとりと睨んだ。

「そうじゃない、そうじゃない違うんだ。決して濡の考えてるような理由じゃなくてな……その、あんなひどい目に遭ったすぐあとだし、昨夜は随分ショックを受けてたみたいだし、さすがに男性を怖がってるんじゃないかと思ったからで……楠さんにもさんざん釘を刺されたし……」

「……え？」

口から出任せの言い訳には聞こえない。言われてみれば確かにそういう考えもあるだろう。そして、傷ついている濡に触れないようにと釘を刺すのも、悠人ならいかにもやりそうなことである。彼自身でさえそばにいる資格がないと考えていたくらいなのだから。

じゃあ、誠一は本当に私のことを気遣って――？

不意に、ふわりと柔らかく彼の胸に抱きしめられた。スーツ越しにほんのりとぬくもりが伝わってくる。避けられていた時間はそう長くないはずなのに、なぜだか懐かしくさえ感じた。それだけ切望していたということかもしれない。

「怖くないか？」

「怖いわけないよ」

それどころか包まれるような安心感を覚える。乾いた心に水が染み込んでいくようだった。誠一を怖がるだなんて的外れもいいところである。あんな目に遭ったからこそ彼のぬくもりが欲しかった。もちろん人によってどう感じるかは違うだろうし、恋人でさえ怖くなる人もいるかもしれないが、少なくとも濡はいつもどおり触れてほしかった。

「ごめんな、不安にさせて」

「でも本当に嫌じゃない？ 責任感や義務感だけなら……」

「絶対に逃がすつもりはないよ。誰に何を言われてもな」

誠一はそう答えるが、本当に彼の言うことをそのまま信じていいのかわからない。優しいからこそ無理をしているのではないかと邪推してしまう。微妙に顔を曇らせて考え込んでいると――。

「濡、結婚しよう」

「……え？ えええっ?!」

あまりにも唐突すぎて、一瞬、何を言われたのか理解できなかった。驚きのあまり腕をつっぱって体を離し、まじまじと彼の顔を見つめる。何かの冗談ではないかと思ったのだが、その表情は真剣そのものだった。

「そうすれば俺が家族として濡を守ってやれる。濡の父親は認めないかもしれないが、橘会長なら何とかしてくれるはずだ。濡さえ良ければ今すぐにでも頼んでくる。だから、俺と結婚することを了承してくれ」

真摯に瞳を覗き込んで訴えてくる。濡は胸が熱くなり目を細めた。

「嬉しい……すごく嬉しいけど……でも……」

顔をうつむけて奥歯に物が挟まったように言いよどむ。それでも誠一は急かすことなく濡を見つめていた。こんなふうには待たれると余計に言いづらいが、だからといっていつまでも押し黙っているわけにもいかず、おずおずと上目遣いで言葉を継ぐ。

「それじゃあ、なんか夫婦っていうより親子みたいだし……」

「え、いや、もちろん濡が好きだからってのが大前提だぞ?!」

誠一は大慌てでそう釈明すると、滯の肩を強めに掴んでグイッと前のめりになった。

「守りたいってのもあるけど、ずっと一緒にいたいからで……」

「やっぱりやめよう？ 問題をぜんぶ解決してから考えようよ」

滯は淡々と告げた。途中で遮ったのは熱い訴えに流されることを怖れたからで、冷たくあしらったつもりはないがそう聞こえたかもしれない。彼は眉を寄せてつらそうな顔を見せながらも、滯の肩にのせていた手を下ろし、気持ちを落ち着けるように小さく息をつく。

「これも問題を解決するひとつの方法だけだな」

「うん……でも素敵じゃないんだもん……」

理想を求めてしまうのは自分が子供だからだろうか。もちろん彼の気持ちはとてもありがたいし、そういう結婚を否定するつもりもないが、自分としては何かの手段であってほしくない。ましてや、守られるための結婚というのでは少し情けない。それでは本当の意味で夫婦になれない気がするのだ。

「怒ってる？ 呆れてる……？」

「いや、滯の気持ちを尊重するよ」

そう言うと、誠一はあらためて滯を優しく抱きしめ、耳元に小さな声を落とす。

いつか、素敵な結婚をしよう――。

滯はそっと目を閉じ、長い黒髪を慈しむように撫でる手を感じつつ、彼の首元に顔をうずめてこくりと頷いた。問題が片付き、懸念が消え去り、その言葉が現実になる日が来ることを祈りながら。

## 52. 新しい関係

---

「武蔵のところへ行きたい？」

「ダメ……かな……？」

滯が上目遣いでおずおずと懇願のまなざしを送ると、誠一は渋い顔を見せながら、半分ほどコーヒーの入ったマグカップを口に運んだ。深く一息ついても返事をせずに考え込む。レースのカーテン越しに広がる柔らかな光が、白いシャツを着た誠一の背中を照らしていた。

滯が誠一の部屋へ来てから三日が過ぎていた。

朝はテーブルで向かい合って一緒に食事を取り、それから誠一を仕事に送り出し、日中はのんびりと洗濯をして、誠一が帰ってきたら一緒に夜ごはんを食べる、という日々を過ごしている。まるで新婚家庭みたいだと密かに思ったりもしたが、家事のほとんどは誠一に任せているので、そんなふうを考えるのはおこがましいかもしれない。今はまだ大切にされている客人でしかないだろう。

最初の日には遥がずっとそばに付き添っていてくれたが、翌日は様子を見に来たくらいで、きのうはもう大丈夫と判断したのか来ることさえなかった。代わりに、というわけでもないだろうが涼風が来てくれた。彼女の持参した有名洋菓子店のケーキを食べながら、小一時間ほどたわいもないお喋りをして、まるで友達どうしのように楽しく過ごした。気をまぎらわせるには彼女が一番の適任かもしれない。

悠人とはまだ会っていないが、きのう彼の方から滯の携帯に電話を掛けてきてくれた。久しぶりに声を聞いて何かほっとしたのを覚えている。彼は、もうしばらく誠一の家にてほしいと頼んだあと、言いづらそうに言葉を濁しながら様子を尋ねてきた。おおよそのことは遥から聞いていたようだが、滯が明るく答えると、幾分か安堵したように声が和らぐのがわかった。

そうやってまわりの人に支えられつつ平静を取り戻し、足の痛みもなくなってくると、武蔵やメルローズのことを思い出すようになってきた。彼女に対しては恐怖を感じていたはずだが、以前ほどではなくなっていることに気付く。

今なら、気負うことなく彼女に会えるかもしれない――。

そう考えて、武蔵の隠れ家へ行ってみようと思いついたのだが、誠一がいい顔をしないだろうことは予想していた。だからといって簡単に諦めるつもりもなかった。ようやく前へ進もうという気になったのだから。

「武蔵っていうより、メルローズに会おうかなと思って……」

「でも、あいつもいるんだろう？」

誠一は苦虫を噛み潰したような顔でそう言い、頬杖をついた。

「滯のことを信じてないわけじゃない。でも武蔵の方は諦めてなさそうだし、万が一……」

そこで言葉を詰まらせて眉を寄せる。おそらく先日のように襲われることを懸念しているのだろうが、武蔵は決して相手の意思を蔑ろにするような人間ではない。それに――。

「遥もメルローズもいるんだから大丈夫だよ」

「まあ……それは、そうだけど……」

いくらなんでも幼い子供の前で破廉恥な行いはしないだろう。彼がそこまで非常識でないことは誠一もわかっているはずだ。渋々ではあるが認める方向に傾いているのを感じ、濡はここぞとばかりに大きく前のめりになる。

「行ってもいい？」

「……気をつけるよ」

「うん、ありがとう」

彼が折れてくれたことに安堵し、小さく吐息を落として感謝の言葉を口にした。しかし、誠一の表情にはいまだに不安と不満が見え隠れしている。それでも会うことを了承くれた彼の信頼に報いるために、何事もなく無事に帰ってこなければとあらためて気を引き締めた。

それほど昔のことでもないのに、随分と久しぶりのような気がする。

濡は鬱蒼とした緑に囲まれた一軒家を見上げて感慨に耽った。そこは武蔵に一ヶ月ほど拉致監禁されていた場所である。家の外観をまじまじと観察したのは初めてだが、木造の小さなロッジのような雰囲気、まわりの風景にも違和感なく溶け込んで見える。ほとんど枯れ木しかなかったあの頃とは違い、瑞々しい新緑が芽吹き、雑多な草も生い茂り、生っぽい青草の匂いがあたりに漂っていた。

何段かある木の階段をのぼって玄関の前に立ち、チャイムを押した。が、壊れているのか鳴っている気配はない。扉を強めにノックしてみても無反応だ。どうしたのだろうと思いながらドアノブをまわすと、鍵がかかっていなかったようで、そのまま何の引っかかりもなく扉が開いた。正面には毎日のように歩いた廊下が延びており、右側がお手洗いと風呂場で、突き当たりが濡の繋がっていた広い部屋になっている。

「武蔵、入るよ……？」

声を掛けながら靴を脱いで廊下を進み、突き当たりの扉をそろりと開いた、その瞬間――。

ドォォォン！！

轟音とともに目の眩むような光が襲いかかってきた。次の瞬間、視界のすべてが白に呑み込まれたが、どういうわけか衝撃も痛みも感じない。反射的に床に倒れ込んで身を丸めていた濡は、あたりが静まると、扉の方におそろおそろ怯えた目を向ける。

「濡？」

そこからひょっこりと顔を覗かせたのは武蔵だった。彼はひどく驚いたように目を丸くしていたが、恐怖に染まった濡の表情を見ると、失敗したとばかりに顔を歪ませて頭に手をやる。

「あー……怖い思いをさせて悪かった。まさか濡が来るとは思ってなかったから、メルローズの魔導の訓練をやってたんだよ。部屋のまわりに結界を張ってたから当たってはない、よな？」

濡はこくりと頷くと、目の前に差し出された大きな手を取り、少しふらつきながら立ち上がった。いまだに心臓がバクバクと暴れている。大袈裟ではなく本気で死んだかと思った。実際、美咲はあの白い光に呑み込まれたせいで、右腕だけを残して跡形なく消え去ったのだから。

「大丈夫か？」

「う、ん……」

気分的にはあまり良くないが、そう首肯する。

武蔵に促されて部屋の中に足を進めると、その中央にメルローズが立っているのが見えた。黒地にピンクのラインが入った子供用ジャージを身につけ、緩くウェーブの掛かった灰赤色の長髪を後ろでひとつに束ねている。大きな魔導の力を放出したばかりのためか、少し息を荒くしながら、火照った顔にうっすらと汗を滲ませていた。

「まだちゃんと紹介してなかったよな」

武蔵はそう言いながら、濡をメルローズの前へ誘導する。

「この子はメルローズ＝パーカー、俺の姉さんの娘だ。年齢は8歳、9歳くらいだと思う。日本語の理解力はそれなりにあるけど、喋る方はまだ苦手みたいだな。昔は人懐っこくてよく喋る子だったんだが……」

メルローズは鳶色の瞳でじいっと濡を見つめていた。幼稚園児といっても不自然でないくらい体が小さく、表情も無垢で、実年齢よりもずっと幼いように見える。長期にわたる監禁のせいで成長が阻害されたのだろうか。そう思うと、彼女を直視することができず曖昧に目を逸らした。

武蔵は腰を屈めて小さなメルローズを覗き込み、向かいの濡を片手で示す。

「こっちは橘濡、俺の娘だ。遥と双子なんだよ。そっくりだろう？」

そう言うと、メルローズは目をキラキラさせて大きく頷いた。

武蔵は二人の手をとり半ば強引に握手をさせる。メルローズの手は小さくて柔らかくてとても温かかった。あんなに恐ろしい力を持っているなんて嘘みたいに感じる。ふと彼女にニコッと笑いかけられたことに気付くと、濡も若干ぎこちなくではあるが友好的に微笑み返した。

三人はダイニングの方で一息入れることにした。

武蔵はかいがいしくメルローズの汗を拭き、椅子に座らせ、オレンジジュースをグラスに入れて運んできた。あまり自分からは喋らない彼女に、何かにつけて優しく話しかけている。やはり面倒見はいいようだ。二人きりで暮らしていても心配無用だとあらためて思う。

「紅茶でいいか？」

「うん」

濡はそう答えて、テーブルに頬杖をついたままあたりをぼんやりと見回した。濡がいた頃と何も変わっていないように見える。多少の生活感を感じさせるきれいに片付けられた台所も、ほとんど物の置かれていないがらんとした部屋も、濡が手錠で繋がれていた細い金属製のポールも、いま座っているダイニングテーブルの指定席も、まるで時が止まったかのようにそのままだった。

「どうした？」

そう言いながら、武蔵が淹れたての紅茶を二つ運んできた。ひとつを濡に差し出し、もう一つを手前に置き、彼の指定席になっていた濡の正面に座る。ただ、あの頃と違って彼の隣にはメルローズがいた。

濡は目を細め、白い湯気のゆらめく紅茶に手を伸ばした。

「何か、ちょっと懐かしい」

「そうだな……」

武蔵はふっと小さく微笑んでティーカップを口に運ぶ。遠い目をして何かに思いを馳せているよ

うだ。それが何かはわからないし訊くつもりもない。ただ、茶化されるのではないかと思っていただけに、その肯定的な反応は少し嬉しかった。

紅茶を飲み終わってしばらく休憩したあと、メルローズの訓練が再開された。といっても、今度は魔導を放出するようなものではなく瞑想だ。安定的に魔導を制御するために必要なことらしい。滯には目をつむってじっとしているだけにしか見えないが、気を集中させたり、魔導の力を抑えたり、いろいろと訓練のための作法があるのだと言っていた。

武蔵はそのまま続けるようメルローズに言い置くと、少し外を歩こうと滯を誘った。メルローズに聞かせたくない話があるのかもしれない。そう考えて、滯はあえて理由を尋ねることなくついていた。

木々の隙間から、幾筋もの光が射し込んでいる。

滯は隠れ家から少し離れた林道を歩きながら、隣の武蔵にちらりと視線を送った。ここまでずっと無言で歩き続けているが、ただ散歩するだけのつもりなのだろうか。怪訝に思っていると、ようやく彼は少し緊張ぎみの声で切り出した。

「メルローズな」

「……うん」

滯は少し鼓動が速くなるのを感じた。やや間をおいて話が続く。

「小笠原でのことはまったく覚えていないらしい。溝端に連れて行かれたことも、橘美咲が撃たれたことも、魔導が暴発したことも、きれいさっぱり記憶が抜け落ちている。美咲はどこ、会いたい、って無邪気に言ってくるからきつかった」

武蔵は苦しげに声を落とした。

滯は後ろで手を組んでそっと振り向く。

「それで……？」

「気は進まなかったが、いつまでも隠し通せるものでもないし、橘美咲が死んだという事実だけは教えておいた。二度と会えないことがわかると泣きじゃくったが、どうにか受け入れてくれたみたいだ」

そっか、と安堵の息をついたが、話はまだ終わっていなかった。

「だからな……おまえに頼むのも残酷な話だと思うが、小笠原での具体的な話は避けてくれないか。自分が起こした暴発で橘美咲の体が消し飛んだなんて、メルローズには知られたくない。あの子はまだほんの小さな子供なんだ」

「うん、わかってる」

もとより彼女を傷つけるつもりはない。遥が言ったように、美咲が亡くなったのはある意味で自業自得であり、メルローズはむしろ実験体にされた被害者なのだ。故意に撃った溝端ならともかく、実験のために暴発した彼女を恨むのは筋違いである。

武蔵はうつむいて視線を落としたまま、僅かに目を細めた。

「感謝する……勝手ばかり言うが、メルローズと仲良くしてくれるとありがたい」

「うん、私も仲良くできたらいいなって思ってる。身内になるんだもんね」

メルローズの魔導力に恐怖心を持っていたし、今でも完全に払拭できたとはいえないが、それでも

仲良くしたいという気持ちに嘘はない。そう思っているからこそ、わざわざ誠一に許可をもらってここまで来たのである。

「魔導の制御の方はうまくいきそう？」

「ああ、そっちは何の問題もない」

先ほどまでの神妙さはどこへいったのか、武蔵は急に得意気になった。

「ラグランジェの血を引いてるだけあって才能がある。俺の見込み以上だった。サイファさんはそのことも見抜いてたんだろうな。まだ魔導を自在に使えるまでには至っていないが、とりあえず安定はしてきたし、近いうちに暴発の心配もなくなると思う」

「へえ、すごい……」

そんな段階まで進んでいるとは思ってもなかった。彼も予想外にうまく行って驚いているのだろう。言葉の端々から隠しきれない興奮が窺えた。教えるのは苦手などと言っていたが、そうとは思えないくらい楽しんでいるように見える。

「濡もやってみるか？」

「えっ、私？ 無理だよ」

思いがけない提案に驚き、濡は右手をふるふると横に振る。

武蔵は横目を流したままニッと口の端を上げた。

「おまえも名門ラグランジェ家の血を引いてるんだぞ。魔導の力はそれなりに持ってるんだから、単純に放出するだけなら難しくないはずだぜ。遥にも教えてるが、筋は悪くないしそのうち使えるようになるだろうな」

「遥が……？」

濡は考え込みながら顔をうつむける。興味はあるが、やはり自分にあの強大な力を扱えるとは思えない。見るだけでも恐怖心がよみがえるというのに。しかし、率直にそんな理由を言ってしまうと、武蔵に余計な心配を掛けることになるだろう。

「じゃあ、いつか気が向いたらね」

「魔導を使えて損はないと思うけどな。いざというとき護身術としても役に立つし……もう少し早く教えておけば……」

ドクン、と大きく心臓が跳ねた。

濡が足を止めると、続いて武蔵も足を止める。草を踏みしめながらゆっくりと振り返ったその顔は、怖いくらい真剣で、同時に何か言いたいことを堪えているようにも見えた。もしかして――喉がカラカラになるのを感じながら、ゆっくりと口を開く。

「……知ってるの？」

「会長秘書に聞いた」

「そう……」

考えてみれば、遥を預かってもらおうというのだから、その理由を話していても不思議ではない。まして武蔵とは血の繋がりがあるのだから。濡は小さく吐息を落とし、自分の足元を見つめて薄く自嘲の笑みを浮かべた。

「17年も積み重ねたのに、壊れるのはあつというまだね」

「これで踏ん切りがついただろう。あいつは父親じゃない」

「ん……」

不意に泣きたくなり、手の甲を口もとに当てて目をつむると、小さく鼻をすすりながら顔をそむけた。滲んだ涙が溢れないように、ゆっくりと呼吸を繰り返しながら気持ちを整えていく。ひんやりとした風が頬をかすめ、長い黒髪がさらさらとそよいだ。

「俺じゃ、駄目か？」

静かに落とされたどこか思い詰めたような声。振り向くと、鮮やかな青の瞳がまっすぐに滯を捉えていた。

「何が？」

「父親」

武蔵に冗談めかした感じはなかった。滯は濡れた目をぱちくりさせる。

「急に、どうして……？」

「放っておけないんだよ。もちろん戸籍上のことはどうしようもないし、実際に父親だとしゃしゃり出ることはないが、気持ちの拠り所になれるのならと思ってな。正直いって今のところ全然自覚はないが、そう思えるように、思ってもらえるように、出来る限りの努力はしていくつもりだ」

別に、彼に父親を求めていたわけではなかったが、身内として思ってくれる気持ちが嬉しかった。胸がキュッと締め付けられてあたたかくなる。先ほどとは別の意味でまた少し泣きたくなった。思わず潤んでしまった目元を拭いながら、小さく笑みを浮かべて言う。

「遥の父親にもなってあげてね」

「あいつの方が嫌がりそうだけどな」

武蔵は両手を腰に当てて苦笑する。思いきり嫌そうな顔をする遥があたりと目に浮かび、滯もつられるように笑った。

「あれ、そういえば遥はどこ？ いなかったよね？」

薄情だが、今になって初めて彼がいないことに気付いた。ここに来ることは言っていなかったのだから、もしかすると行き違いになったのかもしれない。電話しておけば良かったかなと軽く後悔していると、武蔵は不思議そうな顔をして尋ね返してきた。

「聞いてないのか？」

「何を？」

「小笠原へ行くって」

「……え？」

滯は目を見開き、呼吸さえ忘れてしまったかのように凍りついた。目的は何なのか、誰と行くのか、どこへ行くのか――次々と疑問が浮かぶものの、頭が真っ白になってしまい何も考えられない。上空でさえずる鳥の鳴き声だけが、やけに大きく聞こえていた。

## 53. 傷心旅行

滯はタクシーから降りると、脇目もふらず客船ターミナルに駆け込んだ。

ターミナルといっても、空港とは規模からして比べものにならないが、それでも思ったより明るく広々としていた。シンプルながら開放感のあるデザインがそう感じさせるのかもしれない。正面はほぼ全面ガラス張りになっており、その向こうには停泊中の大型旅客船が見えた。あれが小笠原行きの船なのだろう。

スクールバッグを肩に掛け、奥の待合いスペースに小走りで足を進める。

家族連れや友達同士など観光旅行者と思われる人たちが各々談笑している中で、遥はひとりぼんやりと窓の外を眺めていた。足元には黒いスポーツバッグが置かれている。

「よかった、間に合って……」

滯がほっと吐息まじりの声を落とすと、遥は振り向いて目を丸くした。

「滯……なんで……？」

「黙ってひとりで行くなんてずるいよ」

「見送り、ってわけじゃないよね？」

「私だって傷心旅行したいんだからね」

滯は冗談めかしてそう言い、左手を腰に当てながらニコッと笑ってみせる。

一拍の間のあと、遥はわざとらしく肩を上下させながら盛大な溜息を落とした。そして腕時計にちらりと目を落とすと、別に傷心旅行じゃないけどねとぶつくさ言いつつ、スポーツバッグを肩に掛けて椅子から立ち上がった。

この日はトラブルのため出航が二時間遅れになっていたらしい。そうでなければ、滯がどれだけ急いだところで間に合わなかっただろう。何も調べず、何も考えず、とにかく大慌てで遥を追いかけてきたのだが、そのことが逆に功を奏したといえる。

悪運だけは強いね、と遥は呆れたように揶揄したものの、滯が同行することに反対はしなかった。それどころか、窓口で二人同室になるように乗船券を手配し、宿にも電話を入れて一人追加したいと頼んでくれていた。しかも、滯の財布には三千元ほどしか入っていなかったもので、交通費も宿泊費もすべて遥に出してもらうことになった。

「たった三千元で小笠原まで行けると思ったの？」

「だって急いでたんだもん。ちゃんと返すよ」

嫌味を言いつつもきちんと面倒を見てくれる彼は優しい。もしかすると、二人旅になることを内心で喜んでいるのかもしれない。根拠はないが何となくそう感じ、ぶっきらぼうな彼の横顔を見ながら密かにクスッと笑う。

それからすぐ、搭乗手続きを始めるというアナウンスが流れた。

「わあ、海！」

出航からしばらくは客室でのんびりと寛いでいたが、そのうち外を見たくなり遥を誘って甲板に

出た。思いのほか風が強く、短いスカートが捲れて少しあたふたしたが、そこから見える風景は雄大で爽快なものだった。すでに港からだいぶ離れているようで、どこを見渡しても一面の大海原と青空である。あとは遠くに小さく貨物船が見えるくらいだ。

二人は手すりに腕を置いてもたれかかり、物思いに耽るようにぼんやりとその風景を眺めた。

「お父さまとお母さまも、こんなふうに船で小笠原に行こうとしてたんだよね」

「……そうだね」

遥は目を伏せてぼつりと答える。風に掻き消されそうなくらいの小さな声だったが、肩が触れ合うほど近くにいた漣の耳にはかろうじて届いた。さらさらの黒髪が潮風に乱されるのを構いもせず、手すりに置いた腕にそっと顔をのせる。

「事故に遭わなければ、二人は普通に幸せになってたのかな」

「たら、れば、を語ったところで何の意味もないよ」

「それは、そうかもしれないけど……考えたくなるよ……」

遥の冷たい物言いに一抹の寂しさを感じ、溜息を落とす。彼は右手で頬杖をついて遠くを見やっただ。

「まあ、そうなら僕らは存在しないけどね」

「うん……」

あの事故がなければ、美咲が非人道的な実験に身を投じることもなく、当然ながらその産物である漣たちも存在しない。大地と美咲は二人で幸せに暮らしていたかもしれない。漣たちではなく別の子供がいた可能性もある。誠一は他の人と付き合っただ結婚して——うっかりそんなことまで考えてしまい、気持ちがズンと沈み込んだ。

「あ、そういえば誠一に何も言わずに来ちゃった」

弾かれるように上体を起こすと、バッグから携帯電話を取り出した。しかし——。

「圏外……そっか……」

「船内に公衆電話があるよ」

絶望的な気持ちで携帯電話のディスプレイを見つめていると、遥がさらりと教えてくれた。それならどうにか連絡をつけられそうではっと胸を撫で下ろす。無断のまま行方不明になる事態だけは避けたかった。しかし、行き先を知らせればそれで済むという話でもない。

「やっぱり怒られるかな」

「そうだね」

怒られることが怖いわけではなく、怒らせてしまうことが申し訳ない。今さらながら、身勝手な行いを自覚して胸が痛む。

「僕も師匠に怒られるよ」

「え、言ってなかったの？」

「言ったら止められるから」

他のところならともかく、小笠原となれば悠人ももちろん行かせたくはないだろう。それでも、遥ならきちんと説得して来ているものと思っていた。漣は肩をすくめ、黒髪を風になびかせながら小さく笑みを浮かべる。

「じゃあ、二人で一緒に怒られよう？」

そう言うと、遙もふっと目を細めて柔らかく微笑んだ。

二人は船内に戻り、レストランで休憩してから電話をかけることにした。ふたりともコーヒーを注文して席につく。店内は広く、多くのテーブルが並んでいるが、食事時でないためか閑散としている。隅の方にもう一組いるくらいだ。

滯はコーヒーを一口飲んだあと、遙を見つめて少し前屈みになる。

「どうして小笠原に行こうと思ったの？」

「別に深い意味はないよ」

「ただの観光旅行？ あえて小笠原に？」

「一度ちゃんと行ってみたいと思って」

その気持ちは滯にも何となくわかる気がした。自分たちにとって因縁深い場所ではあるが、島の方にはまだ一度も足を踏み入れていない。どんなところか自分の目で見たいと思うのは、それほど不思議なことでもないだろう。

「風景がきれいでいいところみたいだよ」

「傷心旅行にはぴったりだね」

いたずらっぽく茶化すように再びその言葉を口にすると、遙は呆れたような目つきになり、吐息を落として椅子の背もたれに身を預けた。

「傷心旅行したいのは誠一の方だと思うけど」

「えっ？」

滯はコーヒーカップに手を掛けたまま、目をぱちくりさせる。

「プロポーズ、断ったんだよね？」

「ちょっ、え、なんでそれ……！」

「誠一から聞いた」

顔を真っ赤にして狼狽える滯に、遙は冷ややかに言葉を継ぐ。

「守られるための結婚が嫌だとか贅沢言ってる場合？ 一応言っておくと、未成年でも結婚したら成人として扱われるようになるから、今の滯にはそれだけでも十分にメリットあると思うよ」

「……………」

贅沢と言われても仕方ないのかもしれない。それでも、やはり滯には頷くことができなかった。口を引き結んでコーヒーカップの黒い液体に目を落とす。船が揺れているからなのか、手が震えているからなのか、水面が緩やかに波打っている。

「まあ、滯の人生だし好きにすればいいけど」

「ごめん……」

そう答えて、曖昧な表情を浮かべた。遙は頬杖をついて窓の外に目を向ける。

「滯も僕も、そろそろ進路について考えないとね」

「遙は橘を継ぐんじゃないの？」

「そのつもりだったけど、それでいいのかなって」

「うん……よく考えた方がいいよね……」

それは遥だけでなく自分にも当てはまることだ。単に進学先ということではなく、これからどうい  
う人生を歩むのか、そのためには何をすればいいのか、そろそろ考えるべき時期に差し掛かっている  
。いつまでも子供のままではいけないのだから。

その後、売店でテレホンカードを購入して、船内の公衆電話から誠一と悠人に電話をかけた。

誠一はしばらくのあいだ絶句するほど驚き、そして心配した。しかし遥と一緒にだと告げると幾分か  
安堵したようだ。言いたいことはいろいろとありそうな様子だったが、滯の意思を尊重してくれた  
のか、とにかく気をつけて無事に帰ってくるようにとだけお願いされた。

悠人は、遥にはいくらか苦言を呈していたようだが、滯には「楽しんでおいで」と優しく言ってく  
れた。彼にも少なからず心配する気持ちはあるはずだが、あえてそれを口にしなかったのは、この旅  
行が良い気分転換になることを願っているからだろう。

客室に戻ってから、明日中に美咲の死亡を公表する予定だと遥が教えてくれた。先ほどの電話で悠  
人が言っていたらしい。滯たちがいない間を狙って公表しようというわけではなく、もともと明日の  
つもりで調整していたとのことだ。滯はざわつく胸に手を当て、気持ちを整えるように目をつむって  
深く呼吸をした。

船内で一泊して船旅を満喫したあと、小笠原に着いた。

もう夕方に差し掛かろうかという時間になっている。港に降りると、年配の男性が「橘様」と書か  
れた宿名入りのボードを掲げて出迎えてくれた。橘です、と無表情で名乗り出た遥に、男性はにっこ  
りと柔和に微笑む。

「遥さん、滯さんですね。遠いところをよくいらっしゃいました」

「お世話になります」

遥が丁寧に頭を下げるのを見て、滯も慌ててペコリとお辞儀をした。しかし、なぜ滯の名前まで知  
られているのだろうかという疑問に思う。予約するときにはそこまで言っていなかったような――微妙な  
顔つきで考え込んでいると、男性は穏やかな声で言い添える。

「おうちの方からも頼まれていますので」

滯と遥は顔を見合わせて瞬きをした。先導する男性について歩きながら、声をひそめる。

「師匠かな？」

「だろうね」

悠人に電話をかけたとき、遥が宿泊先を訊かれて答えていたことを覚えている。未成年だけで遠方  
に何日も宿泊するのだから、保護者が連絡しておくのは当然かもしれない。しかし、やはりまだ子供  
なのだと思い知らされたようで、滯としては少しばかり複雑な気持ちになった。

「どうぞこちらへ」

男性は白いワンボックスカーに滯たちを乗せると、ゆっくりと海沿いの道を走り出した。

車で数分の、港からそう遠くないところに宿はあった。こじんまりとしたペンション風の建物で  
ある。客室は二部屋あるらしいが、滯たちの滞在中に他の宿泊客はいないとのことだ。もとより騒ぐ  
つもりはないものの、気を使わなくていいのが嬉しい。

「わあ！」

滯は部屋に通されるなり感嘆の声を上げた。ただのツインルームとは思えないくらい広々としている。正面は大きなガラス窓になっており、とても明るくて開放的な雰囲気である。窓の向こうには悠々と歩きまわれるほどのベランダがあり、カフェテラスのようなテーブルと椅子も設置されていた。

「お気に召しましたか？」

「はい、とても！」

「ごゆっくりお寛ぎください」

男性ははしゃぐ滯を見つめて満足げに微笑み、静かに扉を閉めて下がっていった。

滯はさっそく両開きのガラス窓を押し開いてベランダに出ると、遥と二人並んで手すりを掴んだ。高台になっているようでとても見晴らしがいい。少し冷えてきた風がゆるりと頬を撫で、海の香りがふわりと鼻をくすぐる。ザザ、と心地良い潮騒の音も聞こえてきた。眼下には夕陽に染まったオレンジ色の海が広がり、宝石を撒き散らしたようにきらきらと煌めいている。

「この景色だけでも来た甲斐があったね」

「明るい日中の海もきれいだって」

「うん、じゃあ、あした見に行こう？」

「もちろんそのつもり」

二人は顔を見合わせてクスッと笑い合った。

滅多に見られない雄大な景色のせいか、のんびりとした雰囲気のためか、小笠原に来てからの遥の表情はいつもよりずっと自然で柔らかい。そのことも、ここへ来た甲斐があったと思う理由のひとつだった。

夜は、近くの地魚料理店へ足を運んだ。

ここへ来るまでの道すがら、他に歩いている人を見かけず不安を覚えたが、店内は盛況といっても差し支えないくらいに賑わっていた。どうやら観光客だけでなく地元の人たちも訪れているようだ。赤ら顔ですっかり出来上がっているカウンター席の三人組は、店員たちとも互いに親しげにしゃべっているようで、おそらくは常連客なのだろう。

滯たちは個室に席をとり、騒がしい声を遠くに聞きながら一品ものを注文していくが、刺身、寿司、焼き魚、煮魚など何を食べても外れがなかった。地元でとれたての魚を使っているらしくとても新鮮なのだ。もちろん、その素材の良さを活かせるのは料理人の腕がいいからだだろう。辺鄙なところなのであまり期待はしていなかったが、それがただの偏見にすぎないことがよくわかった。

食事のあと、二人で海沿いを少し散歩してから宿に戻った。

眠くなる前にと、滯は戻ってからすぐに部屋のシャワーを浴びた。着替えは何も持ってきていないため、宿で用意された浴衣だけを身につける。下着すらないのは何となく心許ないが、朝になったら遥がコインランドリーに行ってくれるというので、それまでの辛抱である。

バスルームから出ると、遙が椅子に腰掛けてテレビをつけていた。リモコン片手に次々とチャンネルを変えている。

「ニュースを探してるの？」

「そう、母さんのことやってるかなって」

美咲の死亡は今日のうちに公表されることになっている。すでに公表されていれば、テレビのニュース番組でも多少は扱われるかもしれない。遙の後ろに立ち、濡れた髪をバスタオルで拭きながらテレビに目を向ける。その瞬間、橘の屋敷が画面に大きく映し出された。右上には「LIVE」という文字が入っている。

「え、わざわざ生中継？」

確かに美咲は優秀な科学者だが、さすがにここまでの扱いをされるほどの有名人ではない。橘財閥会長の娘であることを考慮してもだ。いったい何をどのように公表したらこんな事態になるのだろうか。怪訝に思ったのは濡だけでないらしく、遙も表情を陰しくして食い入るようにテレビを見ていた。

画面がゆっくりと動き、緊迫した顔つきでマイクを持つ男性リポーターが映った。

『まもなく、怪盗ファントムの犯行予告時刻となりますー』

「……えっ、ええっ?!」

濡は椅子の背もたれに後ろから手を掛けて、大きく身を乗り出した。遙も啞然としている。テレビではリポーターが怪盗ファントムの犯行予告文を読み上げ始めた。それを聞いて二人はますます混乱した面持ちになり、互いに物言いたげな目を見合わせた。

## 54. 幻の終焉

本日午後十時、橘美咲女史所有の「其の瞳に映るもの」を戴きます。

なお、これをもって怪盗ファントムは完全引退いたします。

最後となるこのパフォーマンスを、どうぞ存分にお楽しみください。

それが、怪盗ファントムが送ってきたとされる予告状の内容である。

どうやら美咲の死を公表した直後に届いたらしい。標的は、美咲の父親である故・相沢修平の作品で、彼女の少女時代を印象的に描いた油彩だ。美咲の死亡を公表した直後というタイミングで、怪盗ファントムの完全引退という話題もあり、かなりの注目を集めていると思われる。屋敷の前には、あふれんばかりの野次馬がひしめき合っていた。

世間の声は橘に同情的なようだ。対して、怪盗ファントムには批判的である。自らの引退に話題性を与えるために、美咲の死を利用したと思われるのだ。ただ、それでも怪盗ファントムの人気は根強く、引退は残念という声もちらほら聞かれた。もっとも、本当に引退するのか半信半疑という人が多いようだ。

「うーん……模倣犯、かなあ？」

滯は椅子に腰掛けて前屈みでテレビを見ていたが、一段落して体を起こすと、そうつぶやきながら眉を寄せて隣の遙を窺った。彼はテレビから目を離すことなく口を開く。

「引退ってというのが引っかかるね」

「どういうこと？」

「じいさんたちが何か企んでるのかも」

今ひとつ要領を得ないその答えに、滯はますます難しい顔になって小首を傾げる。

「でも、私たち二人ともここにいるよ？」

「初代を引っ張り出してくるつもりかな」

「え、師匠とお父さま？」

言われてみると、もはやそうだとしか考えられなくなってきた。二代にわたる怪盗ファントムの物語として見れば、最後に初代が幕引きするというのは、それなりに理にかなっているといえるだろう。いかにも剛三が好みそうな筋書きである。

「十時になればわかるよ」

伏し目がちにあれこれ考えを巡らせていた滯に、遙はそっけなく言う。

予告時刻の十時はもう間近に迫っている。テレビからは、あと二分と告げるリポーターの緊迫した声が聞こえてきた。

『いました！ 怪盗ファントム……でしょうか？』

リポーターの興奮した声は、一瞬でトーンダウンして戸惑いを含んだものになった。

理由は一目瞭然である。屋根の上に立っている怪盗ファントムと思われた人物は、長い黒髪をなび

かせたミニスカートの少女ではなく、スーツにマントを羽織った大人の男性だったのだ。ただ、顔を隠すための白い仮面だけは共通していた。

彼はバサリと派手にマントを翻すと、一瞬で姿を消した。

テレビではリポーターが解説を始める。二十数年前に活躍した初代怪盗ファントムと似ているが、同一人物かどうかはわからない、と隠しきれない困惑を滲ませながら話している。数ヶ月前にも初代怪盗ファントムらしき人物の目撃情報があったらしい。おそらく悠人が罠に掛かった濡を救出してくれたときだろう。ここ数ヶ月のうちで初代が姿を見せたのはあのときだけのはずだ。

そうこうしているうちに、黒い布にくるまれた平たいものを抱えた怪盗ファントムが、再びマントをひらめかせながら屋根の上に飛び出してきた。歓声とブーイングが同時にどっと沸き上がる。それに応えるように、黒い布をすりと抜き取って後方に投げ捨てると、剥き出しになった絵画を高々と両手で掲げて見せた。

それは、まさしく『其の瞳に映るもの』だった。

ようやく警官たちが屋根まで追いかけてきたが、弄ぶように軽々とかわしていき、まっすぐ飛んできたヘリコプターの縄ばしごに飛び乗る。そこから大量のカードをばらまくと、バサバサとマントをはためかせながら、ヘリコプターごとあっというまに遠ざかっていった。

相沢修平『其の瞳に映るもの』を戴きました。

これをもって完全引退いたします。

長きにわたるご声援ご観覧に感謝します。

——怪盗ファントム——

それがカードに書かれていた言葉だった。橘の敷地外に散らばっていったカードは、野次馬やマスコミの争奪戦になっているようだ。舞い落ちるそれを我先に手にしようと踊らされている。

濡はテレビの騒動を見つめて啞然とした。

「なにこの茶番。お母さまの絵を盗むとか意味がわからないし」

「多分、怪盗ファントムを終わらせるのが目的だったんだろうね」

「終わらせるって……あ、もしかして私たちのために？」

「だといけど」

遥は息をついて椅子の背もたれに身を預けた。

濡にはそれ以外に何があるのか見当もつかない。けれど、彼の思わせぶりの物言いに漠然とした不安を覚え、いてもたってもいられず弾かれるように立ち上がる。

「私、師匠に電話してくる」

「夜遅いし僕もついていくよ」

携帯電話は圏外なので公衆電話を使うしかないが、幸い電話ボックスが近くにあることは確認している。わざわざついてきてもらうほどの距離ではない。しかし、彼にも話したいことがあるのかもしれないと思い、あえて断ることなくこくりと頷いた。

洗いたての濡れた髪が、夜風でみるみる冷えていく。

宿の浴衣で出歩くわけにもいかないの、先ほどまで着ていた服に着替え直していた。せっかくシャワーを浴びてさっぱりしたのに、洗濯予定のものなど身に着けなくなかったが、他に替えがないのだから我慢するしかない。あたたまった体も冷めてしまいそうなので、あとでもう一度シャワーを浴び直そうと心に決めた。

電話ボックスに入り、きのうの残りのテレホンカードで悠人に電話をかける。二人でボックスに入るのは窮屈なので、遥はすぐ後ろで折りたたみ扉を押し開いて立っていた。これだけ静かであれば、扉を閉めなくても電話の声は聞き取れるだろう。

『はい』

数コールののちに電話が繋がった。一言だけだが、間違いなく悠人の声だとわかる。

「濡です。さっきテレビ見ました。あれ、どういうことですか？」

『絵画は奪われたけど、みんな無事だから心配はいらないよ』

返ってきたのはとぼけたような白々しい答えだった。一瞬、からかわれているのかと思いつつしたが、電話の向こうはやけに騒がしく、周囲に大勢の警官がいるらしいことが窺える。おそらく橘の屋敷なのだろう。だとすれば、絵画を盗んで逃亡した怪盗ファントムは大地ということになる。

「お父さまも無事？」

『ああ、心配はいらない』

「本当に？」

『濡は心配性だね』

悠人はそう揶揄するが、いきなりあんなものを見れば心配にもなる。何も事情がわからないのだから当然だ。

「せめて前もって教えておいてほしかったです」

『黙って小笠原に行ったのは誰だったかな？』

「うっ……すみません……」

それを言われてしまうとぐうの音も出ない。電話の向こうで、悠人がクスッと笑うのが聞こえた。

『詳しい話は二人が帰ってきてからするよ』

「はい……橘の家に行けばいいですか？」

『船が着くころにターミナルまで迎えに行く』

「わかりました」

受話器を握る手に力がこもった。橘の家に戻るのは久しぶりのことである。大地とどんな顔をして会えばいいのか、会って何を話せばいいのか、そんなことを考えると自然と緊張してくる。だが、今から悩んでいても仕方ないだろう。

『遥もいる？ 代わってほしいんだけど』

「あ、はい」

そう答えると、すぐ後ろにいる遥にそのことを告げ、場所を入れ替わりながら受話器を渡した。

「代わりました、遥です………わかった……元気そうだよ……うん、ちゃんと楽しんでるから……まかせて……じゃあ」

遥は淡々と話したあと受話器をフックに掛けた。ピピ、と音がしてテレホンカードが戻ってくると

、すぐにそれを引き抜き、戸口の濡を促しつつ狭い電話ボックスから外に出た。ガラスの折りたたみ扉が静かに戻っていく。

「もしかして私のこと話してた？」

「心配してたよ」

「師匠の方こそ心配性だよ」

濡が肩をすくめて笑うと、遥もつられるように小さく笑みを浮かべた。

「戻る？」

「うん」

濡はにっこりと笑顔を見せて頷いた。電話ボックスの外にいと夜風の冷たさを実感する。濡れた髪はとっくに冷えきって身震いするほど寒い。早く熱いシャワーを浴びてあたたまろうと、急かすように遥の手を引いて小走りに駆け出した。

翌日、近くの喫茶店で朝食をとってから海岸へと向かった。

そこには、旅行のパンフレットで見えるようなエメラルドグリーンの海が広がっていた。湾内ということも影響しているのだろうか。海面はとても穏やかで、太陽の光を反射してきらきらと宝石のように輝いている。

ぐるりと視線を巡らせると、若い女性たちが波打ち際で遊んでいるのが遠くに見えた。微かにはしゃぎ声も聞こえる。遠目だが誰も水着は着ていないようだ。本土より暖かいとはいえまだ春先であり、さすがに海水浴をするつもりはないのだろう。

二人は白い砂浜を歩き出した。ゆったりとした波のリズムが心地良くて、気持ちも自然と凪いでいく。濡は後ろで手を組み合わせて青空を仰ぎ、深く息を吸い込むと、あらためてエメラルドグリーンの海に目を向けた。

「きれいだね」

「そうだね」

遥も足を止め、長めの前髪を風になびかせながら海を眺めている。その隣に寄り添いながら、濡は両手を前に伸ばして親指と人差し指でフレームを作ってみた。そうやって切り取るとますます写真や絵葉書のように見える。

「現実じゃないみたい」

「海に入ってみる？」

「水着なんてないけど」

「足だけだよ」

「あ、そうだよね」

肩をすくめて苦笑すると、その場に立ったまま片方ずつ靴と靴下を脱ぎ、白い砂浜を踏みしめて波打ち際へ進んでいく。ザブン、と波がかかったところで足を止めた。まだ春先のため少し冷たくてひやりとするが、間近で見る海水は見事に透きとおっていて感動する。そこに立っているうちに、寄せては返す波に足元の砂が削られて、海に引きずり込まれていくように感じた。

遥も隣でジーンズをまくり素足を浸していた。遠くを見つめながら深呼吸する彼につられ、濡も思いきり両手を上に伸ばして深呼吸して、潮風と細波を受けながら全身でこの風景を感じ取る。

「ねえ、あの国ってここから近いんだっけ？」

「この前の出入り口は船で数十分のところかな。国がどんなふうに広がっているのか知らないけど、もしかしたらこの真下にも続いてたりするのかもね」

この直下で暴発が起これば、間違いなく島の一部が破壊されてしまう。集落の真下なら惨劇になるだろう。もっともあれほどの暴発はめったに起こらないらしく、可能性はほとんどないだろうが、滯はついその光景を想像してしまいゾクリと身震いした。

「遥さん、滯さん！」

「あ、おはようございます」

道路の方から声を掛けられて振り返ると、きのうから世話になっている宿の主人がいた。ふらりと散歩にでもやってきたのだろうか。手ぶらでサンダル履きというラフな格好をしている。彼はニコニコと人懐こい笑みを浮かべながら、砂浜へ続く石段をゆっくりと降りてきた。

「のどかに見えると思いますが、海には気をつけてくださいね。天候が良くても、急に高波が来ることもありますから。それほど頻繁にあることではないのですが、一週間ほど前にそういう高波が来たばかりですし……幸い、夜だったので海岸には誰もいなかったのですが」

滯と遥は互いに目を見合わせた。一週間前の高波というのは、おそらく滯たちがあの国に行ったときに起こったものだ。メルローズの魔導の暴発か、溝端たちのミサイル攻撃か、そのどちらかが原因ではないかと容易に推測できる。

遥が砂浜へ上がっていく。

滯も水しぶきを上げながらすぐにあとを追った。踏みしめた白砂のあたたかさにほっとしつつ、遥とともに宿の主人の方へ向かう。

「それで、きれいなところなのにあまり人がいないんですね」

「いえ、それはそもそも観光客が少ないからですよ」

宿の主人は軽く笑いながら答えると、遠くの海を見やりふっと目を細めた。

「二十数年前のフェリー事故までは賑わっていたんですけどね。あの一件以降、この諸島の観光客はめっきり減ってしましまして……そもそも、数年の間は観光できる状態でもありませんでしたし」

両親が巻き込まれた小笠原フェリー事故のことだ。滯の心臓はドクンと跳ねた。島の方にまで影響が及んでいたとは知らなかったし、考えたこともなかった。何かいたたまれないものを感じ、胸元に手を当てながらおずおずと尋ね掛ける。

「どんな状態になってたんですか？」

「あまり気分のいい話ではないので……」

「聞かせてください」

言葉を濁そうとした宿の主人に強く懇願する。

彼は迷うような素振りを見せていたが、やがて神妙な面持ちで話し始めた。

「流出した油などで付近の海が汚れ、船の瓦礫やご遺体が島のあちらこちらに流れ着き、まるで地獄絵図のようなひどいありさまだったのです。ご遺体の多くは焼き焦げていたり切断されていたりと損傷が激しく、船体の瓦礫も焼きただれていたり融けたようにひしゃげていたり、ただの海難事故と

は思えない様子でした。海中から光の柱が上がるのを見た人もいますし……」

滯は小さく息をのんだ。

「そのこと、警察には……」

「もちろん話してますよ」

宿の主人は遠くを見やりながら淡々と答え、少し眉を寄せる。

「ですが、世間の混乱や動揺を防ぐためだったのか、そのことを明るみにはしなかったようです。私たちには厳重な箝口令が敷かれました。代わりに、島に多大な援助をしてくださったようですが」

「援助……？」

「主に資金援助と公共事業です」

話を聞く限り、金で口止めをしたということになる。もっとも、何の力もない島民が声を上げたところで、たいして問題にはならなかっただろう。主要産業である観光業に打撃を受けた彼らが、ここで生きていくためには、賢明な判断だったのかもしれない。いや、そうする以外になかったのかもしれない。

「とはいえ、決して私たちの目撃情報を無視したわけではなく、本当の事故原因を突き止めようとはしていたみたいですね。国の調査船が頻繁にやってくるようになりました。自然の美しいこの地にそぐわない無骨な船が……まあ、援助を受けているので文句は言えませんが」

彼の口もとに、ふと自嘲の笑みが浮かんだ。

「一週間ほど前には物騒な護衛艦までやってきましてね。フェリー事故のときと同様に光の柱が上がっていたようです。そして、護衛艦がどこかに何発もミサイルを撃ち込んだとも……いったい、この地で何が起きているのでしょうかね」

その核心をついた独り言に、滯も遙も何も反応できなかった。すぐに宿の主人は我にかえる。

「申し訳ありません。このような話を……」

「箝口令を破ってまで、どうして僕たちに？」

「さあ、どうしてでしょうね」

本当にわからないのか、それともとぼけているのか、彼の口調からは判別がつかなかった。もし理由があるのだとしたら気になるところだが、だからといって追及するだけの勇気はない。相手がほとんど面識のない人なのでなおさらだ。隣の遙もそれ以上尋ねるつもりはなさそうである。

「勝手に話しておいて何ですが、他言しないでいただけるとありがたいです」

「わかりました……」

滯が戸惑いがちに返事をすると、彼はにっこりと微笑む。

「私たちは皆さんに遊びに来ていただけるよう奮闘してきました。その甲斐もあって、ここ数年は次第に観光客が戻りつつあります。遙さんも滯さんもぜひ楽しんでいてください。お気に召しましたら、ご家族の方やご友人を誘ってまたいらしてください」

「はい」

いつのまにか宿の主人としての顔に戻っていた彼を見て、滯は安堵の息をついて笑顔を返した。

「母さんのニュースを見たのかな」

宿の主人と別れて再び二人で海に足をひたしているうちに、遙がふとそんなことを口にした。どう

やら宿の主人のことを言っているようだが、何を言いたいのかまではよくわからない。濡が不思議そうな顔を見せると、遥は足元を見つめて淡々と説明する。

「母さんが小笠原フェリー事故の生き残りっていうのは知られてる話だよ。そして、僕らが母さんの子供だってことも知ってるんじゃないかな。名前や住所はわかってるわけだし、橋財閥の人間だってことくらい簡単に推測できるよね」

それを聞いてもまだ判然とせず、濡は小首を傾げた。

「だから、昔のフェリー事故を思い出してつい話してしまった？」

「子供である僕たちに、真実を知らせるべきだと思ったのかもね」

「んー……ただ誰かに聞いてほしかっただけなのかも……」

知らせるべき、などという使命感を持っているようには感じられなかった。美咲が死亡したというニュースを聞いてフェリー事故を思い出し、そこにたまたま関係する人がいたので話したくなった、というだけのような気がする。つらい思い出は誰かに話すことで整理をつけられるものだが、箆口令が敷かれていたのなら、島民の間でもそう軽々と話題に上すことはできなかったはずだ。

「あの事故で、この島の人たちにすごく迷惑かけてたんだね」

後ろで手を組み、透きとおった海水に足先を泳がせながら独り言のようにつぶやく。穏やかな潮騒やちゃぷちゃぷという水音に混じって、呆れたような溜息が隣から聞こえた。

「濡や僕が責任を感じることはないけどね」

「でも、無関係ってわけじゃないし……」

下を向いたまま眉をひそめてそう言いかけると、いきなり横からドンと突き飛ばされた。とっさに受け身を取りながら浅い海へ倒れ込む。直後にザバンと波を浴びて全身ずぶ濡れになり、しょっぱい味が口の中に広がった。わけがわからず、その場で上体を起こしてきょとんと遥を見上げる。

「背負えもしないくせに、責任ないことまで責任感じてどうするの？ 濡の悪い癖だよ」

冷たく見下ろしながらそう言われ、濡はようやく何が起こったのかを把握した。浅い海に足を崩して座り込んだまま、恨みがましい目を向けて口をとがらせる。

「だからって、何で突き飛ばすわけ？」

「頭が冷えたんじゃない？」

遥は少しも悪びれずにそう言うと、ザバザバと波を蹴りながら沖の方へ向かう。

「え、ちょっと」

「せっかくだから泳ごうよ」

うろたえる濡を尻目に、服が濡れるのも厭わず、まだ泳ぐには冷たい海に飛び込んでいく。濡もすでにどうしようもないほど濡れているので、もういいやとやけっぱちになり、先に行く彼に追いつこうと全力で泳ぎ出した。

「なんか、久しぶりにこんなに体を動かした気がする」

「僕も」

二人は誰もいない海をしばらく競うように泳いだあと、砂浜に上がって笑い合った。冷えた体に強い日射しが心地良い。遥はどうだかわからないが、濡はここしばらく筋トレすらも怠っていたので、

かなり体がなまっていたように感じた。泳ぎ疲れてくたくたにはなったものの、おかげで頭も気持ちもすっきりとした。両手を広げて伸びをしながら太陽を仰ぐ。

「ねえ、遥」

「何？」

「私、お母さまの研究を継ごうと思う」

そう告げると、遥は振り向いて大きく目を見開き、それから訝るように眉をひそめた。

「……滯が？」

「やってみなくちゃわからないじゃない」

滯は軽く口をとがらせる。

「他人事じゃないもん。お母さまみたいに天才じゃないのはわかってるけど、本気で頑張れば何とかなるかもしれないし、っていうか何とかしなきゃいけないんだって……」

遥が怪訝に思うのは当然だろう。自分でも自信があるわけではない。それでも――。

「今さらあの研究をなかったことにはできない。お母さまがつけた研究の道筋があるのなら、お母さまがいなくても止まることはない。もしかしたら暴走したり悪用されたりするかもしれない。あの生体高エネルギーで、そしてお母さまの研究で、もう二度と悲しいことを起こさせたくない。だから、対処できるだけの知識と手段を持っておかないと……それが抑止力にもなると思うし……」

考えを巡らせながら言葉を紡ぐ。それはこれまでも漠然と考えていたことであり、誰かがやらなければとは思っていたが、自分がやろうとまでは思っていなかった。思い立ったのはつい今し方である。だが、決して一時の気の迷いではないと信じている。

遥は全身に水を滴らせたまま立ち尽くし、驚いた顔をしていた。

「僕も同じことを考えてた」

「うん、でも遥はダメだよ」

「橘を継げって？」

彼の声には不満が滲んでいる。滯は表情を緩め、ゆるりと首を横に振った。

「遥はお母さまに似てるんだもん」

遥は虚をつかれて目を丸くした。しかし、すぐに滯の言わんとすることを察し、わずかに眉根を寄せて渋い顔になる。

「僕はあるに愚かじゃないよ」

「そうだね、遥ならもっと上手くやりそう」

「……………」

彼には常識にとらわれないところがあるうえ、極端なところもある。研究を進めるためなら自らを実験台にしかねない。もしかすると、美咲たちと同じように道を踏み外すかもしれない。彼なら足元をすくわれないよう上手くやるだろうが、だからこそなおさら危険ではないかと思うのだ。

少し言い過ぎたかな、と険しくなった表情を見てヒヤヒヤしていると――。

「わかった、僕は橘を継ぐよ」

彼は腰に手を当て、吐息を落として静かに言った。そして、次から次へと滴り落ちる雫を拭いもせず、怖いくらい真剣な顔になり滯に向き直る。いかに責任重大であるかを知らしめるかのように。

「滯に託したからね」

「ん、まかせて」

滯は端的な言葉で応じると、すっと腕を伸ばして小指を差し出した。それだけで、遥はすぐに意図を理解して自らの小指を絡めてくれた。互いに見つめ合いながら無言で約束を交わす。降りそそぐ白い日射しが、絡めた指から流れ落ちる水滴をキラリと輝かせた。

## 55. 最後の賭け

---

「おかえり」

滯と遥が旅客船を下りてターミナルに入ると、悠人が優しい微笑を浮かべて出迎えてくれた。仕事を抜けてきたのかスーツにネクタイという格好だ。彼の声を聞くのは怪盗ファントムの件で電話をして以来である。滯は思わず弾かれるように駆けていった。

「……ただいま」

少しの逡巡のあと、無難な言葉を返して控えめにはにかんだ。遥もゆっくり歩いてきて「ただいま」と言う。そんな二人を見て、悠人はほっとしたように小さく息をついた。

「小笠原は楽しかった？」

「はい！海がエメラルドグリーンですごく澄んでいて、景色が絵に描いたみたいにきれいで、ごはんも地魚とかとてもおいしかったですし……あと、ホエールウォッチングでクジラも見えてきたんです。思ったより近くて迫力があって感動しました」

滯は興奮ぎみに話すと、持っていた手提げの紙袋を悠人に差し出した。

「これ師匠へのお土産です」

中身はごくありきたりな地名入りのお菓子だが、土産を買ってくるとは思わなかったらしく、彼は驚いたように目を大きくした。ありがとう、と礼を言いながら柔らかい表情になって受け取る。

「じゃあ、家に帰るけどいいかな？」

「……はい」

そう答えた滯に、隣の遥がちらりと気遣わしげな視線を送ってきたが、橘の家へ行くことはあらかじめ聞いていたので、それなりに心の準備はできているつもりである。ただやはり幾何かの緊張は避けられず、わずかに顔をこわばらせてしまったことは自覚していた。

ターミナル近くに駐めてあった悠人の車で、橘の家へ向かう。

滯は姿勢正しく後部座席に座ったまま、運転席の悠人に目を向けた。怪盗ファントムのこと、大地のこと、美咲の絵のこと——本当は今すぐにでも教えてほしいと思っている。しかし、橘の家に帰るといことは剛三から話があるはずで、今ここで悠人に尋ねても何も答えてはくれないだろう。

隣では、遥がゆったりとシートに身を預けながら、窓の外に目を向けていた。何を考えているのかまではよくわからないが、とりあえず彼も悠人に尋ねるつもりはないようだ。そもそも、早く聞きたいとはあまり思っていないのかもしれない。

車中は重い沈黙に包まれ、静かで単調な走行音だけが聞こえていた。

「二人とも、あまり勝手をするでないぞ」

「申し訳ありませんでした」

書斎に入るなり剛三から小言をくらい、滯と遥は執務机の前でそろって頭を下げた。もっとも剛三に怒っている様子はなく、家族として義務的に注意しただけのようだ。二人の謝罪を見て頷くと、意味ありげに口もとを上げて横目を流す。

「悠人は意外と心配性だからな」

「剛三さんはもっと心配してください」

後方に控えていた悠人は、滯たちの前で揶揄されてきまり悪そうに反論した。

そのやりとりだけで、悠人が必要以上に心配している様子も、剛三が清々しいほど心配しない様子も、まるで見てきたかのように脳裏に浮かび、滯は口もとに手を添えてクスッと笑う。隣の遙もめずらしく表情を緩めていた。

今、書斎にいるのはこの四人だけのようだ。

あらためて見回してみても大地の姿はどこにも見当たらない。彼と対峙することを覚悟してただけに拍子抜けである。もしかしたら悠人が気を遣ったのかもしれないが、滯としては過度に配慮されることなど望んでいない。逃げてばかりいては何の解決にもならないのだから。

「あの……お父さまは……？」

「大地はもうここにはおらん」

「えっ？」

それがどういう意味なのかすぐには理解できなかった。困惑まじりの怪訝な面持ちで剛三を見つめると、彼は真顔で付言する。

「海外勤務で、今はドイツだ」

「……………」

思考が追いつかずに固まっていた滯に、さらに悠人が追い打ちをかける。

「十年は日本に帰ってこないよ」

仕事のことも会社のことも詳しくない滯には、その人事が左遷にあたるかどうかはよくわからない。けれど、後継者としての道が閉ざされたことだけはわかる。大地自身はそもそも乗り気でなかったようだが、橘としては大きな痛手ではないだろうか。

「私を守るため、に……？」

「もちろんおまえのことも理由の一つではあるが、それだけではない。メルローズを引き取るためにもそうする必要があった。そして、大地がこれまで行ってきたことに対する私なりの罰でもある」

剛三は深みのある低い声で、丁寧に言葉を紡ぐ。

「だからって、こんな突然……」

「おまえも会いたくはなからう」

「そんなことは……」

滯の声はかすかに震えていた。もちろん積極的に会いたいわけではないが、会わないままでいいとも思っていない。大地と向き合おうと思ってここへ来たのに、いない間に勝手に片付けられてしまい、覚悟を決めた気持ちが宙ぶらりんである。しかしながら、自分のためだけではないと言われてしまえば、これ以上不満を口にすることもできない。

「怪盗ファントムを終わらせることは、大地の意思だ」

滯の双眸に、威厳を増した剛三の顔が映る。

「大地が日本を去るにあたって願ったことはふたつ。ひとつは美咲の絵を自分だけのものにする、もうひとつは怪盗ファントムを完全に終わらせること。怪盗ファントムについては、私もそろそろ潮時だと思っておったのでな。願いを叶えてやることにしたのだよ」

「私たちのために……？」

「置き土産のつもりだろうな」

怪盗ファントム引退の話聞いたとき、自分たちのためかもしれないとは思ったが、それを言い出したのが大地だとは考えもしなかった。自分の子供ではないと冷たく突き放しておきながら、なぜこんな置き土産をしてくれたのかわからない。せめてもの罪滅ぼしということだろうか――。

「それと、これをおまえたちにと預かった」

そう言いながら、剛三は引き出しから古びた大学ノートを取り出した。

「美咲の日記で、書かれているのは主におまえたちに関することだ。先日、これを含めたいくつかが押収先の公安から返却されてな。大地に渡したら、これは滯と遥が受け取るべきだと預けていったのだよ。二人で見るといい」

無造作に差し出された大学ノートを遥が受け取った。滯はそわそわと横目を送るが、どうやらここで開くつもりはないようだ。大学ノートを掴んだ手はすでに下ろされている。

剛三は、執務机の上で両手を組み合わせた。

「研究所は、暫定的に悠人を所長にして存続することになった。まもなく石川医師も釈放される。彼はこれまでどおり副所長を引き受けてくれるそうだ。他の研究員もほとんどが戻ってくれると聞いている。美咲の研究も問題なく継続できるだろう。もちろん、後ろ暗いところのない正しい方法でな」

話を聞くうちに、滯の表情は次第に硬くなっていく。

「……おじいさま」

「何だ？」

「私に、お母さまの研究を継がせてください」

この話を切り出すのなら今しかないと考え、唐突だとは思いながらも真摯に訴えた。しかし、彼は身じろぎひとつせず冷ややかに受け流す。

「感傷的になっているだけならやめておくのだな」

「違います。あの研究をなかったことにしたくないんです」

「だから研究は継続すると言っておるだろう」

剛三は溜息をついた。

「必要とあらば優秀な研究者を引き抜いてくるつもりだ。何もおまえがやることはない。そもそもおまえは研究者には向いておらんよ。頭脳ではなく性格がな。何事に関しても突き詰めて考えようとはせんだろう」

「うっ……」

滯は痛いところを突かれて言葉に詰まった。それでも反論をあきらめない。

「性格だけで不向きだと決めつけられても納得できません。私がやる必要がないということはわかりますが、やりたいんです。やらせてください。動機や情熱は他の誰よりもあります。私が生まれてきたことに意味があったと思いたい」

最後は蛇足だが、感情が高ぶるあまりつい口をついてしまった。結局のところそれが本心なのかもしれない。この研究を継続しようという使命感も嘘ではないが、それよりむしろ利己的な気持ちの方が大きいように思う。

「甘い世界ではないのだぞ」

「努力します」

剛三は探るように滯の瞳を見つめたあと、重々しく頷いた。

「よかろう。どこまでやれるか気の済むまでやってみるが良い。ただし、美咲の娘だからといって特別扱いはせんからな。最低でも大学卒業までに必要な知識は身につけておけ。実力がなければ研究所には入れさせんし、入れても使えないとわかればクビにする」

「ありがとうございます」

そう答えて一礼すると、隣の遥と目を見合わせてほっと安堵の息をついた。これで約束を果たすための一歩を踏み出したことになる。しかし、研究者としてはまだスタートラインにすら立てていない。そこにたどり着けるかどうかはこれからの努力次第なのだ。

「まあ、ものにならずとも勉強するのは悪いことではないからな」

剛三はフツと笑い、まるきり信じてなさそうな口ぶりにつぶやいた。滯はさすがにムツとして眉をひそめたものの、ここで言い返したところでどうにもならない。いつか結果を出すことで見返すのだと心に決める。

「で、一つ相談があるのだが……」

「何でしょうか？」

真顔になった剛三にどこか遠慮がちに切り出され、滯は不機嫌なまま先を促した。彼はひじをついで口もとで両手を組み合わせると、穴の空きそうなほどじっと滯を見つめて言う。

「おまえ、悠人と結婚してくれないか」

「……はあっ?!」

暫しの間あと、滯はほとんど悲鳴のような素っ頓狂な声を上げた。

「剛三さん、何を言い出すんですか?!」

「おまえは黙っておれ」

悠人もひどく焦った様子で後ろから身を乗り出したが、剛三に片手で制されて元の位置に戻る。しかし、その顔には不安と動揺が色濃くにじんでいた。彼もおそらく何も聞かされていなかったのだろう。

剛三はあらためて滯に向き直り、口を開く。

「大地がこうなってしまった以上、悠人を後継者にしようと思っているが、やはり反発は避けられないからな。なるべく揉め事を起こさず認めさせるには、おまえと結婚させるのがもっとも有効なのだ。わかるだろう？」

その話はもうなくなったものと認識していたのに、今になって蒸し返されるとは思いもしなかった。社会や組織のことはあまりよくわからないが、剛三自らが正面切って滯に頼むなど、よほど切羽詰まった事態になっているのかもしれない。だからといって――。

「どうして私ばかり、こんな……」

「遥とは結婚させられないのだから仕方あるまい。それに、遥は橘のために後を継いでくれることになっておる。おまえには好きなことをさせてやろうというのだから、そのくらいは協力してくれても良いと思うがな」

それを言われると心苦しい。同時にずるい説得だとも思う。

「あの……私、南野誠一さんと付き合っています」

「それは承知しておる。彼と結婚するつもりか？」

「……いずれは」

「彼の方も同じ考えなのか？」

「……おそらく」

「ふん、随分と曖昧だな」

まるで話にならないとばかりに言い捨てられる。濡はうつむき、体の横でぐっと静かにこぶしを握りしめた。言い返したい気持ちはあるものの考えがまとまらない。奥歯を食いしばる力が無意識に強くなっていく。対する剛三も気難しい顔のまま口を開こうとしない。

しかし、その沈黙に遥が割り込んだ。

「無理に師匠を後継者にしなくてもいいんじゃない？」

「今のところ他に後継者にしたい奴はおらん。人間的に信用ならないか、能力的に劣るかのどちらかだ。もちろんおまえのことは後継者として考えておるが、まだ若すぎるからな。一人前になるまでは待てん。私も高齢ゆえ先は長くないし、いつぽっくり死ぬともわからんのだよ」

剛三はいつになく気弱な発言をすると、濡に視線を移す。

「どうだ？ 橘を救うために決断してくれないか」

「……他に、何か方法があるはずです」

「これがすべてを丸く収める最良の方法だ」

先は長くないのだと悲観的なことを言い出したのは、濡の同情を引く作戦なのだろう。その思惑通りにぐらりと気持ちが揺らぎかけたが、さすがにこれしきで絆されていていほど簡単な問題ではない。

「でも、こんな間違ってると思います」

「ではこうしよう」

剛三はゆったりと目を伏せ、一呼吸おいてから再び濡を見つめる。

「一月後までに南野君との婚姻届を出して夫婦になれ。それができなければ悠人と結婚してもらおう。二人の気持ちが一致していれば難しいことではあるまい」

濡は小さく息をのみ、ゆっくりとうつむいて考え込む。

隣から遥が「ダメだよ」とこっそり囁きかけてきたが、剛三に強く睨まれて口をつぐんだ。それでも警告するように険しい視線をこちらに送っている。

しかし、濡としてはまたとないチャンスではないかと思った。誠一と結婚してしまえば二度と蒸し返されることはない。つい先日、素敵ではないからと彼の求婚を断ったばかりなのに、素敵さのかけらもない理由で逆に求婚しようなど、さすがに凶々しすぎて気が咎めるものの、それでも断られはしないと確信している。剛三の挑発に乗るのは癪だが、冷静に考えたうえでそれが最善だと判断した。

「その勝負、受けます」

「互いに撤回はなしだ」

「わかっています」

幾何かの緊張を感じつつもしっかりと頷く。その様子を見ながら、悠人は物言いたげな複雑で曖昧な表情をし、遥は呆れたように大きく溜息をついた。二人とも濡の決断に不満を感じているのだろ

うが、心配することなど何もない。

「私、絶対に負けませんから」

ここ数ヶ月で何度も出てきたこの話に、今度こそ決着をつける――滯は強い決意を胸に、挑むようなまなざしで剛三を見つめる。そのとき思わせぶりに彼の口もとが上がり、背筋がぞくりと震えたが、それでも負けじと目だけはそらさなかった。

「なんか、すごく久しぶりって感じ」

書齋を退出したあと、滯はそのまま遥を誘って自分の部屋にやってきた。美咲の日記を読むためである。しばらくぶりの自室を懐かしむのもそこそこに、さっそく二人で椅子を並べて学習机に向かう。

遥が大学ノートを机の上に置いた。

表紙はもともとの印刷だけで何も書かれていなかった。ただ、その色褪せやかすれに長い年月が感じられる。パラパラと中をめくってみるとほとんどが白紙で、読むべきところは最初の数ページしかないようだ。ひとまず順に目を通していくことにする。

1979年12月1日

16歳の誕生日である今日、大地と結婚して夫婦になった。

これで正式に例の実験を始動することになるだろう。

私自身が了承したのだから今さら泣き言は口にできない。

1979年12月9日

実験体の父親となるべき人物を選ぶように言われた。

若い男なら誰でもいいとのことで、見た目のいい人を選ぶ。

検査の結果、適合と判断され彼が父親となることが決まった。

1980年7月11日

かなりおなかが大きくなってきて学校に行くのも一苦勞。

石川さんによれば双子なので通常よりも大きいらしい。

瑞穂お母さまが嬉しそうにしているのを見ると心が痛む。

1980年9月17日

無事に男の子と女の子の双子が生まれた。

ここまでやってしまったのだから、もう引き返せない。

これは実験体なのだとの自分の心に何度も言い聞かせる。

1980年9月20日

女の子を滯、男の子を遥、と大地が名付けてくれた。

名前をつけることに罪悪感を覚えるが、誰にも言えない。

お母さまやお父さまの前では母親の顔をしなければ。

1981年10月10日

いつのまにか二人とも随分歩けるようになっていた。  
少しずつ言葉を発するようになってきている。  
実験体だとはわかっていても可愛いと思ってしまう。

1981年12月24日

瑞穂お母さまに言われて久しぶりに一日休暇を取った。  
両親、大地、子供たちと一緒にクリスマスのお祝いをする。  
まるで、どこにでもある幸せな家族のように。

1982年9月17日

ついに素子の注入実験が決まった。  
よりによって二人の誕生日にこんな話を聞きたくなかった。  
それでも嫌だなんて言えるはずはなく、言う資格もない。

1982年9月25日

できるだけ実験以外であの子たちと関わりたくない。  
実験がつらくなるから。

1988年2月8日

大地には苦悩していたことを気付かれていたようだ。  
二人に実験をするのが嫌ならやめてもいいと言われた。  
その代わりに提案されたことは一一。

1988年2月11日

私は悪魔に魂を売ってしまったのかもしれない。  
いや、もうとっくに売っていたのだろう。

そこで日記は終わっているようだ。念のため残りのページも一枚ずつめくってみたが、やはりすべて白紙で何も書かれていない。滯は丁寧な手つきで大学ノートを閉じると、小さく溜息を落とした。  
「お母さま、あまり幸せじゃなかったのかな」  
「さあ、ここにあることがすべてじゃないから」  
「それは、そうだけど……」

少なくとも滯たちのことで苦悩していたのは間違いない。美咲はいつも迷いなく前を見据えている女性だと思っていたが、この日記からは密かに悩み傷つく繊細な一面が垣間見えた。もしかすると、

本質は遥より滯に似ていたのかもしれない。決して強くはなかったのだ。

大地との結婚も、彼女が本心で望んだことなのかわからなくなってきた。

思えば、大地と出会い目をつけられた時点で、美咲に選択の余地などなかったのだろう。彼はどんな手を使っても本懐を遂げたはずだ。存外に残忍な本性、美咲への異常な執着——身をもって知った今なら、彼の言う「赤い糸」がどれほど危険なものだったかわかる。

「私は、自分で幸せを掴み取るからね」

そうつぶやくと、机の引き出しからピンクダイヤのペンダントを取り出した。しばらく置きっぱなしにしていたため目にするのも久しぶりだ。これからはずっと身につけておこうと思いながら首にかけ、その小さな石を両手で握り込む。

「滯、わかってる？」

「何が？」

滯はきょとんとして振り向いた。眉をひそめる彼を見て、そこはかたない不安が湧き上がる。

「さっき、じいさん婚姻届を出せって言ってたよね？」

「うん……でも、ひと月あるから大丈夫だと思うよ」

「滯は未成年だから、確か、親の署名がいるはずだよ」

「……えっ？」

当然ながら、親というのは戸籍上の父親である大地のことだ。彼がドイツに赴任したことは聞いているが、住所までは聞いておらず、電話番号すらもわからず、そもそもパスポートは悠人に預けられている——。

滯は硬直し、すうっと全身から血の気が引いていくのを感じた。

## 56. もう少しだけ

「おかえり、滯」

「……ただいま」

誠一に玄関口で出迎えられ、滯は気恥ずかしさを誤魔化すように肩をすくめる。小笠原へ出かける前まではここに居候していたのだから、ただいまと言ってもおかしくないだろうが、橘の家へ戻る予定になっているので少し躊躇いを感じていた。誠一にはまだその予定を話していない。

「勝手に行っちゃって本当にごめんね」

「大体のいきさつは武蔵から聞いたよ」

「え、そうなんだ」

船からかけた電話では、遥と一緒に小笠原へ行くということしか言わなかった。もっとも、いきさつといってもたいしたものではなく、遥が単身で小笠原へ向かったと聞いて慌てて追いかけた、というだけの話だ。知られて困るようなことは何もない。ただ、互いに反発しているはずの二人が連絡を取っていたことに驚いた。

「誠一から電話したの？」

「ん、まあな……上がって」

「うん。あ、これお土産」

靴を脱ごうとしたとき、持ってきていた手提げの紙袋を思い出して誠一に差し出す。中身は悠人に渡したものと同じだ。彼は驚いたようにまじまじと見つめながら受け取った。

「お土産がもらえるとは思わなかった」

「感激するほどのものじゃないけど」

「滯に買ってきてもらえただけで感激だよ」

本当に嬉しそうに言うので、滯としてはかえって申し訳ない気持ちになってきた。ここ数ヶ月で言い尽くせないほどの心配と迷惑を掛けたのに、これっぽっちでは何のお返しにもならない。せめてもう少し良いものを買ってくればよかった。軽く後悔したが、それを顔に出さないようにしながら部屋に上がった。

「コーヒーでいいか？」

「うん」

居間に入ると、誠一はそう尋ねて台所へ向かった。

滯はいつものようにクッションに座ろうとしたが、ふと寝室の扉が半開きになっていることに気づき、ふらりと吸い寄せられるように中を覗いてみる。そこは滯がいたときのままだ。ショッピングバッグなどが隅にまとめられ、衣服のいくつかはハンガーに吊されている。荷物は多いが、タクシーを使えばどうにか一人で持って帰れるだろう。

居間に戻ると、いつのまにか丸テーブルの上にケーキが二つ用意されていた。一つはフレジェというイチゴたっぷりのケーキで、もう一つはオペラというチョコレートケーキだ。夕食からさほど時間のたっていない今でもぺろりと平らげられそうなサイズで、四角くカットされた断面からも、上部の

繊細な飾り付けからも、コンビニなどではなくきちんとしたケーキ店のものであることが窺える。

「ケーキ、食べるだろう？」

台所でコーヒーを淹れる誠一が、クッションに座った滯に気付いて声を投げてきた。うん、とやわらかい笑みを浮かべて控えめに答えると、彼は手を止めずに微笑み返し、まもなく両手にマグカップを持って戻ってきた。湯気とともに立ちのぼるコーヒーの香ばしさが鼻をくすぐる。

「滯はどっち？」

「チョコの方」

迷いなく告げると、滯の前にオペラが差し出された。誠一の前にはフレジェが置いてある。好みは把握されているので、もともとそのつもりで買ってきたのだろう。互いに顔を見合わせてくすっと笑ったあと、いただきます、とそろって声を弾ませフォークを手を取った。

「ごめんね、荷物ずっと置きっぱなしで」

「橘の家に帰るつもりなのか？」

「うん……だから荷物を取りに来たの」

ケーキを食べながら、滯は何気ない素振りで話を切り出したが、誠一には察しがついていたのだろう。彼の方から言いたいことを尋ねてくれた。肯定の返事にも特に驚いた様子はなかったが、コーヒーを口に運びつつ何か考え込んでいる。

「……ずっといてもいいんだぞ？」

「でも、学校が始まっちゃうから」

ここからでも通えないことはないのだが、おそらく通学時間が倍以上になるだろうし、定期券用の通学証明書をもらうのも難しい。それに、悠人にも帰ってくるよう言いつけられている。家を出なければならぬ問題が解消した以上、いつまでも甘えているわけにはいかないのだ。

「あのね、お父さまは長期の海外勤務でドイツに行ったの」

「ああ、その話なら楠さんから聞いてるよ」

えっ、と滯は大きく目を見開いた。

「滯たちが小笠原へ向かった日の夜に、楠さんがうちに来たんだよ。橘美咲さんの死亡を公表することや、怪盗ファントムを引退させることや、橘大地さんが海外勤務になることを教えてくれた」

彼も部外者ではないのだから話すことに不思議はない。ただ、その話だけなら電話で済ませても良かったはずだ。わざわざ家を訪れたのは他に理由があったからでは、と考えてしまうのは深読みのしすぎだろうか。思いを馳せるような彼の表情も気に掛かる。滯はフォークを置き、眉をひそめて横からずいっと覗き込んだ。

「他に何か話した？」

「……ん？」

「私のこととか」

「どうだったかな」

誠一の視線は逃げていた。とぼけているとしか思えないその態度に、いっそう迫及を厳しくする。

「ねえ、何を話したの？」

「たいしたことじゃないよ」

「気になるんだけど」

拗ねるように口をとがらせてそう言い募ると、彼は苦笑を浮かべた。

「んー……ひとつは滯が受験生になるって話」

「あ、うん。今から理系に変更するから大変かも」

不意に現実を思い出し、自分の決めたことではあるが少し気が重くなる。しかし、受験くらいで弱音を吐いてはいられない。本当の目標はそのままずっと先にあるのだから。滯はあらためて気持ちを引き締めて、少しぬるくなったコーヒーに口をつけた。甘いチョコレートの味をかき消すように苦みが広がる。

「理系に変更って、急にどうしたんだ？」

「ん、お母さまの後を継ごうと思って」

「えっ……あの研究所で……？」

大きく目を見開いてそう言った誠一に、滯はこくりと頷いて答える。

「小笠原に行っていたときに決心したの。おじいさまには向いてないって言われたし、自分でもそうかなって気がするけど、それでもわたし頑張ってみたい。無関係じゃられないんだもん」

「……………」

彼は表情を凍りつかせて絶句していた。いくら何でもそこまで驚かなくていいのに、と滯は溜息をつき、両手で持っていたマグカップをことりとテーブルに戻す。

「誠一も向いてないって思ってるよね」

「あっ、いや、そうじゃないんだ」

誠一はあたふたと大慌てで否定したあと、眉を寄せて言葉を継ぐ。

「あんまり危ないことに首を突っ込んでほしくないんだよ」

「別に危なくないよ。お母さまたちみたいな非人道的な実験とかしないから。ちゃんと真っ当な方法で研究を進めていくの。石川さんも他のみんなもわかってくれているはずだし。あやまちなんで絶対に犯さないし犯させない」

滯は強気に言い切ったが、彼の表情は晴れなかった。

「でもなあ、あの研究所は公安の監視下に置かれるし……」

「じゃあ、お仕事でも誠一と繋がってられるね」

ニコッと笑いかけると、誠一は呆れたような照れたような顔になって額を押さえる。

「そんなのんきな話じゃないだろう」

「あれ？ 誠一は刑事に戻るんだっけ？」

すべての片がついたら警視庁に戻れるかもしれない、刑事に復活できるかもしれない――以前そんな話をしていたことを思い出す。仕事上での繋がりがなくなったとしても、その望みが叶うのであれば一向に構わない。しかし、彼の顔に浮かんでいたのは力のない苦笑だった。

「その話はなくなった」

「えっ……なんか、本当にごめん……」

「滯のせいじゃないから気にするな」

「うん……」

自責の念にさいなまれていた姿を見せれば、誠一にかえってつらい思いをさせてしまう。そのことがわかっているので素直に話をおさめるが、さすがに気にするなと言われても無理である。濡と関わったがゆえの結果であることは明白なのだ。それでも、せめて彼の前では前向きに振る舞おうと心に決める。

「そういえば、公安はこれからどうするの？ 変なこと考えていない？」

「橘会長から牽制されてるから下手なことにはできないよ。メルローズも正式に橘家の養女になるみたいだから、手を出すわけにはいかなくなる」

公安の一員として口外できないことはあると思うが、少なくとも話してくれたことに嘘はないだろう。良かった、と安堵の息をついてコーヒーを口にする。彼もつられるように小さな笑みを浮かべたが、すぐにその表情を硬くする。

「ただ、小笠原周辺の警戒は今後も継続するらしい。武蔵はああ言ってるけど、攻めてくる可能性もゼロじゃないからな。もちろんこちらから攻撃することはないはずだよ。相手の力量もわからないのに喧嘩を売るなんて、危険すぎるだろう？」

「うん……じゃあ、事後処理はもう終わったの？」

「俺の仕事としてはだいたい終わったかな。上層部の方はまだいろいろとあるみたいだけど、直接的な事後処理というより、今後の対策とかを話し合っているんだと思う。まあ、俺は呼ばれてないからよくわからないけど」

そう言うと、マグカップに手を伸ばしてコーヒーを飲んだ。

「濡の方はもう終わった？」

「ん……あと少し、かな？」

濡は動揺しつつも、それを悟られないよう努めて冷静に答える。

剛三との勝負については問題が片付くまで秘密にしておこうと決めている。どうすべきかはかなり悩んだ。彼も当事者なのだから本来なら話すべきだとは思いますが、こんなことを知ってしまえば黙っていないだろうし、話がこじれてややこしい事態になる可能性が高い。それに、自分の家の都合で起こったことなのだから、自分できちんと解決するのが筋だろうとも思う。

「二、三週間で終わらせるから」

「……終わらせる？」

自分自身に言い聞かせるように口にした言葉を聞き咎め、誠一は怪訝な顔をした。事情を知らない彼の前では少々まずい発言だったかもしれない。しかし、濡はあえて何も答えず甘えるように抱きついた。

「どうした、濡？」

誠一は少し驚いていたが、すぐに優しく気遣うような声音で尋ねてきた。背中に置かれた手のあたたかさが沁み入ってくる。濡は目を細め、ぎゅっと腕に力をこめながら囁くように声を落とす。

「今日はここに泊めて」

「俺はいいけど、楠さんには……」

「言わなくていいよ」

彼が口にした名前に苛立ちを覚え、ふて腐れぎみにそう言い返すと、頭上でくすっと笑う気配がした。

「遅めの反抗期？」

「そんなんじゃないもん」

とはいうものの、この態度では子供じみた反抗にしか見えないかもしれない。それならいっそそう思ってくれても構わないが、せめてこのくらいのがまは許してほしい――しかし、彼は充電していた携帯電話を手に取り、滯を抱き留めたまま片手で電話をかけ始めた。

「南野です」

相手は悠人だろう。誠一の背中にまわした手に力がこもる。

「はい、今こちらに來ています。それで、滯さんが歸りたくないと言っているのです、今晚はこちらで預かりたいのですが……………えっ、何を？ ……はぁ……………わかりました。あしたには必ず歸らせます……えっ？ ……はい、代わります」

トントン、と滯を抱いていた手がそのまま背中を叩く。

「楠さんが代わってって」

「……………」

少し腹立たしかったが無視することもできない。滯はしぶしぶ体を起こして携帯電話を受け取った。それを耳に当てながら、すがるように胸元の小さなピンクダイヤを握り込む。

「滯です」

『怒ってる？』

「……いえ」

悠人に対して怒っているわけではないが、今はまだ冷静に話せる心境ではない。声にも自然と不機嫌さがにじんでしまう。電話の向こうからは苦笑まじりの吐息が聞こえてきた。

『今日はそっちに泊まっていいから、あしたは帰っておいで』

「そのつもりです」

口をついたのは可愛げのない言葉。暫しの沈黙のあと、悠人が真面目な硬い声で切り出した。

『滯、これだけは言わせてほしい。あれは決して僕が仕組んだことじゃない。剛三さんからは事前に何も聞いていなかったし、あんなことを言い出すなんて思いもしなかった。正直いって僕も戸惑っている』

「わかっています」

剛三の独断であることは何となく感じ取っていた。悠人が悪いわけではない。軽率に勝負を受けてしまった自分が悪いのだ。もっとも、断ったとしてもそれで逃れられたとは限らない。剛三が本気になれば自分に勝ち目などないのだから。うっかりそんな悲観的なことを考えてしまい、少し涙がにじんだ。

『込み入った話は帰ってからしよう』

「はい……それじゃあ、切りますね」

『ああ、おやすみ』

「おやすみなさい」

滯は通話を切ると、下を向いたままぶっきらぼうに携帯電話を返した。涙はこぼれていないものの、目が潤んでいるので顔を上げられない。長い黒髪に隠されているので誠一からは見えないはずだが

、さすがに様子がおかしいことには気付かれたようだ。

「楠さんと何かあったのか？」

「そういうわけじゃないけど」

その曖昧な答えに納得せず、誠一はそろりと身を屈めて覗き込もうとする。

滯はあわてた。顔を見られまいとあせって彼の胸に飛び込んだが、勢いあまって押し倒してしまう。のしかかったままどうしようか必死に思案していると、不意にぐるりと体が反転し、気付けば真上からじっと彼に見下ろされていた。顔の両側に手をつかれ、体に跨がられ、逃げることもできない。

「……泣いてる？」

「泣いてないよ」

わずかに目が潤んでいたかもしれないが、あくまでそう言い切る。若干弱気になって涙ぐんだだけで、泣いてなどいないし、泣いている場合でもないのだから。

そんな態度を誠一がどう思ったのかはわからない。ただ、床についた彼の両手はいつしかグッと握り込まれていた。

「何かあるなら些細なことでも言ってくれ」

「うん……でも、もう少しだけ待ってて」

滯が薄く微笑むと、彼はもどかしげに顔をしかめた。声を絞り出すようにして訴える。

「俺は、滯の力になりたいんだよ」

「……じゃあ、私に力をくれる？」

この難題に毅然と立ち向かうだけの勇気を一言言えない言葉を胸に、滯は真剣なまなざしで彼の双眸を見据える。

それだけで何を望んでいるのか感じ取ってくれたのだろう。誠一はつらそうな表情のままわずかに目を細めると、ゆっくりと覆いかぶさるように顔を近づけ、熱い吐息を触れ合わせながらそっと口づける。

あたたかい――。

彼は問題を解決する力になりたいと望みながら、それでも滯の意思を尊重してくれた。だから、何がなんでも失敗するわけにはいかない。何があってもあきらめたりしない。滯は口づけに応じつつ、彼の背中に両手をまわしてしがみつくように力を込めた。

## 57. 証人

---

「こんなものかなあ」

滯は時折考え込みながら慎重にボールペンを走らせていたが、一段落すると深く息をついてそうひとりごちた。あらためてその紙に目を落とすと、不安と緊張とくすぐったさが縋い交ぜになり、現実味が遠のいていくように感じる。誠一と自分の名前が、婚姻届の夫と妻の欄に書かれているだなんて――。

今日から学校だが、始業式とホームルームだけなので午前中で終わりだった。

そのあと、どこかへ寄っていきこうという綾乃たちの誘いを断り、婚姻届の用紙をもらうために一人で役所へ行ってきた。制服のままだったので何か言われるのではないかと不安だったが、少し怪訝な目を向けられただけで、特に詮索されることなく事務的に二枚の用紙を出してくれた。一枚は予備ということらしい。

そのときに書き方の説明もしてくれた。遥の言ったとおり、やはり未成年者の婚姻には親の同意があるそうだ。父親か母親のどちらかで構わないということだが、滯の場合は、母親は死亡しているので父親から同意を得るしかない。あと、証人として二人の成年者に署名してもらう必要があるという。これは成年者であれば家族でも友人でも誰でもいいらしい。未成年の遥には頼めないが、いざとなれば誠一と同僚などいくらでも頼める人はいるだろう。

帰宅すると、はやる気持ちのまま着替えもせず学習機に向かい、もらってきた婚姻届に記入していた。現時点で書けるところはすべて書いたつもりである。誠一側には名前と生年月日しか入っていないが、あとで彼に承諾をもらったときに、署名捺印とともに記入してもらえばいいだろう。

複雑なところもちで手元の婚姻届を眺める。

しかしながら、いつまでも物思いに耽っているわけにはいかない。まだまだすべきことは山のようにあるのだ。その婚姻届を透明なクリアファイルに挟み、注意深く胸に抱えると、少しの緊張を覚えながら意を決して立ち上がった。

「何だ、おまえかよ」

いつ以来かわからないくらい久々に篤史の部屋を訪ねた滯は、仏頂面で扉を開いた彼を目にして、胸元に手を当ててほっと大きく安堵の息をついた。怪盗ファントムが完全に幕引きを終えた今となっては、彼がここに留まる理由はなく、もう出て行ってしまったのではないかと心配していたのだ。

「よかった、まだいたんだね」

「出て行って言われてないからな」

彼はぶっきらぼうにそう答えると、大きな欠伸を隠しもせず部屋の中へと戻っていった。扉は中途半端に開かれたままである。滯は部屋に入ることを許されたのだと解釈し、おじゃましますと声をひそめて言いながら、クリアファイルを後ろ手にそろりについていった。

「で、何の用だ？」

篤史はどっかりと身を投げ出すように肘掛け椅子に腰を下ろし、くるりと体ごと振り向いた。見るからに煩わしげなしかめ面をしているが、滯はそれでも怯むことなく冷静に尋ねかける。

「お父さまがドイツに行ったこと知ってる？」

「ああ、でも住所や電話番号は知らねえぞ」

「えっ？」

訊こうとしていたことを先に答えられてしまい、啞然とする。

篤史は呆れたようにわざとらしく溜息を落とした。

「おまえ、じいさんと賭けをしたんだってな」

「え、どうしてそんなことまで知ってるの？」

「遥から聞いた」

どうも最近の遥はいささか口が軽いような気がする。もちろんそのほとんどは滯を心配してのことだが、少なくともこれに関しては違うのではないかと思う。無関係の篤史に話す必要はなかったはずだ。もっとも口止めはしていなかったもので、彼を責めるわけにもいかないのだが。

篤史は椅子にもたれて背筋を伸ばし、頭の後ろで両手を組む。

「おまえ本当にどうしようもないバカだよな。あのじいさんが毘も仕掛けず、おまえに有利な条件を提示するわけねえだろ。会って一年足らずの俺でもわかることだぜ」

「……どうせバカだもん」

滯はふてくされぎみにぼそりとつぶやいた。しかし、そのことはすでに十分すぎるほど後悔しているので、今さら揶揄されたくらいで気持ちが揺らいだりはしない。

「だから頭のいい篤史に助けを求めているの」

「知らねえって言ってんだろ」

「うん、だからハッキングして調べてよ」

真っ先に彼を訪ねたのはそういう目論見があったからだ。橘のコンピュータのどこかには大地の連絡先が書かれているはずで、天才ハッカーならそれを調べるくらい造作もないだろう。滯がにっこり微笑むと、篤史は思いきり眉をひそめてじとりと睨み返した。

「断る」

「タダでとは言わないよ？ 少しは貯金もあるから」

「あのなあ」

彼は苛ついたようにそう言うと、前髪を掻き上げながら投げやりに溜息を落とした。

「はした金をもらったところで全然わりに合わねえよ。じいさんと悠人さんを敵に回したら俺の人生詰む。おまえに手を貸すだけならまだしも、橘にハッキングなんて重大な背信行為だからな」

「それ、は……」

深く考えていなかったが、言われてみればそういうことになるのかもしれない。だとすれば、いくら粘ったところで引き受けてはくれないだろう。恨めしげに口をとがらせて思案をめぐらせたあと、じゃあ、と彼の前にクリアファイルを掲げて見せる。中の紙切れが婚姻届であることも、滯と誠一の名が書いてあることも、この距離なら一目で認識できるはずだ。

「せめて証人になって？」

「それも断る」

滯はクリアファイルを掲げたままムツとして眉をひそめた。先ほど「手を貸すならまだしも」と言っていたはずなのに、証人になることすら断るなんて納得がいかない。その疑問に答えるように、篤史は椅子の背もたれに身を預けたまま淡々と言葉を継ぐ。

「俺はおまえより悠人さんの味方なんだよ。こんなバカのどこがいいのかわからねえけど、悠人さんは傍目にわかるくらいベタ惚れだもんな。じいさんの下で長年苦勞してきたみたいだし、このくらいの役得がなきゃ可哀想だろ」

「……でも、他の人を好きなまま仕方なくだなんて、かえって可哀想じゃない？」

論理的に反論したつもりだったが、彼は鼻先でせせら笑った。

「おまえ適応力だけは異様に高いみたいだし、そうなったらなったで楽しくやっていけ。見ず知らずの誘拐犯と一ヶ月もしないうちに仲良くなってヤっちまうくらいだからな」

容赦のない物言いに、滯はカァッと顔を火照らせて狼狽する。

「それは、その……誰でもってわけじゃ……」

「武蔵さんは良くて、悠人さんはダメだっていうのかよ」

「別に、師匠がダメとかそういうことじゃなくて……」

家族同然だからそういう気持ちになれない、と言いかけたが、墓穴を掘ることになりそうで口をつぐむ。知らなかったとはいえ武蔵は実の父親だったのだ。常識的に考えればこっちの方がよほど問題である。そのあたりを蒸し返されると非常に面倒くさい。

「もういいよ。証人なんて探せばいくらでもいるし」

「そいつはちょっと考えが甘いんじゃないか？」

「えっ？」

きょとんとして聞き返した滯に、篤史は冷やかな視線を送る。

「未成年が保護者抜きでそんなことを頼みにくるなんて、普通に考えて怪しすぎるだろ。しかも、おまえは橘財閥会長の孫娘だ。下手すれば橘財閥会長を敵に回す事態になりかねない。誰だって二の足を踏む」

「敵に回すだなんて、いくら何でも大袈裟すぎるよ」

「少なくとも世間ではそういうイメージってことだ」

「それは、そうかもしれないけど……」

「実際、橘財閥の後継に関わる問題なんだろ？」

今さらながら事態の大きさを認識し、うっすらと血の気が引いていくのを感じる。

しかし、現実を突きつけた彼の方はといえば、話は終わったとばかりに椅子ごと背を向け、ノートパソコンを開いてキーボードを叩き始めた。その若干丸まった背中からは無言の拒絶を感じる。

「……邪魔してごめん」

滯はそれだけ言い置き、なるべく足音を立てないように部屋をあとにした。ドアノブに手を掛けて静かに扉を閉めると、そのまま奥歯を噛みしめてうなだれる。しかし、この場で少しばかり考えてみたところで、答えなど簡単に見つかるはずもなかった。

「何だ、悲愴な顔をしておって。降参か？」

その日の夜、漣は剛三の帰宅を待って彼の書斎を訪ねた。そろそろ来ると予想していたのだろう。待ち構えていた彼の顔はいかにも意味ありげにニヤついており、挑発したその声はたいそう愉しげに浮かれていた。しかし、漣には降参するつもりなど微塵もない。

「いえ……その、お父さまの住所を教えてくださいませんか？」

「残念ながら、こちらも負けるわけにはいかんのでな」

剛三はニッと口の端を上げる。

漣としても教えてもらえるなどとは思っていなかった。これが彼の仕掛けた罠であればなおさらである。食い下がるより他の方法を探した方が賢明だろう。そう判断すると、クリアファイルから婚姻届を取り出して彼の前に置き、無駄だと思いつつもうひとつの懸案事項について頼んでみる。

「では、証人の署名だけでもいただけますか？」

「おまえは聡いのか馬鹿なのか測りかねるな」

剛三はどこか呆れたような口調でそう言いながら、執務机に置かれた婚姻届に目を落とした。無記入の証人欄だけでなく、記入を終えた他の項目も一通りざっと確認して眉を寄せる。

「南野君にはまだ話しておらんのか」

「お父さまの同意をいただいたら話します」

漣としてはもう決めたことだった。大地の同意だけは自分ひとりで取り付けてこようと。

しかし、剛三はどういうわけか渋い顔でじっと考え込んでいた。

「まあ良からう」

やがてふっきったようにそう言うと、口の端を上げる。

「証人くらいにはなってやる」

「えっ?! 本当ですか……?」

あまりの急転直下に警戒心が湧き上がる。もしかするとこれも何かの罠かもしれない、と考えてしまうのは、今までの経緯を考えれば当然だろう。そもそも彼の目的は漣と悠人を結婚させることなのだ。その実現を阻むようなことを彼自らするはずがない。そう思ったのだが――。

「勝負を面白くしたいのでな」

「はあ……」

語られた理由は完全に理解を超えたものだった。それが本音かどうかはわからないが、剛三らしいと心のどこかで納得もしていた。彼は何かにつけて真剣勝負を楽しむ傾向があるのだ。それも、拮抗した勝負であればあるほど燃えるらしい。

ぼんやり考えているうちに、剛三は証人欄に必要事項を書いて捺印まで済ませていた。それをすつと漣に差し出す。

「あ……ありがとうございますっ！」

「無駄になるかもしれんがな」

そのとき彼が見せた含み笑いにゾクリとし、漣は婚姻届を受け取るやいなや食い入るように確認する。氏名、生年月日、住所、本籍、捺印――どれもすべて正しいように見える。考えてみれば、彼は意図的に間違ふなどという卑小なまねをする人間ではない。ひとり頷いてクリアファイルごと婚姻届を胸に抱えると、あらためて一礼した。

「そろそろ濡のところへ行こうと思ってたんだよ」

剛三の書斎を退いたその足で、濡はすぐ近くにある悠人の部屋を訪ねていった。彼と顔を合わせることに少なからぬ緊張を感じていたが、いつもと変わらない笑顔で出迎えてくれてほっとする。部屋に足を踏み入れて後ろ手で扉を閉めると、胸にクリアファイルを抱えたままペコリと頭を下げた。

「先日は失礼な態度を取ってすみませんでした」

「仕方ないよ。あんなことがあったんだから」

あんなこと、というのは剛三から突如提示された悠人との結婚話の一件だ。

もちろんそれを現実のものにするつもりは微塵もない。だが、篤史に言われたことを我知らず意識しているのだろう。ベッドを目にするやいなや、ここで押し倒されかけたことを思い出し、さらにうっかり続きまで少し想像してしまい、慌ててその思考を振り払おうとぶるぶると首を振る。顔はどうしようもないほど熱を帯びているのがわかった。

そんな濡を見て、悠人はくすっと笑う。

「何もしないから座って」

「あっ……はい……」

思考を見透かされてしまったようできまりが悪い。濡はますます赤面しつつ、示されたベッドにちょこんと腰掛けて、気持ちを落ち着けるようにふうと息を吐いた。その正面で悠人も椅子をこちらに向けて座る。二人の膝は触れ合いそうなくらい近かった。

「それ、婚姻届？」

「あ、はい」

濡はクリアファイルごと悠人に手渡した。彼はそれに目を落とすと、ふいと訝るように顔を曇らせる。

「剛三さん、証人になったの？」

「勝負を面白くしたいみたいです」

「なるほどね」

二十年以上前から剛三に仕えてきたため、彼の性格は濡よりもわかっているのだろう。それだけで得心したのか呆れたように溜息を落とした。しかし、唐突に小さな笑みを浮かべて顔を上げると、片手でクリアファイルを掲げて口を開く。

「僕も証人になろうか？」

「ええっ?!」

驚きのあまり声が裏返った。彼は剛三が勝利することを望んでいるはずなのに、どうして濡の味方をしてくれるのだろう。怪訝に思いながら上目遣いでじっと見つめ、言葉を継ぐ。

「……いいんですか？」

「僕からの応援の気持ちだ」

彼の返答を聞いても釈然としなかった。眉を寄せ、思考をめぐらせながら小首を傾げる。

「もしかして、私と結婚するのが嫌になりました？」

「まさか。出来るものなら今すぐにでもしたいよ」

悠人は優しい声音でそう返したあと、ふっと遠い目をした。

「諦めていたつもりだったんだけどね。剛三さんが思いもしない賭けを持ち出したとき、困惑しながらも、心の奥底がどこか激しく沸き立つのを感じた。まだ諦めきれていないんだと思い知らされたよ。それでも僕は滯の気持ちを尊重したい。そういう考えになったのは、南野さんなら滯を大事にしてくれると確信したからだ」

「うん……」

自分たちの仲を認めてくれたこともそうだが、誠一を認めてくれたことが何よりも嬉しい。

「まあ、僕も負けてないと思ってるけどね」

冗談めかした口調で付け加えられたその言葉は、おそらく彼の本心だろう。両親よりも、誠一よりも、長い間そばにいて慈しんでくれたのだから、彼がそう自負するのも当然のことといえる。そして実際に負けてはいないと思う。滯は笑みを浮かべ、黒髪をさらりと揺らしながら大きく頷いてみせた。

「確認してね」

「はい」

もうひとつの証人欄に記入した婚姻届を手渡され、滯は言われるまま目を落として確認する。本籍地は知らないで合っているかわからないが、他の項目はすべて正しく記入されているようだ。捺印も問題ない。確認を終えて慎重な手つきでクリアファイルに挟むと、その重みを噛みしめながら、折り曲がらないよう柔らかく胸に抱えてお辞儀をする。

「ありがとうございました。大切な二人に証人になってもらえてすごく嬉しいです」

剛三はまだ完全に認めてくれたわけではないが、それなりに誠一のことを気に入っているのだろう。そうでなければ彼と結婚するかもしれない賭けを提案するはずはないし、ましてや勝負を面白くするためとはいえ自ら証人になるなどありえない。少なくとも滯はそう解釈していた。

「それで、あと二つほどお願いがあるんですけど……」

「これだよ」

いつのまに用意していたのか、悠人はパスポートと四つ折りにした紙を差し出した。

滯はドキリとし、緊張が高まるのを感じながらおずおずと受け取る。パスポートは思ったとおり滯のものだった。紙の方には外国の地図と住所が印刷されている。それが何かはすぐに察しがついた。滯としてはありがたいが、さすがに剛三を裏切る行為ではないかと心配になる。

「あの、いいんですか？」

「構わないよ。別に止められてはいないからね。もしこれで追放するというならすればいいさ。まあ、いま僕が辞めたら困るのは剛三さんの方だけど」

いつも従順な彼がこんな強気な発言をするとは思いつかなかった。もし、この裏切りが原因で二人の関係が壊れてしまったらいたたまれない。不安になりつつも、ありがとうございますと礼を述べてクリアファイルに挟み、肩から黒髪が流れ落ちるのを感じながら頭を下げた。

「一人で行くつもり？」

「……はい」

滯が顔を上げると、悠人は怖いくらいの真顔でじっと目を見つめてきた。その迫力にたじろいで思わず身を仰げ反らせるが、それでも彼の表情がやわらぐことはなかった。

「なら僕も一緒に行かせてもらう」

「えっ、いえ、一人で大丈夫です」

肩をすくめて左手をふるふると横に振る。心配してくれる気持ちはありがたいのだが、さすがにそこまで甘えるわけにはいかない。しかし、彼の方も引き下がる気はまったくないらしく、眉を寄せていっそう表情をけわしくした。

「濡、大地に何をされたか忘れたわけじゃないよね」

「あのときは、普通の状態じゃなかったから……」

濡の声は消え入るように小さくなった。

あの出来事が脳裏によみがえると、身体はカッと燃えるように熱くなり、心はズンと鉛のように重くなる。悲しくてつらくて泣きたくなる。それでもどうにか気合いを入れ直して前を向くと、しっかりと言葉を継ぐ。

「でも、お父さまがどういうつもりでも、今度は絶対に何も起こさせません」

「体術は大地の方がはるかに上だ。濡が万全の状態でも組み敷くことはできる」

その残酷な反論に、濡はベッドに腰掛けたままゾクリと背筋を震わせる。指先も徐々に冷たくなっていくのを感じた。クリアファイルを抱えた手をぎゅっと握りしめ、合わせた膝に力を込め、唇を真一文字に引きむすんでうつむいていく。

「あいつは行動も思考も予測不能だ。反省している様子はあまりなかったし、濡を一人で行かせて何か起こったら、いくら後悔してもしきれない。君を二度とあんな目に遭わせるわけにはいかないし、僕も二度とあんな無力感を味わいたくないんだよ。南野さんにも今度こそ顔向けできなくなる」

悠人は淡々とした口調で言い連ねると、一呼吸おいて続ける。

「もし僕を頼ることに抵抗があるのなら、せめて南野さんと協力してくれないか。彼もそれを望むはずだ。そもそも彼の将来にも関わることなんだから、彼に内緒で事を進めるべきではないだろう」

「そう、ですね……」

濡はぎこちなく相槌を打った。彼の提案はとても理性的であり、論理的であり、正論だといえる。誠一に話したら面倒なことになりそうだと思ったが、協力してもらうのなら上手くいくかもしれない。それでもやはり意志を曲げる気にはなれなかった。

「師匠の言うことはもっともだと思います。でも、これだけはどうしても一人でやり遂げたいの。師匠にも誠一にも申し訳ないとは思いますが、正しいかどうかじゃなくて私の我が儘なんです。いつまでも守られるだけの自分でいたくない。結果がどうであれ、師匠や誠一に手助けされたら一生後悔すると思います」

結局、自分の本心はこれだったのだ。

言葉にすることでようやくはっきりと自覚した濡が、迷いのない視線を送ると、悠人は苦渋に満ちた面持ちでゆっくりと腕を組んだ。考えているということは少しは脈があるのだろう。濡はここぞとばかりに前のめりになって畳みかける。

「お父さまには警戒して距離を置きます」

「だけど、濡はすぐに騙されるからな」

「私にだって学習能力くらいあります」

「そのセリフは何回か聞いたけどね」

「うっ……迂闊な行動もとりません！」

クリアファイルを抱きしめて力説する澁を、悠人は腕を組んだまま疑わしげなまなざしで見つめる。だが、澁も負けじと強いまなざしで見つめ返した。互いの視線がまっすぐにぶつかり合う。しばらく意地を張り合うようにそうしていたが、ふと悠人が椅子から立ち上がった。

「師匠？」

澁がきょとんと見上げて不思議そうに瞬きをすると、彼はじっと見下ろしながら身を屈め、澁の交差していた両手首を掴み上げつつ押し倒していく。抱えていたクリアファイルが足元に滑り落ちると同時に、背中からふわりと布団に沈められ、くせのない黒髪がさらりと白いシーツに広がった。間髪入れず、彼がギシリとベッドを軋ませながら覆い被さってくる。

確か、前にも同じようなことが――。

まさかあのときのように襲おうとしているのだろうか。どうして？ 誠一との結婚を応援してくれているはずなのに。何がなんだかかわからず混乱している間にも、彼は動きを止めることなく上体を倒してきた。我にかえり、大慌てで掴まれた手首を引くがビクともしない。

いつのまにかすぐ近くまで顔が迫ってきていた。とっさに頭を振って彼の額に打ちつけようとするが、身を引いて避けられてしまう。そのとき手首を押さえつけていた力が緩むのを感じ、素早く引き抜くと、今度は彼の上体を全力で横薙ぎにしようとする。だが、それもあっけなく避けられて空振りに終わった。

それでも反撃は無駄ではなかった。

彼の上体が離れた隙にベッドから転がり降り、その勢いで一回転して立ち上がると、彼の出方を警戒しながら表情を硬くして身構える。体の自由を奪われていた危機的状況からは脱することができた――が、婚姻届の入ったクリアファイルは彼の足元に転がっている。

悠人は無表情のままそれを拾い上げると、澁に視線を流した。

「反応が遅いな。僕が本気だったら逃げられなかったよ」

「師匠のことは警戒してませんでしたから……そうじゃなければ……」

澁はそのときようやく自分が試されていたことに気が付いた。そして、彼を説得するだけの結果が出せなかったことを思い知った。しかし、警戒さえしていれば初めから近づけさせはしなかったのだ。漆黒の瞳に強い気持ちをこめて訴えかけると、彼はまたしても難しい顔になって考え込んだ。暫しの沈黙のあと、溜息をつきながら諦めたような声を落とす。

「まあいいだろう」

「じゃあ……！」

パッと顔を明るくした澁に、悠人は婚姻届の入ったクリアファイルを差し出しながら言い添える。

「ただし、護身術の特訓だけはつけさせてくれ。これは僕の我が儘だ」

「はい、よろしくお願いします！」

澁は満面の笑みでそう答えると、弾むように駆けていきクリアファイルを受け取ろうとする。が、手を伸ばした瞬間にひょいと軽くかわされ、片腕で体ごと抱き寄せられてしまう。彼の胸元に顔を埋めたままぱちくりと瞬きをし、そろりと見上げて小首を傾げた。

「簡単すぎて本当に心配になるな……」

「師匠だから警戒してないだけです」

滯は口をとがらせて言い返すが、悠人は呆れたように大きく眉をしかめて溜息を落とす。それでも、すぐに滯を解放してクリアファイルを手渡してくれた。中を確認すると、婚姻届もパスポートも住所を書いた紙もきちんと入っている。ほっと安堵の息をついて大切に胸に抱きかかえた。

「ありがとうございます」

「いつ行くの？」

「できれば今週末にでも行こうかなって」

「じゃあ、それまでは毎日特訓するから」

「はいっ！」

威勢のいい返事とともに一礼し、黒髪をさらりと舞わせながら悠人の部屋をあとにする。

これで残るはドイツにいる大地の署名だけだ。一時は絶望的な気分を味わったりもしたが、思ったより順調に事が進み、心は羽根がついたように浮き立っていた。もちろん、喜ぶにはまだ早いということも頭では理解していた一つもりだった。

## 58. 最後の役割

---

この扉の向こうに、お父さまがいる――。

緊張で全身が汗ばむのを感じつつ、滯は飾り気のない重そうな扉の前に立ち尽くしていた。右手は胸元で軽く握られている。呼び鈴を押さなければ何も始まらないとわかっていながら、なかなかそこに手を伸ばせずに時間だけが過ぎていった。

滯はドイツに住んでいる大地に会うべく、一人で彼の自宅前まで来ていた。

ターミナル駅から最寄り駅までは電車で十数分、そこからは徒歩五分ほどで、綿密に下調べをしてきたおかげもあり、ドイツ語のわからない滯でも無事に着くことができた。文句を言いつつも事前準備に付き合ってくれた遥には、いくら感謝してもしたりない。

彼の住まいは街中にあるアパートの一室である。外観からするとそう新しくはなさそうだが、大きく重厚な作りで、まわりの建物と比べて存在感が際立っていた。あたりにはそこその人通りも車通りもあるが、決してうるさくはなく、のんびりと落ち着いているように感じられる。ヨーロッパの伝統的な街並みという印象だ。

訪問予定のおおまかな日時はあらかじめ電話で伝えてあり、自宅にいてもらうことになっている。エントランス外側に設置されているプレートを覗き込み、彼の名札が貼られた呼び鈴を押すと、返事はなかったがピーッと音がしてエントランスの鍵が開いた。彼が遠隔操作で開けてくれたということだろう。

駆け足でエントランスに入り、見たこともないレトロなエレベータに乗り込んで六階で降りる。

彼の部屋は突き当たりであった。

滯がさきほどから立ち尽くしているのはここである。心の準備は十二分にしてきたつもりだったが、いざ対面となると怖じ気づき、情けなくも扉の前で凍りついてしまったのだ。しかし、このままでは不審者として通報されかねない。ポストンバッグのショルダーベルトをつかむ手に力を込め、グッと奥歯を噛みしめると、震えるもう片方の手でそろりと呼び鈴を押した。

「よく来てくれたね」

拍子抜けするくらい普段と変わらない態度で、まるで何事もなかったかのように、大地は愛想よくにこやかに出迎えてくれた。滯は少なからぬ当惑と混乱を感じながらも、どうにか小さく会釈をし、彼に促されるまま中に足を進めていく。

アパートといっても、一人で住むには贅沢なくらいの間取りだった。

滯が通されたのは書斎のようだ。剛三のそれと比べれば半分にも満たない広さであるが、執務機のほかに応接用のソファとローテーブルも置かれており、仕事関係の客人くらいならもてなせるようになっていた。ただ、天井も壁も床も全面まぶしいくらい真っ白なため、書斎としてはいささか落ち着きが足りないように感じる。

「座って」

「いえ、ここでいいです」

大地に奥の応接用ソファを勧められたが、入ってすぐに足を止め、若干こわばった面持ちで首を横に振った。その様子を見て何かを悟ったのだろう。彼はしつこく勧めることなく執務机へ足を進めた。そして大きな革張りの椅子にゆったりと腰を下ろすと、執務机に組み合わせた手を置き、意味ありげな薄い微笑を浮かべて滯を見つめる。

「滯……久しぶりだね」

「お久しぶりです」

「来てくれて嬉しいよ」

彼の声は優しかったが、その中にどことなく甘さのようなものを感じて身構えた。頭の中にはさまざまな護身術の訓練がよみがえる。あれだけ悠人に教えてもらったのだから大丈夫と言い聞かせて、気持ちを落ち着かせる。今日はデニムのパンツを穿いているので、普段の短いスカートよりも防御力が高い。それに、扉付近にいればすぐに逃げられるはずだ。

「緊張しているの？」

「……少し」

滯はいまだにボストンバッグを肩に掛けたまま突っ立っていた。あからさまな警戒の様子に気分を害しただろうか。せめて荷物くらいは下ろした方がいいかもしれない。そう思って、ショルダーベルトを持つ手に力を込めたとき――。

「じゃあ、とりあえず寝室へ行こうか。ベッドで緊張をほぐしてあげるよ」

そんなことを言って淫靡な笑みを浮かべる大地を見て、滯はゾクリと背筋を震わせた。

「なっ……なに考えてるんですか！」

「滯だって先日のことが忘れられないんじゃない？」

「はあっ？ バカなこと言わないでくださいっ！！」

あまりの身勝手な言いようにカッと頭に血がのぼり、思わず語気が荒くなる。とても父親に対する物言いではない。しかし、彼は少しも動じることなく静かに笑みを深くした。

「でもさ、随分と気持ちよさそうにしてたよね」

「……お父さまの勝手な思い込みです」

「へえ、本当に少しも気持ちよくなかった？ あんなにひっきりなしに甘く淫らな声を上げて、ぐちょぐちょに濡らしてひくつかせて、僕の背中に爪を立てるほど強くしがみついて、しまいには震えながら気をやっていたっていうのに？」

具体的な指摘に、滯はゆでだこのように顔を火照らせて狼狽した。甘く淫らなという部分は否定したいが、それ以外についてはくやしいが身に覚えがある。言い返すことができず微妙な面持ちで眉を寄せていると、彼はにこやかに追い込みをかけてきた。

「僕には感じているようにしか見えなかったけどね」

「……でも、私はそんなこと望んでいなかった」

それが滯にできる精一杯の反論である。潤んだ目で恨みがましく睨むが、彼はとぼけるように小首を傾げた。

「そうだっけ？」

「顔をぶって好き放題したんじゃないですか」

「ああ、そのことを怒っていたわけか」

ようやく納得したとばかりに頷きながら答えると、再びにっこりと微笑む。

「顔を叩いたことは申し訳ないと思っているよ。ごめんね。滯がなかなか素直になってくれないから、少しばかり焦ってしまったんだ。あのときはちょっと精神的に余裕がなくてね。数日間ベッドで過ごして体力も落ちていたし」

あまり反省していない様子だった、と悠人は言っていたが、あまりどころか全く反省していない。むしろ合意の上だとでも思っていそうな感じである。滯の半分を美咲と認識しているからだろうか。そんなことは美咲も望んでいないはずなのに。

「……お母さまがあの世界で悲しんでると思います」

「へえ、滯は死後の世界なんて信じてるんだ？」

「えっ、あ……その、信じてるとかじゃなくて……」

思わぬ切り返しにしどろもどろになる。死後の世界について論じたかったわけではないし、そもそも存在するかどうかなど深く考えたこともない。ただ、やはり漠然と信じたい気持ちはあったのかもしれない。今もどこかで美咲が自分たちを見守ってくれていると。しかし――。

「死んだらすべて終わりだよ。無に帰すだけさ」

大地は醒めた声で言う。

「死後の世界も、魂も、生まれ変わりも、弱い人間の心がつくりだした都合のいい現実逃避にすぎない。僕に残されたのは美咲がいないという現実だけなんだ。それでも僕は生きている。美咲のいない世界で生きていかなければならない」

ゆらりと顔が上がり、仄暗い荒んだ目が滯を捉える。

「いっそ僕も後を追えばよかった？」

「そんなこと思っていません！ 私はただ……お母さまの……」

言いたいことはあるのにうまく言葉が出てこない。頭の中がとっちらかってまとまらない。焦れば焦るほど思考が真っ白になっていく。言いよどんだまま何も反応できずにうつむいていると、彼はあきれたように溜息を落とした。

「滯、君は用事があって来たんだろう？」

「あっ、そうです。えーっと……」

危うく本来の目的を忘れるところだった。今はそちらの方が大事だ。

いまだ肩に掛けたままだったボストンバッグを床に下ろし、ファスナーを開いてクリアファイルを探すと、挟んであった婚姻届を慎重な手つきで取り出した。彼のいる執務机の前まで足を進めてそれを差し出し、もとの位置に戻る。もちろん手をつかまれたりしないよう細心の注意を払っていた。

大地は無表情で頬杖をつきながら、その婚姻届に目を落とす。

「へえ、結婚するの？」

「はい、だからお父さまに署名捺印をいただくためにここまで来ました。未成年だと親の同意がいるそうです。その他の欄に『この婚姻に同意します』と書いて、住所、氏名、生年月日、捺印をいただきたいのですが、お願いできますか？」

滯が丁寧に頼んでいる間も、彼は仏頂面でじっと婚姻届を見つめていた。そして、おもむろに人差し指でトンと示して言う。

「夫の名前が気に入らないね。これが楠悠人なら喜んでサインするんだけど」

まただ――滯はゆっくりと奥歯を噛みしめる。橘財閥の将来を考えている剛三は仕方ないかもしれないが、篤史も、大地も、みんなして悠人と結婚させたがることにうんざりだった。悠人本人は誠一との結婚を応援してくれているというのに。

「いまさら父親ぶらないでください」

「悠人の親友としての発言さ」

大地は軽い調子で答え、婚姻届を机の脇に寄せながら話を続ける。

「長年、恋心を隠しながら誠実に滯の面倒を見ていたのに、その間にへなちょこ刑事にかっさらわれたんだぞ。あまりにも不憫だろう。真面目な悠人を差し置いて、高校生と淫行するようなヤツが幸せになるのは許せないね」

正論のように聞こえるが、少なくとも滯と淫行した大地に言う資格はないと思う。彼の場合は合意もなかったのだからなお悪い。だが、そのことを論じればさきほどの二の舞になってしまう。じとりと冷たく睨みながら、挑発の言葉に踊らされないよう用心して言い返す。

「お父さまの意見は聞いていません」

「でも、同意の署名がほしいんでしょ？」

「署名捺印だけしてくれればいいんです」

これまで見せたことのない反抗的な態度に、大地は少し驚いているようだった。しかし、頬杖を外してゆったり両手を組み合わせると、わずかに顎を引いてニッと口の端を上げる。

「随分と勝手なことを言うね」

「お父さまは父親じゃないですから」

「でも戸籍上は実の父親だからね」

「誰のせいだと思ってるんですか」

「まあ、主に僕かな」

微塵も責任を感じていないかのように、軽く笑いながら答える。

それでも滯にはひたすら訴え続けるしかなかった。

「わかってるんだったら責任を果たしてください。戸籍上の父親として署名捺印してくれてもいいでしょう？ もうこれ以上は父親としての役割を求めませんから、最後に、最後だけでも私の幸せのために手を貸してください」

その声に切実な思いがにじむ。

大地は身じろぎもせず真正面から滯の双眸を見つめてきた。さきほどまでとは別人のような真剣な顔をしている。息が詰まりそうな沈黙の中、滯は固唾をのみ、彼がこれから出すであろう結論を待った。

「……いいだろう」

「本当ですか？！」

「ただし一つ条件がある」

そのひとことで喜びは警戒心が変わった。顎を引いて正面の彼を見据える。

「……何でしょう？」

「一回だけ悠人とセックスしてやってくれ」

そういう下劣な類のことだろうと覚悟はしていたつもりだが、実際に面と向かって言われるとやはり衝撃を受けてしまう。暫しの沈黙のあと、やっとのことでごくりと唾を飲み込んで口を開く。

「そんなの、師匠は望んでいないと思います」

「君は案外悠人のことをわかってないんだな」

大地の声は心底楽しそうに弾んでいた。

「君には物わかりのいい保護者の顔しか見せてないかもしれないけど、あいつの心の中はドロドロだよ。それはもうヘドロみたいだね。何十年も溜め込んできた黒いものが奥底に鬱積しているのさ。濡に格好つけようと証人を引き受けたんだらうけど、据え膳まで我慢できるとは思えない」

「……………」

彼の言うことをすべて鵜呑みにしたわけではないが、実際にその片鱗らしき部分は何度か目撃したことがある。無理やりキスしてきたときも様子がおかしかった。そして、今回の大地と同じような取引を持ちかけてきたこともあった。もし、そういう気持ちはまだ少しでもあるのだとしたら――。

「悠人が僕のお膳立てを断ると思うなら、条件を飲んだらどうだ？」

「えっ？」

「いまここで濡がその条件を飲むと約束してくれれば、僕は婚姻届に同意のサインをする。その後、悠人が断ってきたとしてもサインは撤回しない。君は悠人に抱かれることなく、あのさえないへなちょこ刑事と結婚できるってわけだ」

濡はこぼれそうなほど大きく目を見開いて息を詰めた。ゆっくりとうつむき、ほんのすこし眉を寄せたままじっと思案をめぐらせる。正直に言えば心が揺れた。それでも――決意を固めると、迷いなくはっきりと首を横に振ってみせる。

「へえ、悠人を信じてないんだな」

「そうじゃなくて……」

大地の挑発にも落ち着きを失うことはなかった。小さく息をついて言葉を継ぐ。

「この条件を飲むこと自体が裏切りになると思うから」

「そんなの馬鹿正直に言わなければわからないだろう」

「わかるわからないの問題じゃありません」

誠一をもう二度と裏切らないと決めた。誠一に対して誠実でいようと決めた。だから、そこは決して曲げてはならないところなのだ。この条件はまぎれもなく誠一への裏切りである。そして何より悠人が断るという確証がない以上、どうあっても絶対に受け入れるわけにはいかない。

「そう、じゃあ彼への誠意を貫き通して、悠人と結婚すればいい」

「えっ……それ、どうして……」

一ヶ月以内に誠一と結婚できなければ、悠人と結婚する――剛三とそういう賭けをしたことは一言も話していない。しかし、彼の言い草からすると知っているとはしか思えない。困惑していると、大地は口もとを斜めにしてニヤリとする。

「誰に教えてもらったんだったかな？ 遥だったか、志賀君だったか、悠人だったか」

若干芝居がかった口調で、とぼけたように知人の名前を言い連ねていく。記憶力のいい彼がそのくらい覚えていないはずはない。おそらく濡を追いつめるために言っているのだ。そして目論見どおり

濡の心がさざめいたところに、さらなる追い打ちをかける。

「君の味方はいない。みんな南野君ではなく悠人との結婚を望んでいる」

濡はキュッと唇を噛んだ。

そのこと自体が賭けに影響を及ぼすわけではないと理解はしている。ただ無性に寂しかった。自分の大切な人たちに、まわりのみんなに、心から祝福されて好きな人と結婚したかった。漠然とそういう幸せな未来を思い描いていた。なのに――。

「これはもういらないね」

その声と同時にビリビリと裂けるような音が聞こえ、ハッと視線を上げると、大地は半分に折り畳まれた紙を手で破いていた。まさか、それって――あまりのことに声もなく青ざめているうちに、彼は破いたそれを軽くひねって自分の足元に落とす。ことん、と金属製のゴミ箱に落ちたような音がした。

「なっ……何するのっ?!」

「だって僕のサインがなければただの紙切れだよ。必要ないでしょ？僕は条件を飲まなければサインしないからね。それとも、大切な彼を裏切ってでも条件を飲むつもりだった？」

大地は眉ひとつ動かさず飄々と言う。

濡は手のひらに爪が食い込むほど強くこぶしを握りながら、奥歯を食いしばった。頭に血がのぼりすぎてどうすればいいのか何も考えられない。堪えきれずにうっと小さな呻きをもらし、目を熱く潤ませる。

どんな思いで、ここまで――。

濡れた目元を無造作にぬぐって大地を睨めつけると、黒髪をなびかせながら駆けていき、その足元に置かれていたゴミ箱をあさろうとする。が、触れる寸前に手首をつかまれて押しのけられた。濡もむきになって押し返そうとするものの、彼の力には敵わず、両手首をつかまれたまま一歩二歩と後退してしまう。

「ひゃっ……！」

ふいに足元が混乱してバランスを崩し、後ろに倒れていく。

身体が落ちるすでのところで大地に抱き止められたが、そのまま冷たい床に横たえられてしまう。うろたえる濡をまたいで膝立ちになった彼は、真上から覆いかぶさるように、顔の両側に手をつけてじっと覗き込んできた。

「もう君に勝ち目はないんだよ」

まるで最後通告だ。

すぐ近くに迫っていた大地の顔が大きくぼやける。そんな濡を目にして彼はふっと鼻から息を抜き、長い黒髪を片手でもてあそびながら、あらわになった首筋に顔をうずめてきた。熱く濡れた吐息がかかる。

「子供のころの美咲の匂いがする。懐かしいな……悠人にやるのは惜しくなってきた」

静かながら興奮を隠しきれていないその口調に、濡はゾクリと背筋を震わせた。首にかかる吐息はますます熱を増し、濡れた唇で耳を食まれ、ついには指先が身体をなぞり始める。白い天井を見つめていた目から、必死に堪えていた涙がつうっと流れ落ちた。

「うっ……こ……こんなことになるなら……私も、お母さまと一緒に死んじゃえばよかった……っ！」

」

堰を切ったように嗚咽しながら、激情を吐露する。

その瞬間、大地が首筋に顔をうずめたまま固まった。しばらく時間が止まったように沈黙したあと、ゆっくりと上体を起こして真顔で滯を見下ろし、再び身を屈めて目尻にたまっていた涙を舐めとった。滯は驚きのあまりビクリと身体をすくませたが、彼はそれ以上触れることなく立ち上がり、腰に両手を当てながら大きく溜息をついて言う。

「サインするよ」

「……………」

滯は身体を投げ出したまま虚ろなまなざしを彼に向ける。しかし、その表情を目にすることはかなわなかった。彼は素早く身を翻して執務机へ向かい、書類の山から一枚の紙を手に取りこちらに掲げて見せる。

それは、破られたはずの婚姻届だった。

「えっ……それ……?!」

「さっき破ったのは別の紙だ」

目を見開いてはじかれたように起き上がった滯に、大地は静かにそう答えた。執務机についてさらさらとボールペンを走らせ、丁寧に捺印すると、床に座り込んだまま啞然とする滯のもとに戻ってきた。

「これでいいか？」

「あ……ありがとうございます……」

困惑しつつも、差し出された婚姻届を両手を伸ばして受け取る。それは確かに滯が持ってきたもので間違いなく、頼んだとおりに同意の署名捺印もされていた。ありがたいと思うが、急に態度を翻した理由がわからず素直に喜べない。感情の読めない顔つきで腕組みする彼を、上目遣いでうかがう。

。

「二度とあんなことを言うな」

「えっ？」

一瞬、何のことだかわからなかった。彼はゆるりと見下ろして言葉を継ぐ。

「君の半分は美咲なんだ」

「……勝手なことを言いますね」

「美咲がいなくなったからな」

ちぐはぐなやりとりだが、彼の言いたいことは何となくわかったような気がした。しかしながら何を考えているのかは釈然としない。いまだに滯の半分为美咲と見ているのに、滯を美咲の代わりとして見ているのに、どうして署名捺印してくれたのだろう。まさか、これで滯を懐柔して好き勝手するつもりなのでは――。

「私、お父さまのものにはなりません」

「だろうね。それでも生きていてほしいんだよ」

その言葉をどう受け取ればいいのか判断がつかず、微妙に顔を曇らせる。いっそ本人に尋ねてみようかと思ったが、彼は腕を組んだまま小さく吐息を落とすと、何かを振り切るようにくるりと背を向

けた。

「お幸せに」

言葉とは裏腹の突き放した口調。まるで早く帰れと言われているように聞こえる。いや、おそらく実際にそう思っているのだろう。悠人の長年の親友としても、美咲に執着する男としても、この結婚を歓迎してはいないのだから。

「……ありがとうございました」

滯は立ち上がると、婚姻届をやわらかく胸に抱いて深々と一礼する。そして振り返る気配のない広い背中をじっと見つめ、もういちど小さく頭を下げたから、ボストンバッグを引っつかんで足早に部屋をあとにした。その目に熱い涙をにじませながら――。

## 59. 三十年分の本音

「ありがとうございました」

泣くのを必死に堪えるような震えた声が、左耳のイヤホンから聞こえた。

目の前には防犯カメラのモニタが置かれている。その四分割された画面のうち二つに、声の主である滯が映っていた。執務机の後方から捉えたものと、扉の上部から捉えたものだ。どちらも不鮮明なうえ小さくしか映っておらず、表情まではわからないが、大まかな動きであれば認識可能である。

モニタに映っている彼女は婚姻届を胸に抱いて深々と一礼した。そのまましばらく無言で直立していたが、再び頭を下げると、今にも駆け出さんばかりに扉の方へ足を進める。途中、床に置いてあったボストンバッグを引っつかんで。

パタンと扉の閉まる音を聞いたあと、悠人はイヤホンを外した。

駆け足で遠ざかっていく軽い音と、金属製の扉の開閉する重い音が、続けて廊下の方から聞こえてきた。どうやら彼女は足を止めずに帰っていったようだ。その間も、モニタでは大地が腕組みをして立ち尽くしていた。

悠人は重たい体を引きずるように椅子から立ち上がると、奥のベッドに倒れ込んだ。はあ、と無意識に大きく息を吐きながら仰向けになり、膝から下を垂らしたまま、薄く汗ばんだ額に右手の甲をひたとのせる。その冷たい感触に少し気持ちが落ち着いてきた。ゆっくりと顎を上げて白い壁に視線をめぐらせ、ある一点でとめる。

そこには、少女時代の美咲を描いた肖像画があった。

つい先日までは橘の大階段に飾られていたのだが、怪盗ファントムに盗ませてその存在を世間から抹消し、今は名実ともに大地ひとりのものになっている。それで、彼の寝室であるここにひっそりと掛けてあるのだ。客人にも誰にも見せびらかすつもりはないのだろう。

その瞳には、何が映っている――？

悠人は目を細め、肖像画として描かれている幼い美咲に、大人になった彼女を重ねて問いかける。このみっともないありさまを見てどう思うだろう。間違っていないと言って微笑んでくれるだろうか。遠い昔のあのときのように――過去に思いを馳せ、胸が締め付けられるのを感じながら目を閉じた。

カチャ――。

静寂の中にひっそりと控えめな音が響いて扉が開き、大地が寝室に入ってきた。ベッドで仰向けになっている悠人を見つけると、膝が触れ合いそうなくらい近くまで足を進め、おもむろに腕を組みながらニヤリと見下ろす。

「よく耐えたな」

「挑発には乗らない」

そうは言ったもののギリギリだった。滯を押し倒したときには本気で腰を上げかけていた。彼女の服の中に手を差し入れでもしたら、激昂して止めに入ったに違いない。しかし、それは一人でやり遂

げたいという彼女の思いを裏切る行為である。

そもそも彼女に無断でこんなところに来たこと自体が裏切りだろう。わかってはいたが、無防備なまま一人で大地と会わせるわけにはいかなかった。彼女よりも一日先じてドイツ在住の彼を訪ねると、事の顛末を説明し、同意の署名捺印をしてくれるよう頼んだのである。

大地は面白がるだけで、最後まで了承するとは言ってくれなかった。ただし了承しないとも言わなかった。こうやっていつも悠人を翻弄して楽しんでいるのだ。彼女の来る時間が迫ると、あとはもう成り行きに任せるしかなかった。

万が一を考慮して、書斎の隣の寝室で待機させてもらうことにしたが、彼はさらに防犯カメラの映像で見守ることを提案してきた。あえて見せるということは、何らかの方法で悠人を挑発するつもりなのだろう——そう予想していたからこそ、どうにかここまで耐えられたのかもしれない。

「最初は挑発だったけどね。最後の方は本気だったよ」

大地はそう言うと、仰向けになっている悠人の隣に静かに腰掛ける。ベッドの端が少し沈むのがわかった。彼は体を後ろに傾けて支えるように両手を付くと、ちらりと悠人を振り返り、思い出したようにふっと柔らかく表情を緩める。

「護身術、まったく役に立ってなかったよな」

「もともと気休めのつもりだった」

役に立つと思っていれば、ドイツくんだりまで来ていない。

濡の名誉のために言えば、武術にしても護身術にしても生徒としては優秀だった。教えたことはきちんとこなすし、飲み込みも早い。ただ、応用が苦手なため実践では上手くいかないことが多いのだ。さらにいえば、感情的になると考える余裕をなくしてしまう傾向がある。今回も護身術のことなどすっかり頭から抜け落ちていたのだろう。

「濡はあれで勝算があると思っていたのか？」

「一応、切り札を用意していたらしい。使ってないみたいだが」

濡は自信ありげだったが、おそらくそれほどたいしたものではないだろう。大地を追いつめられるような材料など、彼女が手に入れられるとはとても思えない。悠人でさえそんなものは持っていないのだ。大地も同じように思ったのか、くすくすと楽しそうに笑っている。

「なあ」

「何だ」

愛想のない声で聞き返す悠人を、大地はうっすらと唇に笑みをのせて見つめていた。彼がこういう無駄に色気のある表情をしているときは、たいていいくらでもないことを考えている。たとえば悠人をいたぶって楽しむというような。

「もう少しでお膳立てが上手くいったのにな」

「……頼んだ覚えはない」

悠人は天井を見つめたまま、ついと眉を寄せた。

一回だけ悠人とセックスしてやってくれ——濡に突きつけたその条件は、大地が勝手に言い出したことだ。悠人が頼んだわけでもないし、事前に聞いていたわけでもない。おそらく彼としては面白がっているだけだろうが、イヤホンで聞いたときには息が止まりそうになった。

「もし濡が条件を飲んでたらどうした？」

「断る」

「ま、実際にそうならないとわからないよな」

大地はあからさまに含みのある厭らしい言い方をして、細めた横目を流す。

「濡の体はいいぞ。そういえば武蔵も骨抜きにされてたみたいだな。普段は色気がなくてまるきり子供だが、抱いてみるとなかなか淫乱な体をしている。実に僕好みだ。感触も反応も美咲と似ていてさすが親子だと思ったよ。あ、おまえは美咲の体も知らないんだっとな」

最後はとぼけたように言い添えて軽く笑った。そして、背を向けてシーツを搔くように掴んでいた悠人に、後ろから覆いかぶさるように顔を近づけ、耳元にそっと唇を寄せて囁きかける。

「だから、一回くらい濡を抱かせてやりたかった」

「……………ッ！！」

体中が沸騰しそうなほどの激情に駆られ、彼をベッドに叩きつけるように押し倒した。一瞬のことだ。気付けば彼に跨がり両肩を押さえつけていた。骨が軋みそうなほどの力を掛けながら、ギリと奥歯を食いしばって睨めつける。

「美咲の前でよくもそんなことが言えるな……！」

「美咲はもうどこにもいない。それはただの絵画だ」

大地は少しも動じることなく微笑を浮かべ、平然とそう言い放った。

初めて美咲を目にしたときからずっと変わらず執着してきたはずなのに、亡くなった途端、すっかり興味をなくしてしまったかのような言動を繰り返している。生きていなければ意味がないということだろうか。だから生きている娘の濡に興味移ったのだろうか。しかし——その「ただの絵画」を自分ひとりのものにと望んだのは彼自身だ。

「ただの絵画になぜそんなに執着する？」

「もちろん、気に入ってるからだよ」

核心を突いたつもりが軽くかわされてしまい、悠人は唇を噛んだ。

それでも彼の美咲に対する愛情はなくなっていないと信じたい。少し冷静になって先ほどの濡との対面を思い返してみると、時折その言動から本音が覗いていたのではないかと感じる。彼なりの方法で美咲の死を受け止めようとしているのかもしれない。彼女への想いが強すぎるがゆえに迷走しているとも考えられる。大地の肩を掴み、感情の読めないその顔を真上からまっすぐに見下ろした。

「同意の署名をしたのは誰のためだ？」

「親友のおまえに頼まれたからだ」

「嘘をつけ」

苦々しさを隠すことなく顔をしかめる。真剣に答えてほしいという願いも、彼の力になりたいという思いも、彼本人にはまったく通じない。いや、わかっているのとぼけているのだろう。

「本心を語ろうともしないくせに、何が親友だ」

「おまえだって何も語ってくれなかつただろう」

それを言われるとぐうの音も出ない。

本心をひた隠しにしてきたことは紛れもない事実である。しかし、どういうわけか彼にはとっくに見透かされているのだ。見苦しい気持ちも、矛盾した思いも、仄暗い感情もすべて——ゆらり、と何

かに操られるように彼の首に手を掛ける。

「また、首を絞めるのか？」

大地はすうっと目を細めて冷笑を浮かべた。

どうしたいのかなど自分でもわからない。ただ、前回と同じように中途半端なことしかできず、彼に馬鹿にされるだろうことは目に見えている。唇を噛んで逡巡していると、不意に腕を取られてぐるりと視界がまわり、気付けば仰向けの状態で大地に跨がられていた。首に冷たい両手が掛けられるが、表面に触れているだけで力が入っていない。彼の口もとがニヤリと歪んだ。

「形勢逆転だな」

まるで獲物を捕獲した肉食獣のような顔でそう言い、舌なめずりをした。そして息が触れ合いそんな距離まで顔を近づけると、今にも食らいつかんばかりの残忍な笑みを浮かべて問いかける。

「本心を聞きたいか？」

「……ああ」

首に掛かった手に少し力がこもるが、まだ苦しくはない。間近にある大地の瞳が鋭く光った。

「聞く勇氣はあるか？」

「今さら何を怖れる」

悠人は目を逸らすことなく強気に答える。

それをどのように受け取ったのかはわからないが、大地はふいと表情を消し、首に掛けていた手を外してベッドから降りた。無言でカーテンと両開きの窓を大きく開け放ち、腰を屈めながら窓枠に腕を置いて外を眺める。薄青色の空には薄い筋状の雲がかかっていた。

「今夜はどうするつもりだ？」

「一応、ホテルは取ってある」

「キャンセルしろ」

振り返りもせず尊大な口調でそう命令すると、くるりと身を翻し、白い窓枠に後ろ手をつきながらもたれかかる。逆光を受けて顔にはうっすらと陰が落ちていたが、その中で瞳だけは爛々とした輝きを放っていた。ベッドに横たわったままの悠人を瞬ぎもせず見つめ、顎を上げる。

「一晩、語り明かしてやるよ。三十年分の本音を」

悠人の体にゾクリと痺れるような震えが走った。しかし、それは決して恐怖からくるものではない。ごくりと唾を飲み下すとベッドから立ち上がる。同じ高さで二人の視線がぶつかった。

「いいだろう、朝まで付き合おう」

「おまえの本音も聞かせてもらうぞ」

「……望むところだ」

窓から少し冷たい風がゆるりと滑り込み、レースのカーテンをはためかせる。

長年知りたいと渴望していた彼の心に触れるときがきた。以前なら、機会があっても逃げ出していたかもしれない。紆余曲折を経た今だからこそ覚悟を決められたのだ。たとえ彼と決別することになったとしても、本気で向き合わなければ何も始められないし、何も終えられないと。

「明日の朝、どちらかの死体が転がってなければいいけどな」

大地は茶化すようにそう言うと、机の隅に置かれていたペットボトルを投げてよこした。緩やかな弧を描いて悠人の手におさまったそれは、飲みかけのものらしく半分ほどしか残っていないが、見た

ところ何の変哲もない普通のミネラルウォーターのようだ。

まさか、薬を盛ったりはしていないだろうー。

悠人はキャップを捻り開けて躊躇いを振り切るようにあおり、残りを一気に飲み干した。挑むような目を向けながら濡れた唇を無造作に拭くと、空になったペットボトルを大地に放り投げる。宙を舞うなか、透明なボトルが窓からの光を反射してきらりと白く輝いた。

## 60. 二枚の婚姻届

---

「なんか久しぶりだね、こういうの」

ゆったりとした時間の流れる休日の昼下がり。レースのカーテン越しに広がる柔らかな光が、居間を照らしている。

滯は四角いチョコレートケーキにフォークを入れながら、にっこりと微笑みかけた。その美味しそうなケーキも、傍らに置かれた紅茶も、小さな丸テーブルを挟んで座っている誠一が用意してくれたものだ。彼はフォークを手にしたまま申し訳なさそうに肩をすくめる。

「ごめんな、このところちょっと忙しくて」

「ううん、私も忙しかったもん」

彼のアパートでともに時間を過ごすのは、およそ二週間ぶりだった。

その間、電話で話をしたのも一昨日のただ一度だけである。避けていたわけではなく単純に余裕がなかったのだ。もちろん互いに時間を見つけて何度か電話をかけていたのだが、なかなかタイミングが合わず、留守電にとりよめのないメッセージを入れるのが精々だった。

「今日はいつまでいられるんだ？」

「夜ごはんまでには帰ろうかなって」

「そうか……」

彼のほんのり寂しそうな様子が、密かに嬉しい。

明日は日曜なので、滯としても泊まっていきたい気持ちはあるが、今はまだそれが自由に許される立場にはない。最近では誠一の家泊まるが増えていたものの、それは事情があって許可されたときだけである。今さらではあるが、高校生としてきちんと分別のある行動をとろうと決めたのだ。

それは、他でもない誠一と無事に結婚するためである。

滯も数え切れないくらいの失敗を重ねていかげん学習してきた。ここまできて足をすくわれるような事態は避けたい。事を成し遂げるまでは慎重すぎるくらい慎重になるべきである。剛三がどこでどんな罫を仕掛けているかわからないのだから。

会話が途切れ、二人とも黙々とケーキを口に運んだ。

沈黙が続くことはめずらしいことではないし、それでいちいち気まずくなることもない。長い年月を一緒に過ごしてきた家族のように、会話がなくても自然体でいられるので、彼の傍はとても居心地よく感じられるのだ。

しかし、こちらに思惑があるときは別である。

滯はケーキを食べながら、どうやって話を切り出そうかと盛大に頭を悩ませていた。一向に考えがまとまらず緊張だけが高まっていく。最後のひとかけらをフォークにさして口に運び、まだ熱い紅茶を流し込むと、気持ちを落ち着けるべく小さくふうと息を吐いた。

傍らに置いてあるカジュアルなトートバッグに、ちらりと視線を落とす。

この中に婚姻届が入っている。誠一と戸籍上の夫婦になれるようにと記入したものだ。すでに剛

三と悠人のふたりに証人になってもらい、大地には父親として同意の署名もしてもらった。あとは、誠一に空いた箇所を埋めてもらうだけである。

彼に断られることはないだろうと思っているが、切り出すにはやはり勇気がある。一度、滯の方から断ったことがあるのでなおさらだ。だから最初から素直に受けてくれれば良かったのに、という愚痴くらいは覚悟しなければならないだろう。

いつのまにか誠一もすっかりケーキを食べ終わっており、紅茶を口に運んでいた。しかし、気のせいかわかからない表情が少し硬いように見える。滯の緊張が無意識のうちに伝染してしまったのだろうか。それとも、滯のそわそわした態度に不安を感じているのだろうか。

よし……っ！

密かに気合いを入れて話を切り出す決意を固める。言わないという選択肢がない以上、先延ばしにしても追いつめられるだけである。期限までそれほど余裕はないのだから。

「あ……あのね……っ！」

どくどくと心臓が暴れるのを感じながら、口を切る。

誠一はティーカップを手にしたままビクリとして顔を上げた。半分ほど残っている紅茶が大きく揺れる。それをこぼさないよう慎重な手つきでテーブルに戻すと、硬い面持ちで滯を覗き込んだ。

「……どうした？」

「誠一にお願いがあるの」

滯はそう言うと、ケーキプレートとティーカップをそそくさと端に寄せ、トートバッグから透明なクリアファイルを取り出し、中身が見えるように彼の前に置いた。

「……えっ?!」

「私と結婚してください!!!」

彼が挟まれた婚姻届に気付いて大きく目を見開くと同時に、一息にそう言い切り、クッションごと下がって勢いよく土下座をした。長い黒髪を大きく乱したまま頭を伏せ続ける。心臓が早鐘のように激しく打ち、次第に息苦しさが増し、じわりと汗が滲むのを感じた。それでも、身じろぎもせずギュッと目をつむり返事を待つ。

「どうして……」

思わずこぼれたような虚ろな声が、頭上から聞こえた。

滯は伏せていた顔をおずおずと上げていく。

「あの、このまえ断ったばかりなのに勝手だとは思うけど……」

クリアファイルに伸びている彼の手元を見つめながら、慎重に言葉を選んで理由を説明しようとする。しかし、彼は最後まで聞くことなくテーブルに手をつけて立ち上がり、背を向けて寝室へ入っていった。

怒ったの？ 呆れたの？ 愛想を尽かしたの？

半開きになった寝室の扉を呆然と見つめているうちに、さまざまな憶測が頭をよぎっていく。目の奥がじわりと熱くなり視界が大きくぼやけた。もう見捨てられたのかもしれないと思うと怖くてたまらないが、たとえそうだとしたとしてもまだ諦めるわけにはいかない。せめて、話だけでも最後まで

聞いてもらわなければ――。

目元を拭い、崩れそうな体を奮い立たせる。

そのとき、誠一が何か難しい顔をして寝室から戻ってきた。手には折り畳まれた白い紙を持っている。先ほど座っていたクッションに再び腰を下ろすと、手にしていた紙を広げてクリアファイルの隣に置いた。

「……えっ?!」

今度は、滯が驚きの声を上げる。

それは婚姻届だった。書かれている内容は滯の持ってきたものとほぼ同じだ。妻の署名捺印だけが空白になっており、あとはすべて誠一の筆跡で埋められている。そして、証人欄には剛三と悠人の署名があり、親の同意として大地の署名もなされている。ひどく混乱しながらも必死に考えをめぐらせ、そろりと顔を上げた。

「賭けのこと、知ってたの？」

「賭け? 何のことだ??」

「じゃあ、どうしてこれ……」

困惑を露わに、再び婚姻届に目を落として問いかけた。

誠一はきまり悪そうに目を泳がせて頭に手をやる。

「このまえうちに来たときな、滯、様子がおかしかったらう？」

「あ……うん……」

あれは剛三と賭けをした日だった。誠一には秘密にしようと決めていたのに、感情が揺らいで思わず涙を滲ませたり、奥歯に物が挟まるような言い方をしたり、不安そうな顔をして縋るように彼を求めたり、明らかに普通とは言いがたい様子を見せてしまった。

誠一は神妙な面持ちになり、話を続ける。

「だから、俺に言えない何かがあるんじゃないかと思って……滯を守りたい気持ちはもちろん今でもあるけど、それより滯が離れていきそうに感じて不安だった。どうしても繋ぎ止めておけるものがほしかった。一度断られはしたけど、外堀を埋めれば受け入れてくれるんじゃないかと……」

そこで言葉を切ると、どこからか取り出した小さな白い箱を丸テーブルに置く。

「ちゃんと指輪も用意した」

「うそ……」

滯は両手で口もとを押さえ、息を飲んだ。

誠一は愛おしげに表情を緩める。

「橘会長にも、楠さんにも、橘大地さんにも、遥にも、ついでに武蔵にも許可はもらってきたよ」

「え……」

遥と悠人はともかく、他の人たちはいったいどうやって説得したのだろうか。剛三も、大地も、二人の結婚には反対という立場のはずだが、この婚姻届には確かに署名をしてくれている。滯でさえももらえたのは奇跡のようなものなのに。というか――。

「もしかして、ドイツにまで行ってきたの？」

「まあ、行くしかなかったからな……滯も？」

「うん」

滯が頷くと、誠一は気遣わしげに顔を曇らせた。

「その……会って大丈夫だったのか？」

「うん、ちゃんと気をつけてたから」

言葉を濁しながら、安心させるように軽く微笑んで見せる。

切り札を用意し、護身術も教わり、万全の準備をしていったつもりだったが、それでも大地にはまるで敵わなかった。彼の心変わりがなければ、同意の署名をもらえなかったかもしれないし、以前のように襲われていたかもしれない。だが、結果として犠牲を払うことなく目的を達成できたのだから、大丈夫だったと返事をして間違いないだろう。少し泣いたが些細なことだ。

それよりも、気になるのは誠一の方である。

大地は何かにつけてへなちょこ刑事などと誠一を揶揄しており、あまり良い感情を持っていないことは明白である。しかも、滯の結婚相手として親友である悠人を推しているのだ。誠一が認めてくれるよう礼を尽くして懇願しても、簡単に応じてもらえるとは思えない。

「誠一の方こそ大丈夫だった？」

「まあ……何とか……」

そう言いながらも、彼は苦虫を噛み潰したような顔をしてうつむいた。

「ねえ、何があったの？何を言われたの？」

「……滯は知らない方がいいだろうな」

目を逸らせたまま口先でぼそりつつぶやいた彼を見て、何となくわかった気がした。言われたのはおそらく滯に関することだ。それも、誠一に最大限の精神的ダメージを与えられて、滯との結婚を諦めたくなるような何かを――思い浮かんだひとつの推測にカァッと顔が上気する。

「あの、お父さまが何を言ったかは知らないけど……真に受けないで……」

「……ああ」

「私は……その、誠一がいちばんだと思っているから……」

「信じてるよ」

要領を得ないしどろもどろの釈明に、誠一は心なしか当惑した表情を浮かべていたが、最後には優しく微笑んでそう答えてくれた。滯の言いたいことが伝わったかどうかはわからないが、少なくとも気持ちは汲んでくれたのだろう。幾分かほっとしてつられるように笑顔を返した。

「で、賭けて何？」

気が緩んでいたところに、忘れていた話をいきなり蒸し返されてドキリとする。けれど、今日は最初からすべてを話すつもりで来ていた。緊張から伏し目がちになりながらも、冷静に口を開く。

「おじいさまに、橘財閥のために師匠と結婚しろって言われて」

「?!」

誠一は声もなく息を飲んだ。訝るように顔を曇らせて、その双眸に焦燥を滲ませる。

滯はうっすらと微苦笑を浮かべた。

「お父さまをドイツに行かせちゃったから、師匠を後継者にするために、孫娘の私と結婚させたいとかそんな話でね。橘財閥を救うために協力しろとか言うんだけど、私のことをいったい何だと思

ってるんだろう。勝手すぎるよね……考え直してもらおうと必死に抵抗していたら、おじいさまの方から賭け？ 勝負？ を提案してきて」

そこで一呼吸おき、上目遣いでちらりと彼を見る。

「一ヶ月後までに誠一と夫婦になれ、それができなければ師匠と結婚しろ、って」

「……………」

誠一は唖然としたが、すぐにハッと我にかえり身を乗り出す。

「期限はいつだ?!」

「大丈夫、まだ二週間くらいあるから」

滯がそう答えると、彼は大きく安堵の息をついて前髪を掻き上げた。テーブルの隅に追いやられていた紅茶を口に運び、気持ちを落ち着けるようにもう一息ついてから言う。

「あのとき、滯が隠していたのはこのことだったのか……」

「ごめんなさい。どうしても自分でやり遂げたかったから」

「……俺は、頼ってほしかったけどな」

寂しさを感じさせる声でぼつりつつぶやき、曖昧に笑う。

その言葉に、その表情に、滯はひどく胸を締め付けられてうつむいた。彼の自尊心を傷つけてしまったのかもしれない。決して彼のことを頼りないと思ったわけではなく、これだけは自分一人でやり遂げたいというわがままだったが、そうまでしてこだわる必要があったのだろうか。今になって自信がなくなってきた。

「まあ、勝手なことをしたのはお互いさまか」

長くはない沈黙を破り、誠一がおそらく意識的に声はずませた。

「俺がちゃんと説得して話を聞いていればよかったんだよな。そうすれば滯を一人で不安にさせることはなかったんだ。何かあったんだろうと確信に近いものを感じていたのに、話を聞くことを諦めたのは、滯を信じる気持ちが少し足りなかったのかもな……でも、これからはきちんと信頼し合えるようになりたい」

自らの気持ちを整理するように淡々とそう語ると、滯を見つめる。

「……家族、になるんだから」

えっ——?

滯は口の動きだけでそう聞き返してぱちくりと瞬きをする。聞こえなかったわけではなく、その意味するところをとっさに把握できなかった。家族になる、という言葉がぐるぐると頭をめぐり、思考が上滑りするばかりで何も考えられない。

誠一はふっと微笑むと、滯に真正面から向き合い正座する。

「滯、俺と結婚してくれるか？」

「……っ！」

彼は白い箱からプラチナの指輪を取り出し、滯の左手薬指にはめた。

サイズを教えた覚えはないのに、あつらえたようにぴったりだった。緩やかな波を描くようなアームに支えられた、一粒の無色透明なダイヤモンドと両脇の小さなピンクダイヤが、華やかながら繊細で気品のある輝きを放っている。誕生日にもらったピンクダイヤのペンダントともよく合うデ

ザインだ。

誠一と結婚して、家族になるんだー。

滯は呆然としたまま指輪のはめられた手を掲げた。窓からの光を受けてきらりと輝く。ふいに息もできないくらいに胸がつまり、涙があふれ、喋ることさえままなくなる。そのまま濡れた頬を拭いもせず誠一に振り向くと、泣いているのか笑っているのかわからない顔で、言葉の代わりに精一杯の気持ちをこめて頷いた。

## 61. 手荒い祝福

---

「はあっ？ パンツ男と結婚したあ？！」

「ちょっ、声大きい！」

滯は血相を変え、顔をしかめながら口の前で人差し指を立てた。

声を上げた綾乃だけでなく、真子も、富田も、滯を見つめて呆然としている。落ち着いているのは事情を知っている遥だけだ。校門を出てすぐのところだったので、他にも何人か下校中と思われる生徒たちが近くを通っていたが、みんな怪訝な目を向けるくらいで立ち止まりはしなかった。滯はほっと胸を撫で下ろす。

事の発端は、左手薬指にはめた指輪である。

三年生になり、滯は理系に変更したため綾乃たちと別のクラスになったが、今までどおり都合がつけばみんなで帰っていた。今日も特に予定がなかったので一緒に下校していると、綾乃が目ざとくも左手薬指の指輪に気付き、あれやこれやとからかうように詮索してきたのだ。

別に隠しておくつもりはない。

ただ、学校にはまだこのことを報告していないので、先に言うのはどうなのかと少し悩んでいた。正式な報告の前に噂になっては困る。しかし、友達なら信用して話すべきかもしれないと考え、内緒にしてねと前置きしてから簡単に事実を告げた。ずっと付き合っていた誠一と結婚した、と一一。

「結婚なの？ 婚約じゃなくて？」

「今朝、婚姻届を出してきたよ」

半信半疑で尋ねてきた真子に、滯はにっこりと微笑みながら決定的な答えを返す。婚約だと思われたのはこの指輪のせいかもしれない。結婚指輪ではなく婚約指輪なのだ。誠一はあとで結婚指輪も用意すると言っていたが、一般的に婚約指輪よりシンプルで、日常生活でもさほど目立たず邪魔にならないものらしい。

綾乃はじとりとした目を向けながら、腰に手を当てる。

「それさ、家族は知ってるわけ？」

「おじいさまも許してくれてるよ」

「……そう……だったらいいけど」

それでも彼女のまなざしは疑わしげなままだった。疑っているというより腑に落ちないという感じだろうか。実際、婚姻届を提出したことはまだ報告していないので、彼女の勘はあながち間違っているともいえない。しかし、家族の問題であることを察したのか、彼女にしてはめずらしく踏み込んでこなかった。

一方、真子は安堵したように表情をやわらげていた。

「じゃあ、何も問題ないんだね」

「駆け落ちとかじゃないよ」

あんな誤解をされるのはもう二度と御免である。武蔵と駆け落ちしたのではないかと世間に騒がれていたときは、学校でも好奇の目に晒され、遠慮のない物言いであれやこれやと尋ねられて大変だった。実はいまだに信じている人も多い。噂が一度でも広まってしまえば、事実無根であっても完全に消し去るすべはなく、ただ嵐が過ぎ去るのを待つしかないのだと思い知った。それでも、身近な人たちがわかってくれていただけ、滯の場合はまだ良かったのかもしれない。

「結婚式や披露宴の予定はないけど、高校卒業したら結婚パーティでもしようかって話をするところ。堅苦しくないガーデンパーティみたいな感じでやりたいなって。みんなも招待するから来てね」

「うん、楽しみにしてるね」

真子はほんわりとした笑顔で答えた。しかし、綾乃は溜息を落として横目を流す。

「そんなに浮かれてて受験は大丈夫なわけ？」

「ん、そこはちゃんと真面目に頑張るから」

さすがに浮かれていないと言えば嘘になるが、勉強を疎かにする余裕がないことくらいはわかっている。今になって理系に変更したのだから当然だ。自らの意志で研究者の道に進もうと決めた以上、これしきのことで泣き言を言うつもりはない。

「おーい、富田あ、息してる？」

綾乃の声につられて顔を向けると、富田がだらしなく口を開いて呆然と立ち尽くしていた。綾乃がその眼前で手を振ってもまったくの無反応である。何もそこまで驚かなくていいのにと思いつつ、それでも多少の申し訳なさは感じていた。

「何か、ごめんね？」

とりあえず小首を傾げて謝罪する。が、邪魔するように遥が割り込み、富田の上腕を掴んだ。

「富田、借りてくから」

無表情でそう言うと、掴んだ腕を引きながら家とは反対方向に歩いていく。富田はどうにかよろよろと足を進めている状態だ。まるで魂が抜けてしまったかのように虚ろである。

そんな二人を、綾乃はニヤニヤしながら見送っていた。

「遥あー！ちゃんと慰めてやれよ！」

「慰めるって…….どうということ??」

「まあまあ」

尋ねた滯を煙に巻くように、彼女は白い歯を見せながら豪快に肩を抱いてきた。その勢いで少し前屈みになったまま、無遠慮にいたずらっぽく笑顔を寄せてくる。

「こっちは女子だけでお祝いしよ。あんまりめでたくもないけど」

「めでたいってば！」

滯はすかさず言い返すが、もちろんいつもの辛辣な軽口であることはわかっている。これしきのことでいちいち腹を立てるようであれば、今まで彼女と友達でいられなかつたらう。隣の真子も肩をすくめて笑っていた。

「さあて、何から聞こうかな」

綾乃は頬杖をつき、獲物を狙う狩人のようなまなざしで滯を見つめ、逃さないとばかりにニッと口の端を上げた。その隣では真子がニコニコと柔らかく微笑んでいる。二人の表情はまったく違うが、滯から話を聞き出したいという目的は一致しているのだろう。

向かいの滯は、膝に手を置いたまま体をこわばらせた。

滯たち三人の前にはそれぞれケーキと紅茶が置かれている。お祝いということで、滯の注文は綾乃と真子がおごってくれることになった。もちろん気持ちは嬉しいが、それ以上の代償を求められることになりそうで少し怖い。

綾乃はうっすらと湯気の立つ紅茶を口に運び、一息ついてから尋ねる。

「相手、本当にあのパンツ男？」

「うん……そうだけど……」

すっかりパンツ男という呼称が定着してしまったようで、滯としては微妙な心境だ。

「ねえ、パンツとか言うのもうやめようよ」

「よりによってなんでパンツ男かねえ」

滯の話を聞いているのかいないのか、綾乃は見るからに不満げな面持ちで溜息まじりに独りごちる。パンツ男という呼称をあらためる気はまるでないようだ。紙ナプキンの上に置かれた小さめのフォークを手に取り、ケーキに突き刺しながら言う。

「どこぞの御曹司でもないんでしょ？」

「あっ、全然そういうのじゃないよ」

「刑事だっけ？」

「……うん、まあ」

今はもう刑事ではないが、警察には勤めているので似たようなものだろうと言葉を濁す。そもそも仕事内容を把握していないので説明のしようがない。今現在は楠長官の補佐的な仕事をしているが、そのうち現場に出る可能性もないわけではないと聞いている。

綾乃は口に放り込んだケーキを咀嚼しながら、フォークの先端を滯に向ける。

「刑事なんかとどこで知り合ったわけ？」

「そうそう、私もそれ気になってたの」

ティーカップを持った真子も目を輝かせて話に乗ってきた。反発心を抱いている綾乃とは違い、何かドラマチックな馴れ初め話を期待しているのだろう。滯は曖昧に微苦笑を浮かべる。

。

「中学生のときに刃物を振り回してる男を取り押さえた、って話はしたことあるよね？」

「ああ、卒業間際のころだっけ？ 確かあれで感謝状もらったとか何とか……」

綾乃がおぼろげな記憶をたどりつつそう言うと、隣の真子もそんなことあったねと相槌を打つ。二年以上前のことだが、二人とも何となくは覚えていてくれたようだ。滯は頷いて話を進める。

「あの事件の担当刑事が、誠一だったの」

「へえ、それでパンツ男に言い寄られた？」

「違うよ、私の方が先に好きになったの」

そう答えると、向かいの綾乃は盛大に息を吐きながら、テーブルに肘をついてうなだれる。

「あんたの趣味が本気でわからんわ……」

「綾乃ちゃん、顔だけじゃないんだよ」

真子がにこやかにフォローする。しかし、その内容は誠一に対して微妙に失礼なもので、滯は何とも言えない気持ちになりながら苦笑した。確かに顔で好きになったわけではないのだが、顔もそれほど悪くないはずだ。あくまでごく普通だと思っている。

「それで、滯ちゃんから告白したの？」

彼女は前のめりになって尋ねてきた。口調こそ穏やかだが、過剰な期待はまるで隠せていない。

「ん……でも最初は断られちゃった。年齢的にまずいとか言われて」

「はあっ?!」

素っ頓狂な声を上げたのは、尋ねた真子ではなく隣の綾乃だった。

「滯の告白を断るなんてパンツ男のくせに生意気っ!!」

ダンッ、と勢いよくテーブルに両手をついて身を乗り出す。滯はびくりとして上体を引いた。ソーサにのせたティーカップはガチャリと音を立て、中の紅茶がこぼれんばかりに大きく波打っている。まわりの客や店員たちは、何かと心配するようにこちらに目を向けていた。

それでも、真子は笑顔を崩さなかった。

「常識のある人なら、そうするんじゃないかな」

刺激を与えない控えめな物言いに、綾乃は納得できないながらも冷静さは取り戻したようだ。その場で長ソファにどさりと腰を下ろしてもたれかかり、腕を組んで口をとがらせる。

「でも、結局付き合ったんでしょう？」

「半年くらいあとでね」

そう答えて、滯は懐かしさに目を細める。

「16歳になっても気持ちが変わらなかったら考えるよって言われたから、それまで半年くらい警視庁に通いつめて、16歳の誕生日にもう一度あらためて告白してようやく、って感じ」

あのころは若かったな、と二年ほど前のことなのに遠い出来事のように感じてしまう。馬鹿みたいに無邪気で、無鉄砲で、まっすぐで、相手のことも考えずに飛び込んでいく。一步間違えればストーカーである。しかし、あのときの自分があったからこそ、こうやって好きな人と結婚できたのだ。反省はしても後悔はしたくない。

だが、綾乃は忌々しげに顔をしかめていた。

「あのパンツ男いったい何様のつもり？ 滯のためを思ってきっぱり断るならまだしもさあ、16歳になったら考えるとか偉そうに……ま、こんな美少女を逃すのは惜しいと思ったんだろうね。あの冴えない男にはありえないくらいの奇跡だし。最初は年齢的にまずいし一応かっこつけて断ってみたけど、欲望には勝てませんでしたってところか……くそっ、エロパンツ男め」

「そんなんじゃないよ」

滯は上目遣いでむうっと口をとがらせる。反論したいがうまく言葉が出てこない。見つめか

えず綾乃のまなざしは冷やかだった。

「男なんてだいたいエロいことしか考えてないんだよ」

「でも、誠一は付き合っただけ半年は何もしなかったもん」

「半年で手を出したんじゃない。16歳に」

「あっ……でも、それは私の方が……」

そう言いかけて我にかえり、あたふたと目を泳がせながらうつむいていく。あやうく余計なことまで言うところだった。しかし上手くごまかせたとはとても思えず、そろりと前を窺うと、綾乃も真子もぼかんと顔を見合わせている。そして――。

「もしかして濡の方から誘ったわけ？」

「っ……」

綾乃にズバリ言い当てられてしまった。恥ずかしさで顔を真っ赤にしながらも正直に頷くと、彼女は爛々と目を輝かせ、テーブルに両腕を置いてぐいっと前のめりになる。

「濡がそんなにエロい子だったなんてね」

「エロいって……」

「濡に迫られたらそりゃ我慢もできんわ」

「迫るってほどのことはやってないよ」

「誘っただけで十分だって、初めてなのに」

「……………」

綾乃は完全に面白がっている。濡は恨めしげに上目遣いで睨んで口をとがらせるが、それでも彼女の暴走が止まることはなかった。今度は頬杖をつき、意味ありげにニヤニヤしながら問いかけてくる。

「それで、そっちの方はどうなの？」

「そっちって……えっ……?!」

「あいつ経験少なくて下手そうだよ」

「……別に、下手じゃないよ」

「比べる相手もないのにわかるの？」

「……………」

比べる相手がないわけではない。が、そんなことは口が裂けても言えないし、そもそも絶対に比べるべきではない。無意識に比較しそうになる思考を振り払うかのように、乱れる髪も構うことなくぶんぶんと頭を振る。いつのまにか顔はひどく熱を帯びていた。

「もう、綾乃ちゃんやめようよ、せっかくのお祝いなのに」

「だって、聞けば聞くほど心配になってくるんだもん」

ようやく真子が寝てくれたが、綾乃はしれっと言り返すばかりで反省の色は見えない。

「濡ならいい男を捕まえ放題なのにねえ」

「私にとっては誠一がいちばんだもん」

「何でこんな欲のない子に育ったんだろう」

いや、欲があるからわがままを言って誠一と結婚させてもらったんだけど。そう思うものの

、綾乃には理解してもらえない気がして反論をあきらめた。しかし――。

「私は素敵だと思うな」

真子は柔らかい声でそう言い、ふわっと笑う。

「滯ちゃんはちゃんと自分に合う人を見つけたんだよね。結婚を認めてもらうの大変だったんじゃない？ 滯ちゃんのところは大きな財閥だし、年齢のこともあるし……でも、相手の人が滯ちゃんのことを本当に好きだから、逃げずに認めてもらおうと頑張ったんだよね。お互いに心から想い合っているんだらうなって、何となくわかるよ」

「真子……」

滯は感極まり、口を両手で覆いながら目を潤ませた。これほど純粋に認めてもらえたのは初めてかもしれない。話してないのにここまで察してくれたのも驚きだった。今まで反対ばかりされてきたのでなおさら心に染みる。微笑む真子を見つめ、うっすらと涙を浮かべたまま屈託のない笑顔で頷いた。

綾乃は疲れたように吐息を落としながら、前髪をかく。

「ま、滯が幸せならいいんだけどさ」

「私、すごく幸せだよ」

「そりゃ、今はそうでしょうよ」

確かに、好きなひとと望んで結婚したのであれば、その日が幸せなのは当然のことである。大事なのはこれからだ。滯はあらためて綾乃に真剣なまなざしを向け、背筋を伸ばす。

「十年後も、二十年後も……ずっとずっと幸せでいる」

「本当そうなってよ？ 不幸な滯なんて見たくないんだから」

「綾乃にもうらやましがってもらえるような夫婦になるよ」

臆することなくそう言うと、むすっとしていた綾乃の表情が少しだけゆるんだ。もしかすると、攻撃的な物言いで根掘り葉掘り尋ねてきたのは、滯を案じるがゆえだったのかもしれない。昔からそうだ。容赦のない言動の根底にはいつも彼女なりの友情があった。

私、絶対に幸せになるから――。

今すぐに認めてもらうのは難しいだろうが、これから年月をかけて証明していけばいい。そして、いつかは彼と結婚して良かったねと言ってもらいたい。

「ケーキ食べようよ。紅茶も冷めちゃうし」

真子がそう言うと、滯も綾乃も我にかえったように笑顔を見せて賛成した。もう互いに言いたいことは言い合ったはずだ。ここからは美味しいケーキと普通のおしゃべりを楽しもう――滯は少しぬるくなった紅茶を口に運び、ほっと一息ついて顔をほころばせた。

「今朝、婚姻届を提出してきました」

その日の夜遅く、剛三と悠人が仕事から帰ってくると、滯は書斎に足を運んでそう報告した。

剛三はぴくりとも表情を動かさなかった。執務机の上で筋張った両手を組み合わせたまま、威圧的とも思えるまなざしで、ただじっと射抜くように滯を見つめている。何を考えているのかわからなくて怖い。

「随分、早かったな」

「頑張りましたから」

そう返すと、彼の表情がふっとやわらいだ。

「おまえの勝ちだ」

「……ありがとうございます」

勝ち、とあっさり認めてもらえるとは思わず、一瞬きょとんとして反応が遅れてしまった。礼を言いながらもまだ半信半疑である。しかし、剛三のそばに控えている悠人が優しく微笑んでいるのを見て、ようやく本当の決着がついたのだと実感することができた。

「南野君には話したが、結婚についての条件は聞いたか？」

「はい、高校卒業まではこの家に住めって話ですよ？」

これが滞を思っただけの措置だということは理解していた。誠一のアパートからでは通学に時間がかかりすぎる。新居を探すにしても、どうせなら大学生になってからの方がいいはずだ。あと、高校生のうちは三者面談などで保護者が必要になるため、悠人と同居していた方が都合がいいというのもあるだろう。

うむ、と剛三は首肯して話を継ぐ。

「休日前であれば南野君のところに泊まりにいつでも良いが、連絡は入れるように。南野君に泊まりに来てもらっても構わない。ただ、勉学とは別のことに励みすぎぬよう気をつけるのだぞ」

「わ、わかってますよ……」

真顔で注意され、滞は居たたまれなさに身を小さくしてうつむいた。いつのまにか耳まで真っ赤になっていたが、変に意識しているようでなおさら恥ずかしくなる。

「学校には悠人から連絡を入れておく」

「よろしくお願いします」

淡々と付言され、まだ冷めない熱を感じながらもぺこりと頭を下げる。滞から学校に報告しても、結局は保護者が呼び出されることになると思うので、あらかじめそうしてもらえるとありがたい。

剛三は椅子の背もたれに身を預け、大きく息を吐いた。

「これで橘財閥は終わりかもしれんな」

「えっ？」

「後継者問題を解決する目処が立たんのだ。このままでは、関連会社を含めて何十万という従業員と家族が路頭に迷うことになる。滞が協力してくれることに最後の望みをかけていたのだが、仕方あるまい。賭けに負けたのだから腹を括るしかないだろう」

うそ――。

滞の顔からすうっと血の気が引いた。悠人と結婚させようとしたのは後継者問題のためだと聞いていたが、それを拒否すればどういう結果になるかなど考えもしなかった。ただ自分が幸せになることしか頭になかった。まさかここまで深刻な事態になるだなんて――縋るように悠人を見るが、彼はこちらには目も向けず硬い表情でうつむいている。

「しゃんとせい！」

剛三に一喝され、滯はビクリと体を竦ませる。

「我々の懇願をつっぱねてまで自らの意志を貫いたのだ。ふらふらせず最後まで貫き通せ。たとえ誰からも祝福されない茨の道だとしてもな」

「そのつもりでした……でも……」

何十万もの人たちの生活を犠牲にしてまで幸せになることが、正しい選択とは思えない。だからといってようやく掴んだこの幸せを手放したくない。いや、たとえ結婚を続けたとしても幸せでいられるだろうか。でも——いくら考えをめぐらせても結論にたどり着かない。

剛三は表情を険しくし、口を開く。

「おまえにひとつ忠告しておく。選択には常に覚悟と責任が求められる。決断はあらゆる可能性を吟味して慎重に下し、結果はいかなるものでも冷静に受け止めろ。そうでなければ対処を考えることもままならん。滯、おまえはいつも逆だろう。思うがまま考えなしに突っ走り、結果におろおろする……まるで小さな子供だ。それでは科学者としてやっていくのは難しいぞ？」

痛いところを突かれた。

今回のことも、考えが足りなかったと言われればそのとおりだ。覚悟もなかったと思う。息もできないくらい胸が苦しくなり、じわりと涙が滲んできた。冷静に受け止めろと忠告されたばかりなのに——。

「まあ、このくらいにしてやるか」

「……………？」

顔を上げ、濡れた睫毛で目を瞬かせる。剛三はフンと鼻から息を抜いた。

「後継者問題などたいしたことではないわ。おまえと悠人が結婚してくれれば話は早かったが、そうでなくても対処方法はいくらでも考えられる。これしきのことで橘財閥が潰れるわけなからう」

「なっ……！！」

一瞬カッとしたものの、どうにか激情を抑えてじとりと剛三を睨む。

「どうして騙したんです？」

「半分は意趣返し、半分は忠告だよ」

「……ご忠告、心に留めておきます」

意趣返しなどあまりに大人げなさすぎるが、忠告は滯を思っただけのことだろう。それがわからないほど愚かではない。言いようのない腹立たしさに眉を寄せながらも、努めて冷静に答え、そしてひとり密やかに考えをめぐらせる。もし本当に橘財閥が危機に陥っていたとしたら、自分はどうしただろうか、どうすればよかったのだろうか、と——。

ふと、剛三が後ろに控えていた悠人に目配せした。彼はかすかに頷いてその場にしゃがむと、がさごとと派手な音を立てて何かを始めたが、執務机に阻まれて滯からはよく見えない。やがて立ち上がった彼の腕にあったのは、抱えきれないほどの大きな花束だった。

「え……」

「剛三さんと僕から」

悠人はにっこり微笑むと、大きな花束を抱えたまま滯の前まで足を進めた。その花束を丁寧に手渡され、滯は両腕いっぱいを受け取る。予想もしなかった重さにあわてて力を込めた。

花束がこんなに重いなんて、知らなかった――。

顔半分ほど埋もれながら目の前のそれを眺める。ピンク系のバラやカーネーションなどを基調として、いくつかの白いガーベラがアクセントになっている、とても華やかで可愛らしい印象のものだ。ほんのりと甘やかな生っぽい匂いが鼻をくすぐる。

こんなにも立派な花束をいつのまに用意していたのだろう。結婚の事実をあらかじめ知っていなければできない芸当だ。いや、そもそも結婚祝いだなんてひとつも言っていないけど――おずおずと視線を上げて正面の悠人を見やる。そこにあったのは、滯の大好きな優しくて穏やかな笑顔だった。

「結婚おめでとう、滯」

柔らかい声が、じわりと心にしみた。

開いたままの目からあたたかい涙があふれ、頬を伝い、淡いピンク色の花卉に雫となって落ちる。声にならない感謝の気持ちを、喜びを、幸せを、あふれそうなくらい顔いっぱいに広げると、花束に埋もれながらはずむように大きく頷いてみせた。

## 62. 迷宮のその先に

---

高い天井に暖色の柔らかい光が灯された、重厚感のある空間。

中央には穢れのない白い道がまっすぐに突き当たりの祭壇まで延びていた。両側には丁寧に使い込まれたと思われる木製の長椅子が何列か並び、その通路側は白い花で飾り付けられ、高窓のステンドグラスから落ちた光があたりに彩りを添えている。長椅子には列席者たちが静かに座っていた。

息が詰まりそうなほど厳粛な雰囲気の中、純白のウェディングドレスに身を包んだ漣は、モーニングを着た悠人にエスコートされながら、一步、また一步とゆっくり堅実に足を進めていく。ブーケを持つ手が少しおぼつかない。しんと静まりかえった中に衣擦れの音だけが響き、否が応でも緊張が高まっていく。

祭壇の前には、誠一がいる。

二人がその前までたどり着いて足を止めると、悠人は組んでいた腕を解き、あらためて白い手袋に包まれた手を取った。漣はベール越しにそっと悠人を見つめ、彼も漣を見つめ返し、柔らかく、ほんのすこし寂しげに微笑み合う。そして、花嫁の漣は、エスコート役の悠人から新郎の誠一へと託された。

結婚式はつつがなく進行し、終了した。

新郎新婦が腕を組み、安堵した笑みを浮かべながら教会を出ると、皆が笑顔で色とりどりの花びらを降り撒いた。そして、絵に描いたように澄みわたった青空には、荘厳なウェディングベルが高らかに鳴り響いた。

引き続き、隣接する庭園でガーデンパーティが行われる。

一面見渡す限りに広がる鮮やかな芝、木々のまばゆい新緑に、白いテーブルや椅子がよく映えていた。上空は優しい青のグラデーションで、下方に少しだけ薄い雲がかかっている。その空模様に変わらず日射しもあたたかい。三月下旬だが、四月半ばの陽気だと天気予報で言っていた。庭園の隅に植わっている桜はちょうど満開である。

披露宴は行わず、このカジュアルなガーデンパーティをその代わりとしている。堅苦しいことはしたくないという漣の希望でそうすることになった。橘の後継者としての結婚式であれば、そのような我がままは許されなかつたろうが、もう橘を離れているので特に口出しはされなかつた。

招待客は双方の家族と友人くらいで、そう多くはない。

剛三は結婚式にだけ列席してすぐに帰っていった。仕事が忙しいから途中で抜けるとあらかじめ聞いていたが、皆が緊張せず楽しめるようにと気遣ったのこともかもしれない。大地は招待さえしていなかった。世間的には漣の父親ということになっているが、どう考えてもこの場にはふさわしくない。たとえ漣が招待したいと言っても、事情を知る誠一や悠人には大反対され

ただろう。

滯は結婚式のときより幾分か歩きやすいドレスに着替えて、誠一とともに庭園へと降りていく。腕を露出しているのが若干の肌寒さを感じたが、気分が高揚しているためかすぐに気にならなくなった。青空の下でのパーティはとても開放的な雰囲気、皆の表情も自然と明るくなっているような気がした。

「おまえ、あれはひどいだろ」

「えっ？」

参加してくれた皆に向けて簡単な感謝のスピーチをしたあと、各々のところを順にまわろうとしていた滯と誠一の背後から、篤史が声をかけてきた。おそらく滯への言葉だ。振り返ると、彼は軽食やデザートを山盛りにした皿を片手に、思いきり呆れたような面持ちで口をとがらせていた。

「悠人さんにエスコートさせるとかどんだけ残酷なんだよ。いくら保護者代わりだからってあれはない。おまえ自分がふった自覚はあるのか？ 傷口に塩を塗り込むようなもんだろう。悠人さん今にも泣きそうな顔をしてたぞ」

「えっ……でも……」

「別に、そんな顔をしたつもりはないけどね」

背後からのその声に、サンドイッチを頬張った篤史はごふっと咽せた。

話題の本人はニコニコと微笑みながら隣に並ぶ。

「エスコートさせてほしいと頼んだのは僕の方だよ。はじめとしてね。滯を女性として好きだったのは過去のことだし、そんな腫れ物に触るような扱いはしないでほしい」

彼の言うとおりに、エスコートは彼の方から早々に頼んできたことである。教会で式を挙げるならその役目をさせてほしいと。実際に悠人は親代わりともいえる存在なので、滯としても彼がふさわしいと思ってお願いした。ただ、はじめと考えていたことまでは知らなかった。滯への気持ちが過去のものとして決着がついたのなら良かったが、勝手ながら、ほんの少しだけ心にすきま風が吹き抜けたような寂しさも感じた。

篤史はぶっきらぼうに吐息を落とし、頭を掻いた。

「まあ、悠人さんが吹っ切れたならいいけど。こんなビッチより一途で可愛い女の方が似合うと思うし」

さらりとひどいことを言われ、滯はむうっと口をとがらせて渋い顔をした。ビッチというのはさすがに言い過ぎだし、花嫁に向ける言葉でもないと思うが、武蔵とのことを知られているだけに反論しづらい。そう感じたのは滯だけではなかったようで、隣の誠一も、正面の悠人も、軽く苦笑するだけで言い返そうとはしなかった。

「滯一！」

綾乃が大きく手を振りながら小走りで駆け寄って来た。着ている濃青色のドレスは薄い素材の膝丈で、裾が軽やかに揺れており、シルバーのボレロとあいまってとても上品に見える。きちんと髪をまとめて薄化粧を施していることもあり、いつもの粗野なイメージを大きく覆して

いた。その後ろからは真子と富田もついてきている。真子はフリルのついた薄桃色のパーティドレス、富田は無難なブラックスーツを身につけていた。

「写真、撮らせてよ」

コンパクトカメラを掲げながら白い歯を見せる綾乃に、滯は笑顔で頷いた。さっそく綾乃はその場にしゃがんでカメラを構えるが、それをふいと下げると不満そうな顔を覗かせる。

「パンツ男は邪魔」

滯の隣に寄り添っていた誠一に向かってそう言い放ち、追い払うように手を振った。彼はその無礼な仕打ちにも何も言わず素直に下がったが、さすがに少々微妙な面持ちで肩をすくめていた。滯は申し訳なく思いながらごめんねと目配せし、真子と富田もいたたまれない様子でぺこりと頭を下げる。

綾乃は滯のまわりをあちこち動きまわりながら、シャッターを切りまくる。

「パンツ男のことを認めたわけじゃないんだけどさ、滯が若いうちにドレスを着せてくれたことには感謝してる。結婚式をしてくれなかったら一生恨んでたわ。さすがにウェディングドレスは結婚式じゃないと着られないしね。せっかくの美少女なんだから着なきゃもったいないもん」

「それは、気が合うね」

誠一がにこやかに切り返すと、綾乃は手を止めてニッと口もとを上げた。

すぐに、彼女は再びファインダーを覗いてシャッターを切り始める。挙式前にもウェディングドレス姿をさんざん撮っていたが、そんなに撮ってどうするつもりなのかわからない。目の保養だとか言っていたが話半分に聞いている。数分ほどして満足しきったように息をついた彼女は、心なしか寂しげに微笑み、そのコンパクトカメラを片手で軽く掲げて見せた。

「これからは今までみたいに会えなくなるし、この写真で寂しさを紛らわすよ」

「うん……」

小さいころからずっとクラスまで一緒だったのに、別々の学校になるかと思うとしんみりしてしまう。しかし、それは未来に向けて各々の道を進むからであり、悲しむことではない。

「でも、みんな第一志望に受かって良かったよね」

湿っぽい空気を払拭しようと、意図的に声はずませて話題を変える。

「そうそう、富田にはびっくりしたわマジで」

「滯ちゃん遥くんと同じところなんだよね？」

「死ぬ気で頑張ったからな」

富田はへらっと笑い、照れくさそうに頭の後ろに手をやった。

二年生までの彼の成績では目指すことすらありえなかったはずだ。死ぬ気で頑張ったというのも大袈裟ではないのだろう。何がそれほどまでに彼を駆り立てたのかわからないが、滯と同じく譲れないものがあつたのかもしれない。しかし、綾乃は胡散臭いものを見るような目を彼に向けていた。

「おっそろしい執念だよなあ」

「だから、そうじゃないって！」

富田は焦ったようにわたわたとして言い返す。執念というのが何なのか気になるところだが、本人が否定しているので、いつもの綾乃の思い込みではないかと思う。滯はニコッと笑うと、すこし腰を屈めて上目遣いで富田を覗き込んだ。

「これからも同じ学校ってことで、よろしくね」

「おっ……おう……」

彼の返事に戸惑いのようなものを感じて、はたと気付く。

「あ、学部が違うからあんまり会うことはないのかな。講義とかも一緒になることはないんだっけ。でも、遥とは同じ学部だし一緒になることも多いと思うし、これからもずっと仲良くしてあげてね」

「ああ、それはもちろん……」

「滯、勝手なこと頼まないでよ」

富田の声を遮ったのは遥だった。左腕で軽々とメルローズを抱きかかえながら足を進め、彼の隣に並ぶ。この一年で身長は十五センチほど伸び、体格も幾分か男性的になっていた。身長だけなら富田を追い越している。滯とそっくりだ、女の子みみだ、と揶揄されることはもう二度とないはずだ。

「この子、誰？」

綾乃は小さな少女を覗き込んで無遠慮に尋ねる。富田も、真子も、不思議そうに見ていた。髪も瞳も赤みがかかった色で、肌は透けるように白い――そんな日本人離れした容貌が、なおさら皆の興味を惹いているのだろう。

遥はそっと地面に下ろして立たせると、頭を撫でて促す。

「みんなに挨拶して」

「……橘メルローズです」

彼女はおずおずと自己紹介して丁寧に頭を下げた。つられるように綾乃たちもお辞儀をする。が、やはりまだ要領を得ない顔をしていた。

「親戚の子？」

「僕の叔母」

「はあっ?!」

綾乃の素っ頓狂な声にも動じず、遥は少女の頭に手をおいたまま淡々と答える。

「メルはじいさんの養子だから」

「え……ああ、そういうこと」

剛三との養子縁組は武蔵とも話し合っただけで決めたことだ。メルローズはもはや故郷に帰ることができないため、ここで生きていくしかなく、彼女の幸せのためには最善の方法だという判断である。表向きには遠縁の子を引き取ったという形になっている。実際、滯と遥のいここにあたるので、まったくの嘘というわけでもない。

新年度からは小学校に通うことも決まっている。年相応の基礎学力や日本語については、この一年の学習で問題のないレベルにまでなっていた。問題はコミュニケーション能力だ。長きにわたり地下室に監禁され、他人と接触する機会がなかったためか、見知らぬ人には怯えて話せない状態だった。それを、この一年、遥があちらこちらに連れ出して少しずつ慣れさせた

のだ。今は無条件に怯えることはなくなってきた。それでもまだあまり会話らしい会話はできず、ひとりで小学校へ通わせるには不安を感じるが、遥はそのうち慣れるだろうと楽観視しているようだ。

遥は再びメルローズをひょいと抱き上げた。よろめいた彼女に慌てて頭にしがみつかれたが、髪が乱れても気にすることなく、軽く右手を挙げて「じゃあ」と去っていく。少し離れた人のいないところで彼女を下ろすと、ジュースを飲ませたり、軽食を小皿にとったり、あれこれとかいがいしく世話を焼き始めた。

「遥って、身内限定で面倒見いいよね」

「滯ちゃんのこともすごく守ってたよね」

「うん……」

滯は二人の様子を遠巻きに眺めながら目を細める。同じ年なのでさすがにあれほどではなかったが、困ったことがあれば何でも相談に乗ってくれたし、知らないところでも守ってくれていたらしい。しかし、自分はもう守られなくても大丈夫だ。これからはメルローズを家族として守ってほしいと思う。

「私も何か食べよっかな。滯も何か取ってこようか？」

「私はいいよ。まだ他のところもまわりたいし」

ねっ、と後ろにいた誠一に同意を求めると、彼もにっこりと微笑み返してくれた。

綾乃は付き合っていないとばかりに肩をすくめて、軽食等の用意されたテーブルの方へ足を進める。富田もすぐに小走りで追いかけていったが、真子だけはその場に留まっていた。少し言い出しにくそうに、ほんのり頬を染めながら顔を寄せて尋ねてくる。

「滯ちゃん、ブーケトスはしないの？」

「あ、うん、直接渡したい人がいるから」

「そうなんだ……」

彼女は曖昧な愛想笑いを浮かべながら、残念そうに相槌を打つ。

「真子、もしかしてほしかったの？」

「あ、ううん、ブーケトスに憧れてただけ」

「そっか、ごめんね」

小首を傾げて詫びると、彼女は慌てて両手をふるふると顔の前で振った。できることなら期待に答えてあげたかったが、もう決めたことなので仕方がない。彼女ならこれからまた結婚式に出席する機会はあるだろう。いつかその可愛らしい夢が叶うようにと願いながら、柔らかく微笑んだ。

「岩松さん！」

「おう、滯ちゃん！」

今度は、岩松をはじめとした警視庁捜査一課の刑事たち、つまり誠一の元同僚が集まるテーブルに足を向けた。来てくれたのは三人である。本当はあと三人呼んでいたのだが、仕事の都合がつかなかったらしい。全員が同時に休みをとるわけにはいかないのだろう。

「おめでとう、幸せそうで良かった」

「ありがとうございます」

「しかし、結婚までいくとはなあ」

「ふっ」

誠一と滯が付き合っていることは秘密にするつもりだったのに、岩松にはひょんなことから気付かれてしまった。しかし、彼は誰にも話すことなく自分ひとりの胸におさめてくれたのだ。あの時点で騒ぎにされていたら、ふたりは別れることになったかもしれないし、誠一は何かしらの処分を受けたかもしれない。それゆえ、彼には大きな恩義を感じていた。

「南野、おまえ爆発しろ……爆発すればいい……」

まるで呪詛のような鬱々とした声が聞こえて振り向くと、小テーブルを挟んで立っていた独身組の二人が、恨めしげなまなざしを誠一に送りながらつぶやいていた。冗談なのか本気なのか今ひとつ判然としないが、そこだけ禍々しい空気が渦巻いているように見える。当の誠一は乾いた笑いを張り付かせていた。

岩松は呆れ顔で両手を腰に当てて、溜息をつく。

「おまえら、そういうこと言っていると幸せが逃げていくぞ。人を呪わば穴二つつてな」

「だって、犯人を取り逃がしたのがきっかけで付き合うようになったとか、真面目に失態なく仕事してる身としては腹立たしいことこの上ないですよ。しかも高スペックの現役女子高生とかふざけんなですよ。俺には彼女さえいないっていうのに何でこの南野が！」

独身組のひとりが眉根を寄せて興奮ぎみに捲し立てた。もうひとりの方も共感して深く頷いている。要するに、二人とも彼女がほしくてたまらないのだろう。

「あの、よろしければ同級生を紹介しましょうか？」

「えっ?!」

彼氏がほしいと言っていた同級生は何人か知っているのに、ちょうどいいのではないかと思っただけ、なぜか二人はそろって顔を赤らめながらじりじりと後ずさる。

「いや、それはちょっとまずい、かも……なあ？」

「さすがに……滯ちゃんの同級生は……」

あれはどうやらやましがっていたはずなのに、やけに及び腰である。

岩松は腰に手を当てたまま、豪快にガハハと笑い声を上げた。

「まあ、ここは素直に南野の勇気を讃えてやろうや。女子高生と付き合う勇気も、橘会長に突撃する勇気も、おまえらにはないんだろう？ 南野はあれで妙に怖いもの知らずなところがあるからな」

「いえ、自分なりに悩んだんですけどね」

誠一は曖昧に苦笑する。

どうやら周囲からは運と度胸だけで結婚したと思われているようだ。しかし、ここに至るまでの道程がいかに大変だったか滯は知っている。まわりに詰られながらも絶対に諦めなかった。何があっても手放さないよう頑張ってくれた。その努力は、怖いもの知らずの一言ではとても片付けられない。

「私はちゃんとわかってるから」

そう言いながらはずむように彼の腕にぎゅっと抱きつき、にっこりと微笑んだ。彼はすこし驚いたように目を瞬かせたが、ああ、とすぐに柔らかく微笑み返してくれた。その様子を見ていた岩松は口笛ではやし立て、独身組はますます恨めしそうに歯噛みしていた。

「滯ちゃん！！」

「涼風さん！」

建物の方から、紺色の軽やかなパーティドレスを着た涼風が手を振りながら駆け寄ってきた。遠目にも息が切れているのがわかる。よほど急いで来てくれたのだろう。どうしても外せない仕事があるので遅れる、もしかすると間に合わないかもしれない、と聞いていたので、パーティだけでも間に合って本当に良かったと思う。

「遅れてごめんなさい」

「来てくれて嬉しいです」

屈託のない笑みを浮かべて答えると、涼風も笑顔を見せた。左手を胸に当てて息を整える。

「滯ちゃん、本当にきれいだわ。すごく似合ってる」

「涼風さんがドレス選びを手伝ってくれたおかげです」

自分たちだけでドレスを決めるのは不安だったので、何度も披露宴に出席しているという彼女についてきてもらったのだ。絵画に携わる仕事をしているのできっと美的感覚も信頼できるはず、というのも理由のひとつである。実際、彼女の的確な助言はとても役に立ったし感謝もしている。だから――。

「涼風さん、これもらってください」

そう言って、手にしていたブーケをまっすぐ彼女に差し出した。

花嫁からブーケをもらう意味はもちろん理解しているのだろう。突然のことにきょとんとしていたものの、すぐに面映い表情になり、照れ隠しのようにいたずらっぽく言葉を返す。

「なあに？ 行き遅れないように心配してくれてるの？」

「いえっ、そんなつもりじゃ……涼風さんに幸せになってほしくて」

「ありがとう」

クスッと笑い、彼女は両手を伸ばしてブーケを受け取った。目を細めて柔らかくそれを見下ろす。

「滯ちゃんの気持ち、無駄にはしないつもりよ」

「え、もしかしてもう予定があったりします？」

「ん……今は秘密だから訊かないでね」

涼風に恋人がいることさえ知らなかったのに、この言い方だと結婚も決まっていそうな感じだ。となると、悠人のことは完全に吹っ切れたということだろう。すこし寂しい気もするが、彼女のためにはこの方が良かったのだと思う。じゃあいつか教えてくださいね、などと胸元で両手を合わせて声はずませるが、そのあいだ彼女はずっと下を向いたままだった。何か様子がおかしい。

誠一も気付いたようで、横からおずおずと気遣わしげに声を掛ける。

「あの、大丈夫ですか？汗がすごいですけど……」

「は……走ってきたので……お水、ありますか？」

「取ってきます」

誠一は水を取りに走っていく。

涼風の額からは大量の汗がだらだらと流れ落ち、顔面は蒼白で、何かを堪えているような表情をしている。とても普通とは思えない状態だ。つい先ほどまでは軽く汗が浮かんでいる程度だったのに、いつのまにこんなことになっていたのだろう。

ふいに涼風の体がふらりと揺らめいた。直後、ぷつんと糸が切れたように崩れる。

「涼風さん！」

すんでのところで抱き留めたので頭は打たなかったものの、意識はなくしているようだ。ブーケとハンドバッグは手から離れて芝に転がっている。近くの人たちは何があったのかと不思議そうにこちらに目を向けるが、悠人はいち早く気付いたらしく直後に駆けつけてきた。

「どうした？」

「急に倒れて……」

滯が涼風の上半身を仰向けに抱えたまま答えると、彼は向かいに片膝をつき、目を閉じている彼女を上から覗き込む。

「涼風、涼風っ！」

「ん……」

呼びかけながら軽く頬を叩くと、彼女はかすかな声を漏らして眉をしかめ、瞼を小さく震わせながら目を開く。その大きな漆黒の瞳は、上から覗き込んでいる悠人と滯をぼんやりと捉えた。

「あれ、わたし……？」

「倒れたんですよ」

滯はほっとしながら、安心させるような優しい口調で答える。

涼風は小さく吐息を落としてつらそうに目を閉じた。

「ごめんなさい、本当に……」

「いいから黙っている」

悠人は静かにそう言うと、彼女を横抱きにして立ち上がり建物の方へ足を進める。中で休ませるのだろう。滯は投げ出されていたブーケとハンドバッグを拾い、悠人のあとを追って駆け出した。

「もう本当に大丈夫なのに……」

「無理しない方がいいですよ」

涼風は事務室の仮眠ベッドのようなところに寝かされていた。傍らには滯が付き添っている。涼風をここまで抱きかかえてきた悠人は、すぐに戻ると言って部屋を出て行った。携帯電話をポケットから取り出していたので、どこかに連絡するつもりなのかもしれない。

滯が不安そうにじっと見つめていると、涼風は力なく微笑んだ。

「多分ただの貧血だからそんなに心配しないで。今までにも何度かあるの。最近ちょっと仕事

が立て込んでいたから、それで……」

「ごめんなさい、忙しかったのに無理を言って」

「ううん、私もどうしても行きたかったんだもの」

どうしても抜けられない仕事があると言っていた涼風に、少しでもいいから来てほしいと懇願したのは滯である。ただ、彼女が楽しみにしてくれていたのも本当だと思う。どちらか一方の責任というわけではないし、そもそもそんなことを論じるのは無意味だろう。

「それより、こちらこそごめんなさい。滯ちゃんのハレの日にこんな失態……」

「そんなことは全然。涼風さんが無事ならそれでいいの」

明るい声でそう答えると、彼女はぎこちなくも微笑を浮かべて応じてくれた。けれど、自責の念に駆られていることは一目瞭然である。罪悪感など簡単に払拭できるものではない。気持ちがわかるだけに、安易に慰めの言葉をかける気にはなれなかった。

やがて、悠人が携帯電話をポケットにしまいながら戻ってきた。

「医者を呼んだ」

「大袈裟よ」

涼風は困惑ぎみに口をとがらせたが、悠人は淡々と言い返す。

「滯や僕を安心させるためにも診てもらってほしい」

「じゃあ、このパーティが終わったら自分で行くわ」

「医者を呼んだと言っただろう。間もなく来る」

「もう、わかりましたっ」

涼風は若干拗ねたようにツンとして答えた。彼女がそんな子供じみた態度をとるのが意外で、でも可愛くて、失礼ながら思わずくすりと笑ってしまう。その拍子に、彼女は何かを思い出したようにハッと滯に振り向いた。

「私、ブーケって……」

「ちゃんとありますよ」

にっこり微笑んで後方の机を示した。そこには、滯が拾ってきたブーケとハンドバッグが置いてある。倒れたときに手から落とすただけなので、繊細なブーケもほとんど傷んでいない。涼風は肘をつき少しだけ体を起こして確認すると、ほっと安堵の息をついた。

ふと悠人が後ろからパイプ椅子の背もたれに手をつき、滯を覗き込みながら言う。

「滯、君はもう戻るんだ」

「でも……」

そう言いかけた滯に、彼は真顔で畳みかける。

「日比野さんには僕がついているから心配はいらない。戻ってパーティを続けることが、君にしかできない君の役目だ。これでパーティが台無しになってしまったら、日比野さんも気に病んでしまうだろうからね」

「……わかりました。涼風さんのこと、お願いしますね」

涼風にこれ以上の心労を与えることは当然ながら本意ではない。彼女自身にもそのとおりとばかりに微笑まれてしまっては、もはや従うしかなかった。音を立てないよう静かにパイプ椅

子から立ち上がると、ペコリと二人にお辞儀をして扉の方へ足を進めた。

部屋を出る間際、ちらりと背後の二人を見やった。

先ほどまで濡が座っていたベッド脇のパイプ椅子に悠人が腰を下ろし、簡易ベッドに横たわっている涼風が柔らかく微笑んでいる。悠人の表情は後ろ向きなのでよく見えないが、二人の空気感や距離感がただの知り合いではないように思えた。

涼風、って呼んでたよね――？

先ほどは「日比野さん」だったが、庭園で倒れた彼女に声を掛けたときは「涼風」だったことを思い出す。もしかして、とひとつの憶測にドクンと胸が高鳴った。涼風が「今は秘密」と言っていたのもそう考えれば合点がいく。

廊下の向かいから、誠一が心配そうな顔をして近づいてきた。

「彼女、大丈夫か？」

「うん、もう意識も戻って普通に話もできてるから。ただの貧血だって涼風さんは言ってたけど、師匠は念のためお医者さん呼んで診てもらって。今も師匠がついてるから大丈夫だよ。おまえは邪魔だから出ていけって追い出されちゃった」

最後は冗談めかして肩をすくめる。

その説明からも、その態度からも、深刻な状況でないことが伝わったのだろう。誠一はほとと胸を撫で下ろしていた。自分たちのパーティで倒れたということで、少なからず責任を感じていたのかもしれない。

「戻るか？」

「うん」

答える声はずんだ。抱きつくように彼の腕をとって軽やかに歩き出す。

「どうしたんだ？ やけに機嫌がいいな」

「うん、でも今はまだ内緒」

お茶を濁しながらも自然と顔がほころんでしまう。

涼風に素敵な恋人ができればいいなとずっと思っていた。それ以上に、悠人を支えてくれる女性が現れることを願っていた。もしこの両方が最高のかたちで現実になったのなら、こんなにも嬉しいことはない――自分のことのように心を踊らせながら、誠一とともにあたたかい光に包まれた庭園へと駆け降りていった。

## 63. 曖昧な境界線（最終話）

---

十年後――。

たびたび流れるアナウンスと途切れることのない雑踏の中、悠人は通行の邪魔にならないよう端の方に立っていた。ロビーには椅子も用意されているが、はやる気持ちのためか座る気にはなれない。特に意味もなく大きな電光掲示板を眺めながら腕を組むと、ふと周囲の慌ただしさが増したような気がして、腕時計を確認する。

そろそろか――。

到着した人々が出てくる場所に目を向ける。十数人ほど立て続けに出てきたあと、彼が姿を現した。遠目だが長年の親友を見間違いはしない。スーツケースや大きな旅行鞆を持った人が多い中、彼はボストンバッグひとつという身軽な格好をしていた。

彼もこちらに気付いているようだ。探す素振りもなくまっすぐ進んでくると、悠人の前で足を止める。そのまま互いに真顔で対峙していたが、やがて彼の方がふっと柔らかく目を細めた。

「ただいま」

「おかえり」

大地が日本の土を踏んだのは十一年ぶりである。

もっとも、悠人は年に数回ほどドイツに出張して彼と会っており、また日頃から頻繁に連絡も取り合っているので、感動の再会というわけではない。それでも日本で彼を迎えるというのは感慨深いものがある。ましてや十一年ぶりの帰国となる彼の方はなおさらだろう。

「滯は？」

彼女の姿を探すように、大地は軽くあたりを見まわして尋ねる。

「渋滞に巻き込まれて少し遅れるそうだ」

「一緒に来たんじゃないのか」

「互いに仕事の都合があるので現地集合にした」

「まったく、出迎える方が遅れてどうするんだよ」

そう笑った彼の目元に皺が浮かんだ。ところどころに年齢を感じるが、雰囲気は昔のまま変わっていない。内面もそれほど成熟したようには見受けられず、今も何かにつけて悠人をからかっては面白がっている。しかし、からかわれても昔ほど頭にくることはなくなった。大地のことは今でもまだ理解しきれていないが、必要とされていることだけはわかっているのだから。

ジャケットの内ポケットで携帯電話が振動した。見ると滯からのメールだった。

「あと、二、三十分かかるようだ」

「じゃあ、喫茶店で待ってよう」

大地の提案に賛成し、この近くで落ち着けそうな店を探して入る。パスタなどの軽食も食べられるカフェで、座席がやや狭いのが難点だが贅沢はいえない。店員に注文したあと、カフェで待っていることを滯にメールで知らせておいた。

さほど待たずに注文したものが運ばれてきた。

悠人がコーヒーで、大地はパフェである。彼がカフェでこういったデザート類を頼むのはめずらしい。そこまで甘いものが好きなわけではないはずだが、たまたまそういう気分だったのだろう。盛りつけられたパフェをじっくりと眺めてスプーンで口に運ぶと、途端に顔をほころばせて満足げに頷く。

「やっぱりこういうものは日本の方が断然いいよな。上品で、繊細で、丁寧で、味はもちろん見た目にも気が配られている」

このパフェがそれほど素晴らしいとは思わないし、ドイツでも良いパフェを出す店はあるはずだが、彼の言うことは何となくわかるような気がした。一般的に何においても日本の方が繊細で丁寧である。もしや、それを実感したいがためにパフェを頼んだのだろうか。

「あっちは何でも大雑把で不親切だからな。慣れるまでは苦労したよ」

彼は生クリームをすくいながら軽く笑った。もともと日常生活に支障のない程度にドイツ語を話せたので、言語ではさほど苦労していないようだが、生活習慣や食生活、価値観、文化の違いには戸惑ったのだろう。たったひとりで、よくここまでやってこられたものだと思う。

「美人で巨乳の嫁さんは家にいるのか？」

唐突にそう尋ねられ、悠人は口をつけたコーヒーカップをソーサに戻した。

「今日は仕事で帰りが遅い」

「ふうん、仕事……ねえ」

「あしたには会わせてやる」

理由をつけて会わせないつもりではないかと疑っているようだが、邪推である。仕事が忙しいのは事実だ。二人とも悠人を通じて互いの存在は知っているが、面識はないので、この機会にきちんと紹介しておこうと考えている。

「息子は学校か？」

「そろそろ帰るはずだ」

「おまえに似てる？」

「性格はな」

「それは難儀だな」

大地はスプーンを片手に愉快そうに笑う。

彼にはこれまで家族のことをほとんど話してこなかった。彼女と結婚した、子供が生まれた、という簡単な報告くらいである。決して隠したかったわけでも蔑ろにしていたわけでもない。あまり興味を示さなかったので話さなっただけだ。実の子を持たず、妻を亡くした彼に対する遠慮もあったのかもしれない。

「遥たちは？」

「きのうからホテルに泊まっている。準備もあるからな」

明日は、遥の結婚式と披露宴だ。

大地が一時的に帰国を許されたのはそのためである。戸籍上は遥の実父ということになっているので、世間体を考えれば呼ばないわけにはいかない。遥もそうするしかない事情は理解している。それでも可能な限り接触は避けようとしているようだ。彼自身のためではなく、妻となる女性を守

るために。大地がしてきたことを考えれば当然の対処だろう。

遥はすでに数年前から仕事で大地と関わるようになっていた。互いに橘の要職に就いている以上は避けようがない。今のところ直に顔を合わせる機会はまだないようだが、必要に応じてメールや電話で連絡を取り合っている。しかし、二人ともあくまで仕事の話しかしていないらしい。

「まあ、避けられても仕方ないけどね」

遥の真意を見透かしたように、大地はアイスクリームにスプーンを差し入れながらそう言った。申し訳なさなど微塵も感じていなさそうな平然とした顔で。悠人は何となくではあるが嫌な予感がして眉を寄せる。

「妙なことを考えてないだろうな」

「結婚式をぶちこわしにするとか？」

「……………」

「おいおい、何て顔してるんだよ」

冗談か本気かわからず探るように向けたまなざしを、彼は軽く笑い飛ばした。

「心配しなくても何もしやしないさ。おとなしく座っていればいいんだろう？ スピーチも用意されたことしか言わない。下手をしたら今度こそ父さんに殺されるからな」

彼が言っているのは十一年前のことだ。

剛三はどんな事実が明らかになっても手を上げなかったが、滯を陵辱したときだけは本気で殴りつけていた。悠人が止めなければ一発ではすまなかつただろう。まさに殺さんばかりの勢いだった。それでも大地に反省した様子は見られなかったのだが。

「……恨んでいるのか？」

「父さんもおまえも当然の対応をしたと思っているよ。客観的に見ていかに最低な所業だったかは自覚している。ただ、僕の中では滯と結ばれるのは自然なことだったし、今でもある種の合意があったと思っているけどね」

大地は淡々と答える。そこに嘘はないように思えた。だとすれば――。

「メルローズの方が」

「確かにあの子を恨んだことはあったけど、今さら復讐しようなんて考えていないさ。さっきの些細な冗談が精々だよ。彼女が幸せになることに特に異存はない……僕には関係ないしね」

まるで何の感情もないような取り澄ました顔をしているが、それが仮面であることはわかっている。悠人にはその奥に秘められた激情がちらりと垣間見えた。さすがに事を起こすほど愚かでないと思っているが、彼女の幸せを快く思っていないのは間違いないだろう。

おまえは、幸せになる気はあるのか――？

彼はいまだに変わることなく美咲への異常な執着をもち続けている。あのようなかたちで彼女を喪ってしまったのだから、仕方がないのかもしれない。しかし、呪縛にも等しいその想いのせいで雁字搦めになっているようにも見えた。かつての悠人のように。

ただ、それは悠人の想像でしかない。

幸せのかたちは人それぞれである。もしかすると、美咲にいつまでも執着し続けることが彼の幸せなのかもしれない。どちらにしるこのような心配は余計なお世話でしかないだろう。わかっているのだが。

「何だよ、そんな顔して」

「どんな顔をしている」

「心底同情しているような」

「……………」

端的に言い当てられてしまい、返す言葉を失う。その反応に彼はくすりと笑った。

「おまえが思うほど不幸じゃないさ」

そう言いながらスプーンを置き、ゆっくりと身を乗り出しながら頬杖をつく、唇に薄く笑みをのせて悠人を見つめる。遠慮のかけらもないまっすぐなまなざしで。

「こんな僕でも見捨てないでくれた人がいる。それが僕の生きる理由だ」

静かに声が落とされた。

からかっているのだとは思いますが、そこに多少の本音があることもわかっているので、いちいち腹を立てることも動揺することもない。ただそこはかたない気恥ずかしさを感じつつ、それを悟られないよう努めて冷静に言い返す。

「言い過ぎだろう」

「少し言い過ぎかもな」

大地は素直に認めて軽く笑うと、再びスプーンを手にとって目の前のパフェを食べ始めた。よほど気に入ったのかいたく満足そうな顔をしている。そんな彼を見て幾分か安堵しながら、悠人も湯気のおさまりつつあるコーヒーに口をつけた。

「濡！」

大地は急に腰を浮かせて立ち上がり、手を振った。

彼の視線をたどると、店の入口付近できょろきょろしている濡がいた。膝上丈の春らしい軽やかなワンピースに、黒の短いジャケットを羽織っている。こちらに気付くやいなやパッと顔を輝かせ、小走りで駆けてきた。

「すみませんでした、出迎えるはずがこんなに遅れてしまって」

「構わないよ、おかげで悠人とゆっくりできたしね。座って」

そう促されると、濡は小さく頷いて迷うことなく悠人の隣に腰を下ろし、水とおしぼりを持ってきた店員にホットコーヒーを注文した。グラスの冷たい氷水で喉を潤してほっと息をつき、おしぼりに手を伸ばす。

「お父さま、老けましたね」

「まあ、多少はね」

まじまじと見つめたあげく無遠慮な感想を口にする濡に、大地は苦笑した。濡が婚姻届持参でドイツを訪れて以来の再会だ。二人は電話どころかメールさえもしておらず、十一年ぶりに言葉を交わしたというのに、どちらも感慨に耽る様子はない。

「濡はあまり変わってないね」

「そう言われるのも微妙ですけど」

今度は濡が苦笑し、背筋を伸ばしたまま肩をすくめる。

子供のころは年齢より上に見られることも少なくなかったが、今は高校生のころからあまり外見や印象が変わっておらず、実際の年齢よりも若く見える。大地もそういうつもりで言ったのだろう。しかし、色気がないだの成長しないだのと篤史に言われ続けているせいで、彼女はそちらの意味で捉えてしまったのかもしれない。

「研究の方はどうしてる？」

「地道にやっていますよ」

「美咲に追いつけそう？」

そう尋ねられると、滯はこころなしか寂しげに曖昧な笑みを浮かべた。

「私ひとりでは無理です。でも優秀な研究員がいますから」

彼女は天才ではなかった。大学はそれなりに優秀な成績で卒業したのだが、美咲の研究を継ぐには能力が足りなかった。本人もそのことを自覚していたのだろう。所長就任後、どこからか二人の研究員を連れてきたのである。二人とも天才だが性格に難があるという人物だ。それでも滯とは衝突することなく上手くやっている。いきなり突拍子のないことを言い出しても、滯はきちんと聞いて、理解して、真剣に検討してくれるので、今ではすっかり信頼を寄せているようだ。

しばらくして注文したコーヒーが運ばれてきた。

滯は砂糖には目も向けず、ブラックのまま口をつけてほっと一息ついた。

「離婚はしてないんだね」

コーヒーカップに添えた滯の左手を目にして大地が言う。十年前の結婚式から変わることなく、薬指にはシンプルで上品なプラチナの指輪が輝いている。彼女は胸元で白いコーヒーカップを持ったまま、にっこりと微笑んで答える。

「家族三人、仲良く暮らしていますよ」

「子供がいるの？」

「ええ、娘がひとり」

「へえ……」

大地の瞳に仄暗い光がともった。

「美咲に似てる？」

「あした結婚式に連れて行きますので、ご自分の目で確認してください。ただし声は掛けないでくださいね。紹介するつもりはありませんので」

予想していたのか、滯はうろたえることなく冷やかに言い放った。

その態度は、母親として娘を守るという意志の表れだろう。たとえ彼女自身は過去を水に流していたとしても、娘に関わることはまた別の話である。大地が興味を示したのであれば、なおさら近づけるわけにはいかない。その子も美咲の遺伝子を引き継いでいるのだから。

「警戒してるんだ？」

「当然です」

少し苛立ったように答えて再びコーヒーを口に運んだあと、カップを戻しながら尋ねる。

「お父さまは再婚しないんですか？」

「僕は美咲しか欲しいと思えなくてね」

「……そうですか」

滯は一瞬困惑を滲ませたものの、どうにか相槌で受け流す。

しかしながら大地は逃げることを許さなかった。伏し目がちになる滯を、頬杖をついて覗き込みながらじっと見つめる。そのまなざしは、今にも食らいつかばかりにぎらついていた。

「久しぶりだよ。こんなに血肉の沸き立つ感覚は」

「おい、おまえ……」

さすがに黙っていられなくなって、悠人は横から口をはさむ。からかっているだけなのか、本気でそう思っているのかはわからないが、滯の古傷を抉る言動を無視するわけにはいかない。そう思ったのだが――。

彼女はすっと視線を上げて大地を見つめ、微笑んだ。

「変な気は起こさないでくださいね。私、少しですけど、武蔵やメルローズと同じ力を使えるんです。たとえ両手両足を拘束されたとしても、お父さまを弾き飛ばすくらいわけないですから」

明るいながらもはしゃいだところのない口調で、冗談めかしたように言う。とはいえ冗談ではなく本当のことだ。武蔵に訓練を受けて潜在能力を引き出すことに成功し、少しだけ生体高エネルギーを発動できるようになっていた。たいした威力はないが護身用には十分といえるだろう。

大地は両の手のひらを上に向けて、肩をすくめた。

「つれないね。あんなに燃え上がった仲なのに」

「誤解を招く言い方はやめてください」

動じるでもなく、怒るでもなく、たいしたことではないかのように冷やかに窘める。もしかすると本心を隠しているだけかもしれないが、これだけ平静に対処できていればとりあえずは大丈夫だろう。

「生まれて初めてかな、失恋したのは」

「なにバカなこと言ってるんですか」

それでも失恋発言にはさすがにギョツとした様子を見せていた。が、まんまと挑発に乗ってしまったことに気付いたらしく、すぐに不本意そうに口をとがらせて上目遣いで睨んだ。いきり立つ気持ちを鎮めるようにコーヒーを流し込み、ふうと小さく息をつく。

しかし、大地の言ったことは案外本当なのかもしれない。彼が自ら請い求めた人物は片手におさまるほどしかおらず、そのうち拒絶したのは滯ただひとりだけである。もっとも、その気持ちが恋かどうかは微妙なところだ。一般的な観点でいえば違うような気がするが、彼自身が本気でそう思っている可能性はある。

いまだに、おまえが何を考えているのかわからない――。

四十年以上の付き合いである悠人がそう思うのだから、滯にはもっとわからないだろう。十一年前に本音を聞いて見えてきた部分もあるが、それでも思考回路が特殊なので、根底は単純でも言動が不可解に感じることが多い。そういうところが腹立たしく、憎らしく、そして離れがたくさせられるのだ。

「あしたもいいお天気になりそうですね」

外に出ると、滯はハンドバッグを後ろ手に背筋を伸ばし、穏やかな青空を仰ぎ見ながら息を吸い

込んだ。心地よさそうに微笑を浮かべて目を閉じる。ほのかにあたたかいそよ風が、くせのない長い黒髪をさらさらと軽やかに揺らしていた。

「なあ」

隣に立つ大地は、空を見上げながらぼつりと声を落とした。

滯は不思議そうな顔で小首を傾げて彼を見上げる。

「どうして迎えに来たんだ？」

それは悠人も気になっていたことだった。もともと悠人がひとりで迎えに行くつもりだったのに、彼女の方から自分も一緒に行きたいと言ってきたのである。大地の帰国を心待ちにしていたわけではないはずだ。それでも彼女なりに何か思うことがあるのだらうと、あえて理由は尋ねなかったのだが。

「……自信がなかったんですよ」

滯はしばらく無表情で逡巡したあと、口を開いた。

「お父さまと会って、どんな気持ちになるかわからなかった。冷静でいられるのか自信がなかった。結婚式で取り乱したり動揺したりするわけにはいきませんから、前もって会っておいた方がいいと思ったんです。娘にみっともないところを見せたくないというのもありますし」

話が途切れ、隣の大地はちらりと横目を流す。

「で、どうだった？」

「わりと平気でした」

滯はにっこりと笑顔で答えた。黒髪をなびかせて上空を見やり、目を細める。

「子供のころってもっと単純だったと思うんです。良い悪いも、好き嫌いも。でも、年を重ねて経験を積むにしたがって、だんだんと境界が曖昧になっていって。それが良いのか悪いのかはわかりませんが、きっと仕方のないことなんですよ」

「僕の気持ちも少しはわかった？」

「さあ、どうでしょうか」

彼の方を見ようともせず煙に巻くようにそう言うと、一呼吸おいて言葉を継ぐ。

「私は選択を誤りたくありません。決して自分を過信することなく、他の人の意見にも耳を傾けて、けれど安易に流されないように、自問自答を繰り返して慎重に決断するようにしています。昔の自分を裏切りたくはないですし、みんなの信頼を失うのも嫌ですし、それに……」

彼女は真顔になり、ゆっくりと隣の大地に向き直って目を見つめる。

「何より、大切な人を悲しませたくありませんから」

それは自分自身に向けた言葉であり、大地に向けた言葉でもあるのだらう。彼も気付いているようだ。滯に振り向いたまま曖昧に微笑んでいる。その表情に滲むものは、後悔なのか、反感なのか、悲痛なのか――悠人にはわからない。

飛行機の飛び立つ音が大きく響く。

そのとき大地の口が動いたが、声は離陸音にまぎれて悠人の耳には届かなかった。しかし、大地のすぐそばにいた滯には聞き取れたようで、彼と目を見合わせたまま若干表情をやわらげる。その横顔がどことなく寂しげに見えたのは、気のせいだらうか――。

「行きましょうか」

滯はそう言うと、怪訝な顔をしていた悠人に振り向いてくすりと笑い、ワンピースをひらめかせて颯爽と歩き出す。すぐに大地もあとを追うように足を進め、悠人も小さく呼吸をしてから足を踏み出した。

空港の喧噪が次第に遠ざかっていく。

三人の前には、水色の空がどこまでも続くかのように広がっていた。